入部XIV

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一四〇集　二〇一二　福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1140 集

入（いる）部（べ）　XIV

－東入部遺跡第２次調査報告（５）－

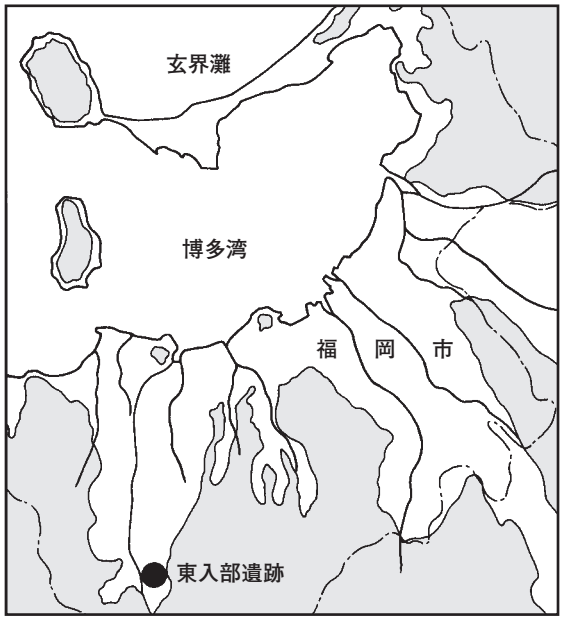
２０１２
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1140 集

IRU BE

入　部　XIV

－東入部遺跡第２次調査報告（５）－



9165 HGI-2

２０１２

福岡市教育委員会

1

2

東入部遺跡第２次調査墓地全景　１　北から　２　西から

木棺墓・甕棺墓出土遺物

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は、昭和62年度から平成７年度にかけて実施された早良区入部地区の県営圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成３年度の東入部遺跡第２次調査の成果を報告するものです。第２次調査は面積も膨大で、遺跡の時代も多岐にわたっており、今回は８区の弥生時代墓地を中心に報告を行いました。この墓地からは副葬品をもつ木棺墓や甕棺墓が出土し、青銅器・鉄器をはじめとした出土品の一部は市指定の文化財に指定されました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地元改良区をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成24年３月16日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　酒　井　龍　彦

例　　言

1　本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、東入部遺跡第２次調査（1991年度）の５回目の報告である。本書は８区の調査で最後の報告となる弥生時代の墳墓・祭祀遺構を対象とした。なお、これまで東入部遺跡群と称してきたが、2008年度から「群」をはずすことになったため、本報告から東入部遺跡と表記した。

1　県営入部地区圃場整備に伴う発掘調査の報告としてはこれまで13冊が刊行されている（本文15頁に一覧）。本書はこれを引き継ぎ、14冊目にあたることから書名を『入部ＸⅣ』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

1　本報告に用いた遺構実測図は濱石哲也、池田祐司、長家伸、榎本義嗣（以上調査担当者）、屋山洋、英豪之、黒田和生が作成し、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、長家が撮影した。なお空中・航空写真は有限会社空中写真企画（檀睦夫）による。

1　出土遺物の写真撮影は濱石、長家、林田憲三が行った。

1　出土遺物の実測は濱石、長家、林田の他、青銅器を宮井善朗、石器を山口譲治、鉄製馬具を西澤千絵里があたった。

1　本書に関わる製図は濱石、長家、林田、撫養久美子、柴田志乃が行なった。

1　このほか報告書作成には樋口久子、石谷香代子、毛利ヒロミ、岩隈香欧里、渡辺敦子が関わった。

1　本書に用いた方位は磁北である。

1　遺構番号は東入部遺跡第２次調査全体での４桁の通し番号で、８区では0021 ～ 0240、0411 ～ 0550、0616 ～ 0700、0901 ～ 1099、1140 ～ 2379が相当する（欠番あり）。遺構の種類に応じて頭に次の略号をつけた。ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＣ（竪穴住居）、ＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（特殊遺構等）。なお今回報告の墳墓に関しては遺構略号を甕棺墓がＫ、木棺墓・土壙墓がＤ、祭祀土坑・溝がＭとして用いた。

1　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1　本書の作成作業は国庫補助を受けて行った。

1　執筆はⅢ－３－３）と５を長家、Ⅲ－４－１）を山口譲治、Ⅲ－４－１）を西澤千絵里、他は濱石が担当した。

1　編集は濱石、長家が行った。

本文目次

本文頁

Ⅰ　はじめに…… 11
　1．調査の経緯…… 11
　2．調査組織…… 11
Ⅱ　東入部遺跡第2次調査 …… 14
　1．遺跡の位置…… 14
　2．調査の概要…… 14
Ⅲ　8区の調査…… 16
　1．概要…… 16
　2．弥生時代の遺構と遺物－集落…… 18
　3．弥生時代の遺構と遺物－墓地…… 20
　　1）墓地の構成…… 20
　　2）木棺墓・土壙墓…… 20
　　3）甕棺墓…… 49
　　4）祭祀遺構…… 169
　　5）検出面出土鉄矛…… 200
　4．その他の遺物…… 201
　　1）石器…… 201
　　2）馬具…… 205
　5．小結…… 209

図版目次

巻頭図版１　東入部遺跡第２次調査墓地全景　１　北から　２　西から
巻頭図版２　木棺墓・甕棺墓出土遺物

図版１　１　墓地Ⅰ区（上空から）　２　墓地Ⅰ区（西から）
図版２　１　墓地Ⅱ区（上空から）　２　墓地Ⅱ区（東から）
図版３　墓地Ⅲ区（上空から）
図版４　１　墓地Ⅳ区（上空から）　２　墓地Ⅳ区（北上空から）
図版５　１　Ｄ0444（南から）　２　Ｄ0448（南から）　３　Ｄ0449（南から）
　　４　Ｄ0463（北から）　５　Ｄ0464（南から）　６　Ｄ0466（西から）
図版６　１　Ｄ0469（北から）　２　Ｄ0469（西から、完掘後）　３　Ｄ0470（東から）
　　４　Ｄ0471（北から）　５　Ｄ0472（南から）　６　Ｄ0472（西から）
図版７　１　Ｄ0473（北から）　２　Ｄ0474・0475（南から）　３　Ｄ0477（南から）
　　４　Ｄ0481（北から）　５　Ｄ0487（南から）　６　Ｄ0488（北から）
図版８　１　Ｄ0491（東から）　２　Ｄ0493（北から）　３　Ｄ0500（北から）
　　４　Ｄ0512（東から）　５　Ｄ0516（北から）　６　Ｄ0548（北から）
図版９　１　Ｄ0678（北から）　２　Ｄ0679（北から）　３　Ｄ0679遺物出土状況（北から）
　　４　Ｄ0680（北から）　５　Ｄ0903（南から）　６　Ｄ0908（南から）
図版10　１　Ｄ0956（北から）　２　Ｄ0957（北から）　３　Ｄ0957（東から）
　　４　Ｄ0957遺物出土状況（東から）　５　Ｄ0958（南から）　６　Ｄ0984（北から）
図版11　１　Ｄ0987（北から）　２　Ｄ0988（南から）　３　Ｄ0989（西から）
　　４　Ｄ0990（北から）　５　Ｄ0991・0992（北から）　６　Ｄ0993（北から）
図版12　１　Ｄ0994（西から）　２　Ｄ0996（北から）　３　Ｋ0021（西から）
　　４　Ｋ0022（東から）　５　Ｋ0023（南から）　６　Ｋ0024（西から）
図版13　１　Ｋ0025（北から）　２　Ｋ0026（西から）　３　Ｋ0027（西から）
　　４　Ｋ0028・0029（西から）　５　Ｋ0030（北から）　６　Ｋ0031（東から）
図版14　１　Ｋ0032（東から）　２　Ｋ0033（西から）　３　Ｋ0034（西から）
　　４　Ｋ0035・0036（東から）　５　Ｋ0037（東から）　６　Ｋ0038（東から）
図版15　１　Ｋ0039（西から）　２　Ｋ0040（西から）　３　Ｋ0041（西から）
　　４　Ｋ0042・0043（東から）　５　Ｋ0044（東から）　６　Ｋ0045・0142（東から）
図版16　１　Ｋ0046（西から）　２　Ｋ0047・0051（南から）　３　Ｋ0048（南から）
　　４　Ｋ0049（南から）　５　Ｋ0050（東から）　６　Ｋ0052（北西から）
図版17　１　Ｋ0053（北から）　２　Ｋ0054（西から）　３　Ｋ0055（東から）
　　４　Ｋ0056（東から）　５　Ｋ0058（北から）　６　Ｋ0059・0060（南から）
図版18　１　Ｋ0061（東から）　２　Ｋ0062（東から）　３　Ｋ0063（北から）
　　４　Ｋ0064（北から）　５　Ｋ0065（北から）　６　Ｋ0066（東から）
図版19　１　Ｋ0067（南から）　２　Ｋ0068・0080・0145（東から）　３　Ｋ0069・0157（西から）
　　４　Ｋ0070（南から）　５　Ｋ0071・0072（南から）　６　Ｋ0073（南から）
図版20　１　Ｋ0074（東から）　２　Ｋ0075（北から）　３　Ｋ0076（東から）

4　K0077（東から）　5　K0078（西から）　6　K0079（東から）
図版21　1　K0081・0084（南から）　2　K0081（北から）　3　K0082（北東から）
4　K0083（南から）　5　K0084（東から）　6　K0084遺物出土状況（北から）
図版22　1　K0085・0086（西から）　2　K0087（西から）　3　K0088（西から）
4　K0089（西から）　5　K0090（西から）　6　K0091（西から）
図版23　1　K0092（北から）　2　K0093・0094（西から）　3　K0095・0096（北から）
4　K0097・0098・0099（西から）　5　K0100（東から）　6　K0101（東から）
図版24　1　K0102（東から）　2　K0103（西から）　3　K0104（南東から）
4　K0104遺物出土状況（南東から）　5　K0106（南東から）
6　K0106遺物出土状況（北西から）
図版25　1　K0105（南西から）　2　K0107・0108（南から）　3　K0109（北から）
4　K0110（北から）　5　K0111（東から）　6　K0112（北から）
図版26　1　K0113（東から）　2　K0113（南から）　3　K0113遺物出土状況（南から）
4　K0114（東から）　5　K0114（南から）　6　K0114遺物出土状況（南から）
図版27　1　K0115（東から）　2　K0116（北から）　3　K0117（東から）
4　K0118（北から）　5　K0119（北から）　6　K0120（東から）
図版28　1　K0121（東から）　2　K0122（東から）　3　K0123（東から）
4　K0124（西から）　5　K0125（東から）　6　K0126（北西から）
図版29　1　K0127（北西から）　2　K0127（南から）　3　K0127下甕（南から）
4　K0127遺物出土状況（南から）5 K0128・0129（南東から）6 K0130・0131（東から）
図版30　1　K0132（北西から）　2　K0133（西から）　3　K0134（北から）
4　K0135（西から）　5　K0136（東から）　6　K0137（西から）
図版31　1　K0138（北から）　2　K0140（東から）　3　K0141（南から）
4　K0143（南から）　5　K0146（南から）　6　K0147・0160（西から）
図版32　1　K0148（西から）　2　K0149（東から）　3　K0150（西から）
4　K0151（東から）　5　K0152（西から）　6　K0153（東から）
図版33　1　K0154（東から）　2　K0155（西から）　3　K0156（西から）
4　K0158（北から）　5　K0159（東から）　6　K0161・0164（西から）
図版34　1　K0162（北西から）　2　K0163（東から）　3　K0165（北から）
4　K0166（北東から）　5　K0167（南から）　6　K0169（南東から）
図版35　1　Ⅰ区･M0200西辺溝遺物出土状況（南から）　2　Ⅰ区･M0200西辺溝完掘土層（南から）
3　Ⅰ区･M0200南辺溝遺物出土状況(西から)　4　Ⅰ区･M0200南辺溝遺物出土状況(東から)
5　Ⅲ区・M0205遺物出土状況1（東から）　6　Ⅲ区・M0205遺物出土状況2（北西から）
図版36　1　Ⅲ区・M0200（15区）土層（南から）　2　Ⅲ区・M0206遺物出土状況（南から）
3　Ⅳ区・M0207土層（北から）　4　Ⅳ区・M0495遺物出土状況（東から）
5　Ⅳ区･M0700遺物出土状況（南から）　6　Ⅳ区･M0700遺物出土状況及び土層（南から）
図版37　出土遺物１（甕棺１）
図版38　出土遺物２（甕棺２）
図版39　出土遺物３（甕棺３）
図版40　出土遺物４（甕棺４）

図版41　出土遺物５（甕棺５）
図版42　出土遺物６（甕棺６）
図版43　出土遺物７（甕棺７）
図版44　出土遺物８（甕棺８）
図版45　出土遺物９（甕棺９）
図版46　出土遺物10（甕棺10）
図版47　出土遺物11（甕棺11）
図版48　出土遺物12（甕棺12）
図版49　出土遺物13（甕棺13）
図版50　出土遺物14（甕棺14）
図版51　出土遺物15（甕棺15）
図版52　出土遺物16（甕棺16）
図版53　出土遺物17（甕棺17）
図版54　出土遺物18（甕棺18）
図版55　出土遺物19（甕棺19）
図版56　出土遺物20（甕棺20）
図版57　出土遺物21（甕棺21）
図版58　出土遺物22（甕棺22）
図版59　出土遺物23（甕棺23）
図版60　出土遺物24（甕棺24）
図版61　出土遺物25（甕棺25）
図版62　出土遺物26（甕棺26）
図版63　出土遺物27（木棺墓・祭祀遺構出土土器１）
図版64　出土遺物28（祭祀遺構出土土器２）
図版65　出土遺物29（祭祀遺構出土土器３）
図版66　出土遺物30（祭祀遺構出土土器４）
図版67　出土遺物31（祭祀遺構出土土器５）
図版68　出土遺物32（祭祀遺構出土土器６）
図版69　出土遺物33（祭祀遺構出土土器７）
図版70　出土遺物34（祭祀遺構出土土器８）
図版71　出土遺物35（木棺墓・甕棺墓出土遺物）
図版72　出土遺物36（石器）

挿図目次

本文頁

第１図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1/50,000）…… 12
第２図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1/10,000）…… 13
第３図　東入部遺跡群および第２次調査地点（縮尺1/3,000）……折り込み
第４図　第２次調査グリット配置図（縮尺1/2,000）…… 17
第５図　弥生時代集落遺構分布略図（縮尺1/500）……19
第６図　弥生時代墓地遺構分布略図１（縮尺1/400）……21
第７図　Ｄ0444・0448・0449・0463実測図（縮尺1/40）……22
第８図　Ｄ0464・0465・0466実測図（縮尺1/40）……24
第９図　Ｄ0469・0471・0472・0473実測図（縮尺1/40）……26
第10図　Ｄ0474・0475・0477・0481実測図（縮尺1/40）……28
第11図　Ｄ0487・0488・0491・0493実測図（縮尺1/40）……30
第12図　Ｄ0500・0509・0512・0516実測図（縮尺1/40）……32
第13図　Ｄ0548・0678・0679実測図（縮尺1/40）……34
第14図　Ｄ0680・0908実測図（縮尺1/40）……36
第15図　Ｄ0903・0956・0958・0960実測図（縮尺1/40）……37
第16図　Ｄ0957実測図（縮尺1/40）……38
第17図　Ｄ0984・0987・0988・0989実測図（縮尺1/40）……40
第18図　Ｄ0990・0991・0992・0993実測図（縮尺1/40）……42
第19図　Ｄ0994・0996・0997・0998実測図（縮尺1/40）……44
第20図　Ｄ0999・1000・2235・2236・2242実測図（縮尺1/40）……45
第21図　木棺墓・土壙墓出土遺物１（縮尺1/4）……46
第22図　木棺墓・土壙墓出土遺物２（縮尺1/2）……47
第23図　弥生時代墓地遺構分布略図２（縮尺1/400）……50
第24図　Ｋ0021・0022甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……54
第25図　Ｋ0023・0024甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……55
第26図　Ｋ0025・0026甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……56
第27図　Ｋ0027甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……57
第28図　Ｋ0028・0029甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……59
第29図　Ｋ0030・0031甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）……60
第30図　Ｋ0032甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……61
第31図　Ｋ0033甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……62
第32図　Ｋ0034・0035甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……63
第33図　Ｋ0036・0037甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……64
第34図　Ｋ0038・0039甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……66
第35図　Ｋ0040甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）……68
第36図　Ｋ0041・0042甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……69
第37図　Ｋ0043・0044甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……70
第38図　Ｋ0045・0046甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……72
第39図　Ｋ0047・0048・0049甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……73
第40図　Ｋ0050・0051甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……75

第41図　K 0052甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……76
第42図　K 0053・0054甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……77
第43図　K 0055・0056甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……79
第44図　K 0057・0058甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）……80
第45図　K 0059甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……81
第46図　K 0060・0061甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……82
第47図　K 0062甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……83
第48図　K 0063甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……84
第49図　K 0064甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……85
第50図　K 0065・0066甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……86
第51図　K 0067・0068甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……88
第52図　K 0069・0070甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……89
第53図　K 0071・0072・0073・0074甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……90
第54図　K 0075甕棺墓実測図（縮尺1/30）……92
第55図　K 0075甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/4、1/12）……93
第56図　K 0076・0077甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……94
第57図　K 0078・0079甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……96
第58図　K 0080甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……97
第59図　K 0081・0082甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……98
第60図　K 0083甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……99
第61図　K 0084甕棺墓実測図（縮尺1/30）……100
第62図　K 0084甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/2、1/4、1/12）……101
第63図　K 0085・0086甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……102
第64図　K 0087甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……103
第65図　K 0088甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……104
第66図　K 0089・0090甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……105
第67図　K 0091・0092甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/12）……107
第68図　K 0093・0094甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……108
第69図　K 0095・0096甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……110
第70図　K 0097・0098・0099甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……111
第71図　K 0100・0101甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……113
第72図　K 0102・0103甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……114
第73図　K 0104甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/2、1/12）……116
第74図　K 0105甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……117
第75図　K 0106甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/2、1/12）……118
第76図　K 0107・0108甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……120
第77図　K 0109・0110甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……121
第78図　K 0111甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……122
第79図　K 0112甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……123
第80図　K 0113甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/2、1/12）……124
第81図　K 0114甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/2、1/12）……126
第82図　K 0115甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……128
第83図　K 0116甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）……129

第84図　K 0117甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 130
第85図　K 0118・0119甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 131
第86図　K 0120・0121甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 132
第87図　K 0122・0123甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 134
第88図　K 0124甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 135
第89図　K 0125甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 136
第90図　K 0126甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 137
第91図　K 0127甕棺墓実測図（縮尺1/30）…… 138
第92図　K 0127甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/2、1/4、1/8、1/12）…… 139
第93図　K 0128・0129甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 140
第94図　K 0130・0131甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/12）…… 141
第95図　K 0132甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 142
第96図　K 0133・0134甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 143
第97図　K 0135・0136甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 144
第98図　K 0137・0138甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 146
第99図　K 0139・0140甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 147
第100図　K 0141・0142甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/12）…… 148
第101図　K 0143・0144・0145甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 150
第102図　K 0146・0147甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 152
第103図　K 0148・0149甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 153
第104図　K 0150・0151甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 154
第105図　K 0152・0153甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 156
第106図　K 0154甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 157
第107図　K 0155甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 158
第108図　K 0156甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 159
第109図　K 0157甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 160
第110図　K 0158甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 161
第111図　K 0159甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 162
第112図　K 0160・0161甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 163
第113図　K 0162・0163甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 164
第114図　K 0164甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 165
第115図　K 0165・0166・0167甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）…… 166
第116図　K 0168・0169甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/8、1/12）…… 167
第117図　Ⅰ区祭祀遺構（北側区画墓）実測図（縮尺1/100）……折り込み
第118図　Ⅰ・Ⅱ区祭祀遺構土層実測図（縮尺1/40）…… 171
第119図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）…… 172
第120図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）…… 173
第121図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/4）…… 174
第122図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図４（縮尺1/4、1/6）…… 175
第123図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図５（縮尺1/4）…… 176
第124図　Ⅱ区祭祀遺構実測図（縮尺1/100）…… 178
第125図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）…… 179
第126図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）…… 180

第127図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/6）…… 181
第128図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図４（縮尺1/6）…… 182
第129図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図５（縮尺1/4）…… 183
第130図　Ⅲ区祭祀遺構実測図１（縮尺1/60）…… 185
第131図　Ⅲ区祭祀遺構実測図２及び土層実測図（縮尺1/40、1/60）…… 186
第132図　Ⅲ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）…… 188
第133図　Ⅲ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）…… 189
第134図　Ⅲ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/4、1/6）…… 190
第135図　Ⅳ区祭祀遺構（南側区画墓）実測図（縮尺1/100）…… 192
第136図　Ⅳ区祭祀遺構遺物出土状況実測図１（縮尺1/40）…… 193
第137図　Ⅳ区祭祀遺構遺物出土状況実測図２及び土層図（縮尺1/40）…… 194
第138図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）…… 195
第139図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）…… 196
第140図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/6、1/8）…… 197
第141図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図４（縮尺1/4）…… 198
第142図　その他の祭祀遺構実測図（縮尺1/20、1/40）…… 199
第143図　その他の祭祀遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 200
第144図　検出面出土鉄矛実測図（縮尺1/2）…… 200
第145図　８区出土石器実測図１（縮尺1/1）…… 202
第146図　８区出土石器実測図２（縮尺1/1）…… 203
第147図　８区出土石器実測図３（縮尺1/2）…… 204
第148図　SX0418出土馬具実測図（縮尺1/2）…… 207
第149図　SX0995出土馬具実測図（縮尺1/2）…… 208
第150図　甕棺変遷図１（縮尺1/16、1/24）…… 210
第151図　甕棺変遷図２（縮尺1/16、1/24）…… 211
第152図　甕棺変遷図３（縮尺1/16、1/24）…… 212
第153図　８区検出甕棺時期別分布図（縮尺1/400）…… 214
第154図　周辺遺跡弥生時代遺構分布図（縮尺1/20,000）…… 216

表目次

本文頁

第１表　入部圃場整備地区内発掘調査年度別一覧……11
第２表　東入部遺跡調査一覧……14
第３表　東入部遺跡第２次調査地区一覧……16
第４表　８区検出木棺墓・土壙墓一覧……48
第５表　８区検出甕棺墓一覧１……51
第６表　８区検出甕棺墓一覧２……52
第７表　８区検出甕棺墓一覧３……53

付　図

東入部遺跡第２次調査８区遺構配置図（縮尺1/200）

Ⅰ　はじめに

1．調査の経緯

1985年、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から8ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な計画であった。

事業計画地内には重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の8遺跡と拝塚古墳が知られており、1986年3月に行った試掘調査でも弥生時代と中世を主体とした遺構がほぼ事業地内全域に広がっていることが確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議をもち、当該年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基づき一部設計変更をはかるなど、調査対象面積を最小にする方針をとった。発掘調査は1987年度から1995年度まで9ヶ年にわたって実施した（第1表）。

本書は、1991年度に実施した東入部遺跡第2次調査の本報告である。第2次調査についてはこれまで4回にわたり報告を行ったが、今回は8区の弥生時代の墓地と関係遺構について報告する。

2．調査組織

事業主体　福岡県農林事務所農地整備鉱害課、福岡市農林水産局農業振興部農業土木課
　　福岡市入部土地改良区
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（昭和62年度～平成7年度）
整理主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課・第2課（平成22・23年度）
　　埋蔵文化財第1課　課長　濱石哲也
　　管理係　田中龍三郎（前任係長）、和田安之（係長）　古賀とも子　井上幸江
　　埋蔵文化財第2課　課長　田中壽夫
　　調査第1係長　米倉秀紀　　調査第2係長　菅波正人

発掘調査は濱石哲也、長家伸、池田祐司、榎本義嗣が担当し、屋山洋、加藤隆也、英豪之、黒田和生の補助を、また整理は濱石、長家が担当し、林田憲三をはじめとした技能員の補助を受けた。

調査にあたっては県農林事務所、市農業土木課、入部土地改良区（鍋山弥三理事長）のご指導・協力を得た。なお入部地区県営圃場整備事業は、平成12年7月28日竣工した。

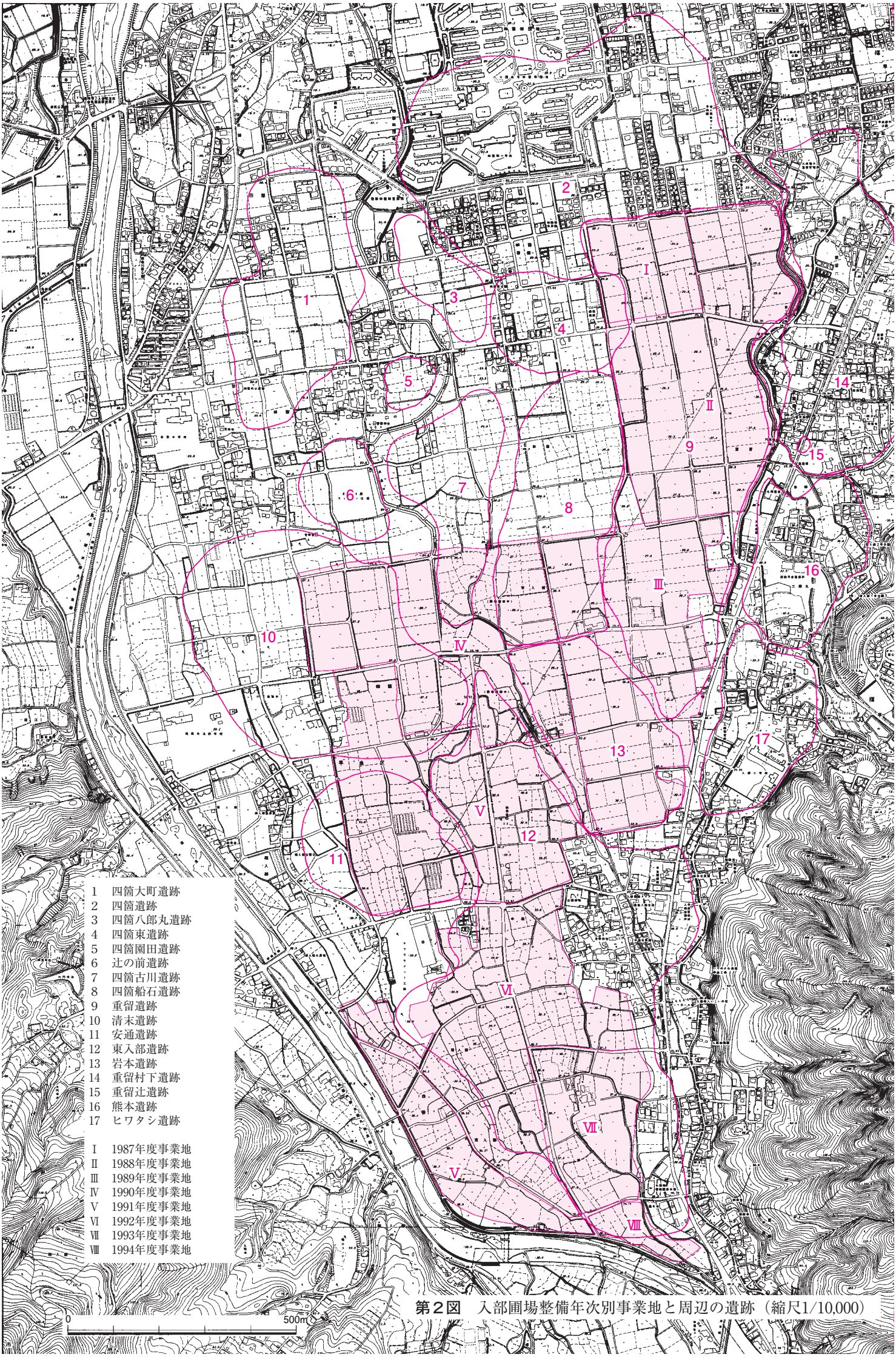
次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡
1	1987（昭和62）	5.0ha	12,500㎡	1988.1.6～1988.3.31	重留
2	1988（昭和63）	15.2ha	15,000㎡	1988.6.21～1989.4.7	重留（2次）・灰塚古墳
3	1989（平成元）	15.9ha	16,200㎡	1989.8.1～1990.3.26	重留（3次）・岩本・四箇船石
4	1990（平成2）	15.2ha	22,294㎡	1990.7.18～1991.3.8	清末（2次）・岩本（2次）・四箇船石（2次）・東入部・四箇古川
5	1991（平成3）	21.7ha	34,381㎡	1991.5.13～1992.3.5	清末（3次）・東入部（2次）・安通
6	1992（平成4）	14.0ha	13,832㎡	1992.5.20～1993.1.31	東入部（3次）
7	1993（平成5）	6.0ha	17,000㎡	1993.5.1～1994.2.28	東入部（7次）
8	1994（平成6）	1.3ha	5,000㎡	1994.7.7～1994.11.25	東入部（10次）
9	1995（平成7）	（暗渠排水）	2,600㎡	1995.10.4～1996.2.12	東入部（11次）

第1表　入部圃場整備事業地区内発掘調査年度別一覧

1　吉武遺跡群　6　四箇遺跡　11　西新町遺跡　16　岸田遺跡
2　太田遺跡　7　灰塚古墳　12　五島山古墳
3　羽根戸遺跡　8　有田遺跡群　13　拾六町ツイジ遺跡
4　都地遺跡　9　原遺跡　14　宮ノ前遺跡
5　田村遺跡　10　藤崎遺跡　15　野方中原遺跡

○●　遺跡
■　古墳
アミ部　圃場整備事業地

第１図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1/50,000）



第２図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡（縮尺1/10,000）

Ⅱ　東入部遺跡第２次調査

１．遺跡の位置

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、標高592ｍの油山山麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で実施された（第１・２図）。今回報告する東入部遺跡は、事業地内の遺跡のなかでは最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占地する。東西約700ｍ、南北約1200ｍの広大な遺跡で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭隘地となる。標高は遺跡の１次調査北端で29ｍ、３次調査地点で33～37ｍ、南端にあたる10次調査地点で39ｍをはかる。

この東入部遺跡では、今年度までに12次にわたる発掘調査が行われてきた（第２表）。その内容は縄文時代の包含層、弥生時代の集落と墳墓、古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の官衙的建物群、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡などきわめて豊富なものであった。それはこの遺跡群が、弥生時代以降、早良平野内での一大拠点であることを示している。

２．調査の概要

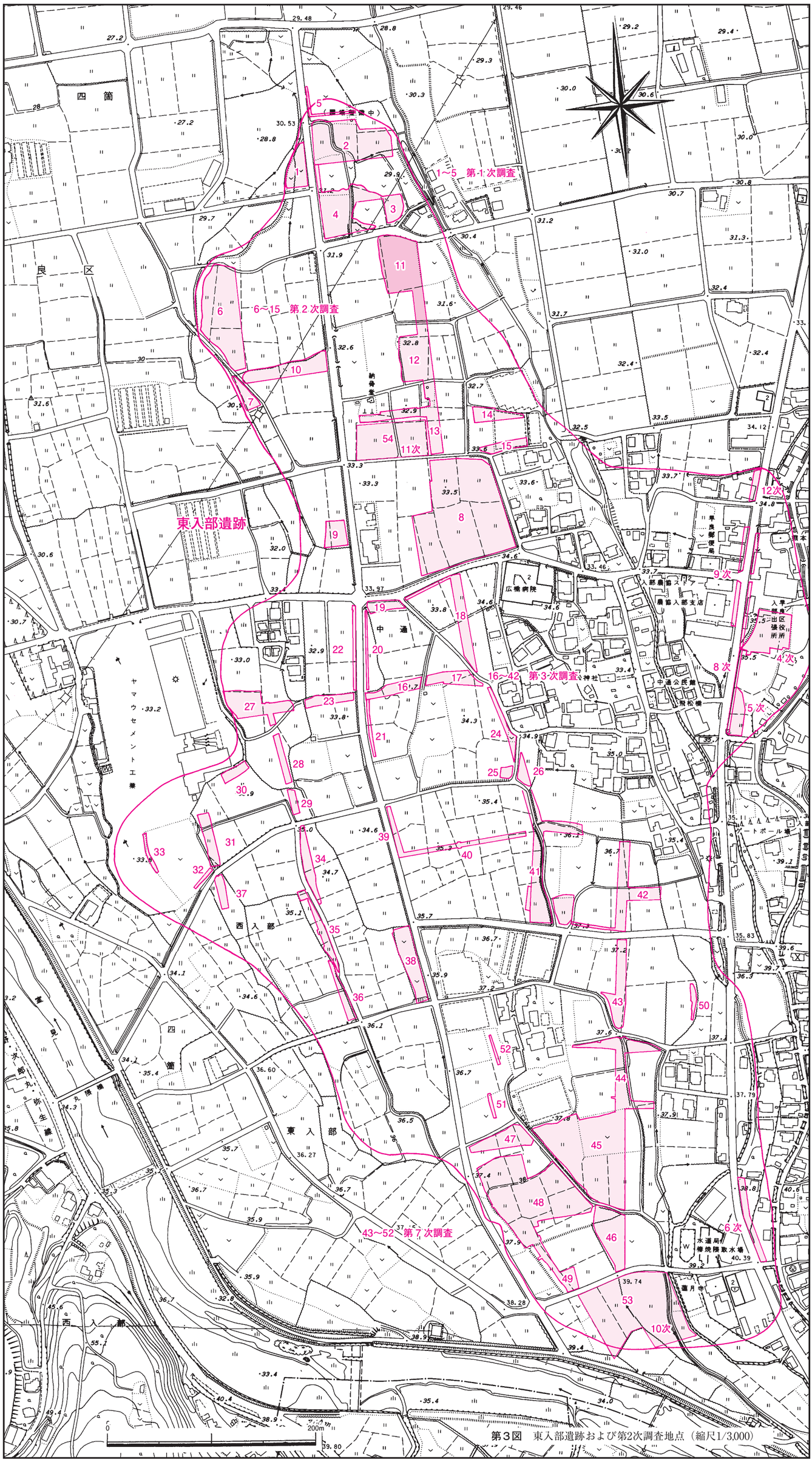
1991年度の事業地の総面積は21.7ｈａに及び、1991年４月２日から５月10日まで詳細分布調査の結果、発掘調査を要する面積は工事対象地の約60％、102,400㎡にも達した。課では事業者と数回の調整会議をもち、主に田面の盛土などの設計変更により、調査対象面積を34,381㎡まで縮小した。

このうち東入部遺跡の対象面積は16,271㎡であり、１次調査に続き６～15区に分け、５月13日、６区の表土剥ぎから調査を開始した。その後７区、さらに８月から８区へと進んだ。８区では甕棺墓などからの副葬品の発見が相次ぎ、11月16日には現地説明会を開催し、遺跡と出土遺物を一般に公開した。８区の調査は翌年２月まで継続した。一方、10月から９～15区の調査にも着手し、２月末に終了した。３月５日に1991年度の発掘調査のすべてを完了した（第３表）。

なお1991年度の他の調査対象であった安通遺跡と清末遺跡、および東入部遺跡の６区・７区・９区・10区・11区についてはすでに本報告を行っている。

次数	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間	調査地番	調査原因	報告（15頁参照）
1	9074	HGI-1	5,453㎡	(1990.7.18～1991.3.8)	東入部1943他	圃場整備	557集・613集
2	9165	HGI-2	16,271㎡	(1991.5.13～1992.3.5)	東入部1378他	圃場整備	613・652・1070集・本書
3	9216	HGI-3	13,832㎡	1992.5.20～1993.1.31	東入部1274他	圃場整備	485集
4	9208	HGI-4	1,319㎡	1992.5.8～1992.8.10	東入部329-18他	公民館建設等	381集
5	9226	HGI-5	351㎡	1992.5.13～1992.8.20	東入部329-1他	下水道工事等	382集
6	9227	HGI-6	380㎡	1992.8.9～1992.9.4	東入部390-7他	道路拡幅	383集
7	9312	HGI-7	17,000㎡	1993.5.1～1994.2.28	東入部1172他	圃場整備	516集・557集
8	9348	HGI-8	175㎡	1993.11.9～1993.11.26	東入部329-21他	道路拡幅	421集
9	9418	HGI-9	145㎡	1994.5.25～1994.6.28	東入部336-2他	道路拡幅	421集
10	9427	HGI-10	5,003㎡	1994.7.7～1994.11.25	東入部1098-2他	圃場整備	485集
11	9529	HGI-11	2,600㎡	1995.10.4～1996.2.14	東入部1366他	圃場整備	
12	9722	HGI-12	30㎡	1997.6.5～1997.6.7	東入部1450-1	道路改良	年報

第２表　東入部遺跡調査一覧



第3図　東入部遺跡および第2次調査地点（縮尺1/3,000）

入部圃場整備事業関係および関連遺跡報告書

入部地区圃場整備関係報告書

『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集　1990　（入部圃場整備に伴う1・2年次調査概要）

『入部Ⅱ－県営圃場整備事業に伴う第3次発掘調査の概要－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　1991

『入部Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集　1992

（四箇古川遺跡1次、四箇船石遺跡2次、清末遺跡2次調査の報告）

『入部Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集　1993　（岩本遺跡2次、安通1次調査の報告）

『入部Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集　1995　（清末遺跡3次調査の報告）

『入部Ⅵ－東入部遺跡群第3次・第10次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集　1996

『入部Ⅶ－東入部遺跡群第7次調査報告（1）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集　1997

『入部Ⅷ－東入部遺跡群第1次調査報告（1）・第7次調査報告（2）－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第557集　1998

『入部Ⅸ－東入部遺跡群第1次調査報告（2）・第2次調査報告（1）－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集　1999

『入部Ⅹ－東入部遺跡群第2次調査報告（2）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集　2000

『入部ⅩⅠ－東入部遺跡群第2次調査報告（3）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集　2001

『入部ⅩⅡ－重留遺跡第1次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集　2007

『入部ⅩⅢ－東入部遺跡群第2次調査報告（4）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1070集　2010

『入部ⅩⅣ－東入部遺跡第2次調査報告（5）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1140集　2012（本書）

『入部ⅩⅤ－東入部遺跡第11次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1141集　2012

関連遺跡報告書

入部地区圃場整備事業地には北から重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、東入部、安通の8遺跡が分布しており、以下圃場整備以外の原因で実施された遺跡の報告書をかかげる。ただし重留、安通遺跡は圃場整備事業のみの調査、また四箇東遺跡の報告はない。

四箇船石遺跡

『四箇船石1－東入部地内道路2・3発掘調査報告書－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第422集　1995

（四箇船石遺跡4次、6次、四箇古川遺跡1次の報告）

四箇古川遺跡

『四箇船石1－東入部地内道路2・3発掘調査報告書－』（前出）

『四箇古川遺跡1－第3次・第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1077集　2010

清末遺跡

『清末Ⅲ－清末遺跡群第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第508集　1997

岩本遺跡

『岩本遺跡－岩本遺跡群第3次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第342集　1993

東入部遺跡

『東入部遺跡群1－東入部遺跡群第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集　1994

『東入部遺跡群2－東入部遺跡群第5次発掘調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集　1994

『東入部遺跡群3－東入部遺跡群第6次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集　1994

『東入部遺跡群4－第8次・9次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集　1995

「東入部遺跡群第12次調査」『福岡市埋蔵文化財年報Vol.12－平成9（1997）年度－』　1999

Ⅲ　8区の調査

1．概要

東入部遺跡は、荒平山の西麓から北西方向に延びる舌状の丘陵上に広がる遺跡群で、第2次調査地点はその中央から北半部にほぼ相当する。調査対象が広範囲にわたったため、6～15区にわけて発掘を行った（第3表）。

8区は丘陵中央の尾根線上から西側斜面にあたるが、調査時には全体に水田が営まれ、北側で標高33ｍ、南側で33.5ｍとほぼ平坦な状況を呈していた。この調査区では弥生時代の集落・墓地、古墳、奈良・鎌倉時代の集落を主に確認した。弥生時代集落は中期を中心に営まれ、竪穴住居と掘立柱建物あわせて40数棟からなる。墓地は集落の東側に接し、甕棺墓･土壙墓･木棺墓あわせて200基からなり、その一部は墓域の南北2ヶ所に形成された方形区画溝内に位置する。その時期は前期末から後期初頭に及び、銅剣、銅釧、鉄製武器などの副葬品が出土した。また祭祀土器が区画溝などから大量に出土した。古墳は5基検出した。いずれも円墳で、主体部は木棺、小形竪穴式石室各1基、横穴式石室2基、不明1基である。古代・中世の集落は掘立柱建物を主体とするが、密度は薄い。

8区の報告は遺構・遺物量が多いことから分割して行わざるをえず、これまで下記の項目立てで2度にわたり行ってきたが、今回の弥生時代の墓地をもって終了する。なお、既報告の弥生時代関係の遺構についても、墓地との関係上本文中に項目を立てその概要を示した。またこれまでの8区の報告で漏れた遺物の一部についても今回の報告に追加した。

8区報告項目　（　）内は報告書集名

1　弥生時代の集落

1）掘立柱建物（652集）

2）竪穴住居（652集）

3）土坑（685集）

4）その他（685集）

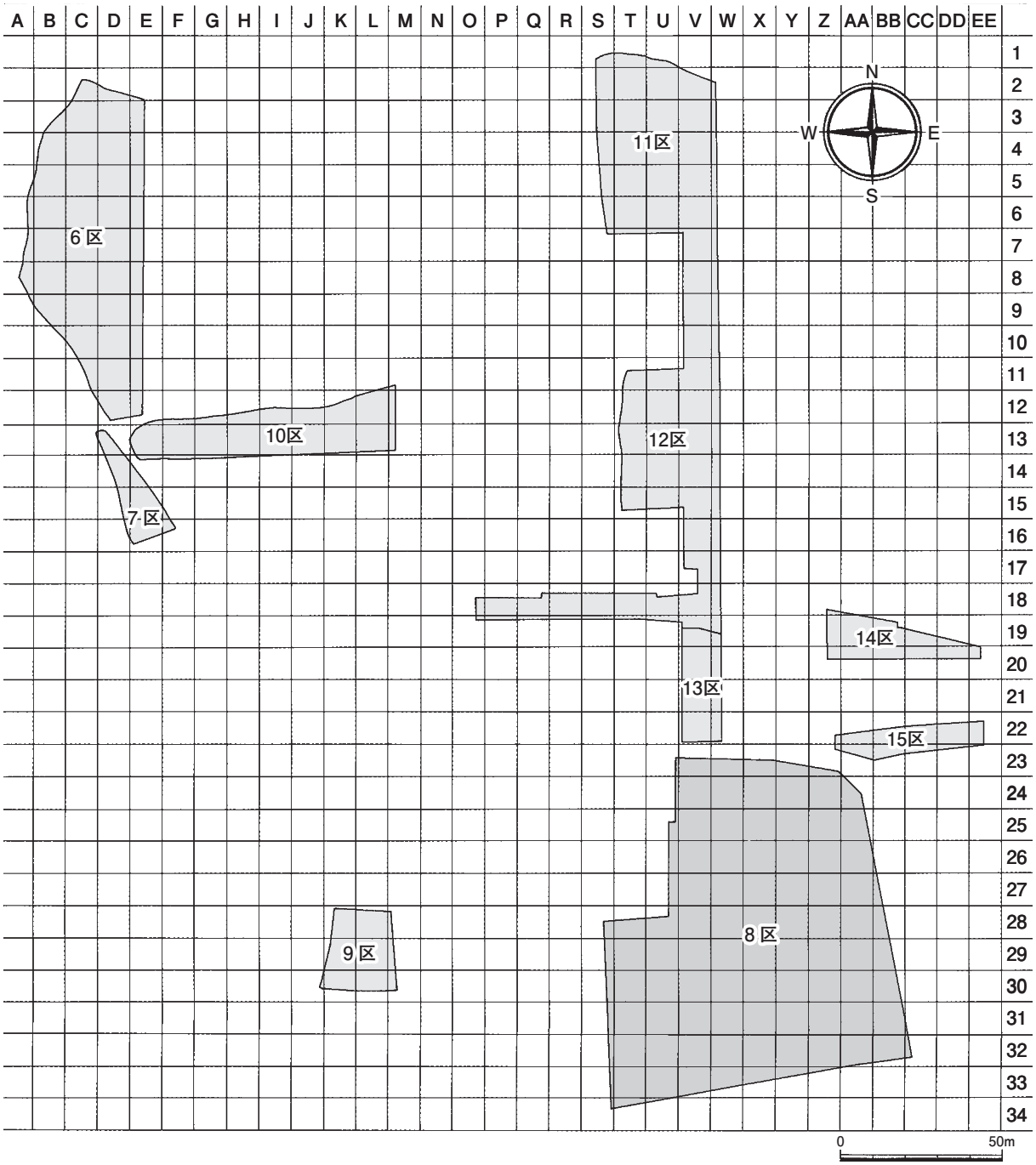
2　弥生時代の墓地（本書）

3　古墳および古墳時代の遺構（685集）

4　古代・中世の集落（685集）

区	調査対象面積	調査面積	調　査　原　因	備　　考	報　告（15頁参照）
6	3,344㎡	3,207.28㎡	排水路・田面		613集
7	240㎡	245.34㎡	排水路・田面		613集
8	6,172㎡	7,177.98㎡	用水路・排水路・道路・田面	弥生時代墓地は埋戻し保存。	652集・685集・本書
9	491㎡	505.08㎡	排水路・田面		
10	－	1,178.56㎡	田面		613集
11	2,410㎡	2,242.50㎡	用水路・排水路・道路・田面	上面遺構のみ調査。下面保存。	1070集
12	2,268㎡	2,334.12㎡	用水路・排水路・道路・田面		
13	432㎡	401.86㎡	用水路・排水路・道路		
14	644㎡	460.30㎡	用水路・田面		
15	270㎡	316.90㎡	道路		
計	16,271㎡	18,069.92㎡			

第3表　東入部遺跡第2次調査地区一覧



第４図　第２次調査グリット配置図（縮尺1/2,000）

２．弥生時代の遺構と遺物－集落

８区は南北約100ｍ、南辺での東西幅約90ｍ、調査面積7,178㎡、西北部の一部を欠くがほぼ台形状の調査区である。ここでは縄文時代から中世にいたる遺構・遺物を確認したが、弥生時代においては、この調査区のほぼ東半分は木棺墓・土壙墓・甕棺墓および祭祀遺構からなる墓地、西側から北側にかけては掘立柱建物、竪穴住居、土坑などからなる集落が墓地に沿うように営まれている（第５図）。以下簡単に集落の状況についてまとめておく。

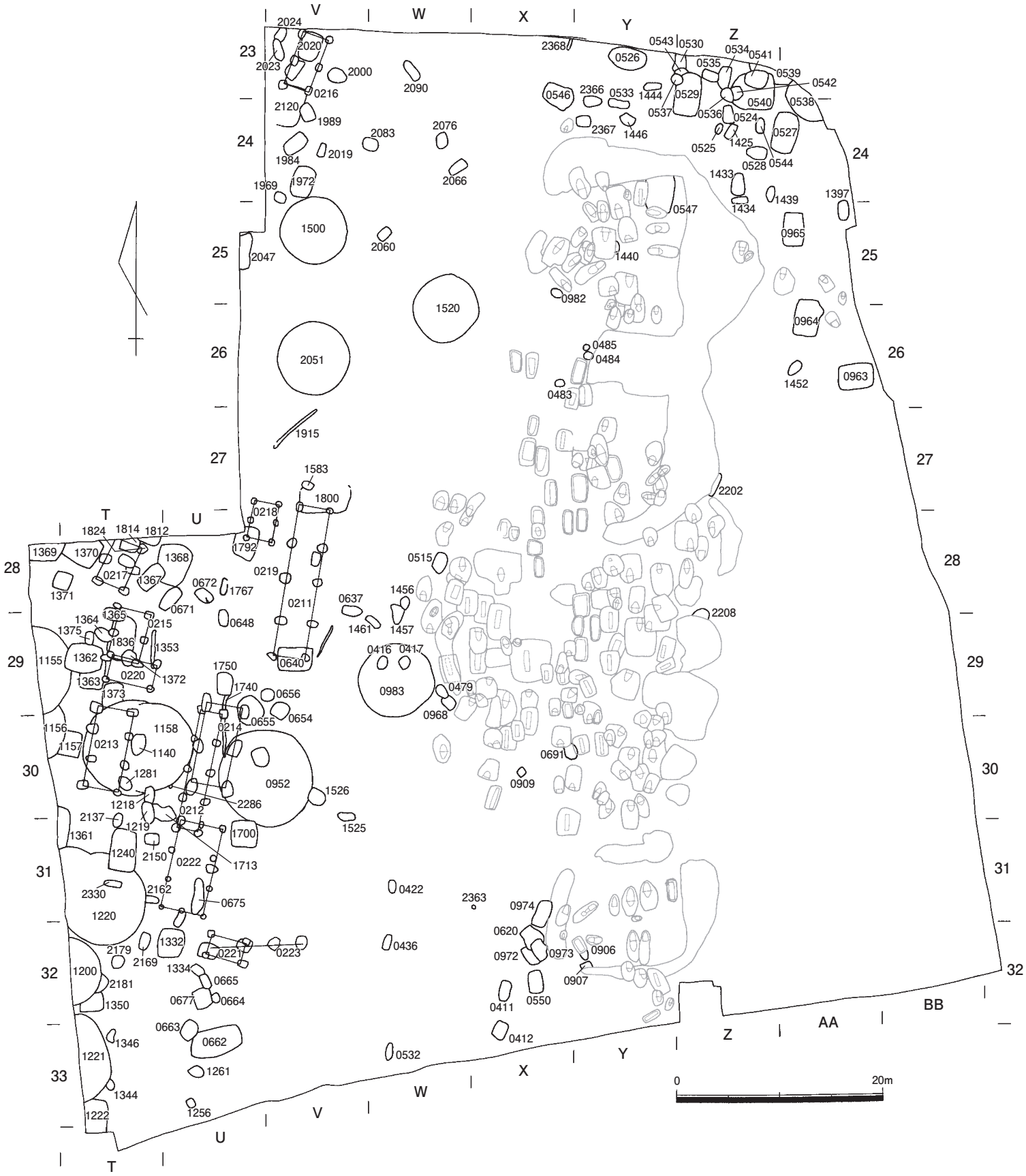
掘立柱建物はＳＢ0211～ＳＢ0222の12棟を検出した。おもに調査区の西南部に位置し、建物方位はＳＢ0223が北から4°西、他は北から10°～23°東にとり、南北方向に整然と分布する。建物規模はＳＢ0222が2×3間、他は梁間１間で、桁行は１間から４間となる。床面積はＳＢ0211が45㎡と最大で、ＳＢ0219が最小の5㎡弱となる。柱穴の掘方平面は１ｍを越えるものが多い。梁間１間の建物は高床倉庫の可能性が高い。掘立柱建物の多くは整理の段階で確認したものであるが、残されたピットからみてまとめきれなかった建物も相当数あるとみられる。

竪穴住居は円形14基（ＳＣ0538・0952・0983・1140・1140Ａ・1155・1156・1200・1220・1221・1360・1500・1520・2051）、方形31基（ＳＣ0527・0529・0539・0540・0546・0547・0640・0662・0963・0964・0965・1157・1222・1240・1332・1361・1362・1363・1368・1369・1370・1373・1700・1792・1800・1836・1972・2020・2047・2120・2122）のあわせて45基を検出した。調査区西側から北側にかけて墓地を取り巻くような状態で分布する。当初竪穴住居を営んだところまで墓地が拡張してきたことが、ＳＣ0547と北側区画墓内の甕棺との切り合い状況からうかがわれる。平面形態は円形と方・長方形に分かれる。円形住居は床面中央に炉をもち、全体を確認できたものではその周りに7～11の主柱穴をめぐらす。ＳＣ0538・1360を除き床面積が60㎡を越えるもの（ＳＣ0952・1140・1140Ａ・1155・1200・1221）とその約半分の31～38㎡のものがある。これに対し方・長方形は炉や柱穴が不明瞭なものが大半で、床面積は最大でも11～12㎡、多くは10㎡以下となる。

土坑は123基確認した。竪穴住居、溝、柱穴、ピットを除いた遺構を土坑としており、その形態は様々である。貯蔵穴とみられる遺構もあるが、その多くの用途は判断しがたい。また、まとめきれなかった建物等の大型柱穴を含む可能性もある。

溝状遺構は調査区西側で５条検出した。いずれも単独的なもので、長さ、幅とも小さい。生活遺構に伴うものとみられる。

このうち掘立柱建物と竪穴住居をみていくと、それぞれの建物、住居どうし、また建物と住居でも切り合い関係がみられる。掘立柱建物はもとより、竪穴住居についても出土遺物は少なかったが、それらを見る限り８区の集落は前期末から中期後半にかけて営まれている。ＳＢ0211とＳＣ0983・1500・1520は中期初頭に比定でき、ＳＢ0211に切られたＳＣ0640・1800はＳＣ1157とともに前期末に相当しよう。もっとも新しいのは中期後半のＳＣ0640・2120とそれらを切るＳＢ0216である。大まかにその変遷をたどれば、前期末に方形竪穴住居がまず築かれ、中期初頭に円形竪穴住居と掘立柱建物が加わり、中期後半まで継続する。墓地と比較すればその始まりはほぼ同じだが、後期初頭とみられる甕棺墓があることから、８区の集落はそれより早く終わったことになる。しかし、集落はさらに北側の13区や第11次調査地点、北東側の15区、また西側にも延びることが確認されており、当該時期の集落がある可能性も否定できない。



第５図　弥生時代集落遺構分布略図（縮尺1/500）

３．弥生時代の遺構と遺物－墓地

１）墓地の構成

弥生時代の墓地は木棺・土壙墓51基（遺構略号Ｄ）、甕棺墓149基（遺構略号Ｋ）および墓地の区画をかねた祭祀遺構の溝や土坑14基（遺構略号Ｍ）からなり、8区の中央やや西寄りに東西約15～30ｍ幅をもち、南北約95ｍにわたって営まれる。南は調査区境近くまで甕棺墓がみられるが、道路を隔てたすぐ南側の第3次調査地点では墓が確認できず、また北側はＸＹ－24区に位置するＭ0200溝の北辺外にＫ0169以外の墓が分布しないことから、墓域はほぼ8区のなかにおさまり、その面積は1800㎡前後とみられる。造墓期間は前期末から後期初頭と考えられる。

この墓域は先に述べた祭祀遺構でおおきく4部分に区画されているようにみえる。北からみていくと次のようになる。

①　Ｙ－25区を中心に、西側をＭ0955、残りの三方をＭ0200によって方形に囲まれた地区で、甕棺墓26基と木棺墓1基が区画内に営まれる。Ⅰ区または北区画と呼ぶ。

②　Ｙ－27区を中心にＭ0200によって西側を除く三方を囲まれた地区で、甕棺墓14基はこの区画におさまるが、西側にある木棺・土壙墓群は南北に列をつくる。Ⅱ区と呼ぶ。

③　Ｘ・Ｙ－29区を中心に、北側はⅡ区のＭ0200の南辺、東側は北から連なるＭ0200・Ｍ0203・Ｍ0204・Ｍ0205・Ｍ0206、南側はＭ0945・Ｍ0496、西側はＭ0482・Ｍ0480に囲まれた地区である。甕棺墓と木棺・土壙墓が密集する。Ⅲ区と呼ぶ。

④　Ｙ－31・32区を中心に、北側をＭ0495・Ｍ0496、東から南側をＭ0700、西側をＭ0207によって方形に囲まれた地区で、甕棺墓13基と土壙墓2基が区画内に営まれる。Ⅳ区または南区画と呼ぶ。

この4区画からはずれるものとして（祭祀遺構と切り合うものは区内としてあつかう）、Ⅰ区北側のＫ0169甕棺墓1基、同東側のＫ0125など甕棺墓4基、Ⅲ区西側のＫ0165、Ⅳ区南側のＫ0150など甕棺墓4基がある。

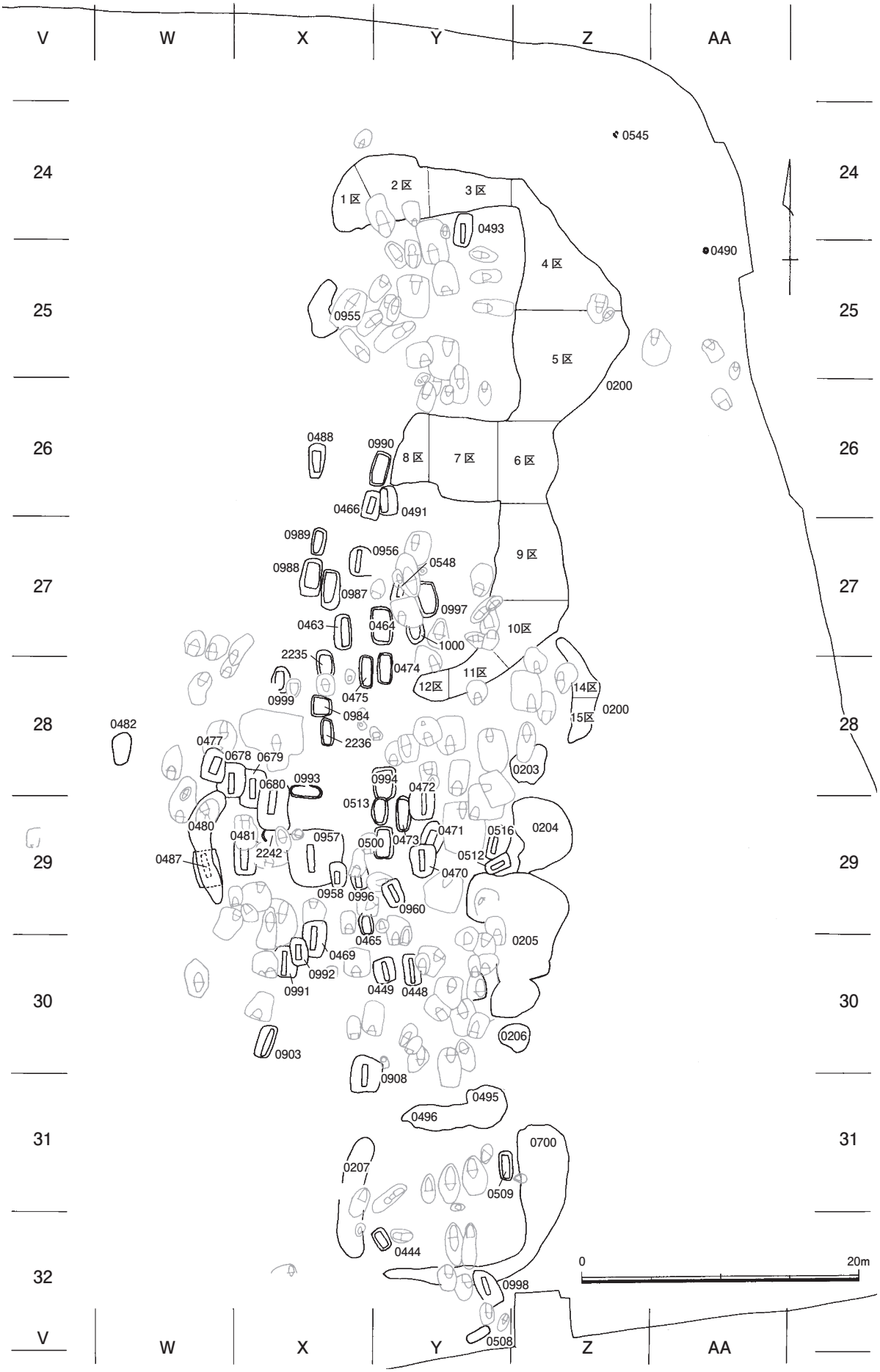
4区画の形成過程を大局的にみれば、Ⅲ区→Ⅱ区→Ⅰ区・Ⅳ区という順で造墓が開始され、Ⅰ区・Ⅳ区とその外側の甕棺墓群で墓地の営みが終わっている。祭祀遺構による区画も当初から企画されたものではなく、墓地の形成がある程度進んだ段階での設置とみられる。

以下、木棺墓・土壙墓、甕棺墓、祭祀遺構の順で個別遺構の特徴、切り合い関係、出土遺物などをみていき、まとめの項で墓地の形成過程を総合的に把握したいと考えている。

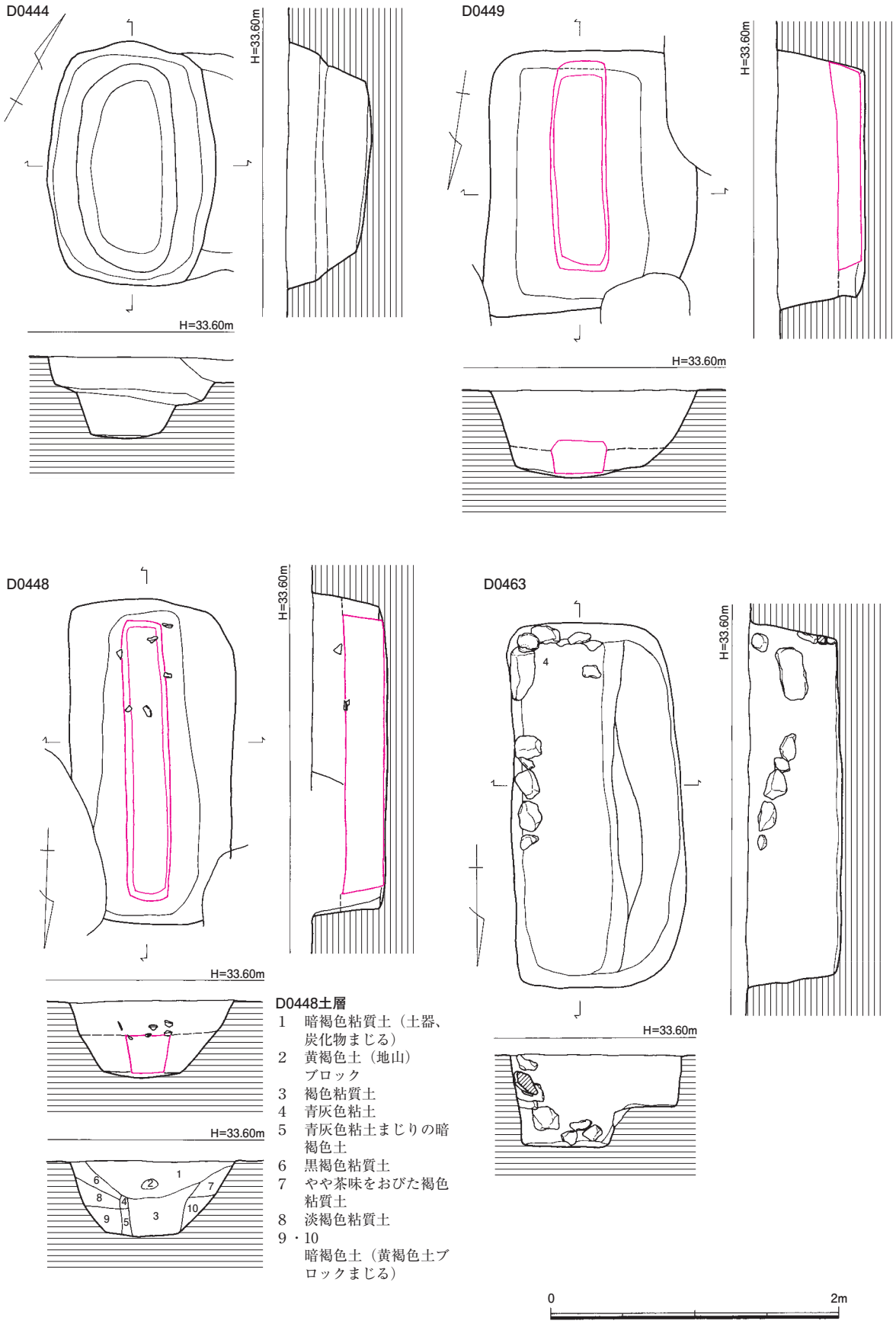
２）木棺墓・土壙墓

木棺・土壙墓（遺構略号Ｄ）は51基検出した。分布状況をみるとⅢ区が30基と最も多く、Ⅱ区が17基でそれにつぐが、南北の区画内は少なく、Ⅰ区が1基、Ⅳ区が3基となる。Ⅲ区では最も大型の墓壙をもつＤ0957を中心に墓が四方に広がっているようにもみえる。Ｄ0512とＤ0993を除き長軸をほぼ南北方向にとり、また墓壙の規模は大小様々だが形態は長方形のものが多い。

木棺墓の検出は次のような手順でおこなった。土層ベルトを残しながら墓壙を掘り下げていくと、ある面で粘土などとともに長方形の掘り方が現れる。長方形内の土はまわりの土より緻密で、また四方との境にはわずかな木質痕や木質が置き換わったとみられる粘土が介在し、これらをたよりに掘り下げる。これが木棺内にあたるが、棺蓋、棺底については木質痕跡などを確認したものはない。棺内を掘りあげた段階で写真撮影と実測をおこなう。その後棺のまわり（裏込め）を墓壙底まで掘り下げ、底面の状況を観察、実測する。以上の手順は一部のわかりやすい掘り方を持つ木棺墓の例で、棺が墓



第６図　弥生時代墓地遺構分布略図１（縮尺1/400）



第７図　D0444・0448・0449・0463実測図（縮尺1/40）

壙底近くになってやっと確認できたもの、裏込め石の検出で棺を想定したものなど検出状況は多様であった。また棺材が置き換わったとみられる粘土等は小口部が厚く、側面部が薄い傾向がみられた。

ここで木棺墓・土壙墓としているのは、その見極めが難しいものがあるからである。一応、木質の痕跡が残らず、また土層から木棺の想定ができないものについては土壙墓として扱った。

以下番号順に個別の木棺墓・土壙墓をみていくが、遺構の切り合い状況の記載はとくに必要がある場合を除き、弥生時代の遺構に限った。また木棺墓の写真は基本的に裏込めを残し、棺内を掘りあげた状況で撮影したものを使用した。実測図のうち木棺の痕跡は色刷りで示し、その検出面は断面図内の黒の点線で表した。土層と見通し断面の位置が異なる場合は、平面図に矢印がついた断面線が見通しを表し、また同一の場合は矢印がついた断面線のみで示した。なお、出土遺物については第21・22図にまとめた。

D 0444 土壙墓（第7図、図版5）

Ｙ－32区、南区画内の南西部に位置する。墓壙上面は長軸を北北西にとる隅丸長方形を呈し、長さ1.70ｍ、幅1.15ｍをはかる。墓壙は二段掘りの構造で、深さ20～30㎝でいったん平坦部をもうけ、その中央に長さ1.14ｍ、幅0.68ｍ、深さ30㎝前後の隅丸長方形の掘り込みをつくる。底面は横・縦断面とも中央部がややくぼみ気味となる。ＳＫ0906（中期初頭）を切る。埋土から中期初頭から前葉にかけての甕、壺、器台などの破片が出土したが、この墓以前の遺物である。

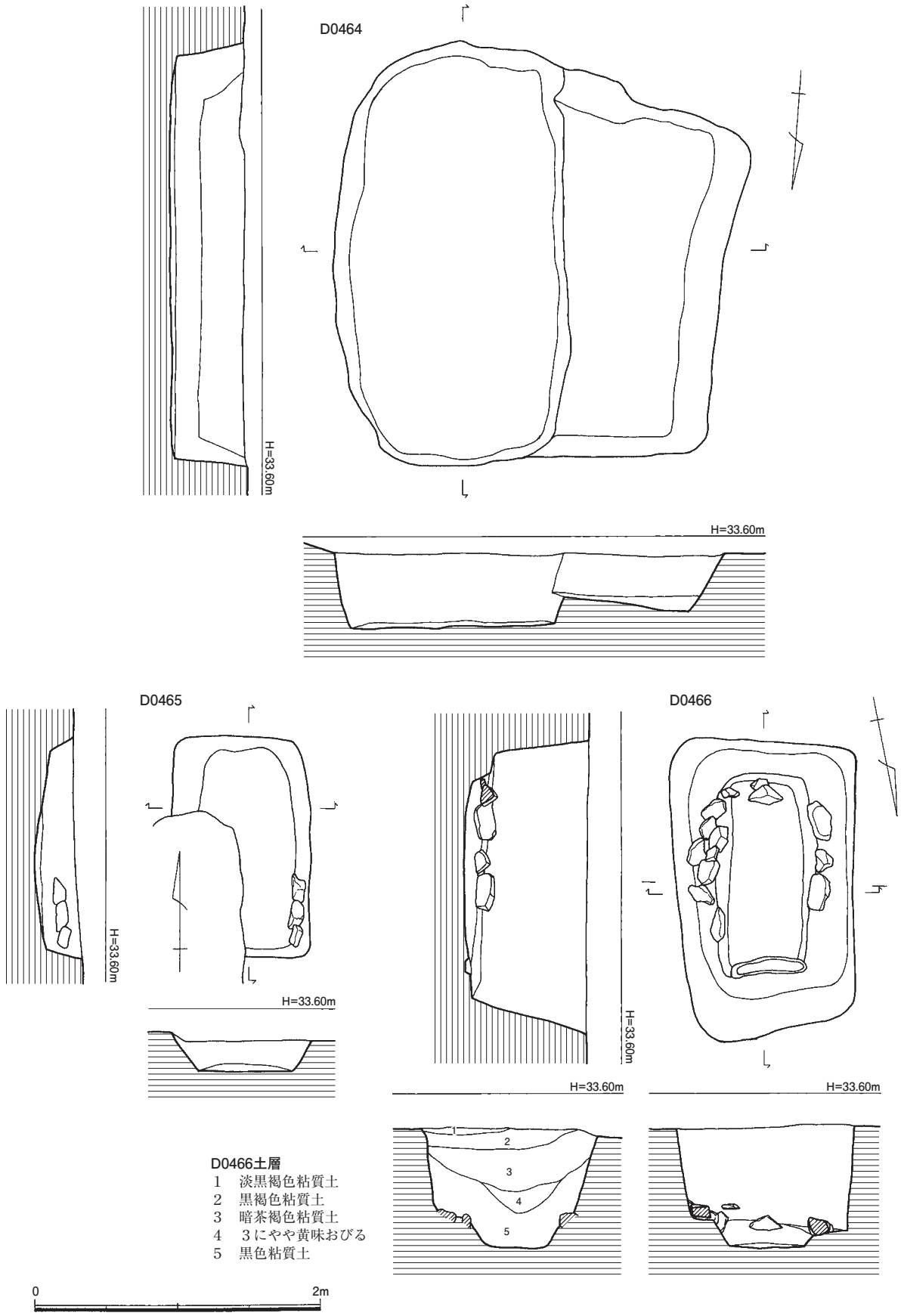
D 0448 木棺墓（第7図、図版5）

Ｙ－30区。北東隅をＫ0043（ＫⅡｃ式）に、北西隅を攪乱坑に破壊される。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる長方形を呈し、長さ2.25ｍ、幅1.16ｍをはかる。墓壙内は東西両側壁が緩やかに傾斜し、横断面はＵ字形に近い。底面は北側幅が広い不整長方形状で、検出面からの深さは53㎝。墓壙内の深さ23㎝前後で木棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.95ｍ、幅0.30ｍ、高さ40㎝の細長い長方形をなし、墓壙底の中央に埋置する。棺の痕跡は東側で顕著に残り、その厚さは5㎝前後と見られる。棺南側の上面あたりに土器破片が散乱した状態で出土した。

出土遺物（第21図1～3）　1は断面三角形の口縁部をもつ甕。外面は刷毛目、また口縁外面下端部と内面は指押さえの後それぞれナデ調整で仕上げる。砂粒を多く含んだ胎土で、焼成は良好、灰褐～暗褐色を呈する。口縁部上面から外面にかけて煤が付着する。2は壺。胴部との境の細く低い突帯（稜）から頸部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する。外面は細かい横方向のヘラ研磨で突帯を作り出し、その後頸部に縦の研磨を加える。頸部内面は口縁部近くが横、それより下は縦の研磨を行う。胴部内面は横方向のヘラナデをおこなう。砂粒を含んだ胎土で、焼成良好、外面から頸部内面までは黒塗りを施す。胴部内面は淡褐色。3は厚手の器台。外面は粗い縦刷毛目、内面は横ナデをおこなう。砂粒を多く含んだ胎土で、焼成良好、外面は淡黄褐色を呈する。

D 0449 木棺墓（第7図、図版5）

Ｙ－30区。Ｄ0048の西0.6ｍに平行して造墓する。南東隅を除いた三隅を後世の土坑等に破壊される。墓壙上面は長軸が北からやや西にふれた長方形を呈し、長さ1.83ｍ、幅1.44ｍをはかる。墓壙内は西側壁が緩やかな傾斜で掘り下げられ、長さ1.60ｍ、幅0.87ｍの墓壙底は上面からみてやや東側に片寄る。検出面から墓壙底までの深さは60㎝で、底面は横断面中央部が深くなる。墓壙内の深さ35㎝で不明瞭ながら木棺の痕跡を確認した。棺は墓壙底南側壁に小口を接して置かれ、長さ1.45ｍ、幅0.39ｍの長方形となる。高さは24㎝。棺の裏込めは暗褐色土で地山ブロックを含むのに対し、棺内は緻密な暗褐色土である。埋土からＤ0448と同様な甕、壺、器台片などが出土した。



第８図　D0464・0465・0466実測図（縮尺1/40）

D 0463 木棺墓（第7図、図版5）

X－27区。墓壙上面は長軸を南北にとる長さ2.53ｍ、幅1.22ｍの隅丸長方形を呈する。墓壙は片側二段掘りの構造で、深さ36㎝前後で西側に最大幅37㎝の平坦面をもうけ、そこから東側を掘り下げ、長さ2.30ｍ、幅0.60ｍの長方形の墓壙底をつくる。検出面から墓壙底までの深さは66㎝をはかり、底面はほぼ平坦となる。平坦部中央縁部分は、崩れたかのように墓底に向かい傾斜する。二段目の南側小口から東側壁南半にかけて最大幅37㎝以下の礫が、墓壙上面近くから底面まで高さはちがうものの平面的に一列にならび、木棺を裏で固定した石列とみられる。南側小口部分でみれば棺の外幅は35㎝前後となる。埋土は暗褐色粘質土。北側小口の西隅に底面から50㎝ほど浮いた状態で棺外供献とみられる壺が出土した。

出土遺物（第21図4）　扁球形の胴部と上げ底をもつ厚みのある壺で、口頸部は欠く。残存部は外底面もふくめた内外面ともヘラ研磨調整で仕上げ、外面はおもに斜め方向、内面は横におこなう。白色砂粒を多く含んだ胎土で、焼成良好、外面は外底面まで黒塗り、内面は淡赤褐色を呈する。底径5.8㎝、残高17.3㎝。出土したのはこの壺1点だけである。

D 0464 土壙墓（第8図、図版5）

X・Y－27区。D 0463の東0.5ｍに平行して造墓する。墓壙上面は南北幅2.96ｍ、東西幅2.90ｍの不整な方形状を呈する。墓壙は片側二段掘りの構造で、深さ30㎝前後で、西側に最大幅1.05ｍの平坦面をもうけ、さらに東側を一段掘り下げ、南北長2.81ｍ、東西幅1.43ｍの隅が丸みをおびた墓壙底をつくる。検出面から墓壙底までの深さは50㎝をはかり、底面はほぼ平坦となる。埋土は粗砂まじりの暗褐色粘質土。墓壙底が幅広であることからすれば木棺墓の可能性もある。なお、墓壙北西隅部分には電柱が立っており、実測時は未掘の状態であった。埋土からは甕、壺の小～細片が少量出土したにとどまる。

D 0465 木棺墓（第8図）

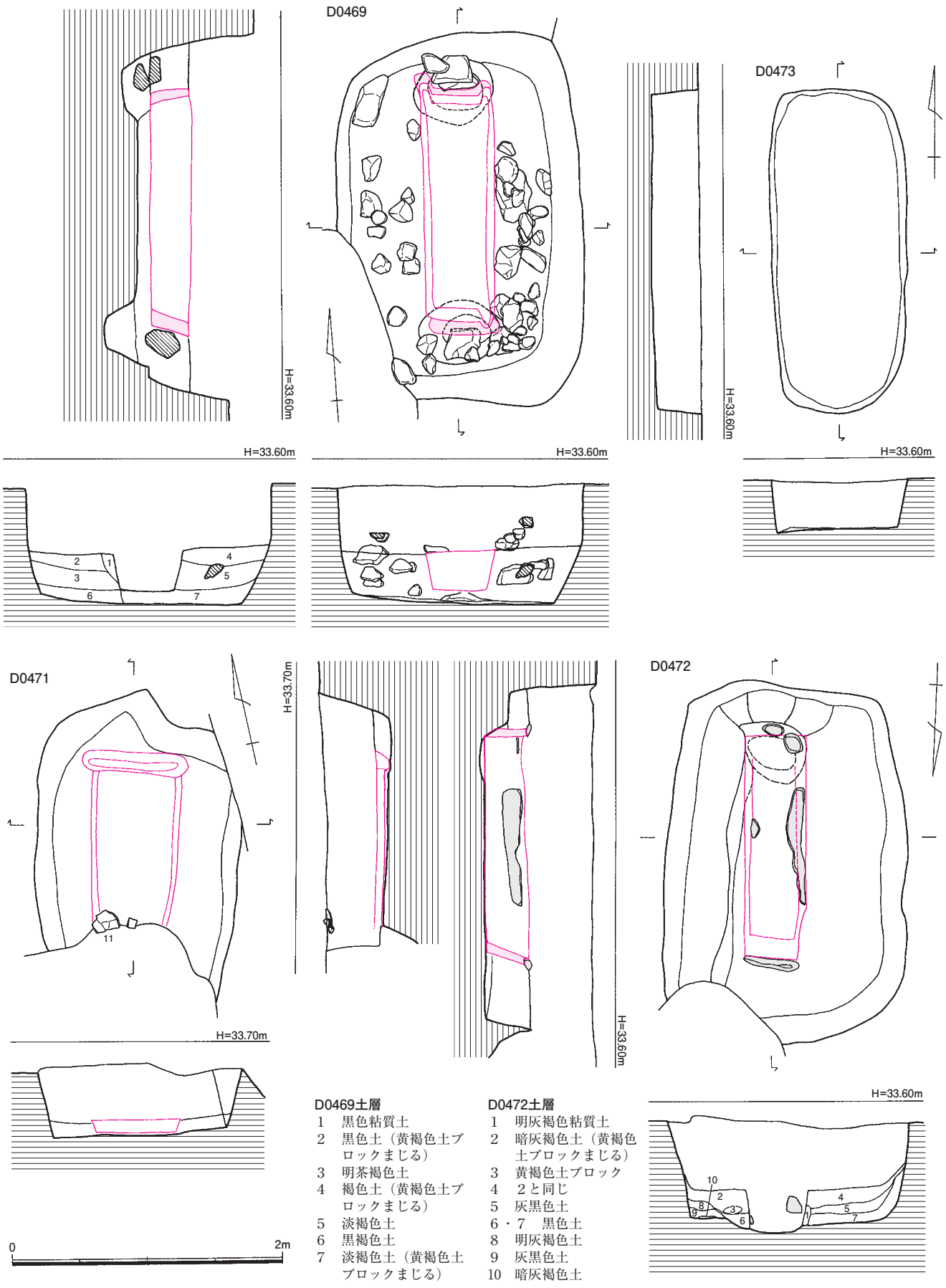
X－29区。南西側を攪乱に破壊され、また北側墓壙壁をK 0052（KⅡa式）に切られる。墓壙上面は長軸を南北にとる長方形を呈し、長さ1.54ｍ、幅0.98ｍをはかる。墓壙壁の傾斜は比較的緩やかで、検出面から深さ28㎝で墓壙底に達する。東側壁の南寄りに小礫が列をなしており、木棺の固定に用いられたものであろう。棺の平面規模は墓壙底および礫列からみて長さ1.4ｍ、幅0.6ｍ以内とみられる。埋土は拳大までの礫がまじった黒褐色土で、中期初頭頃の甕細片などが出土した。

D 0466 木棺墓（第8図、図版5）

X・Y－26区。墓壙上面はほぼ南北に長軸をとる長方形で、長さ2.13ｍ、幅1.30ｍをはかる。墓壙は二段掘りの構造で、検出面から深さ70㎝前後でいったん平坦面をつくり、その中央に長さ1.40ｍ、幅0.70ｍ、深さ20㎝前後の長方形掘り込みをもうける。その墓壙底北側壁下には幅12㎝、深さ5㎝の溝状掘り込みが、また対面の南側壁には平坦面を内側に向けた礫があり、ともに木棺小口部材の固定に用いられたものであろう。この状態からみれば木棺の規模は長さ1.10ｍ、幅0.50ｍ前後と想定される。ただ土層図では裏込めの状況は明確でない。なお一段目の平坦面付近は地山の礫が露出している部分にあたり、二段目側壁にみられる礫は中央掘り込みを掘る際に取り残されたものである。D 0491を切る。埋土からは外への引き出しが小さな逆L字状口縁部をもつ甕、他に壺、厚手の器台などの小～細片が出土した。

D 0469 木棺墓（第9図、図版6）

X－29・30区。北側をK 0073（KⅠc式）の墓壙に切られ、また南西隅をD 0992に破壊される。墓壙上面はほぼ南北に長軸をとる隅丸長方形で、長さ2.75ｍ、幅1.82ｍをはかる。墓壙壁は直に近く、検出



D0469土層
1　黒色粘質土
2　黒色土（黄褐色土ブロックまじる）
3　明茶褐色土
4　褐色土（黄褐色土ブロックまじる）
5　淡褐色土
6　黒褐色土
7　淡褐色土（黄褐色土ブロックまじる）

D0472土層
1　明灰褐色粘質土
2　暗灰褐色土（黄褐色土ブロックまじる）
3　黄褐色土ブロック
4　２と同じ
5　灰黒色土
6・7　黒色土
8　明灰褐色土
9　灰黒色土
10　暗灰褐色土

第９図　D0469・0471・0472・0473実測図（縮尺1/40）

面から深さ85㎝でほぼ平坦な墓壙底となる。上面から深さ20㎝前後で礫が出はじめ、50㎝で北側壁下に浅いU字形状、また南側壁下で直線状の木棺の痕跡とみられる粘土が出土した。また西側から南側にかけては黒色土が広がり、棺と裏込めの境が比較的明瞭であった。この両小口部の粘土からみれば、棺は側板で小口板を挟み込む形態をとるとみられる。側板間の幅は55㎝前後をはかるが、側板部分は棺材の外面まで掘り進めており、小口部粘土の直線部分から棺の規模は内法で長さ1.71ｍ、幅0.36ｍ、高さは30㎝となる。棺底は平坦で、墓壙底から9㎝ほど上に埋置される。墓壙底の南北側壁下には径50～60㎝、深さ10～25㎝の不正円形の掘り込みがあるが、棺小口部粘土は先にも述べたように墓壙底にとどいておらず、小口材固定の掘り込みである可能性は低い。裏込めには棺に沿った多数の礫が含まれ、南側小口部裏の礫のように明らかに棺の固定に用いられたものがある。埋土から口縁断面が三角形の甕、三段有軸羽状文の壺などの小片が出土した。

D 0470 土壙墓（図版6）

Ｙ－29区。個別実測図を紛失し、詳細不明。墓壙上面はほぼ東西に長軸をとる隅丸長方形を呈し、長さ2.45ｍ、幅1.92ｍをはかる。木棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙底の幅からみてその可能性もある。D 0471を切る。

出土遺物（第21図5～10）　5～8は甕。5～7は逆L字状口縁をもつが、外への引き出しは小さい。6・7は口縁上面が内傾し、また外面口縁下に三角突帯をめぐらす。8は底部で、平底。いずれも外面は縦の刷毛調整、内面はナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好、おもに淡赤褐色を呈する。6・7には煤が付着する。9は厚みのある壺の底部で、わずかに上げ底となる。外面は横から斜め方向のヘラ研磨、内面は板状工具によるナデをおこなう。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成良好、外面は黒塗り、内面は淡褐色を呈する。10は厚手の器台。内部は丸い棒状の工具で孔を穿ったものであろうか。外面はナデ調整で、部分的に指押さえ痕が残る。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成良好、淡赤褐色を呈する。他に鋤先状口縁の壺細片などが出土した。

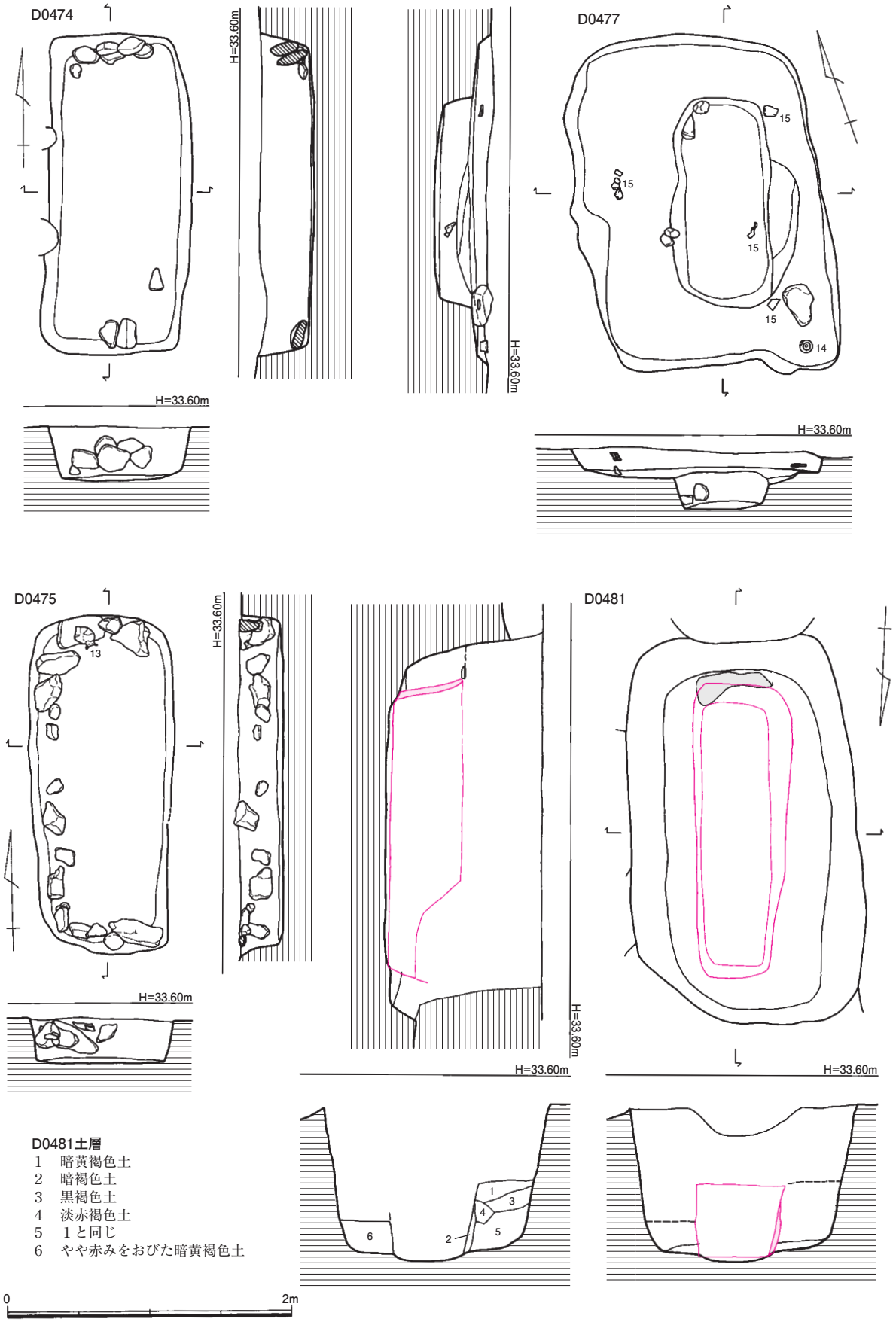
D 0471 木棺墓（第9図、図版6）

Ｙ－29区。D 0470に南側を、K 0156（KⅡb式）に北東隅を切られる。墓壙上面は北北東に長軸をとる北側中央が突出した不正長方形を呈する。残存長2.28ｍ、幅1.50ｍをはかる。壁面は比較的急な傾斜をもって掘り込まれ、検出面から深さ55㎝で、横断面が東から西にやや傾斜する底面となる。深さ40㎝前後で棺の痕跡と北側小口部の溝状掘り込みを確認した。棺は両小口板で両側板を押さえた構造とみられ、それを裏込めで押さえている。棺幅は0.65ｍ。北側小口部の溝状掘り込みは、わずかに地山面にとどいているだけであり、固定のために掘られたものではなく、棺材の痕跡そのものを示しているのかもしれない。墓壙上面あたりから甕が出土した。

出土遺物（第21図11）　逆L字状口縁の甕である。口縁の外への引き出しは小さく、また上面が内傾する。口縁下には低い三角突帯をめぐらす。外面は縦の細かい刷毛目調整、他はナデ調整を行う。胎土には砂粒が多く、焼成良好、外面は煤に覆われ、内面はくすんだ赤褐色を呈する。外に鋤先状口縁をもつ小壺などの小～細片が出土した。

D 0472 木棺墓（第9図、図版6）

Ｙ－28・29区。D 0471の西北に位置する。D 0473に西側墓壙壁を切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる西北隅が丸みをおびた長方形を呈し、長さ2.68ｍ、幅1.78ｍをはかる。墓壙壁は比較的急で、検出面から深さ80㎝で墓壙底となる。底面の東側壁下は10㎝ほど高くなり、また南側壁下には墓壙底から20㎝前後の高さで半円形状の突出部をつくる。さらにこの突出部の下には東西幅0.45ｍ、深さ5㎝ほどの浅い円形状の掘り込みをもうける。墓壙内の深さ45㎝前後で両小口部分の粘土など木



第10図　D0474・0475・0477・0481実測図（縮尺1/40）

棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.65ｍ、幅0.45ｍ、高さ35㎝の長方形をなし、墓壙底の中央やや西側、南側の突出部に接して埋置したうえで裏込めを行う。北側小口部は棺底に向かい傾き、棺底横断面は丸みをおびる。両小口部に残る粘土の厚さは6㎝前後である。棺内には目張りあるいは棺蓋とみられる粘土帯が落ち込む。口縁断面が三角形の甕、逆Ｌ字状で外への引き出しが小さい甕などが少量出土した。

D 0473 土壙墓（第９図、図版７）

Ｙ－29区。墓壙は長軸を南北にとる隅丸長方形を呈し、長さ2.40ｍ、幅1.02ｍをはかる。墓壙壁は直立気味で、検出面からの深さ36㎝でほぼ平坦な墓壙底となる。Ｄ0472を切る。埋土から供献とみられる壺が出土した。

出土遺物（第21図12）　壺の口縁部と胴部の破片で、接合しないが、図上で復元した。扁球の胴部から頸部が外傾気味に立ちあがり、口縁部が短く外反する。頸部と胴部の間には作り出しとみられる突帯がめぐる。外面から口頸部内面まではヘラ研磨、胴部内面はナデ調整をおこなう。ヘラ研磨の部分は黒塗りを施す。胎土には砂粒が多く、黒塗りのない胴部内面は灰褐色を呈する。

D 0474 木棺墓（第10図、図版７）

Ｙ－27・28区。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる隅がやや丸みをおびた長方形で、長さ2.25ｍ、幅1.01ｍをはかる。検出面から深さ38㎝前後で横断面中央がややくぼんだ墓壙底となる。底面の南北両側壁下に礫が列んで置かれ、木棺の小口板を裏から固定したものとみられる。これら両小口部の礫と北西隅および南東の礫からみれば、棺は外法で長さ1.78ｍ、幅0.48ｍ前後である。埋土は黒褐色粘質土。出土遺物はない。

D 0475 木棺墓（第10図、図版７）

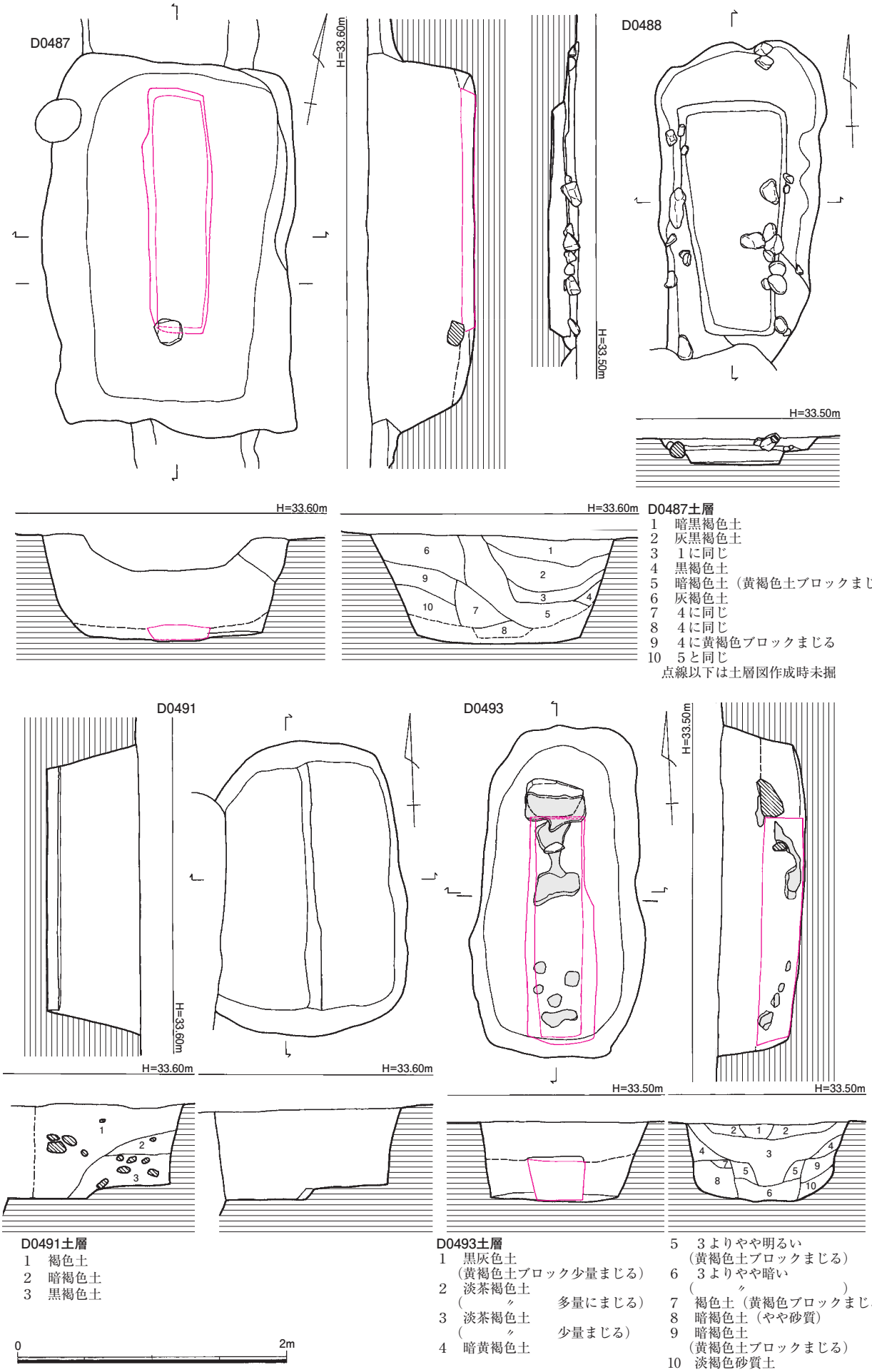
Ｘ－28区。Ｄ0474の西0.35ｍに平行して造墓する。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形を呈し、長さ2.38ｍ、幅1.03ｍ。墓壙壁は直立に近く、検出面から深さ31㎝で横断面中央がややくぼんだ底面に達する。東側をのぞいた三側壁に沿って、墓壙検出面直下から最大幅40㎝以下の礫が列ぶ。土層では確認していないが、木棺を裏で固定した礫列とみられる。東側壁にこれが見られないのは棺を東に寄せ置いた可能性が高く、とすれば棺は外法で長さ1.8ｍ、幅0.6ｍ前後の規模となろう。埋土は暗褐色粘質土。北側小口部の礫の上から棺外供献の壺が出土した。

出土遺物（第21図13）　半欠の壺で、底部も欠く。扁球の胴部から口頸部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。胴部と頸部の境には作り出しとみられる低い突帯がめぐる。外面から口頸部内面まで横方向のヘラ研磨をおこない、さらに頸部外面には暗文風の縦方向の研磨を施す。ヘラ研磨の部分は黒塗り。胴部内面は指押さえの後ナデで仕上げ、灰みをおびた褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含む。胴部外面には黒班がある。

D 0477 土壙墓（第10図、図版７）

Ｗ－28区。墓壙上面は北北東に長軸をとる隅丸長方形状を呈するが、西側は出入りがあり、また南東隅は膨らむ。断面を切った場所で長さ2.80ｍ、幅1.73ｍをはかる。墓壙は二段掘りの構造で、検出面から深さ25㎝前後でいったん平坦面をつくり、その東寄りに1.47ｍ、幅0.59ｍ、深さ25㎝の隅丸長方形坑を掘り込む。この二段目墓壙の南西側はえぐれた状態となる。墓壙底面は中央部に向かいやや深くなる。埋土は地山土のブロックがまじった暗褐色土の一層で、二段掘りの土壙墓とみられる。Ｄ0678を切る。一段目底および二段目内から土器片が出土した。

出土遺物（第21図14・15）　14は厚みのある上げ底の甕底部である。外面は粗い刷毛目、外底はヘラナデ調整をおこなう。内底は剥離する。15は壺。口頸部と胴部が接合せず、図上で復元した。最大径



第11図　D0487・0488・0491・0493実測図（縮尺1/40）

を上位にとる胴部から頸部が外反する広口壺の類で、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面はヘラ研磨で、下から斜め、横、縦と方向を変えておこなう。口頸部外面は縦の暗文を施す。口頸部内面は横のヘラ研磨で、胴部内面は指押さえの後ナデ調整をおこなう。外底部もヘラ研磨をおこなっている。胎土には砂粒を多く含み、外底部が黒色、他は淡赤褐色を呈する。

D 0481 木棺墓（第10図、図版7）

X－29区。北側をK 0087（KⅠc式）に、東側墓壙縁をK 0159（KⅡb式）に、また南側縁を近世以降の土坑に切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる長方形状を呈し、長さ2.70 m、幅1.65 m前後をはかる。墓壙内は東西両側壁が緩やかに傾斜し、検出面から底面までの深さは1.00 mとなる。墓壙内の深さ55㎝前後で青灰色粘土など木棺の痕跡を確認した。棺は長さ2.07 m、幅0.70 m、高さ55㎝の長方形をなし、墓壙底の中央やや南寄りに埋置したうえで裏込めを行う。棺底部分は墓壙底より5㎝ほど掘り下げられ、横断面がわずかに丸みをもつ。土層からみれば側板・小口板の厚さは5㎝前後とみられる。棺南側小口部上面には粘土が帯状に残り、棺蓋の目張りに用いられたと考えられる。口縁断面三角形の甕、厚い上げ底の甕、甕蓋、高杯筒部などの小片が出土した。

D 0487 木棺墓（第11図、図版7）

W－29区。南北に走る祭祀遺構のM 0480に上面を切られる。墓壙上面は長軸が北からやや西にふれた幅広の長方形を呈し、長さ2.70 m、幅1.85 m前後をはかる。墓壙壁は北側を除き比較的緩やかに傾斜し、検出面から深さ80㎝でほぼ平坦な底面になる。墓壙内の深さ70㎝前後、墓壙底のやや上で木棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.81 m、幅0.50 mの長方形をなし、墓壙底の中央北寄りに埋置したうえで裏込めを行う。残存棺高は10㎝前後で、棺底部分は墓壙底よりわずかに深くなる。M 0480が墓壙内で検出面から65㎝下まで掘り下げられた（土層図の1～5層）結果、木棺の上部が削られたものであろう。棺南側小口部上の石はM 0480に伴うものとみられる。墓壙上部から大型甕・壺の破片、下部からは上げ底の甕や壺の細片が出土した。

D 0488 土壙墓（第11図、図版7）

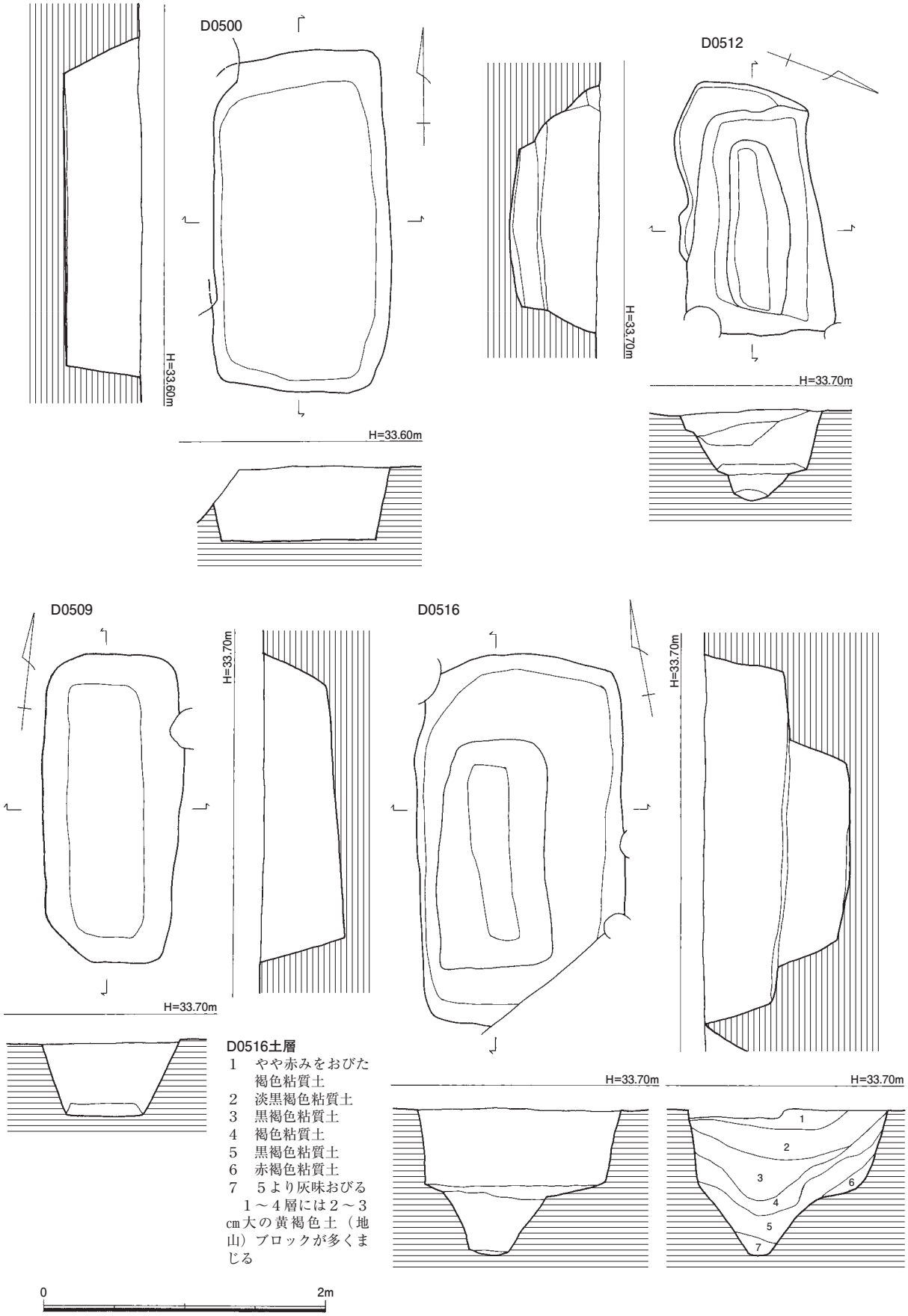
X－26区。北区画内にあるD 0493を除けば、土壙墓・木棺墓としては一番北に位置する。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる長さ2.38 m、幅1.25 mの隅丸長方形状を呈する。墓壙は二段掘りの構造で、検出面から深さ10㎝で平坦面をもうけ、その中央南寄りに長さ1.74 m、北側幅0.80 m、南側幅0.52 m、深さ10㎝の浅い不整長方形坑を掘り込む。埋土は暗褐色粗砂で大小の礫を含んでおり、図中の礫もその一部や地山中のものである。出土遺物はない。

D 0491 木棺墓（第11図、図版8）

Y－26区。西側をD 0466から切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる北側が狭く、南側が広い隅丸方形を呈し、長さは2.18 m、幅は1.45 m前後に復元できる。墓壙は片側二段掘りの構造で、東側壁下、検出面からの深さ55㎝前後に幅0.55 mの南北に長い平坦面をもうけ、そこから西側に8㎝ほど掘り下げる。平面的には木棺の痕跡をうかがうことはできなかったが、東側平坦面の上には裏込め状の堆積がみられ、西側の二段目底に棺を置いた可能性が高い。とすれば棺は最大長1.8 m前後の長方形とみられる。小さな逆L字状口縁の下に三角突帯をめぐらす甕などが出土した。

D 0493 木棺墓（第11図、図版8）

Y－24・25区。北区画内の北東端に位置する。墓壙上面は多少の出入りがあるがほぼ長軸を南北にとる隅丸長方形を呈し、長さ2.45 m、幅1.30 mをはかる。墓壙壁は直立気味で、検出面から深さ60㎝で中央部に向かいやや傾斜する墓壙底にいたる。墓壙内の深さ25㎝前後で粘土などにより木棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.70 m、幅0.50 mの長方形で、墓壙底中央南寄りに置かれる。高さは30㎝前後



第12図　D0500・0509・0512・0516実測図（縮尺1/40）

である。北側小口部の外側には幅40㎝の石が置かれ、小口板の押さえとなっている。この石の上面には粘土が覆い、また棺内にかけて粘土が落ち込んだ状態となる。棺蓋あるいはその上を被覆していた粘土であろうか。北区画内で唯一の木棺墓である。ＳＣ0547を切る。埋土からは逆Ｌ字状口縁の甕、平底の甕などの小片が出土した。

D 0500 土壙墓（第12図、図版8）

Ｙ－29区。Ｋ0066（ＫＩｃ式）と攪乱で西墓壙壁の大半を破壊される。墓壙は長軸を南北にとる長方形を呈し、長さ2.42ｍ、残存する部分での幅は1.25ｍをはかる。検出面から深さ52㎝で平坦な墓壙底となる。木棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙底の幅からみて木棺墓の可能性もある。甕の小～細片が少量出土した。

D 0509 土壙墓（第12図）

Ｙ－31区、南区画内の北東部に位置する。墓壙は隅がやや丸みをおびた長方形を呈し、長軸は北からやや西にふれる。長さ2.19ｍ、幅1.10ｍ。墓壙壁は緩やかに下り、北側壁下で検出面から深さ44㎝、南側壁下で深さ58㎝と北から南に傾斜する墓壙底となる。埋土は暗褐色土。埋土からは甕などの小～細片が出土した。

D 0512 土壙墓（第12図、図版8）

Ｙ－29区。墓壙上面は北東－南西に長軸をとる南西隅部分がやや膨らんだ長方形状を呈し、長さ1.80ｍ、幅1ｍ前後をはかる。南西隅部分は深さ10～25㎝で段がつき、この部分を除くと墓壙は二段掘りとなり、検出面から深さ45～50㎝の平坦面の東寄りに、長さ1.20ｍ、幅0.44ｍ、深さ20㎝前後の隅丸長方形状の二段目掘り込みをもうける。墓壙底は横断面Ｕ字形状を呈する。Ｄ0516およびＭ0205を切る。埋土からは逆Ｌ字状口縁の甕などが少量出土した。

D 0516 土壙墓（第12図、図版8）

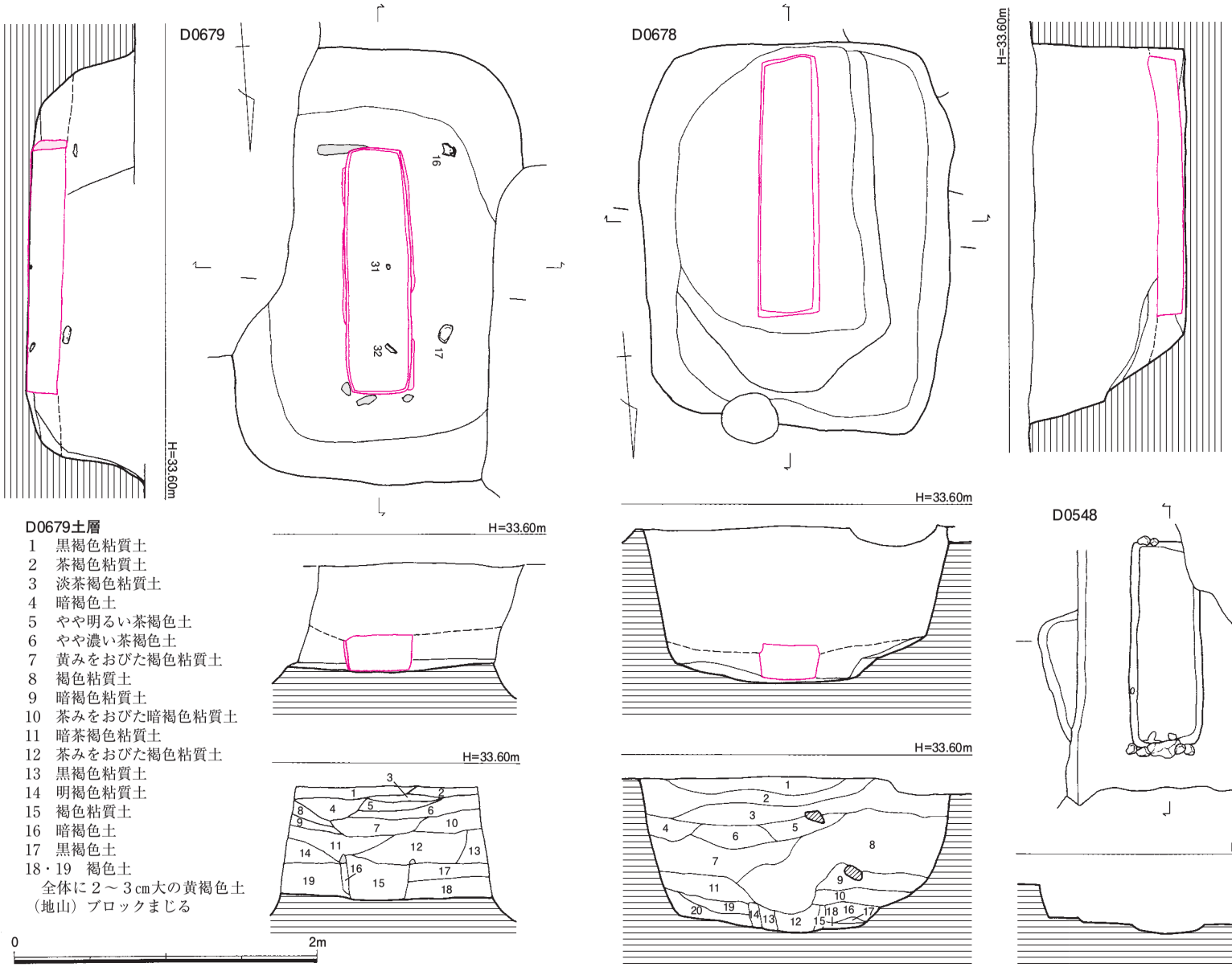
Ｙ－29区。Ｄ0512に南東隅を切られる。墓壙上面は長軸を北北東にとるやや丸みをおびた長方形を呈し、長さ2.65ｍ前後、幅1.47ｍをはかる。墓壙は二段掘りで、検出面から深さ55～60㎝の平坦面の西南寄りに、長さ1.60ｍ、幅0.85ｍの長方形の二段目掘り込みを設ける。この掘り込みは壁面が緩やかで、墓壙底は長さ1.20ｍ、幅0.25ｍの狭小なものとなる。墓壙底までの深さは検出面から105㎝となる。土層からみても土壙墓と考えられる。厚い底部の甕細片などが若干出土した。

D 0548 木棺墓（第13図、図版8）

Ｙ－27区。Ｋ0079（ＫⅡａ式）、Ｋ0080などに切られ、墓壙上面は西側の一部がかろうじて残存する状態であった。検出面から深さ25㎝の墓壙底で、長軸を南北にとる長方形掘り込みを確認した。南北小口部には礫が列び、また青色粘土が部分的ではあるが掘方に沿うように出土したことから木棺の痕跡と考えられる。棺の規模は長さ1.33ｍ、幅0.46ｍ、残存する深さは5～15㎝である。出土遺物はない。

D 0678 木棺墓（第13図、図版9）

Ｗ・Ｘ－28・29区。Ｄ0477とＭ0480に西から南にかけての墓壙壁の一部を切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる幅広の隅丸長方形を呈し、長さ2.55ｍ、幅2.05ｍをはかる。墓壙は変則的な二段掘りで、北から西側壁下の深さ50～70㎝部分で、最大幅0.30ｍの内側にやや傾斜をもつ平坦面をもうける。二段目はその南西部分に掘り下げられ、検出面からの深さ100㎝で、長さ1.87ｍ、幅1.20ｍの不整形の墓壙底をつくる。底面は横断面の中央が深くなる。墓壙内の深さ80㎝前後で木棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.71ｍ、幅0.40ｍの長方形で、墓壙底の中央やや西寄りに埋置したうえで裏込めを行う。残存棺高は18㎝前後で、棺底は南から北にわずかに傾斜する。土層断面からうかがえる側板の厚さは5㎝である。東側でＤ0679を切る。埋土からは断面三角形口縁の甕、厚い上げ底の甕、鋤先状



D0678土層

1　灰みをおびた茶褐色粘質土
2　茶褐色粘質土
3　黒みをおびた茶褐色粘質土
4　赤みをおびた茶褐色粘質土
5　黄みをおびた茶褐色粘質土
6　黒褐色粘質土
7　褐色粘質土
8　黒褐色粘質土
（下部黄褐色土ブロック多い）
9　暗褐色粘質土
10　褐色粘質土
11　淡褐色粘質土
12　明褐色粘質土
13　灰黒色粘質土（粘性強い）
14・15　暗褐色粘質土
16　黒褐色粘質土
17　茶みをおびた淡褐色土
18・19　褐色粘質土
20　黄みをおびた褐色粘質土
1～13層に2～3㎝大の黄褐色土ブロックまじる

D0679土層

1　黒褐色粘質土
2　茶褐色粘質土
3　淡茶褐色粘質土
4　暗褐色土
5　やや明るい茶褐色土
6　やや濃い茶褐色土
7　黄みをおびた褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　暗褐色粘質土
10　茶みをおびた暗褐色粘質土
11　暗茶褐色粘質土
12　茶みをおびた褐色粘質土
13　黒褐色粘質土
14　明褐色粘質土
15　褐色粘質土
16　暗褐色土
17　黒褐色土
18・19　褐色土
全体に2～3㎝大の黄褐色土（地山）ブロックまじる

第13図　D0548・0678・0679実測図（縮尺1/40）

口縁の壺などの小～細片が出土した。

D 0679 木棺墓（第13図、図版9）

X－28・29区。東墓壙壁をD 0680に、西墓壙壁をD 0678に破壊される。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる比較的端正な隅丸長方形を呈し、長さ2.86ｍ、復元幅は1.9ｍをはかる。墓壙壁は比較的緩やかに傾斜し、検出面から深さ76㎝で横断面の中央が深くなった墓壙底となる。墓壙内の深さ50㎝前後で粘土などの木棺痕跡を確認した。棺は長さ1.61ｍ、幅0.43ｍの長方形をなし、墓壙底のほぼ中央に埋置したうえで裏込めを行う。棺底は平坦で、棺の残存は25㎝前後である。棺東西両側壁の上面縁に3㎝前後の幅で粘土が断続的にめぐっており、側板の厚みの痕跡とみられる。また土層図からみれば、小口板が側板よりやや厚みをもっていることがうかがわれる。棺底の北寄りと中央および棺内埋土からあわわせて4点の石剣片が出土した。

出土遺物（第21図16・17、第22図29～32）　16は厚みのある上げ底の甕底部。外面は胴下半まで刷毛目、底部は指押さえ、また内面はヘラナデで調整する。全体に雑なつくりで底面は楕円形状を呈する。17は胴部に二条の低い三角突帯をめぐらす甕で、突帯上にはヘラによる刻み目をともに施す。二段目突帯下には縦の刷毛目調整をおこなう。29～32はそれぞれ別個体の石剣片である。29・30は切先片で、29が残存長1.5㎝、幅1.2㎝、厚さ0.35㎝、30が残存長2.6㎝、幅2.6㎝、厚さ0.5㎝をはかる。31・32は切先を欠いた剣身上部片で、31が残存長3.7㎝、幅2.7㎝、厚さ0.8㎝、32が残存長9.8㎝、幅3.3㎝、厚さ1.0㎝をはかる。32の表面には鎬と直交する研ぎの痕跡が認められる。いずれも粘板岩製とみられる。31と34が棺底近くから、他は棺内覆土から出土した。

D 0680 木棺墓（第14図、図版9）

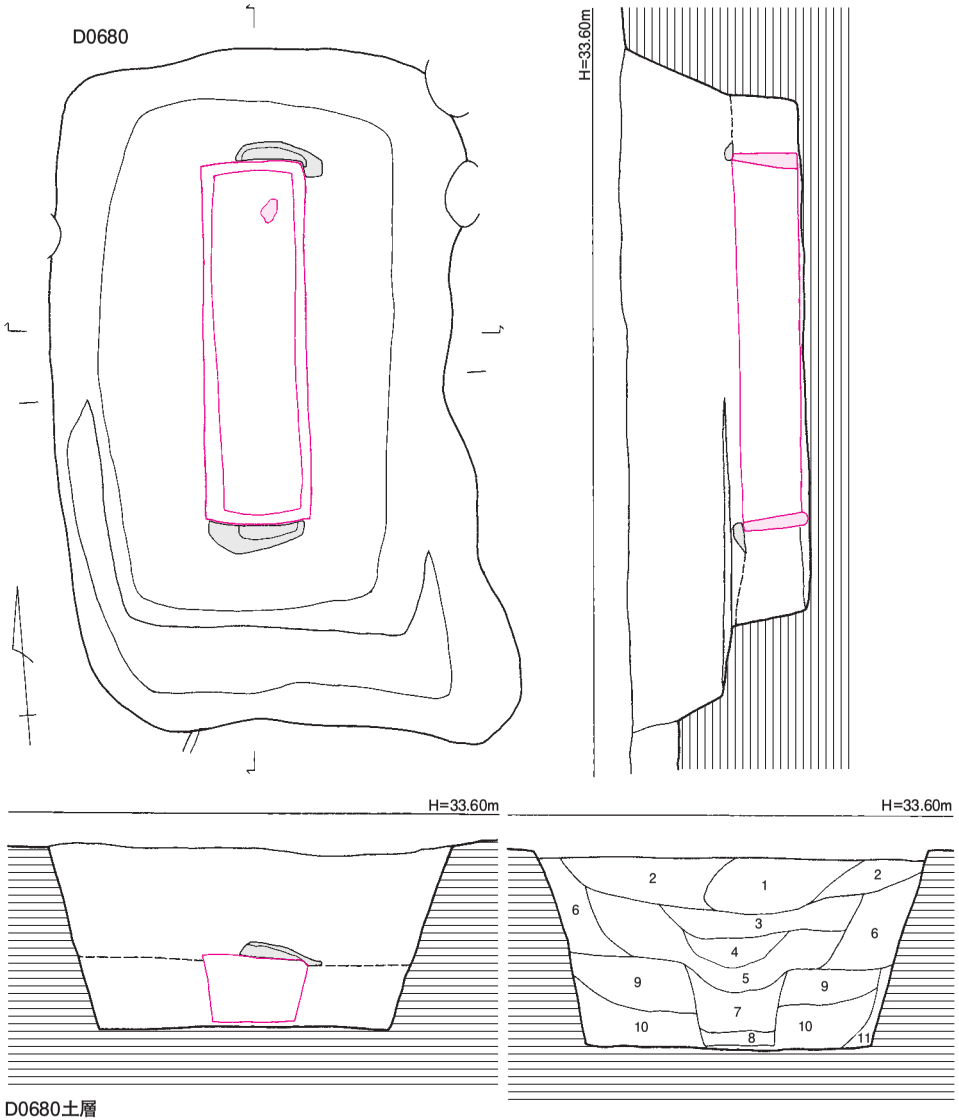
X－28・29区。南東墓壙隅をK 0151（KⅠc式）に切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる長方形状を呈し、長さ3.65ｍ、幅2.48（中央で2.22）ｍをはかる。墓壙は変則的な二段掘りで、南側壁下の深さ55㎝前後部分で、最大幅0.37ｍの平坦面を鉤状にもうけ、そこから北に向かってさらに掘り下げ、長さ2.70ｍ、幅1.55ｍの長方形で平坦な墓壙底をつくる。検出面から墓壙底までの深さは100㎝。墓壙内の深さ60㎝前後、一段目の平坦面からわずかに下がったところで粘土などによる木棺痕跡を確認した。棺は長さ1.90ｍ、幅0.55ｍの長方形をなし、墓壙底の中央に埋置したうえで裏込めを行う。底面は平坦で、高さは35㎝。両小口部の棺上面縁に、幅10～15㎝、厚さ5～7㎝の粘土帯があり、棺蓋の目張りとみられる。土層図からみれば、小口板の厚みは最大8㎝ほどである。棺底北寄りの7×4㎝の範囲で赤色顔料を検出した。西側でD 0679を切り、またほぼD 2242の上部に重複して築かれる。埋土からは断面三角形で口唇に刻目のある口縁をもつ甕、厚い上げ底の甕などに小～細片が出土した。

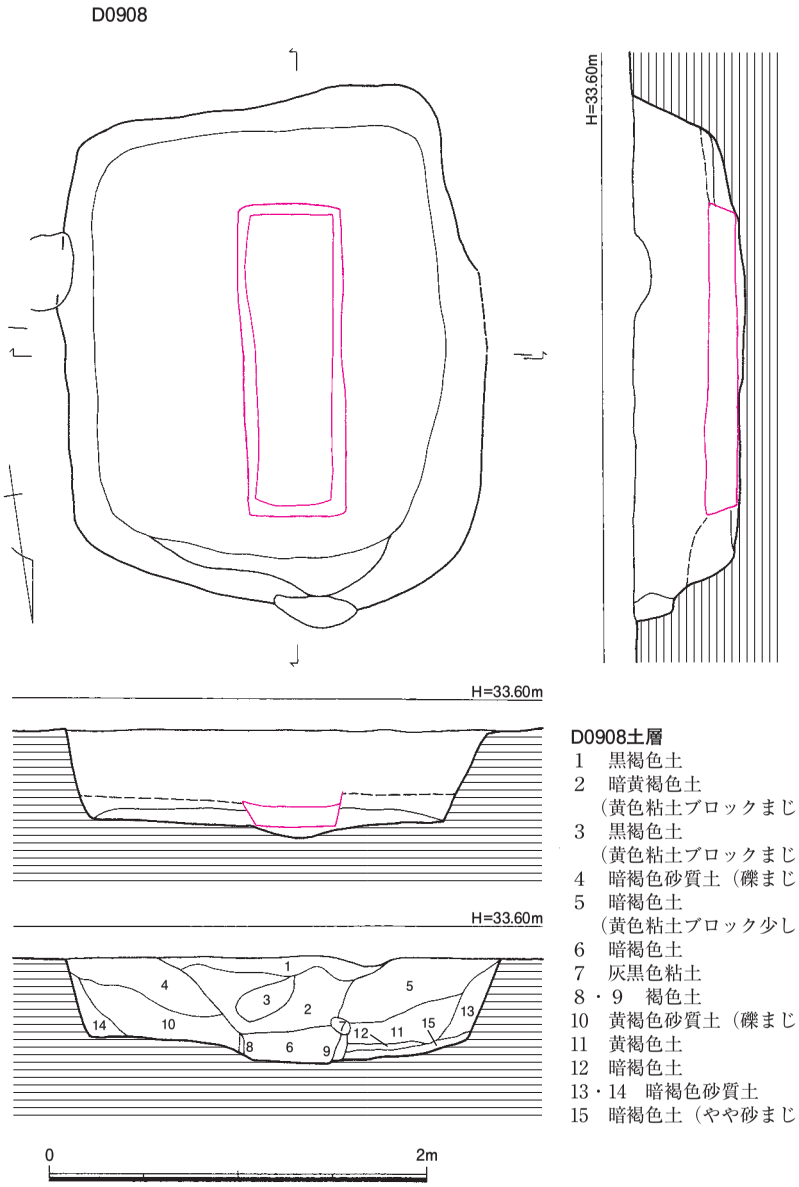
D 0903 土壙墓（第15図、図版9）

X－30区。墓壙上面は北北東に長軸をとる北側が丸みをおびた長方形を呈し、長さ2.58ｍ、1.25ｍをはかる。墓壙は片側二段掘りの構造で、深さ33㎝で西側壁下に幅0.5ｍ前後の平坦面をつくり、その東側をさらに一段掘り下げ、長さ2.30ｍ、幅0.54ｍの長方形で平坦な墓壙底をつくる。検出面から墓壙底までの深さは60㎝。二段目の埋土は暗褐色粘質土を主とするが、裏込めの状況はうかがわれない。埋土からは甕の細片が少量出土した。

D 0908 木棺墓（第14図、図版9）

X・Y－30・31区、Ⅲ区の南端部に位置する。南西側墓壙内を中世土坑に切られる。墓壙上面はほぼ南北に長軸をとる北側がやや丸みをおびた長方形状を呈し、長さ2.77ｍ、幅2.22ｍをはかる。墓壙壁の傾斜は比較的緩やかで、北側壁には段がつく。検出面から深さ55㎝で長さ2.26ｍ、幅1.84ｍの平坦な墓壙底となる。墓壙内の深さ35㎝で木棺の痕跡を確認した。棺は墓壙中央やや西寄りに置かれ長





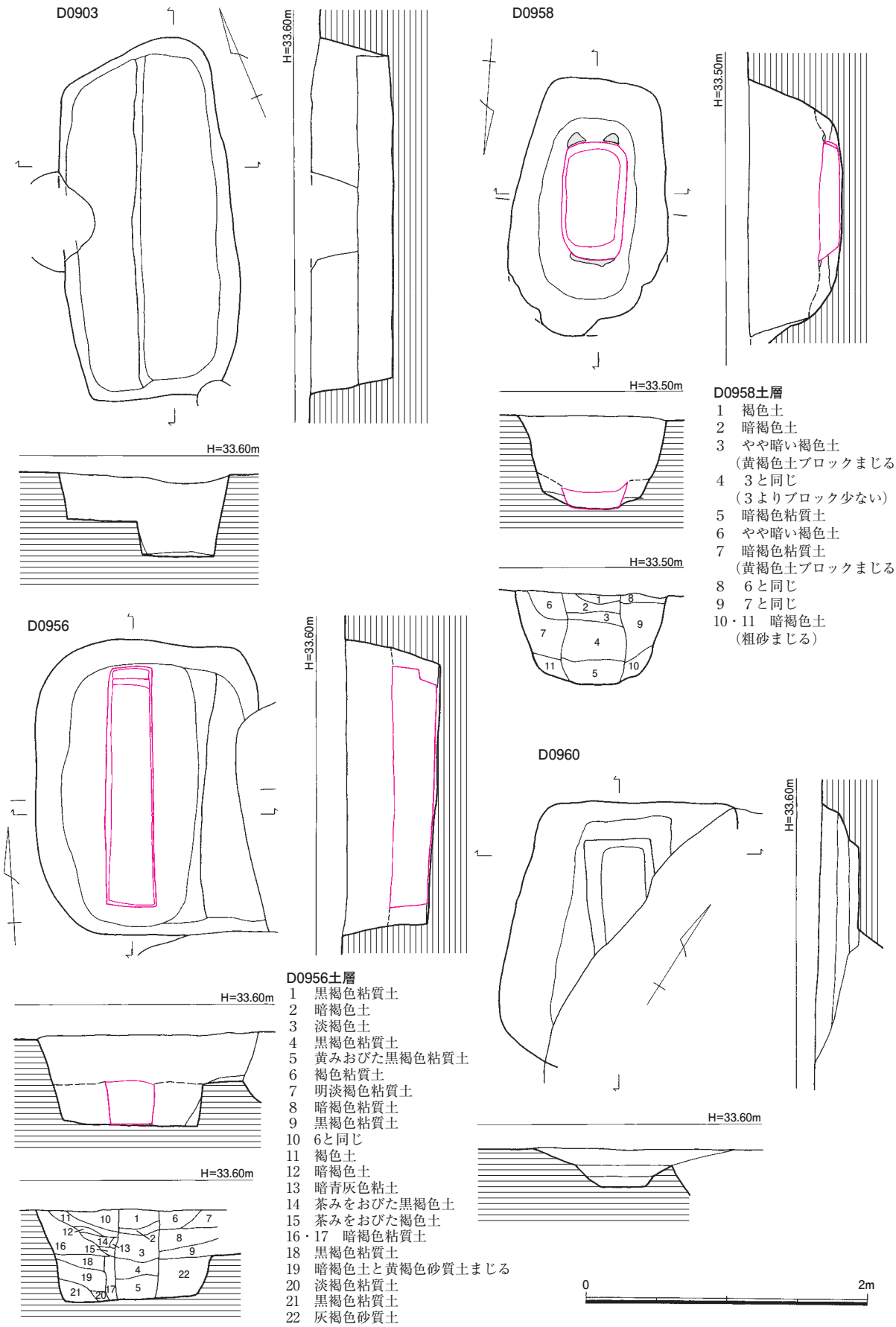
D0680土層

1　黒褐色粘質土
2　褐色粘質土
3　黒褐色粘質土
4　暗褐色粘質土
5　茶みをおびた暗褐色粘質土
6　淡褐色粘質土
7　灰みをおびた暗褐色粘質土
8　褐色粘質土（粗砂まじる）
9　淡褐色粘質土（黄褐色土ブロックまじる）
10　褐色粘質土
11　黒褐色粘質土

D0908土層

1　黒褐色土
2　暗黄褐色土
（黄色粘土ブロックまじる）
3　黒褐色土
（黄色粘土ブロックまじる）
4　暗褐色砂質土（礫まじり）
5　暗褐色土
（黄色粘土ブロック少しまじる）
6　暗褐色土
7　灰黒色粘土
8・9　褐色土
10　黄褐色砂質土（礫まじり）
11　黄褐色土
12　暗褐色土
13・14　暗褐色砂質土
15　暗褐色土（やや砂まじる）

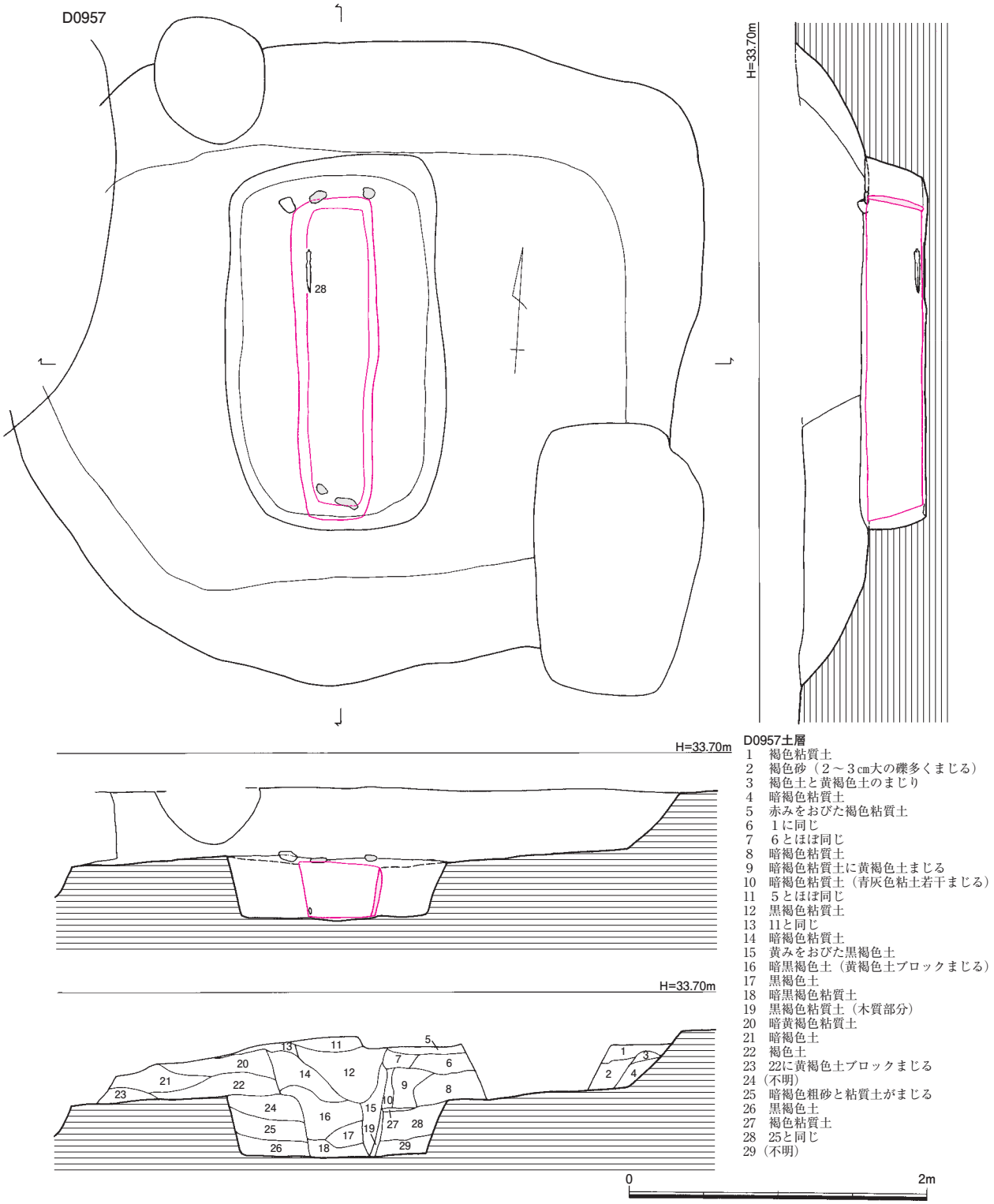
第14図　D0680・0908実測図（縮尺1/40）



D0958土層
1　褐色土
2　暗褐色土
3　やや暗い褐色土
（黄褐色土ブロックまじる）
4　3と同じ
（3よりブロック少ない）
5　暗褐色粘質土
6　やや暗い褐色土
7　暗褐色粘質土
（黄褐色土ブロックまじる）
8　6と同じ
9　7と同じ
10・11　暗褐色土
（粗砂まじる）

D0956土層
1　黒褐色粘質土
2　暗褐色土
3　淡褐色土
4　黒褐色粘質土
5　黄みおびた黒褐色粘質土
6　褐色粘質土
7　明淡褐色粘質土
8　暗褐色粘質土
9　黒褐色粘質土
10　6と同じ
11　褐色土
12　暗褐色土
13　暗青灰色粘土
14　茶みをおびた黒褐色土
15　茶みをおびた褐色土
16・17　暗褐色粘質土
18　黒褐色粘質土
19　暗褐色土と黄褐色砂質土まじる
20　淡褐色粘質土
21　黒褐色粘質土
22　灰褐色砂質土

第15図　D0903・0956・0958・0960実測図（縮尺1/40）



第16図　D0957実測図（縮尺1/40）

さ1.65ｍ、幅0.55ｍの長方形をなし、残存高は20㎝である。埋土からは断面三角形で口唇に刻目のある口縁をもつ甕、厚い上げ底の甕、鋤先状口縁をもつ壺などの小～細片が出土した。

D 0956 木棺墓（第15図、図版10）

Ｘ－27区。東側壁を土坑に切られる。墓壙上面はほぼ南北に長軸をとる隅丸長方形を呈し、長さ2.10ｍ、幅1.5ｍ前後をはかる。墓壙は片側二段掘りの構造で、東側壁下の深さ35㎝に幅0.35ｍの平坦

面を設け、その西側をさらに掘り下げ、長さ1.87ｍ、幅0.97ｍの隅丸長方形の墓壙底をつくる。墓壙底は中央部で検出面から65㎝の深さとなり、北に向かい傾斜する。墓壙内の深さ35㎝前後、ほぼ一段目平坦面と同じ高さで木棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.76ｍ、幅0.34ｍの長方形で、墓壙底の中央北寄りに置かれ、高さは32㎝、底はほぼ平坦である。棺北側小口部に小さな段がつくが、本来的なものであるかは不明。出土遺物はない。

D 0957 木棺墓（第16図、図版10）

Ｘ－29区、Ⅲ区のほぼ中央に位置する。墓壙の南東隅をＤ0958が、北西隅から西にかけてをＫ0074・Ｋ0151（ＫＩｃ式）、Ｋ0159および0504古墳主体部が切る。墓壙上面は南北4.29ｍ、東西は4.5ｍ以上のやや東西に長い隅丸正方形状を呈する。墓壙は二段掘りの構造で、検出面から深さ30㎝前後で東西両側が広い平坦面をつくり、その中央北寄りにほぼ南北に長軸をとる長さ2.50ｍ、幅1.45ｍ、深さ43㎝の長方形の掘り込みをもうける。墓壙底は平坦である。この掘り込みの上面付近で木棺の痕跡を確認した。棺は長さ2.15ｍ、幅0.56ｍの長方形で、墓壙底の中央南寄りにほぼ南北に置かれ、高さ42㎝、棺底は平坦である。棺上面付近には粘土塊や小石が部分的にみられる。棺内西側壁下の北寄りに銅剣一口が鋒を南に、刃を上下に向けた状態で副葬されていた。

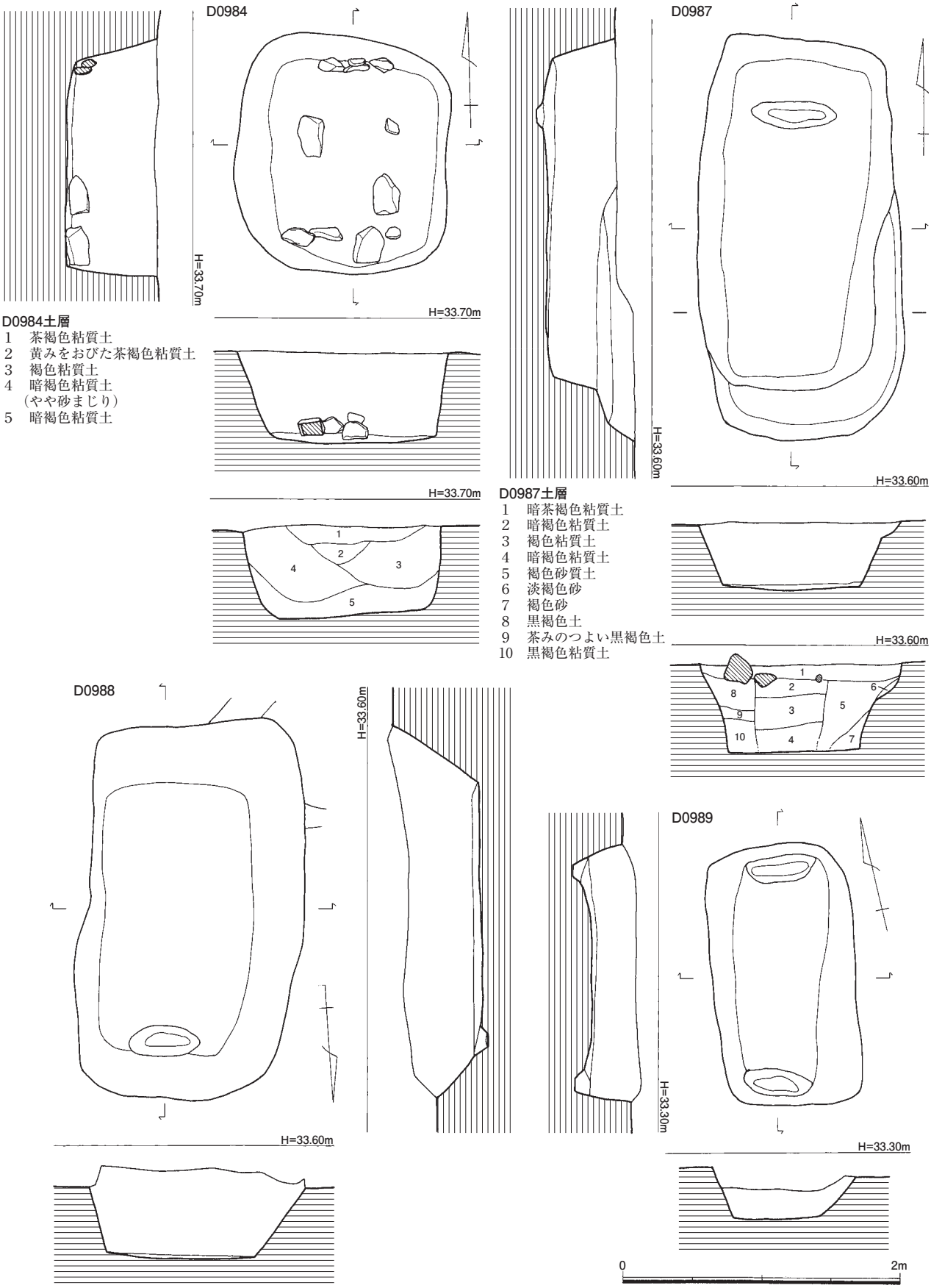
出土遺物（第21図18～27、第22図28）　18～25は甕。18～20は如意形口縁を、21～23は断面三角形の口縁をもつ。外面は刷毛目調整、内面はナデをおこなうが、20・21の外面は指押さえとナデで仕上げている。24・25は外に張った厚みのある底部で、外底中央がわずかにくぼむ。ともに外面は縦刷毛目調整で、内底には炭化物が付着する。26は外反する口縁が折り返したように厚みをもち、上面が平坦となる壺。全体に磨滅する。27は上げ底の壺底部片。外面は横ナデ、内面は指押さえの上からヘラナデをおこなう。外底から胴にかけて黒班がある。19・20・21が二段目墓壙内から、ほかは一段目墓壙から出土した。28は棺底から出土した細形銅剣である。切先を欠き、切先近くと関を中心に刃の欠損部分も多い。また剣身上と関・茎部分には錆膨れが顕著である。脊は関まで研ぎ出し、上節帯は断面山形、下節帯は段状を呈する。茎には甲張落しの稜線が残る。錆で不明なところもあるが、少なくとも節帯付近は刃と脊が同一面にならず、わずかな笵ズレがあるとみられる。残存全長29.7㎝、剣身長26.6㎝、最大幅は下節帯にあり3.3㎝、関は欠損するが約2.5㎝幅とみられる。細形銅剣ⅡＢｂ式に相当する。

D 0958 木棺墓（第15図、図版10）

Ｘ－29区。墓壙北側を中世以降の遺構で破壊される。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる長さ1.83ｍ、幅1.13ｍの北側が広がった隅丸長方形状を呈する。墓壙壁の傾斜は緩やかで、検出面から深さ63㎝で東西断面中央部が深い墓壙底となる。土層では検出面から木棺への落ち込み跡がみられるが、棺を平面的に確認できたのは深さ55㎝前後である。棺は長さ0.85ｍ、幅0.45ｍの隅丸長方形をなし、墓壙底の南西側に埋置したうえで裏込めを行う。木棺検出面で両小口部にそれぞれ薄い粘土を確認したが、棺底からそこまでは15㎝の高さしかなく、棺蓋の目張りとは考えにくい。Ｄ0957の南東隅墓壙を切って作られた木棺墓である。埋土から甕の細片が若干出土した。

D 0960 土壙墓（第15図）

Ｙ－29区。墓壙東側部分を攪乱坑で大きく破壊され、詳細については不明なところが多い。墓壙上面は北西に長軸をとる南側が膨らんだ幅広の長方形を呈し、西壁で1.82ｍ、北壁で1.32ｍが残存する。墓壙は深さ13㎝前後でいったん段が付き、その中央に幅0.48ｍ、残存長0.75ｍの平坦な長方形の掘り込みをつくる。検出面から墓壙底までの深さは26㎝をはかる。Ｋ0065（ＫＩｃ式）と切り合う。埋土から断面三角形口縁の甕が若干出土した。



第17図　D0984・0987・0988・0989実測図（縮尺1/40）

D 0984 木棺墓（第17図、図版10）

X－28区。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる隅丸方形状を呈し、長さ1.76 m、幅1.52 mと南北がやや長い。墓壙壁は東から西側が直に近く、ほかは緩やかである。検出面から深さ64㎝でほぼ平坦な墓壙底となる。この底面の南北両壁下とこれを結ぶ中央に面を内側にそろえた礫がみられ、木棺の固定に用いられたものと考えられる。土層では裏込めなどの状況は確認できなかったが、礫の配置からみて棺は外法で長さ1.10 m、幅0.35 m前後の規模とみられる。墓壙南側がD 2236を切る。埋土から小さな逆L字状口縁の甕片などが少量出土した。

D 0987 木棺墓（第17図、図版11）

X－27区。墓壙上面は長軸を南北にとる隅丸長方形状を呈し、長さ2.92 m、幅1.45 mをはかる。墓壙は変則的な二段掘りで、南から東側壁下の中央までの深さ28㎝前後に最大幅25㎝の平坦面をつくり、他の部分は検出面から深さ50㎝の墓壙底までいっきに掘り下げる。平坦面には礫が点在する。北側壁下から0.3 m離れた底面中央に長さ0.60 m、幅0.20 m、深さ5㎝の溝状掘込みがあり、木棺の北側小口板の掘り方跡とみられる。南側壁下には溝状遺構はない。土層図に示したように、墓壙内の深さ10㎝あたりから幅0.50 m前後の木棺の痕跡を認めたが、木質や粘土などの残存がなく、平面的にはその形態を追うことができなかった。以上の状況からこの墓は、北側に寄った墓壙底に幅0.50 m前後、高さ40㎝前後、長さは1.80 mを越えない木棺を埋置したものとみられる。出土遺物はない。

D 0988 木棺墓（第17図、図版11）

X－27区。D 0987の西側に接するように列ぶ。墓壙上面は多少出入りがあるものの長方形に近く、長軸は北からやや東にふれる。長さ2.74 m、幅1.61 m。西および南側壁がほかの二壁より傾斜が緩やかで、長さ1.97 m、幅1.08 mの墓壙底は上面からみて北東側に寄る。底面は東西両側壁から中央に向かいやや深くなり、検出面からの深さは65㎝をはかる。北側壁下の底面中央に長さ0.50 m、幅0.22 m、深さ10㎝の溝状掘込みがあり、木棺の北側小口板の掘り方跡とみられる。南側壁下に同様な掘り込みは認められない。棺の規模は溝状掘込みの長さと墓壙底長から推し量るしかない。出土遺物はない。

D 0989 木棺墓（第17図、図版11）

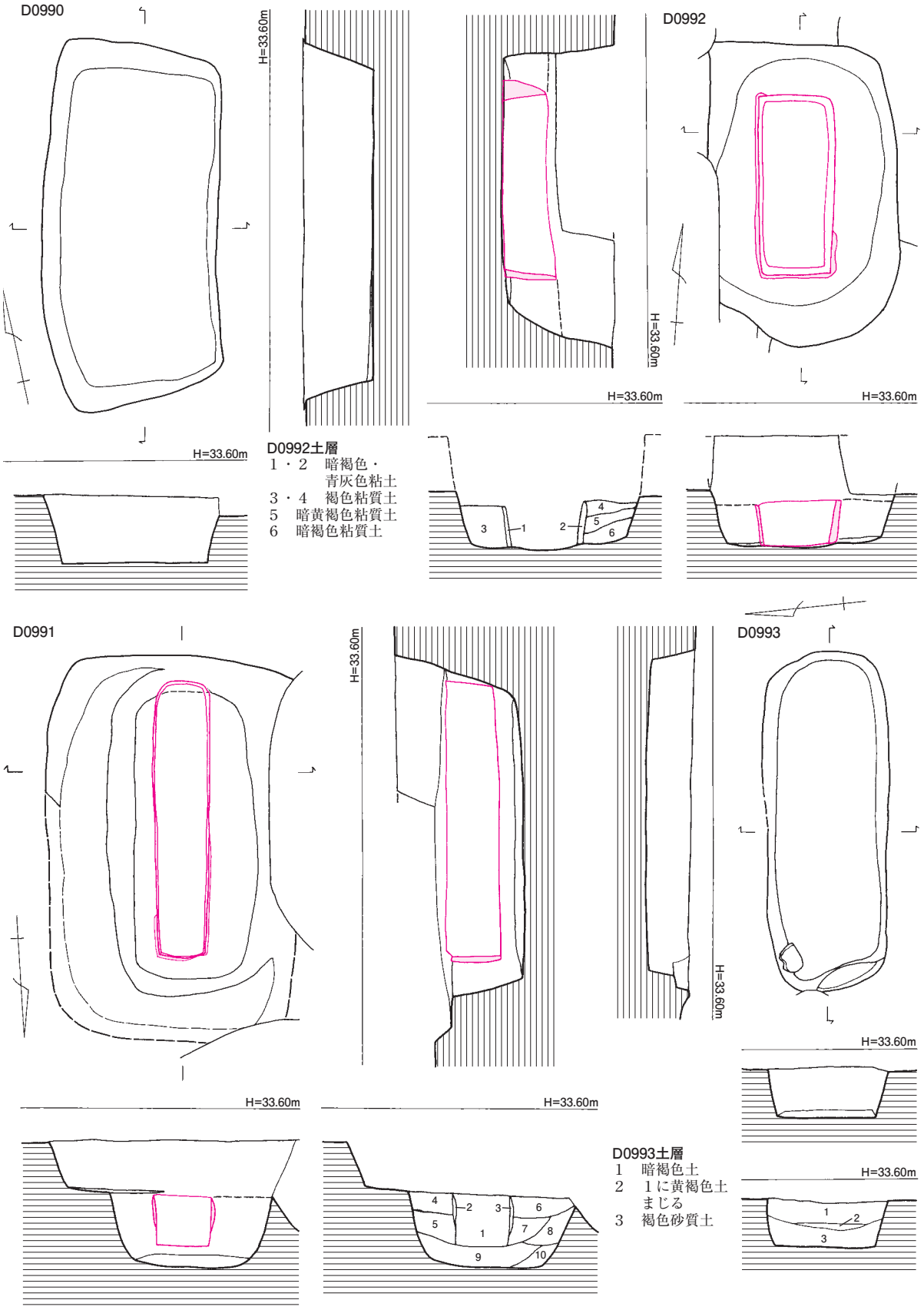
X－27区。D 0988のすぐ北側に列をなして築かれる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる隅がやや丸みをおびた長方形を呈し、長さ1.90 m、幅1.04 mをはかる。検出面から墓壙底までの深さは38㎝で、底面は南北両側から中央に向かい盛りあがり気味となる。南北両側壁下に向かい合ってそれぞれ長さ0.50m、幅0.19 m、深さ12㎝の溝状掘込みがあり、木棺の小口板の掘り方跡とみられる。棺の規模は長さ1.45 m、幅0.5 m前後と想定できる。出土遺物はない。

D 0990 土壙墓（第18図、図版11）

X・Y－26区。墓壙は北北東に長軸をとり、東側壁が西側壁に比べ短い長方形状を呈する。西側の長さ2.56 m、幅は1.21 mをはかる。検出面から深さ48㎝で上面形態とほぼ同じで、平坦な墓壙底となる。木棺の痕跡などは確認できなかった。小さな逆L字状口縁甕片などが少量出土した。

D 0991 木棺墓（第18図、図版11）

X－30区。西側墓壙壁をK 0085・K 0086（KⅡb式）に切られ、D 0992を北東側で切る。これらの切り合い関係で墓壙上面の西側から北側が不明瞭となったが、墓壙はほぼ南北に長軸をとる長方形とみられ、長さ2.65 m前後、幅1.70 m前後をはかる。墓壙は変則的な二段掘りの構造で、北から東側壁下の深さ30㎝前後に平坦面をつくり、東南側に寄ってさらに一段掘り下げる。墓壙底は横断面が丸くくぼみ、検出面からの深さは86㎝となる。この二段目のやや下がった面から木棺の痕跡を確認した。とくに北半部には粘土に置き換わった棺材部分が明確であった。棺は長さ2.02 m、幅0.38 mの小口部がや



第18図　D0990・0991・0992・0993実測図（縮尺1/40）

や丸みをもった長方形を呈し、墓壙底中央の南側壁に接して置かれる。高さは35㎝で、棺断面は方形状に近く、また平坦な棺底は墓壙底より15㎝ほど高い。北小口板の厚さは4㎝前後である。埋土から断面三角形口縁の甕などの小～細片が少量出土した。

D 0992 木棺墓（第18図、図版11）

X－30区。南西側墓壙壁をD 0991とK 0084（KⅠc式）に破壊される。北東側はD 0469を切っているが、D 0469を40㎝ほど掘り下げて切り合い関係が確認できたため、その部分の墓壙壁が失われた。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる南側が丸みをおびた長方形状を呈し、長さ2.08ｍ、幅1.32ｍをはかる。墓壙壁は北から東にかけてが直に近く、検出面から深さ76㎝で楕円形状のほぼ平坦な墓壙底となる。墓壙内の深さ40㎝前後で木棺の痕跡を確認した。棺は長さ1.23ｍ、幅0.54ｍの長方形をなし、墓壙底の中央に埋置したうえで裏込めを行う。棺の高さは37㎝、底面はほぼ平坦である。東側板の南側から南側小口、西側板にかけて棺上面縁に幅3㎝で粘土が連続的にみられる。棺の厚みが置き換わったものであろう。土層図からみた北側小口板下端の厚みは15㎝、両側板は5㎝前後である。埋土から甕片などが若干出土した。

D 0993 土壙墓（第18図、図版11）

X－28・29区。墓壙は東西に長軸をとる隅丸長方形を呈し、長さ2.33ｍ、幅0.82ｍをはかる。西側壁下の深さ10㎝に幅12㎝の段をもうける。検出面から33㎝で縦断面の中央付近がやや深くなった墓壙底となる。この墓地の木棺・土壙墓とは長軸方位が異なる。出土遺物はない。

D 0994 土壙墓（第19図、図版12）

X・Y－28・29区。南側墓壙壁の一部を中世以降の土坑に破壊される。墓壙は長軸をほぼ南北にとる北東隅がやや突出した長方形に近く、長さ2.38ｍ、幅1.57ｍをはかる。墓壙壁は北および東側が緩やかに傾斜し、ほかの二壁は直立気味となる。検出面からの深さは31㎝で平坦な墓壙底となる。墓壙幅は広いが、木棺の痕跡は確認できなかった。出土遺物はない。

D 0996 木棺墓（第19図、図版12）

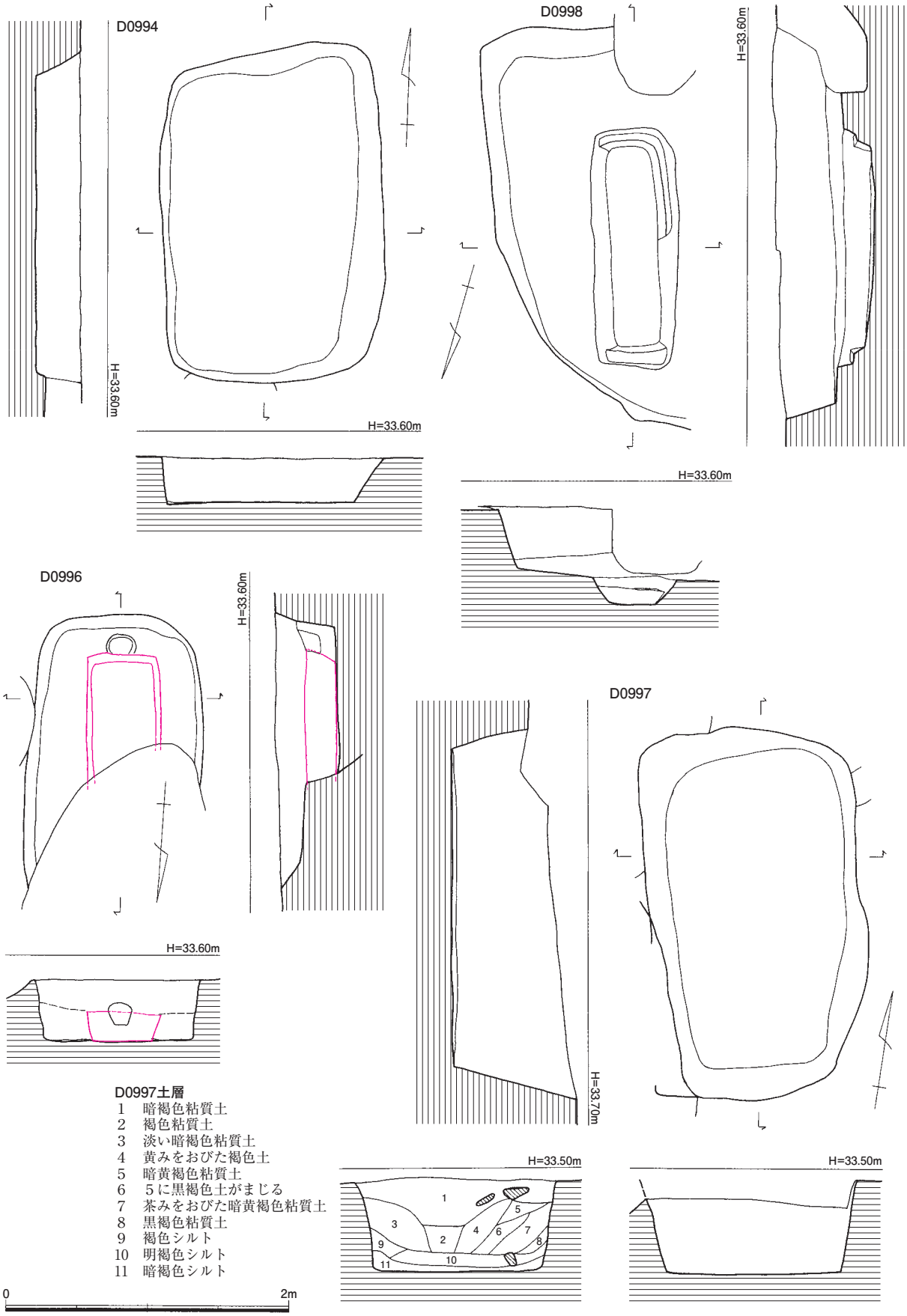
X－29区。北側をK 0067に切られ、南半部のみが残存する。墓壙上面はほぼ南北に長軸をとる隅丸長方形とみられ、残存長1.95ｍ、幅1.24ｍをはかる。墓壙壁は垂直に近く、検出面から深さ45㎝前後でほぼ平坦な墓壙底となる。墓壙内の深さ20㎝前後で木棺の痕跡を確認した。棺は幅53㎝の長方形状を呈し、墓壙底のやや西寄りに埋置する。高さは25㎝で、底面はほぼ平坦である。南側小口部は後世のピットに切られる。埋土から甕の細片が若干出土した。

D 0997 土壙墓（第19図）

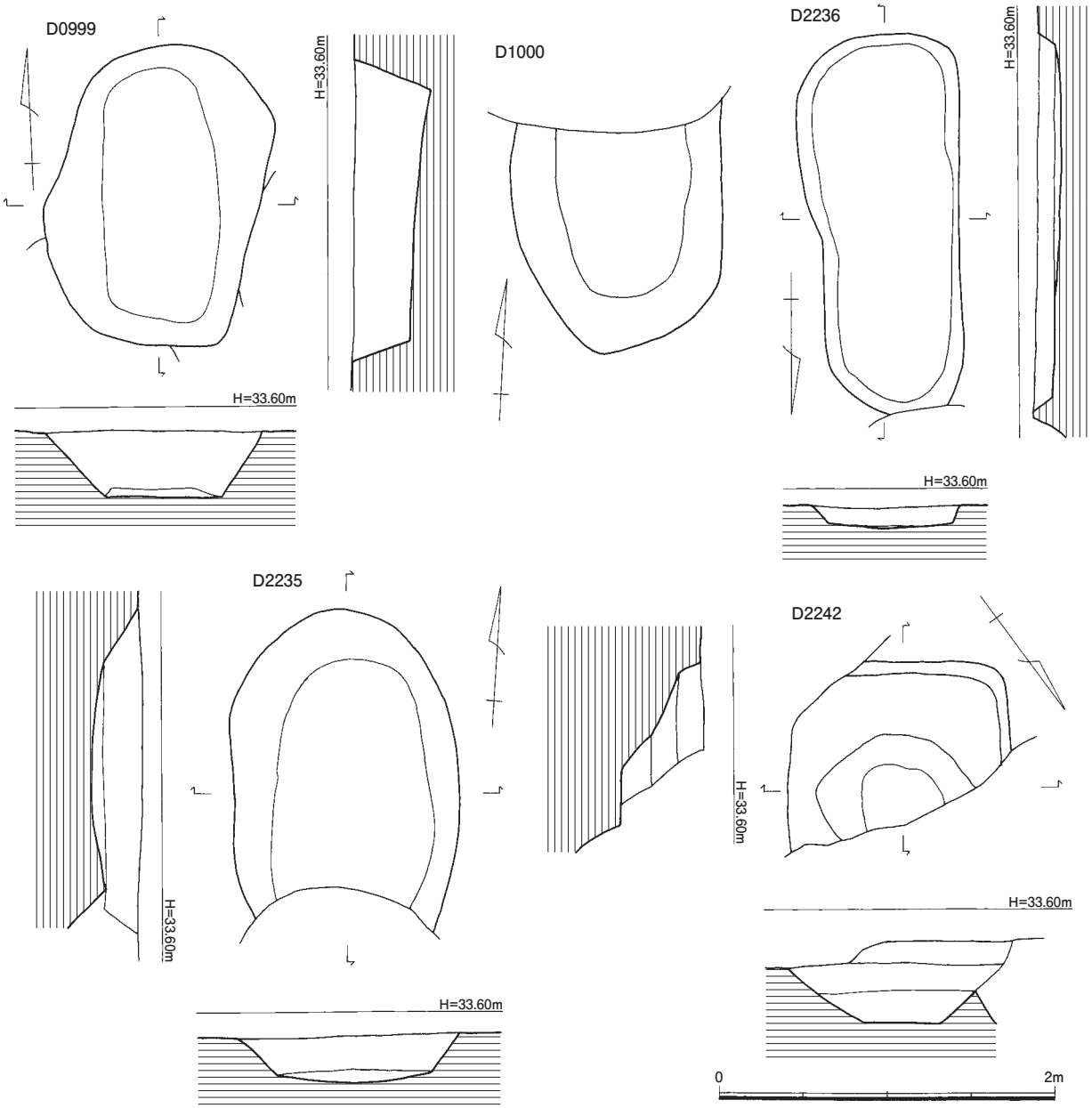
Y－27区。西側墓壙壁をK 0079（KⅡa式）、K 0080に切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる長さ2.64ｍ、幅1.50ｍの長方形を呈する。墓壙壁は比較的急で、検出面から80㎝前後で平坦な墓壙底となる。墓壙幅は広いが、木棺の痕跡は確認できず、土層でも裏込めの状況は明確でない。大形甕などの小～細片が少量出土した。

D 0998 土壙墓（第19図）

Y－32区、南区画の外に位置し、墓壙北側がM 0700を切る。西側でK 0050（KⅢc式）、南側でK 0168（KⅢa式）と切り合うが、先後関係は不明である。墓壙上面は確認できた東側部分で見る限り南側壁が直線で、北側に向かいすぼむ三角形状となる。南北長は2.75ｍ前後。墓壙は二段掘りの構造で、検出面から深さ45㎝前後で平坦面をつくり、その北東寄りに長さ1.70ｍ、幅0.66ｍの長軸を北北西にとる長方形の二段目を掘り込む。一段目平坦部から底面までの深さは20㎝をはかる。二段目北側壁下と南から西側壁下にかけて深さ10㎝前後に幅5～9㎝の小さな段をつくる。木棺墓の可能性も考え深



第19図　D0994・0996・0997・0998実測図（縮尺1/40）



第20図　D0999・1000・2235・2236・2242実測図（縮尺1/40）

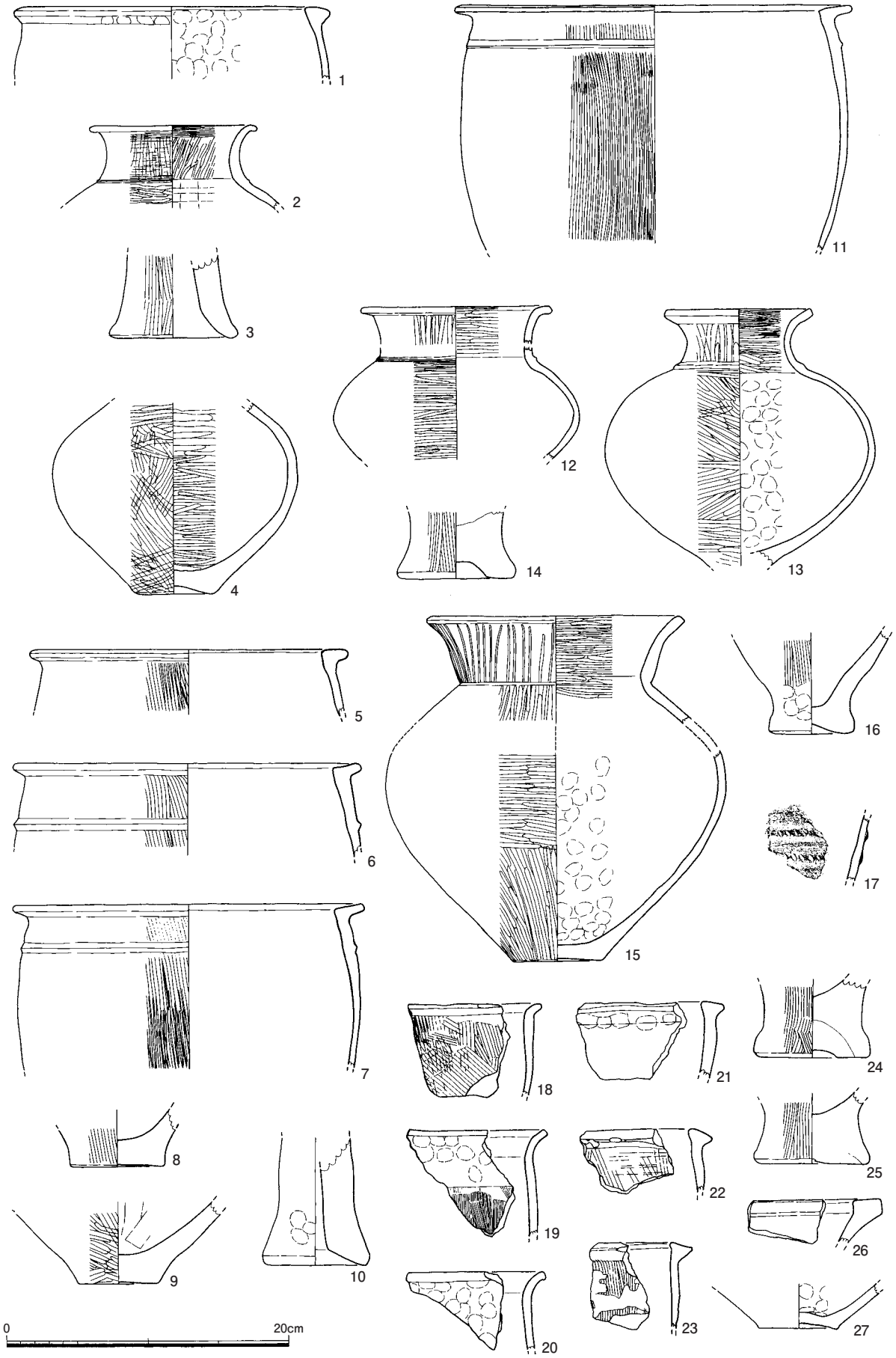
掘りを行ったが、裏込めなどは認められなかった。甕・壺の細片が若干出土した。

D 0999 土壙墓（第20図）

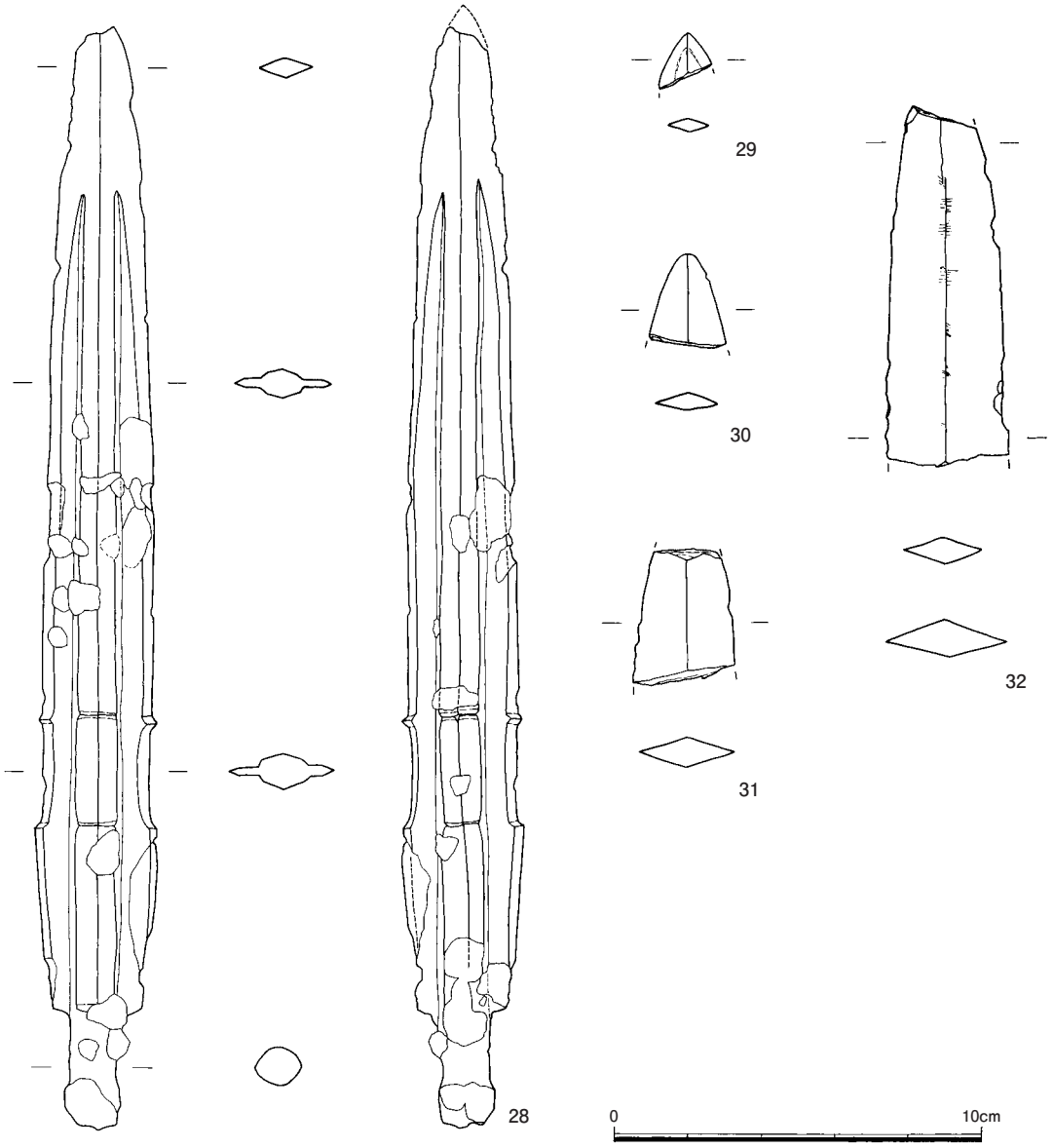
X－28区。西南隅墓壙壁上面を攪乱で切られる。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形に近いが、北東および南西部分がやや膨らむ。長さ1.78ｍ、最大幅1.38ｍをはかる。東西墓壙壁は緩やかに傾斜し、墓壙底は北側で検出面からの深さ34㎝、南側で45㎝と北から南に傾斜する。埋土は暗褐色粘質土。K 0076（KⅠc式）と西側で接するが、先後関係は不明。埋土から甕の細片が若干出土した。

D 1000 土壙墓（第20図）

Y―27区。北側をK 0079（KⅡa式）に破壊され、南半部が残る。墓壙上面は長軸をほぼ南北にとる隅丸長方形状で、幅は1.26ｍをはかる。底面までの深さはレベルの記載漏れで不明。埋土は暗黒色土。埋土から小さな逆Ｌ字状口縁の甕などが若干出土した。



第21図　木棺墓・土壙墓出土遺物１（縮尺1/4）



第22図　木棺墓・土壙墓出土遺物２（縮尺1/2）

D 2235 土壙墓（第20図）

Ｘ－27・28区。南側部分をＫ0077（ＫＩｃ式）に破壊される。残存長1.90ｍ、幅1.33ｍの楕円形状の墓壙で、長軸は北からやや東にふれる。墓壙壁の傾斜は緩やかで、墓壙底は中央部がやや深くなり、検出面からの深さは30㎝をはかる。出土遺物はない。

D 2236 土壙墓（第20図）

Ｘ－28区。北側墓壙壁をＤ0984に切られる。長軸を南北にとる隅丸長方形を呈し、長さ2.25ｍ、幅0.97ｍ。深さは14㎝と浅く、底面は横断面がややくぼむ。埋土は黒褐色土。出土遺物はない。

D 2242 土壙墓（第20図）

Ｘ－29区。Ｄ0680、Ｋ0151（ＫＩｃ式）、Ｋ0159により大きく破壊され、南西部の一部が残るにすぎない。墓壙上面は長軸を西北にとる長方形とみられるが、規模等については不明。墓壙は二段掘りの構造で、深さ16㎝前後の一段目は二段目に向かい傾斜する。二段目上面は丸みをおびる。検出面から墓壙底までの深さは50㎝前後、残存する底面は平坦である。出土遺物はない。

番　号	種　類	位　置	区	主軸方位	墓壙形態	墓壙規模（長×幅×深 m）	棺規模(m)	備　考
D0444	土壙墓	Y − 32	Ⅳ	N − 28.5° − W	二段	1.70 × 1.15 × 0.59		
D0448	木棺墓	Y − 30	Ⅲ	N − 3° − W		2.25 × 1.16 × 0.53	1.95 × 0.30 × 0.40	
D0449	木棺墓	Y − 30	Ⅲ	N − 9° − W		1.83 × 1.44 × 0.60	1.45 × 0.39 × 0.24	
D0463	木棺墓	Y − 27	Ⅱ	N − 1° − E	片側二段	2.53 × 1.22 × 0.66		供献壺
D0464	土壙墓	X・Y − 27	Ⅱ	N − 3.5° − W	片側二段	2.96 × 2.90 × 0.50		
D0465	木棺墓	X − 29	Ⅲ	N		1.54 × 0.98 × 0.28	1.4 × 0.6 × ?	
D0466	木棺墓	X・Y − 26	Ⅱ	N − 12° − E		2.13 × 1.30 × 0.85	1.1 × 0.5 × ?	
D0469	木棺墓	X − 29・30	Ⅲ	N − 4° − E	二段	2.75 × 1.82 × 0.85	1.71 × 0.36 × 0.30	
D0470	土壙墓	Y − 29	Ⅲ	N − 7° − W		2.45 × 1.92 × ?		
D0471	木棺墓	Y − 29	Ⅲ	N − 12.5° − E		2.28 × 1.50 × 0.50	? × 0.65 × ?	
D0472	木棺墓	Y − 28・29	Ⅲ	N − 3° − W		2.68 × 1.78 × 0.80	1.65 × 0.45 × 0.35	
D0473	土壙墓	Y − 29	Ⅲ	N		2.40 × 1.02 × 0.36		供献壺
D0474	木棺墓	Y − 27・28	Ⅱ	N − 0.5° − E		2.25 × 1.01 × 0.38	1.78 × 0.48 × ?	
D0475	木棺墓	X − 28	Ⅱ	N − 2° − E		2.38 × 1.03 × 0.31	1.8 × 0.6 × ?	供献壺
D0477	土壙墓	W − 28	Ⅱ	N − 10.5° − E	二段	2.80 × 1.73 × 0.50		
D0481	木棺墓	X − 29	Ⅲ	N − 3° − W		2.70 × 1.65 × 1.00	2.07 × 0.70 × 0.55	
D0487	木棺墓	W − 29	Ⅲ	N − 9.5° − W		2.70 × 1.85 × 0.80	1.81 × 0.50 × 0.10	
D0488	土壙墓	X − 26	Ⅱ	N − 2.5° − E	二段	2.38 × 1.25 × 0.22		
D0491	木棺墓	Y − 26	Ⅱ	N − 1° − W	片側二段	2.18 × 1.45 × 0.63	1.8 × ? × ?	
D0493	木棺墓	Y − 24・25	Ⅰ	N − 3° − E		2.45 × 1.30 × 0.60	1.70 × 0.50 × 0.30	
D0500	土壙墓	Y − 29	Ⅲ	N		2.42 × 1.25 × 0.52		
D0509	土壙墓	Y − 31	Ⅳ	N − 5° − W		2.19 × 1.10 × 0.58		
D0512	土壙墓	Y − 29	Ⅲ	N − 69.5° − E	二段	1.80 × 1.0 × 0.63		
D0516	土壙墓	Y − 29	Ⅲ	N − 11° − E	二段	2.65 × 1.47 × 1.05		
D0548	木棺墓	Y − 27	Ⅱ	N − 5° − E		不明	1.33 × 0.46 × 0.15	
D0678	木棺墓	W・X − 28・29	Ⅱ	N − 4° − E	変則二段	2.55 × 2.05 × 1.00	1.71 × 0.40 × 0.18	
D0679	木棺墓	X − 28・29	Ⅲ	N − 2.5° − E		2.86 × (1.9) × 0.76	1.61 × 0.43 × 0.25	棺内石剣切先 4
D0680	木棺墓	X − 28・29	Ⅲ	N − 6.5° − E	変則二段	3.65 × 2.48 × 1.00	1.90 × 0.55 × 0.35	
D0903	土壙墓	X − 30	Ⅲ	N − 22.5° − E	片側二段	2.58 × 1.25 × 0.60		
D0908	木棺墓	X・Y − 30・31	Ⅲ	N − 8° − E		2.77 × 2.22 × 0.55	1.65 × 0.55 × 0.20	
D0956	木棺墓	X − 27	Ⅱ	N − 5° − E	片側二段	2.10 × 1.56 × 0.65	1.76 × 0.34 × 0.32	
D0957	木棺墓	X − 29	Ⅲ	N − 4.5° − W	二段	(4.5) × 4.29 × 0.80	2.15 × 0.56 × 0.42	銅剣副葬
D0958	木棺墓	X − 29	Ⅲ	N − 4.5° − W		1.83 × 1.13 × 0.63	0.85 × 0.45 × 0.15	
D0960	土壙墓	Y − 29	Ⅲ	N − 32° − W		? × ? × 0.26		
D0984	木棺墓	X − 28	Ⅱ	N − 3.5° − E		1.76 × 1.52 × 0.64	1.10 × 0.35 × ?	
D0987	木棺墓	X − 27	Ⅱ	N	変則二段	2.92 × 1.45 × 0.50	(1.8 × 0.5 × 0.4)	
D0988	木棺墓	X − 27	Ⅱ	N − 3.5° − E		2.74 × 1.61 × 0.65		
D0989	木棺墓	X − 27	Ⅱ	N − 14° − E		1.90 × 1.04 × 0.38	1.45 × 0.50 × ?	
D0990	土壙墓	X・Y − 26	Ⅱ	N − 13° − E		2.56 × 1.21 × 0.48		
D0991	木棺墓	X − 30	Ⅲ	N − 4° − E	変則二段	2.65 × 1.70 × 0.86	2.02 × 0.38 × 0.35	
D0992	木棺墓	X − 30	Ⅲ	N − 4° − W		2.08 × 1.32 × 0.76	1.23 × 0.54 × 0.37	
D0993	土壙墓	X − 28・29	Ⅲ	N − 8.5° − W		2.33 × 0.82 × 0.33		
D0994	土壙墓	X − 28・29	Ⅲ	N − 2° − E		2.38 × 1.57 × 0.31		
D0996	木棺墓	X − 29	Ⅲ	N − 5° − W		? × 1.24 × 0.45	? × 0.53 × 0.25	
D0997	土壙墓	Y − 27	Ⅱ	N − 14° − W		2.64 × 1.50 × 0.80		
D0998	土壙墓	Y − 32	Ⅳ	N − 15° − W	二段	2.75 × ? × 0.73		
D0999	土壙墓	X − 28	Ⅱ	N − 2.5° − E		1.78 × 1.38 × 0.34		
D1000	土壙墓	Y − 27	Ⅱ	N − 2.5° − W		? × 0.62 × ?		
D2235	土壙墓	X − 27・28	Ⅱ	N − 3° − W		? × 1.33 × 0.30		
D2236	土壙墓	X − 28	Ⅱ	N		2.25 × 0.97 × 0.14		
D2242	土壙墓	X − 29	Ⅲ	N − 38° − E	二段	? × ? × 0.50		

第４表　８区検出木棺墓・土壙墓一覧

３）甕棺墓

今回の調査において検出した甕棺墓はあわせて149基である。時期的には弥生時代前期末～後期初頭にわたり、土壙墓・木棺墓51基と合わせて200基を確認している。後世の撹乱・削平等で失われたものを除いて、埋葬遺構群のほぼ全域を調査しており、埋葬遺構の形成過程を知る上で極めて良好な調査結果を提供している。

埋葬遺構は溝・土坑により限定された区画によって、更に小単位の区画墓域として捉えることが可能である。区画溝・土坑は埋葬遺構群の東側を明確に区切っており、そこから墓域を間仕切るように東西方向に溝が延びている。以上の溝・土坑により墓域は大きく4区画として捉えることができ、北側からⅠ～Ⅳ区と呼称する。この中でⅢ区では、東側に断続的に土坑が掘削されており、これが区画を示すものと捉えられるが、その西側に展開する埋葬遺構群は多くが主軸方位をほぼそろえるものの、密集しており、明確な区画を抽出し得ていない。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区では明らかな区画を捉えることができる。特に北端の北区画墓（Ⅰ区）と南端の南区画墓（Ⅳ区）では甕棺墓を主体とする明瞭な方形区画墓域が認められる。Ⅱ区は三方向を溝で区画し、甕棺墓14基と土壙・木棺墓により構成されているが、区画と埋葬遺構の関係が不明瞭である。更に、これらの区画から明確に外れるものとして、数基の甕棺墓を確認している。また、甕棺墓等の遺構の残存状態は比較的良好であるが、本来は南から北へ緩やかな傾斜を有する沖積地上に立地しているものと考えられ、後世の削平や水田化による地盤の水平化に伴い、より高所であった南側（Ⅳ区）を中心に、遺構の削平が進んでいる。

K0021（第24図、図版12）

Ｙ－31・32区で検出し、Ⅳ区のほぼ中央に位置する。主軸方位をほぼ東西方向にとり、Ⅳ区中央に配される他の甕棺と直交している。調査区南側の遺構に共通していることであるが、中でも本甕棺墓は削平が著しく、下甕胴部の一部が残存するのみである。

出土遺物（第24図33）　胴部中位１／８ほどの破片で、台形突帯を２条貼付する。調整は外面突帯周辺は横ナデで、それ以外はナデを行う。内面もナデを行い、器壁には工具の小口痕跡が残っている。器壁厚は1cm前後で、色調は淡褐色を呈する。

K0022（第24図、図版12）

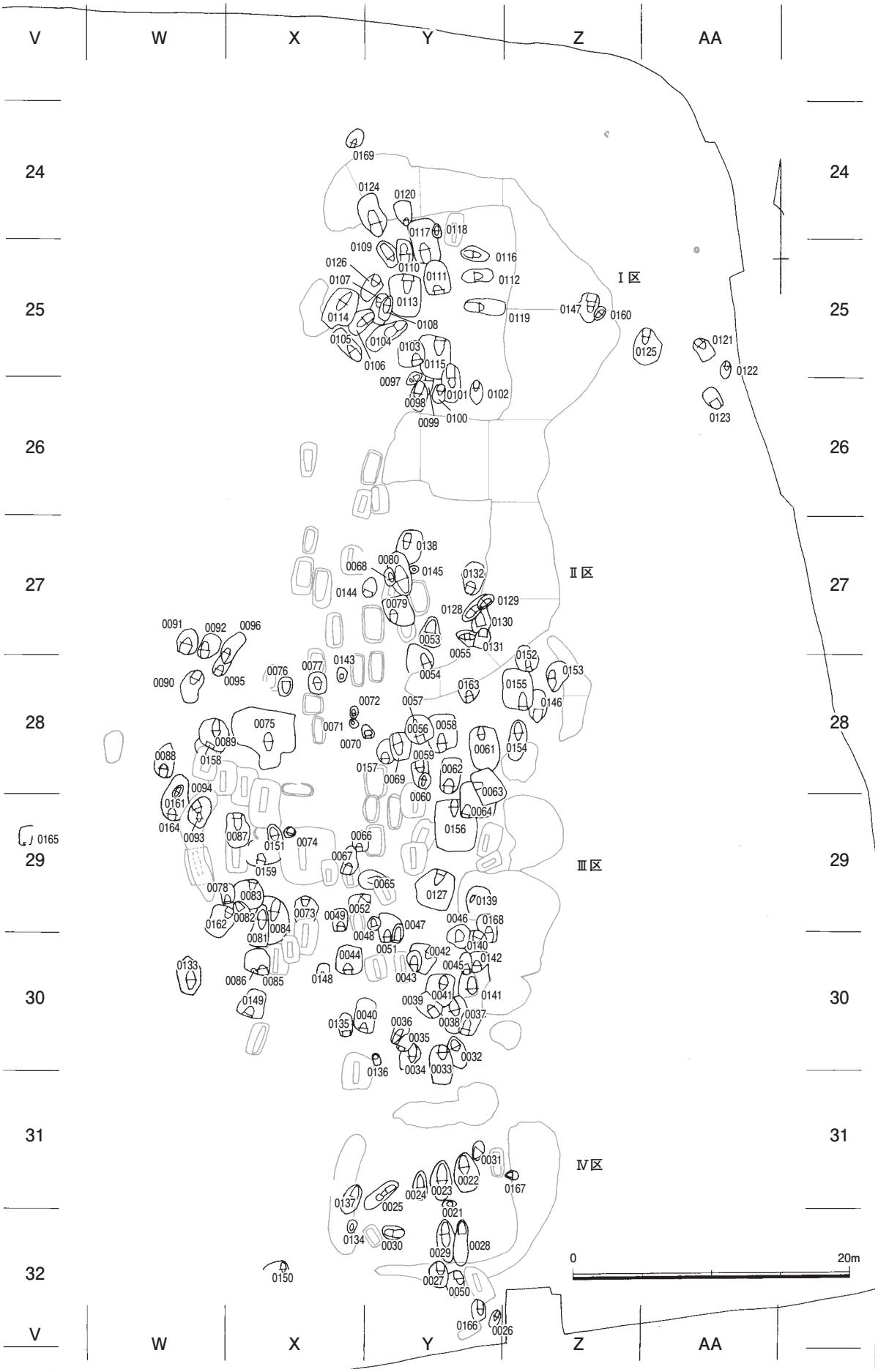
Ｙ－31区で検出し、Ⅳ区中央やや東よりに位置する。主軸方位を南北方向にとり、隣接する同時期のK0023とほぼ並行する位置に配されている。現状で掘り方は長さ2.9ｍ、幅1.6ｍを測るが、削平により南側の挿入孔部分が崩落しているものと考えられる。

出土遺物（第24図34・35、図版37）　34は上甕として使用された鉢である。口縁部は外側がわずかに外傾し、内側にも張り出しを有する。口縁下には２条の三角突帯を有する。内外面ナデ調整を行うが、外面には刷毛目が残されている。35は下甕である。Ｔ字形の口縁部は上面が外傾し、口縁下には１条の三角突帯を有する。胴部上半は直線的に立ち上がり、２条の三角突帯が貼付される。

K0023（第25図、図版12）

Ｙ－31区で検出し、掘り方南辺がⅣ区中央に位置する。区画内での位置及び時期的に先行する点などから、本甕棺墓が北側区画墓の中心的埋葬施設であり、区画墓形成の契機となったものと考えられる。削平によりほぼ水平に埋置された甕棺の上半を失う。掘り方は長軸3m、短軸1.5mを測る。

出土遺物（第25図36・37、図版37）　36は上甕の鉢である。口縁部はＴ字形を呈し、内側に強く張り出す。また、上面は外傾している。突帯は１条の三角形をなし、外面底部付近には縦刷毛が認められる。37は下甕である。Ｔ字形の口縁部は、上面が外傾し、内側に強く張り出している。突帯は口縁部下



第23図　弥生時代墓地遺構分布略図２（縮尺1/400）

遺構番号	位置	区画	上甕	下甕	合せ口	主軸方位	埋置角度	型式	備考
0021	Y－31・32	Ⅳ		甕		N－87°－E	3°	KⅢ b	
0022	Y－31	Ⅳ	鉢	甕	接口	N－7°－W	12°	KⅢ a	
0023	Y－31	Ⅳ	鉢	甕	接口	N－3°－E	0°	KⅢ a	
0024	Y－31	Ⅳ		甕	単	N－4°－W	5°	KⅢ a	
0025	Y－31	Ⅳ	甕・甕・甕		三連	N－54°－E	3°	KⅣ a	
0026	Y－32	外	甕	甕	呑口	N－14°－E	34°	KⅣ a	
0027	Y－32	Ⅳ	甕	甕		N－0°	17°	KⅢc	
0028	Y－32	Ⅳ		甕	単	N－0°	－ 5°	KⅢc	
0029	Y－32	Ⅳ	甕	甕	接口	N－0°	2°	KⅢc	
0030	Y－32	Ⅳ	甕	甕	呑口	N－85°－W	5°	KⅣ a	
0031	Y－31	Ⅳ		甕	単	N－12°－E	9°	KⅢ b	
0032	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	覆口	N－21°－W	30°	KⅡ c	
0033	Y－30・31	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－6°－W	4°	KⅡ c	
0034	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－4°－E	6°	KⅡ c	
0035	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－30°－E	19°	KⅢ a	
0036	Y－30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－32°－E	17°	KⅡ b	
0037	Y－30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－19°－E	17°	KⅡ c	
0038	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－17°－W	0°	KⅡ c	
0039	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－38°－W	30°	KⅡ c	
0040	X・Y－30	Ⅲ	壺	甕	接口	N－3°－E	36°	KⅡ b	
0041	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－16°－E	39°	KⅡ b	
0042	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－37°－E	38°	KⅡ c	
0043	Y－30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－1°－E	27°	KⅡ c	
0044	X－30	Ⅲ	鉢	甕	覆口	N－4°－W	47°	KⅡ c	
0045	Y－30	Ⅲ	甕	甕	呑口	N－1°－E	22°	KⅡ c	
0046	Y－30	Ⅲ	鉢	甕		N－18°－W	28°	KⅡ c	
0047	Y－29・30	Ⅲ	鉢？	甕	接口	N－0°	3°	KⅢ a	
0048	Y－29	Ⅲ		甕		N－9°－E	29°	KⅡ c	
0049	X－29・30	Ⅲ	甕	甕	呑口	N－4°－W	40°	KⅡ c	
0050	Y－32	Ⅳ	甕	甕	呑口	N－11°－W	7°	KⅢ c	
0051	Y－29・30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－5°－W	35°	KⅡ a	
0052	X－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－39°－E	26°	KⅡ a	
0053	Y－27	Ⅱ	鉢	甕	接口	N－8°－E	15°	KⅢ a	
0054	Y－27・28	Ⅱ	甕	甕	接口	N－16°－W	18°	KⅡ b	
0055	Y－27	Ⅱ	甕	甕		N－87°－E	2°	KⅢ a	
0056	Y－28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－23°－W	31°	KⅡ c	
0057	Y－28	Ⅲ	甕	甕		N－15°－W	22°	KⅢ a	
0058	Y－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－4°－E	－ 7°	KⅡ b	
0059	Y－28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－6°－W	24°	KⅡ c	
0060	Y－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－18°－E	20°	KⅢ b	
0061	Y－28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－5°－W	33°	KⅡ b	
0062	Y－28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－6°－E	28°	KⅢ a	
0063	Y－28・29	Ⅲ		甕	単	N－85°－W	－ 48°	KⅡ b	
0064	Y－28・29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－7°－E	28°	KⅡ b	
0065	X・Y－29	Ⅲ	甕	甕	覆口	N－76°－W	34°	KⅠ c	
0066	X－29	Ⅲ	甕	甕	覆口	N－0°	56°	KⅠ c	
0067	X－29	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－14°－E	28°	KⅡ c	
0068	Y－27	Ⅱ	甕	甕	接口	N－19°－W	15°	KⅢ a	
0069	Y－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－15°－W	2°	KⅡ c	
0070	X・Y－28	Ⅲ	鉢	甕	覆口	N－4°－W	43°	KⅠ b	
0071	X－28	Ⅲ		壺		N－2°－E	68°	KⅠ b	

第５表　８区検出甕棺墓一覧１

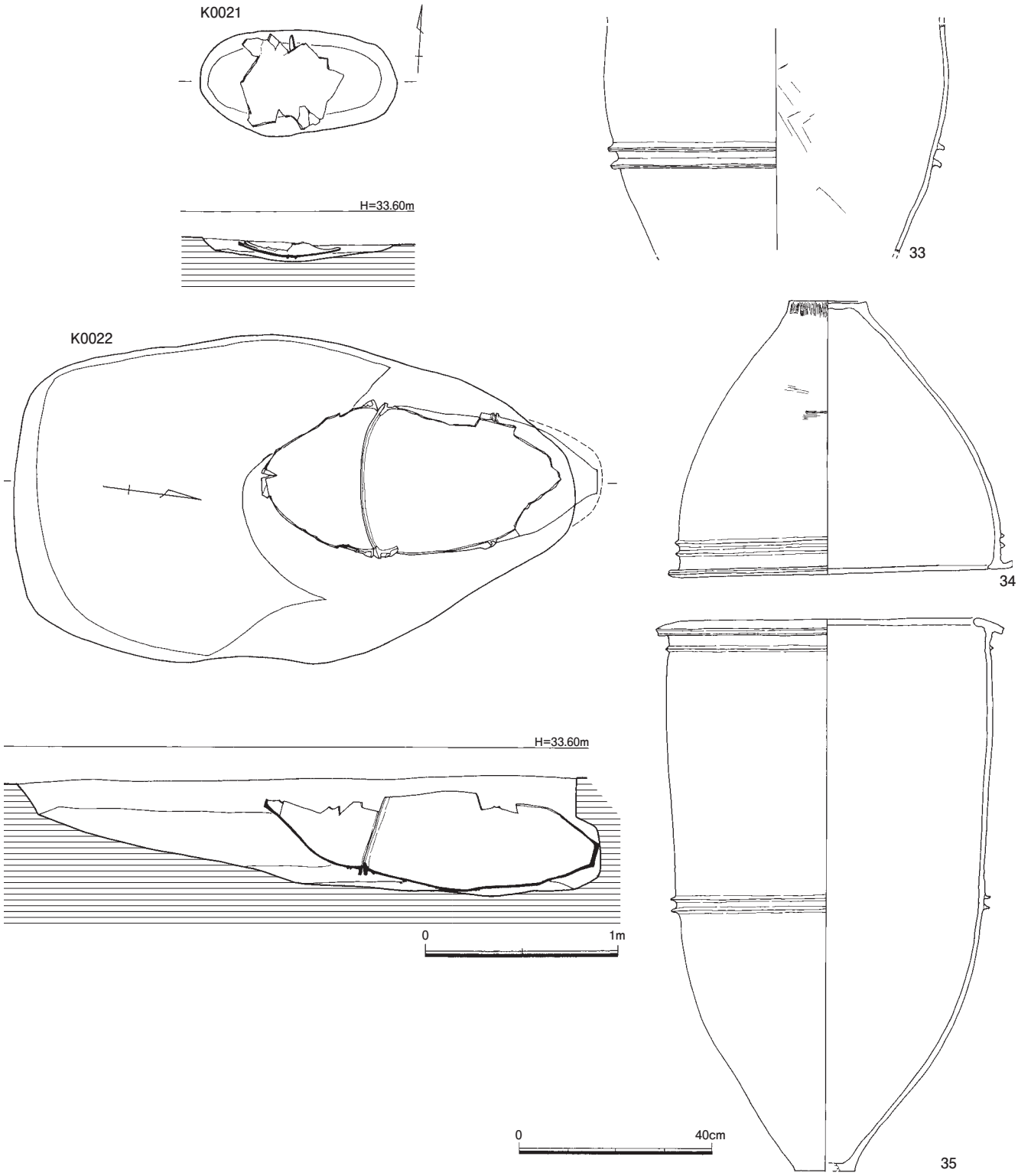
遺構番号	位置	区画	上甕	下甕	合せ口	主軸方位	埋置角度	型式	備考
0072	X－28	Ⅲ	壺	壺	覆口	N－7°－W	49°	KⅠc	
0073	X－29	Ⅲ	甕	甕	覆口	N－5°－E	38°	KⅠc	
0074	X－29	Ⅲ	壺	壺	覆口	N－11°－E	47°	KⅠc	
0075	X－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－8°－W	31°	KⅡa	
0076	X－28	Ⅲ		甕	単	N－2°－W	2°	KⅠc	
0077	X－28	Ⅲ	甕	甕	覆口	N－18°－W	52°	KⅠc	
0078	W・X－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－7°－W	11°	KⅡb	
0079	Y－27	Ⅱ	壺	甕	接口	N－11°－W	10°	KⅡa	
0080	Y－27	Ⅱ	甕	甕	接口	N－19°－W	0°	KⅢa	
0081	X－29・30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－3°－E	19°	KⅡa	
0082	X－29	Ⅲ		甕	単	N－39°－W	5°	KⅡb	
0083	X－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－19°－E	29°	KⅡb	
0084	X－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－11°－E	－13°	KⅠc	細形銅剣
0085	X－30	Ⅲ	甕	甕	呑口	N－7°－W	42°	KⅡb	
0086	X－30	Ⅲ	鉢	甕	覆口	N－7°－W	38°	KⅡb	
0087	X－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－0°	19°	KⅠc	
0088	W－28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－2°－E	35°	KⅡc	
0089	W－28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－1°－E	3°	KⅢa	
0090	W－28	Ⅲ	鉢	甕	覆口	N－14°－E	36°	KⅡc	
0091	W－27	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－17°－E	33°	KⅢa	
0092	W－27	Ⅲ	甕	甕	接口	N－7°－E	7°	KⅡc	
0093	W－29	Ⅲ	甕	甕		N－4°－E	24°	KⅢa	
0094	W－29	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－24°－W	27°	KⅡc	
0095	W・X－27・28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－20°－E	25°	KⅡc	
0096	W・X－27・28	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－20°－E	3°	KⅡc	
0097	Y－25・26	Ⅰ	甕	甕	接口	N－59°－E	7°	KⅢb	
0098	Y－26	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－11°－E	10°	KⅢa	
0099	Y－25・26	Ⅰ	鉢	甕	覆口	N－2°－E	36°	KⅢa	
0100	Y－26	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－9°－E	2°	KⅢa	
0101	Y－25・26	Ⅰ	壺	甕	接口	N－5°－W	7°	KⅢa	
0102	Y－26	Ⅰ	甕	甕	接口	N－2°－W	0°	KⅢa	
0103	Y－25	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－10°－W	14°	KⅢa	
0104	Y－25	Ⅰ	甕	甕	接口	N－34°－W	0°	KⅢc	素環頭刀子
0105	X－25	Ⅰ	甕	甕	呑口	N－41°－W	14°	KⅢc	
0106	X・Y－25	Ⅰ	甕	甕	呑口	N－49°－E	7°	KⅢc	鉄矛
0107	Y－25	Ⅰ	甕	甕		N－18°－E	8°	KⅢa	
0108	Y－25	Ⅰ	甕	甕	接口	N－14°－E	1°	KⅢb	
0109	Y－25	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－32°－W	4°	KⅢa	
0110	Y－25	Ⅰ	壺	甕	接口	N－5°－W	4°	KⅢa	
0111	Y－25	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－5°－W	10°	KⅡc	
0112	Y－25	Ⅰ		甕	単	N－83°－E	15°	KⅣa	
0113	Y－25	Ⅰ	甕	甕	接口	N－2°－E	2°	KⅢa	鉄剣
0114	X－25	Ⅰ	甕	甕	呑口	N－37°－E	11°	KⅣa	鉄刀
0115	Y－25	Ⅰ	甕	甕	接口	N－3°－E	25°	KⅢa	
0116	Y－25	Ⅰ	甕	甕	接口	N－84°－W	0°	KⅣa	
0117	Y－25	Ⅰ	甕	甕	接口	N－15°－W	24°	KⅢa	
0118	Y－24	Ⅰ	甕	甕	接口	N－1°－W	1°	KⅢc	
0119	Y－25	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－85°－W	1°	KⅢa	
0120	Y－24	Ⅰ	甕	甕	覆口	N－10°－W	18°	KⅣa	
0121	AA－25	外	甕	甕	呑口	N－53°－W	8°	KⅣa	
0122	AA－25	外	壺	甕	呑口	N－1°－E	－6°	KⅣa	

第６表　８区検出甕棺墓一覧２

遺構番号	位置	区画	上甕	下甕	合せ口	主軸方位	埋置角度	型式	備考
0123	AA－26	外		甕	単	N－30°－W	9°	KⅢ c	
0124	Y－24	Ⅰ	甕	甕	接口	N－20°－W	7°	KⅢ c	
0125	Z・AA－25	外	甕	甕	接口	N－11°－E	8°	KⅢ c	
0126	Y－25	Ⅰ	鉢	甕	接口	N－33°－E	17°	KⅢ a	
0127	Y－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－14°－E	31°	KⅡ b	銅釧
0128	Y－27	Ⅱ	甕	甕	接口	N－41°－E	13°	KⅢ b	
0129	Y－27	Ⅱ	甕	甕	接口	N－48°－E	11°	KⅢ a	
0130	Y－27	Ⅱ		甕	単	N－7°－W	0°	KⅢ c	
0131	Y－27	Ⅱ		甕	単	N－16°－E	7°	KⅣ a	
0132	Y－27	Ⅱ	鉢	甕	接口	N－35°－E	34°	KⅢ a	
0133	W－30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－5°－W	51°	KⅡ c	
0134	X－32	Ⅳ	甕	甕	接口	N－5°－E	0°	KⅢ c	
0135	X－30	Ⅲ		甕	単	N－0°	40°	KⅡ a	
0136	Y－30	Ⅲ	壺	壺	覆口	N－14°－W	29°	KⅠ c	
0137	X－31･32	Ⅳ		甕	単	N－12°－E	－3°	KⅢ c	
0138	Y－27	Ⅱ	甕	甕	接口	N－20°－E	2°	KⅡ c	
0139	Y－29	Ⅲ	甕	甕		N－66°－E		KⅡ b	
0140	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－18°－E	33°	KⅡ c	
0141	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－1°－W	20°	KⅢ a	
0142	Y－30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－1°－W	30°	KⅡ c	
0143	X－28	Ⅲ	甕	壺	接口	N－18°－W	60°	KⅠ c	
0144	X･Y－27	Ⅱ	甕	甕	接口	N－11°－E	30°	KⅡ b	
0145	Y－27	Ⅱ		甕	単	N－19°－W	17°	KⅡ b	
0146	Z－28	Ⅲ		甕	単	N－4°－E	3°	KⅢ b	
0147	Z－25	外	甕・鉢・甕		三連	N－5°－E	2°	KⅣ a	
0148	X－30	Ⅲ	壺	甕	接口	N－2°－W	41°	KⅡ c	
0149	X－30	Ⅲ	甕	甕	接口	N－23°－E	41°	KⅡ b	
0150	X－32	外	甕	甕	接口	N－8°－W	25°	KⅡ b	
0151	X－29	Ⅲ	甕	甕	呑口	N－6°－W	33°	KⅠ c	
0152	Z－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－6°－W	3°	KⅢ a	
0153	Z－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－0°	0°	KⅣ a	
0154	Z－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－2°－W	32°	KⅡ b	
0155	Z－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－2°－W	9°	KⅢ a	
0156	Y－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－3°－W	31°	KⅡ b	
0157	Y－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－1°－E	34°	KⅡ b	
0158	W－28	Ⅲ	甕	甕	接口	N－24°－E	48°	KⅡ c	
0159	X－29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－9°－W	33°	KⅡ b	
0160	Z－25	外	甑	甕		N－47°－E	11°	KⅢ c	
0161	W－28･29	Ⅲ	甕	甕	接口	N－40°－E	31°	KⅢ a	
0162	W･X－29	Ⅲ	壺	甕	接口	N－43°－E	33°	KⅡ b	
0163	Y－28	Ⅲ	壺	甕	呑口	N－10°－W	4°	KⅡ b	
0164	W－29	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－6°－E	25°	KⅢ a	
0165	V－29	外		甕	単	N－6°－E	37°	KⅡ b	
0166	Y－32	外	甕	甕	呑口	N－3°－W	28°	KⅣ a	
0167	Z－31	Ⅳ		甕	単	N－89°－W	17°	KⅣ a	
0168	Y－29･30	Ⅲ	鉢	甕	接口	N－0°	29°	KⅢ a	
0169	X－24	外	甕	甕	接口	N－28°－E	4°	KⅢ c	

甕棺の型式については　橋口達也1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI　福岡県教育委員会による

第７表　８区検出甕棺墓一覧３

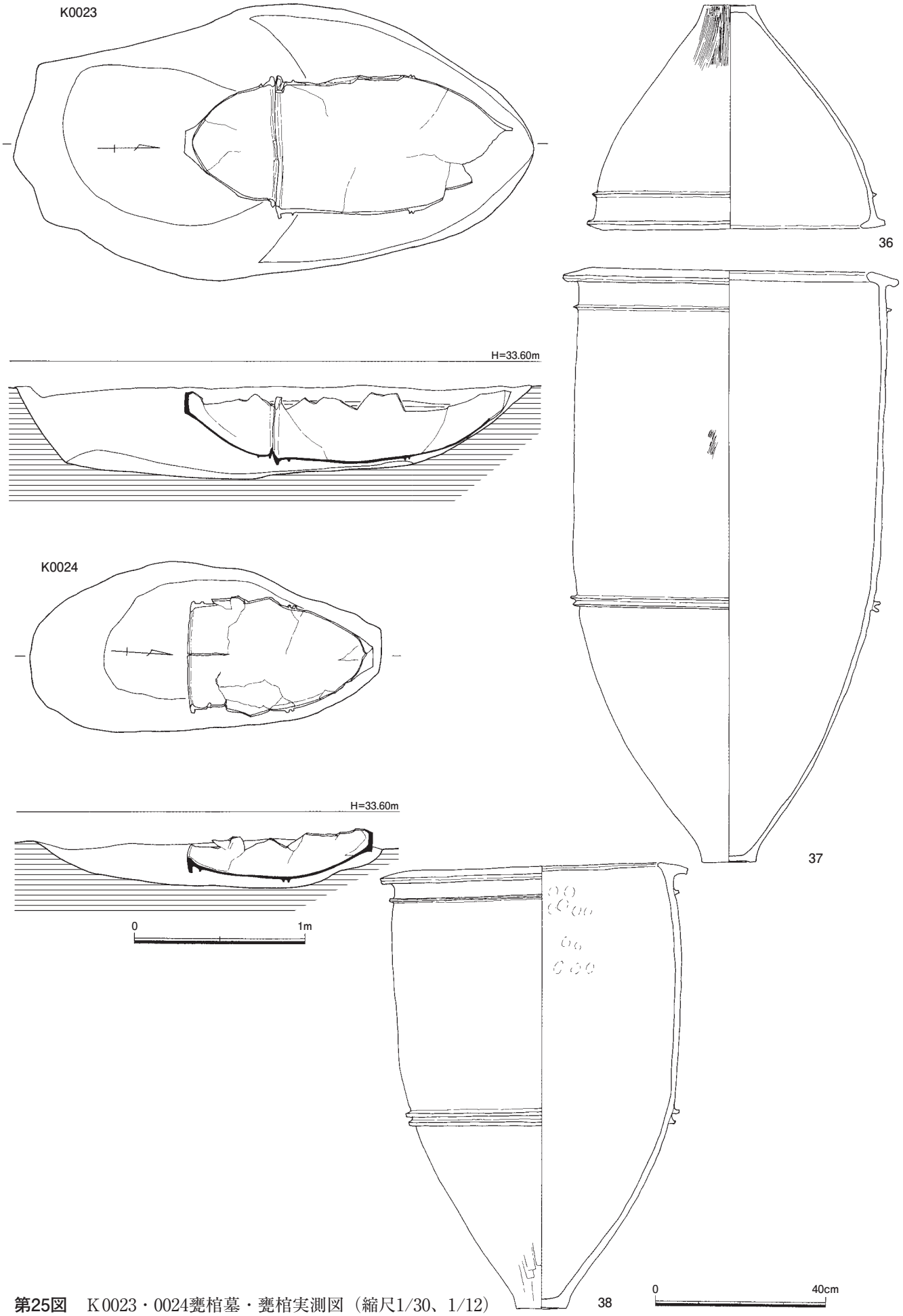


第24図　K0021・0022甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

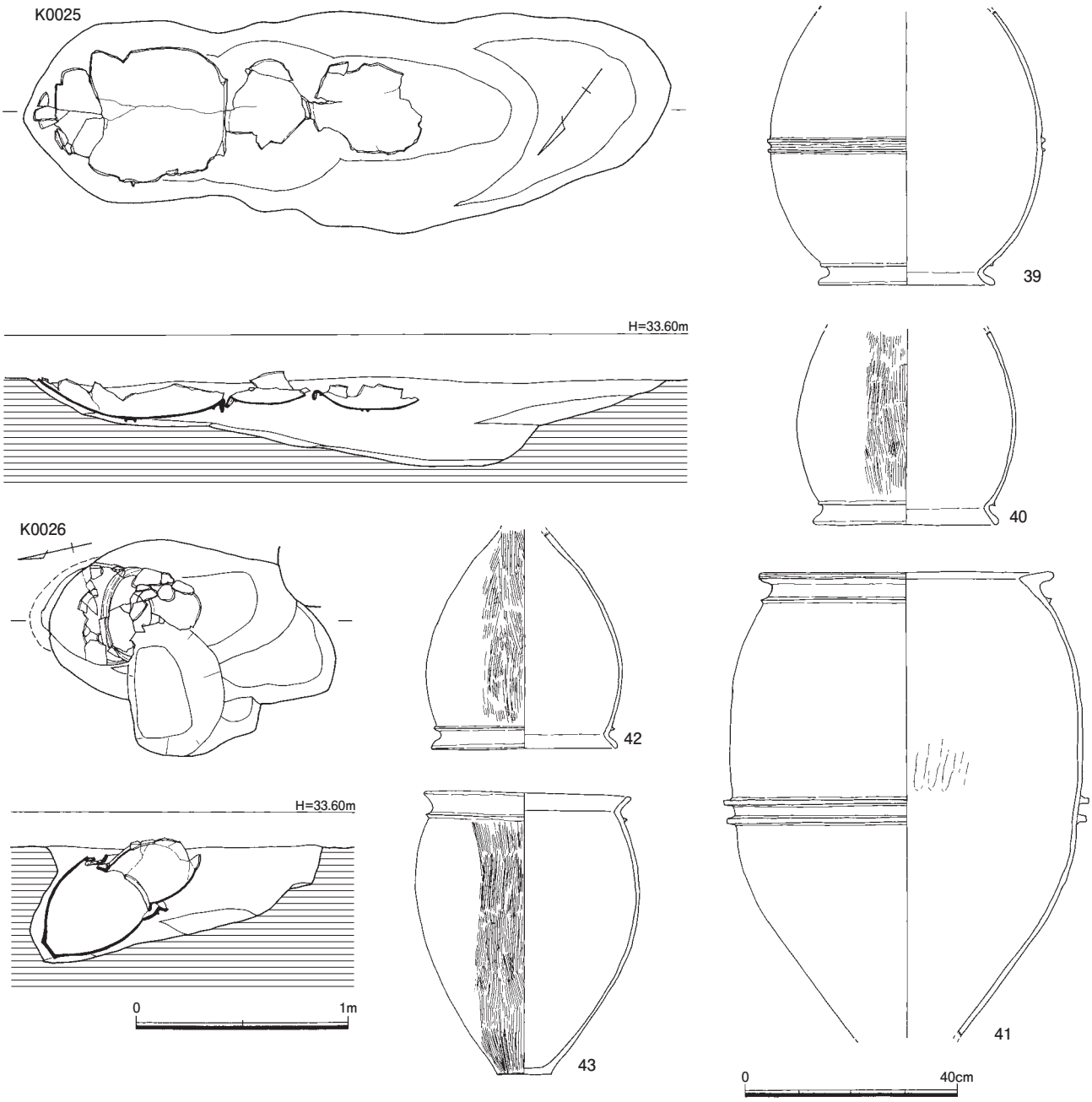
に1条、胴部に2条の三角突帯を有し、胴部外面にはわずかに縦刷毛が残されている。器高は139cmを測り、胴部上半が直立した砲弾形のプロポーションを呈する。K0022との比較では上甕の形状より、K0023が先行するものと考えられる。

K0024（第25図、図版12）

Y－31区で検出し、Ⅳ区中央、K0023の西側に位置する。削平が著しく、甕の多くを失っている。上



第25図　K0023・0024甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



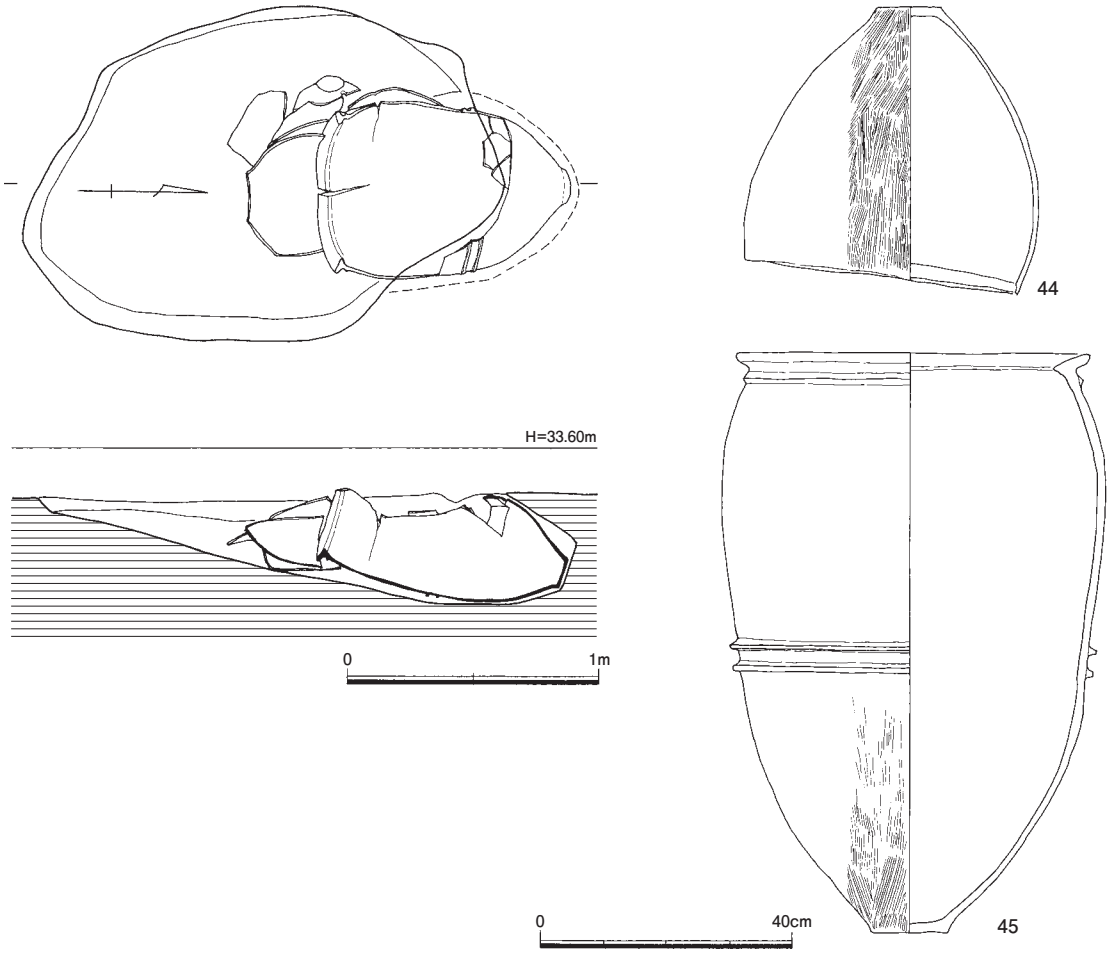
第26図　K0025・0026甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

甕は認められず、単棺と考えられるが、木蓋等の痕跡は確認していない。掘り方は長軸2.05m、短軸1mを測り、検出面からの深さは20cm程である。位置的にはK0022・0023に並行するが、甕棺の形状から、これらに後出するものと考えられる。

出土遺物（第25図38、図版37）　口縁部は逆L字形に近くわずかに外傾し、内側への張り出しも少ない。砲弾形の胴部は口縁部付近に向かってわずかに丸みを帯びている。また、胴部の突帯は台形をなすが、下方に垂れ下がる傾向が見受けられる。内外面ナデ調整を行うが、外面下位及び内面には板状工具によるナデの痕跡が残る。

K0025（第26図、図版13）

Y－31区で検出し、Ⅳ区中央西側に位置する。三連の甕棺墓で下甕は大型、上・中甕は中型の甕を使用している。削平が著しいが、下甕と中甕は口縁部を接し、中甕の中位以下を打ち欠いた上で、上甕



第27図　K0027甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

で覆っている。また掘り方底面は上甕方向に向かって低くなっているが、これは甕棺に切られる別の遺構を掘り下げた可能性も考えられる。

出土遺物（第26図39～41）　39は上甕である。口縁部はく字形に湾曲し、内面の稜はやや不明瞭である。調整は内外面ナデにより、外面下半には煤の付着が認められる。40は下半を打ち欠いた中甕である。口縁部はく字形に屈曲し、内面の稜はにぶい。頸部に三角突帯を有し、外面には粗い縦方向の刷毛目を施す。内面はナデによる。41は大型の下甕である。胴部上半は丸みが強く、逆L字形の口縁部は内傾し、内側への張り出しがなくなっている。頸部には1条三角形、胴部には2条台形の突帯を添付する。最終調整は内外面ナデによる。

K0026（第26図、図版13）

Y－32区で検出し、Ⅳ区の南側区画外に位置する。調査区南端部に近く削平も大きいと思われるが、遺存状態は比較的良好である。掘り方は長軸1.35m、短軸0.75、検出面からの深さは55cmを測る。

出土遺物（第26図42・43）　42は上甕である。く字形口縁部の外側先端に肥厚が認められ、頸部には三角突帯が貼付される。胴部外面には縦刷毛が行われ、内面はナデによる。43は下甕である。く字形の口縁部はより立ち上がりが強くなる。また、丸みを帯びた胴部の最大径は、口縁部径より大きくなっている。上甕同様、胴部外面は縦刷毛、内面はナデを行う。

K0027（第27図、図版13）

Y－32区で検出し、Ⅳ区区画溝埋没後に埋葬されたものと考えられる。主軸方位はほぼ南北にとり、K0050と対を成す様に配置されている。上甕には口縁部を打ち欠いた甕を使用しているが、検出時には胴部破片及び底部を重ねるようにして下甕の一部を覆っていた。合わせ部分の形態は明らかでないが、この上甕のみでは下甕を覆うことはできない。木蓋との併用の可能性も考えておきたい。

出土遺物（第27図、図版37）　44は上甕である。口縁部を打ち欠き、胴部の1／5を失っている。胴部は丸みを帯び、外面には縦刷毛を施す。また、外面には全体に煤が付着している。内面はナデである。45は下甕である。口縁部は大きく内傾し、内側に嘴状の張り出しを有する。突帯は頸部に1条の三角突帯、胴部に2条の台形突帯を貼付する。外面胴部下半にはナデ残した縦刷毛が多く残っている。

K0028（第28図、図版13）

Y－32区で検出した単棺である。K0029に併行して配されるが、墓坑の切り合い関係より、K0029→K0028の関係となる。墓坑は長軸3.3m、短軸1mを測り、検出面からの深さは65cmを測る。長軸方向の断面は緩やかな平坦面を2面有し、階段状に掘り込んでいる。

出土遺物（第28図46、図版37）　ほぼ完形に復元できる甕である。胴部上半は丸みを持ち、頸部にかけてしまっていく。口縁部は内傾が強く、断面く字形を呈する。頸部には三角突帯、胴部には2条の台形突帯を貼付する。胴部外面全体に縦刷毛がよく残っており、ナデ調整は行われていない。また、内面は胴部に板状工具によるナデが行われ、底部付近にはわずかに刷毛目が残っている。

K0029（第28図、図版13）

Y－32区で検出し、K0028に併行して配され、Ⅳ区南側に位置する。K0028同様長細い掘り方を有し、長軸3.05m、短軸1.25mを測る。Ⅳ区内ではK0022・K0023、K0028・K0029、K0027・K0050が互いに対となり、主軸方向をほぼそろえて直線的に埋葬されている。また、いずれの甕棺も南側から挿入している状況が認められる。

出土遺物（第28図47・48）　47は上甕である。内傾する口縁部は外方に比較的短く張り出し、内側の屈曲は稜線があまい。また、胴部中位は直線的に延び上端部で丸みを持つ。胴部外面は全体に縦刷毛を有し、ナデ消さない。48は下甕である。逆L字形の口縁部は上面が内傾し、内側にはあまり張り出さない。胴部上半は丸みを有し、中位の台形突帯はシャープなつくりとなっている。また、併行するK0028同様、本甕棺も外面に縦刷毛を残している。

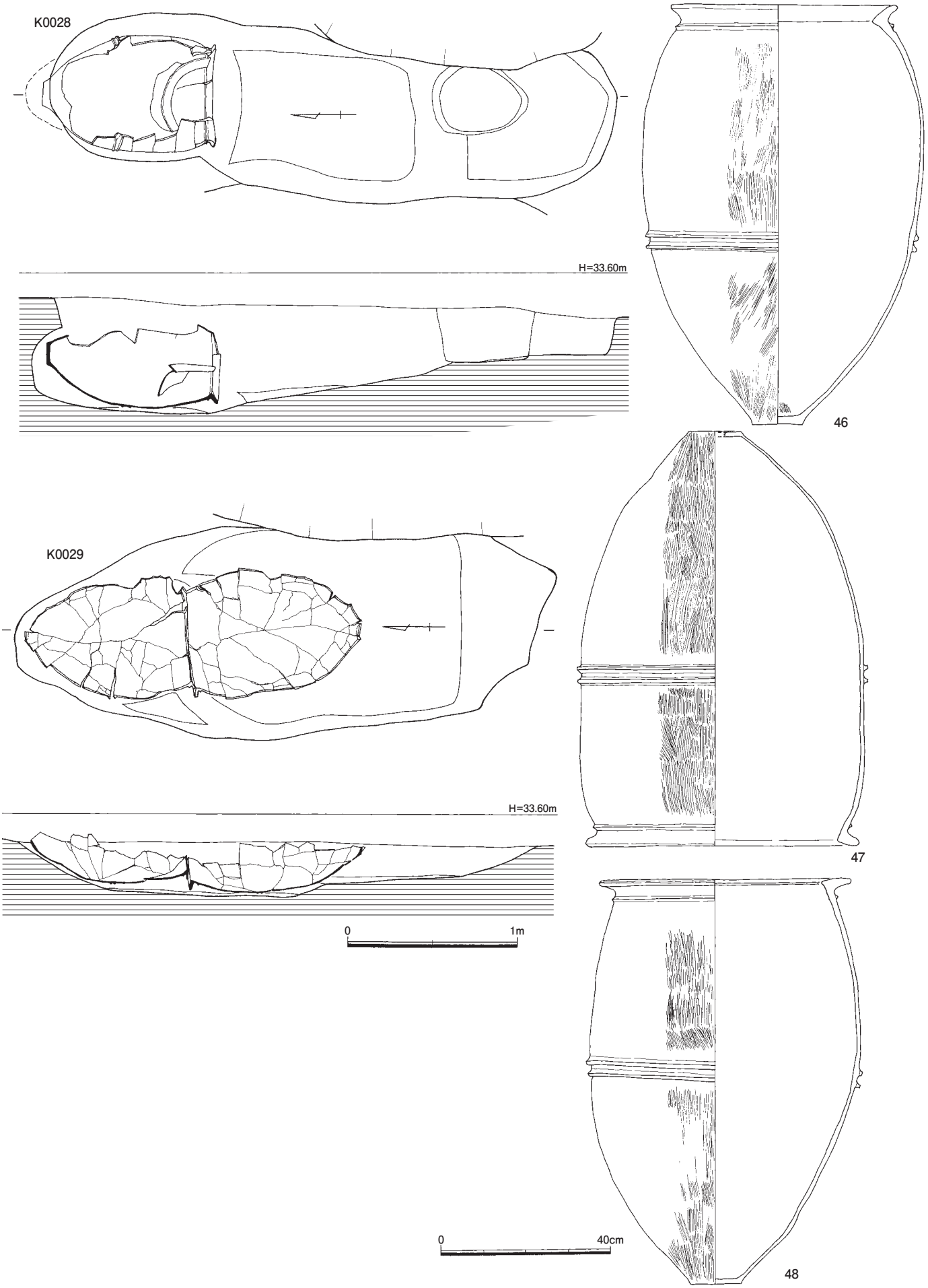
K0030（第29図、図版13）

Y－32区で検出し、Ⅳ区西側に位置する。掘り方は長軸1.55m、短軸0.9mを測り、主軸方位はほぼ東西をとる。下甕の埋置時点で破損部位が生じたため、大型甕の口縁部破片によって外側を覆っている（アミ部）。なお、本甕棺墓と対となる甕棺墓は認められなかった。

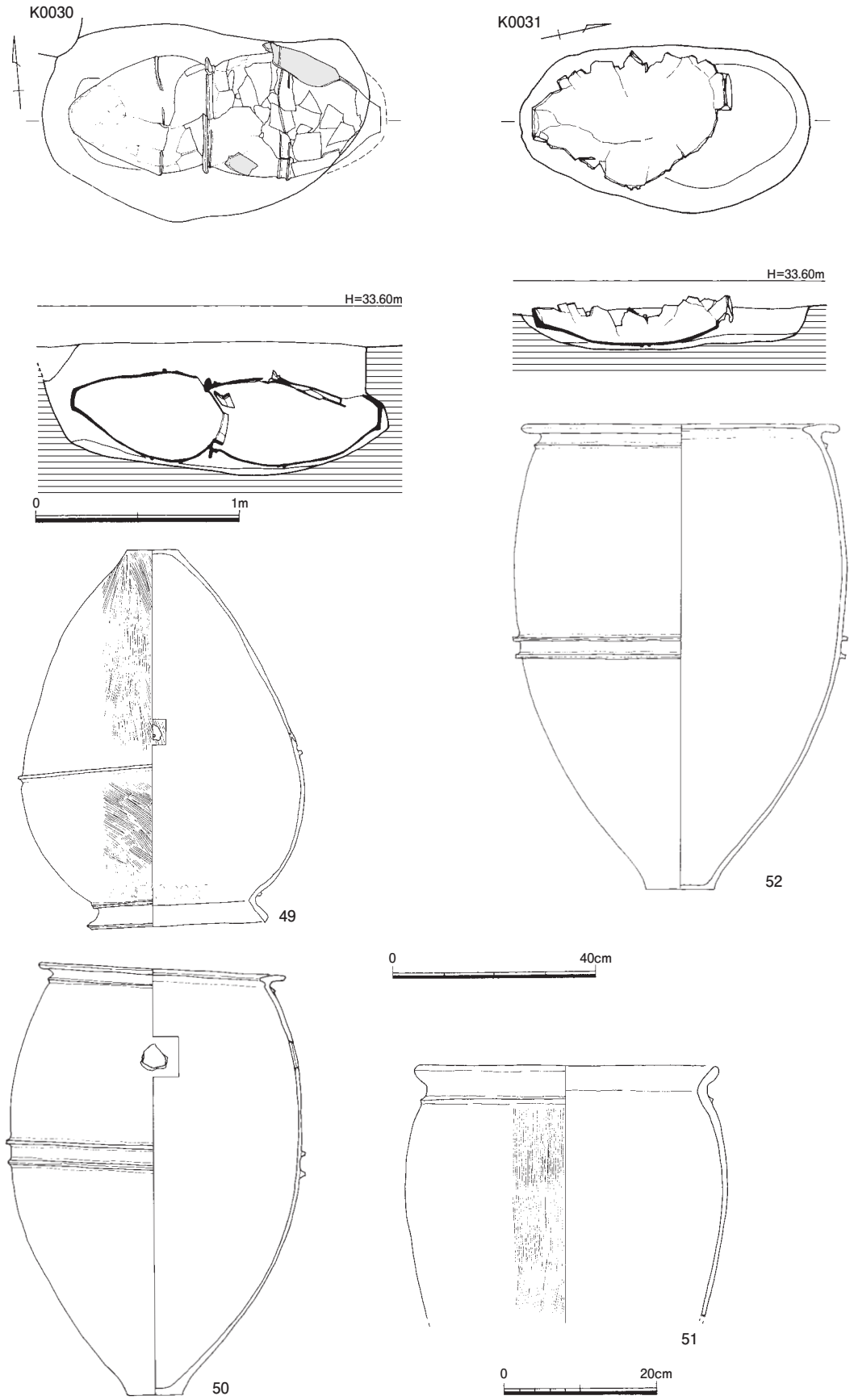
出土遺物（第29図49～51、図版38）　49は上甕である。胴部は卵形を呈し、頸部のしまりは強い。口縁部はく字形を呈し、端面はシャープに面取りを行う。頸部と胴部には各1条の台形突帯を貼付し、胴部外面全体に縦刷毛を施す。50は下甕である。口縁部は内傾し、内側は頸部にナデを行った結果、嘴状に張り出している。胴部は中位に最大径を有し、全体に丸みを帯びたプロポーションとなる。51は下甕の北側中位の破損部分にかぶせられていた甕の上半部破片である。口縁部は外面が肥厚しわずかに内湾気味となる。また、頸部には三角突帯が貼り付けられる。調整は外面縦刷毛、内面ナデにより、外面には煤が多量に付着している。

K0031（第29図、図版13）

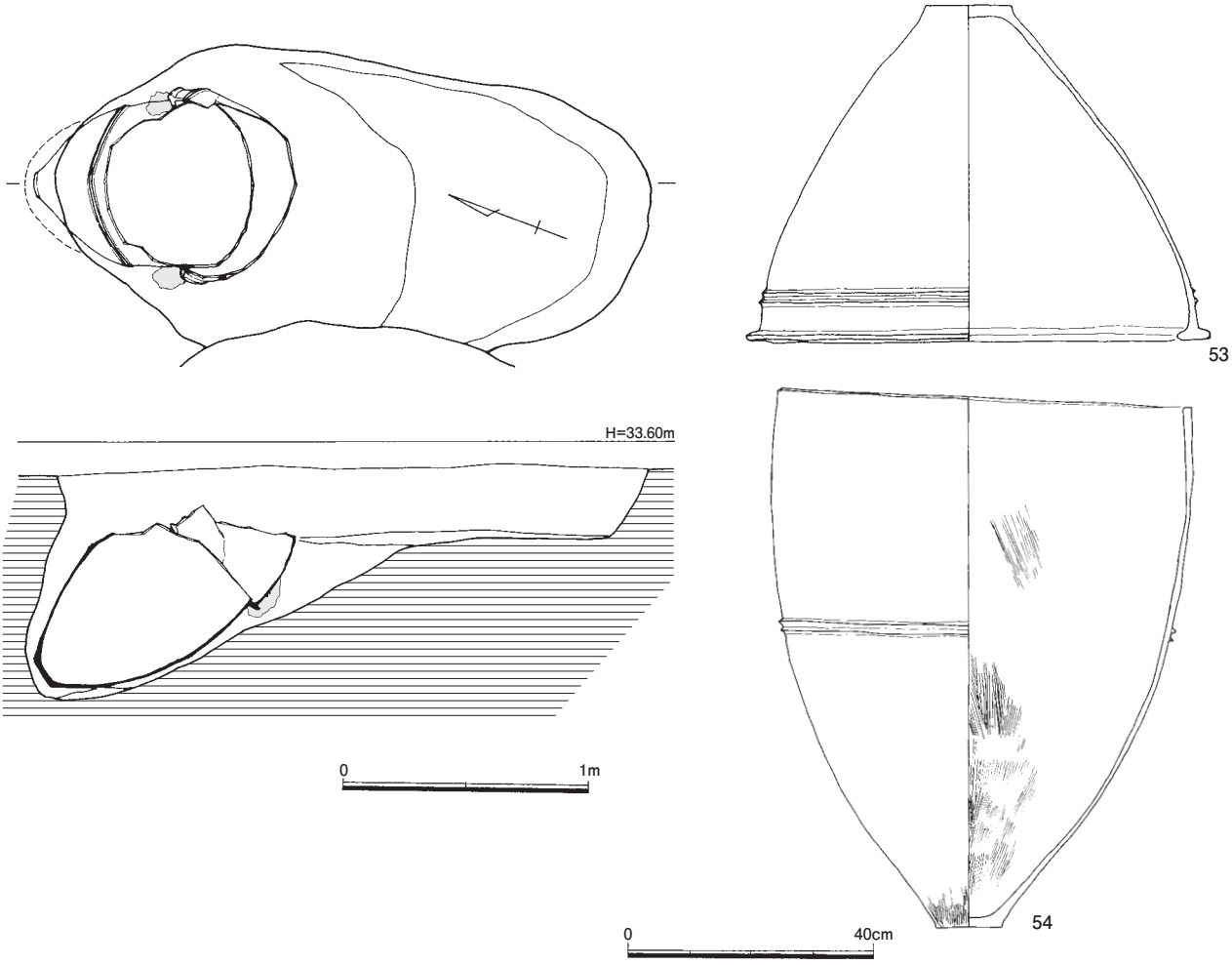
Y－31区で検出し、Ⅳ区北側に位置する。削平が著しく進んでいるが、上甕の存在は認められず、



第28図　K0028・0029甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第29図　K0030・0031甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、51は1/8、その他は1/12）



第30図　K0032甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

単棺と考えられる。主軸は南北方位に近いが、同様の主軸をとる甕棺墓とは挿入方位が異なる。

出土遺物（第29図52）　削平により全体の2／3ほどを失っている。口縁部は逆L字形を呈し、上面はやや内傾する。また、内側への突出は小さくなっている。突帯は頸部三角形、胴部は2条の台形を呈し、つくりはシャープである。内外面全体に丁寧なナデが行われている。

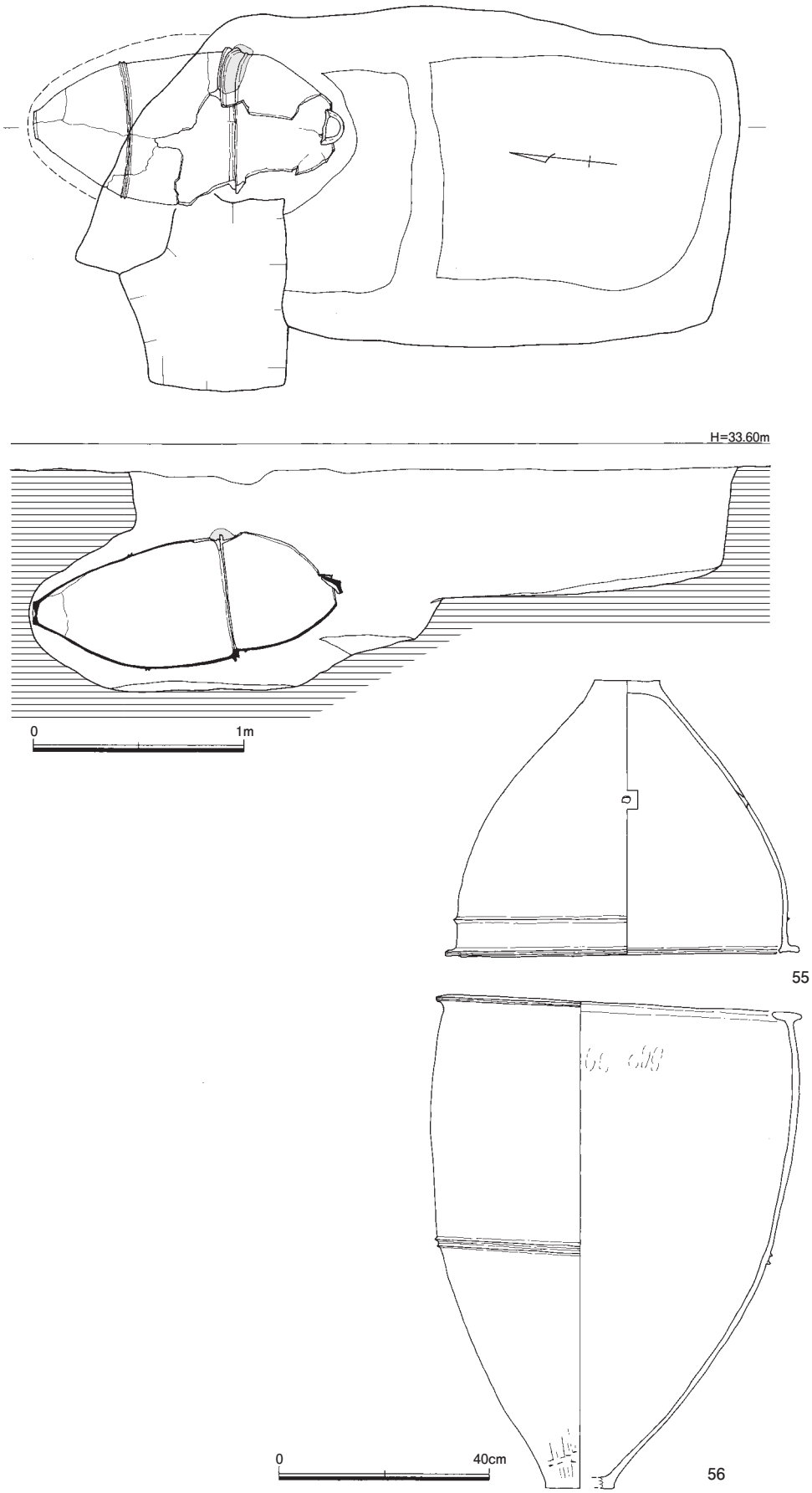
K0032（第30図、図版14）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0033と並列し、これに墓坑が切られている。墓坑は長軸2.4m、短軸1.2mを測る。掘り方南側には平坦面を有し、そこから斜坑を掘削して棺を埋置している。甕棺は下甕の口縁部を打ち欠き、覆口となっている。また、合わせ口に黄褐色粘土を貼付する。

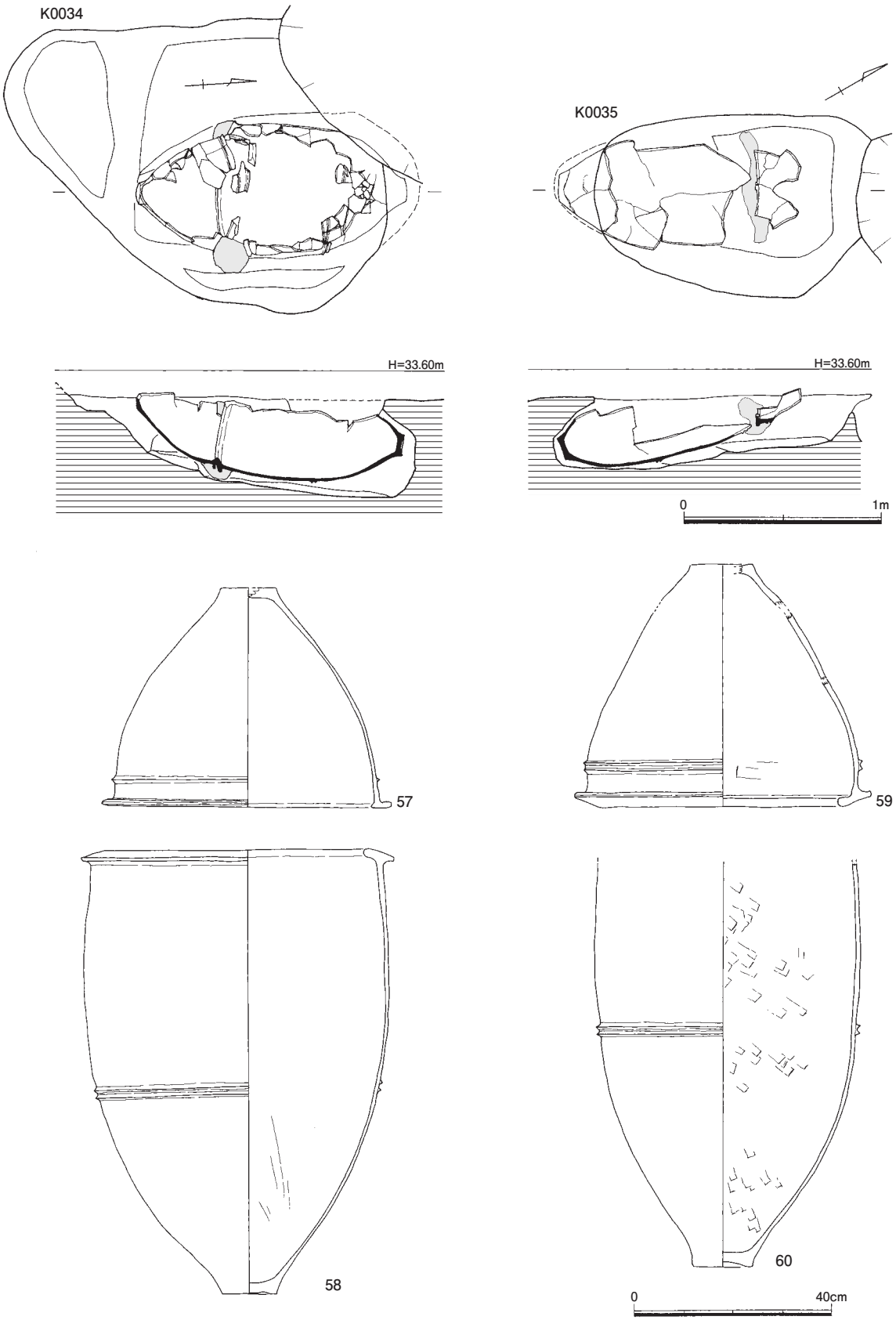
出土遺物（第30図、図版38）　53は上甕に使用された鉢である。T字形の口縁部はわずかに外傾し、口縁下には2条の三角突帯を貼付する。調整は内外面ナデによる。54は下甕である。口縁部を打ち欠いて使用している。胴部は砲弾形を呈し、上半部はほぼ直立する。頸部には突帯は認められず、胴部中位よりやや上に2条の三角突帯を貼付する。調整は外面底部付近に刷毛目が残るが、あとはナデ消している。内面は刷毛目の後ナデを行うが、下半を中心に刷毛目が残っている。また、内外面に黒色顔料が認められる。

K0033（第31図、図版14）

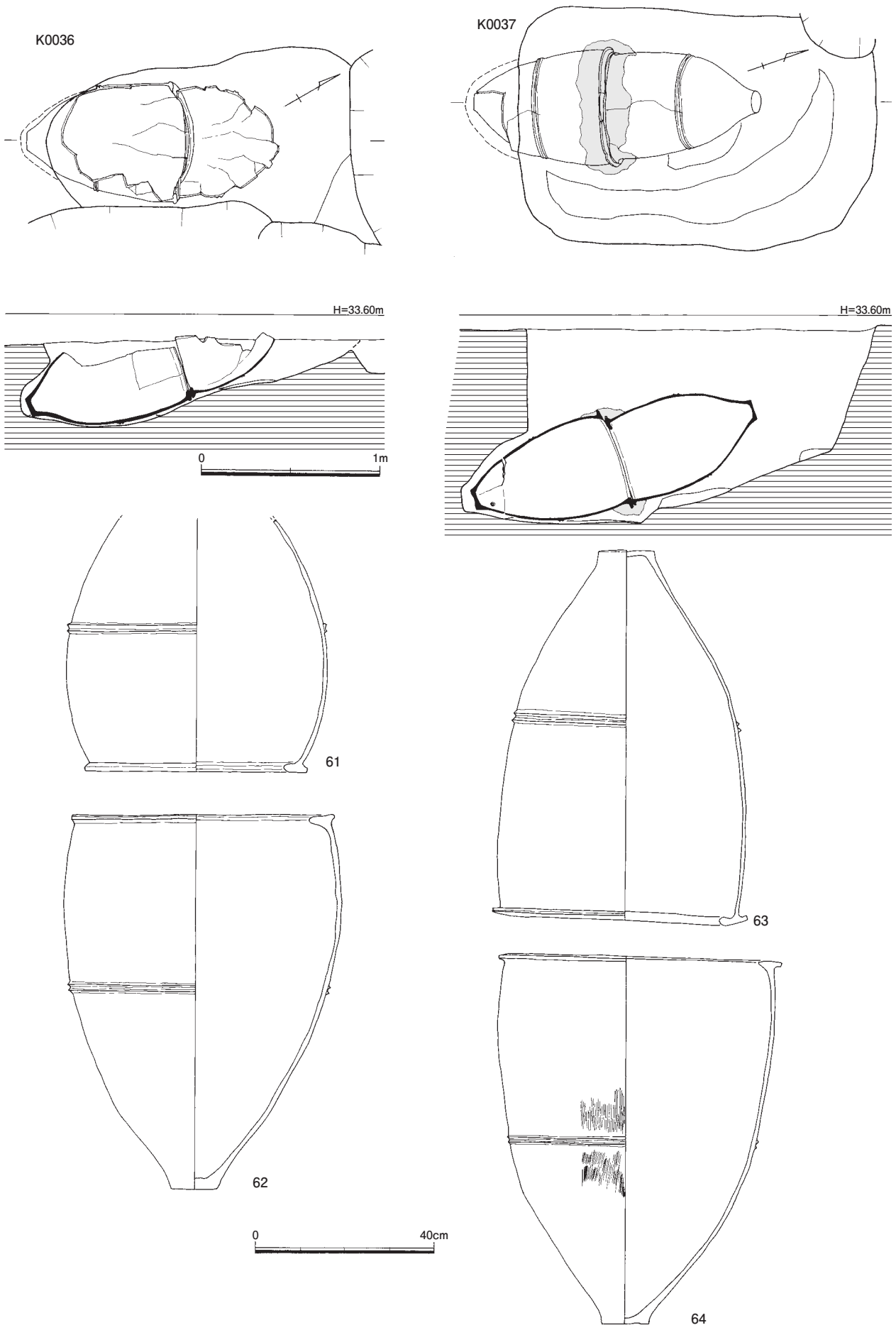
Y－30・31区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0032と並列し、切り合い関係から0032→0033と



第31図　K0033甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第32図　K0034・0035甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第33図　K0036・0037甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

なる。掘り方は撹乱によって乱されているが、復元すると長軸2.4m、短軸1.6mの隅丸長方形を呈するものと考えられる。また、墓坑内には2段の平坦面を有し、更に斜坑を掘り下げて、甕を埋置している。合せ口は接口式となり、この部分には目貼り粘土を貼付する。

出土遺物（第31図）　55は上甕に使用された鉢である。胴部上側は直立しており、口縁部は上面が湾曲している。口縁下には1条の三角突帯を貼付し、胴部中位には外側からの焼成後の穿孔が行われる。調整は内外面ナデにより、外面には黒色顔料の塗布が認められる。56は下甕である。胴部はわずかに上部がすぼまり、中位に2条の三角突帯を貼付する。口縁部は内側に張り出し、上面はわずかに外傾する。内外面には板状工具によるナデが行われており、小口痕跡が残っている。また、内外面に黒色顔料の痕跡が認められる。

K0034（第32図、図版14）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0035に切られ、主軸方位はK0032・0033に準じる。長軸2.0m、短軸1.4mの不整形を呈し、墓坑は階段状に掘り下げられている。接口式をなし、合わせ目には粘土で目貼りを施している。

出土遺物（第32図57・58、図版38）　57は上甕に使用された鉢である。胴部上側はほぼ直立し、口縁部上面はほぼ水平となる。口縁下には1条の三角突帯を貼付する。58は下甕である。胴部はわずかに上部がすぼまり、中位よりやや下部に2条の三角突帯を貼付する。口縁部は大きく内側に張り出し、上面は外傾する。内外面はナデを行い、内面には板状工具の痕跡が残っている。

K0035（第32図、図版14）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0034・0036を切り、主軸方位はK0036とほぼ揃えている。掘り方は長軸1.6m、短軸0.9mの長円形に復元でき、断面は緩い階段状となる。削平・撹乱が著しいが、下甕の口縁部は打ち欠いており、合せ口は接口式となる。また、合わせ目には粘土で目貼りを施している。

出土遺物（第32図59・60）　59は上甕に使用された鉢である。胴部上側は直立し、内外に発達したT字形を呈する口縁部上面は外傾している。口縁下には1条のM字形突帯を貼付する。60は口縁部を打ち欠いた下甕である。削平により全体の1／2を失っている。胴部はわずかに上部がすぼまり気味で、細長い投弾形を呈する。胴部中位には1条のM字形突帯を貼付する。内外面はナデを行うが、内面には板状工具の小口痕跡が明瞭に残っている。外面には黒色顔料が残っており、横方向に塗布した痕跡が認められる。

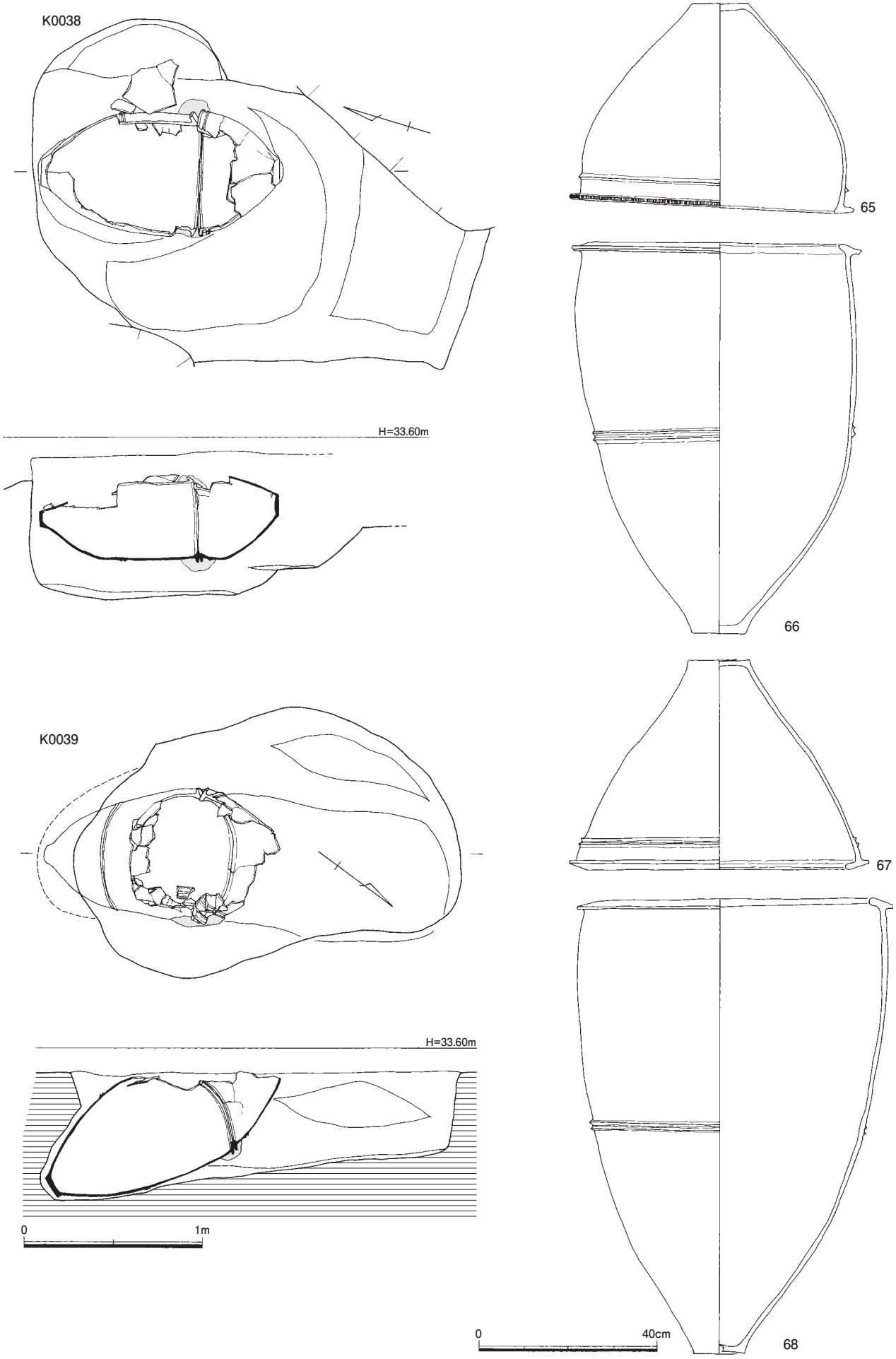
K0036（第33図、図版14）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0035に切られ、主軸方位はK0035にほぼ揃えている。掘り方は長軸1.7m、短軸1.0mに復元でき、断面は緩く傾斜をもって掘り込んでいる。

出土遺物（第33図61・62、図版38）　61は上甕で、底部付近を失っている。最大径を胴部中位に有し、1条のM字形突帯を貼付する。胴部は丸みを帯び、口縁部にかけてしまりを持つ。口縁部は内外両側に小さく張り出し、上面はわずかに内傾気味となる。口縁部内外面を中心に黒色顔料が認められる。62は下甕である。胴部上半は丸みを帯び、ほぼ中ほどに2条の三角突帯を有する。口縁部は内側に張り出しを有し、上面は内傾する。内外面ナデを行い、内底面にはヘラ状工具による強いナデの痕跡が残っている。

K0037（第33図、図版14）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0038の掘り方の一部を切っている。墓坑は長軸2.0m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。合せ口は接口式となり、合わせ目には粘土で目貼りを施している。



第34図　K0038・0039甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

出土遺物（第33図63・64、図版38）　63は上甕である。最大径を胴部上位に有し、2条の三角突帯を中ほどよりやや下位に貼付する。胴部上半はわずかに丸みを帯び口縁部にいたる。口縁部は内側に大きく張り出し、上面は外傾する。調整はナデにより、外面には黒色顔料が認められる。64は下甕である。胴部上半はわずかな丸みを帯び、砲弾形を呈する。中ほどには2条の小さな三角突帯を有する。口縁部の張り出しは比較的小さく、上面は水平に近い。外面には突帯周囲に刷毛目が残り、内面にはナデに用いた板状工具の小口痕跡が認められる。

K0038（第34図、図版14）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。切り合いからK0041→K0038→K0037の先後関係が考えられる。墓坑は長軸2.5m、短軸1.5mの隅丸長方形を呈する。甕棺は水平に埋置されており、合わせ目には粘土で目貼りを施している。甕棺下の掘り方は掘り過ぎの可能性が強く、本来は掘り方直上に据えられていたものであろう。

出土遺物（第34図65・66、図版39）　65は上甕である。胴部上位は直立し、逆L字形の口縁部を有する。口縁部外面には刻みを施し、上面はわずかに外傾している。66は下甕である。胴部上半はわずかにしまり、T字形の口縁部は上面が外傾する。最大径は胴部中位よりやや上にあり、中位にはM字形突帯を貼付する。

K0039（第34図、図版15）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0041の墓坑を切っている。墓坑は長軸2.15m、短軸1.4mを測る。墓坑底は緩やかに傾斜し、南側小口部分を抉りこむ。甕棺埋置時の安定を図るため、こぶし大の自然礫を墓坑と甕棺の間に数個挟んでいる。また、甕棺の合わせ目には粘土で目貼りを施している。

出土遺物（第34図67・68、図版39）　67は上甕である。胴部上位は外方に開き、口縁部上面は外傾する。68は下甕である。胴部上半はわずかにしまり、最大径は胴部上位にある。内側に張り出した口縁部上面は外傾する。胴部には2条の三角突帯を貼付する。内外面には黒色顔料が認められる。

K0040（第35図、図版15）

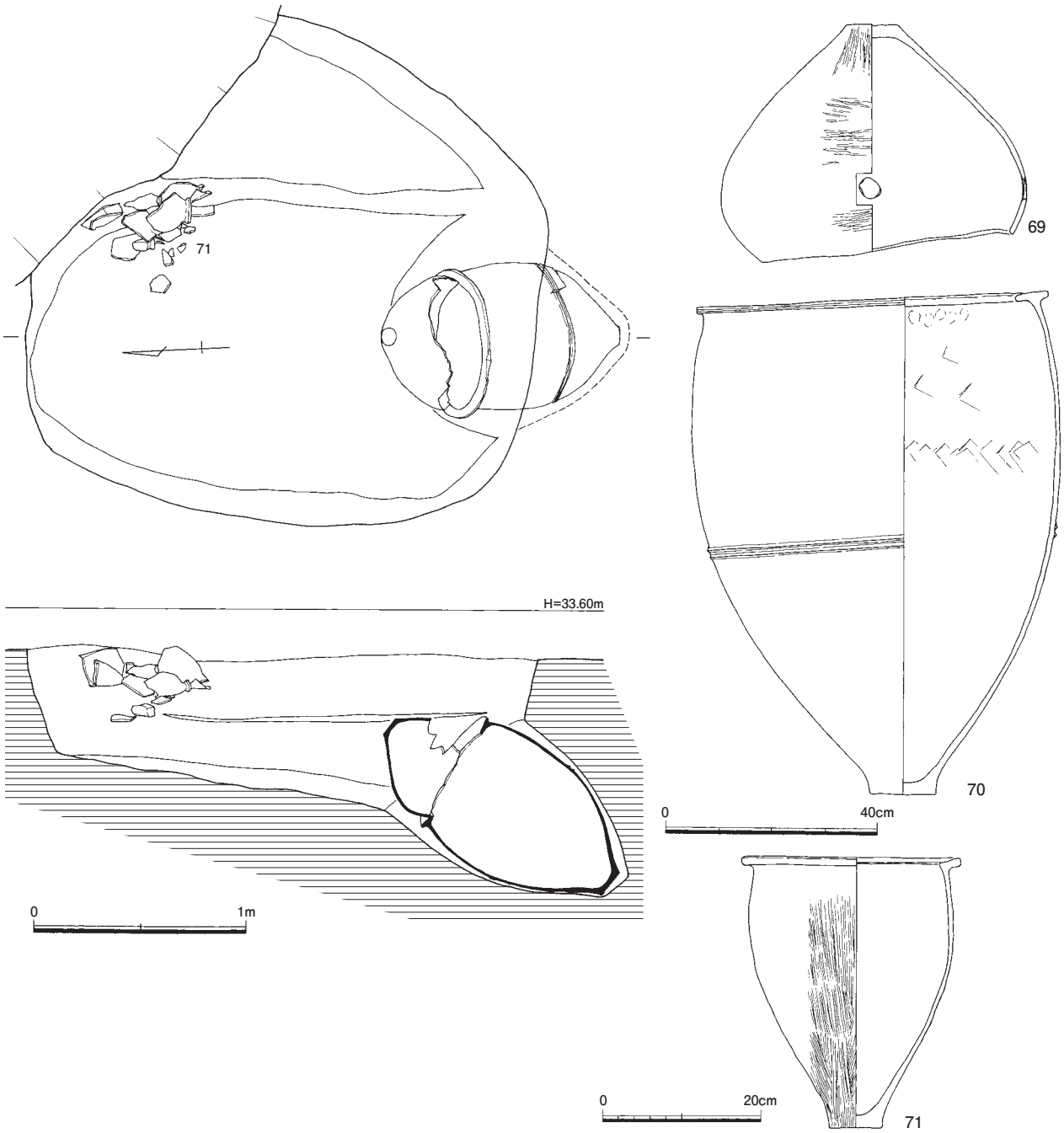
X・Y－30区で検出し、Ⅲ区南端部に位置する。K0135に並行し、主軸角度をほぼそろえる。墓坑は東側に平坦面を有し、不整な方形に近い。上甕は口縁部を打ち欠き、合せ口は接口となる。掘り方北側上層に小型甕が破損状態でまとまって出土している。

出土遺物（第35図、図版39）　69は口縁部を打ち欠く壺である。胴部上位に最大径を有し、頸部に向かってつよくしまる。突帯は認められず、胴部最大頸部分に穿孔を行う。70は上甕である。胴部上半は緩やかにしまり、中位に小さな三角突帯を貼付する。内外面には黒色顔料が認められる。ほぼ完形で重量は33kgである。71は墓坑内から出土した甕である。ほぼ完形に復元できる。細身で胴部上位に最大径を有する、腰高のプロポーションとなる。逆L字形の口縁部は内傾し、底部は平底となる。胴部外面には縦刷毛を行い、上半部には煤が付着する。

K0041（第36図、図版15）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。墓坑は長軸2.4m、短軸2.0mの隅丸長方形を呈し、北側をK0038・0039に切られる。甕棺の合せ口は接口となり、合わせ目には粘土を貼付している。

出土遺物（第36図72・73）　72は上甕の鉢である。底部は上げ底となり、胴部上半も開き気味となる。口縁部は内外に張り出しが小さく、上面はわずかに内傾する。調整は内外面ナデにより、一部板状工具の小口痕が残る。73は下甕である。本来は完形で出土しているが、整理の過程で口縁部～胴部の1／3程しか見当たらなくなっており、他を紛失している。口縁部は内外に小さく張り出し、上面は内



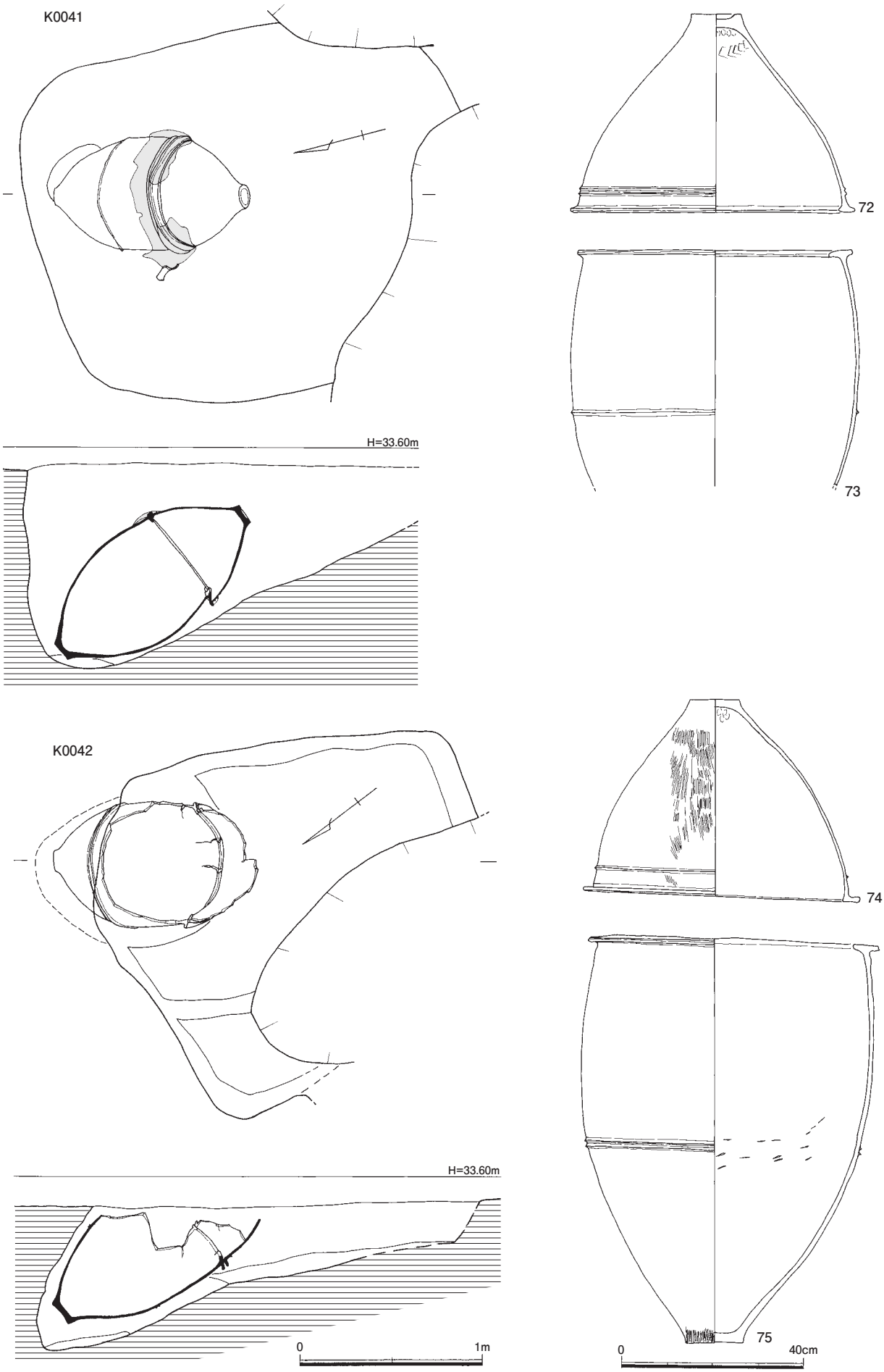
第35図　K0040甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、71は1/8、69・70は1/12）

傾している。調整は内外面板状工具によるナデを行っている。

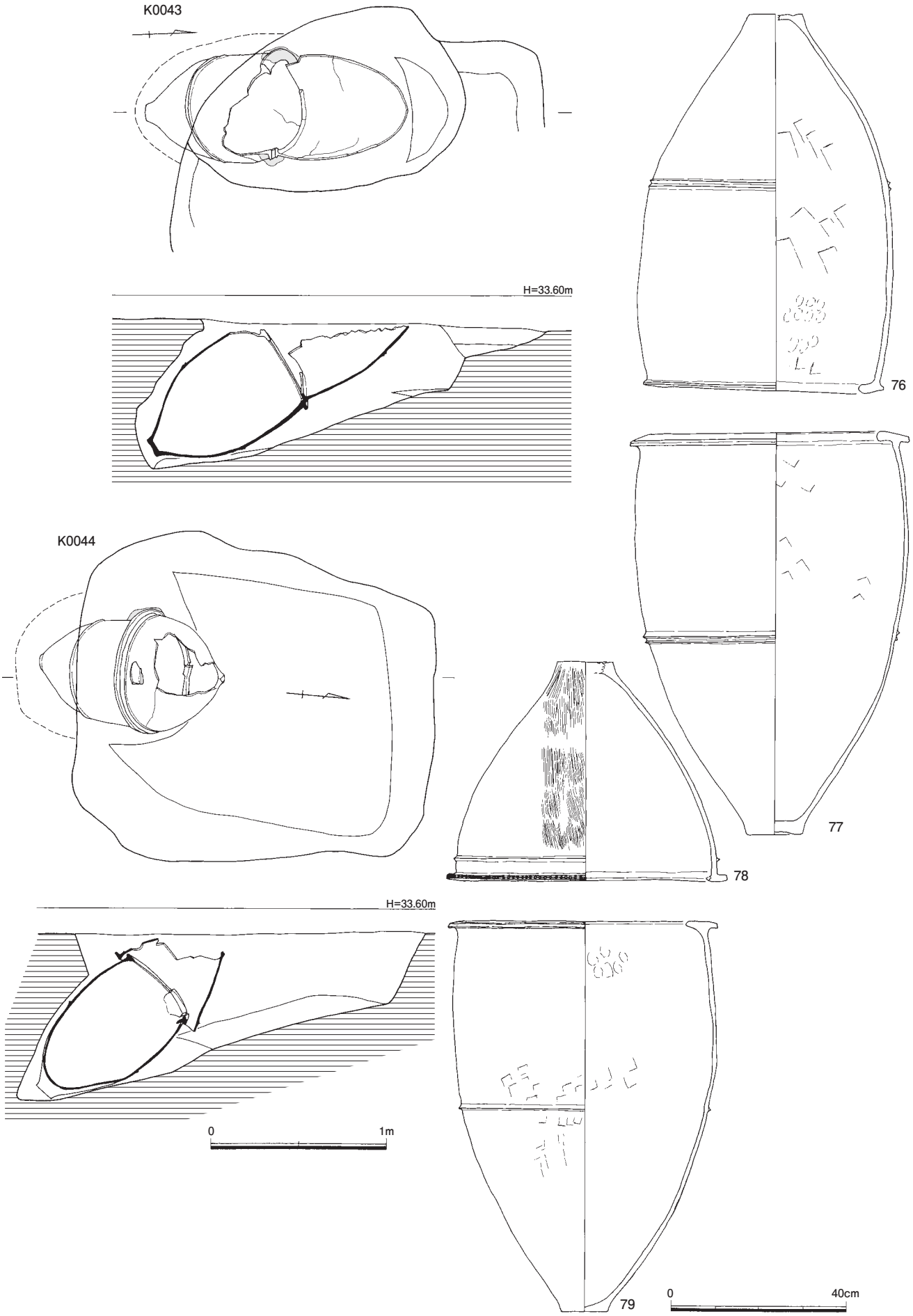
K0042（第36図、図版15）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。墓坑は長軸2.1m、短軸1.9mの隅丸方形を呈し、K0043に切られる。墓坑は西側に一段平坦面を有し、甕棺挿入孔前面には、更にもう一段平坦面がある。

出土遺物（第36図74・75、図版39）　74は上甕の鉢である。胴部上半は直立に近く、口縁部は逆L字形を呈する。外面縦刷毛、内面板状工具によるナデを行う。75は下甕である。胴部上半はわずかにしまりを持つ。口縁部は内外に張り出すT字形を呈し、上面はわずかに外傾する。調整は内外面ナデを行うが、外底付近のみ縦刷毛が残る。



第36図　K0041・0042甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第37図　K0043・0044甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0043（第37図、図版15）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。墓坑は長軸1.5m、短軸1.0mを測り、検出面からの深さは85cmである。墓坑は北側に一段平坦面を有し、そこから斜坑を掘削して、甕棺を埋置している。

出土遺物（第37図76・77、図版40）　76は上甕である。胴部上半はしまりを有し、口縁部は内側に大きく張り出している。内面には板状工具の痕跡が明瞭に認められる。77は下甕である。胴部上半はわずかにしまりを持つ。口縁部は内側に大きく張り出し、上面は外傾する。調整は内外面ナデを行い、内面には板状工具の小口痕跡が残る。

K0044（第37図、図版15）

X－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。墓坑は2.0×1.8mの略隅丸方形を呈する均整な掘り方で、一段平坦面を有し、斜坑を掘削している。甕棺は鉢と甕の組み合わせで、合わせ目は覆口式となり、わずかに目貼りの粘土が残っている。

出土遺物（第37図78・79、図版40）　78は上甕の鉢である。胴部上半はやや開き気味に直立し、口縁部は逆L字形を呈する。口縁部の上面はほぼ平坦で、外面端部には刻みを有する。調整は内面ナデ、外面縦刷毛を行う。口縁部内面の張り出しが全周の2／3程欠損しており、合せ口の関係で打ち欠いたものと考えられる。79は下甕である。口縁部は内外に張り出しが強くなり、上面はほぼ平坦となる。胴部は緩やかに丸みを有し、中位に三角突帯を1条貼付する。調整はナデにより、板状工具の痕跡が明瞭に残っている。また、外面全体及び内面上半部には黒色顔料が認められる。

K0045（第38図、図版15）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。K0142に併行し、切り合い関係からK0141→K0142→K0045の関係となる。墓坑は細長く、長軸1.7m、短軸0.7mを測る。上甕は口縁部を打ち欠いており、合せ口は呑口式で、合わせ目には目貼り粘土が認められる。

出土遺物（第38図80・81、図版40）　80は上甕である。甕の口縁部を打ち欠いて使用している。胴部はしまりが比較的強く、中位に2条の三角突帯を貼付する。内外面ナデを行い、内面には小口痕跡が明瞭に残る。また、外面には黒色顔料が残る。81は下甕である。内外に強く張り出した口縁部は上面が外傾する。胴部は上半のしまりがなく、直立している。また、外面～口縁部内面にかけて黒色顔料が認められる。調整は内外面ナデで、板状工具の小口痕跡が残っている。

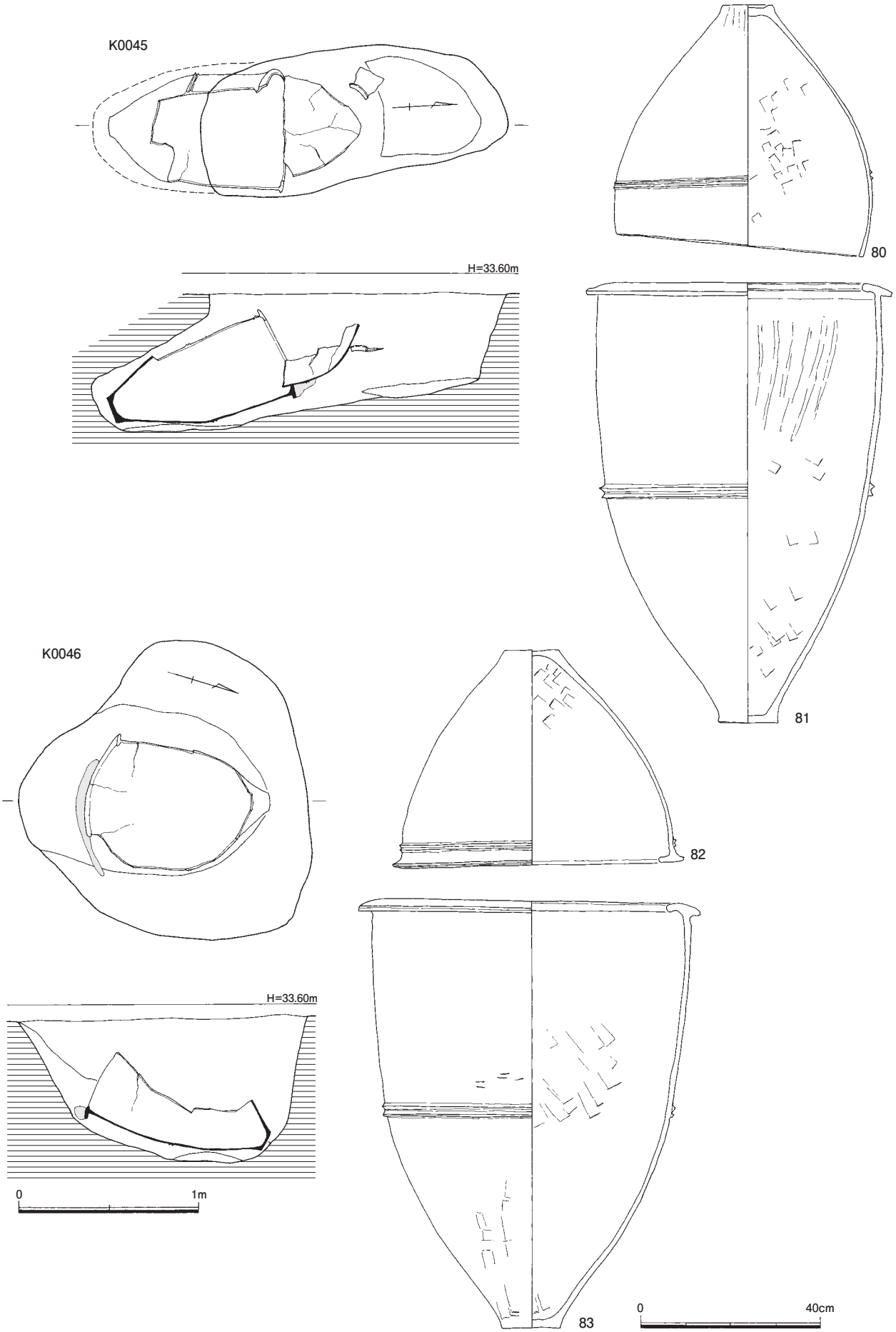
K0046（第38図、図版16）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。K0140を切る。墓坑を掘り下げると、下甕上面に撹乱によって破砕を受けた甕棺破片が広がっていた。これを除去し清掃を行うと下甕及び口縁部をめぐる黄褐色粘土を検出した。破片からは上甕と考えられる鉢が復元でき、耕作等により陥没・破損した上甕及び下甕を投棄したものと考えられる。掘り方は斜坑部分の崩落等で不整形となっているが、掘り方南側は本来更に南に広がるものと考えられる。

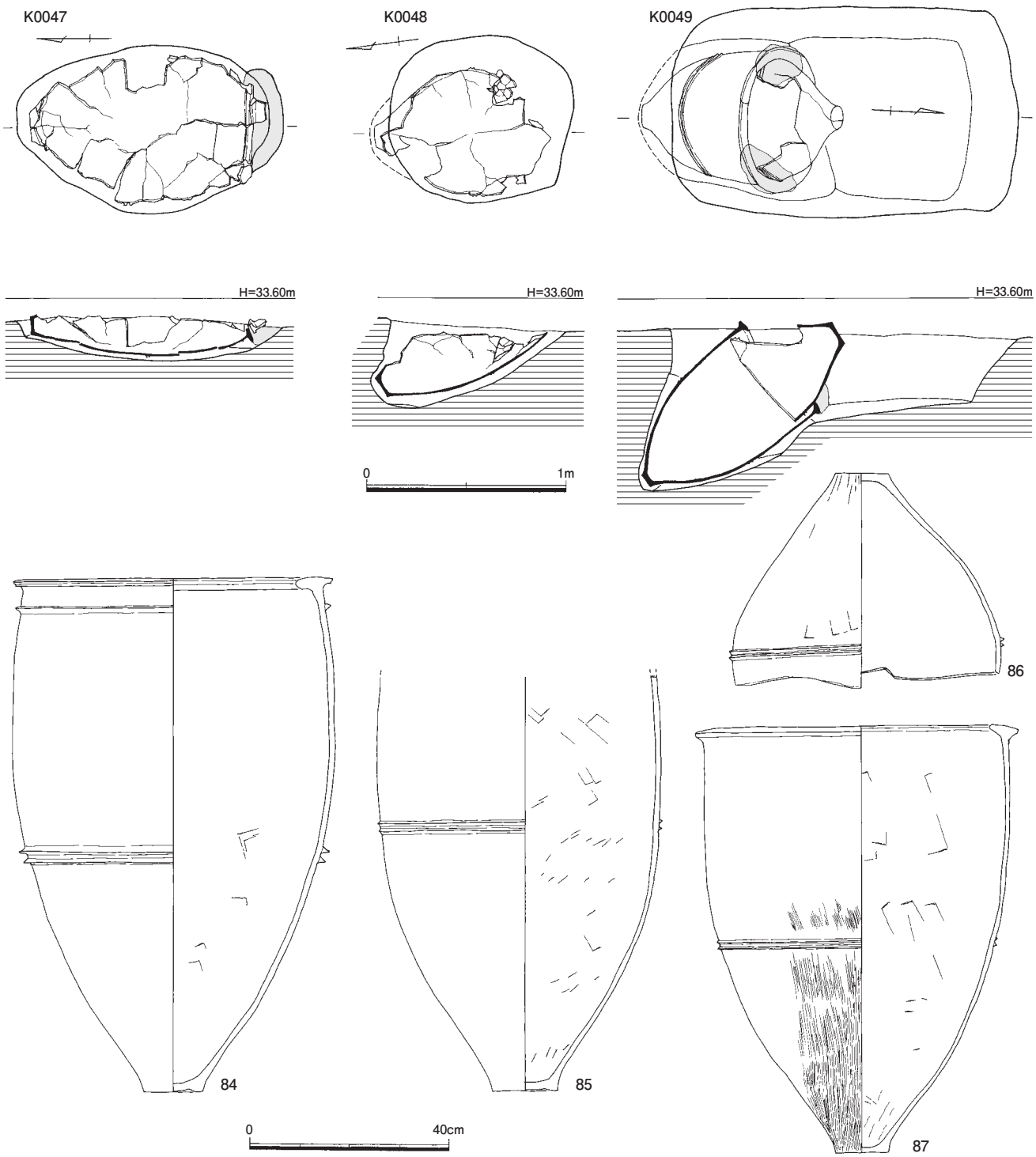
出土遺物（第38図82・83、図版40）　82は上甕である。復元によりほぼ完形に近くなっている。T字形を呈する口縁部上端は水平で、下には断面M字形の突帯を貼付している。胴部内外面は板状工具によるナデを行い、内面下半には小口痕跡が残っている。83は下甕である。口縁部は内外に張り出し、上面は外傾する。胴部はやや開き気味に伸び、中位やや下に突帯を貼付する。内外面に板状工具の痕跡が残り、外面は縦方向、内面は下から上に斜め方向にナデを行う。

K0047（第39図、図版16）

Y－29・30区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。K0051の墓坑を切る。削平により、掘り方・甕棺の大半を失い、下甕と一部とこれに接口する上甕の破片が1点出土するのみである。また、合せ口部分



第38図　K0045・0046甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第39図　K0047・0048・0049甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

には粘土による目貼りが行われる。なお、整理作業の過程で1点出土していた上甕破片を紛失してしまったため、下甕を図示するのみとなっている。

出土遺物（第39図84）　84は下甕である。口縁部はT字形を呈し、上面は水平からわずかに内傾化傾向を示している。反転復元による作図であるが、長胴で上半部は丸みを有する。また頸部に1条、胴部中位よりやや下方に2条の鋭い三角突帯を貼付する。調整は内外面板状工具によるナデを行う。

K0048（第39図、図版16）

Y－29区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。K0051の墓坑を切る。削平により斜坑部分が残るのみで、

甕の上部が失われており、上甕の存否も明らかでない。現状では長軸0.9m、短軸0.8mの略円形を呈し、検出面からの深さは45cmを測る。

出土遺物（第39図85）　85は甕の上部を欠失している。長胴で上半は口縁部に向かってわずかにしまりを有する。突帯は胴部中位に2条の三角突帯を貼付する。内外面ナデを行い、内面には板状工具の小口痕跡が明瞭に認められる。

K0049（第39図、図版16）

X－29・30区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。掘り方は長軸1.75m、短軸1.05mの均整の取れた隅丸長方形を呈する。上甕は甕上部を打ち欠いたものを使用している。合せ口は呑口式で、合わせ目には目貼り粘土が認められる。

出土遺物（第39図86・87、図版41）　86は上甕である。胴部上半より打ち欠いている。胴部最大径の位置に2条の三角突帯を貼り付け、突帯以上は口縁部に向かってしまりを有する。87は下甕である。口縁部はT字形を呈し、上面は外傾している。胴部は上半のしまりは緩やかで、ほぼ直立に近い。胴部中位には三角突帯を2条貼付する。調整は外面下半には縦刷毛が残り、上半はナデ消している。内面は板状工具によるナデを行う。胴部外面から口縁部内面にかけて、黒色顔料が認められる。

K0050（第40図、図版16）

Y－32区で検出し、Ⅳ区に位置する。K0027と主軸方向をそろえて対になり、区画溝埋没後に掘削・埋置されたものである。切り合いで不明瞭な点もあるが、掘り方は長軸3m、短軸1.3mに復元できる。また、合せ口部分が乱れているが、本来は呑口式に上甕が挿入されていたものと考えられる。

出土遺物（第40図88・89、図版41）　88は上甕である。口縁部はく字形に屈曲し、内側には明確な稜が作られる。頸部には1条の三角突帯、胴部には2条の台形を貼付する。胴部は丸みを帯びた卵形を呈し、外面縦刷毛、内面ナデを行う。89は下甕である。内傾する逆L字形の口縁部を有し、頸部には台形突帯を貼付する。胴部は丸みを帯び、頸部にかけてしまりを有する。内外面に板状工具の小口痕が残る。

K0051（第40図、図版16）

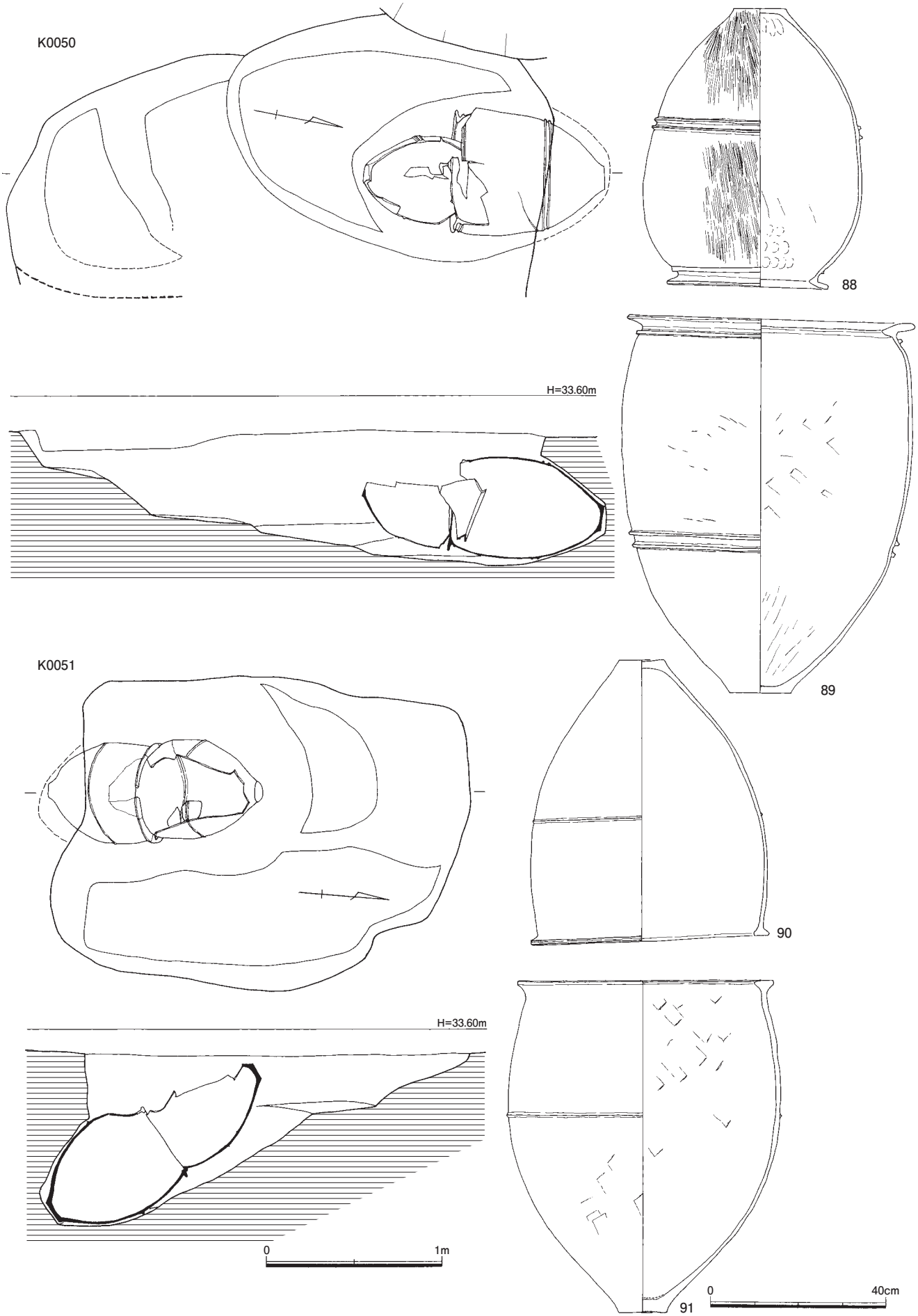
Y－29・30区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。K0047・0048に切られる。長軸2.2m、短軸1.65mのやや不整形な長方形を呈する。これより北～西側に古い型式の甕棺墓がまとまっており、甕棺墓群の形成初期の墓群と考えられる。掘り方は長軸2.2m、短軸1.8mを測り、やや不整であるが長方形に近い。東側長辺添いに一段平坦面を有し、更に10cmほど掘り下げて、甕棺の北側にも平坦面を作る。

出土遺物（第40図90・91、図版41）　90は上甕である。胴部中位にふくらみを有し、小さな三角突帯を添付する。口縁部は小さなT字形を呈し、内面には強い横ナデによる凹凸が残っている。調整は内外面ナデによる。91は下甕である。胴部は中位が膨らみ、口縁部近くで器壁内面がわずかに肥厚し、反転気味に立ちあがる。口縁部は小さなT字形を呈し、上面はわずかに内傾する。胴部中位には小さな三角突帯を有する。また、底部は厚さ3cm程を測り、厚手の上げ底をなす。胴部内外面に板状工具の痕跡が明瞭に残る。

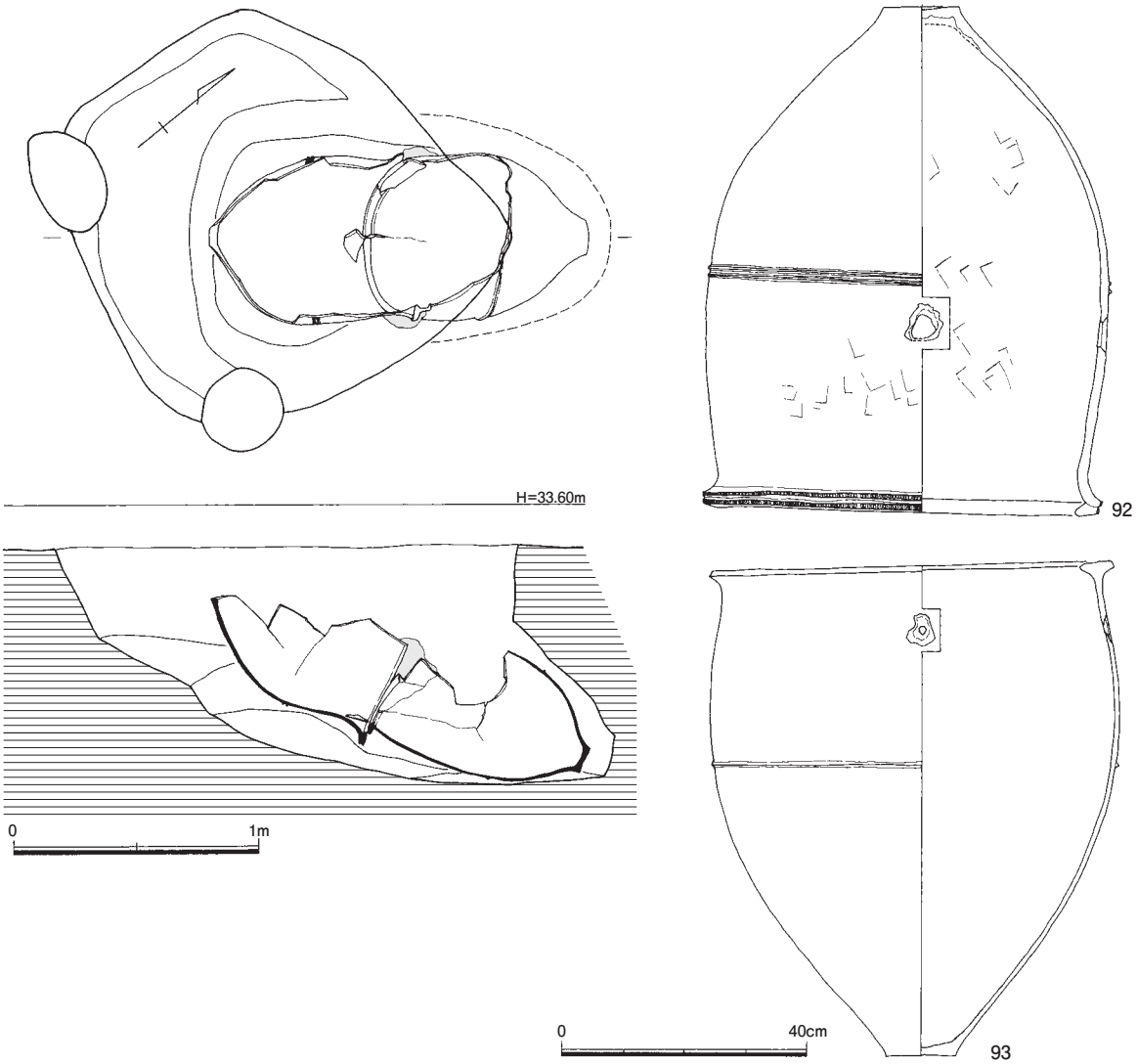
K0052（第41図、図版16）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。掘り方は一辺1.4m前後の方形を呈し、甕棺は掘り方の対角軸に合わせて斜坑に沿って埋置されている。検出時には上甕がずれていたが、本来は接口式と考えられ、合わせ目には粘土が貼付されている。

出土遺物（第41図、図版41）　92は上甕である。器壁はやや薄手となっているが、底部は厚手で径は小さめである。胴部はやや下膨れ状で、中位に2条の三角突帯を貼付する。胴部上位は口縁部に向かっ



第40図　K0050・0051甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



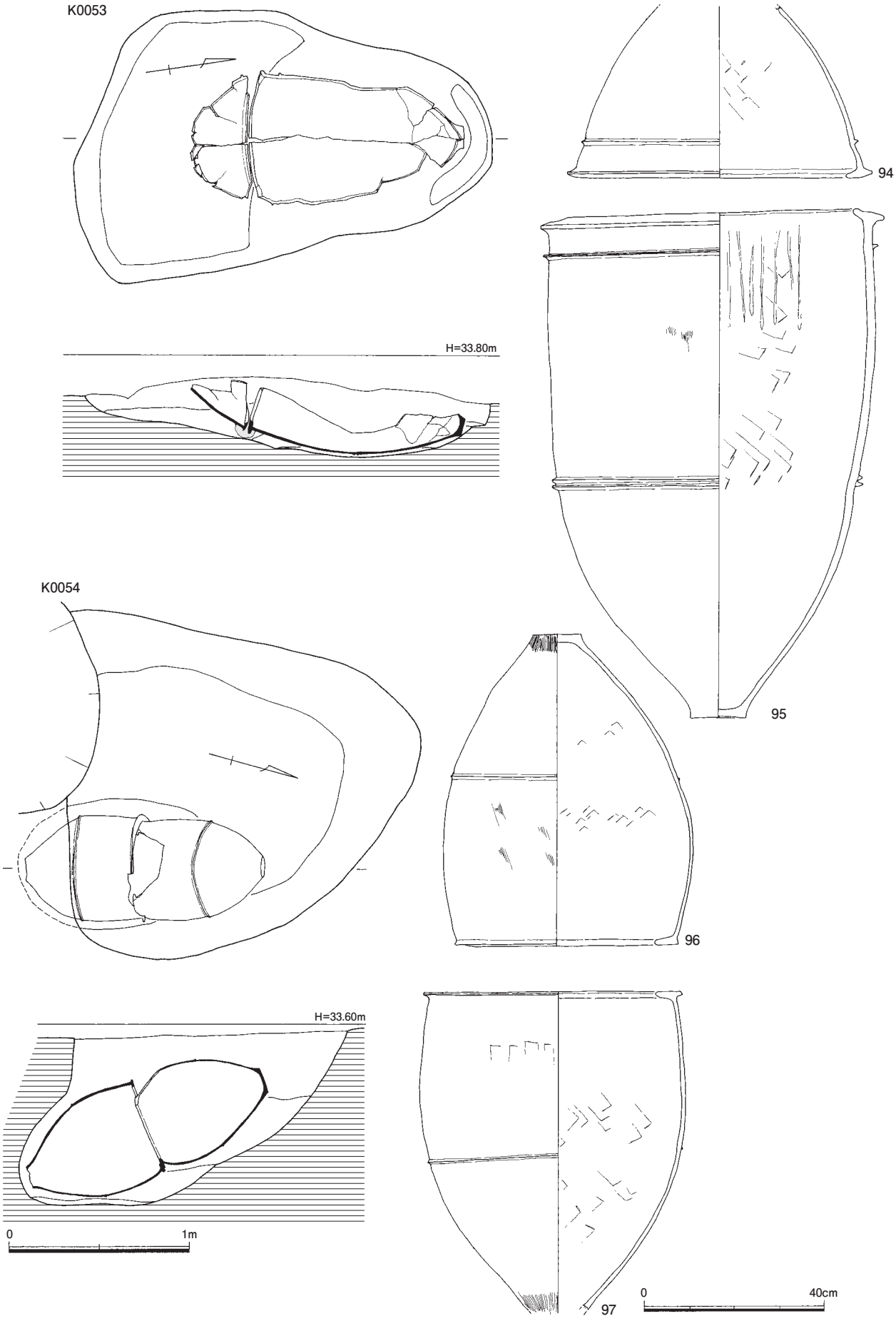
第41図　K0052甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

て緩やかにしまるが、頸部は如意形に反転する。端部内面には粘土帯を貼り付けるが、内側に張り出し、上面端はほぼ水平となる。また、外面には刻みを施す。胴部内外面には板状工具によるナデを行い、突帯直上には外部からの穿孔が行われる。93は下甕である。胴部は上位に最大径を有し、中ほどに1条の三角突帯を貼付する。口縁部近くでわずかに反転気味に立ちあがり、この部分に穿孔が行われる。また、口縁部は小さなT字形を呈し、上面は内傾している。胴部中位には小さな三角突帯を有する。胴部内外面はナデを行う。

K0053（第42図、図版17）

Y－27区で検出し、Ⅱ区に位置する。削平により甕の上部が失われており、残存状態は不良である。長軸2.2m、短軸1.5mを測り、検出面からの深さは45cmを測る。接口式で目貼り粘土を有する。

出土遺物（第42図94・95、図版42）　94は上甕である。胴部は口縁部に向かって外方に開き、T字形の口縁部は外傾する。内面には小口痕跡が残る。95は下甕である。砲弾形の胴部は上半が直線的に伸び、T字形の口縁部は外傾する。突帯は口縁下に1条、胴部に2条の高い三角突帯を有する。胴部外面にわずかに刷毛目が残り、内面には上部にヘラ状工具によるナデ痕跡が認められ、全体に板状工具



第42図　K0053・0054甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

の小口痕跡が残る。

K0054（第42図、図版17）

Y－27・28区で検出し、Ⅱ区南端部に位置する。掘り方は長軸1.95mを測り、甕棺は掘り方東壁添いに偏って挿入・埋置されている。甕棺は接口式で上甕の口縁部外周を打ち欠いている。また、下甕は底部を打ち欠いている。

出土遺物（第42図96・97、図版42）　96は上甕である。胴部は丸みを帯び、最大径を上位に有する。突帯はやや下がり目の位置に小さな三角突帯を貼付する。口縁部は外側を欠くが、水平で内側に強く張り出す。内外面ナデを行い、外面底部付近には刷毛目が残る。97は下甕である。胴部は緩やかに丸みを帯び、三角突帯を中位に貼り付ける。口縁部は水平で、内側に強く張り出しを有する。内外面に板状工具によるナデ痕跡が認められるが、底部付近では外面に縦刷毛が残る。

K0055（第43図、図版17）

Y－27区で検出し、Ⅱ区南端部に位置する。埋土は灰色土で、後世の耕作等の影響で崩落し撹乱を受けたものと考えられる。上下両甕の底部～墓坑底に接する部分は現位置を保っているものと考えられる。なお、破片は大半が墓坑内に投棄されたようで、上甕は1／4を失うものの、下甕はほぼ完形に復元できる。

出土遺物（第43図98・99、図版42）　98は上甕である。頸部～口縁部を打ち欠いている。胴部は丸みが強く、最大径の位置に、高い三角突帯が2条貼付される。調製は内外面ナデによる。99は下甕である。頸部付近～口縁部を打ち欠いている。胴部には2条の台形突帯を貼り付ける。調整は内面に板状工具による横～斜めのナデ痕跡が認められ、外面にはナデ消されなかった刷毛目が残る。

K0056（第43図、図版17）

Y－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する。K0058と対になっており、切り合い関係からはK0058→K0056の先後関係となる。また、埋土上面では小形棺であるK0057を確認している。掘り方は一辺1.5～2mの略隅丸方形を呈し、階段状に掘り下げたのち、斜坑を掘削して甕棺を埋置している。部分的に合わせ目に粘土が認められる。

出土遺物（第43図100・101、図版42）　100は上甕の鉢である。胴部上位は直立し、外傾する口縁部は内外に張り出している。また、口縁下にはM字形突帯が貼付される。内外面ナデを行い、内面には板状工具の小口痕が認められる。101は下甕である。胴部上半は直立し、中位にM字形突帯が貼付される。突帯下には穿孔が認められる。口縁部は特に内側に強く張り出し、外面端部には刻みが施される。内外面ナデにより、内面は上部に立て方向の指ナデ、それ以下は板状によるナデを行う。

K0057（第44図）

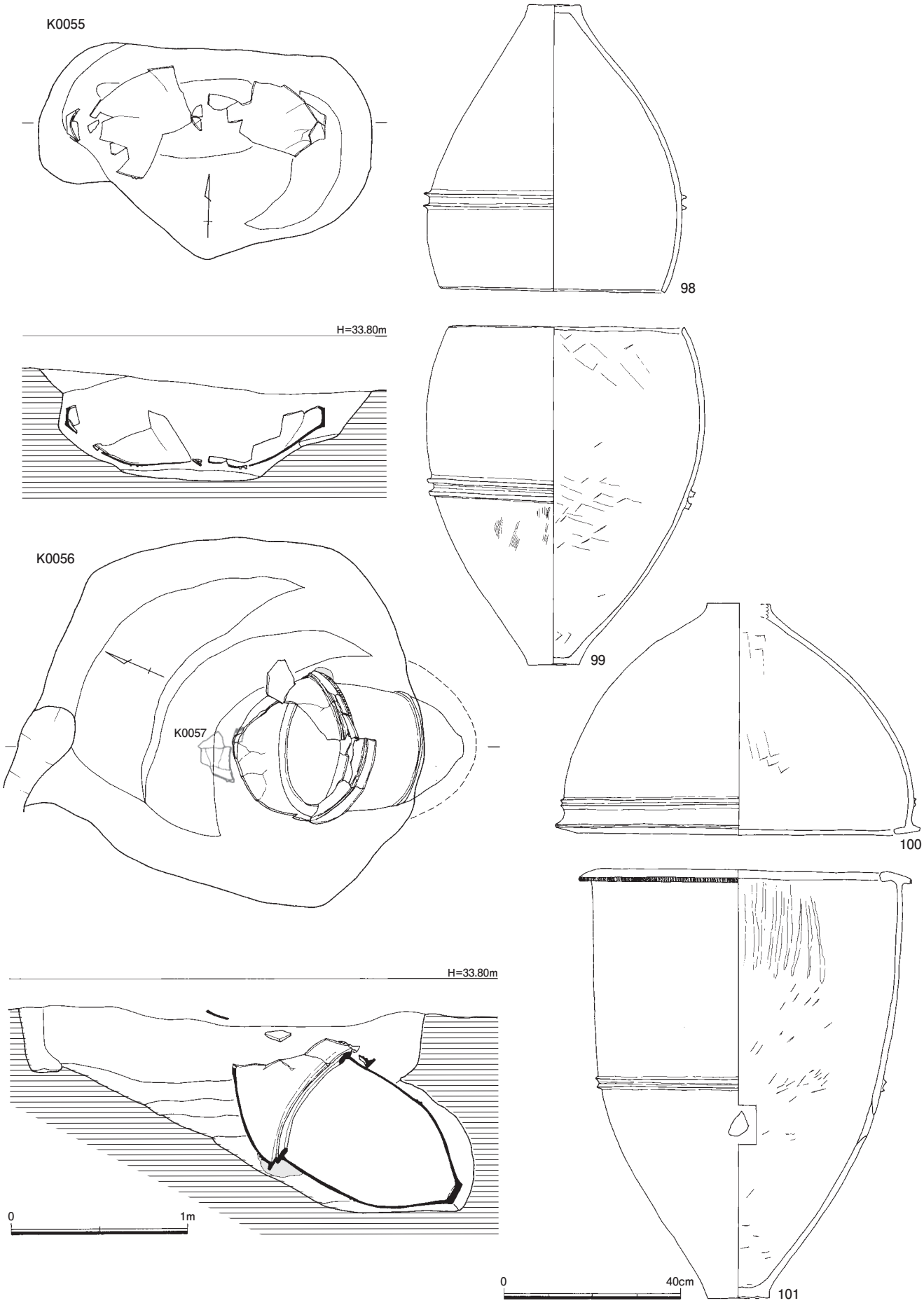
Y－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する小形の合わせ口甕棺である。K0056埋土上面で検出する。削平が著しく依存状況は不良で、掘り方は不明である。

出土遺物（第44図102・103）　102は上甕である。上半の1／4ほどの破片で、鋤形の口縁部の下には突帯を有する。胴部調整は内面ナデ、外面縦刷毛による。103は下甕で鋤形の口縁を有する。胴部上半は丸みを帯び、外面には縦刷毛、内面はナデを行う。

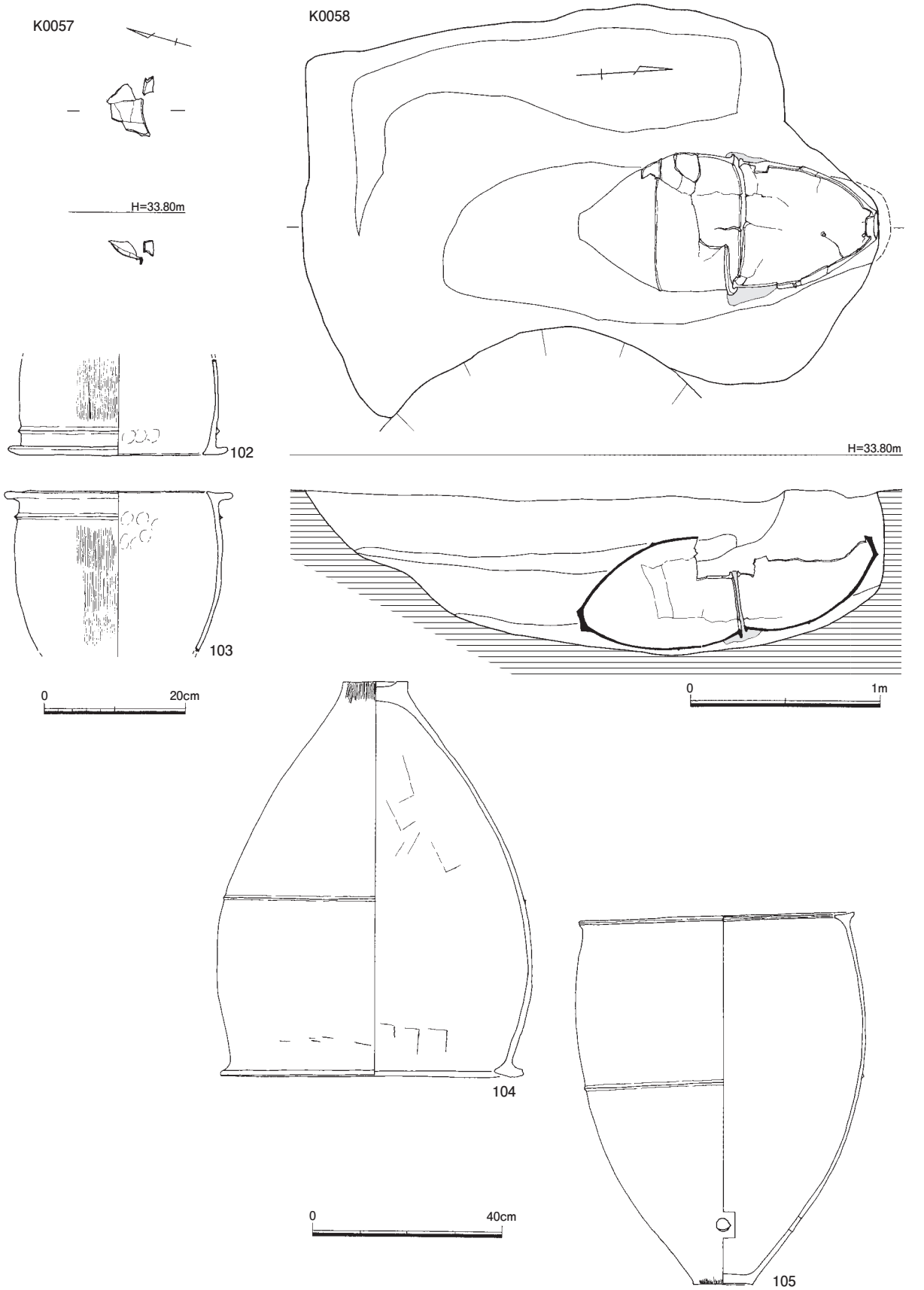
K0058（第44図、図版17）

Y－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する。K0056と対になっており、並列しこれに切られている。掘り方は長軸2.5m、短軸2m程度の長方形を呈し、斜坑上部は崩落のため、張り出し状となっている。

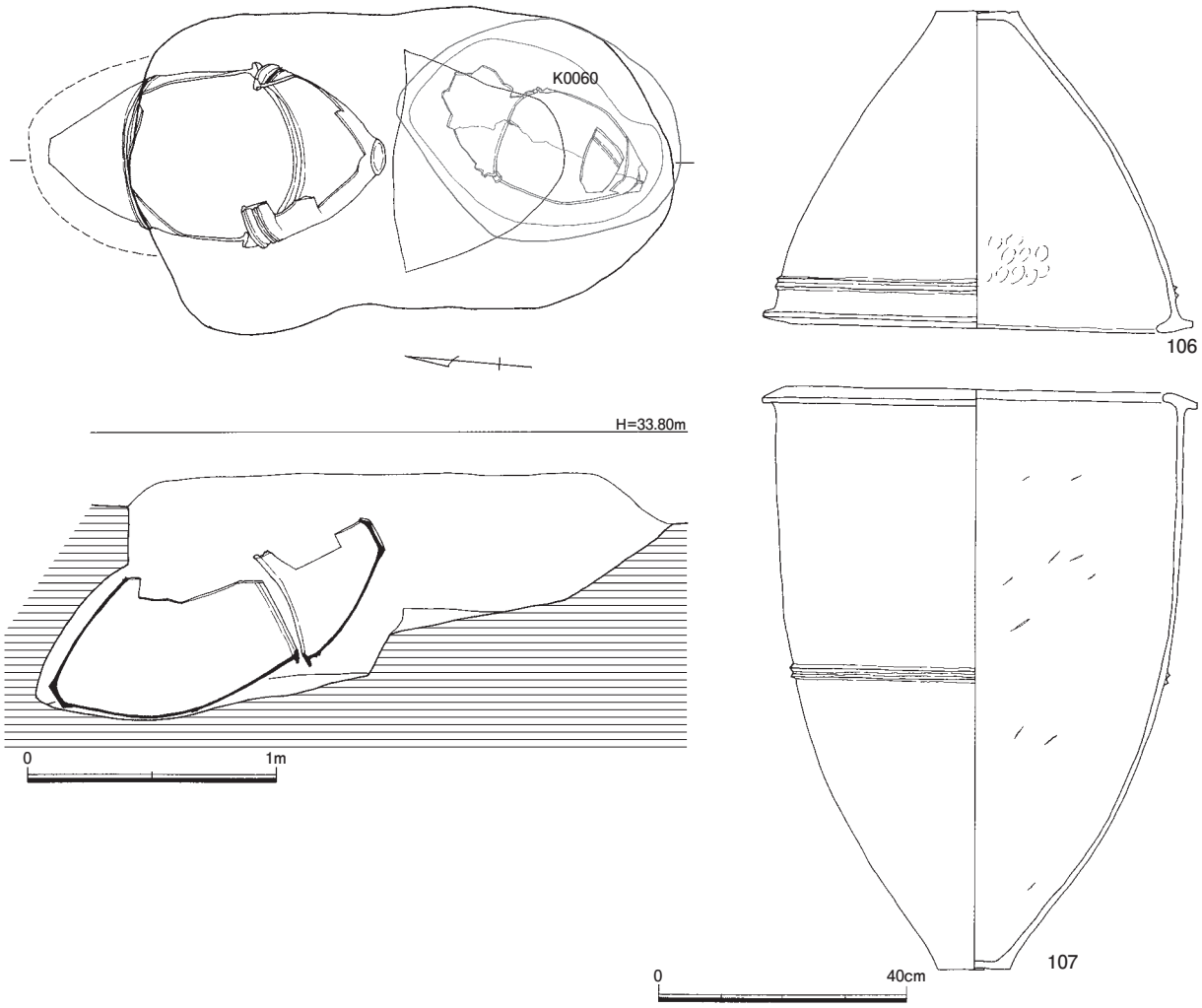
出土遺物（第44図104・105、図版42）　104は上甕である。胴部上位に最大径を有し、中位には三角突帯を1条貼付する。口縁部は内傾し、断面はT字形に近い。また、底部は上げ底である。内外面に板



第43図　K0055・0056甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第44図　K0057・0058甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、102・103は1/8、104・105は1/12）



第45図　K0059甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

状工具の小口痕が残り、外面最下位には縦刷毛が認められる。105は下甕である。口縁部は内傾し、断面はＴ字形を呈する。胴部は丸みを帯び、上位に最大径を有する。胴部内外面はナデを行うが、底部付近には刷毛目が残る。また、胴部下位に穿孔が行われる。

K0059（第45図、図版17）

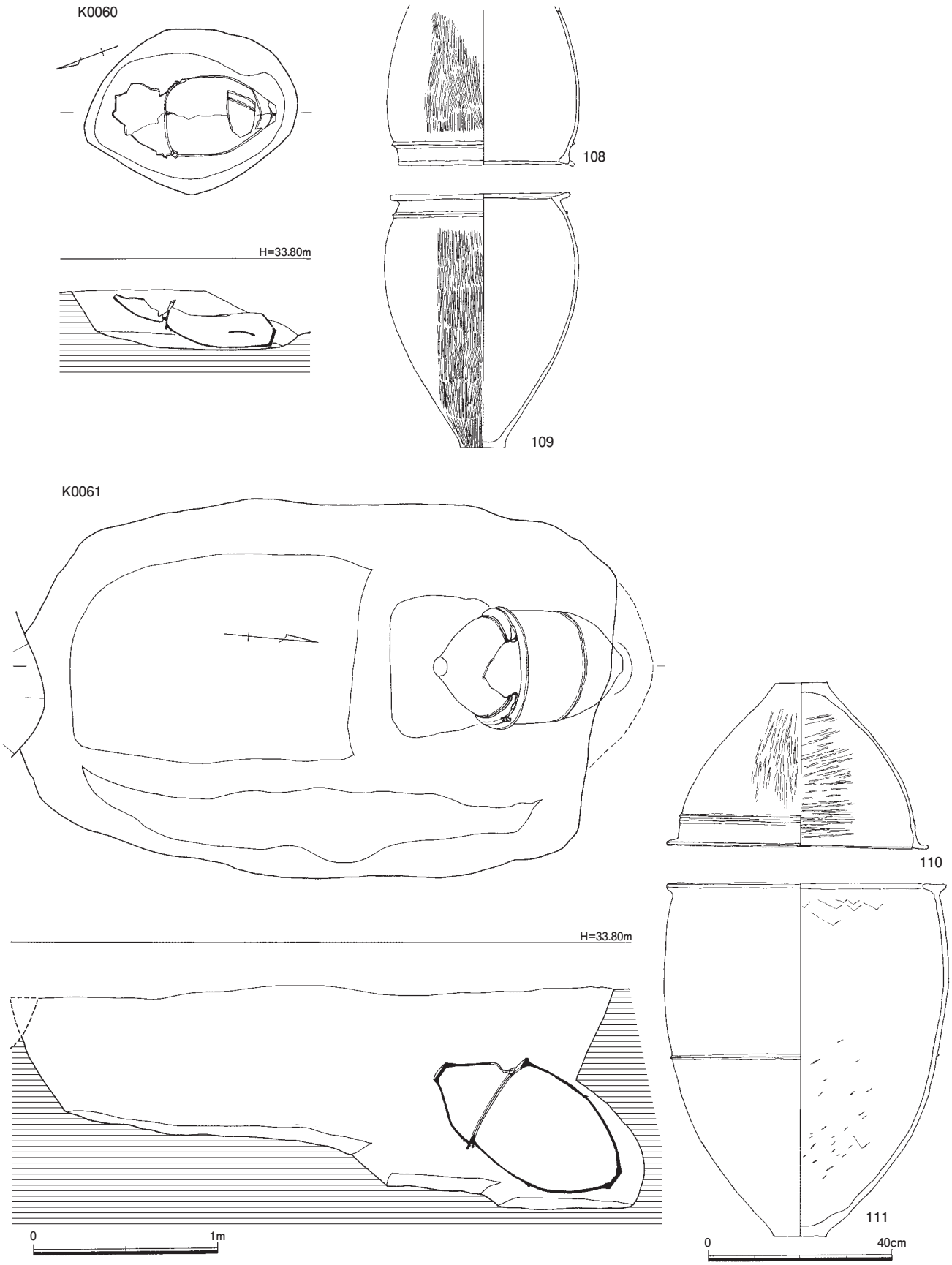
Ｙ－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する。棺の挿入方向は逆であるが、東に位置するK0062と対になるものと考えられる。また掘り方南側は小形棺のK0060に切られている。掘り方は長軸2.2m、短軸1.2m程度の隅丸長方形を呈し、北側小口部分に斜坑を有し、下甕を挿入する。

出土遺物（第45図、図版43）　106は上甕である。鉢の胴部は口縁部に向かって広がり、口縁下にはＭ字形突帯を貼付する。口縁はＴ字形を呈し、上面は外傾する。107は下甕である。胴部上半は直立し、中位にＭ字形突帯を貼り付ける。口縁部は内外に張り出し、上面は外傾する。

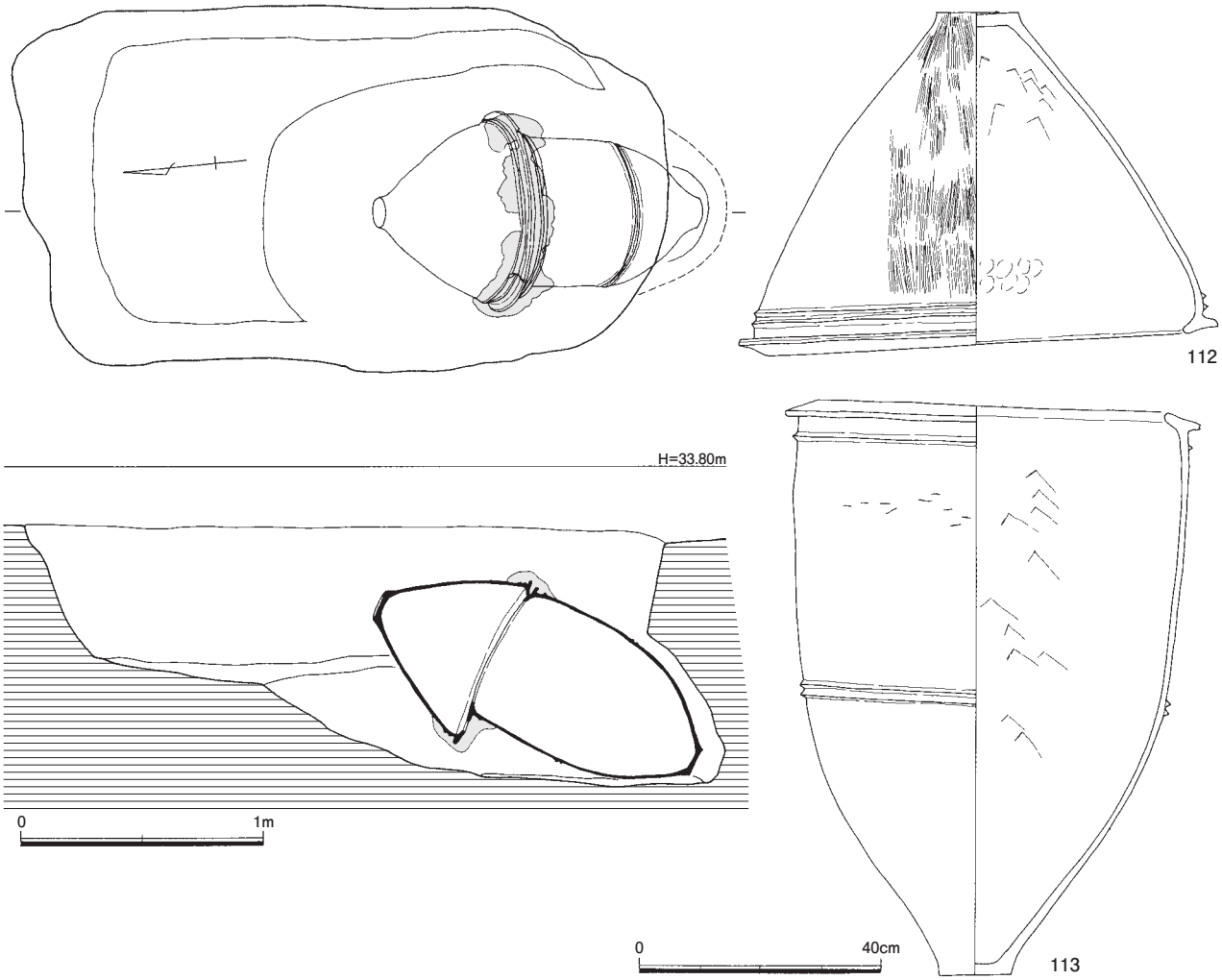
K0060（第46図、図版17）

Ｙ－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する。K0059掘り方上面で確認した小形棺である。掘り方は長軸1.1m、短軸0.9mの長円形を呈し、検出面からの深さは30cmである。

出土遺物（第46図108・109）　108は上甕であり、下半を欠失する。断面鋤形口縁部の外側を打ち欠いて使用している。胴部は上位が膨らみ、外面縦刷毛を行う。109は下甕である。口縁部の断面は鋤形



第46図　K0060・0061甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第47図　K0062甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

を呈し、上面は内傾する。底部は平底で、胴部最大径は上位に有し、口縁下には突帯を貼付する。胴部調整は内面ナデ、外面縦刷毛である。

K0061（第46図、図版18）

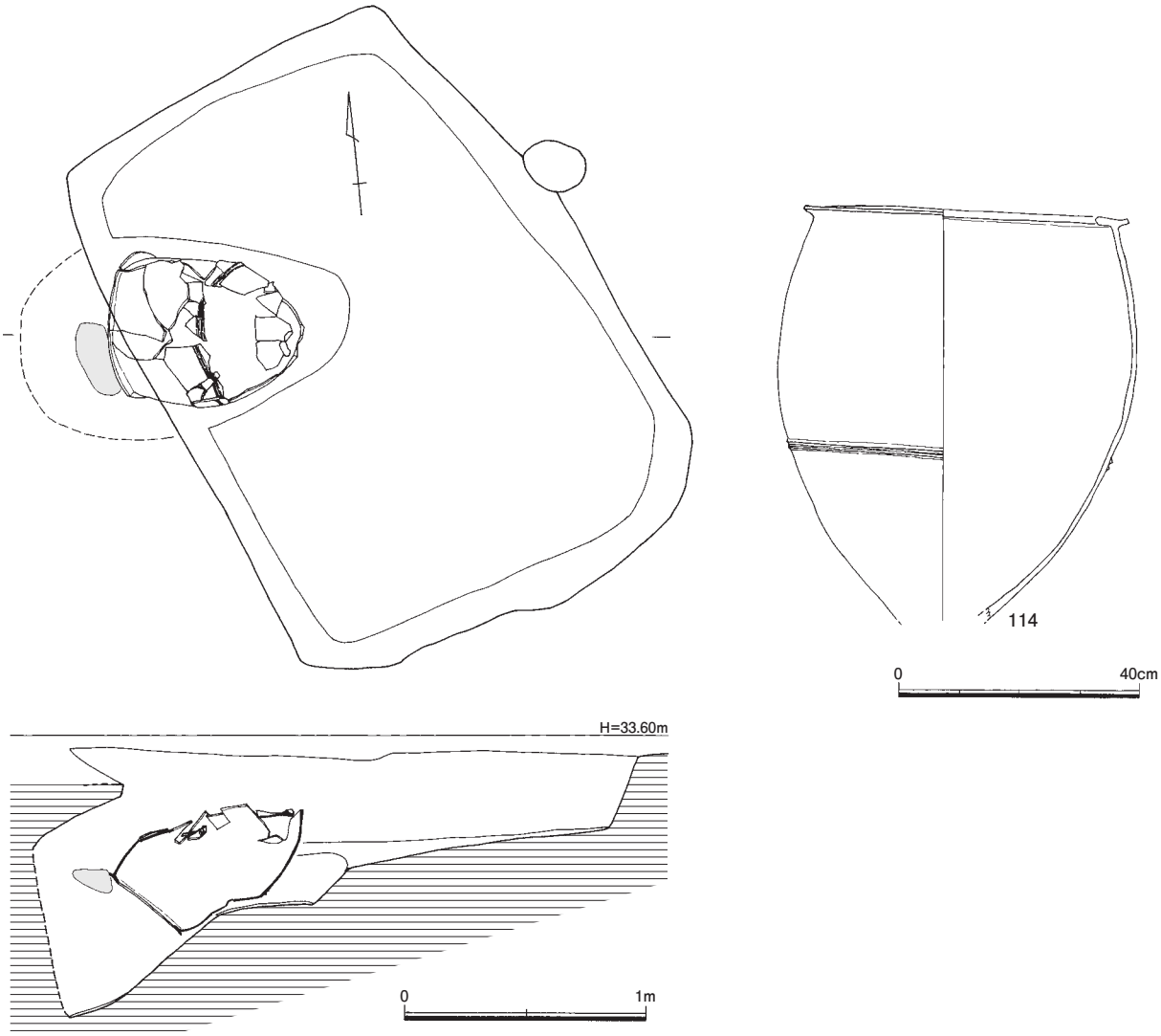
Y－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する。東側に位置するK0154と対になる。掘り方は長軸3.2m、短軸2mの隅丸長方形を呈する。東側長辺沿いに幅30cm程度の平坦面を有し、更に長軸に沿い階段状に掘り下げ、北側小口部に斜坑を設ける。

出土遺物（第46図110・111、図版43）　110は上甕である。逆L字形の口縁部を有する鉢である。突帯はM字形を呈し、胴部外面縦方向のミガキ、内面は横～斜方向のミガキを行う。111は下甕である。胴部最大径は上位に有し、小さな三角突帯を中位に貼付する。口縁部は内側により張り出し、水平となる。調整は内外面ナデにより、内面には小口痕跡が明瞭に残っている。

K0062（第47図、図版18）

Y－28区で検出し、Ⅲ区北端部に位置する。西側に位置するK0059と対になる。掘り方は長軸2.65m、短軸1.5mの均整の取れた隅丸長方形を呈する。断面形状は北側に平坦面を有し、南側小口に向かって斜坑を掘り込む。

出土遺物（第47図、図版43）　112は上甕とした鉢である。口縁部は外傾し、口縁下には2条の三角突



第48図　K0063甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

帯を有する。胴部外面には縦刷毛を行い、内面には小口痕跡が残る。113は下甕である。口縁部は内外面に張り出し、上面は外傾する。胴部上半は直立し、中位に2条の三角突帯を有する。内外面ナデにより、共に板状工具の痕跡が残っている。

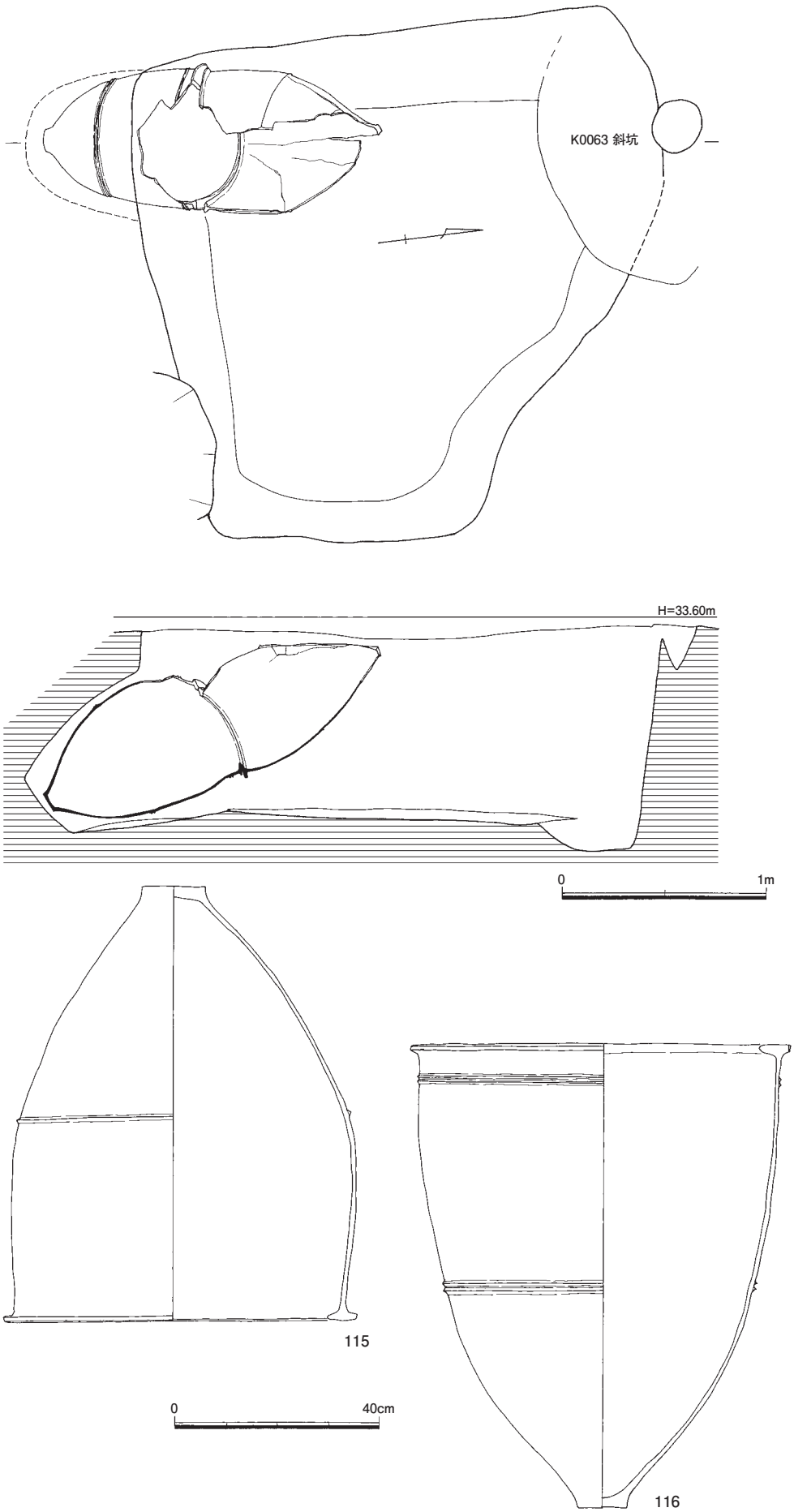
K0063（第48図、図版18）

Y－28・29区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。長軸2.6m、短軸1.8mの長方形土坑の西側より斜坑を掘り込み、甕を倒置して埋納している。斜坑部分と長方形土坑の主軸方位の相違などから、本来別の遺構であった可能性も考えられる。また、斜坑部の断面形状も不明瞭である。倒置甕の口縁部の一部には粘土が貼付されている。

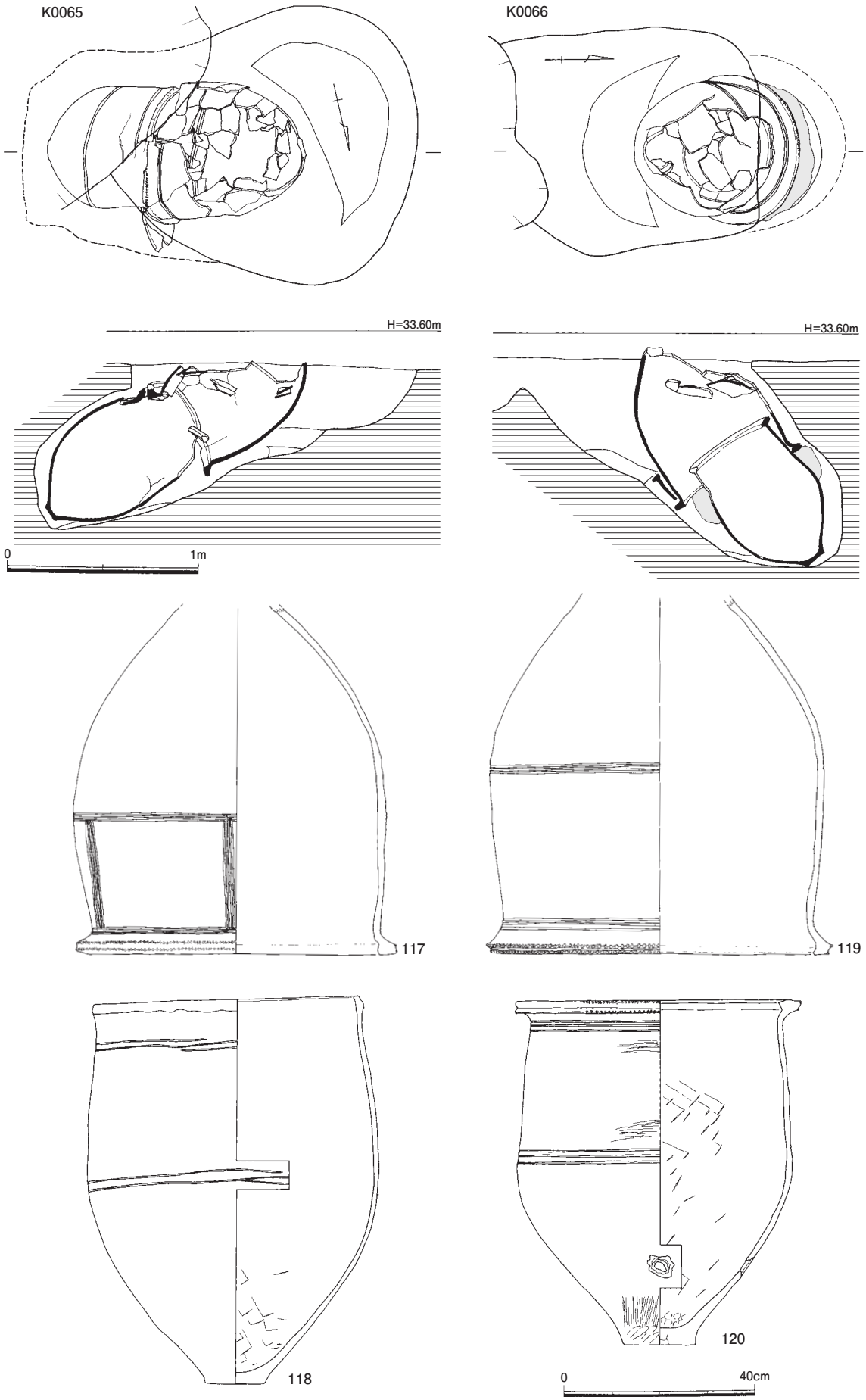
出土遺物（第48図）　114は胴部上位に最大径を有し、中位より下に2条の三角突帯を貼り付ける。口縁部は内側に強く張り出しを有し、胴部は内外面板状工具によるナデを行う。

K0064（第49図、図版18）

Y－28・29区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。K0063との切り合い関係は不明瞭なまま掘り下げている。掘り方は一辺2.4～2.6mの方形を指向しているものと考えられる。甕棺は西壁沿いに斜坑を掘り込んで埋置している。



第49図　K0064甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第50図　K0065・0066甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

出土遺物（第49図、図版43）　115は上甕である。口縁部はＴ字形を呈し、上面は水平となる。胴部は口縁下でわずかに内側に張り出しを有する。突帯は胴部中位に貼付される。調整は内外面ナデにより、外面には全体に黒色顔料が認められる。116は下甕である。胴部は開き気味に立ち上がり、中位やや下及び口縁下には共に２条の三角突帯を有する。口縁部は水平で、内側により張り出している。また、口縁部外面には刻みが行われる。胴部は内外面ナデにより、内面上半には黒色顔料が残っている。口縁下には突帯を貼付しているが、開き気味で太目の胴部に張り出しが小さく水平な口縁部など古相を示している。

K0065（第50図、図版18）

Ｘ・Ｙ－29区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。掘り方東側を木棺墓と切り合っており、階段状の斜坑部分のみが残存している。合わせ目の部分が破損しており明瞭でないが、下甕の口縁部を打ち欠いた覆口式と考えられる。

出土遺物（第50図117・118、図版44）　117は上甕である胴部は中位が大きく張り出し、口縁部に向かってしまり、そこから如意形に外側に開く。口縁部の上面には粘土帯を貼付し、外面には刻みを施す。胴部の調整は頸部内面に横刷毛がのこり、そのほかはナデを行う。胴部最大径はやや上部にあり、ここに３条の沈線、また頸部にも３条の沈線を刻み、その間に４条一組の縦方向の沈線がみられる。内面に黒色顔料が認められる。118は下甕である。細身の胴部中位に最大径を有し、頸部付近はやや反転して立ち上がる。口縁部は外側を打ち欠いており、本来は短い逆Ｌ字形の口縁部であったと考えられる。胴部には上下に螺旋状の沈線が巡り、内外面は板状工具によるナデを行う。

K0066（第50図、図版18）

Ｘ－29区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。現状で長軸1.4m以上、短軸1.1mの長方形を呈し、平坦面を有して北側に斜坑を掘り込んでいる。甕棺は覆口式で上甕口縁部と下甕の間に分厚く粘土が充填されている。また、下甕口縁部の破片が上甕と墓坑の間から出土しており、埋葬時にはすでに下甕口縁部は破損しており、そのままの状態で上甕をかぶせたものである。

出土遺物（第50図119・120、図版44）　119は上甕である。胴部中位に最大径を有し、この部分と頸部に３条の沈線を刻む。頸部からは如意状に広がり、内面に粘土帯を貼付する。口縁部は上面を水平にし、外側には刻みを有する。胴部の調整は内外面板状工具によるナデを行う。120は下甕である。胴部最大径は中位よりやや下にあり、頸部で大きく外反する。口縁部の上面に粘土帯を貼付し、外面には刻みを行う。胴部外面には横方向のミガキを行い、底部付近には刷毛目が残されている。内面は板状工具の小口痕が明瞭に残る。また、胴部下位には内側から穿孔が行われ、胴部中位及び頸部には沈線を巡らせる。

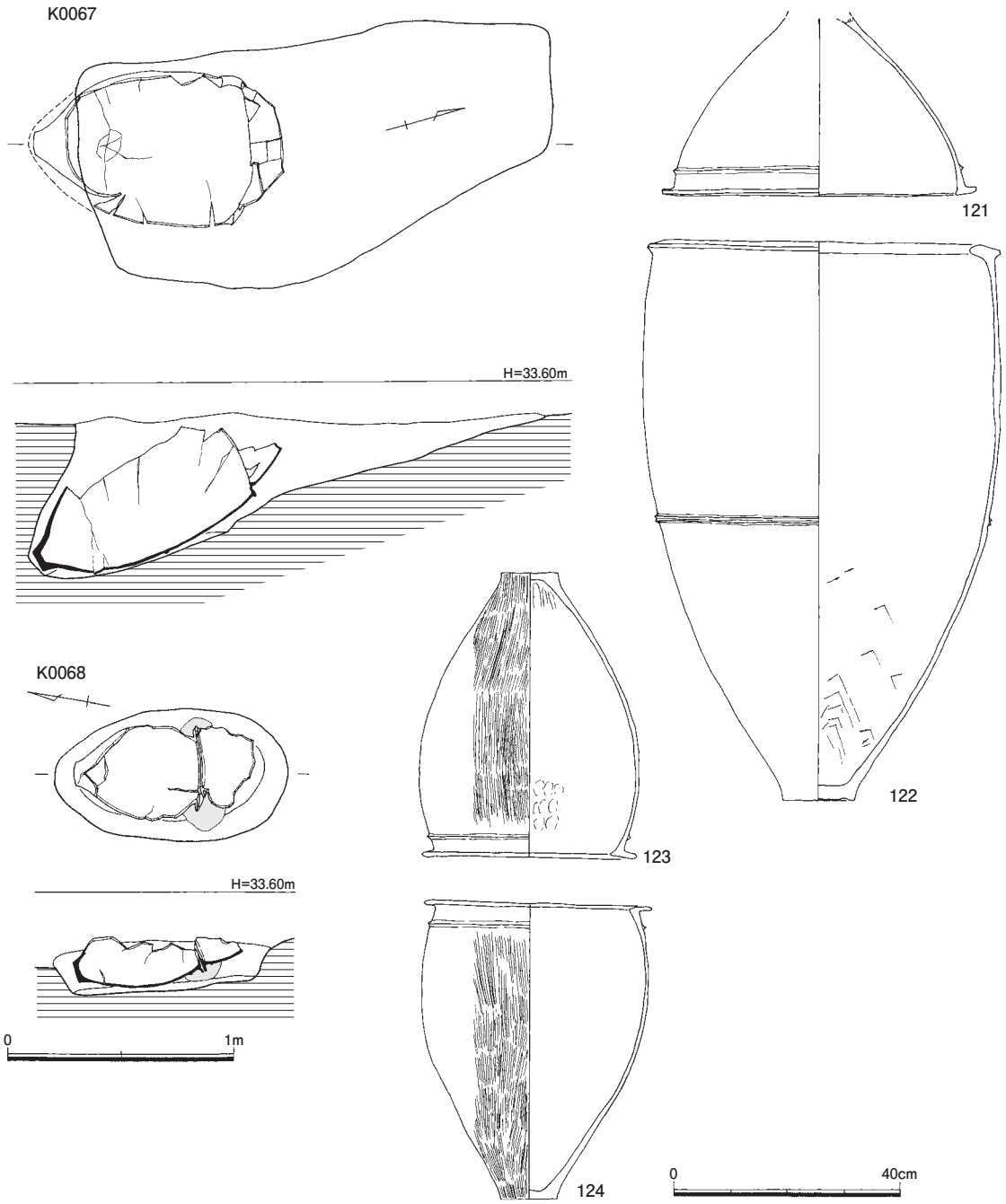
K0067（第51図、図版19）

Ｘ－29区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。D0996を切り、これに後出する。長軸2.1m以上、短軸1.0mのやや歪んだ長方形を呈し、南側に斜坑を掘り込んでいる。

出土遺物（第51図121・122、図版44）　121は上甕の鉢である。口縁部は外傾し、断面逆Ｌ字形を呈する。胴部調整は内外面ナデによる。122は下甕である。胴部上半は口縁部にかけてややしまり気味で、中位にＭ字形突帯を有する。口縁部は内側に突出し、外への張り出しは弱い。胴部調整は内外面ナデにより、内面には板状工具の小口痕が残る。

K0068（第51図、図版19）

Ｙ－27区で検出し、Ⅱ区に位置する。K0080の上面から掘り込んでおり、これに後出するものである。接口式の小形棺で、合わせ目には目貼りの粘土が貼付されている。



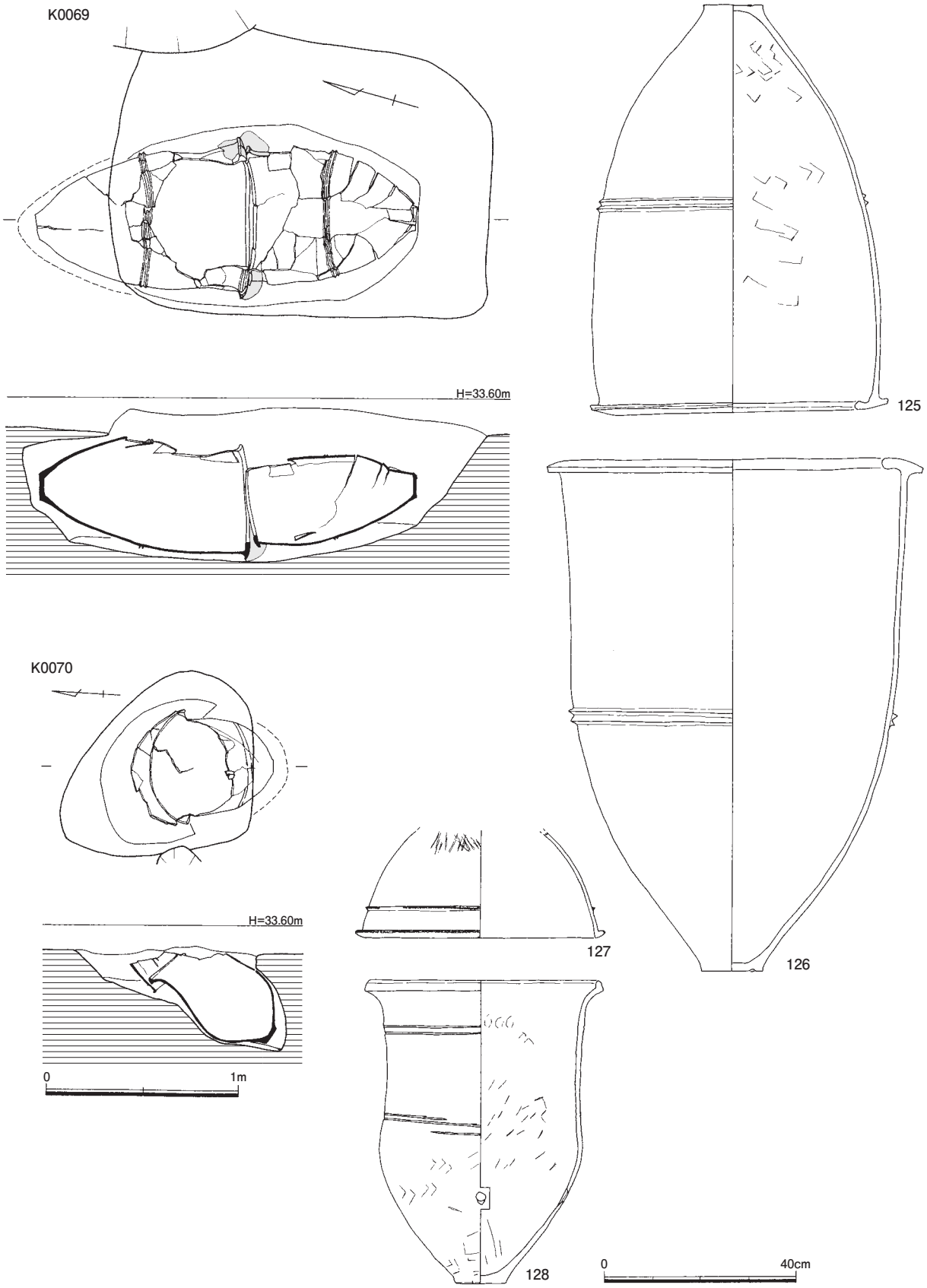
第51図　K0067・0068甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

出土遺物（第51図123・124、図版44）　123は上甕である。鋤形の口縁部は内傾し、胴部は上位に最大径を有する。調整は外面縦刷毛、内面ナデである。124は下甕で、123同様の平底の甕である。

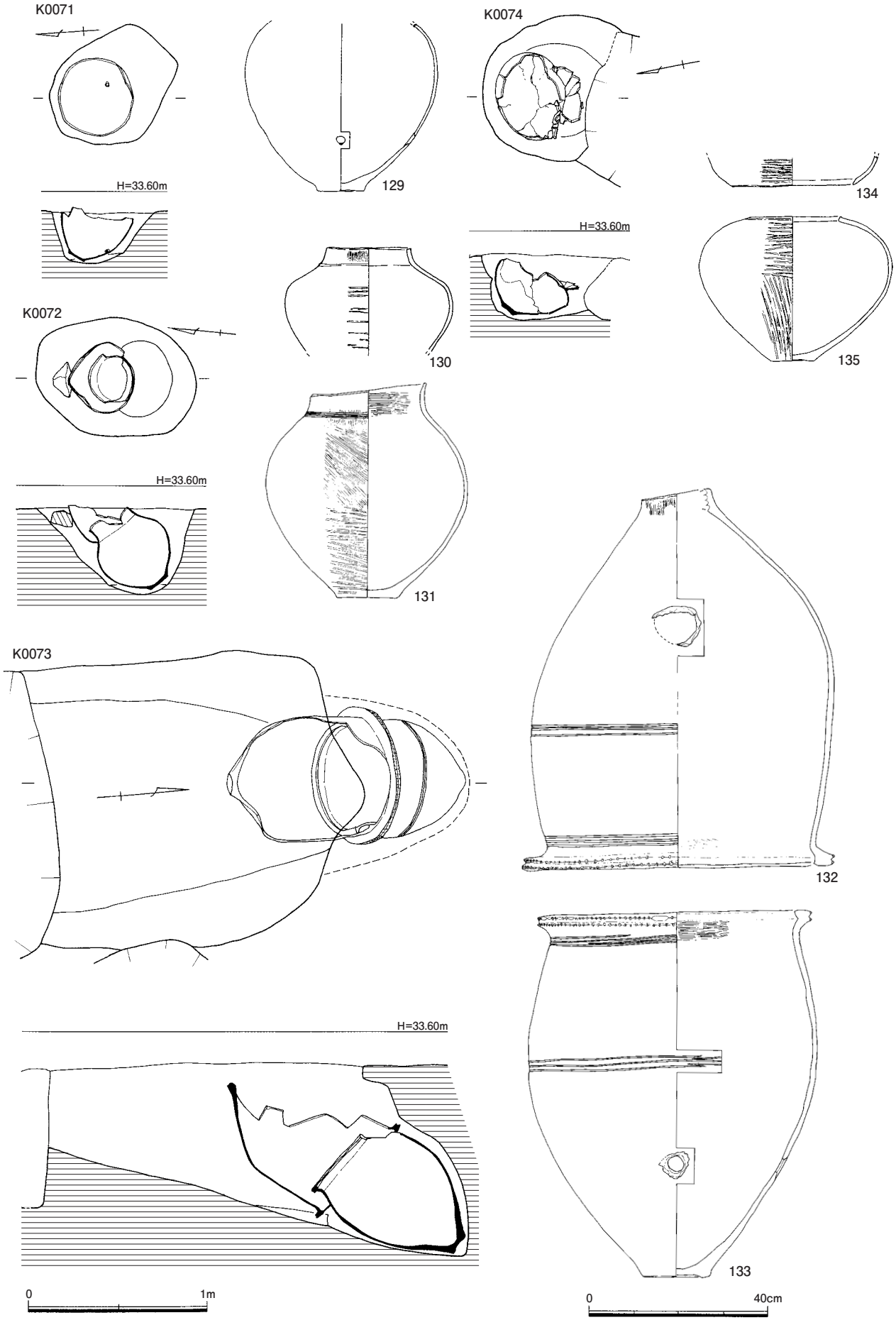
K0069（第52図、図版19）

Y－28区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。西側に位置するK0157と対になり、甕棺の挿入方向は挿し違いとなっている。現状で掘り方は長軸2m、短軸1.45mの隅丸長方形となっているが、本来の斜坑部分が残存しているものと考えられる。

出土遺物（第52図125・126、図版44）　125は上甕である。胴部は砲弾形を呈し、頸部に向かって、緩やかにしまっている。口縁部は内外に張り出し、上面は外傾する。胴部中位には2条の三角突帯を



第52図　K0069・0070甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第53図　K0071・0072・0073・0074甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

有し、内外面はナデによる。126は下甕である。外傾する口縁部は、内外両側に張り出す。胴部上半は開き気味に伸び、長大な砲弾形を呈する。調整は内外面ナデにより、内面には黒色顔料が残る。

K0070（第52図、図版19）

X・Y－28区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。周辺には古式に位置付けられる小形棺のK0071・0072・0143がまとまっている。また、この直近には後出する大形の甕棺は配置されていない。覆口式で鉢と甕の組み合わせである。

出土遺物（第52図127・128、図版45）　127上甕の鉢である。口縁部は外側に粘土帯を貼りつけ、断面三角形を呈する。口縁下の突帯と口縁部外面には刻みが施される。調整は内面ナデ、外面は上半ナデ、下半ミガキが行われる。また、内面に黒色顔料が残る。128は下甕である。胴部最大径は中位より下方にあり、上半は口縁部にかけて広がりを有する。口縁部は上面に粘土帯を貼付し、上方に肥厚させる。また胴部中位と頸部付近に沈線を刻む。調整は内外面板状工具によるナデを行う。

K0071（第53図、図版19）

X－28区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。周辺には小形棺のK0071・0072・0143がまとまっている。削平により下甕である壺の下半が残存するのみである。特にK0070・0071・0072の周辺には土壙墓・木棺墓・甕棺墓等後続の埋葬遺構が掘削されておらず、一定の空間地が形成されている。

出土遺物（第53図129）　129は壺の下半である。底部はわずかに上げ底気味で、底部外面の立ち上がりは直に近く、胴部との境界は明瞭である。胴部は偏球形を呈し、最大径を上位に有する。調整はナデによる。胴部下位には外面から穿孔を行う。

K0072（第53図、図版19）

X－28区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。K0071と主軸方位を揃え、その北側に隣接する。上下両甕とも打ち欠きの壺を使用し、上甕は打ち欠いた胴部下半から下甕を覆う覆口式の甕棺墓である。上甕と掘り方底面との間に安定に供するために、拳大の自然礫を据えている。

出土遺物（第53図130・131、図版45）　130は上甕の壺である。口縁部及び胴部下半を打ち欠く。胴部は偏球形を呈し、頸部に突帯を有する。突帯上部には縦刷毛、胴部には横方向のミガキを行う。131は下甕である。壺の口縁部を打ち欠いている。底部はほぼ平底で、胴部との境は不明瞭となる。胴部は球形に近く、頸部には3条の沈線を刻む。調整は胴部上半には縦刷毛の後粗いヘラミガキを行い、下半はヘラミガキが丁寧である。内面は胴部がナデ、頸部には横刷毛を行う。

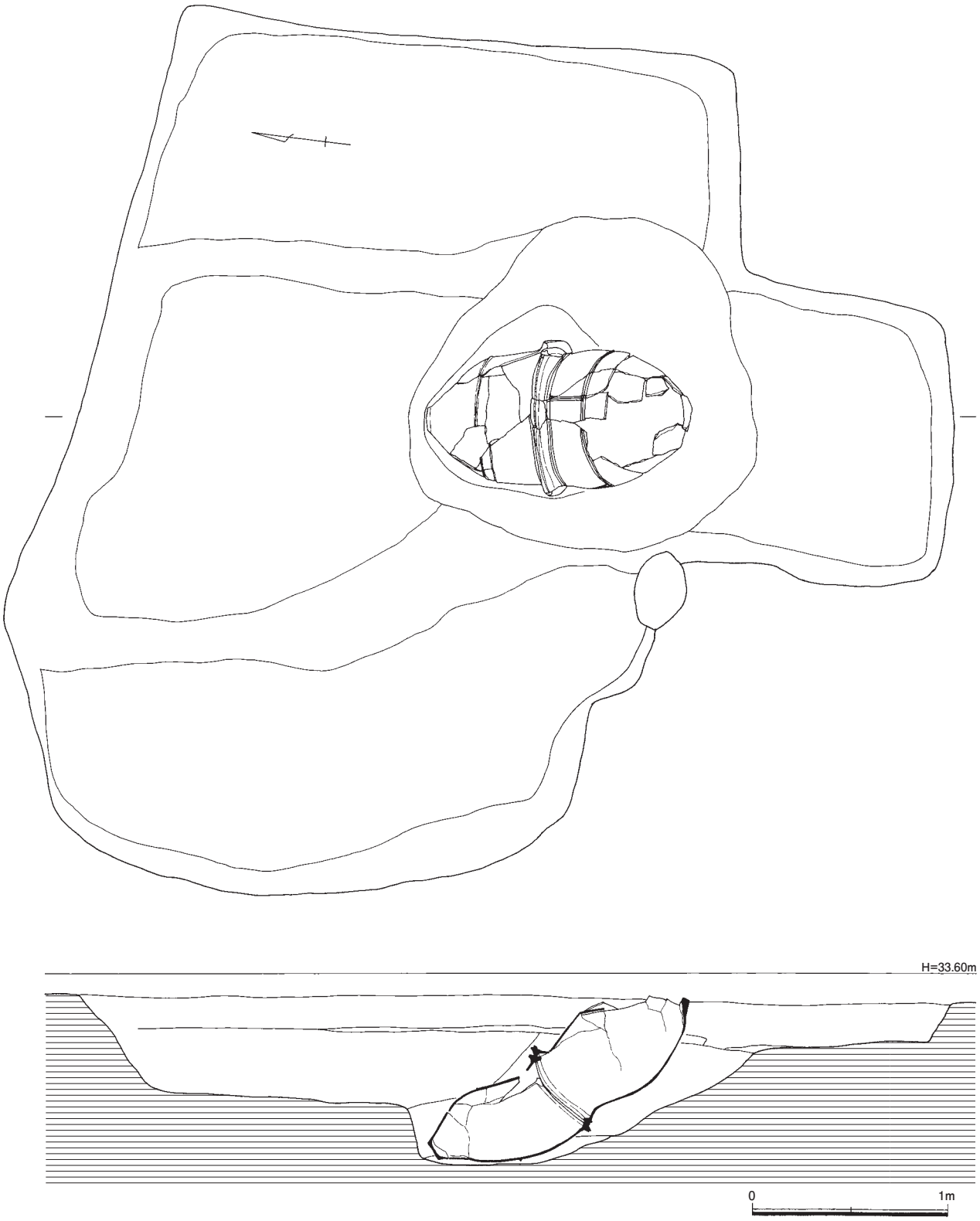
K0073（第53図、図版19）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。掘り方南側を0469木棺墓に切られている。掘り方は長軸1.8m以上、短軸1.6mの隅丸長方形を呈し、底面は一定の傾斜を有しながら斜坑に至っている。甕棺は覆口式の大形棺である。

出土遺物（第53図132・133、図版45）　上下とも所謂金海式甕棺である。132は上甕で歪が大きい。口縁部の上面に粘土帯を載せ、上面は水平にし、外面に刻みを施す。胴部外面には頸部及び胴部上位に沈線を有する。調整は胴部内面ナデ、口縁部内面横刷毛、胴部外面はナデ、底部外面に縦刷毛が残る。胴部下位には穿孔が行われる。133は下甕で、上げ底の底部からふくらみを有する胴部の最大径は中位にある。調整は胴部内外面ともに板状工具によるナデを行い、口縁部内面に横刷毛が認められる。外面には沈線が施されるが始点と終点が結束しない。また下位には内側からの穿孔を有する。

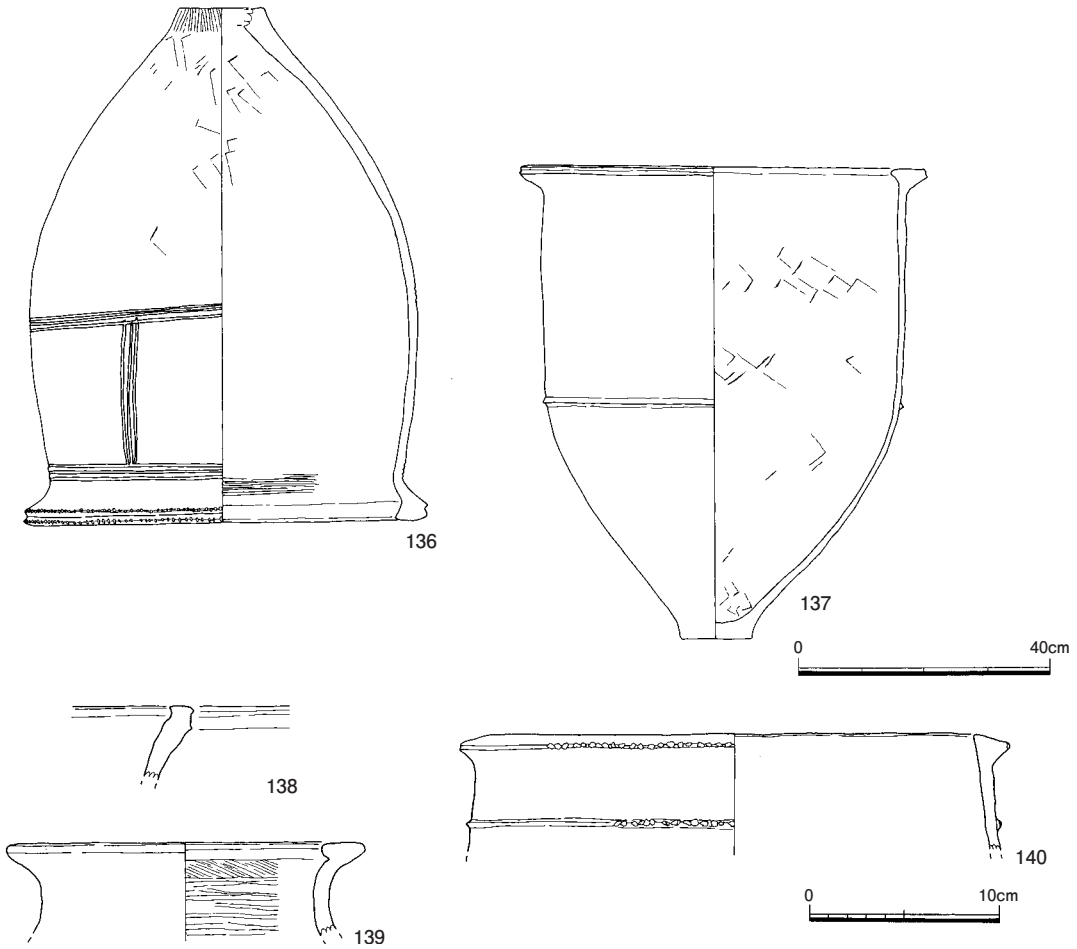
K0074（第53図、図版20）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。主軸方位を略南北にとり、K0151と対になるものと考えられる。上下とも打ち欠いた壺を用いた、覆口式の小形棺である。



第54図　K0075甕棺墓実測図（縮尺1/30）

出土遺物（第53図134・135）　134は頸部以上を打ち欠いた壺である。中位以下は削平で失う。外面ミガキ、内面ナデによる。135は壺の頸部以上を打ち欠いており、頸部の突帯は残存している。胴部は偏球形を呈し、最大径は上位に有する。外面調整は丁寧な磨きを行うが、部分的に刷毛目が残っている。また、内面はナデによる。



第55図　K0075甕棺・出土遺物実測図（縮尺138～140は1/4、136・137は1/12）

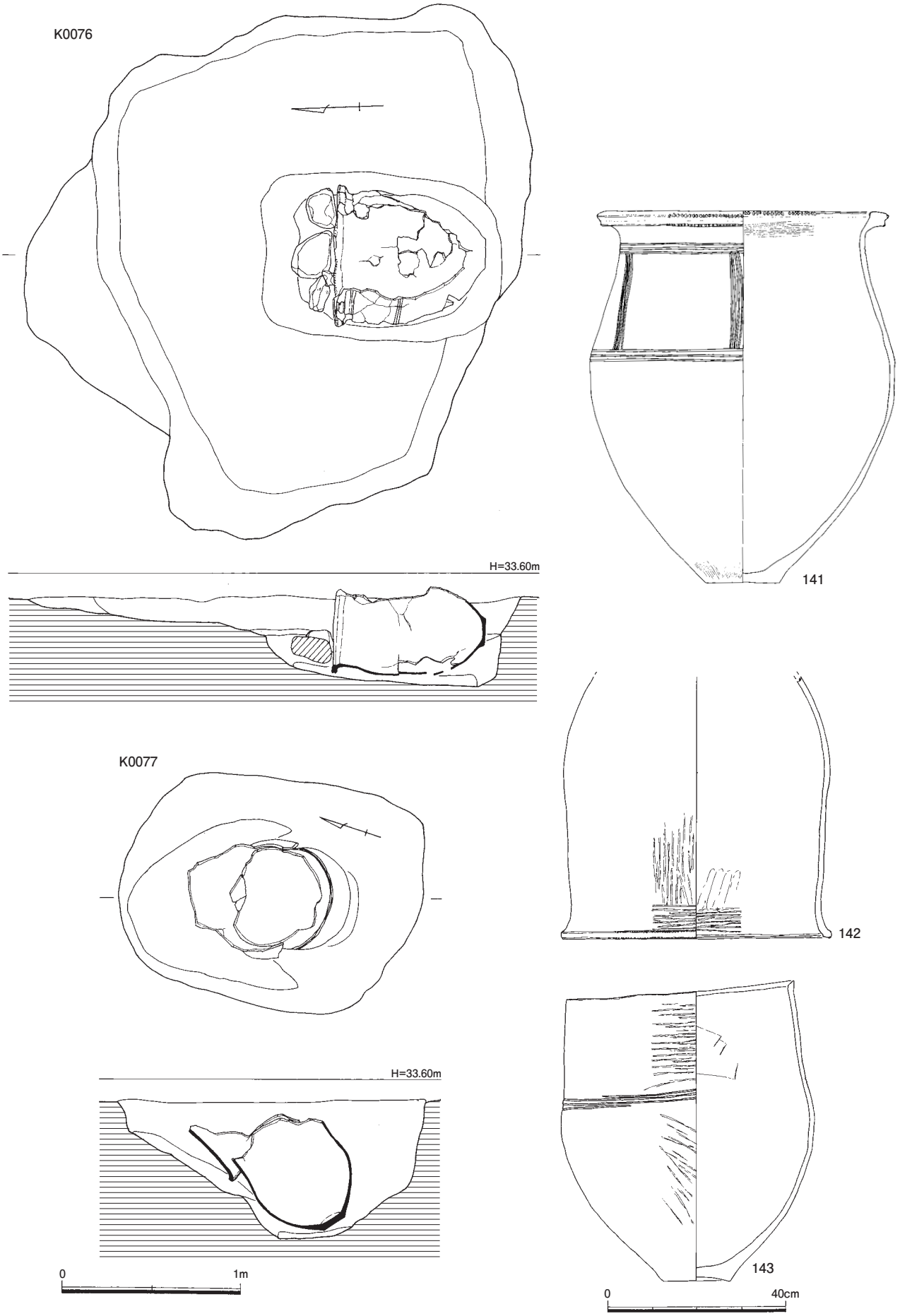
K0075（第54図、図版20）

X－28区で検出し、Ⅲ区北西側に位置する。掘り方は長軸4.4m、短軸3.2mの長方形土坑の南側に1.3×1.5ｍの張り出しを設けた平面凸字形の中央を南北方向に掘り下げ、長方形の南辺沿いの中央に、南から斜坑を掘り込んで甕棺を埋置している。斜坑への埋置状況から北側を下甕、南側を上甕としている。周辺は土壙墓・木棺墓・甕棺墓が密集する場所であるが、本甕棺墓の掘り方は切り合いを有さず、群集する埋葬遺構群の中にあって、周囲から独立しているかのような状況を呈している。埋葬時には掘り方を含めて何らかの地上表示が存在した可能性が考えられる。

出土遺物（第55図、図版45）　136は上甕である。胴部は砲弾形に近く最大径を中位に有する。口縁部は頸部より如意状に屈曲し、上面に粘土帯を貼付する。沈線は頸部と胴部中位に横方向3条ずつと、その間に縦沈線を刻む。調整は胴部外面には板状工具によるナデを行い、底部との境には刷毛目が残る。内面は頸部に横刷毛胴部には板状工具によるナデである。137は上甕より新型式である。口縁部はT字形を呈し、上面は水平となる。底部は平底で、胴部は砲弾形を呈し、中位に三角突帯を貼付する。調整は胴部内外面共に板状工具によるナデを行う。138～140は墓坑出土である。138・139は口縁部上面に粘土帯を貼付する壺、140は断面三角形の口縁と突帯に刻みを施す甕である。

K0076（第56図、図版20）

X－28区で検出し、Ⅲ区北西側に位置する。やや不整ながら掘り方は長軸2.9m、短軸2.4mの長方形土坑の南辺沿いの中央を一段掘り込んで甕棺を埋置している。K0075の北側に位置しており、掘り方



第56図　K0076・0077甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

に類似点が認められる。単棺で口縁部前面の石材は蓋の固定に用いられた可能性が考えられる。

出土遺物（第56図141）　胴部最大径を中位に有し、頸部に向かってしまりが強い。底部は平底で、胴部との境には刷毛目が残る。調整は外面上半は横ミガキ、下半はナデ、内面は頸部に横刷毛を行い、胴部はナデによる。

K0077（第56図、図版20）

X－28区で検出し、Ⅲ区北西側、K0076の東に並列する。やや不整ながら掘り方は長軸1.7m、短軸1.25mの隅丸長方形を呈し、北側から階段状に掘り込む。覆口式の甕棺で、下甕は打ち欠く。

出土遺物（第56図142・143）　142は上甕である。胴部中位が膨らみ、ここから反転して外反する口縁部にいたる。口縁部の内側には薄い粘土帯を貼りつけ、外面には上下両端部に刻みを施す。調整は外面ヘラミガキ、内面は口縁部にはヘラミガキを行い、頸部には指ナデ痕跡が残る。143は下甕である。口縁部を打ち欠くが、プロポーションは上甕に類する。外面全体にミガキを行い、屈曲部位に沈線を刻む。内面には板状工具の小口痕跡が残る。

K0078（第57図、図版20）

W・X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。掘り方は長軸1.3m、短軸0.9mの隅丸長方形を呈し、斜坑部上面が一部崩落している。また、断面は北側から階段状に掘り込んでいる。

出土遺物（第57図144・145、図版45）　144は上甕である。上げ底の底部から胴部は最大径を上位に有する。内傾する口縁部は逆L字形を呈する。調整は内面ナデ、外面縦刷毛を行う。145は下甕である。口縁部外面に刻みを有する点と、突帯が2条になっている以外は上甕と同様の形態を示す。

K0079（第57図、図版20）

Y－27区で検出し、Ⅱ区南側に位置する。掘り方は長軸2.3m、短軸1.9mの不整な隅丸長方形を呈する。東側に一段平坦面を有するが、この部分は隣接する土壙墓を同時に掘り下げた可能性もある。

出土遺物（第57図146・147、図版45）　146は上甕である。上半部を打ち欠いた壺で、底部はわずかに上げ底となる。調整は外面上半が横方向、下半が縦方向のミガキ、内面には板状工具の小口痕跡が明瞭に残るナデを行う。147は下甕である。T字形を呈する口縁部は内傾し、丸みを有する胴部は頸部付近で反転し直立気味となる。また、胴部に突帯は認められない。調整は外面刷毛目の後ナデを行い、内面はナデである。内面には小口痕跡が残っている。

K0080（第58図、図版19）

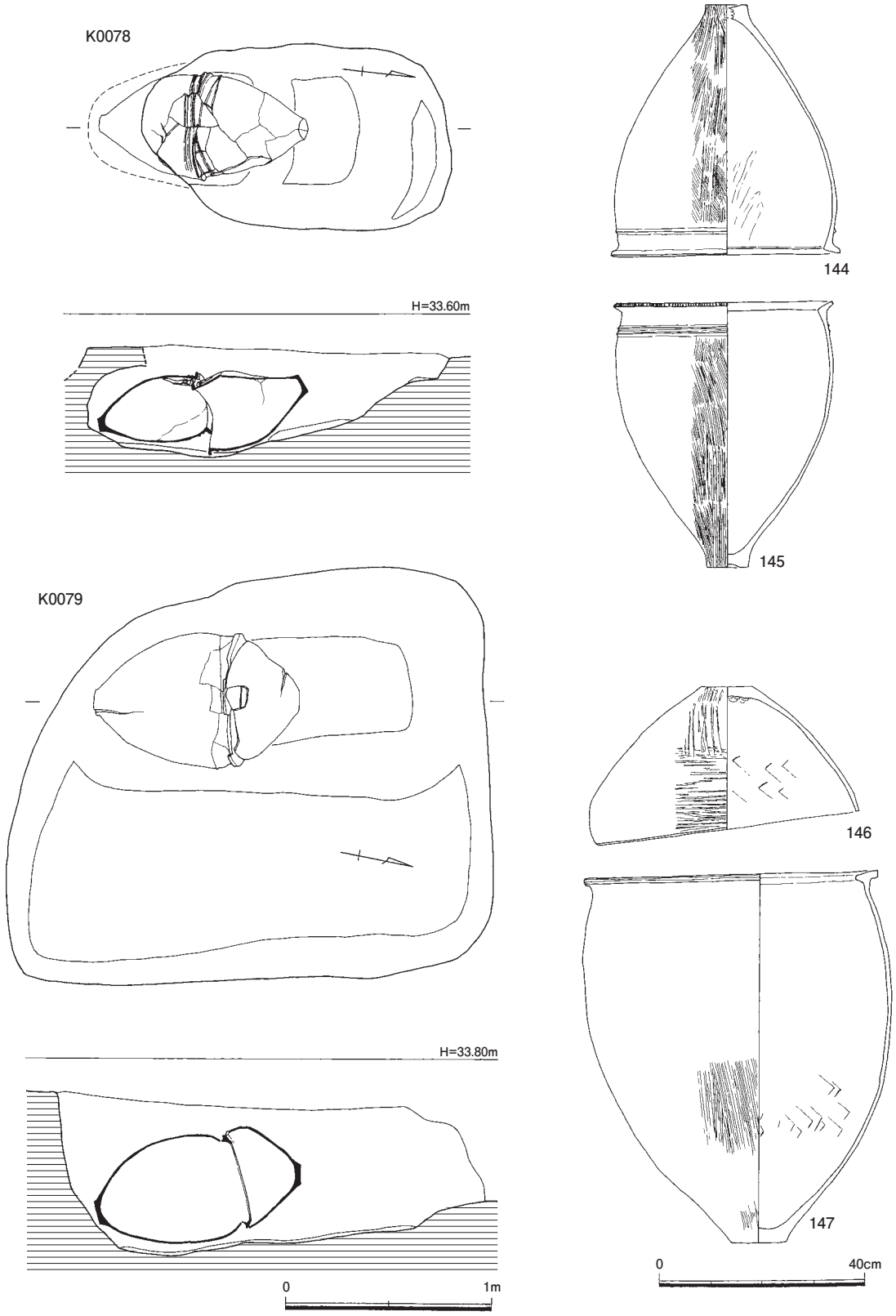
Y－27区で検出し、Ⅱ区中央に位置する。現状で掘り方は長軸3.3m、短軸1.3mを測る。削平により水平に埋置された接口式甕棺墓の上半が失われている。東側上面にはK0068があり、これに切られるものと考えられる。接口式で合わせ目には粘土が貼り付けられる。

出土遺物（第58図、図版46）　148は上甕である。胴部は開き気味の砲弾形を呈し、口縁下に1条の台形突帯を貼り付ける。また胴部には下位にM字形突帯を有する。胴部調整は内外面ナデで、小口痕跡が残る。口縁部は内外両側に発達し、上面は外傾する。胴部は砲弾形を呈し、中位に2条の高い三角突帯を貼付する。胴部調整は内外共にナデである。149は下甕である。口縁部は外傾する。胴部は砲弾形を呈し、中位に2条の高い三角突帯を貼付する。胴部調整は内外共にナデである。

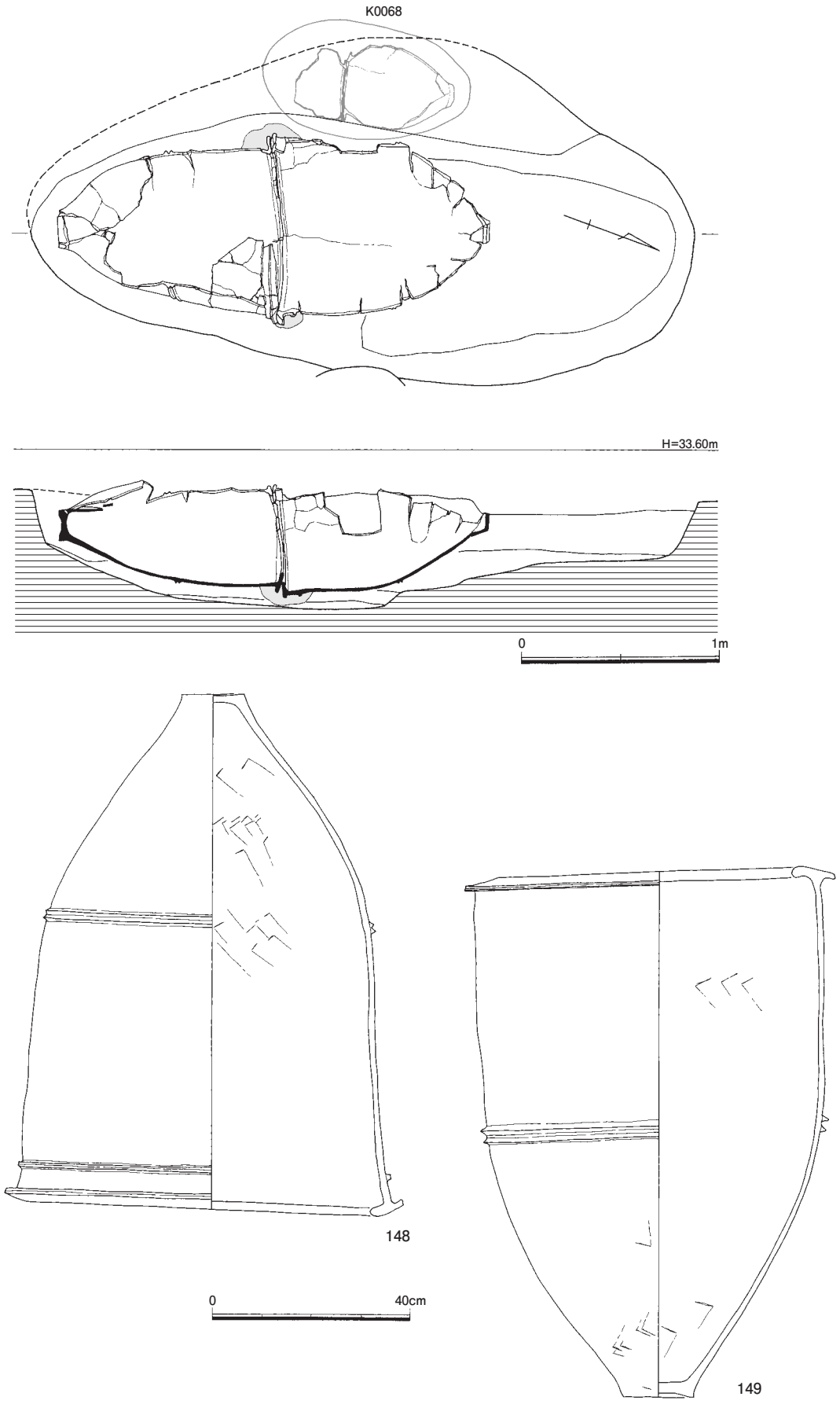
K0081（第59図、図版21）

X－29・30区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。現状で掘り方は長軸3m、短軸1.4mを測る。切り合い関係からK0084→0081の関係となる。接口式で合わせ目には粘土を貼り付ける。

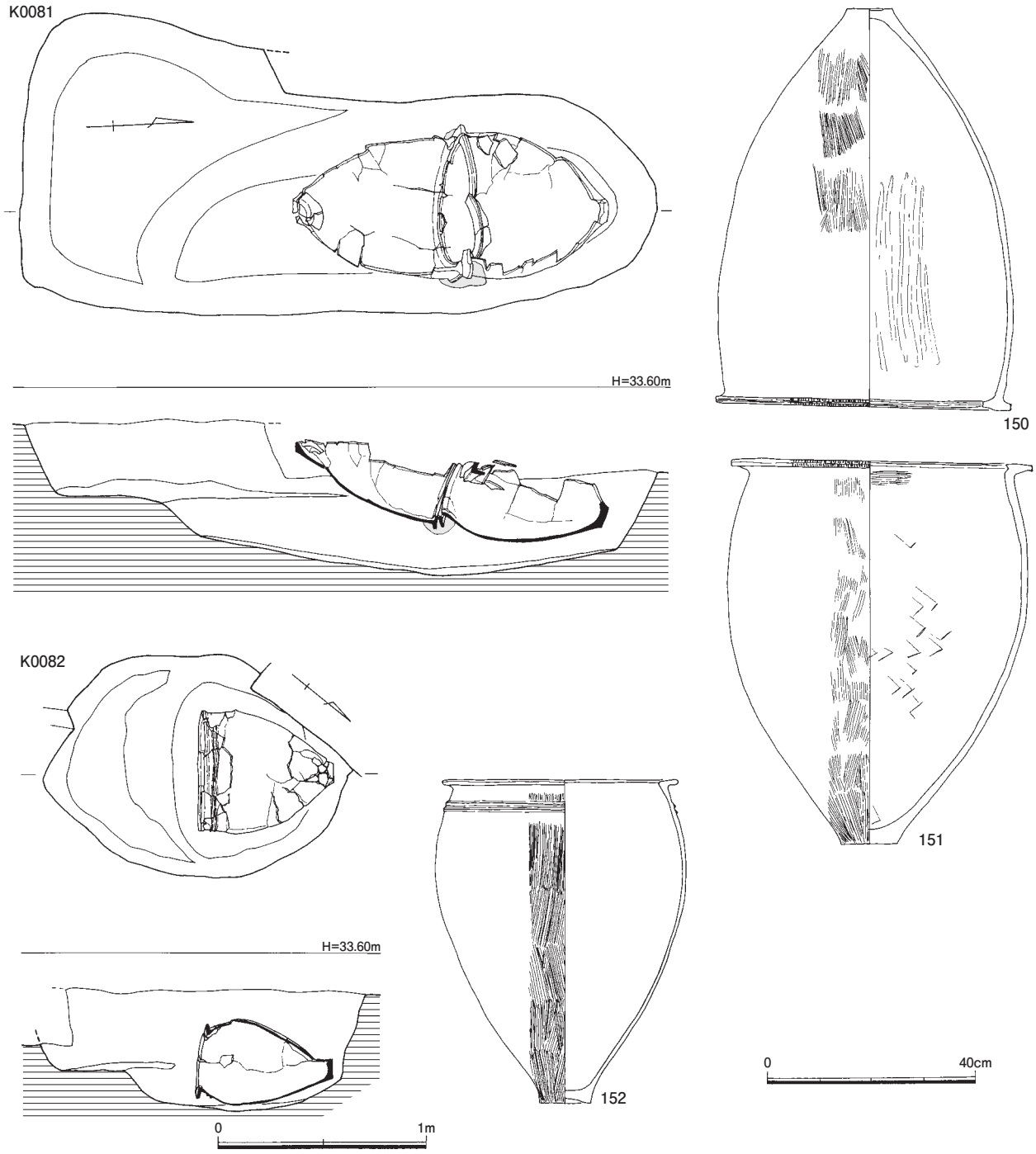
出土遺物（第59図150・151、図版46）　150は上甕である。内傾する口縁部はT字形を呈し、外面には刻みを施す。胴部は砲弾形を呈し、突帯はなく、底部は上げ底となる。胴部外面は縦刷毛の後ナデを



第57図　K0078・0079甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第58図　K0080甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

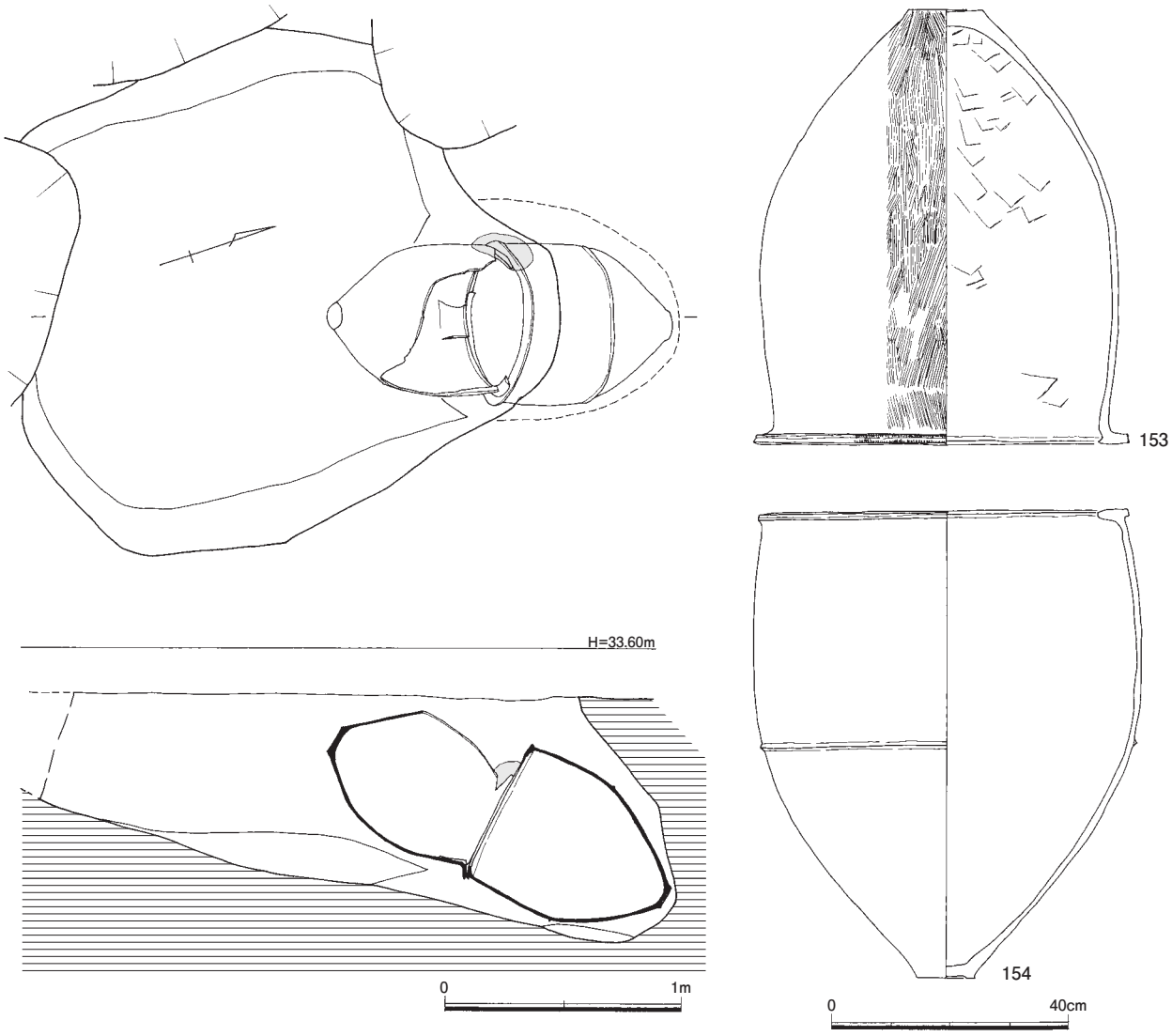


第59図　K0081・0082甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

行うが、下半は特に刷毛目が多く残っている。内面はナデを行い、上半には縦方向のナデ痕跡が残る。151は下甕である。口縁部は粘土帯の貼付により鋤状を呈し、外面には刻みを有する。胴部は上位に最大径を有し、突帯は貼付しない。頸部では屈曲外反する。胴部外面縦刷毛、内面頸部は横刷毛、胴部は板状工具によるナデを行う。

K0082（第59図、図版21）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する単棺である。現状で掘り方は長軸1.4m、短軸1.05mの長円形を呈する。切り合い関係からK0083→0082の関係となる。



第60図　K0083甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

出土遺物（第59図152）　口縁部は逆L字形を呈し、内傾する。胴部は張りが強く、上げ底の底部にかけて細くしまる。調整は、胴部外面は縦刷毛、内面はナデによる。

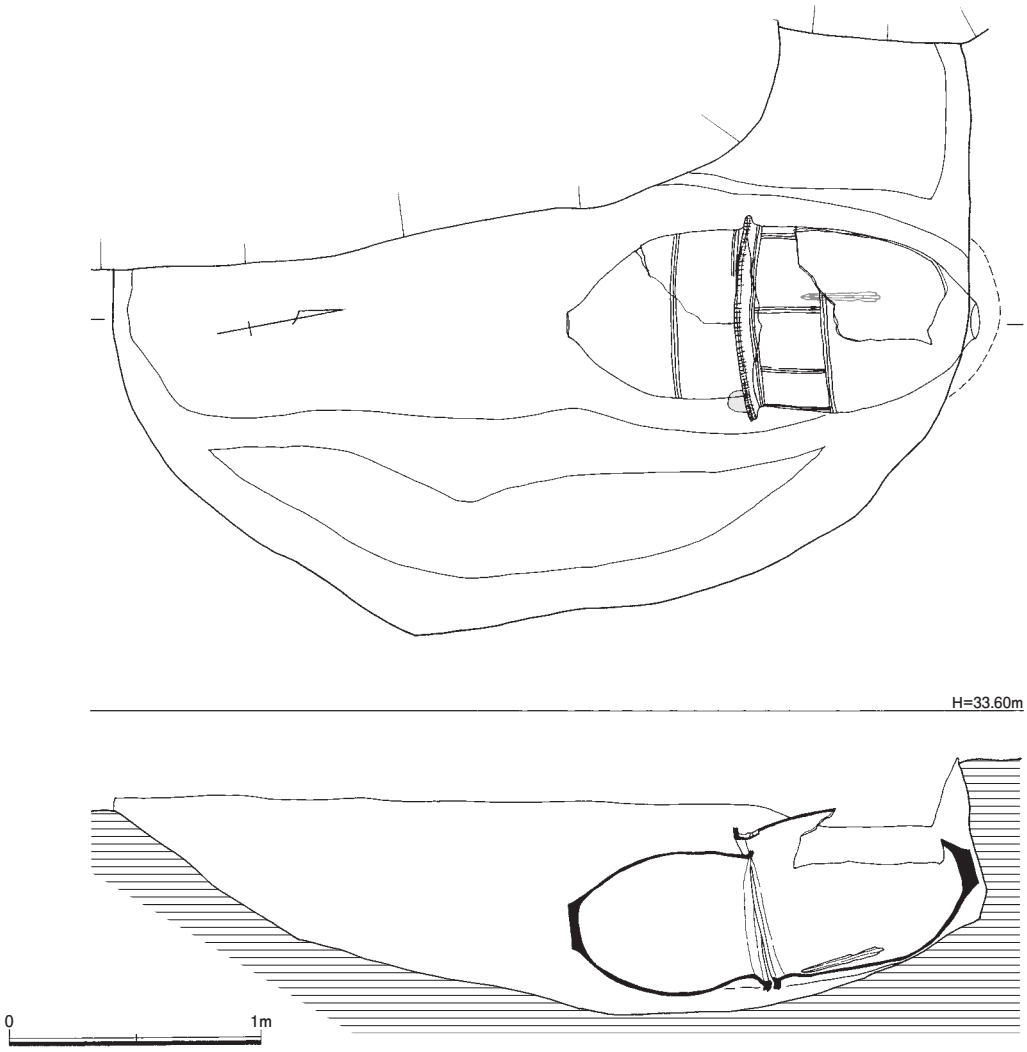
K0083（第60図、図版21）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。現状で掘り方は一辺2mの方形を呈し、北側隅に斜坑を有する。K0083→0082の先後関係となる。接口式で合わせ目には粘土を貼り付ける。

出土遺物（第60図、図版46）　153は上甕である。K0081下甕と同タイプである。胴部最大径が中位にあり、突帯は貼付しない。154は下甕である。内側に張り出した口縁部はほぼ水平である。胴部中位に三角突帯を有し、頸部に向かってしまりをもつ。調整は胴部内外面共にナデである。

K0084（第61図、図版21）

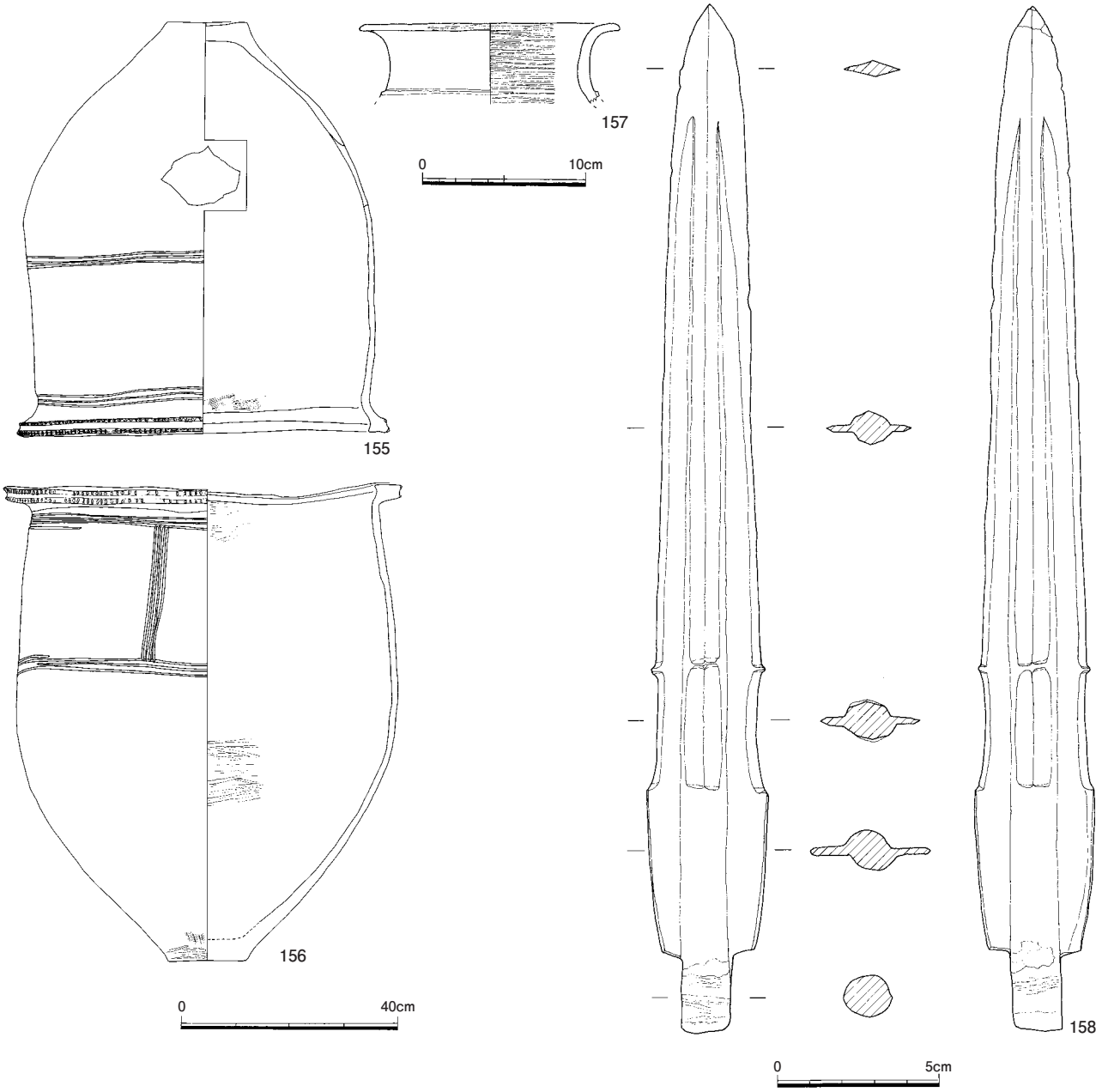
X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。主軸方位を略南北方向にとり、東側に隣接するK0073と対となる配置を示している。墓坑西側をK0081に切られているが、掘り方は長軸3.4m、短軸2.5m以上を測る長方形を呈し、底面は長軸方向に中央を1.2m幅で掘り下げ、北壁側をわずかに抉って棺を埋置している。接口式で合わせ目の一部には目貼りの粘土が残っている。下甕の中央西側にお



第61図　K0084甕棺墓実測図（縮尺1/30）

いて鋒を南側に向けた細形銅剣が１口副葬されている。

出土遺物（第62図、図版46）　155は上甕である。底部は厚手の上げ底となり、同部との境は一旦内側に湾曲して立ち上がり、胴部下位で反転して膨らみを有する。胴部上位はやや内側にしまりを有するが、頸部で如意状に強く屈曲する。口縁部は上面に粘土帯を貼り付け、上面は水平とし、外面には刻みを施す。胴部には上下に沈線が巡り、下半には穿孔を有する。調整は外面上位が横方向、下位が縦方向の丁寧なナデ、内面は頸部に横刷毛を行い、胴部はナデである。156は下甕である。基本的な形態は上甕（155）と同じである。胴部の横沈線間に縦方向の沈線を刻む。また、胴部と底部の境には横方向のミガキを行い、その上位には縦刷毛が部分的に残っている。157は下甕内から出土した小形壺の破片である。頸部は直立し、口縁部は大きく外方に開く。胴部との境には三角突帯を有する。内面には丁寧な横ミガキが認められる。158は部分的に欠くところもあるがほぼ完存する細形銅剣である。全長31.5cm、剣身長29.2cm、茎長2.3cm、幅は茎部1.5cm、関部2.8cm、刳方下端3.7cm、刳方最小幅3.0cm、刳方上端3.5cmを測り、刳方下端が最大幅をなす。脊の鎬は刳方下端まで研ぎ出され、鎬の端部は直線的に調整されている。剣身部の研磨は、背の鎬と刃先がほぼ同一平面上にあたる。また刳方上部の節帯は脊にも研磨が行われ、山形の節帯となっている。研磨の施されていない刳方下端以下の断面を



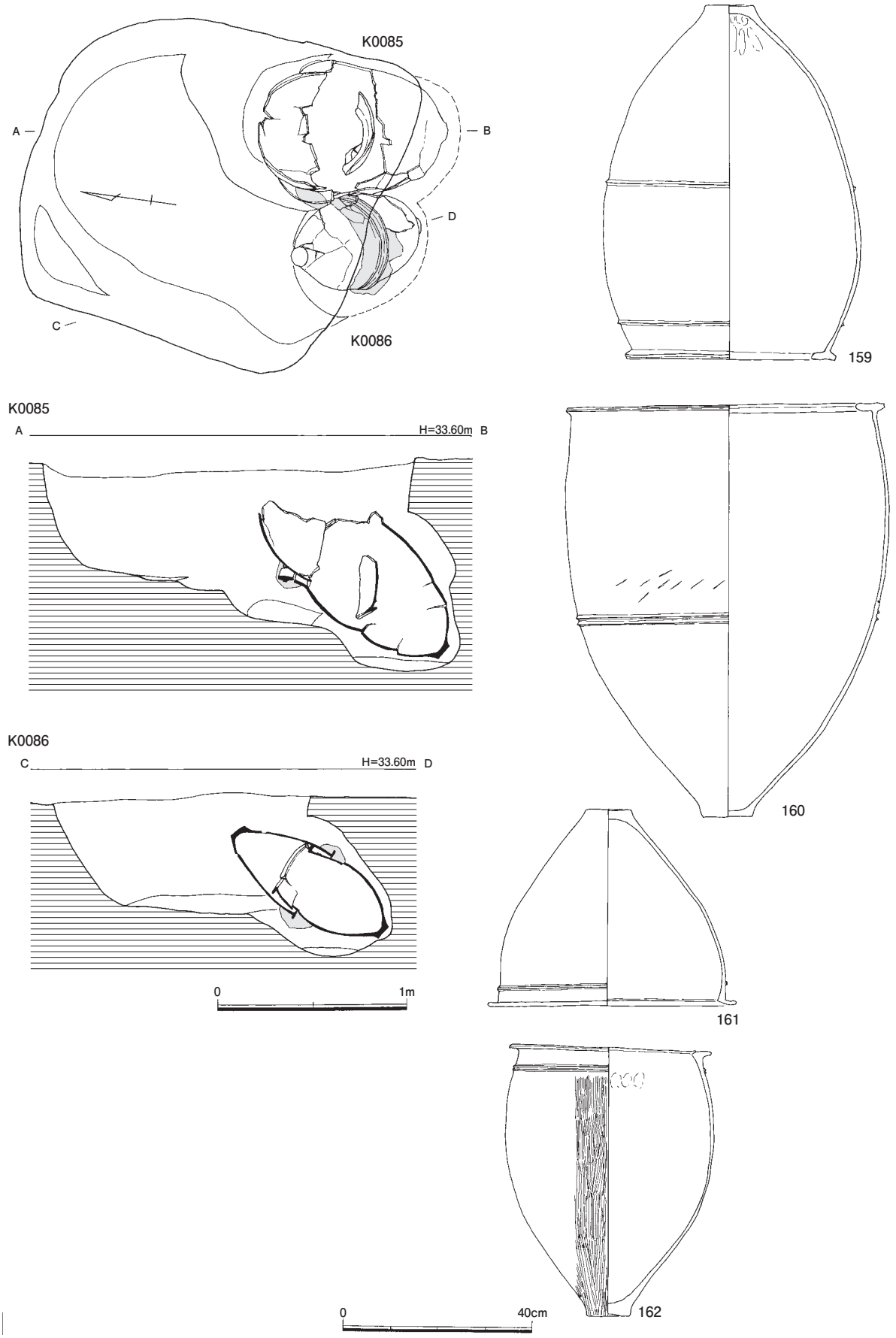
第62図　K0084甕棺・出土遺物実測図（縮尺158は1/2、157は1/4、155・156は1/12）

みると、翼部断面厚は2mmを測り、端部までほぼ均等な厚さを保つ。茎部は厚さ1.2cmでやや扁平な円形となり、表面に内容不明の銹化した付着物と条線が残っており、着柄の痕跡の可能性が考えられる。また、茎中ほどから関にかけてはバリが残っている。

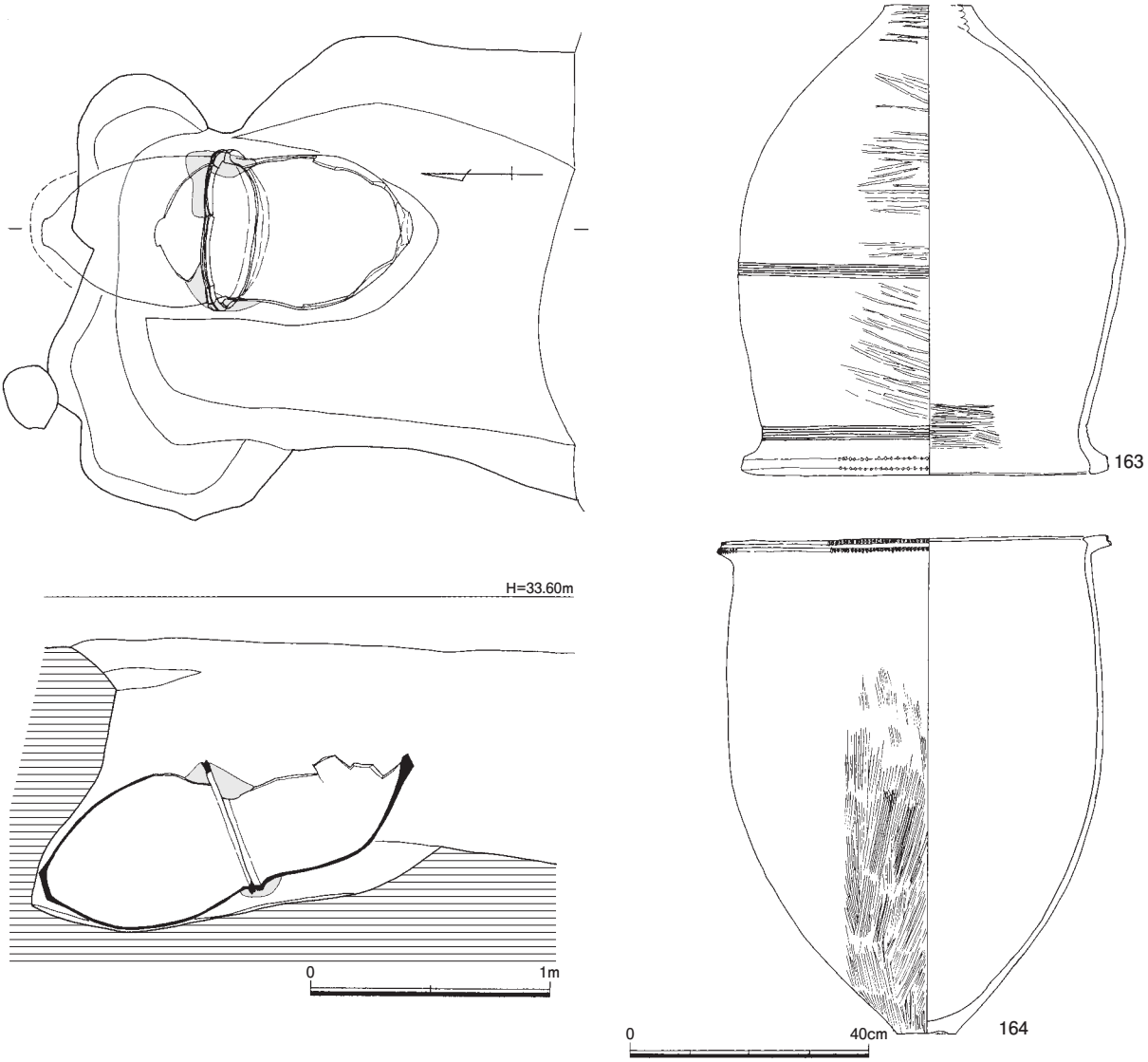
K0085（第63図、図版22）

X－30区で検出し、Ⅲ区南西側に位置する。掘り方は一辺1.8mの方形を呈し、東辺に沿って南側隅に斜坑を有する。K0086が本甕棺に接して埋置されており、平面的には切り合いが確認できないが、K0085甕棺の一部を壊してK0086が据えられており、K0086が後出するものと考えられる。

出土遺物（第63図159・160、図版47）　159は上甕である。口縁部は水平を呈し、丸みを帯びた胴部上部と中位に三角突帯を有する。胴部内外面はナデを行う。160は上甕より砲弾形に近く、2条の三角



第63図　K0085・0086甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第64図　K0087甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

突帯を有する。胴部調整はナデで、内面上部に黒色顔料の痕跡が認められる。

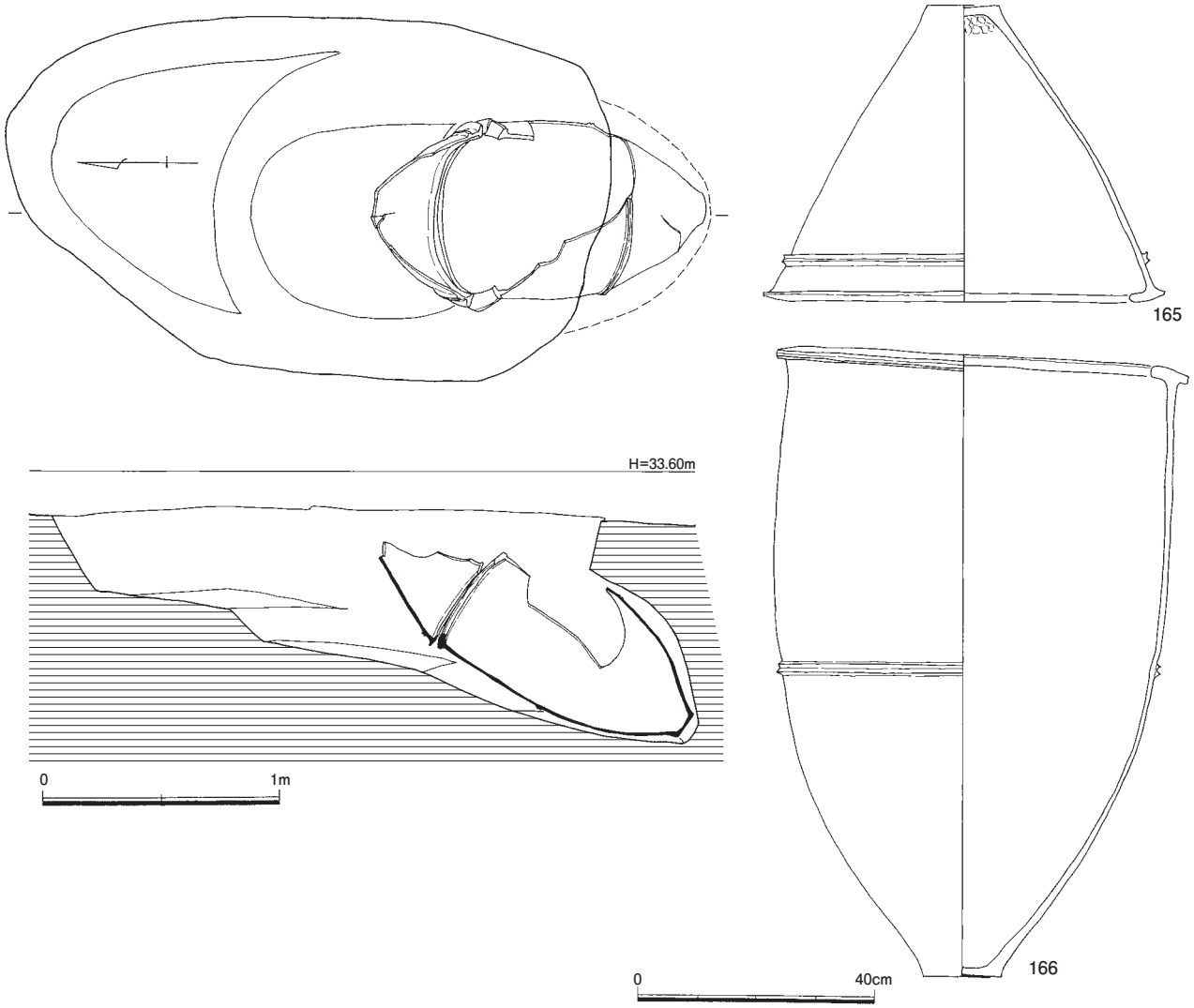
K0086（第63図、図版22）

X－30区で検出し、Ⅲ区南西側に位置する。K0085の項で述べたようにこれと接して埋葬されているが、掘り方プランからは切り合いが確認できない。配置的には当初からの設計で無い可能性があるが、同一の墓坑にK0086の斜坑を追加して埋葬した可能性が考えられる。この際ほぼ同時の埋葬の可能性があるが、時間的な間隔を有するかは検討の必要があろう。

出土遺物（第63図161・162、図版47）　161は上甕の鉢である。底部は上げ底で頸部に台形突帯を貼付する。口縁部は逆L字状形で、内傾する。162は下甕である。胴部上位張り、上げ底の底部に向かって強くしまる。口縁部は内傾し、口縁下にはM字形突帯が貼付される。

K0087（第64図、図版22）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。図上では0481号木棺墓に切られているが、本来はこれに後出するものと考えられる。掘り方は均整の取れた隅丸長方形と考えられ、短辺は1.7mを測る。接口式で合わせ目には粘土を貼付している。



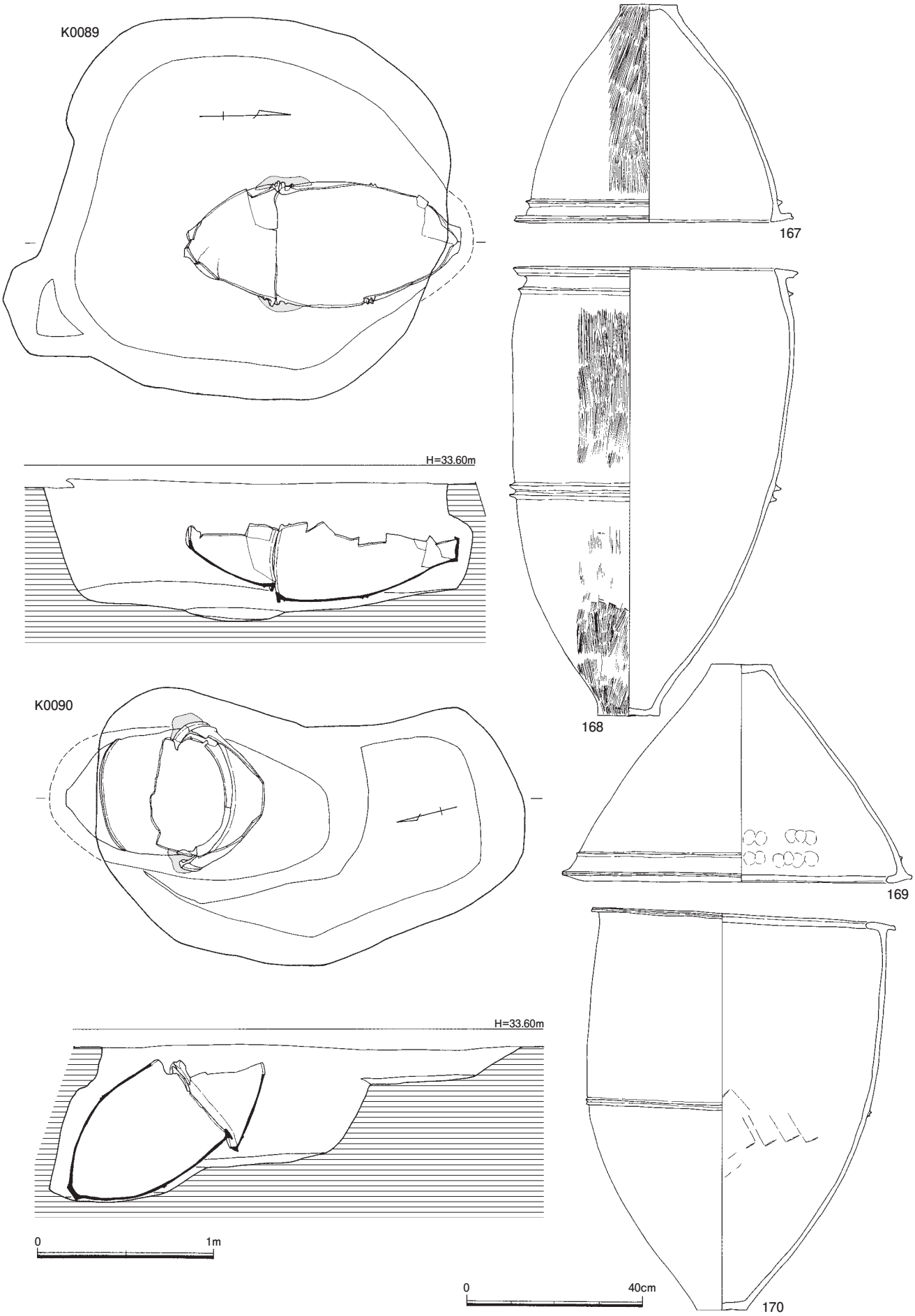
第65図　K0088甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

出土遺物（第64図、図版47）　163は上甕である。胴部最大径は中位に有するが、頸部に向けてのしまりが強く、下膨らみの印象を与える。口縁部上面に粘土帯を貼付し、外面には刻みを有する。また、胴部には3条の沈線を2箇所に刻む。調整は胴部外面にはミガキ、内面は頸部に横刷毛が認められる。164は下甕である。プロポーションは砲弾形に近く、胴部に沈線は刻まない。頸部のしまりは弱く、口縁下での反転外反は痕跡的である。口縁部は外方に屈曲し、上面に粘土帯を貼付する。

K0088（第65図、図版22）

W－28区で検出し、Ⅲ区北西側に位置する。墓群の最も西側に位置する甕棺墓である。掘り方は長軸2.4m、短軸1.4mを測り、断面は階段状に掘り込み、小口部に斜坑を有する。

出土遺物（第65図、図版47）　165は上甕の鉢である。口縁部は内側に張り出しが強く、上面は外傾する。やや上げ底の底部より、胴部は外反気味に立ち上がり、中位より反転して頸部に向かって開いている。口縁下にはM字形突帯を貼付する。調整は胴部内外面共にナデである。166は下甕である。胴部は砲弾形を呈し、口縁部は外傾する。突帯は胴部中位にM字形突帯を貼付する。調整は胴部内外面共にナデである。



第66図　K0089・0090甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0089（第66図、図版22）

W－28区で検出し、Ⅲ区北西側に位置する。掘り方は一辺2.2mの略隅丸方形を呈し、北壁中央に斜坑を有する。K0158を切り、これに後出する。接口式で合わせ目に粘土を貼り付けるが、底面側には認められない。

出土遺物（第66図167・168、図版48）　167は上甕の鉢である。口縁部は外傾する逆L字形を呈し、口縁下に三角突帯を貼付する。胴部はやや丸みを帯び、外面縦刷毛、内面ナデを行う。168は下甕である。口縁部は上甕同様、外傾する逆L字形を呈し、胴部は頸部付近でしまりを有する。突帯は口縁下に1条、胴部中位に2条の高い三角突帯である。胴部外面は上半及び下位は縦刷毛、胴部突帯の直下は板状工具によるナデで、内面はナデを行う。

K0090（第66図、図版22）

W－28区で検出し、Ⅲ区北西側に位置する。掘り方は長軸2.4m、短軸1.4mを測り、断面階段状に掘り下げ、北側小口部に斜坑を有する。覆口式で、合わせ目に目貼り粘土を貼付する。

出土遺物（第66図169・170、図版48）　169は上甕の鉢である。口縁部は外傾し、内側により強く張り出しを有する。胴部プロポーションはハ字状に開き、口縁部直下でやや立ち上げる。調整は胴部内外面ナデによる。170は下甕である。胴部は砲弾形を呈し、中位に1条のM字形突帯を有する。口縁部は外傾し、内側に強く張り出す。調整は胴部内外面共にナデを行い、内面には板状工具の小口痕跡が明瞭に残っている。

K0091（第67図、図版22）

W－27区で検出し、Ⅲ区北西隅に位置する。掘り方は長軸1.9m、短軸1.55mを測り、断面は階段状に掘り下げられ、南壁に斜坑を有する。接口式で合わせ目に粘土を貼り付ける。Ⅲ区の北西側に位置する、甕棺群の最も北側に位置し、東側のK0092と対になる。

出土遺物（第67図171・172、図版48）　171は上甕の鉢である。口縁部は内側に発達し、上面は外傾する。底部は平底で胴部はほぼ直線的に開き、三角突帯の貼付位置付近でやや丸みを帯びる。胴部調整は外面ナデ、内面中位に刷毛目状の痕跡が残り、そのほかはナデである。172は下甕である。口縁部は内外両側に突出した、T字形を呈し、上面は外傾する。胴部は砲弾形を呈し、口縁下に台形突帯、中位よりやや下に2条の高い三角突帯を貼り付ける。調整は胴部内外面ナデを行う。

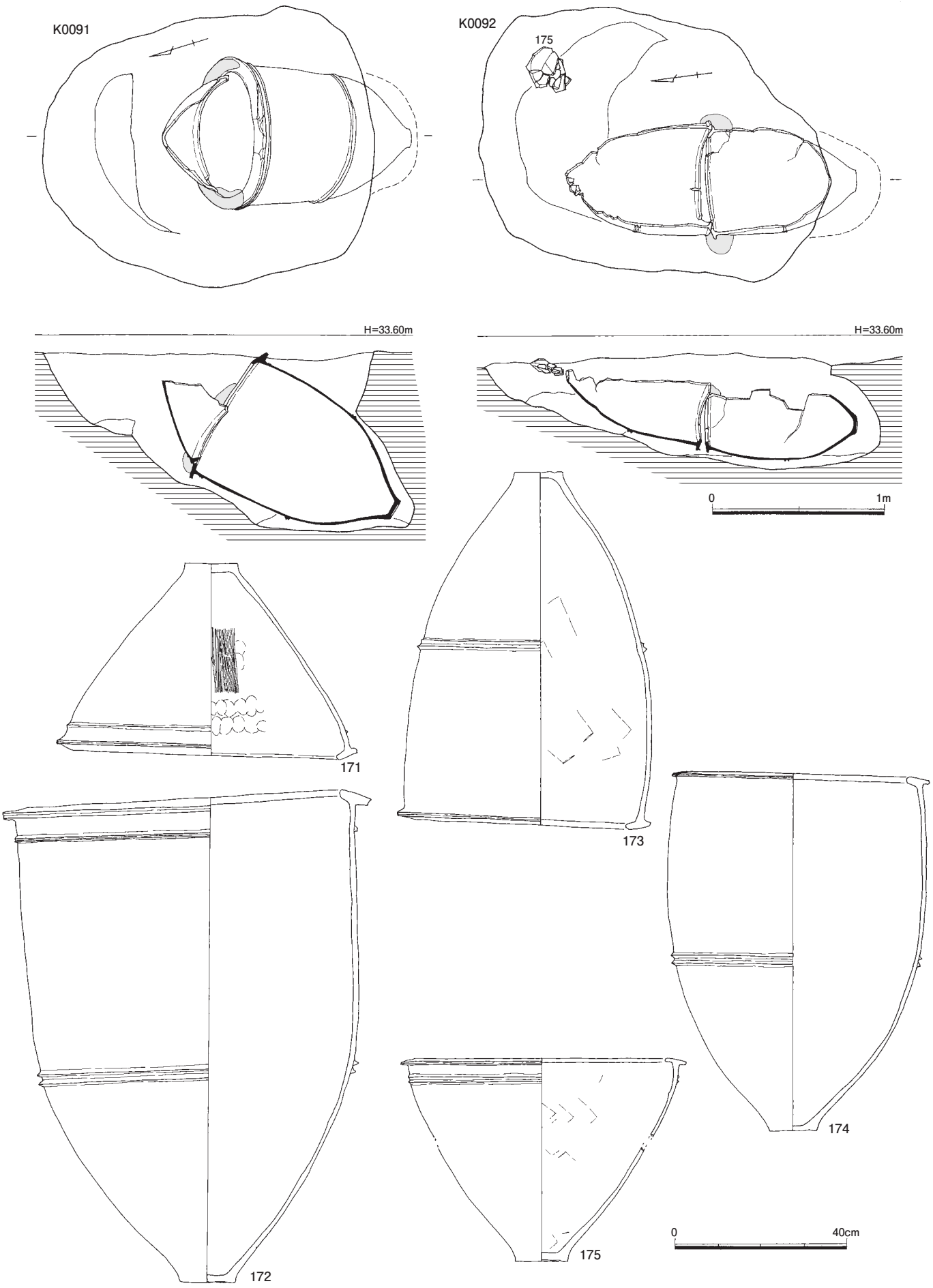
K0092（第67図、図版23）

W－27区で検出し、Ⅲ区北西隅に位置する。現況で掘り方は長軸2m、短軸1.5mを測るが、下甕の破損状態から、斜坑上部の崩落が考えられ、本来は一辺1.5mの隅丸方形を呈するものと考えられる。断面は南壁に設けられた斜坑に向かって、斜めに掘削されている。接口式で合わせ目に粘土が貼付されているが、墓坑底に接する部分には粘土は見られない。また、墓坑北東側の埋土中に大型の鉢が据えられている。

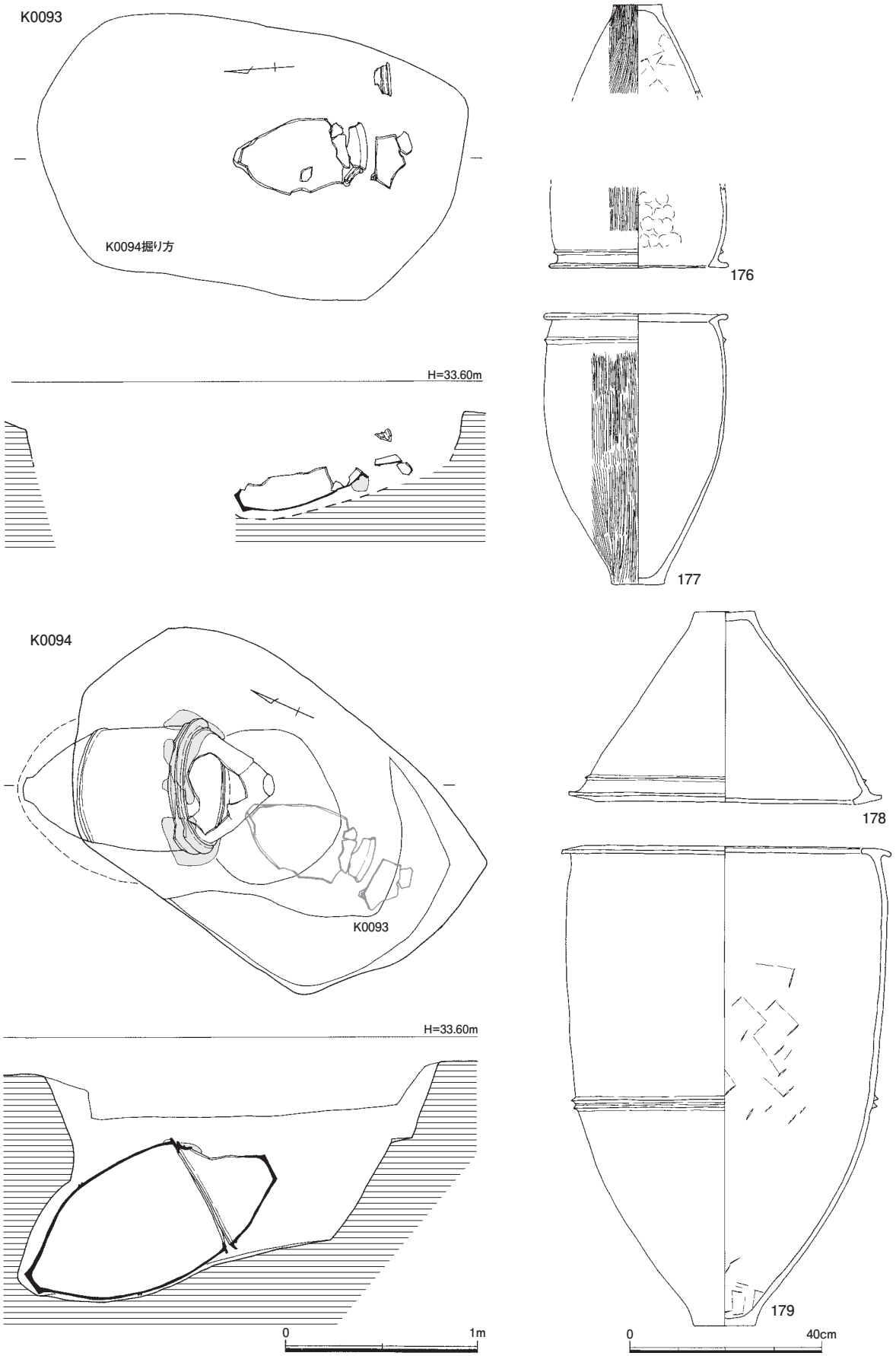
出土遺物（第67図173～175、図版48）　173は上甕である。口縁部の上面は外傾し、口縁下には突帯を有さない。胴部は砲弾形を呈し、上半部はわずかに丸みを帯びている。胴部は中位にはM字形突帯を貼付する。調整は内外面ナデにより、内面には板状工具の小口痕跡が認められる。174は下甕である。形態的には173同様である。胴部の突帯は小さめの2条の三角突帯である。また、口縁部及び胴部上半内面には黒色顔料が認められる。175は墓坑内から出土した鉢である。T字形の口縁部は外傾し、口縁下には2条の三角突帯を貼付する。調整は内外面ナデにより、内面には小口痕跡が残る。

K0093（第68図、図版23）

W－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。上面を溝状遺構で削平され、特に上甕の撹乱が著し



第67図　K0091・0092甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/12）



第68図　K0093・0094甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

い。掘り方は不明であるが、大形棺であるK0093墓坑内で検出する。下甕底部はK0093上甕胴部に接するほどの位置にあり、これを意識した埋葬と考えられる。下甕口縁部には粘土が認められる。

出土遺物（第68図176・177）　176は上甕である。鋤形の口縁部はほぼ水平で、口縁下には三角突帯を貼付する。胴部の中位を失っているが、胴部上位が張り、小さな底部に至る。胴部外面には縦刷毛を有する。177は下甕である。口縁部は強く内傾し、口縁下に突帯を有するが、胴部の張りはあまり強くない。胴部の調整は外面縦刷毛、内面は胴部上半に縦方向のナデ、下半は板状工具によるナデが行われている。

K0094（第68図、図版23）

W－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。掘り方は長軸2.15m、短軸1.3mを測る隅丸長方形を呈し、北西コーナー部分に斜坑を有する。南側直上にK0093が埋置されている。接口式で合わせ目に粘土を貼り付けるが、墓坑底側には認められない。

出土遺物（第68図178・179、図版49）　178は上甕の鉢である。胴部はハ字形に開き、T字形を呈する口縁部は上面が外傾する。胴部内外面共に板状工具によるナデを行い、外面には小口痕が痕跡的に認められる。179は下甕である。ほぼ平底の底部から胴部は砲弾形を呈し、中位に2条のシャープな三悪突帯を有する。胴部上端はやや内側にしまりを有し、T字形の口縁部は外傾する。胴部調整は内外面共にナデにより、特に内面には板状工具の小口痕跡が明瞭に残る。

K0095（第69図、図版23）

W・X－27・28区で検出し、Ⅲ区北西隅に位置する。当初掘り方は長軸3.7m、短軸1～1.2m前後を測り、北側がわずかに屈曲した溝状遺構として検出した。平面的に切り合いも認められなかったため、掘り下げを行った結果、南側に2基の甕棺を確認し、北側をK0096、南側をK0095とした。甕棺相互の位置的な関係から、当初0095を埋葬した後、北側に隣接して墓坑を掘り込み、0096を埋置した可能性が高いと考えられるが、甕棺の型式的特長はほぼ同じである。K0095は掘り方南側の斜坑に沿わせて埋置されている。合わせ口は接口式で、粘土が貼付される。下甕内にわずかに人骨が残っていたが、痕跡的で部位の特定・取り上げはし得ていない。

出土遺物（第69図180・181、図版49）　180は上甕の鉢である。口縁部は内側に強く張り出し、上面は外傾する。上げ底の底部から、胴部はハ字形に広がり、口縁下にはM字形突帯を貼付する。調整は胴部内外面ナデにより、内面には小口痕跡が残る。また、外面および口縁部内面には黒色顔料の塗布が認められる。181は下甕である。口縁部は外傾し、胴部は砲弾形を呈する。胴部中位には2条のM字形突帯を貼り付け、内外面は板状工具によるナデを行う。

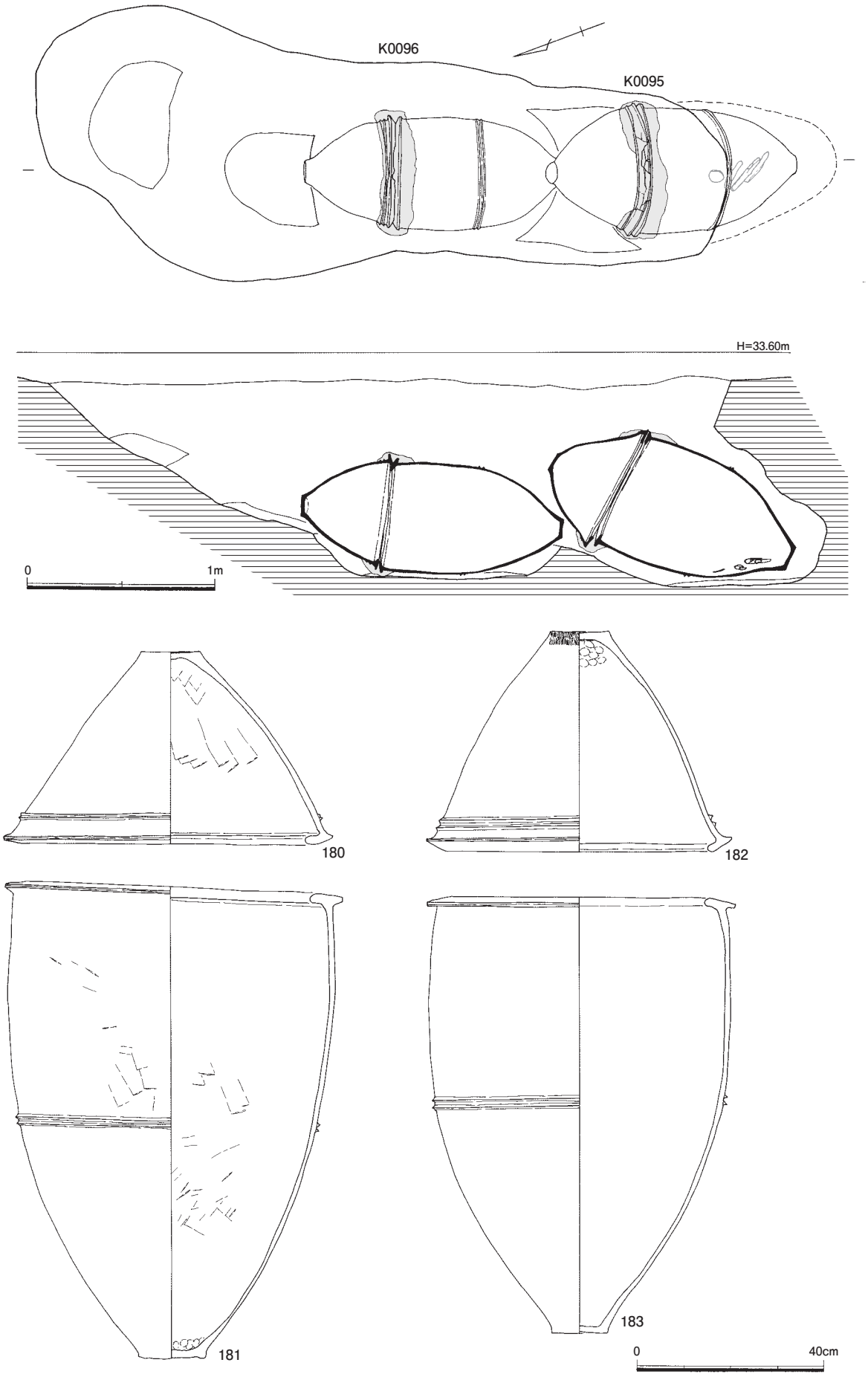
K0096（第69図、図版23）

W・X－27・28区で検出し、Ⅲ区北西隅に位置する。K0095→K0096の関係が想定できる。掘り方は甕棺の北側に張り出した長軸2.3m、短軸1.2mの墓坑が0096に伴うものと考えられ、南側の斜坑に沿わせてほぼ水平に埋置されている。合わせ口は接口式で、粘土が貼付される。

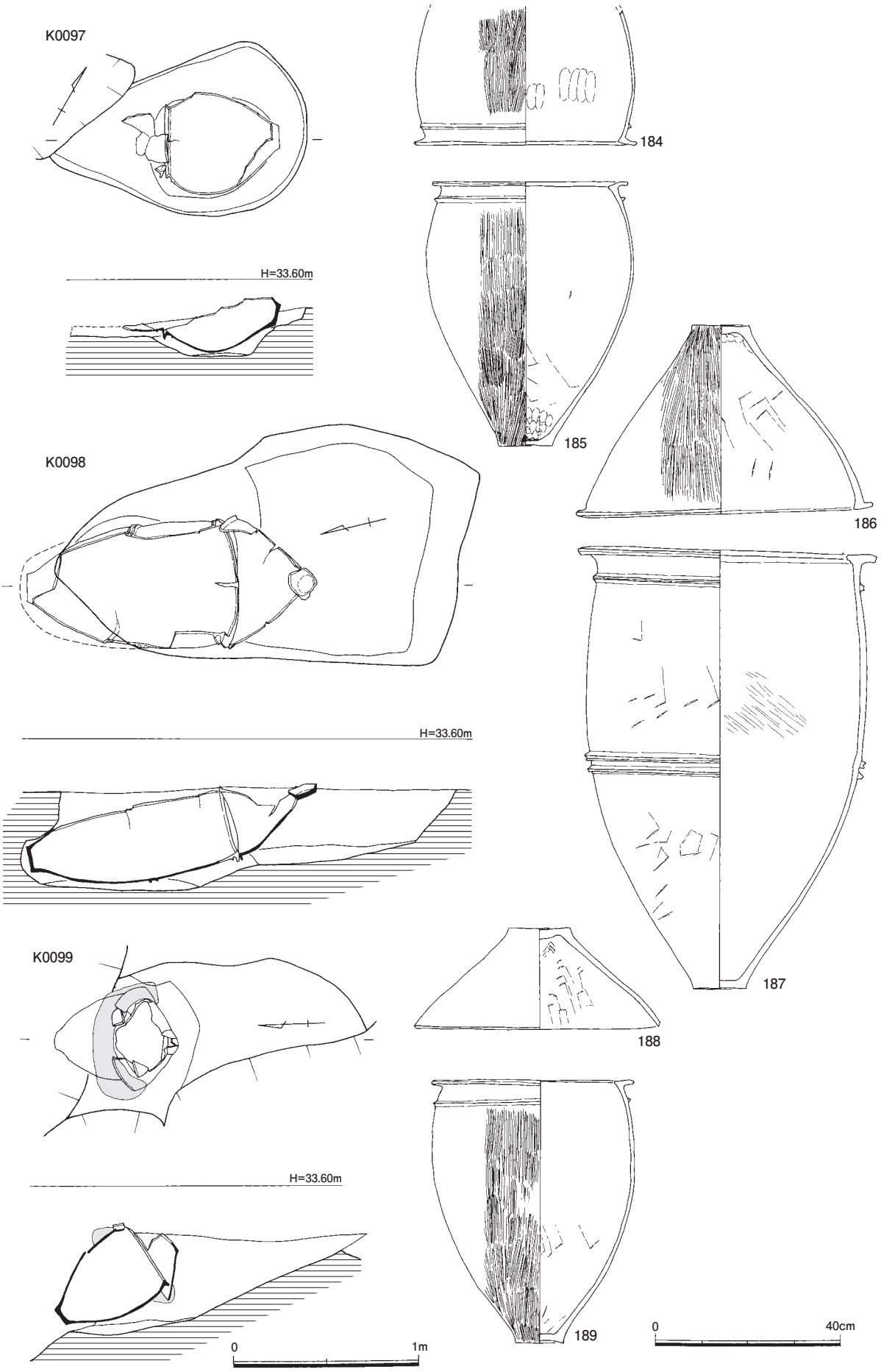
出土遺物（第69図182・183、図版49）　182は上甕の鉢である。口縁部は内側に張り出し、強く外傾する。胴部はハ字形に広がり、口縁下には2条の三角突帯を貼付する。調整は胴部内外面板状工具によるナデにより、底部付近には刷毛目が残る。183は下甕である。口縁部は外傾し、胴部は上部が緩やかにしまる砲弾形を呈する。胴部中位には2条のM字形突帯を貼り付け、内外面はナデを行う。

K0097（第70図、図版23）

Y－25・26区で検出し、Ⅰ区南側に位置する。西側を撹乱で乱されているが、長軸1.4m、短軸0.9mを測り、下甕の埋置部分を一段掘りくぼめている。削平が著しく、上甕口縁部の一部と下甕の1／3が



第69図　K0095・0096甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第70図　K0097・0098・0099甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

残存するのみである。また、K0098下甕の上面に位置しており、これに後出するものと考えられる。

出土遺物（第70図184・185）　184は上甕である。口縁部の一部が残存する。内傾する口縁部は鋤形を呈し、口縁下には突帯を貼付する。また、胴部上位に膨らみを有し、外面縦刷毛、内面ナデを行う。また、外面には煤が付着する。185は下甕である。胴部上位の張り出しが強く、口縁部は内傾する。胴部外面縦刷毛、内面はナデを行い、小口痕跡が残っている。

K0098（第70図、図版23）

Y－26区で検出し、Ⅰ区南側に位置する。K0099を切り、掘り方は現状で長軸2.2m、短軸1.3mを測る。東側に隣接するK0100と対になるものと考えられる。また、K0098～0102の5基の甕棺墓はⅣ区の南端部分において、主軸方位・甕棺の挿入方向などをそろえる墓群として捉えられ、更にK0097・0103・0115を加えた8基を区画内の小群としてまとめることができる。

出土遺物（第70図186・187、図版49）　186は上甕の鉢である。外傾する口縁部は内側への張り出しが小さく、断面逆L字形に近い。底部はわずかに上げ底となり、胴部下位では内側に湾曲し、中位からは反転して外側に膨らむ。調整は胴部外面縦刷毛、内面ナデである。187は胴部が細長い砲弾形を呈し、中位と口縁下に台形突帯を貼付する。口縁部はほぼ水平となり、内側への張り出しは小さい。胴部内外面板状工具によるナデを行うが、内面では一部刷毛目状の痕跡となって残っている。

K0099（第70図、図版23）

Y－25･26区で検出し、Ⅰ区南側に位置する。切り合い関係からK0099→0098→0097の関係となる。上甕には鉢を打ち欠いたものを使用しており、覆口式で合わせ目には粘土を貼付する。

出土遺物（第70図188・189、図版50）　188は上甕である。鉢の胴部中位以上を打ち欠いている。底部はわずかに上げ底を呈する。調整は胴部内外ナデにより、内面には板状工具の小口痕跡が認められる。189は下甕である。鋤形の口縁部はほぼ水平で、口縁下に三角突帯を貼付する。胴部は上位が膨らみ、底部は上げ底である。胴部外面には縦刷毛を行い、外面の半分ほどには煤が付着している。

K0100（第71図、図版23）

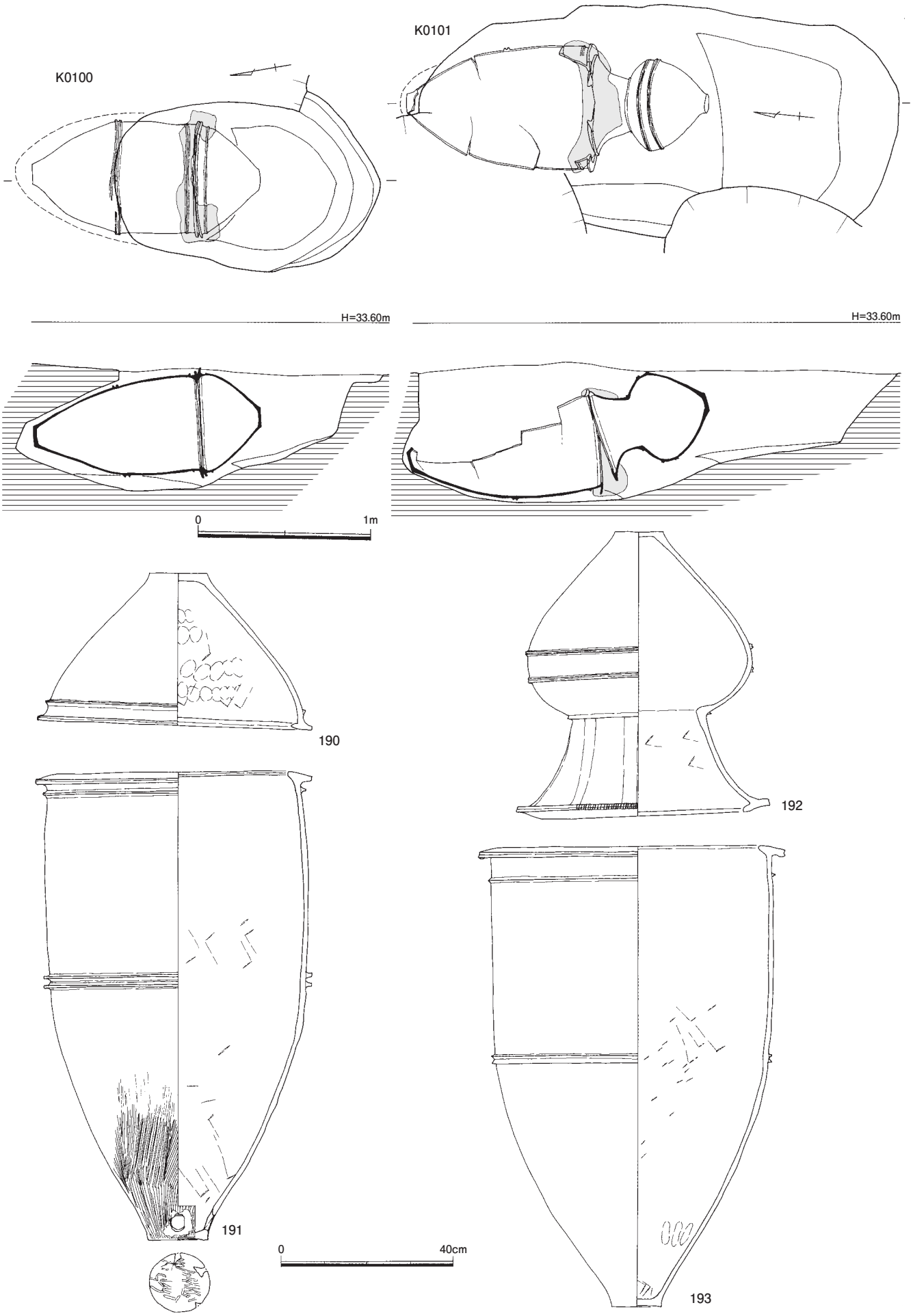
Y－26区で検出し、Ⅰ区南側に位置する。切り合い関係よりK0101→0100となる。掘り方は長軸1.4m、短軸0.95mの長円形を呈する。断面は階段状となり、北側壁面に斜坑を有する。接口式となり、合わせ目に粘土を貼付する。

出土遺物（第71図190・191、図版50）　190は上甕の鉢である。口縁部はT字形を呈し、上面は内傾する。口縁下には1条の突帯を貼付し、底部は平底となる。内外面板状工具によるナデを行い、内面には小口痕跡が認められる。191は下甕である。器高109cmを測り、細長い砲弾形を呈する。口縁下に1条、胴部に2条の高い台形突帯を貼付し、底部直上には穿孔を有する。口縁部は外傾するT字形を呈する。調整は胴部外面の上位から中位はナデ、下位には縦刷毛が残る。外底面にはミガキ状の痕跡が認められる。また、内面は板状工具によるナデを行う。

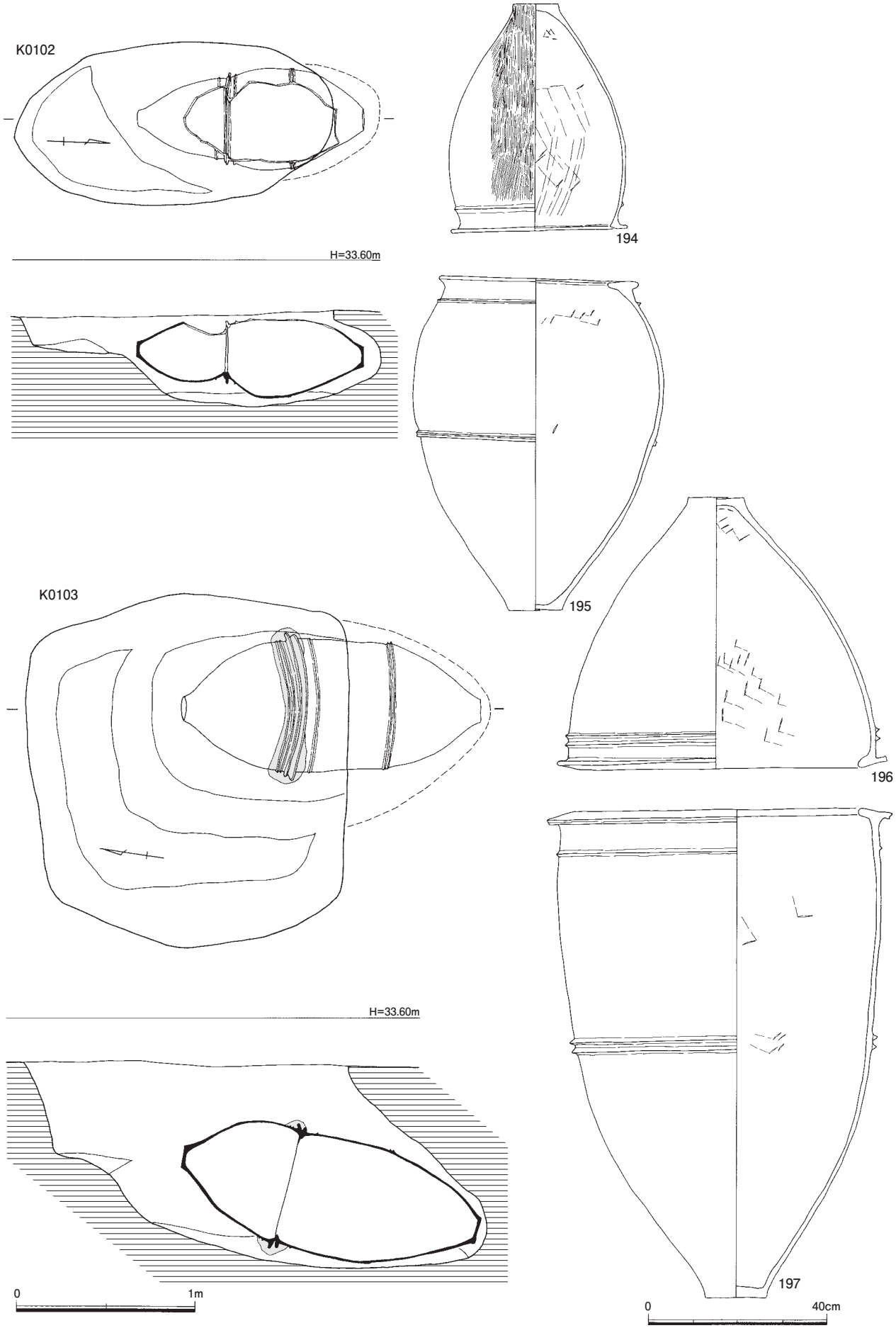
K0101（第71図、図版23）

Y－25・26区で検出し、Ⅰ区南側に位置する。切り合い関係よりK0101→0100となる。斜坑部分の崩落により現状では掘り方長軸2.75m、短軸1.3mを測るが、本来は長軸2m程度の隅丸長方形と考えられる。断面は南側に平坦面を有し、北側に斜坑を有する。壺と甕の接口式甕棺で、合わせ目には目貼りの粘土を貼付する。

出土遺物（第71図192・193、図版50）　192は上甕の広口壺である。口縁部は鋤形を呈し、外面に刻みを有する。底部は平底で胴部に2条のM字形突帯、頸部に1条の三角突帯を貼付する。底部以外の外面全体及び口縁部から頸部屈曲部位まで黒色顔料を塗布する。193は下甕である。底部は上げ底で、



第71図　K0100・0101甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第72図　K0102・0103甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

胴部は砲弾形を呈する。口縁下に1条の三角突帯、胴部には1条のM字形突帯を貼付する。口縁部上面は外傾する。胴部は内外面ナデにより、外面下位に刷毛目がわずかに認められる。

K0102（第72図、図版24）

Y－26区で検出し、I区南側に位置する。主軸・甕棺の挿入方向をそろえた一群と考えられるK0098～0102のうち最も東側、I区の南東隅に位置する。掘り方は長軸1.8m、短軸0.9mを測る。北側壁面に斜坑を有し、水平に甕棺を埋置する。

出土遺物（第72図194・195、図版50）　194は上甕である。鋤形の口縁部は内傾し、口縁下には1条の三角突帯を有する。胴部は外面縦刷毛、内面ナデを行う。195は丸みを帯びた甕棺である。胴部は上位に最大径を有し、頸部にかけて強くしまる。また胴部中位にM字形突帯、口縁下に三角突帯を持つ。調整は内外面ナデで、外面と内傾する口縁部上面には黒色顔料が残っている。

K0103（第72図、図版24）

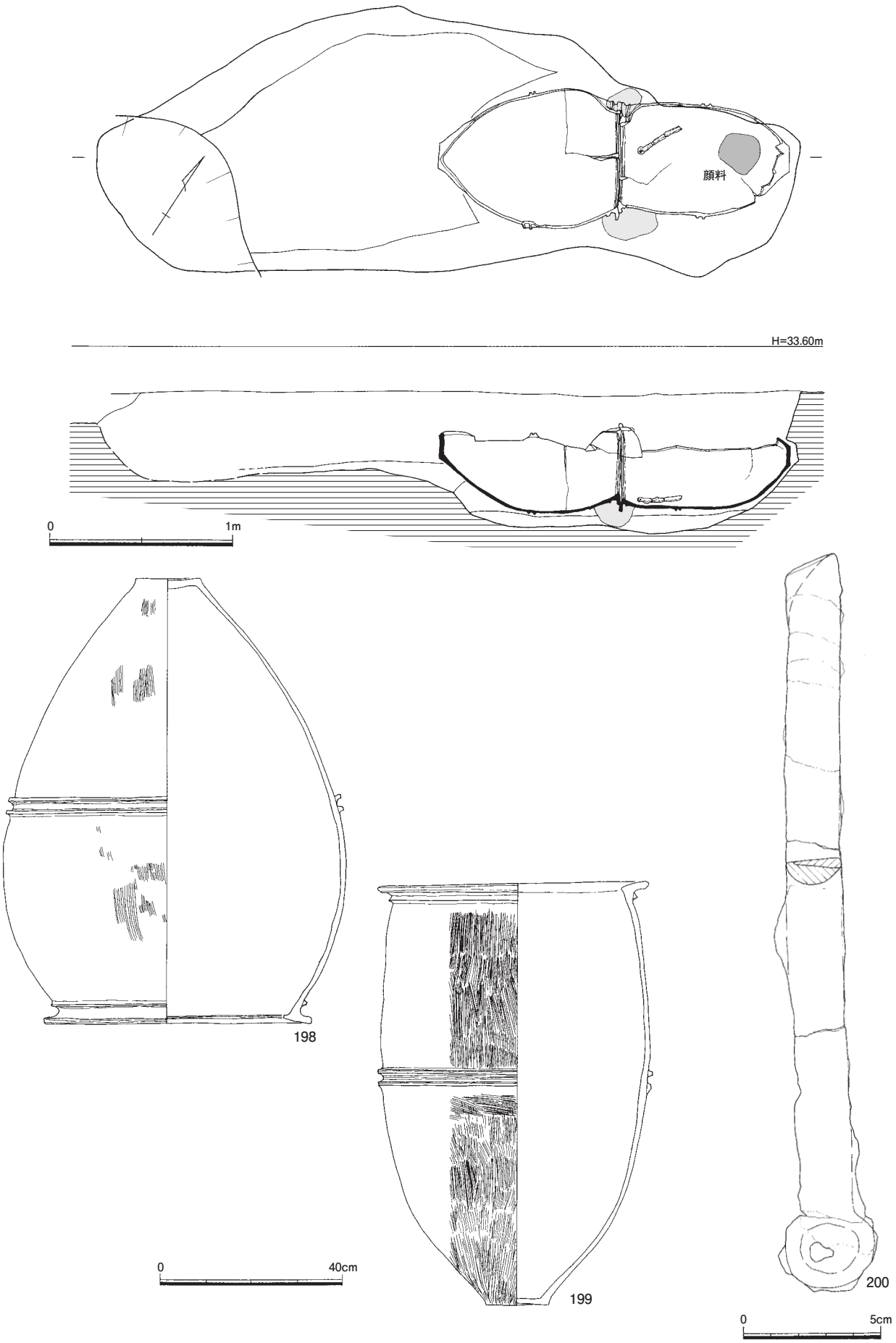
Y－25区で検出し、I区南側に位置する。K0097・0099の北側にあり、挿入方向が挿し違いになり、主軸がやや異なるが、K0115と対になる配置である。掘り方は一辺1.8～1.9mの隅丸方形を呈し、南壁面の東側に斜坑を有し、甕棺を埋置する。接口式で合わせ目には粘土を貼る。

出土遺物（第72図196・197、図版51）　196は上甕の鉢である。口縁部は内外両側に張り出し、上面は外傾する。底部は上げ底で、胴部は上半が直立する。口縁下には2条の三角突帯を有する。胴部は内外面ナデにより、内面には板状工具の小口痕が明瞭に残る。また、底部を除く外面全体及び口縁部内面には黒色顔料が残る。197は下甕である。底部は平底で胴部は砲弾形を呈する。口縁下と胴部中位にシャープな三角突帯を有し、T字形の口縁部は内傾する。胴部内外面はナデを行う。

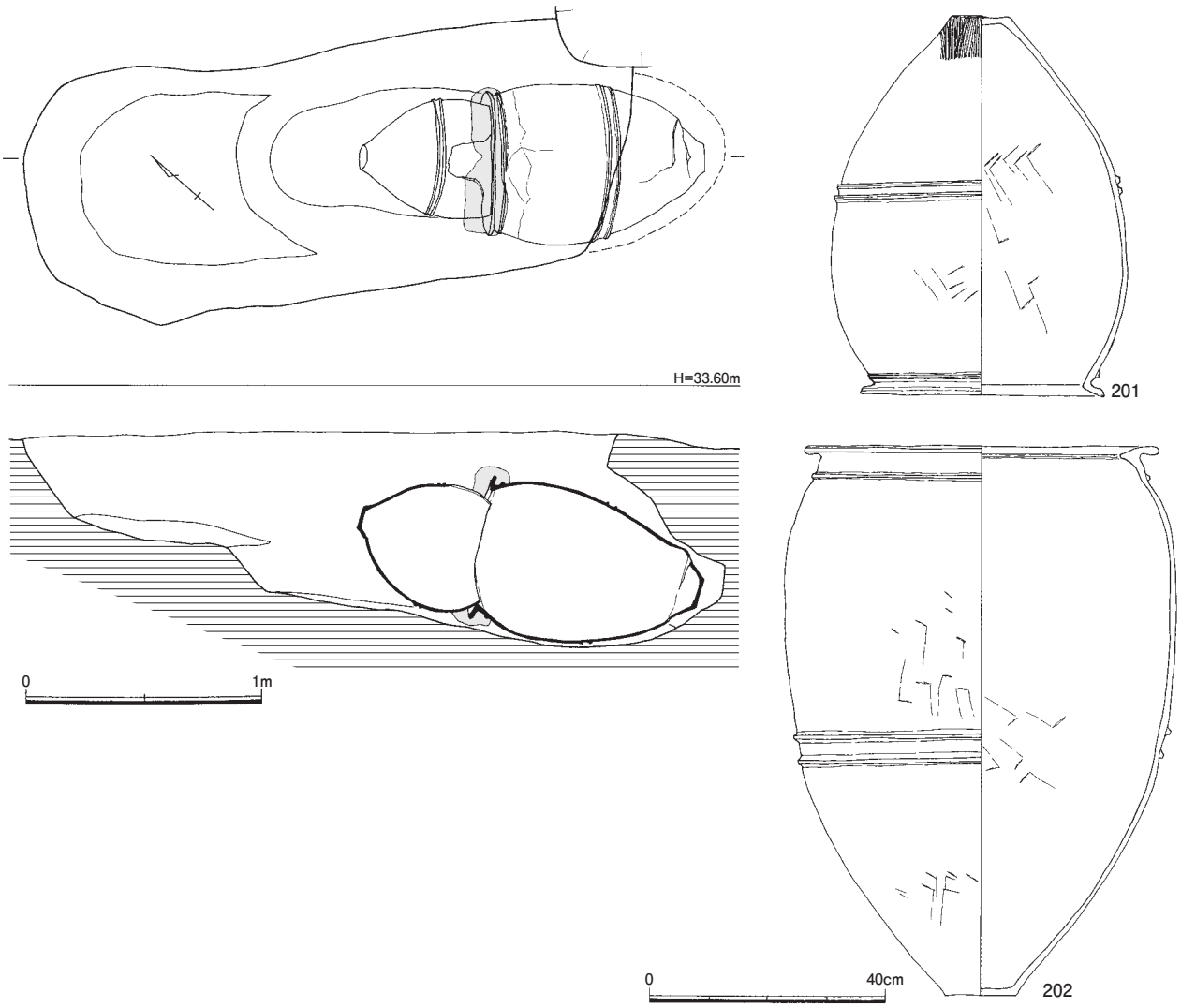
K0104（第73図、図版24）

Y－25区で検出し、I区中央付近に位置する。I区中央に配されるK0113の南側にあり、区画中央に向かって甕棺が挿入されている。K0105を除くI区中央西側の一群は主軸を区画に対して斜め方向にとり、中心部（K0113）に向かって甕棺を挿入している。掘り方は現状で長軸3.85m、短軸1.4mを測るが、斜坑部分が崩落しており、本来は長軸3m前後になると考えられる。北側に平坦面を有し、南側の斜坑内に水平に埋置されている。接口式で目貼りの粘土が行われる。下甕内で副葬の鉄製素環頭刀子が出土した。甕との間にわずかな土砂を挟み、切先を北側に向けている。また、下甕奥側では径20cmの範囲で赤色顔料を検出した。

出土遺物（第73図、図版51）　198は上甕である。底部は薄手の上げ底となり、胴部は中位が張り丸みを帯びた形態となる。口縁下と胴部にはシャープな突帯が貼付される。口縁部は内傾が強く、内側にも小さく張り出す。胴部外面は縦刷毛の後ナデ消しているが、部分的に刷毛目が残っている。また、内面はナデである。口縁部から胴部外面には黒色顔料が認められる。199は下甕である。内傾する口縁部は内側への張り出しがわずかで、断面く字形に近い。底部は薄手の上げ底で、胴部は下位から丸みを有し、重心が低くなる。頸部に三角形、胴部に台形の突帯を有するが断面形状はだれている。胴部外面は縦刷毛を施し、突帯下では横刷毛を行う。内面はナデである。200は鉄製素環頭刀子である。全体に錆膨れが進行しているが、現状で全長26.3cm、身幅2cm、環頭幅3.4cm前後を測る。破面から断面を観察すると、刃部は脊幅3mm、刃幅1.7mmで断面三角形を呈する。刃部の片面に厚さ7mm、幅2cmの断面蒲鉾型の錆が銹着する。この部分は木製鞘の痕跡と考えられ、環頭の付け根まで刀身を覆う。また刀身反対面にはこの鞘状の痕跡は全く残っていないため、甕棺に接触していた部分は消失したものと考えられる。



第73図　K0104甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、200は1/2、198・199は1/12）



第74図　K0105甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

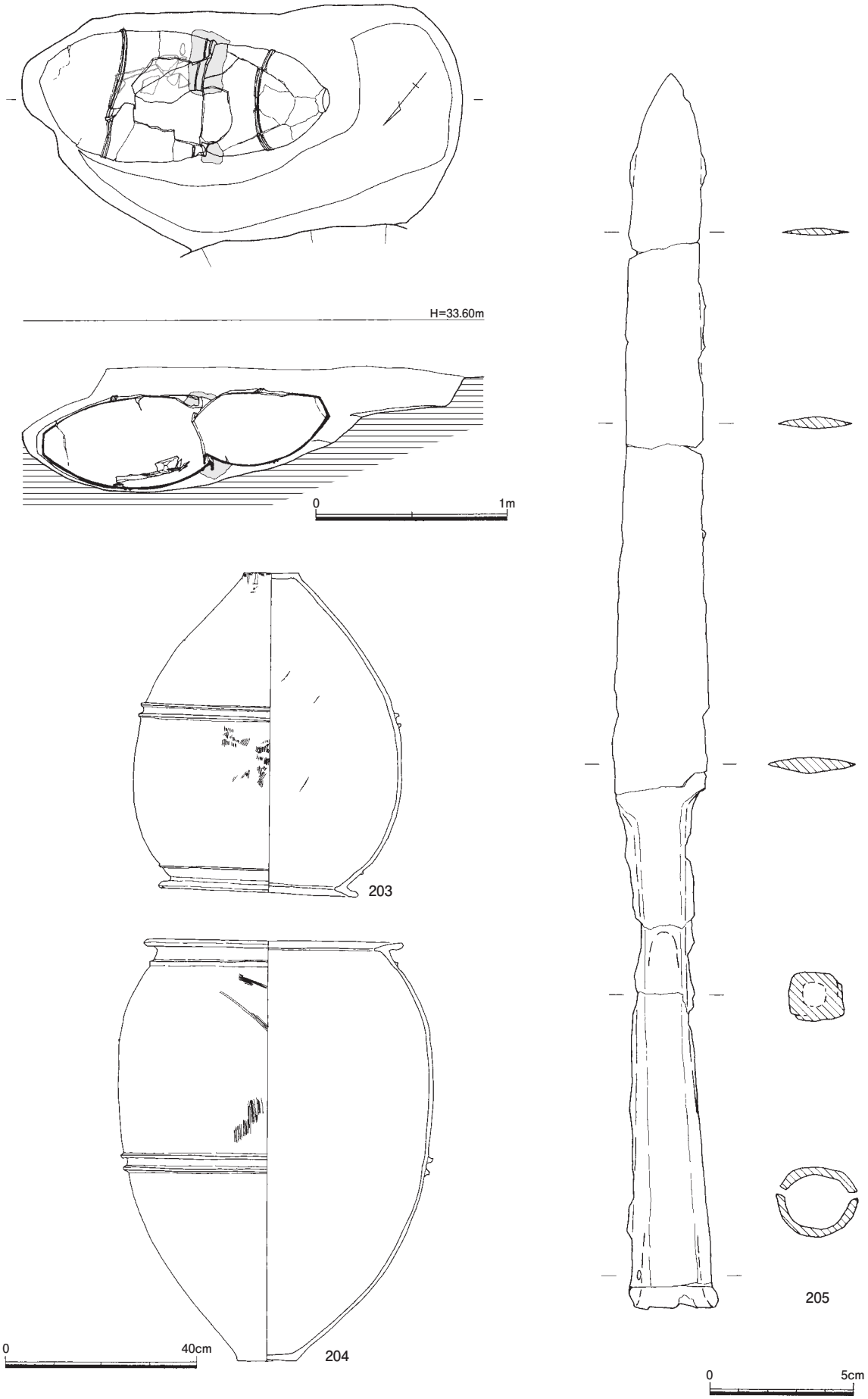
K0105（第74図、図版25）

Ｘ－25区で検出し、Ｉ区南西隅に位置する。東側のK0104を含む周辺の墓群とほぼ90°主軸方位を違えている。掘り方は長軸2.5m、短軸1.05mを測り、南東方向に斜坑を有し、甕棺を埋置している。呑口式で合わせ目には粘土を貼る。

出土遺物（第74図、図版50）　201は上甕である。口縁部はく字形に屈曲し、内面には明瞭な稜を有する。底部はわずかにくぼみ、卵形の胴部下位に2条、頸部直下に1条の突帯を貼付する。胴部外面は板ナデを行うが、底部との境付近には縦刷毛が残る。内面には板状工具の小口痕跡が残る。また、胴部外面には黒色顔料が認められる。202は下甕である。口縁部は内側への張り出しが小さく、く字形に近くなる。胴部上位に最大径を有し、頸部に向かって強くしまる。突帯はシャープさに欠ける。胴部内外面共にナデを行い、小口痕跡が残る。

K0106（第75図、図版24）

Ｘ・Ｙ－25区で検出し、Ｉ区南西側に位置する。西側のK0114とほぼ並列し、対になる配置である。掘り方は現況で長軸2.3mを測るが、斜坑部が崩落・削平されており、本来は一辺1.4m程度の方形に近いものと考えられる。甕棺は呑口式で合わせ目には粘土を貼る。下甕の南東側に、切先を上甕方向



第75図　K0106甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、205は1/2、203・204は1/12）

に向け、ほぼ器面に接した状態で、鉄矛が副葬されていた。矛直上には拳大の自然礫が落下し、矛はこれに銹着しているため、埋葬後比較的早い時期での礫の混入が考えられる。

出土遺物（第75図、図版51）　203は上甕である。口縁部はわずかに内側に張り出し、内傾している。胴部は卵型を呈し、頸部のしまりは強い。突帯は胴部2条、口縁下に1条貼付するが、いずれもだれた台形を呈する。胴部外面は縦刷毛ののち板状工具によるナデを行うが、部分的に刷毛目が残っている。内面も板状工具によるナデを行う。口縁部内面～胴部外面に黒色顔料が残る。204は下甕である。口縁部は内傾し、内側への張り出しは小さい。底部はわずかに上げ底となり、胴部は中位から上位が張り出し、頸部は強くしまる。突帯は台形を呈し、胴部突帯は下垂気味である。外面は刷毛目の後ナデを行うが、部分的に刷毛目が残っている。内面もナデを行う。また、頸部以下胴部外面に黒色顔料が残っている。205は鉄矛である。全長43.3cmの長鋒型である。身部長25cm、袋部長17.3cmを測る。関下の袋部は断面方形～長方形を呈し、袋部先端にかけて稜を残しながら円形に近くなる。袋部先端は7mmの幅で肥厚させており、その上部には2ヶ所の目釘穴が認められる。身部は関幅3.1cmを測り、断面は菱形であるが、明瞭な鎬は認められない。

K0107（第76図、図版25）

Y－25区で検出し、Ⅰ区西側に位置する。K0108の北西側同一平面上で検出し、墓坑が不明のまま取り上げを行った。甕棺は削平が著しく共に1／4程度が残存するのみである。

出土遺物（第76図206・207）　206は上甕である。口縁部は水平で、胴部は丸みを帯びる。突帯は胴部に2条台形突帯を貼付する。胴部外面は縦刷毛、内面は板状工具によるナデを行う。頸部下外面に、黒色顔料が痕跡的に残る。207は下甕である。上甕同様に丸みを帯びた甕棺である。胴部内外面はナデによる。また、胴部外面上半に赤色顔料が飛沫状に点在する。

K0108（第76図、図版25）

Y－25区で検出し、Ⅰ区西側に位置する。墓坑は長軸2m、短軸0.9mを測る。接口式で、合わせ目には目貼り粘土の貼付が認められる。

出土遺物（第76図208・209、図版51）　208は上甕である。内湾気味の口縁部はく字形に立ち上がり、屈曲部内面には稜を有する。胴部上位が張り、口縁下には三角突帯を貼付する。外面は縦刷毛、内面はナデを行い、内底付近には指頭痕が残る。209は下甕である。口縁部はく字形を呈し、頸部に三角突帯を付す。胴部外面縦刷毛、内面ナデを行う。口縁部～胴部外面下位付近までには煤が付着し、内面中位以下にも炭化物の付着が認められる。

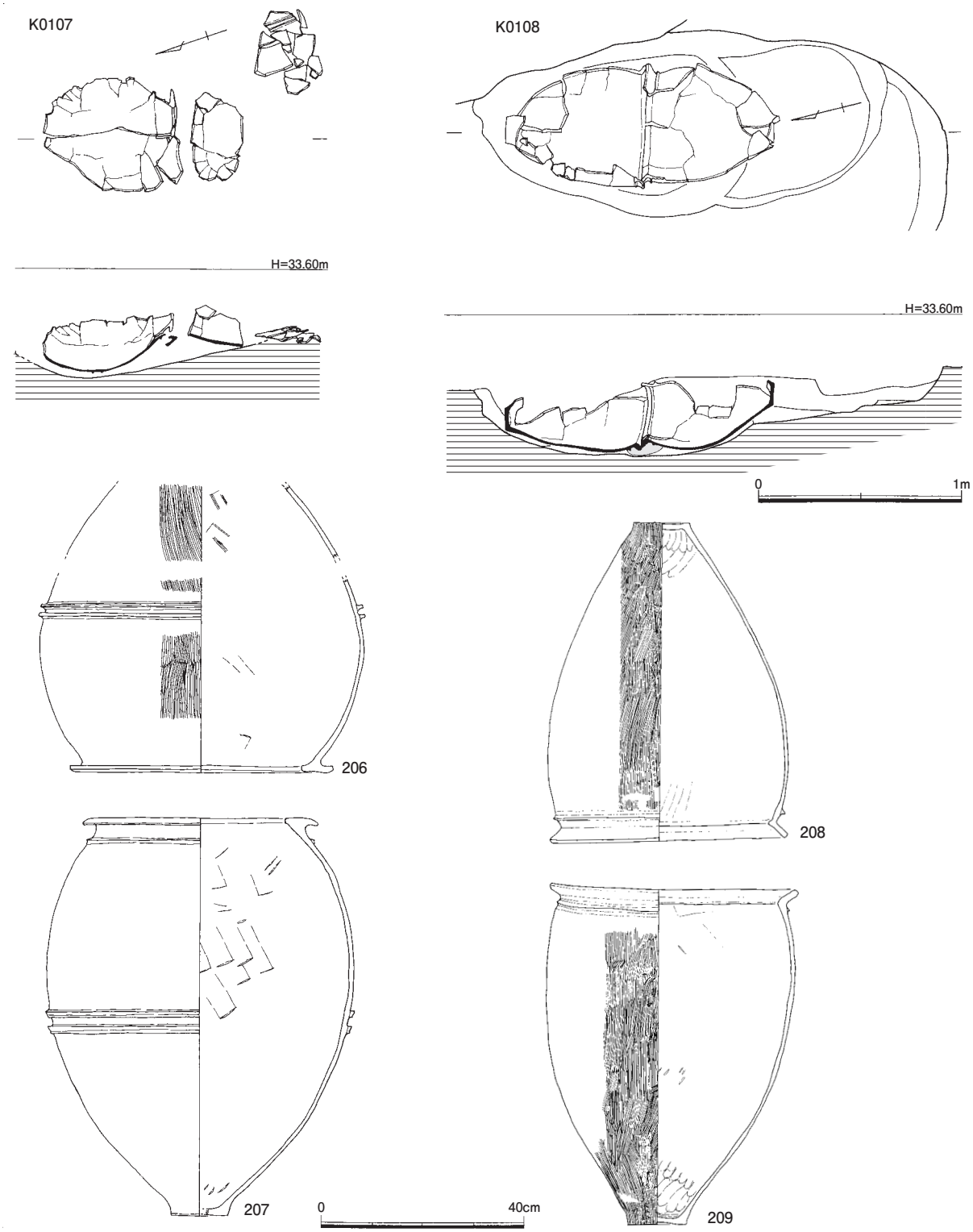
K0109（第77図、図版25）

Y－25区で検出し、Ⅰ区北側に位置する。東側に接するK0110の墓坑を切っている。墓坑は長軸2.1m、短軸1.1mを測る。接口式で、合わせ目には目貼り粘土の貼付が認められる。

出土遺物（第77図210・211、図版52）　210は上甕の鉢である。鋤形の口縁部はわずかに内傾し、口縁下には三角突帯を貼付する。調整は胴部外面縦刷毛、内底付近は指押さえ、胴部内面は板状工具によるナデ、口縁部内面は横刷毛の後ナデを行うが、痕跡的に刷毛目が残っている。211は下甕である。T字形の口縁部は外傾し、胴部は砲弾形を呈する。頸部に1条、胴部に2条の台形突帯が貼付される。胴部外面上位は板状工具によるナデ、突帯以下は縦刷毛ののちナデを行う。内面はナデである。口縁部内面に痕跡的に黒色顔料が残存している。

K0110（第77図、図版25）

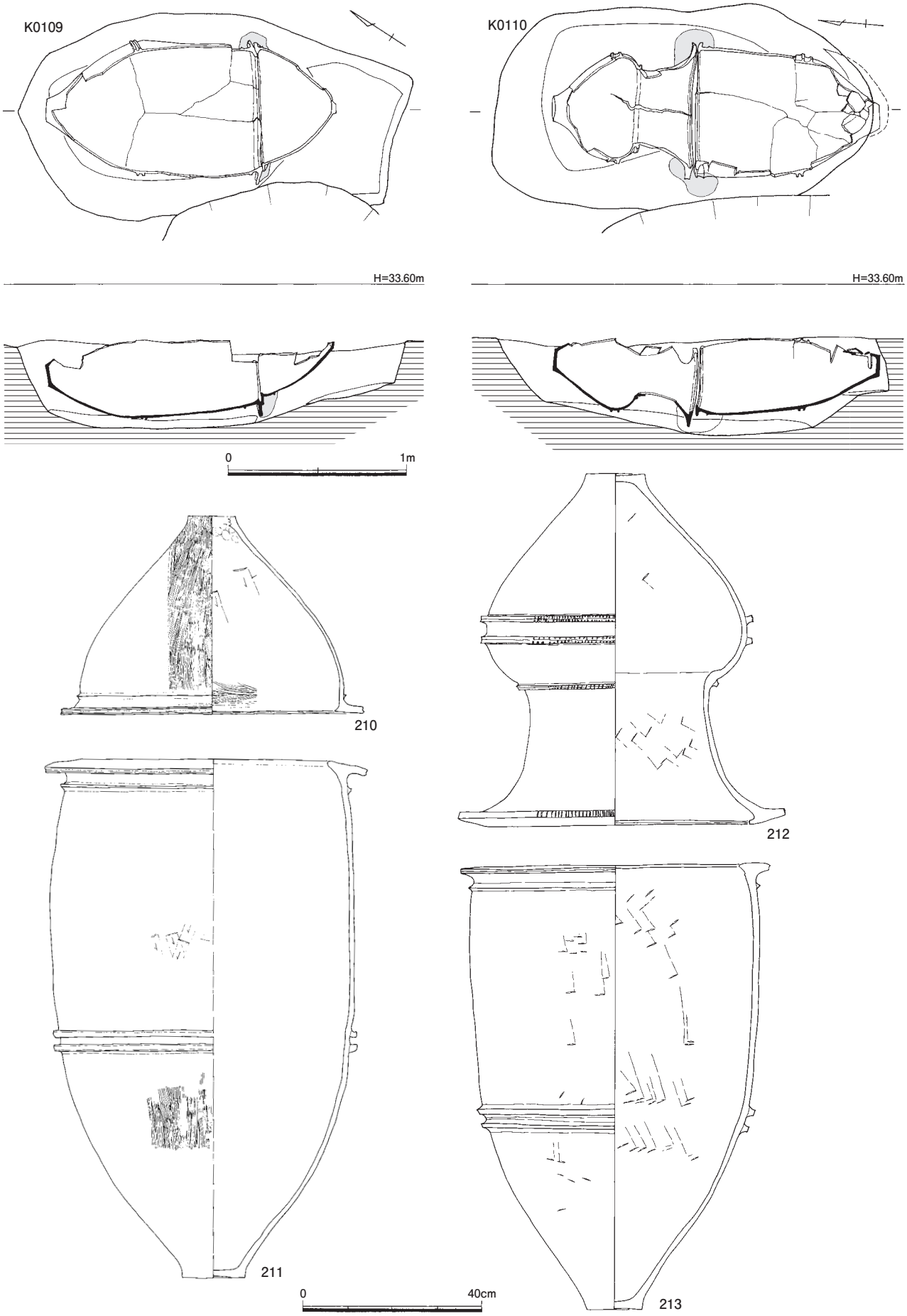
Y－25区で検出し、Ⅰ区北側に位置する。K0113の北側にあり、K0117と対になるように配されている。墓坑は長軸2.1m、短軸1.1mを測る。削平により甕棺の一部が失われているが、接口式で合わせ



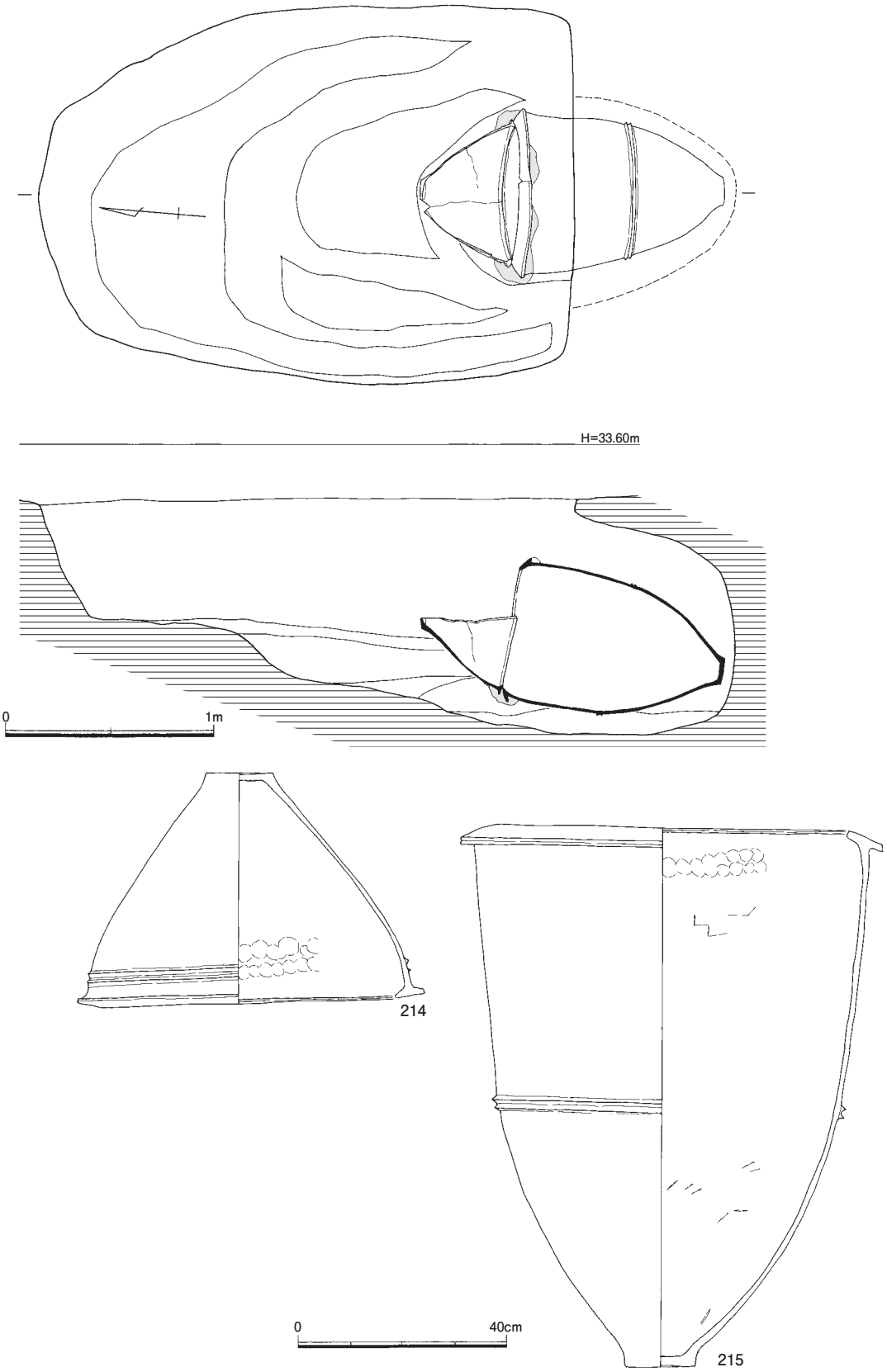
第76図　K0107・0108甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

目には目貼り粘土の貼付が認められる。

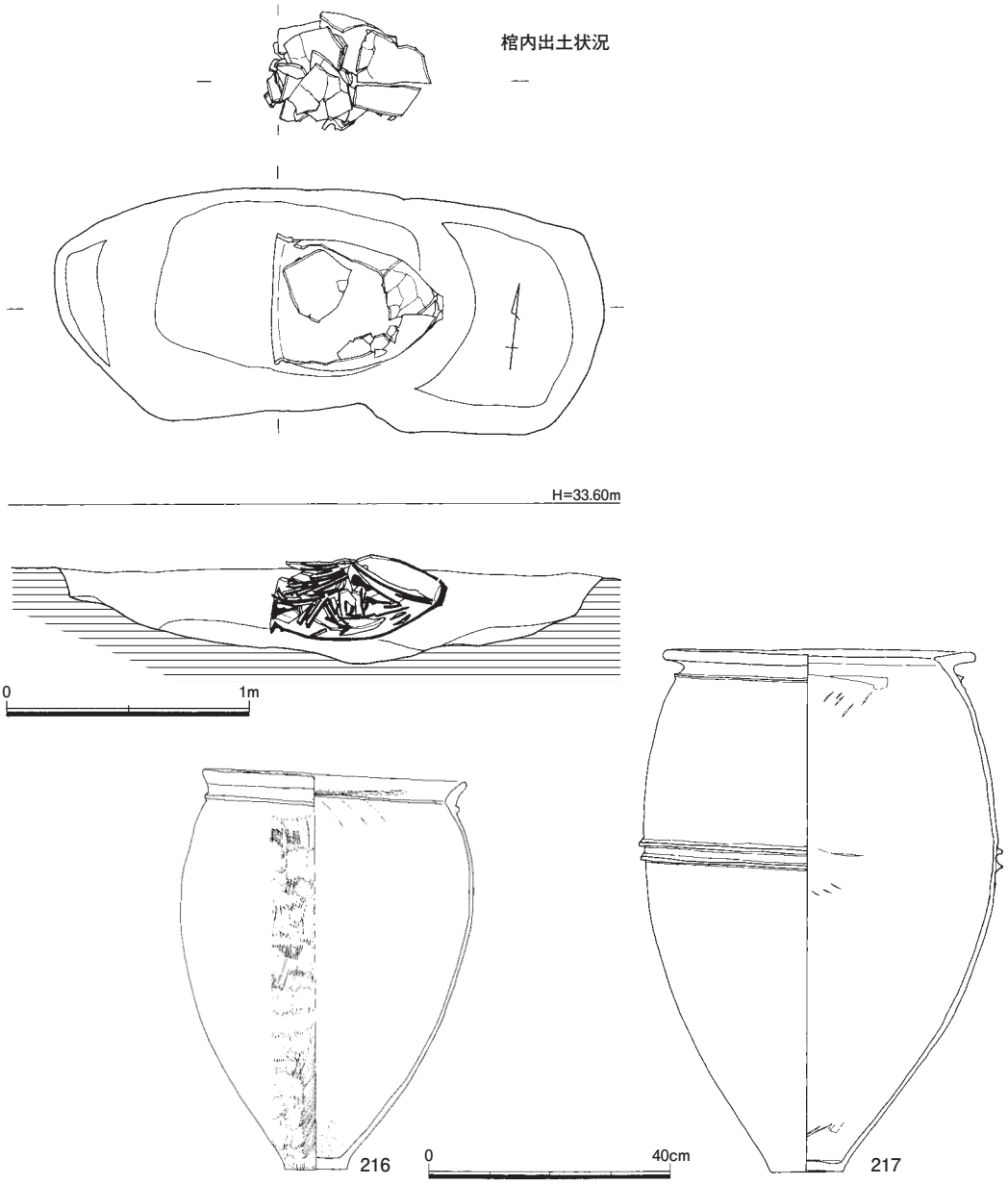
出土遺物（第77図212・213、図版52）　212は上甕の壺である。口縁部は外傾する鋤形を呈する。底部は上げ底気味で胴部は上位に最大径を有する。最大径位置に2条、屈曲部に1条の台形突帯を貼付し、口縁部外面及び突帯外面には刻みを施す。調整は内外面ナデにより、内面には小口痕跡が残る。外



第77図　K0109・0110甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第78図　K0111甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

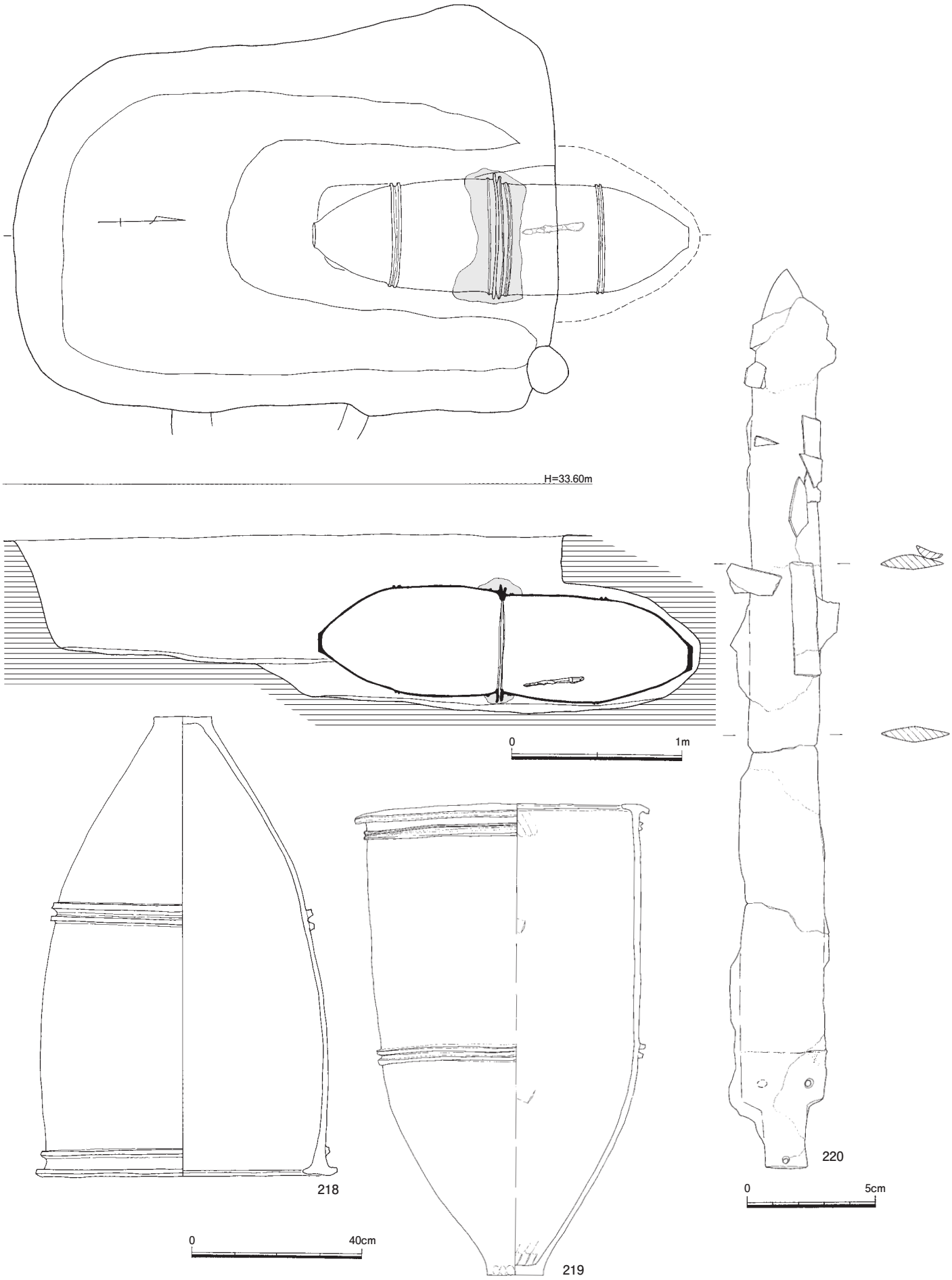


第79図　K0112甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

面の１／２ほどの範囲には赤色顔料の飛沫痕跡が付着する。また外底以外の外面及び頸部～口縁部内面に黒色顔料が残る。213は下甕である。口縁部は外側への張り出しが小さく、上面は水平である。胴部は砲弾形を呈し、中位に２条の台形突帯、口縁下に１条の三角突帯を貼り付ける。調整は内外面ナデで、小口痕跡が残る。上甕同様外面に赤色顔料の飛沫が飛び散っている。また、外面から口縁部内面にかけて黒色顔料が認められる。

K0111（第78図、図版25）

Ｙ－25区で検出し、１区中央に位置する。Ｉ区はK0113掘り方南東端が区画のほぼ中央に位置し、K0111はこの北東側にありやや主軸方位が異なる。両者に切りあい関係は認められないが、甕棺の型式的な検討からはK0111が先行するものと考えられる。このことから本甕棺はＩ区の造営契機となった甕棺と考えられる。墓坑は長軸2.55m、短軸1.8mを測る。断面階段状に掘り下げていき、南壁中央



第80図　K0113甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、220は1/2、218・219は1/12）

に斜坑を抉り甕棺を埋置する。甕棺は接口式で合わせ目には目貼り粘土の貼付が認められる。

出土遺物（第78図、図版52）　214は上甕である。口縁部はＴ字形を呈し、上面は外傾する。口縁下には2条の三角突帯を有する。内外面ナデを行う。215は下甕である。Ｔ字形の口縁部は外傾する。胴部は砲弾形を呈し、頸部にかけてわずかに広がりを持つ。突帯は口縁下にはなく、胴部にＭ字形突帯を貼付する。調整は内外面ナデにより、内面には小口痕跡が残る。

K0112（第79図、図版25）

Ｙ－25区で検出し、Ｉ区東側に位置する。墓坑は長軸1.7m、短軸0.9mを測る。単棺であるが、棺内はほぼ完形に復元できる大形棺破片で充填されていた。破片は丁寧に積み重ねられており、奥まで入っていることから、崩落した棺内に投棄されたものでなく、大形棺破片を人為的に棺内に埋納したものと考えられる。

出土遺物（第79図、図版52）　216は埋置された甕棺である。口縁部は外反気味にく字形に屈曲し、内面には稜を有する。頸部外面には台形突帯を貼付し、胴部は上位に膨らみを有する。胴部外面は縦刷毛、内面はナデを行う。また、胴部外面には煤、内面には炭化物がそれぞれ付着している。217は216内に埋納されていた大形棺である。口縁部は内傾し、胴部は長卵形を呈する。口縁下に三角突帯、胴部中位に台形突帯を貼付する。内外面ナデを行い、内面には小口痕跡が残る。

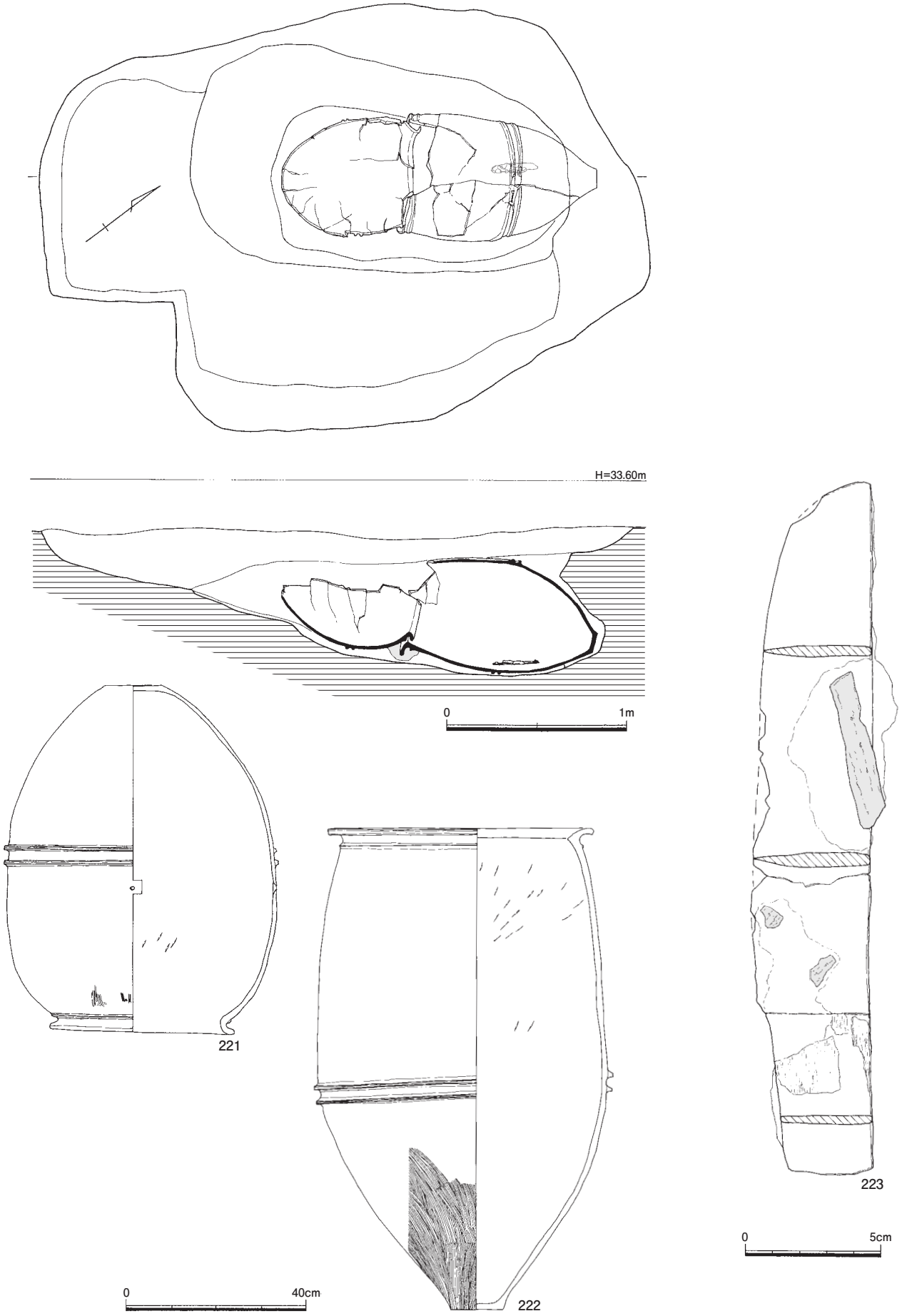
K0113（第80図、図版26）

Ｙ－25区で検出し、Ｉ区中央に位置する。主軸方位はやや異なるものの、K0111と対になり区画ほぼ中央北寄りに配され、区画内周辺の甕棺が本甕棺墓を指向した主軸をとることなどから本区画墓域の中心的な埋葬主体と考えられる。墓坑は長軸3.1m、短軸2.3mを測り、隅丸長方形を呈する。北壁側を除く3方向に平坦面を有し、北壁を抉りこんで更に一段掘り下げて、甕棺を埋置する。甕棺は接口式で合わせ目には目貼り粘土の貼付が認められる。下甕内中央付近には、切先を上甕方向に向けて鉄剣とこれに銹着した鉄製鉇が副葬されている。なお、剣に付着して、木質等は検出していない。

出土遺物（第80図、図版53）　218は上甕である。口縁部はＴ字形を呈し、上面はほぼ水平となる。底部は平底で、胴部は砲弾形を呈する。口縁下と胴部中位より下に台形の突帯が貼付されている。突帯は高く稜線も明瞭で、しっかりとしたつくりである。胴部は内外面共に丁寧なナデを行う。また、口縁部上面から内面全体にかけて黒色顔料が塗布されているが、現状で幅2～5cmの、横方向の縞状に残存している。219は下甕である。Ｔ字形の口縁部は外側が垂れ下がっている。底部は彼我底で、胴部は砲弾形を呈する。口縁部に1条のＭ字形突帯、胴部に2条の台形突帯を貼付する。胴部の突帯はつくりがシャープである。調整は内外面共にナデで、板状工具の痕跡が残る。220は鉄剣である。完形品で全長35.2cm、身長32,5cm、身幅2.5～3.2cmである。茎は長さ2.5cmの短茎で、幅は1.6cmを測る。茎端に1ヶ所及び身下端部に2ヶ所、計3ヶ所の目釘穴を有する。関上2cmのところには木柄の装着痕跡が残っており、部分的に木質が残存している。身の断面は菱形となるが、現状で明瞭な鎬は認められない。身部上半には幅1cm弱、厚さ2～3mmの折損した板状鉄器が銹着しており、鉇の可能性が考えられる。また部分的に布痕が認められる。

K0114（第81図、図版26）

Ｘ－25区で検出し、Ｉ区中央西端に位置する。Ｉ区西側を画する区画溝を切り、埋没後に掘削・埋置されたものである。Ｉ区西側の、区画主軸に対して斜めに墓坑を掘削する一群に含まれる。掘り方は現状で長軸3.3mを測るが、張り出し状の東側部分と長軸北端は掘り過ぎの可能性があり、本来は長軸2.9m、短軸1.4m程度の隅丸長方形を呈するものと考えられる。甕棺は呑口式で合わせ目には粘土を貼付する。下甕の中央西よりに器壁よりやや浮いて、切先を棺底方向、刃部を西側に向けた鉄刀が



第81図　K0114甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、223は1/2、221・222は1/12）

副葬されている。

出土遺物（第81図、図版53）　221は上甕である。胴部は長球形を呈し、中位に最大径を有し、頸部がしまる。口縁部は頸部から強く外反し、内面には明瞭な稜線は持たない。口縁下と胴部中位には比較的しっかりした台形突帯を貼付する。また、突帯上位に穿孔を行う。調整は内外面ナデであるが、外面上位には縦刷毛が部分的に残っている。222は下甕である。口縁部はく字形に屈曲し、強く内傾する。口縁部上面には全周に小口痕跡が認められる。底部はほぼ平底で、胴部は長胴で頸部にかけてしまりを有する。口縁下には1条の三角突帯、胴部中位には2条の台形突帯を貼付し、突帯形状はシャープである。胴部外面は上位～中位はナデを行うが、下位にはナデを行わず刷毛目が残っている内面はナデにより、上半部に小口痕跡が残っている。223は完形の鉄刀である。全長25.7cm、最大身幅4.4cm、身厚3mm、茎幅3.4cmを測る。切先は膨らみを有し、平棟平造りとなる。関は片関で、関以下茎部には木質の把手装着痕跡が残存している。また、身部には現状で最大幅1cm、長さ5.5cmの骨片（アミ部）が3箇所に付着している。

K0115（第82図、図版27）

Y－25区で検出し、I区南側に位置する。I区南側の一群はK0097～0103、0115で構成され、0097を除いて略南北方向の主軸をとり、更に0102を除く6基はそれぞれ切り合いを有し2基並列した配置をとっている。長軸3.1m、短軸2.3m前後の均整の取れた隅丸長方形の掘り方を有し、断面は3方向に平坦面を有し、北側に斜坑を掘り込む。

出土遺物（第82図、図版53）　224は上甕である。口縁部は水平なT字形を呈し、底部は平底、胴部は砲弾形を呈する。口縁下に1条、胴部やや下位に2条の小さめの三角突帯を貼付する。調整は胴部内外面ナデにより、内面には帯状に黒色顔料が残っている。225は下甕である。口縁部は水平で、T字形を呈する。胴部は砲弾形を呈し、口縁下に台形突帯、中位に2条の三角突帯を有する。調整は胴部外面ナデ、内面は口縁下に横刷毛を有する他は、板状工具によるナデを行う。内面全体に黒色顔料が残っている。

K0116（第83図、図版27）

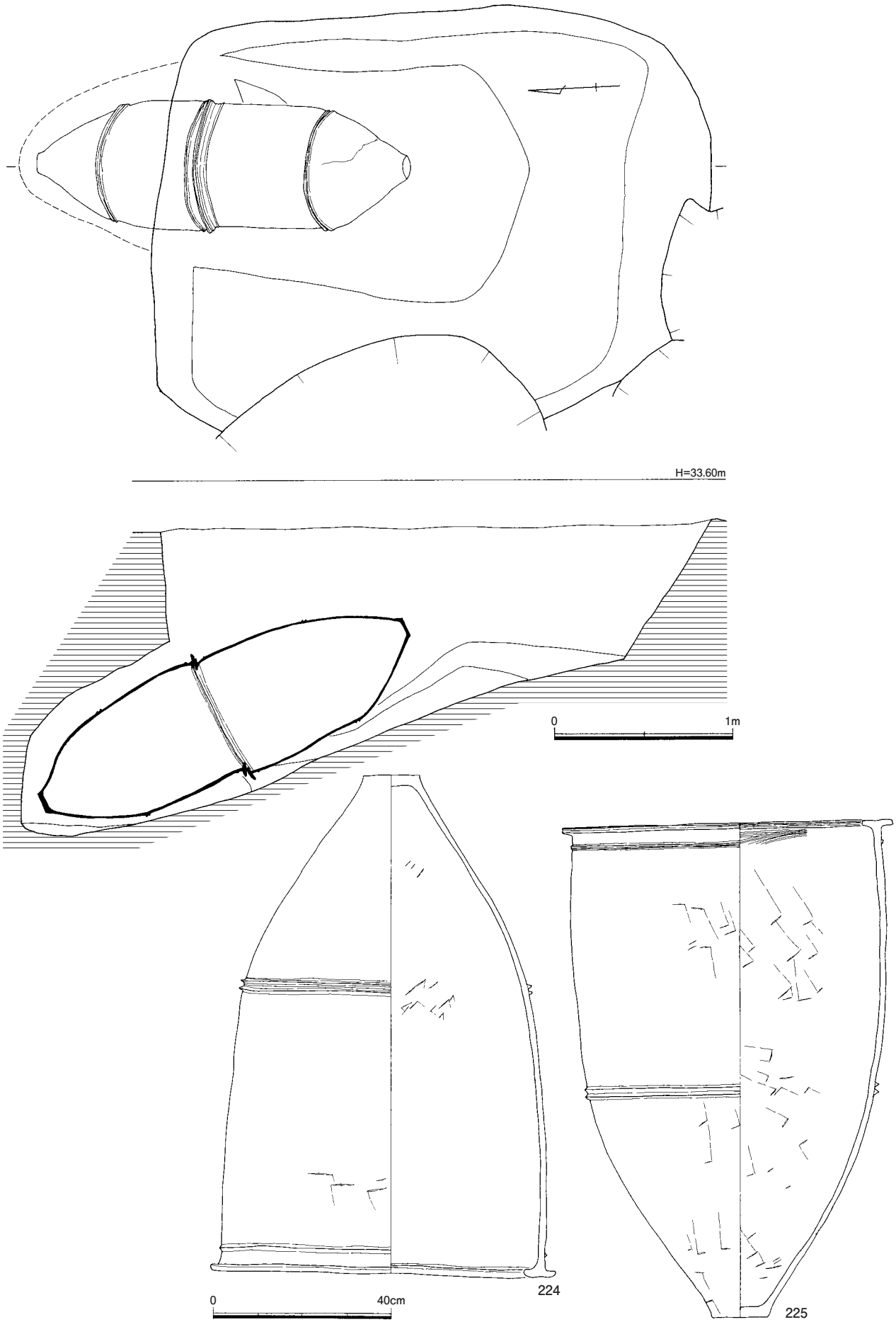
Y－25区で検出し、I区東側に位置する。I区東側には主軸方向をそろえたK0116・0112・0119からなる一群が配置されている。主軸は中央の一群にほぼ直交し、K0116・0119は中央に向かって甕棺を挿入している。甕棺は削平を受けており、上半1／2ほどが削られている。

出土遺物（第83図226・227、図版53）　226は上甕である。口縁部はく字形に屈曲し、頸部には三角突帯を貼付する。外面縦刷毛、内面ナデを行う。また外面には煤が付着する。227は下甕である。口縁部は強く内傾し、口縁下には台形突帯を有する。胴部は中位の2条三角突帯で一旦すぼまり、再度上位が膨らんでいる。胴部下位には穿孔を有する。

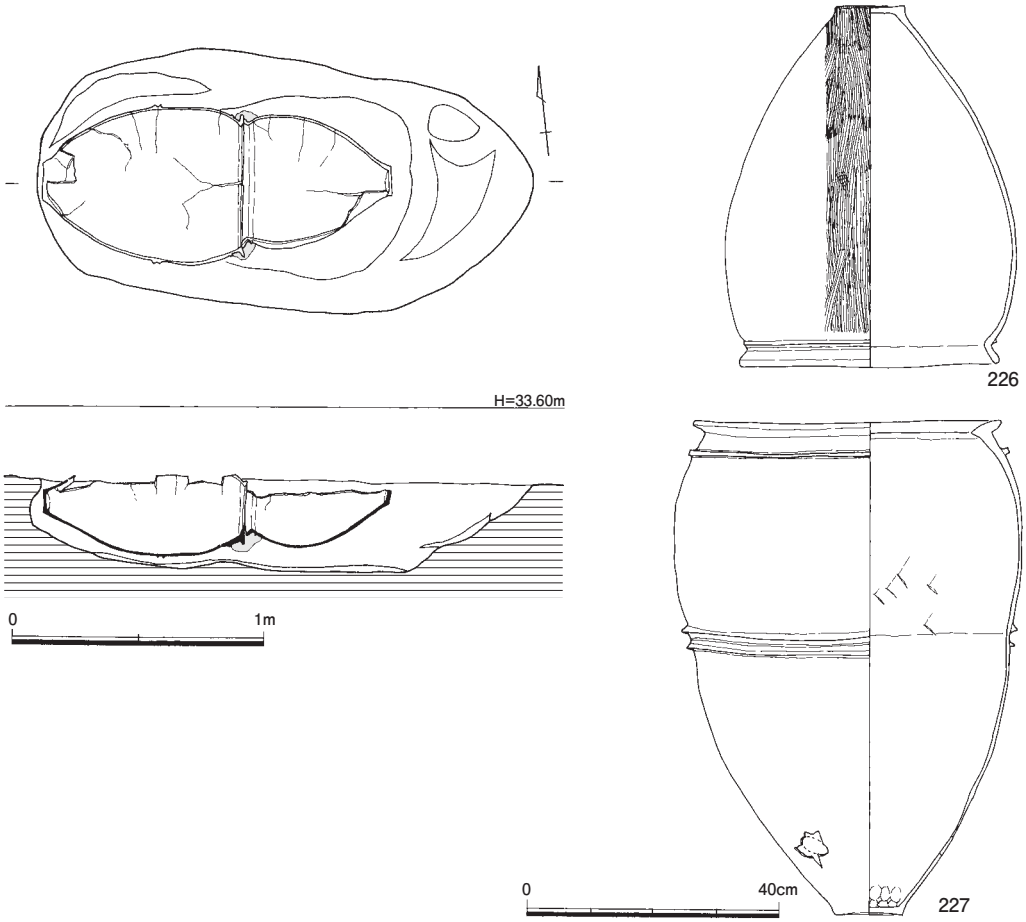
K0117（第84図、図版27）

Y－25区で検出し、I区中央北側に位置する。西側のK0110と主軸方位を揃えて、並列している。墓坑は長軸3.25m、短軸1.9mの均整の取れた隅丸長方形を呈する。断面は階段状となりながら、緩やかに傾斜し、南壁を抉り斜坑を有する。

出土遺物（第84図、図版52）　228は上甕である。T字形の口縁部は外傾する。胴部は砲弾形を呈し、中位の突帯は2条の三角突帯を有する。調整は胴部内外面ナデを行い、口縁上面から胴部外面全体に黒色顔料が認められる。229は下甕である。形態は上甕とほぼ同じである。胴部内面上位にはナデののちに、暗文状となるミガキ様の痕跡が残る。外面には痕跡的に黒色顔料が見られる。



第82図　K0115甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第83図　K0116甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0118（第85図、図版27）

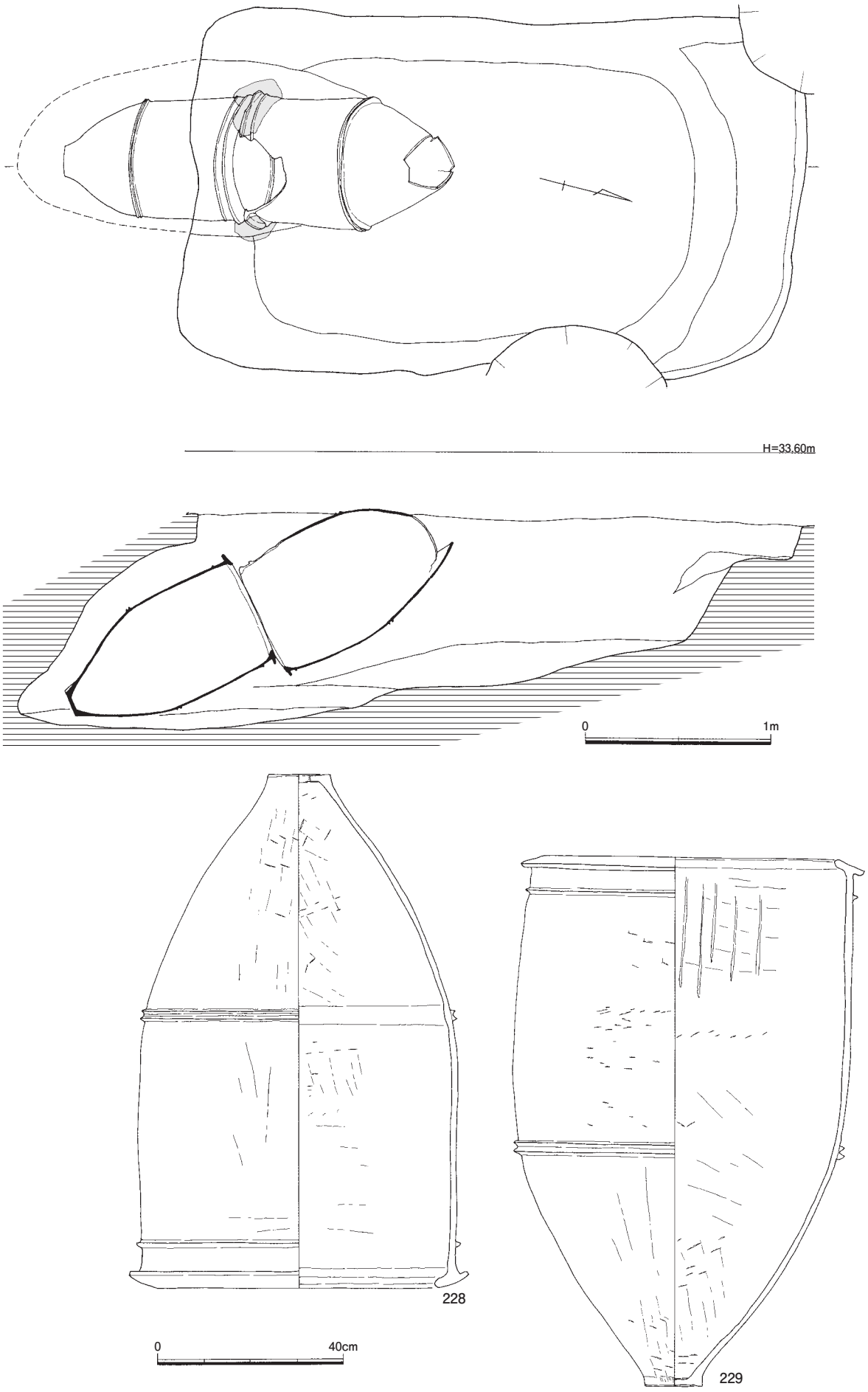
Y－24区で検出し、I区中央北側に位置する。K0117墓坑を切る小形棺である。墓坑長軸は1mを測る。甕棺は接口式で、ほぼ水平に埋置される。

出土遺物（第85図230･231、図版54）　230は上甕である。胴部の張り出しは口縁径より大きくなり、底部にかけても丸みを帯びたままである。外面に縦刷毛を行う。231は上甕に比べ、下半が反転外反しながら、底部にかけてしまりを有する。内面に3本の条線が刻まれている。

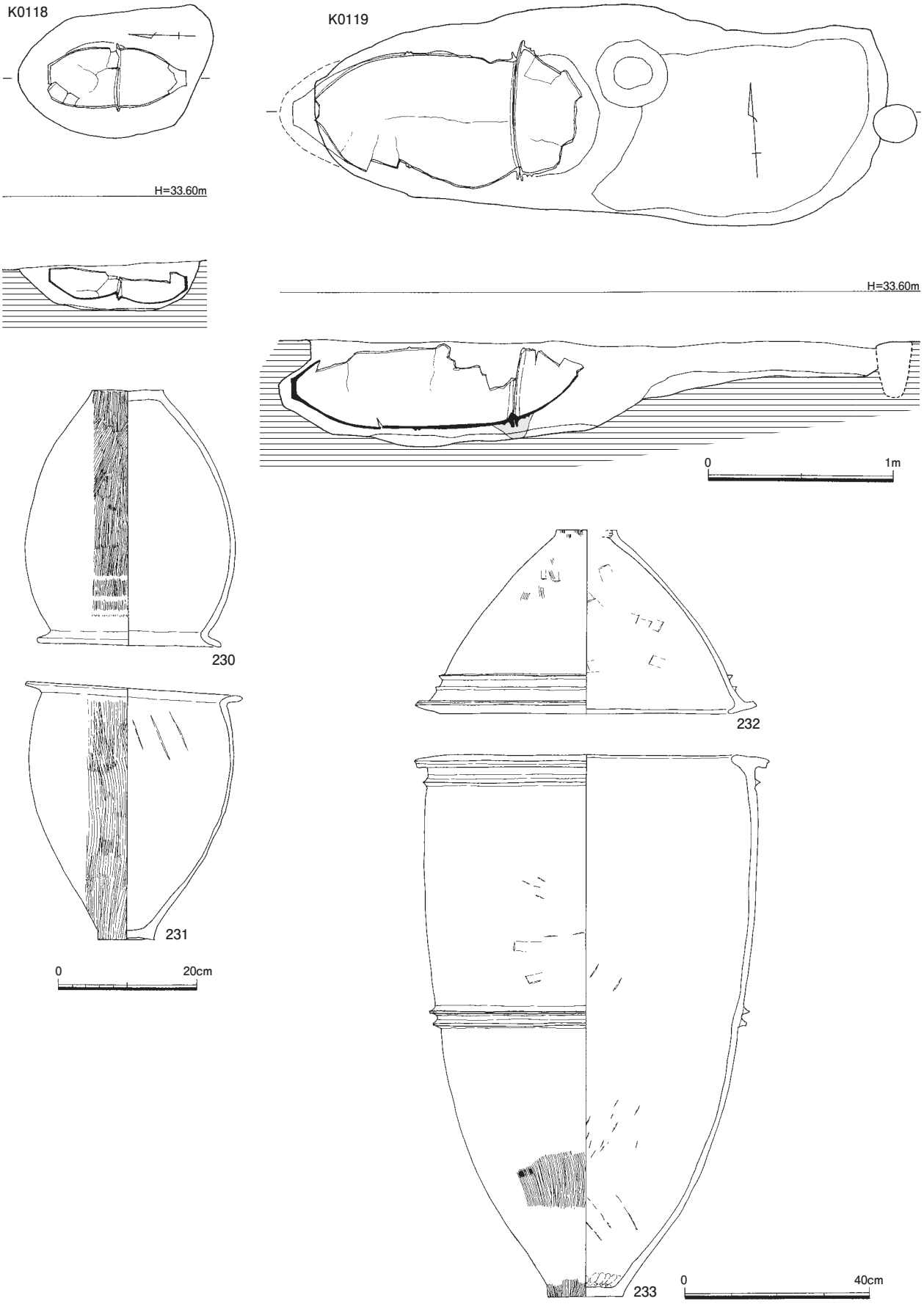
K0119（第85図、図版27）

Y－25区で検出し、I区中央東側に位置する。墓坑は長軸3.05m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈する。主軸・甕棺挿入方向は区画中央を指向し、北側のK0112・0116と並列する。接口式で目貼り粘土を有する。

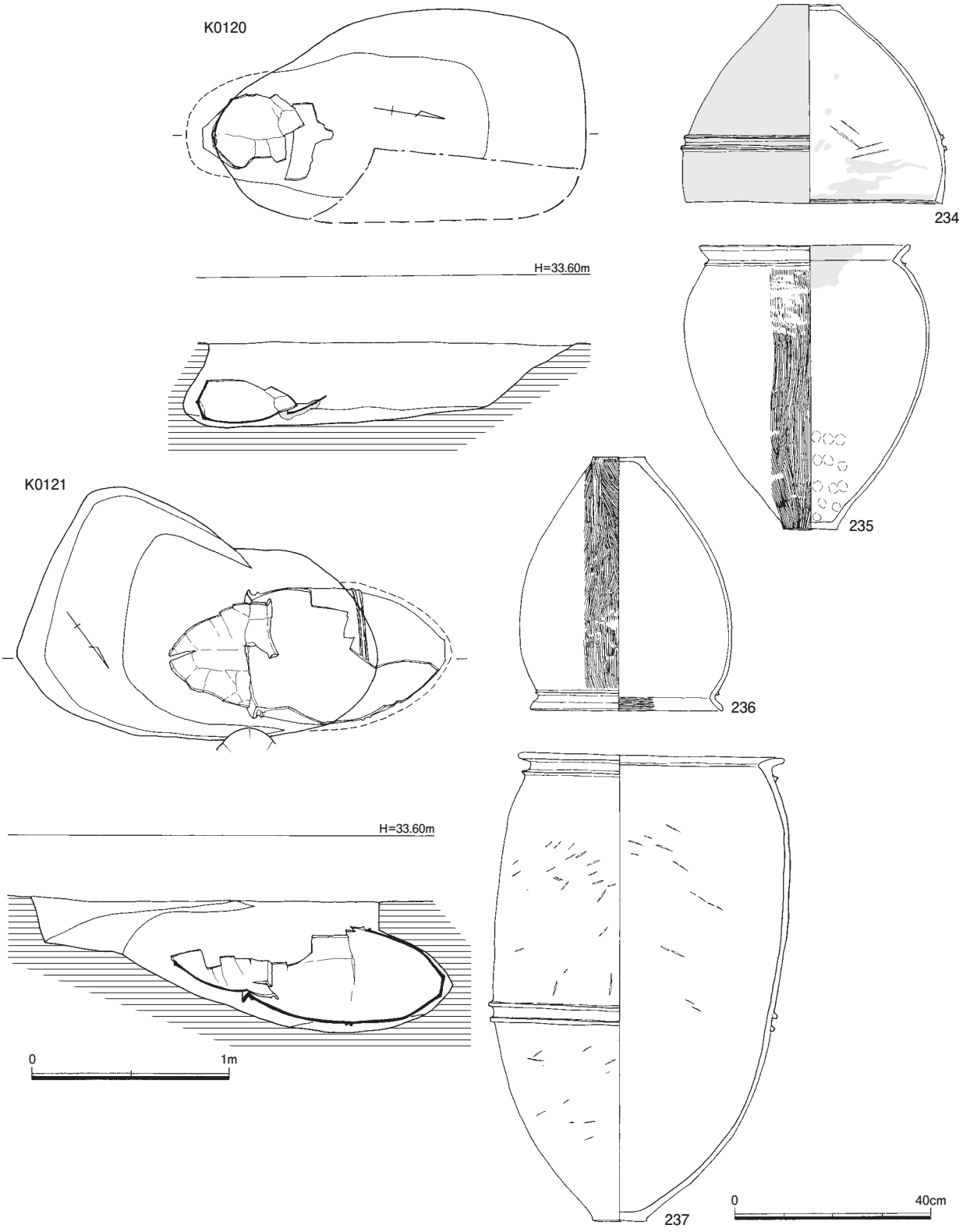
出土遺物（第85図232・233、図版54）　232は上甕の鉢である。T字形の口縁部は外傾する。胴部はハ字形に開き、口縁下には2条の三角突帯を付す。胴部内外面ナデを行うが、外面には刷毛目が部分的に残る。233は下甕である。底部は平底で、胴部は長胴砲弾形を呈する。胴部下位は膨らみを有し、底部にかけてのしまりが弱い。口縁部は外傾し、口縁下に三角突帯を有する。胴部の突帯は高い三角突帯と頂部が潰れ台形となる2条の突帯となる。胴部内外面板状工具によるナデを行うが、外面下位には刷毛目が残る。また、胴部下半に黒色顔料が認められる。



第84図　K0117甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第85図　K0118・0119甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、230・231は1/8、232・233は1/12）



第86図　K0120・0121甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0120（第86図、図版27）

Y－24区で検出し、Ⅰ区北側に位置する。区画溝埋没後に埋葬され、K0124と対になっている。上面の撹乱による破壊が著しいが、墓坑は長軸1.9m、短軸1.1m程を測り、甕棺は南側に向かって挿入されている。覆口式で上甕突帯まで粘土を貼り付けている。

出土遺物（第86図234・235、図版54）　234は上甕の鉢である。甕の胴部下半を使用したもので、口縁部はナデにより面取りを行う。胴部には台形突帯を貼り付け、外面はミガキの後板状工具によるナデを行う。口縁部内面から胴部外面にかけて全体に赤色顔料を塗布し、内面には飛沫状に顔料が付着する。235は下甕である。口縁部はく字に屈曲し、頸部には突帯を付す。胴部は丸みを帯び、底部は平底である。外面縦刷毛、内面ナデにより、胴部内面上位から口縁部には赤色顔料が付着している。

K0121（第86図、図版28）

AA－25区で検出し、Ⅰ区東側の区画外に位置する。周辺では6基の甕棺を検出しているが、主軸方位・配置等に規則性は認められない。墓坑は長軸1.7mを測る。

出土遺物（第86図236・237、図版54）　236は上甕である。口縁部はく字形に立ち上がり、頸部には三角突帯を貼付する。胴部は上位が張り出し、直線的に底部に至る。外面縦刷毛、口縁部内面には横刷毛を行う。胴部外面には煤が付着する。237は下甕である。く字形の口縁部は内傾し、長胴の上部は頸部に向かってしまりを有する。また、胴部には下垂した台形突帯を貼付する。口縁部上面には板状工具の小口痕が連続して認められる。

K0122（第87図、図版28）

AA－25区で検出し、Ⅰ区東側の区画外に位置する。墓坑は長軸1.4m、短軸0.75mを測る。日常土器の甕と打ち欠きの壺を組み合わせている。

出土遺物（第87図238・239、図版55）　238は上甕である。胴部は玉葱形に膨らみを有し、頸部には突帯を貼付する。外面へラミガキをおこない、外面には赤色顔料を施す。239は下甕である。口縁部はく字形に立ち上がり、頸部には三角突帯を貼付する。胴部は上位が張り出し、丸みを帯びる。外面縦刷毛、口縁部内面にはナデを行い、小口痕跡が認められる。胴部外面には煤が付着する。

K0123（第87図、図版28）

AA－26区で検出し、Ⅰ区東側の区画外に位置する。単棺で掘り方は長軸1.9m、短軸1.2mを測る。甕棺口縁部に接して、幅10cm程の溝状の掘り込みがあり、木蓋設置の痕跡と考えられる。

出土遺物（第87図240、図版54）　口縁部はく字形を呈し、強く内傾している。胴部は中位が張り、台形突帯を有する。調整は胴部内外面板状工具によるナデを行い、胴部外面に黒色顔料が残る。

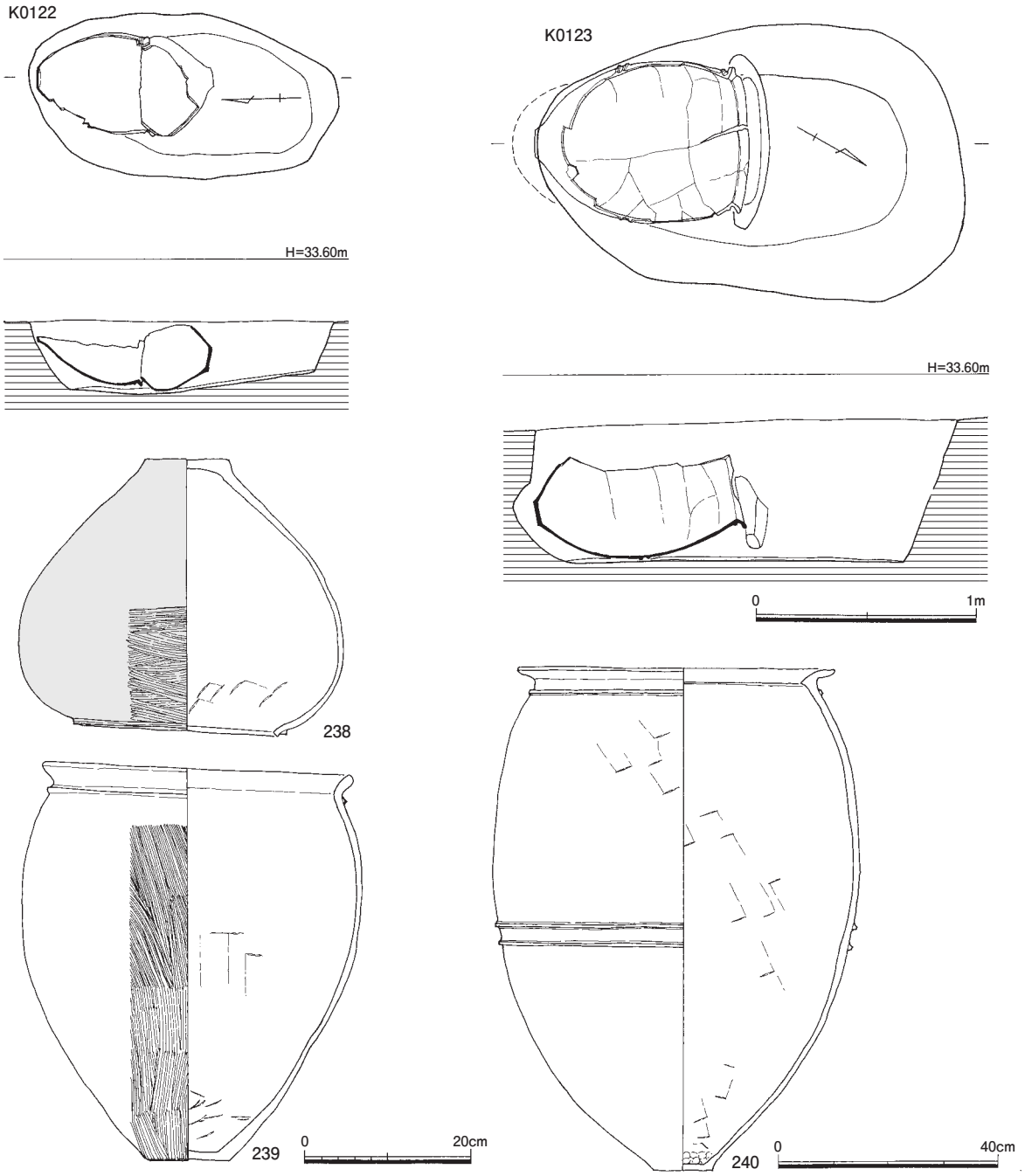
K0124（第88図、図版28）

Y－24区で検出し、Ⅰ区北側に位置する。北側区画溝埋没後に埋置されている。東側には同様に区画溝を切り、これと並列するK0120が配されている。現状で掘り方の長軸3.1mを測り、南側に斜坑を抉る。接口式の甕棺で、合わせ目には粘土を貼付する。

出土遺物（第88図、図版55）　241は上甕である。口縁部は内傾し、内側にはわずかに張り出しを有する。底部は上げ底気味で、胴部最大径を上位に有する。胴部外面は刷毛目をナデ消すが、下位には刷毛目が残る。242は下甕である。口縁部はく字形を呈し、口縁下の突帯は三角形の角をつぶしたような台形状、胴部は均整の取れた台形突帯である。胴部外面は刷毛目、内面はナデにより、内定付近には刷毛状の痕跡が残る。口縁部内面から口縁下突帯周辺に黒色顔料が認められる。

K0125（第89図、図版28）

Z・AA－25区で検出し、Ⅰ区東側の区画外に位置する。周辺にまとまる区画外の甕棺墓は時期的



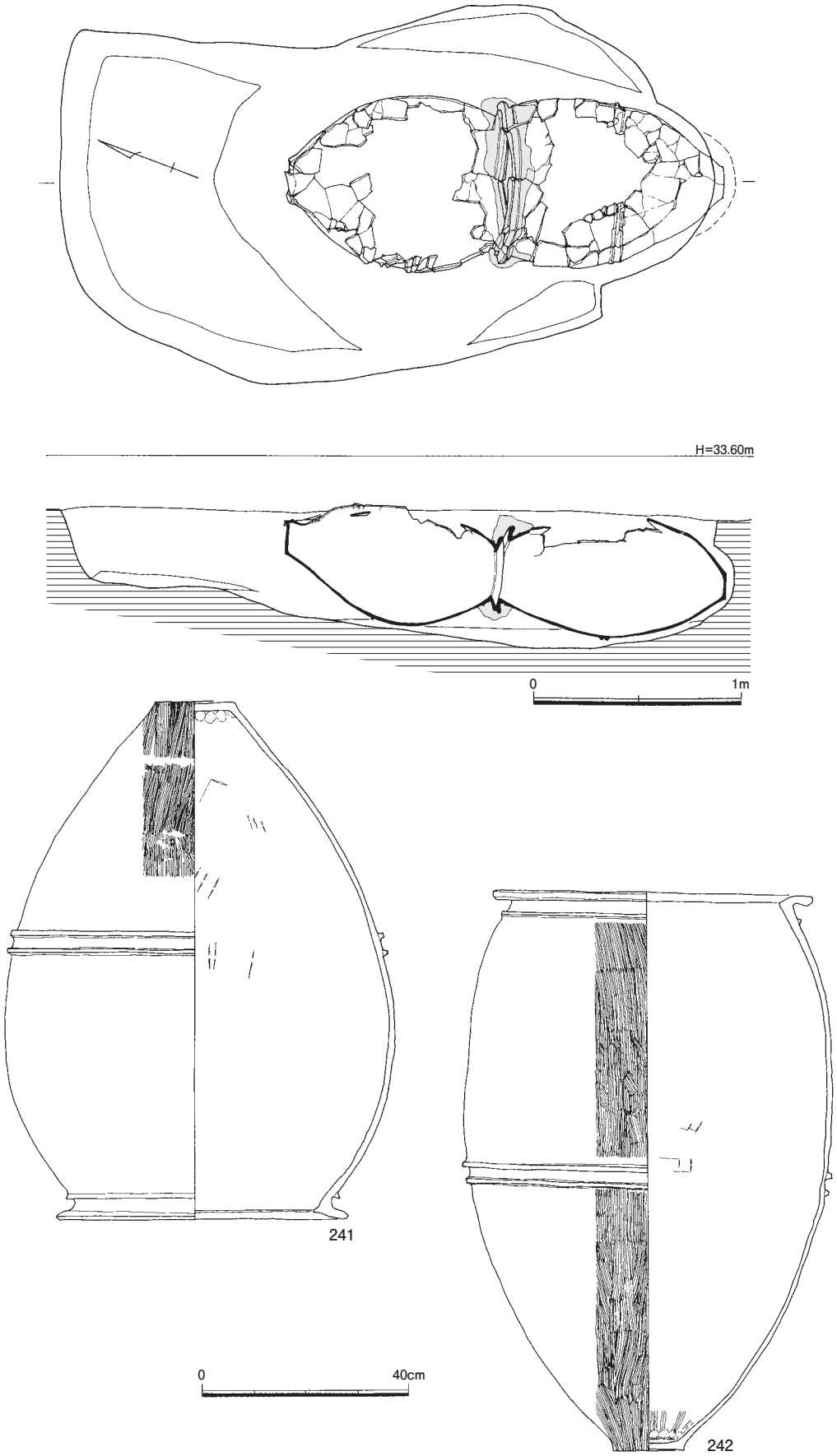
第87図　K0122・0123甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、238・239は1/8、240は1/12）

に近接しているものと考えられる。掘り方は長軸2.6m、短軸2mを測り、北側に斜坑を抉る。

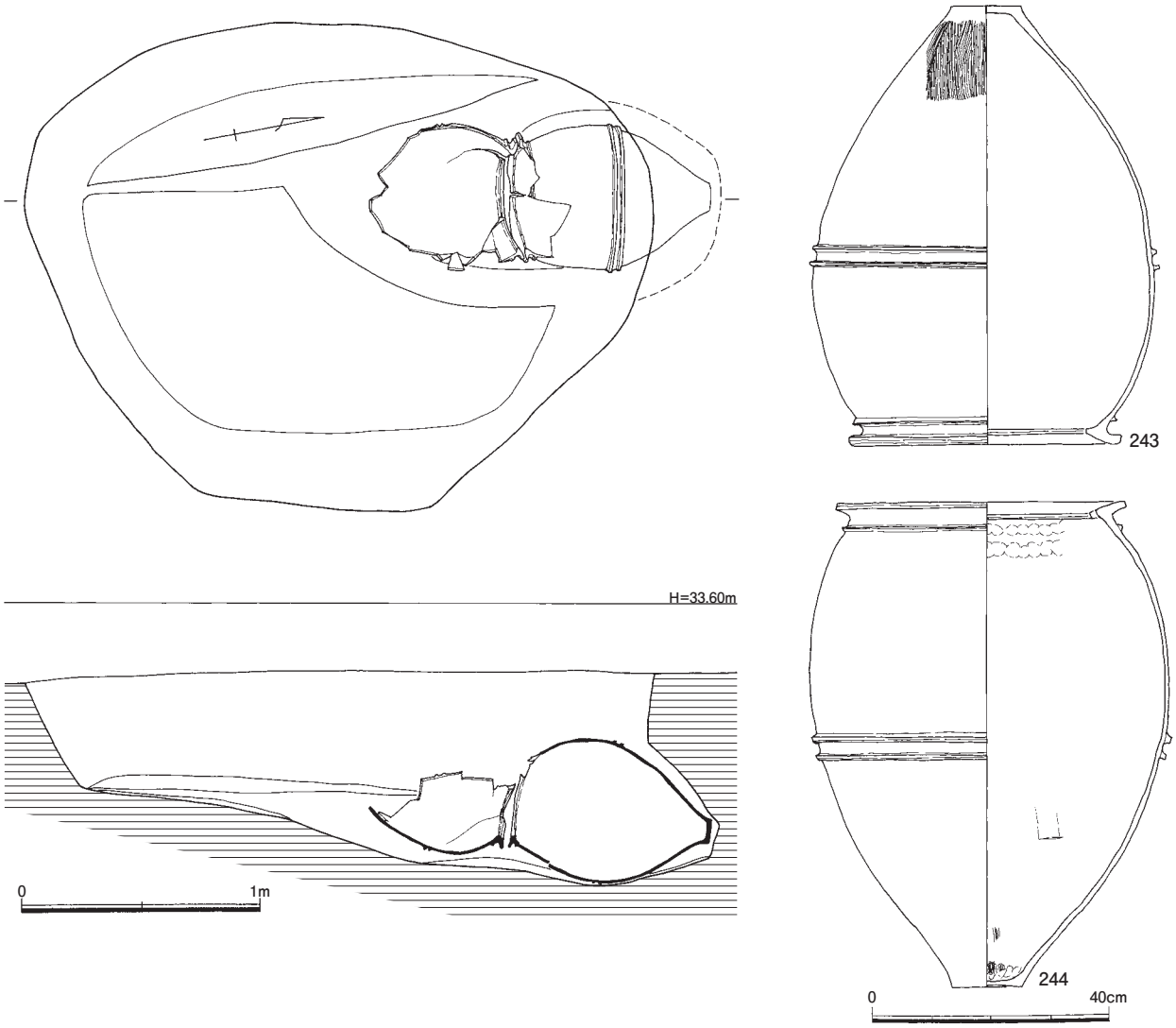
出土遺物（第89図、図版55）　243は上甕である。口縁部は内側にも張り出しを有し、上面は内傾する。底部は平底で、胴部中位に最大径を有し、口縁下と胴部に台形突帯を巡らせる。胴部内外面にはナデを行うが、外面下位には刷毛目が残る。244は下甕である。口縁部は内面に張り出しを有するが、全周の大半で打ち欠きを行う。調整は胴部内外面共にナデである。

K0126（第90図、図版28）

Y－25区で検出し、I区西側に位置する。区画の主軸に対して斜めに掘り込まれている。掘り方は長軸2.1m、短軸1.2mを測り、隅丸長方形を呈する。甕棺は接口式で目貼りの粘土を貼付する。



第88図　K0124甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



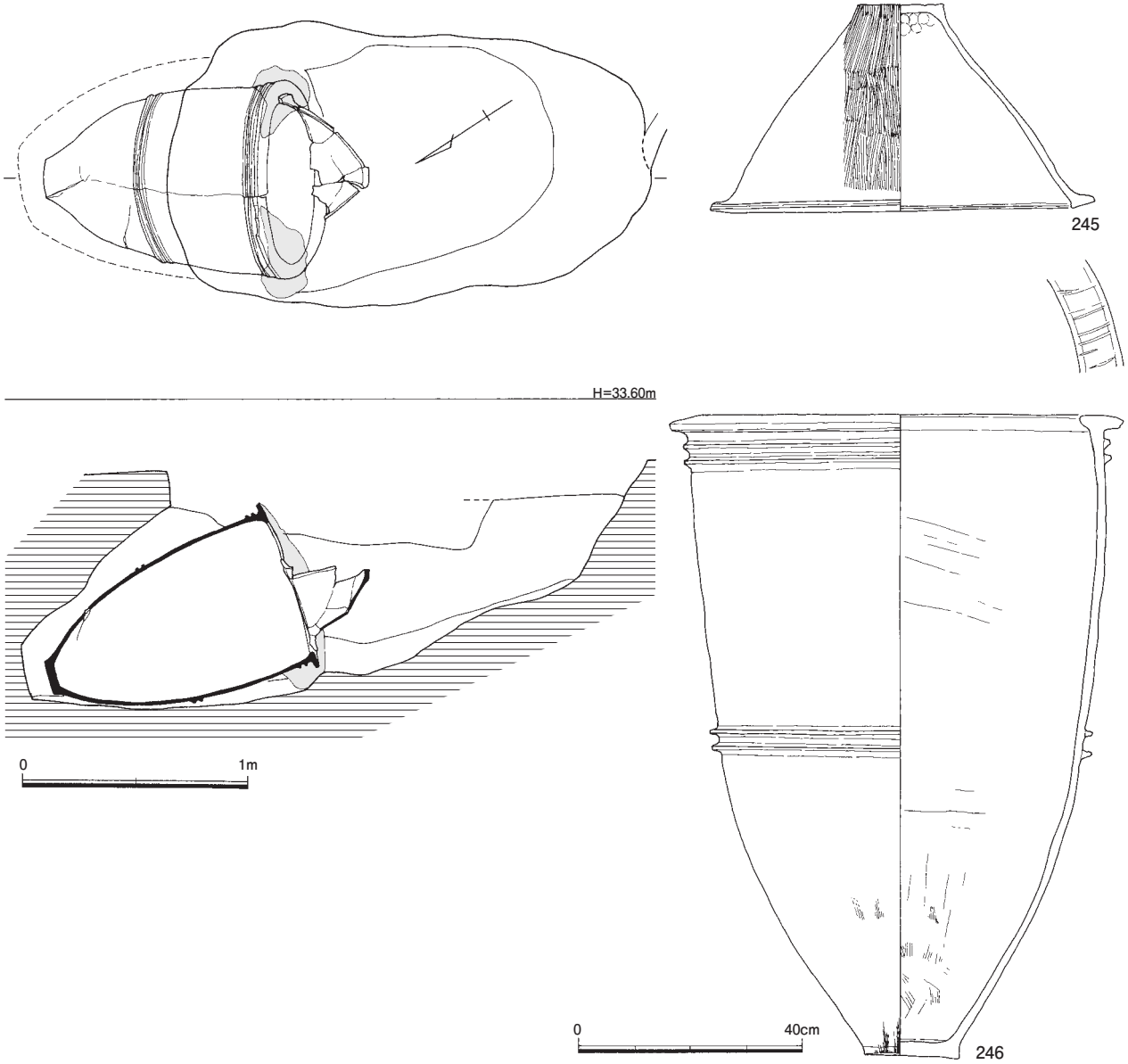
第89図　K0125甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

出土遺物（第90図、図版55）　245は上甕の鉢である。口縁部は外傾する鋤形を呈し、胴部は外方に開く。調整は胴部外面縦刷毛、内面ナデを行う。246は下甕である。口縁部は外側により発達し、上面は外傾から水平化している。底部はほぼ平底で胴部は砲弾形を呈する。口縁下および胴部中位に2条の台形突帯を貼付する。内外面ナデを行うが下半から底部付近には部分的に刷毛目が残る。口縁部上面にはヘラ状工具による連続施文が行われる。口縁部内面から外面全体に黒色顔料が残る。

K0127（第91図、図版29）

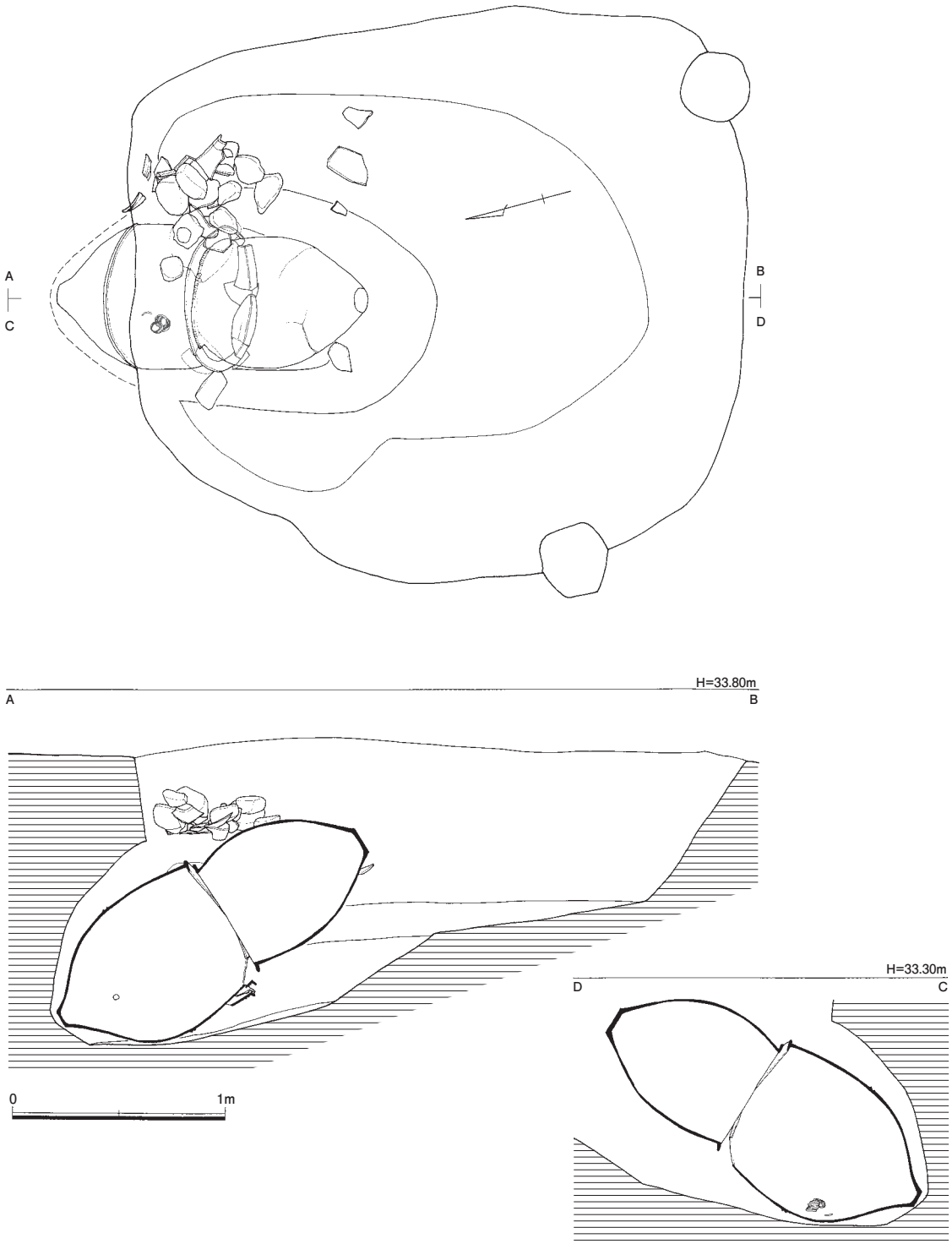
Y－29区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。埋葬遺構群の中にありながら、一定の空閑地を有して周辺とは画されているような配置をとる。掘り方は一辺2.6～2.9mの隅丸方形を指向し、一段平坦面を有して、北壁中央部に斜坑を抉り甕棺を埋置する。甕棺は接口式で、墓坑内からは破片化した小形甕が出土し、下甕の下位には口縁部破片を折り重ねて据えている。また、下甕の中央西側では、内壁から1cmほど浮いた状態で円環型銅釧が10個体出土した。出土当初は8個体が積み重なり、2個体はそこからずれ落ちた状態であった。10個体は本来一つなぎで装着されてものと考えられる。

出土遺物（第92図、図版56）　247は上甕である。内傾するL字形の口縁部を有する。外面端部の中央に沈線を巡らせ、上下に刻みを有する。胴部は上位に最大径を有し、底部は厚手の平底となる。調整



第90図　K0126甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

は胴部内外面には板状工具による丁寧なナデを行うが、外面底部付近には刷毛目が残る。黒色顔料が認められる。248は下甕である。口縁部は水平で、内側に強く張り出す。底部は小さな平底で、胴部は中位に最大径を有し、2条の小さな三角突帯を貼付する。胴部内外面は板状工具によるナデを行い、内面上半には縦方向のヘラ状工具による縦方向のナデが認められる。胴部下位には穿孔が行われ、内外面に黒色顔料が施される。249～251は墓坑出土である。249は甕で、口縁部破片は下甕の下位に据えられていた。口縁部は鋤形を呈し、やや内傾気味である。外面縦刷毛を行い、外面全体に黒色顔料が残る。250は上半の1／3を失う甕である。口縁部は内傾し、底部は上げ底である。胴部上位が張り出し、底部に向かって強くすぼまる。251は有軸羽状文の壺胴部破片である。252～256は円環型銅釧である。252は6個体が銹着している。255・256が出土時には252の上に積み重なっていたもので、253・254はずれ落ちていたものである。外径は6.6～7.3cm、幅3～5mm、厚（高さ）3～5mmを測る細身の釧である。小異はあるが断面形状は、外面を丸く仕上げ、上下に幅1～2mmの平坦面をつくり、内側に稜を有する。

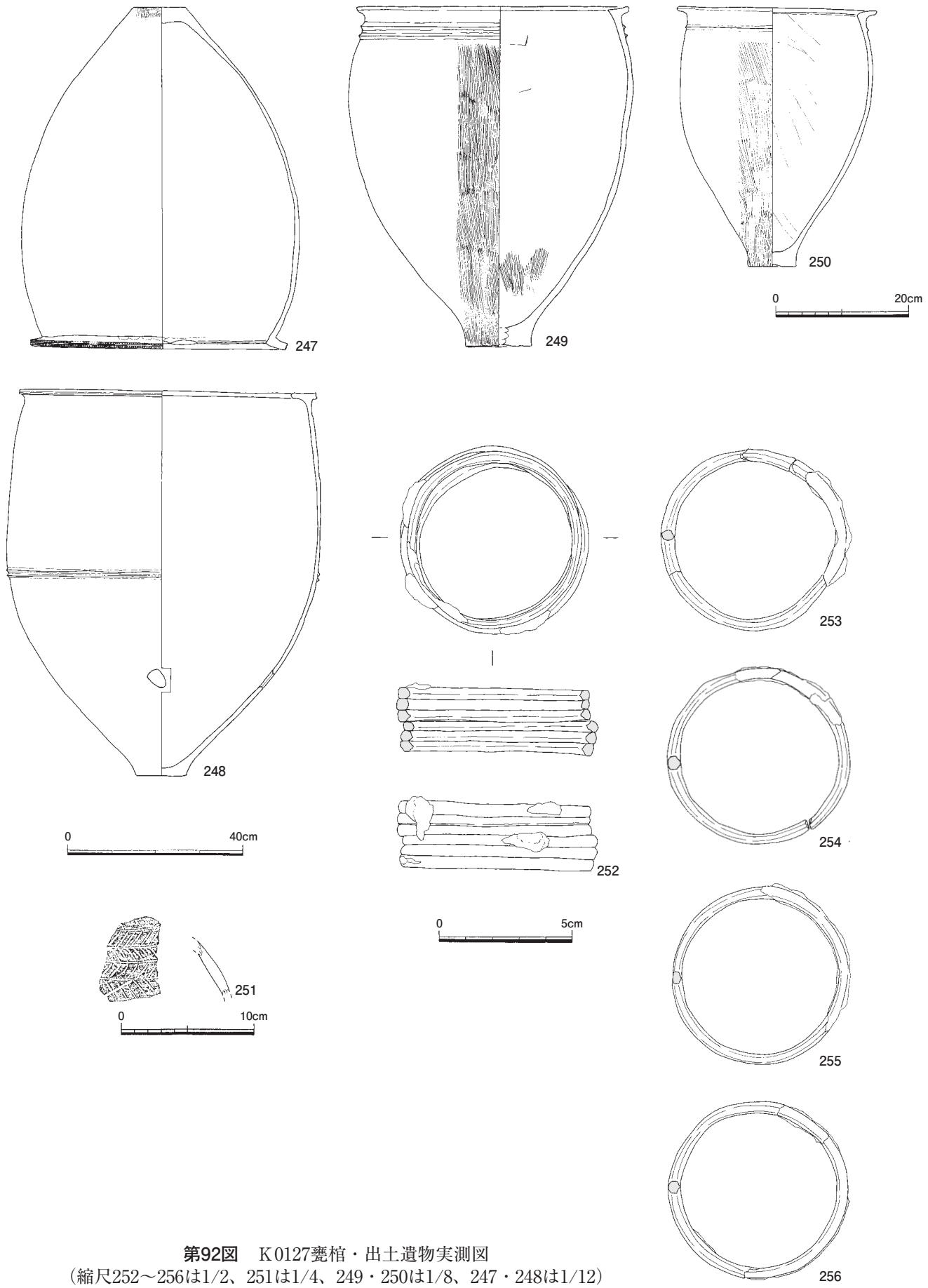


第91図　K0127甕棺墓実測図（縮尺1/30）

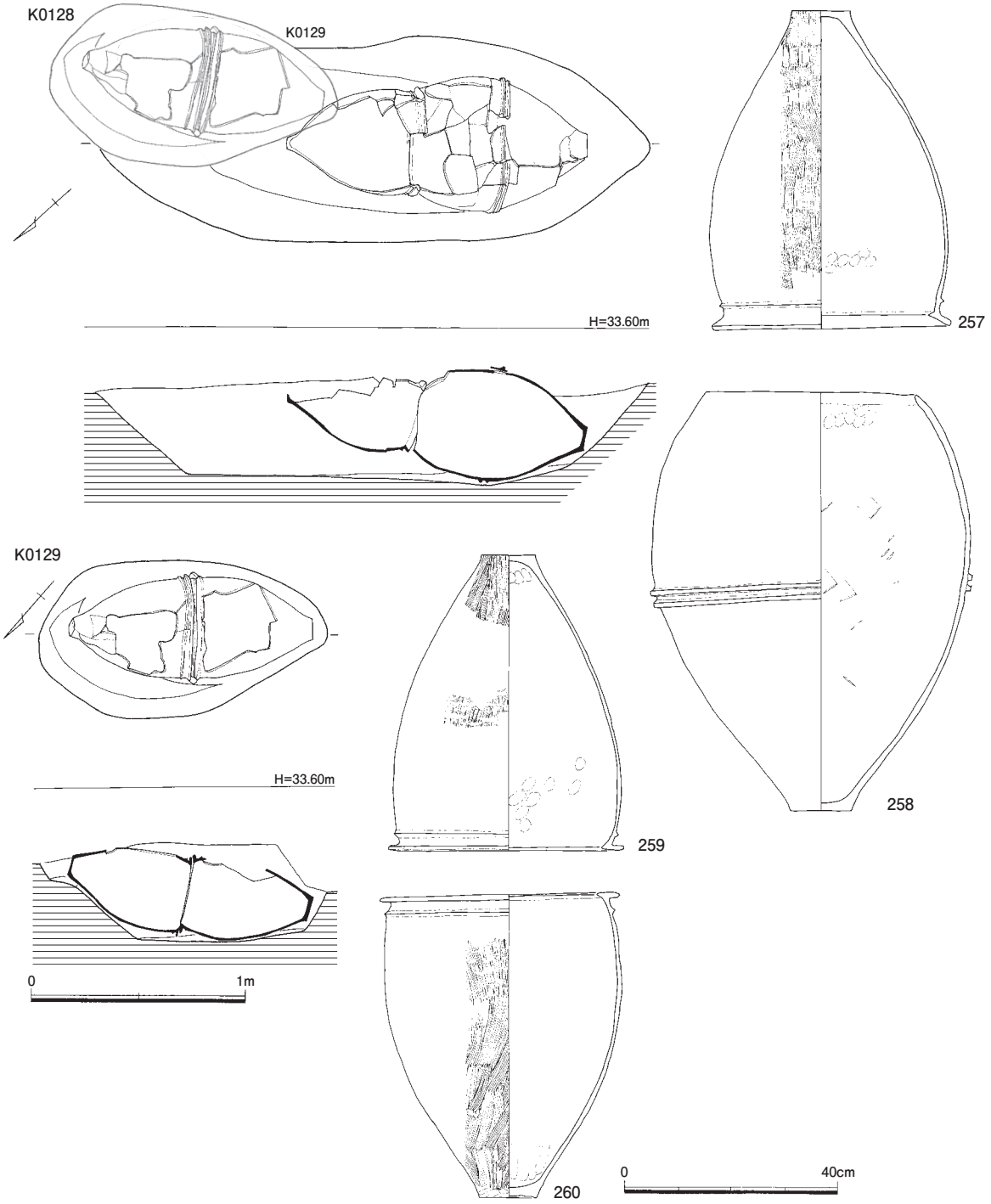
K0128（第93図、図版29）

Y－27区で検出し、Ⅱ区区画溝を切って区画東側に位置する。掘り方北東側ではK0129と切り合う。掘り方は長軸2.5m程度、短軸1mを測り、南西側に甕棺を埋置する。甕棺は下甕を打ち欠く。

出土遺物（第93図257・258、図版56）　257は上甕である。口縁部は鋤形を呈し、強く内傾する。胴部は上位が膨らみ、口縁下に三角突帯を付す。調整は胴部外面が縦刷毛、内面はナデを行う。また、外面全体に煤が付着する。258は口縁部全周を打ち欠いた下甕である。底部は平底で、胴部は丸みを有する。胴部中位には2条の台形突帯を貼付する。胴部内外面はナデを行うが、内面には頸部付近囲指頭痕、また中位には板状工具の小口痕が残る。



第92図　K0127甕棺・出土遺物実測図
（縮尺252～256は1/2、251は1/4、249・250は1/8、247・248は1/12）

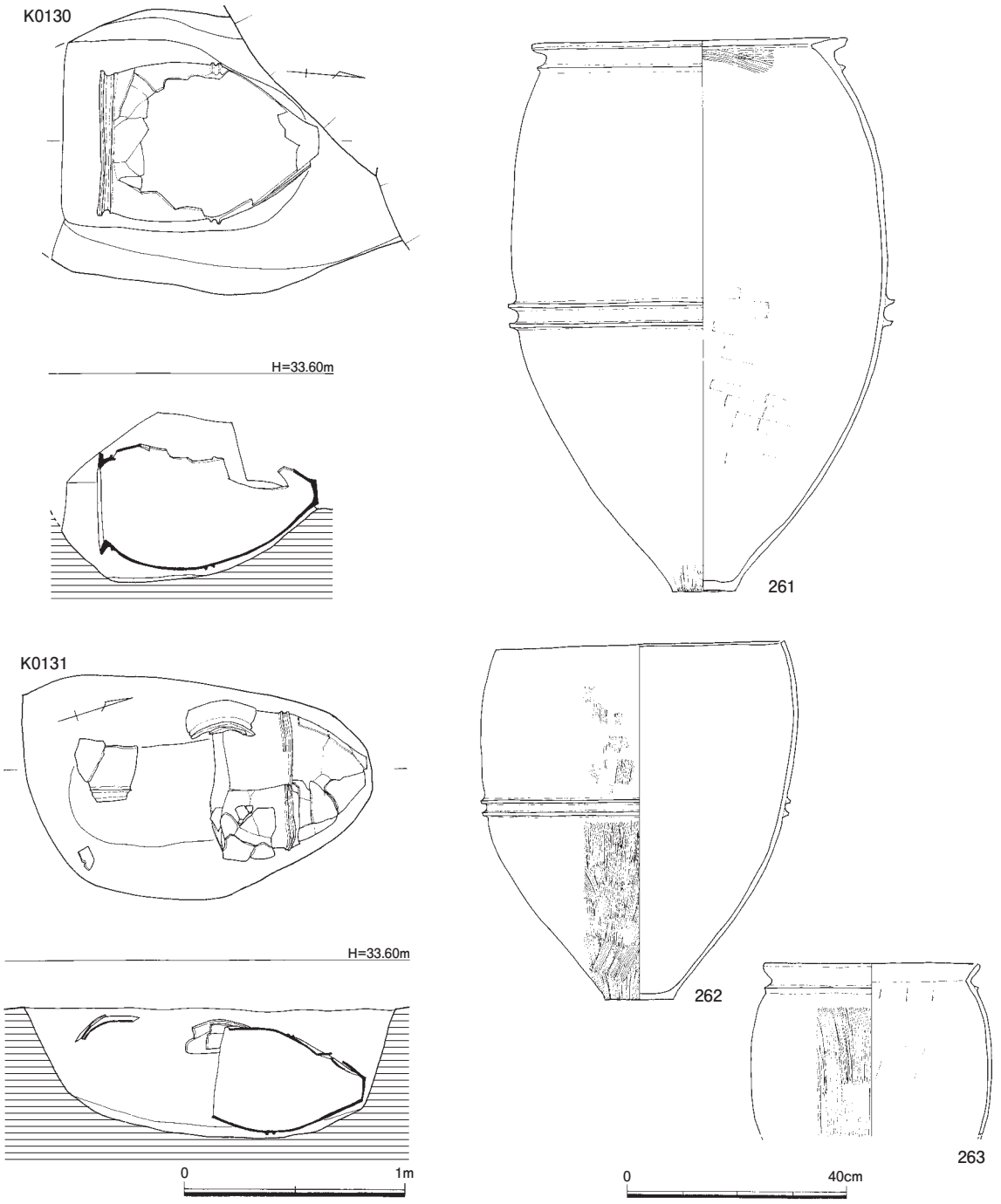


第93図　K0128・0129甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0129（第93図、図版29）

Y－27区で検出し、Ⅱ区区画溝を切って区画東側に位置する。K0128の北西側に配されている。接口式の小形棺で、南西側に階段状に掘り下げて甕棺を埋置する。

出土遺物（第93図259・260、図版56）　259は上甕である。口縁部は断面鋤形で、上面は水平である。底部は平底で、胴部は上位に膨らみを有する。胴部外面には縦刷毛を行い、部分的にナデ消している。また、内面はナデで、底部付近には縦方向の指ナデ痕が認められる。口縁下から胴部中位にかけて外



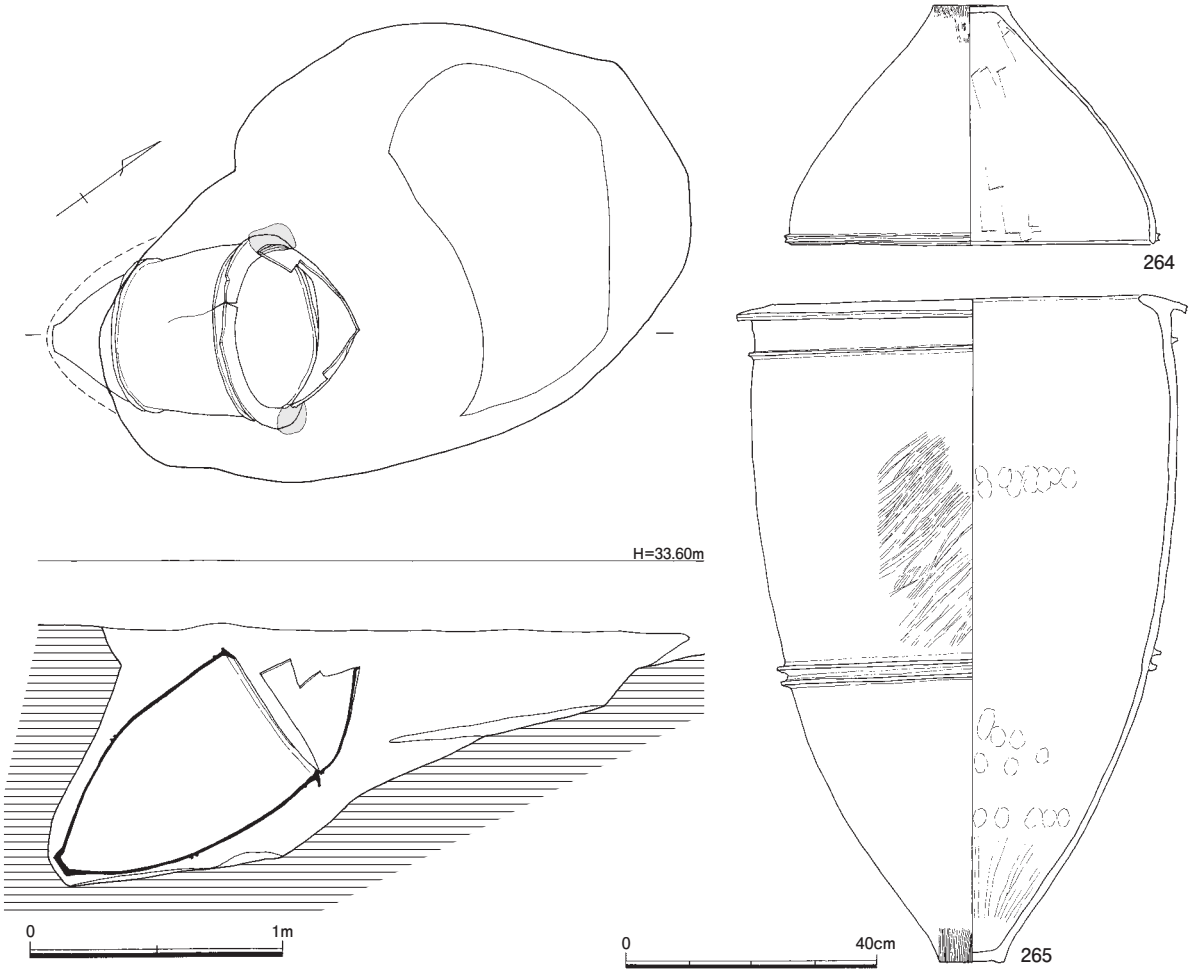
第94図　K0130・0131甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/12）

面に煤が付着する。260は下甕である。形態はほぼ上甕と同じであるが、底部はわずかに上げ底となっている。また、口縁部内面から胴部に黒色顔料が残る。

K0130（第94図、図版29）

Y－27区で検出し、Ⅱ区区画溝を切って区画東側に位置する。南側ではK0131に切られる。掘り方南側に挿入する単棺であるが、木蓋等の痕跡は確認できなかった。

出土遺物（第94図261、図版56）　口縁部は内側に張り出す、逆L字形を呈し、上面は内傾する。胴部は上位で頸部に向かってすぼまり、最大径は中位に有する。口縁下に1条の三角突帯、胴部には2条の高い台形突帯を貼付する。調整は胴部外面ナデを行うが、底部付近には刷毛目が残す。また、内面は



第95図　K0132甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

口縁屈曲部下には横刷毛を行い、以下は板状工具によるナデである。

K0131（第94図、図版29）

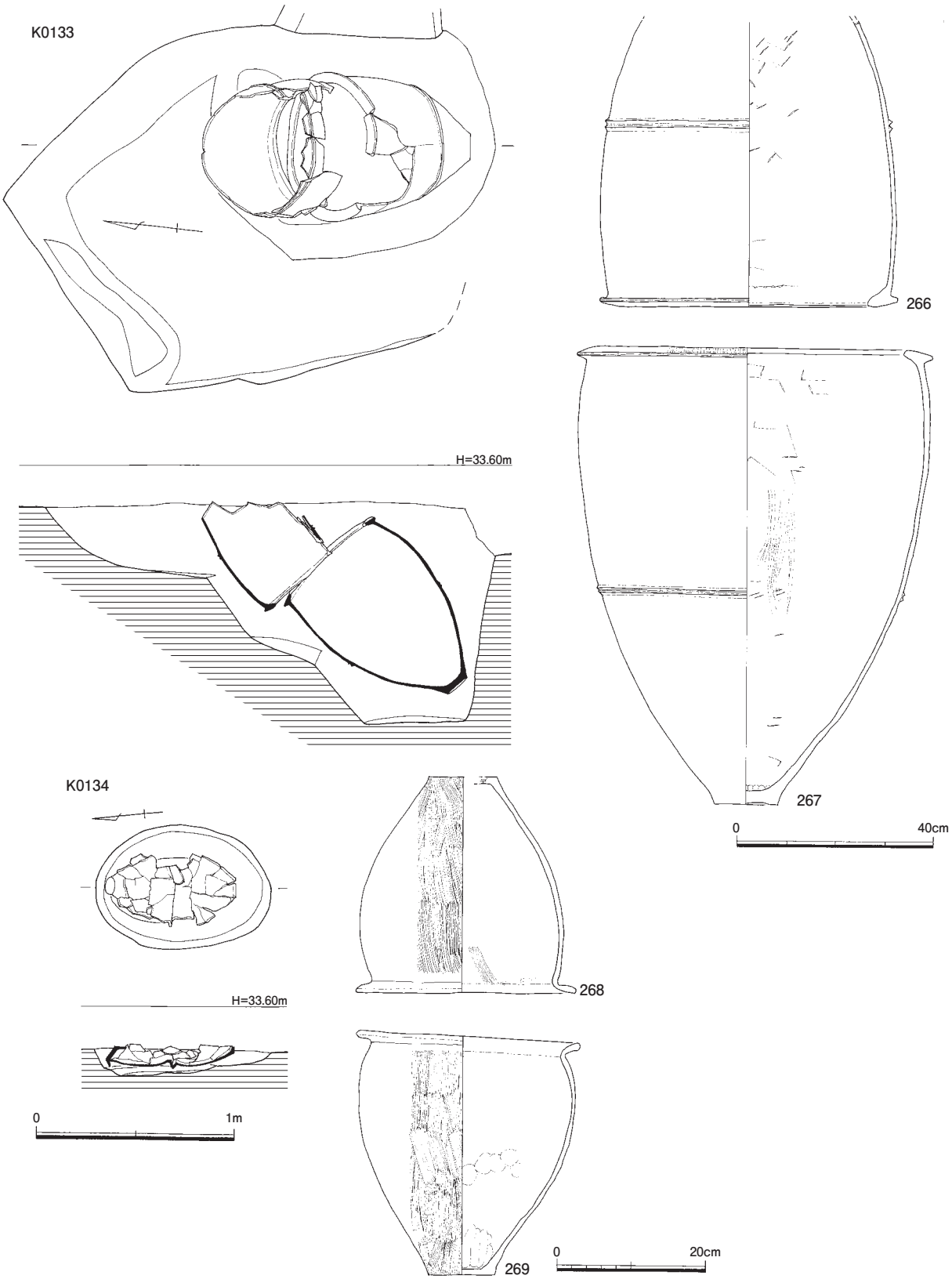
Y－27区で検出し、Ⅱ区区画溝を切って東側に位置する。掘り方は現状で長軸1.6m程度、短軸1mを測る。口縁部を打ち欠いた単棺であるが、南側に甕の上部破片を使用して、部分的に甕の周囲に配置しているが、蓋として開口部をふさぐような据え方にはなっていない。木蓋等の痕跡も確認できておらず、最終的な埋葬状況には不明な点が残る。

出土遺物（第94図262・263）　262は頸部以上を打ち欠いた甕である。胴部中位には2条の台形突帯を貼付する。外面調整は縦刷毛の後、上半はナデ消している。内面はナデである。263は甕の周囲及び掘り方内から出土した破片の接合試料である。胴部上半部の2／3程度が残っている。口縁部は外面が肥厚し、頸部に三角突帯を付す。外面縦刷毛を行い、黒色顔料が認められる。

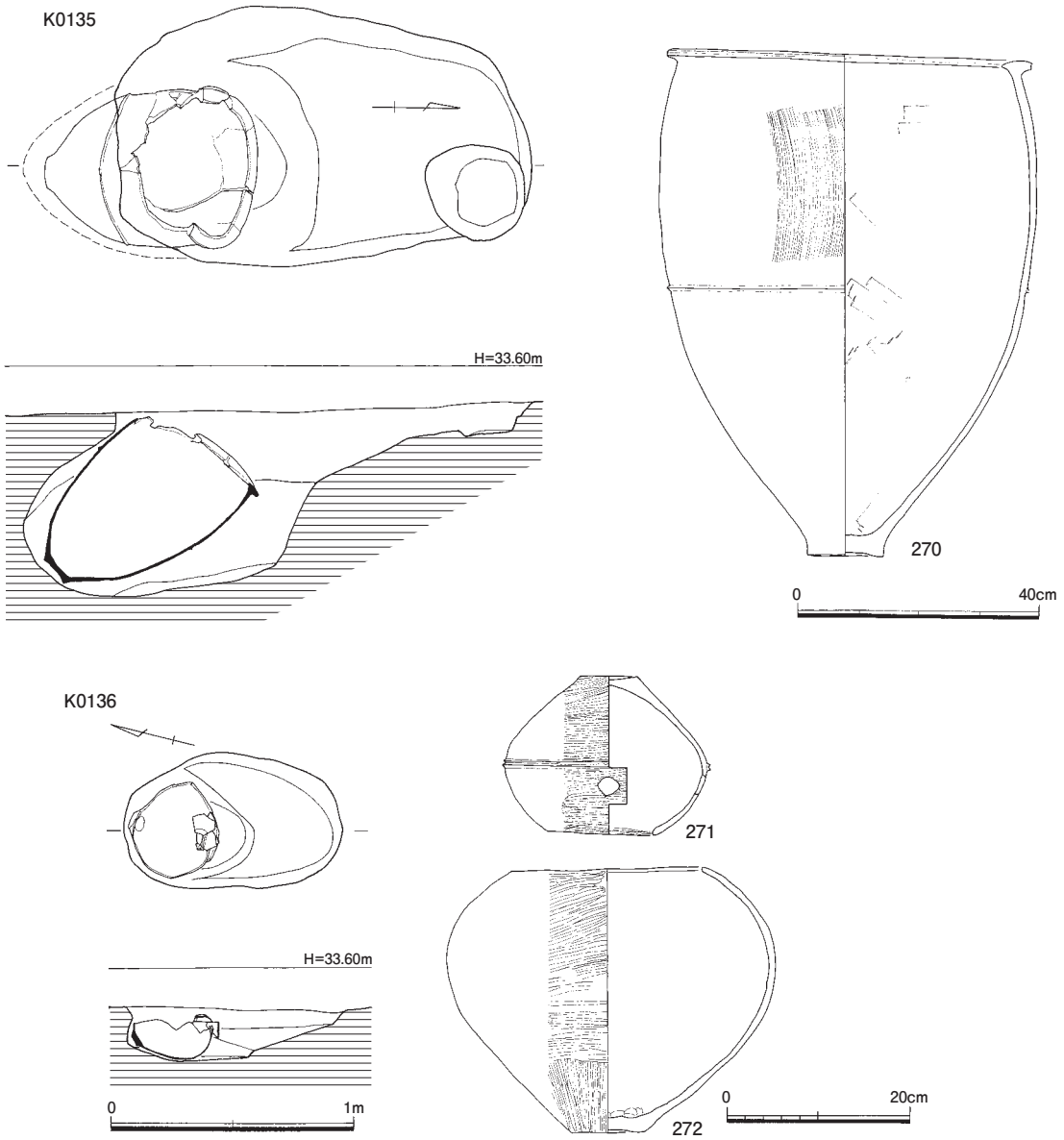
K0132（第95図、図版30）

Y－27区で検出し、Ⅱ区東側に位置する。掘り方は長軸2.4m、短軸1.7mを測り、南西方向に階段状に掘り下げ、斜坑中に甕棺を埋置する。

出土遺物（第95図、図版57）　264は上甕の口縁部を打ち欠いた鉢である。胴部は口縁下より直立して立ち上がり、M字形の突帯を貼付する。胴部調整は内外面板状工具によるナデを行い、外面の底部付近には刷毛目が残る。265は下甕である。口縁部はT字形を呈し、上面は外傾する。胴部は砲弾形で、



第96図　K0133・0134甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、268・269は1/8、266・267は1/12）



第97図　K0135・0136甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、271・272は1/8、270は1/12）

口縁下及び胴部中位よりやや下に台形突帯を貼付する。胴部外面は上半にヘラ状工具による斜め方向のナデ痕跡が残る。また底部付近には刷毛目が残る。内面はナデで、指頭痕や縦方向の指ナデ痕が認められる。

K0133（第96図、図版30）

W－30区で検出し、Ⅲ区南西隅に位置する。上面を古墳の周溝により削平されている。掘り方は長軸2.5mを測り、北側より階段状に掘り下げ、南側に斜坑を掘り込み、甕棺を埋置する。上甕の口縁部が下方にずれているが、本来接口式であると考えられる。

出土遺物（第96図266・267、図版56）　266は上甕である。胴部下半以下が欠失している。口縁部は外傾し、胴部中位に2条の小さな三角突帯を有する。胴部内外面にはナデを行う。267は下甕である。口縁部は外傾し、胴部は膨らみを有する。胴部中位には2条の三角突帯を有し、内外面はナデ、口縁部上面に暗文風のミガキを行う。

K0134（第96図、図版30）

X－32区で検出し、Ⅳ区西側に位置する。区画溝埋没後に埋置された、小形棺である。掘り方は長軸0.85m、短軸0·65mの、長円形を呈する。

出土遺物（第96図268・269、図版57）　268は上甕である。底部は平底で、胴部は上位に膨らみを有する。口縁部はく字形に屈曲する。胴部外面縦刷毛、内面は頸部付近に刷毛目が残るが、以下はナデである。269は上甕である。く字形の口縁部に、胴部は上位が張り丸みを有する。胴部外面は縦刷毛、内面はナデを行う。外面には煤が付着している。

K0135（第97図、図版30）

X－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する単棺である。東側には主軸をそろえるK0040があり、これと対になる配置である。掘り方は長軸1.7m、短軸1.05mを測る隅丸長方形を呈する。

出土遺物（第97図270、図版57）　口縁部の張り出しは小さく、上面は内傾気味である。底部は厚手の上げ底で、胴部は丸みを有する。中位には小さな三角突帯を貼付する。胴部上位には刷毛目、下位はナデを行い、内面はナデである。外面には黒色顔料の痕跡が認められる。

K0136（第97図、図版30）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。上下共に頸部以上を打ち欠いた壺を使用する小形棺である。掘り方は長軸0.85m、短軸0.6mを測り、墓坑北端に甕棺を埋置する。

出土遺物（第97図271·272、図版57）　271は上甕である。頸部より打ち欠いている。底部は上げ底で、偏球形の胴部を有する。外面横ミガキ、内面ナデを行い、胴部にはM字形突帯を貼付する。突帯上位には穿孔を行う。272は下甕である。底部は上げ底で、胴部最大径は上位に有する。胴部下位は縦方向、中位から上位は斜め～横方向のミガキを行う。

K0137（第98図、図版30）

X－31・32区で検出し、Ⅳ区西側に位置する。Ⅳ区西側区画溝埋没後に埋葬されている。甕棺は大形棺を下甕とし、中形甕の破片を張り合わせて蓋とする。また、接合部分には粘土を貼付している。なお取り上げ後、整理の過程で蓋として使用した中形甕が所在不明となってしまった。撮影写真から頸部に三角突帯を付した、内湾口縁の甕と考えられる。

出土遺物（第98図273、図版57）　273は下甕である。口縁部は内傾の強いく字形を呈し、頸部に三角突帯、胴部下位に2条の垂れた台形突帯を付す。胴部外面上位は横ナデを行い、下位には刷毛目が残る。内面は口縁部が横刷毛の後ナデ、胴部はナデによる。

K0138（第98図、図版31）

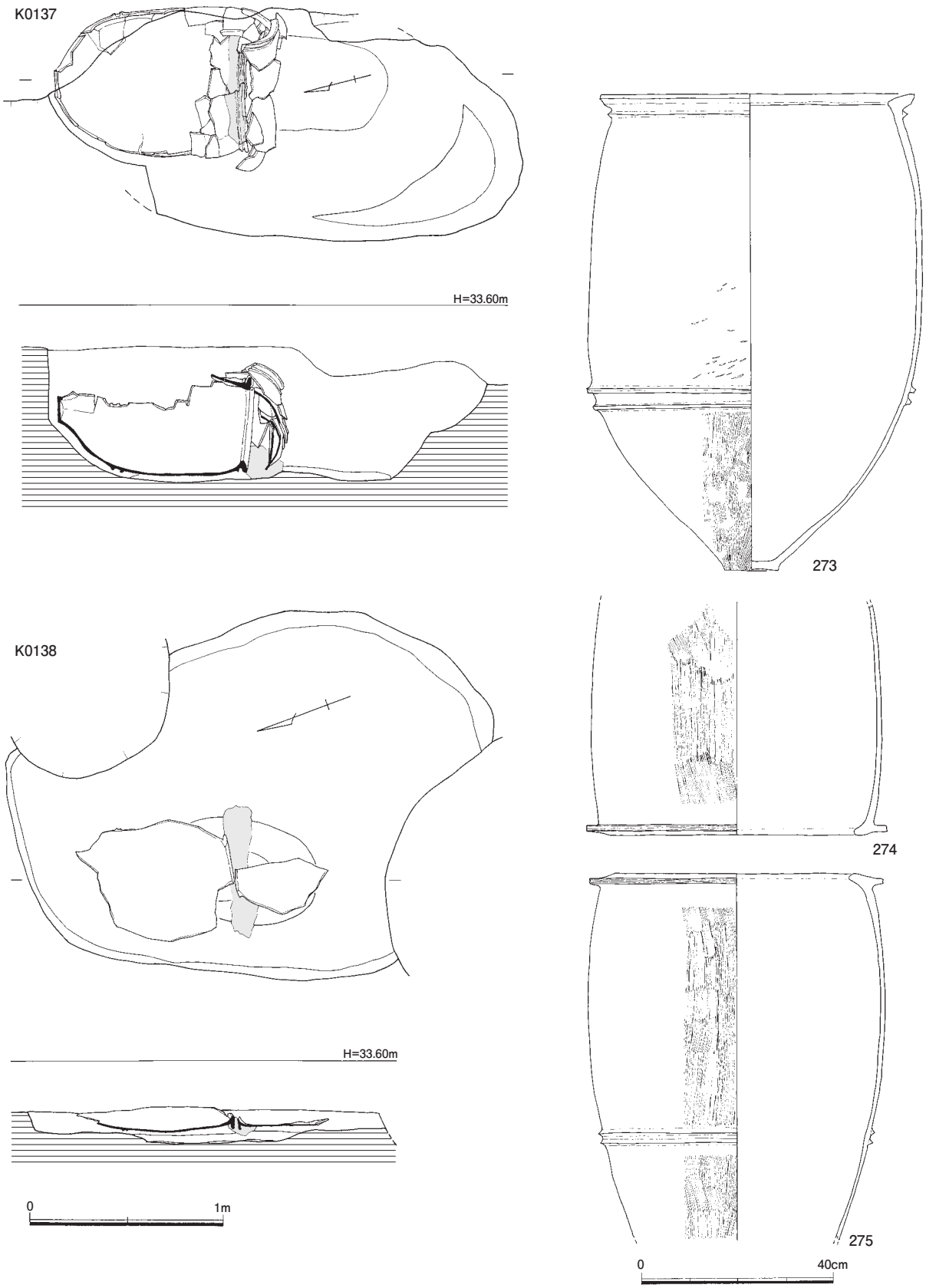
Y－27区で検出し、Ⅱ区に位置する。上面の削平が進んでおり、甕棺の底がわずかに残るのみである。接口式で、合わせ目には目貼りの粘土を施す。

出土遺物（第98図274・275）　274は上甕である。残存は全体の1／7程度である。口縁部はT字形に近く、わずかに外傾する。胴部外面には縦刷毛を行う。275は下甕である。口縁部は外傾し、T字形を呈する。胴部は丸みを帯び、中位に三角突帯を2条貼付する。胴部外面は縦刷毛の後、部分的にナデ消している。内面はナデである。

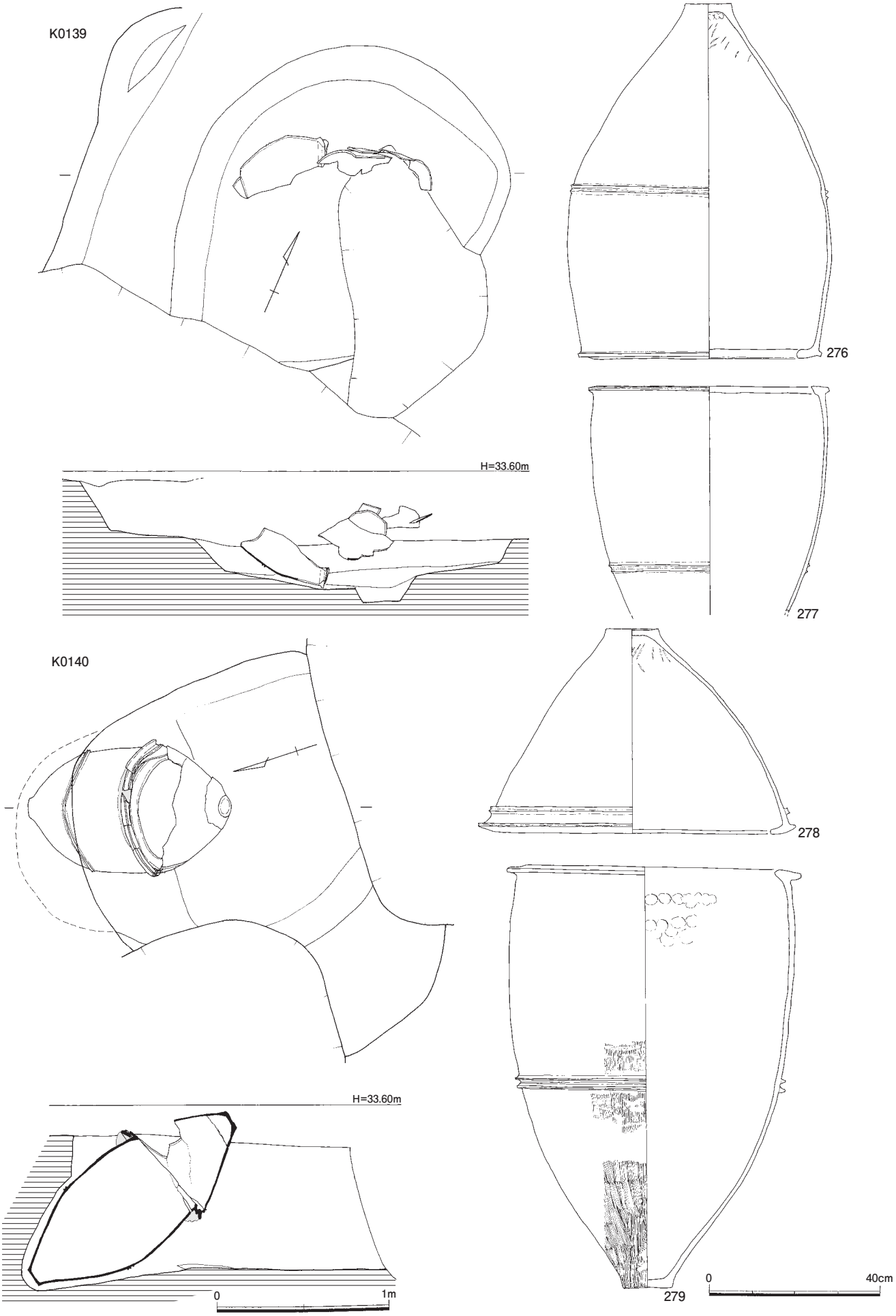
K0139（第99図）

Y－29区で検出し、Ⅲ区に位置する。一連の区画溝中で検出しているが、削平・撹乱が著しく残存状態が非常に悪いが、撹乱中などから破片は多く出土している。墓坑底は平坦に近く、甕棺も現位置を保っていない可能性がある。一応西側を上甕、東側を下甕として取り上げを行っている。

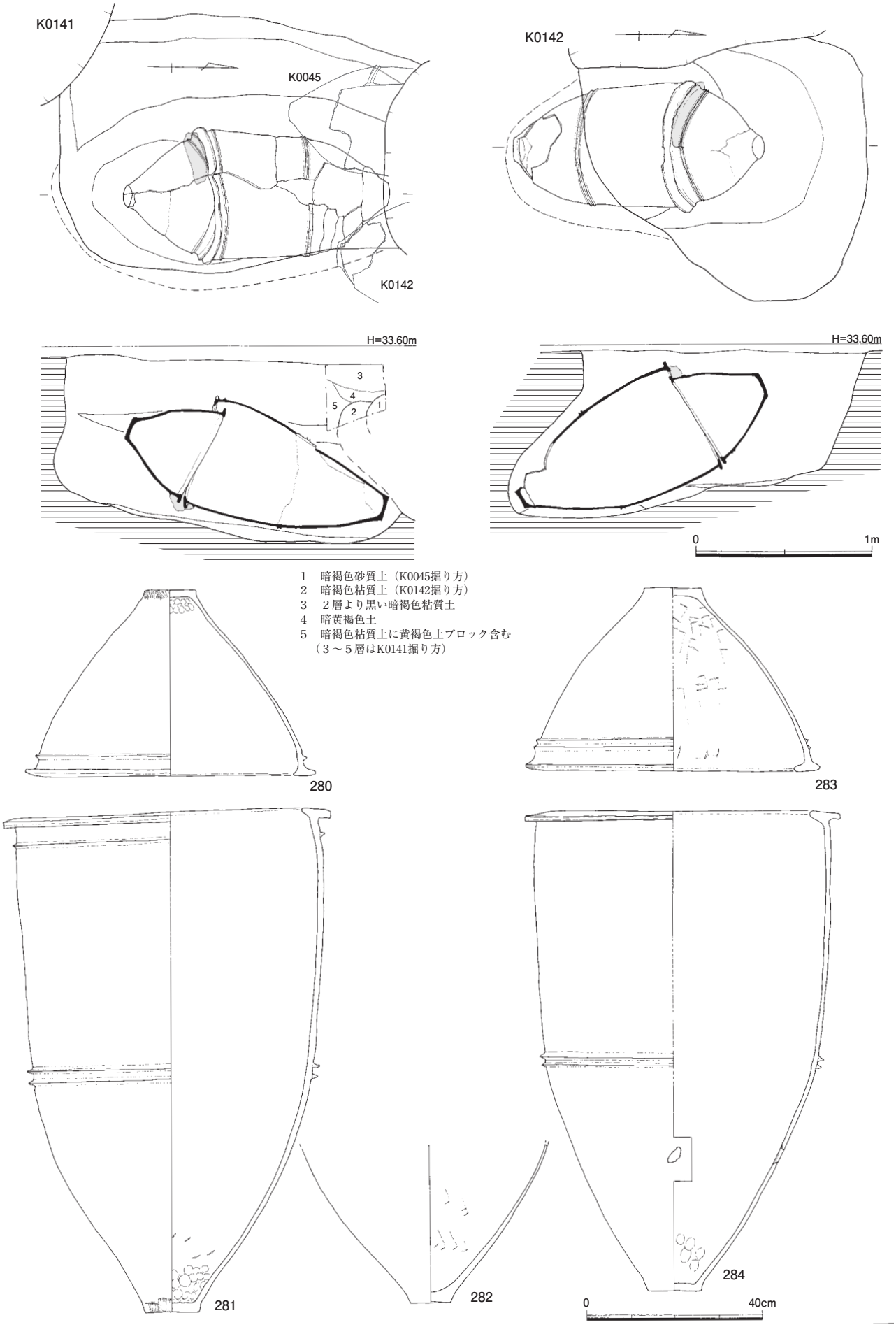
出土遺物（第99図276・277）　276は上甕である。口縁部は水平に近く、内側に発達している。胴部



第98図　K0137・0138甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第99図　K0139・0140甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第100図　K0141・0142甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/12）

上半はやや丸みを帯び、中位には2条の三角突帯を貼付する。口縁部内面から胴部外面にかけて黒色顔料を塗布する。発達した口縁部内側は打ち欠き、上面は水平となる。2条の三角突帯を胴部中位以下に貼付する。

K0140（第99図、図版31）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。K0046・0168と主軸方位をそろえて並列する。また、墓坑の切り合い関係では、K0046及び0142に先行するものと考えられる。

出土遺物（第99図278・279、図版58）　278は上甕の鉢である。外傾する口縁部は内側により発達している。口縁下の突帯はM字形を呈する。胴部内外面は板状工具によるナデを行う。279は下甕である。口縁部はT字形を呈し、外傾する。胴部は砲弾形を呈し、中位に高い三角突帯を付す。外面下半には縦刷毛が見られ、口縁内面から胴部には黒色顔料が塗布される。

K0141（第100図、図版31）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。北側に位置するK0045・0142との先後関係は、土層観察によると、K0141掘り方を切って、K0142、ついでK0045斜坑が掘り込まれている。K0141→K0142→K0045の順となるが、甕棺型式をみると、口縁下突帯の出現よりK0141が最新型式と考えられる。非常に近接した時期の埋葬と考えられるが、逆転現象の所以については検討課題としたい。

出土遺物（第100図280～282、図版58）　280は上甕の鉢である。口縁部は水平で、外側に張り出す。口縁部内面から胴部外面には黒色顔料が認められる。281は下甕である。口縁部はT字形を呈し、わずかに外傾する。胴部は砲弾形を呈し、口縁下に1条、胴部中位に2条の高い三角突帯を貼付する。調整は胴部内外面板状工具によるナデを行い、底部との境には刷毛目が残る。282は墓坑出土の全周する甕棺下半部である。底部は平底で、内外面に黒色顔料が認められる。

K0142（第100図、図版15・31）

Y－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。K0045と並列し、先後関係はK0140→K0142→K0045の順となる。また、上記のようにK0141との関係については検討を要する。

出土遺物（第100図283・284、図版58）　283は上甕の鉢である。T字形の口縁部は水平で、口縁下には2条の三角突帯を貼付する。胴部内面から口縁部上面に黒色顔料が認められる。284は下甕である。T字形の口縁部はわずかに外傾する。胴部は砲弾形を呈し、上位も直立する。中位には2条の高い三角突帯を付し、下位には穿孔を有する。内外面ナデによる。

K0143（第101図、図版31）

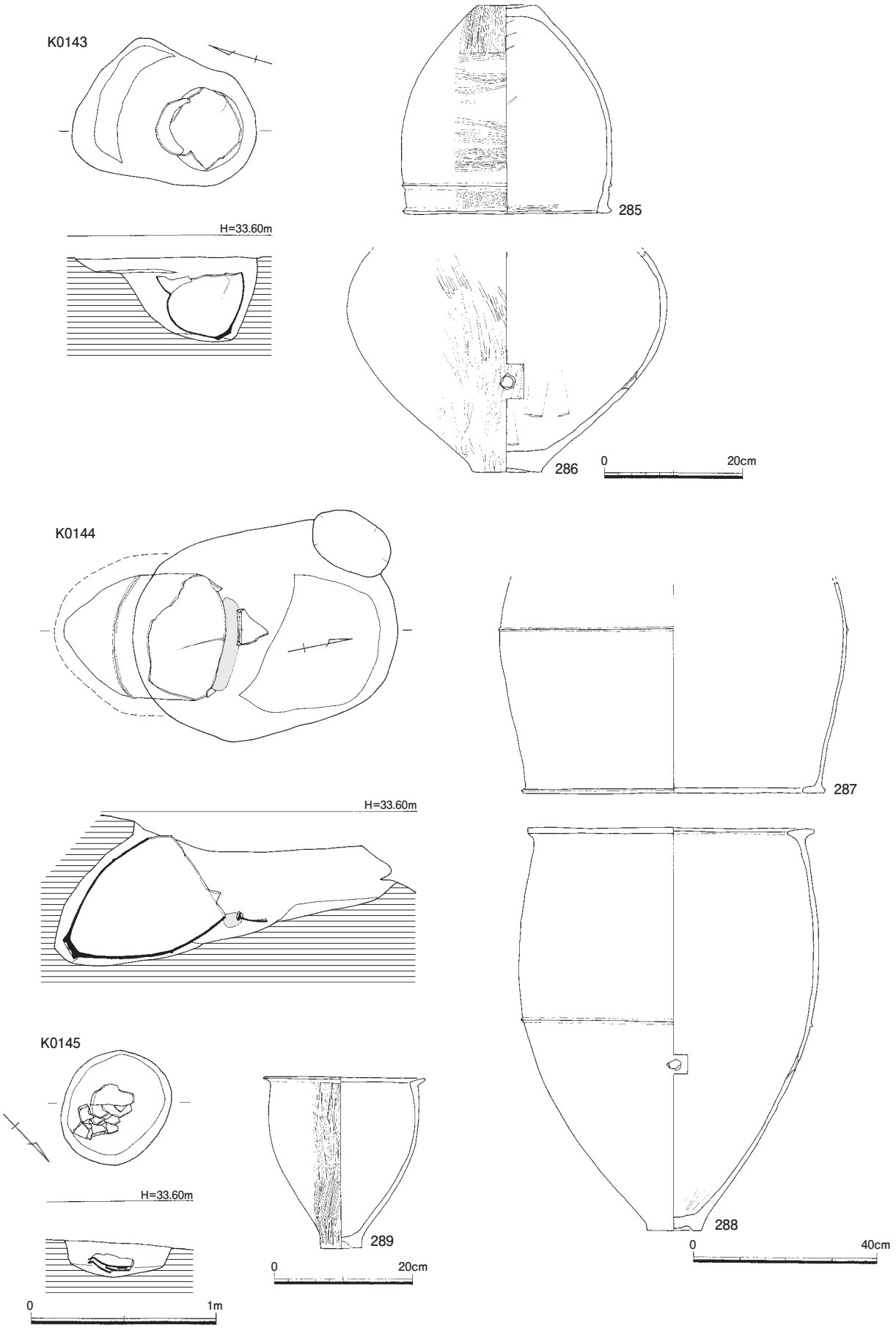
X－28区で検出し、Ⅲ区北端に位置する。周辺は古式の小形棺がまとまるところである。頸部付近から打ち欠いた壺と甕を組み合わせている。

出土遺物（第101図285・286）　285は上甕である。口縁部は断面三角形を呈し、口縁下には突帯を付す。胴部は下半が直線的にすぼまり、底部は上げ底である。口縁部内面に斜め～横刷毛、外面は突帯より上は縦刷毛、突帯以下は中位まで横ミガキ、下位は縦方向のミガキを行う。286は打ち欠きの壺である。底部は上げ底で、胴部は中位に最大径を有する偏球形を呈する。外面にはヘラミガキを行い、胴部下位に穿孔を有する。

K0144（第101図）

X・Y－27区で検出し、Ⅱ区西側に位置する。墓坑内は大きく撹乱を受け、上甕はほとんど現位置に無く、墓坑内に甕棺破片とともに大小の自然礫が投棄されていた。本来は接口式の甕棺と考えられ、下甕も口縁部は打ち欠きではない。合わせ目位置には灰白色粘土が残る。

出土遺物（第101図287・288、図版58）　287は上甕である。上半部の1／2が残存している。口縁部



第101図　K0143・0144・0145甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、285・286・289は1/8、287・288は1/12）

は内側に張り出し、上面は水平となる。胴部には小さな三角突帯が貼付され、内外面共に黒色顔料が認められる。288は下甕である。上半の1／3程が欠失する。T字形の口縁部は内傾する。底部は上げ底で、胴部は中ほどが丸みを帯び、中位に小さな突帯を付す。外面には黒色顔料が認められ、胴部突帯の下位には穿孔が行われる。

K0145（第101図、図版19）

Y－27区で検出し、Ⅱ区中央に位置する。小形甕の単棺で、上面は大きく削平されている。現状では破片が折り重なるような状態で出土している。

出土遺物（第101図289）　口縁部は内傾する逆L字形を呈し、胴部はあまり膨らまない。底部は上げ底を呈すものと考えられる。外面縦刷毛を行い、上半には煤が付着している。

K0146（第102図、図版31）

Z－28区で検出し、Ⅲ区北東部に位置する。西側に位置するK0155と並列して埋葬されている。大形棺の単棺であり、口縁部周囲に粘土を貼り付けると共に、前面には5～10cmの厚さで、粘土が広がっている。掘り方は長軸2.5m、短軸1.1mを測る。

出土遺物（第102図290、図版58）　口縁部は内側にも張り出しを有し、内外両端部が垂れ下がる。胴部は砲弾形を呈し、口縁下に1条、胴部中位に2条の台形突帯を貼付する。胴部内外面はナデを行うが、外面中位にタタキ痕が認められる。また、口縁部上面から胴部外面には黒色顔料が残っている。

K0147（第102図、図版31）

Z－25区で検出し、Ⅰ区東側に位置するが、位置的には区画外の甕棺墓として考えておきたい。区画溝0200内で確認した三連の甕棺墓であり、最上層の黒色土堆積直前に掘削が行われている。0200埋没途中の埋葬であり、区画溝の大半が埋没し、窪み状となっていた段階と考えられる。

出土遺物（第102図291～293、図版59）　291は上甕である。口縁部はく字形を呈し、口縁下には三角突帯を貼付する。胴部上位が大きく張り出し、下半は平底の底部に向けて直線的に伸びている。胴部外面には刷毛目を有し、煤が付着している。292は中甕である。胴部下位以下を打ち欠いた鉢である。口縁部はく字形を呈し、外側が垂れ下がっている。外面には縦刷毛を行う。293は下甕である。口縁部は内傾し、内側への張り出しはない。胴部は上位が頸部にかけて強くすぼまり、中位以下に2条の台形突帯を付す。胴部内外面ナデによるが、外面下位には刷毛目が残る。

K0148（第103図、図版32）

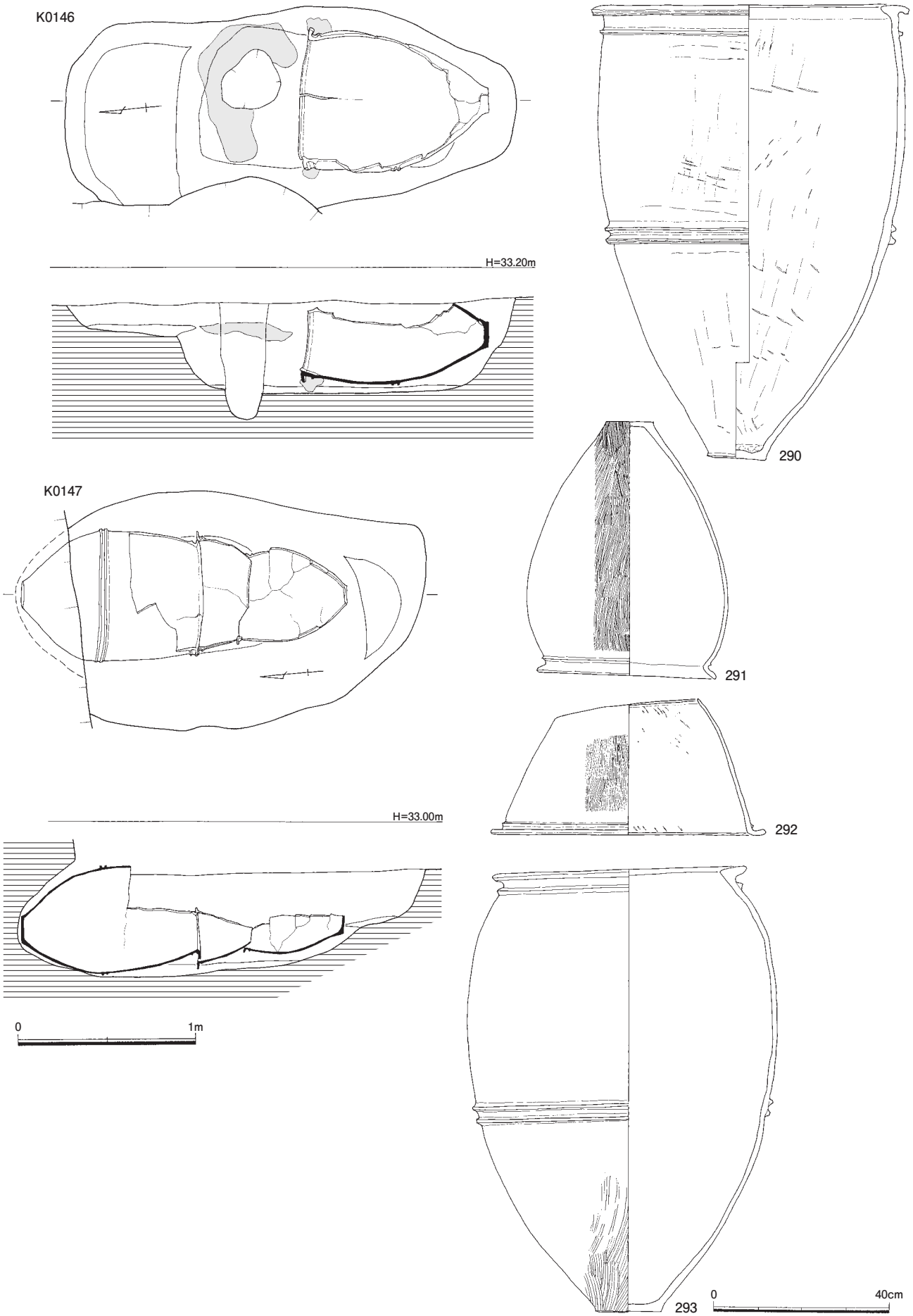
X－30区で検出し、Ⅲ区南側に位置する。掘り方南側上面を切り合いによって削平されている。上甕は打ち欠きの壺で、合わせ目は接口式となる。

出土遺物（第103図294・295）　294は上甕である。頸部以上を打ち欠いている。底部は上げ底で、胴部は上位に最大径を有す。胴部外面はミガキを行い、全体に赤色顔料が認められる。295は下甕である。口縁部は逆L字形で、大きく内傾している。胴部は中位が膨らみ、底部は厚手の平底である。胴部内外面にはナデを行うが、外面底部付近には刷毛目が残っている。

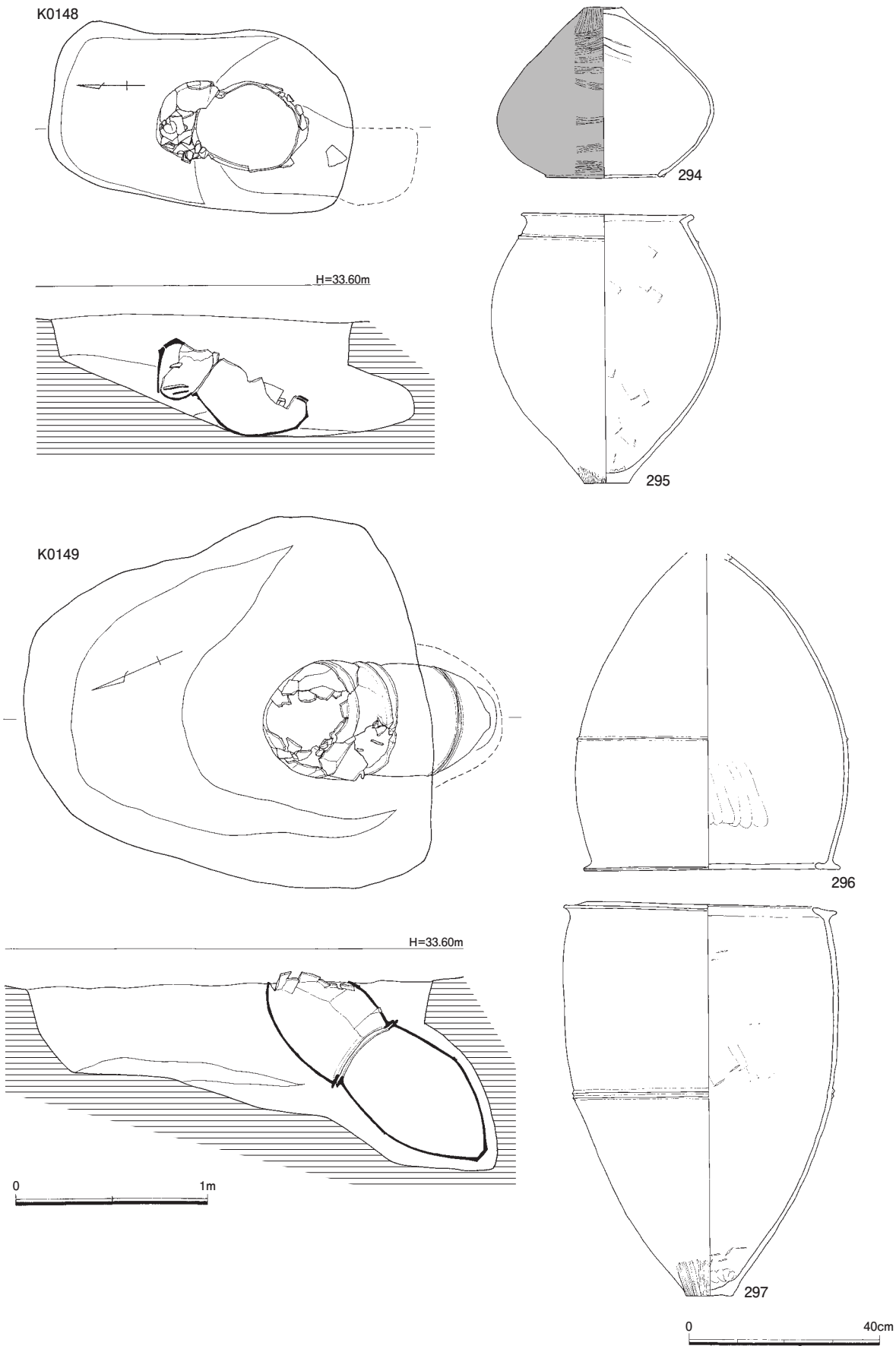
K0149（第103図、図版32）

X－30区で検出し、Ⅲ区西側南端部に位置する。掘り方は長軸2.1m、短軸1.9mを測る。北側に平坦面を有し、南壁中央に斜坑を抉り、甕棺を埋置している。

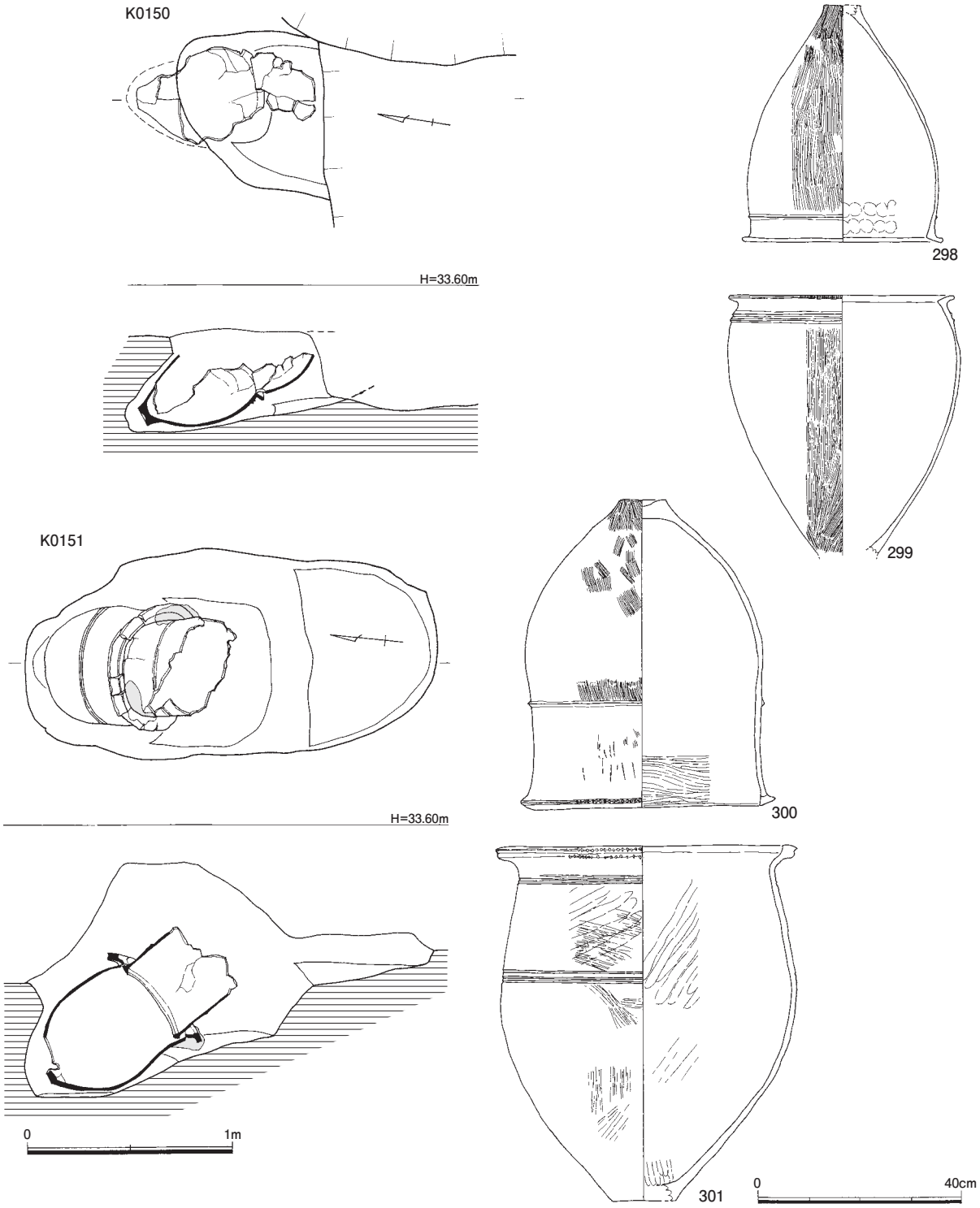
出土遺物（第103図296・297）　296は上甕である。口縁部はT字形を呈し、上面は水平となる。胴部は丸みを帯び、中位より上に突帯を付す。胴部内外面はナデを行う。297は下甕である。口縁部は内側により強く張り出し、外傾する。胴部は砲弾形に近くなり、中位に三角突帯を貼付する。内外面ナデであるが、胴部下端に刷毛目が残る。また胴部内外面に黒色顔料が認められる。



第102図　K0146・0147甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第103図　K0148・0149甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第104図　K0150・0151甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0150（第104図、図版32）

X－32区で検出し、Ⅳ区西側区画外に位置する。周辺の土坑による削平が進んでおり、掘り方・甕棺が後世の撹乱を受けている。

出土遺物（第104図298・299）　298は上甕である。口縁部は逆L字形を呈し、口縁下には三角突帯を付す。胴部は上位が張り出す。胴部外面縦刷毛を行い、外面下位には煤が付着する。299は下甕であ

る。整理段階で、底部破片を紛失している。口縁部は内傾するＬ字形を呈し、外面には刻みを施す。また口縁下には２条の三角突帯を貼付する。胴部は上位が大きく張り出し、底部は上げ底である。胴部外面は縦刷毛を行い、煤が付着している。

K0151（第104図、図版32）

Ｘ－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。0504古墳の掘り方等により、掘り方と上甕が撹乱を受けている。掘り方は長軸2m、短軸1mを測り、北側に向かって階段状に掘り下げを行う。呑口式で、合わせ目には粘土を貼付する。

出土遺物（第104図300・301、図版59）　300は上甕である。口縁部は上端に粘土帯を貼り付け、内外両側に小さく張り出し、外面には刻みを施す。底部は分厚い上げ底を呈し、胴部は下位が張り出し、上位に向かって反転し、頸部付近で広がる。中位に三角突帯を有する。調整は胴部外面上位にはナデ、下位には刷毛目が認められる。内面は上位に横ミガキ、中位以下はナデである。301は下甕である。胴部は中位に最大径を有し、頸部で如意状に強く屈曲する。口縁部は上面に粘土帯を貼り付け、上面は水平とし、外面には刻みを施す。調整は外面ミガキ、内面はナデである。

K0152（第105図、図版32）

Ｚ－28区で検出し、Ⅲ区北東部に位置する。東側に位置するK0153と並列する配置にある。掘り方は長軸1.9m、短軸1.6mの略円形を呈する。接口式で目張り粘土を施す。

出土遺物（第105図302・303、図版59）　302は上甕である。口縁部は内傾する鋤形を呈する。外面縦刷毛を行い、煤が付着している。303は下甕である。口縁部は水平で、胴部は丸みを帯び、底部は平底である。口縁下には台形突帯、胴部中位には２条の三角突帯を貼付する。胴部内外面は板状工具によるナデを行い、外面には黒色顔料が認められる。

K0153（第105図、図版32）

Ｚ－28区で検出し、Ⅲ区北東部に位置する。西側に位置するK0152と並列する配置にある。下甕内に下肢骨が折り重なって残っていたが、取り上げることができなかった。膝をそろえた屈脚状態での埋葬であろう。上甕には頭骨状の残片と赤色顔料が極少量認められた。接口式で目張り粘土を施す。

出土遺物（第105図304・305、図版59）　304は上甕である。口縁部上面は内湾し、口縁下には三角突帯を付す。外面縦刷毛を行う。305は下甕である。口縁部は内傾し、胴部は丸みを帯びる。胴部外面は縦刷毛の後ナデ消している。内面はナデである。

K0154（第106図、図版33）

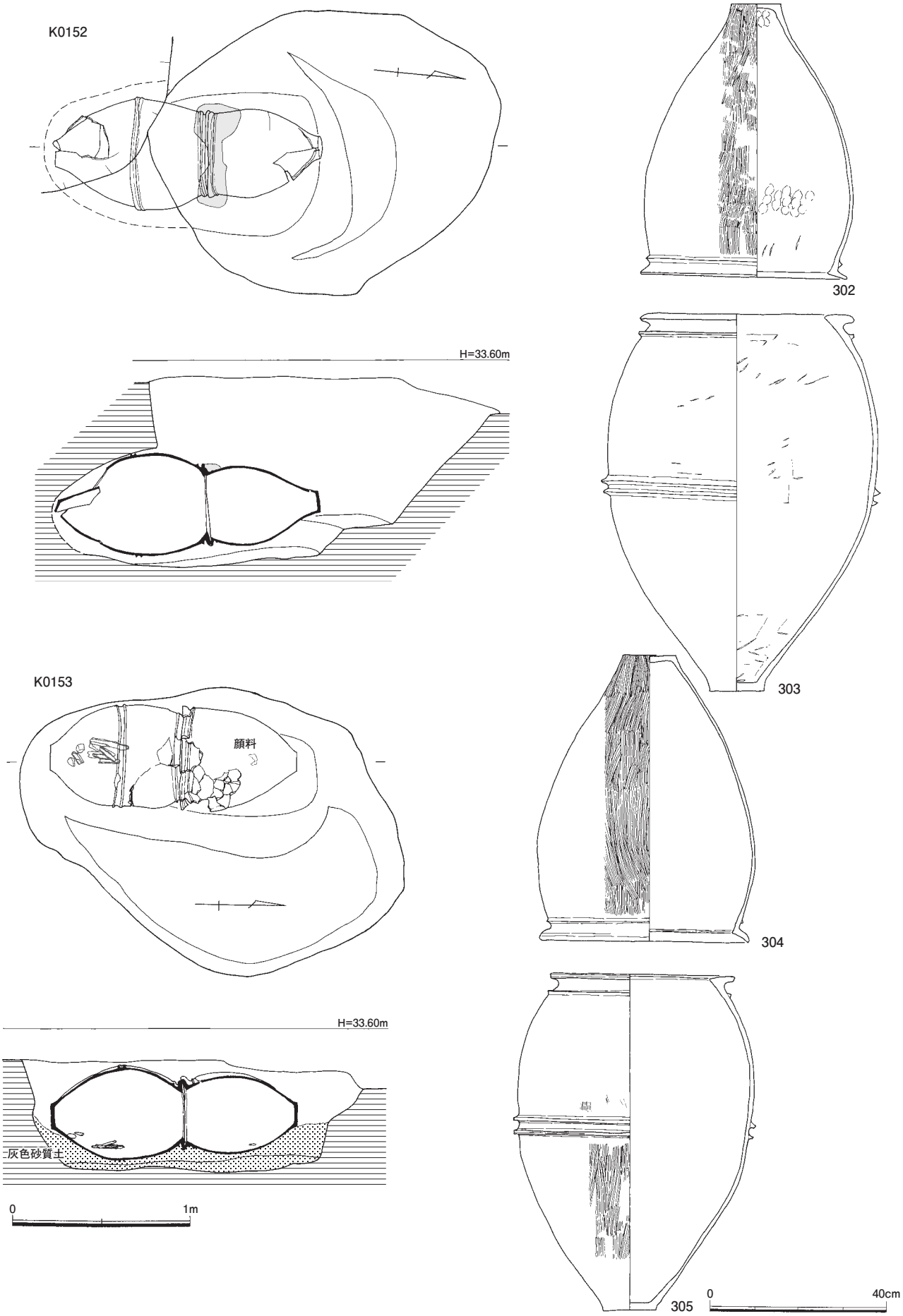
Ｚ－28区で検出し、Ⅲ区北東部に位置する。東側に位置するK0061と並列する配置にある。掘り方は長軸2.85m、短軸1.2mの隅丸長方形を呈する。断面は階段状に掘り込まれ、北側に斜坑を有する。また、墓坑内に破砕された状態で甕（308）が１個体埋納されている。

出土遺物（第106図、図版60）　306は上甕である。口縁部はＴ字形を呈し、水平となる。外底面を含む内外面全体に黒色顔料が残るが、三角突帯貼付前に顔料の塗布が行われている。307は下甕である。口縁部は内側に大きく張り出し、水平となる。胴部は砲弾形に近く、中位に三角突帯を付す。308はほぼ完形となる墓坑出土の甕である。内傾するＬ字形の口縁部を有し、胴部上位がわずかに張り出し、底部は上げ底となる。胴部外面には縦刷毛を行い、外面には煤、内面には炭化物が付着する。

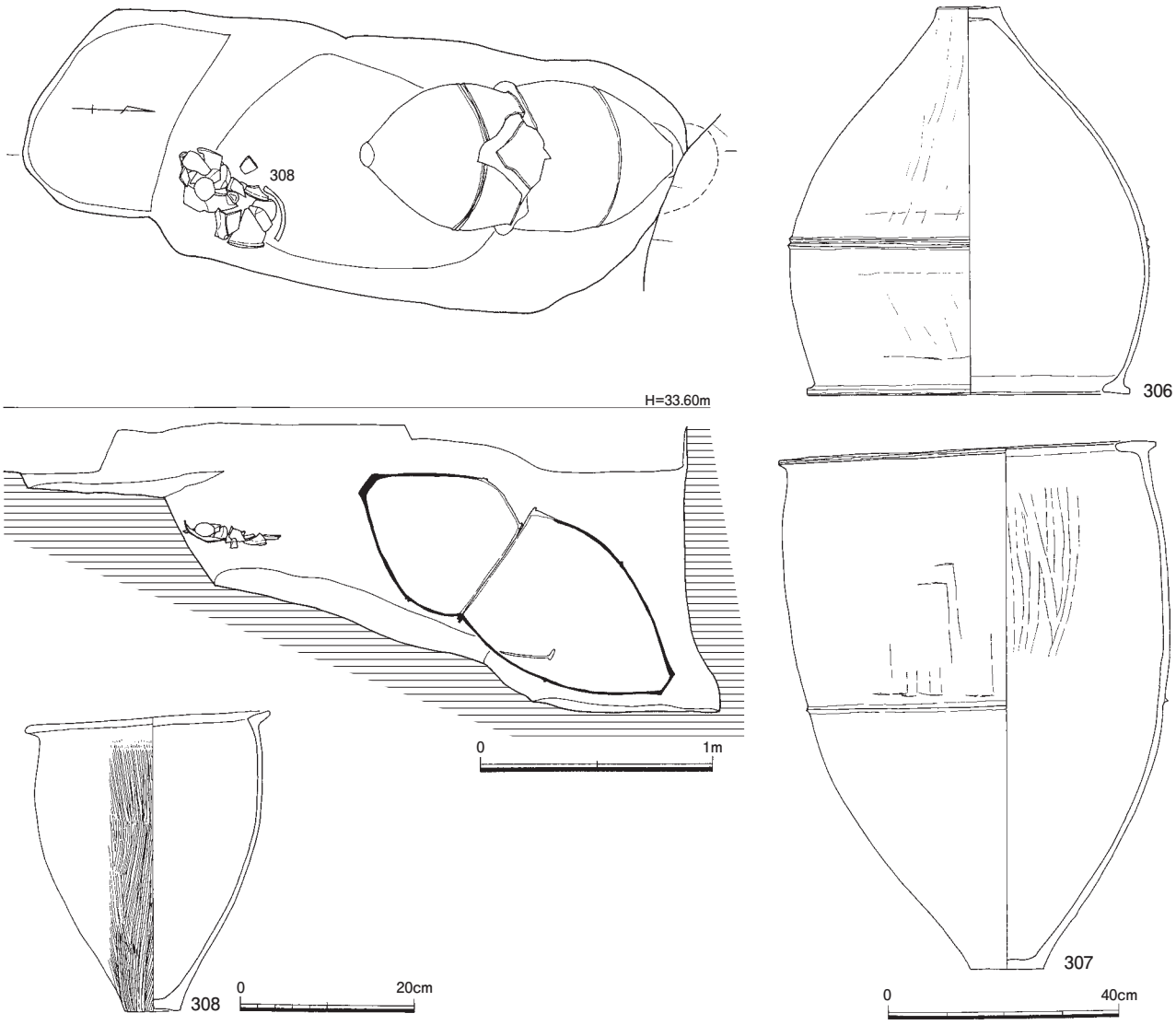
K0155（第107図、図版33）

Ｚ－28区で検出し、Ⅲ区北東部に位置する。東側に位置するK0146と並列する配置にある。掘り方は長軸2.8m、短軸2.2mを測る。接口式で目張り粘土を施す。

出土遺物（第107図、図版60）　309は上甕である。外傾するＴ字形の口縁部を有し、口縁下に三角



第105図　K0152・0153甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



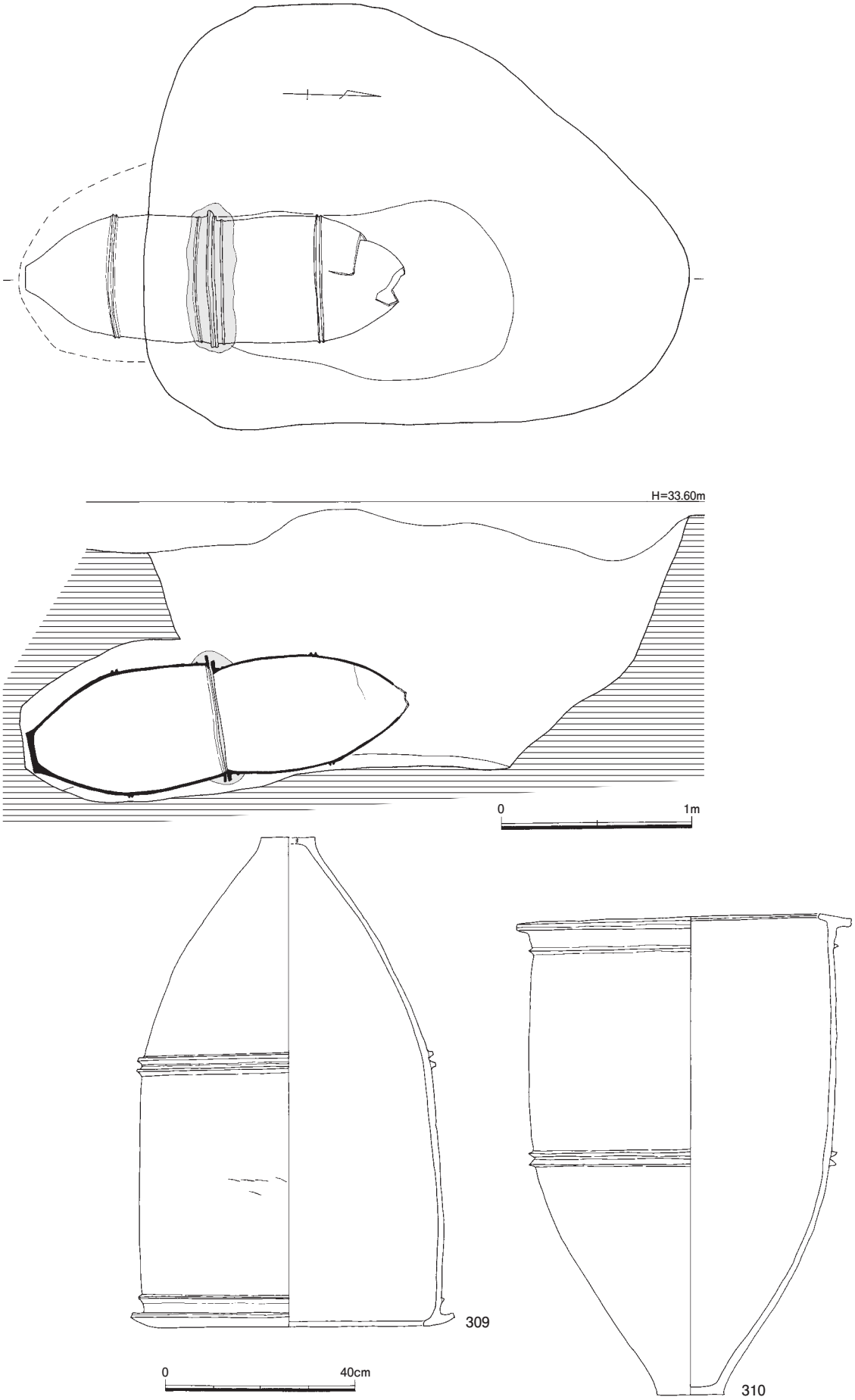
第106図　K0154甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、308は1/8、306・307は1/12）

突帯、砲弾形の胴部には台形突帯を付す。口縁部から胴部外面に黒色顔料が残る。310の下甕も形態は上甕とほぼ同様であるが、胴部突帯が高い三角形となる。外面全体に黒色顔料も認められる。

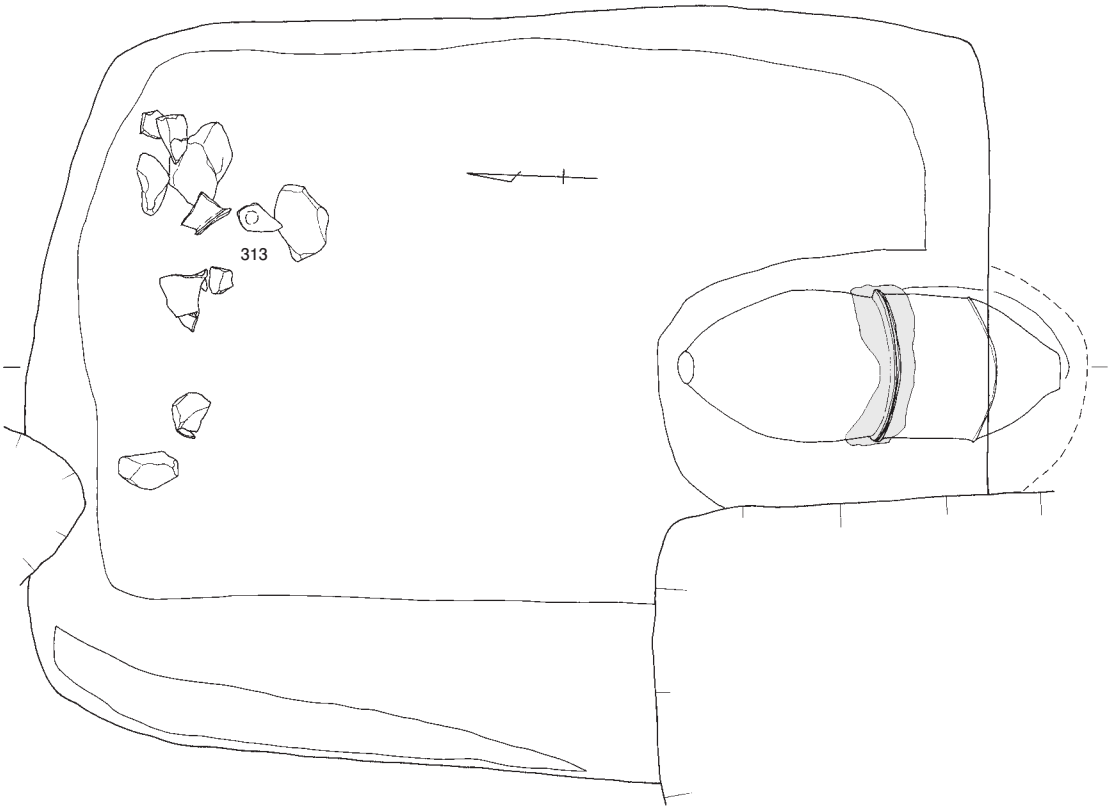
K0156（第108図、図版33）

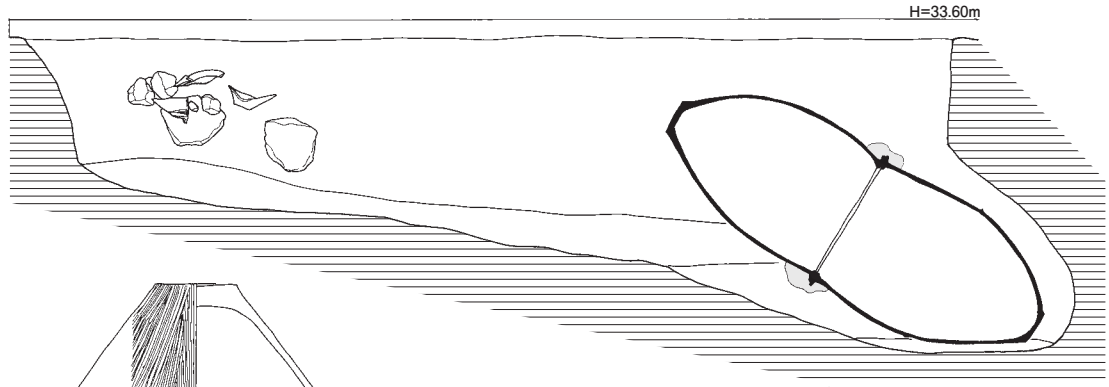
Y－29区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。切り合い関係からK0064に先行するものと考えられる。掘り方は長軸3.8m、短軸3.1mの均整の取れた長方形を呈する。接口式で目張り粘土を施す。また、掘り方北側より甕（313）の破片がまとまって出土する。

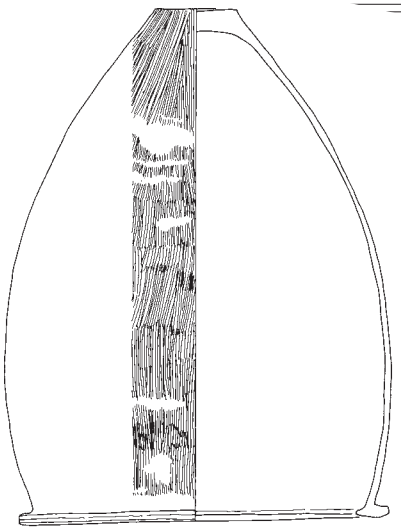
出土遺物（第108図、図版60）　311は上甕である。T字形の口縁部は水平となる。底部は厚手でほぼ平底となる。胴部外面は縦刷毛を行い、突帯はない。外底を除き全面に黒色顔料を塗布する。312は下甕である。口縁部は水平で内側に張り出す。胴部は丸みを有し、中位に小さな三角突帯を貼付し、下位には穿孔を行う。外底を含む全面に黒色顔料を塗布する。313は墓坑出土で、全体の1／4ほどを欠く。内傾するL字形の口縁部に、胴部はあまり張り出さない。また、底部は上げ底である。

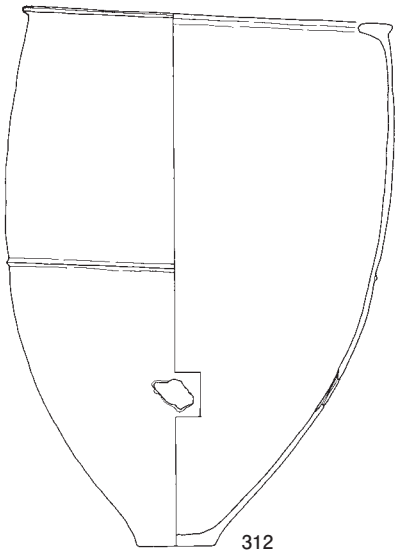


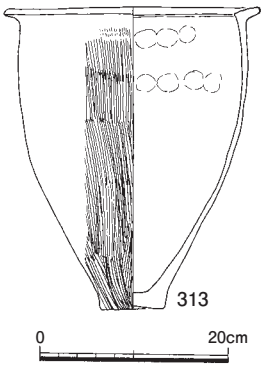
第107図　K0155甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）





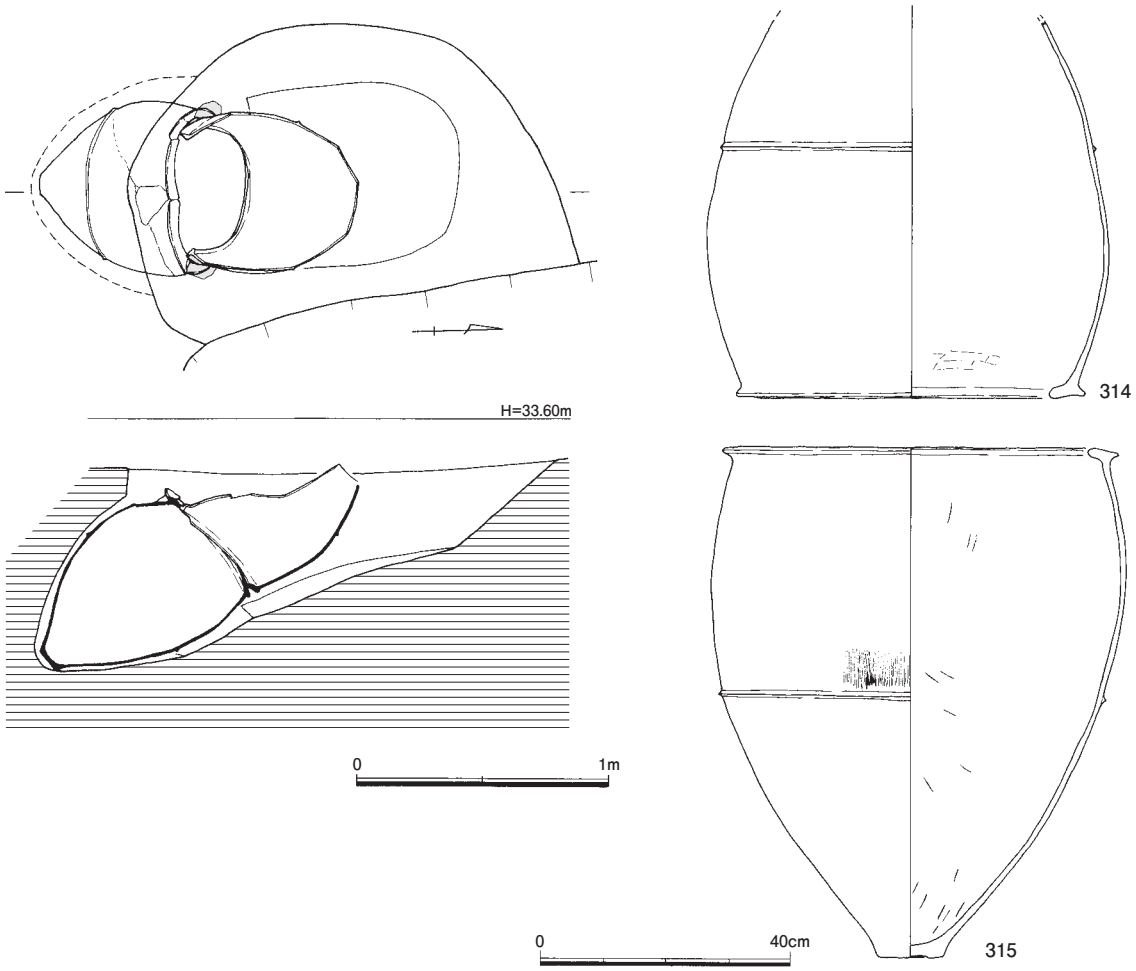






0 40cm

第108図　K0156甕棺墓・甕棺・出土遺物実測図（縮尺1/30、313は1/8、311・312は1/12）



第109図　K0157甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

K0157（第109図、図版19）

Y－28区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。東側に位置するK0069と並列する配置にあり、これに切られる。掘り方は長軸1.9m、短軸1.6mの略円形を呈する。接口式で目張り粘土を施す。

出土遺物（第109図）　314は上甕である。口縁部は外傾し、内側に張り出す。胴部は丸みを帯び、中位には三角突帯を付す。内外面に黒色顔料が認められる。315は下甕で、上甕と同様の形態である。内外面ナデによるが、中位に刷毛目が残る。外底以外に黒色顔料が残っている。

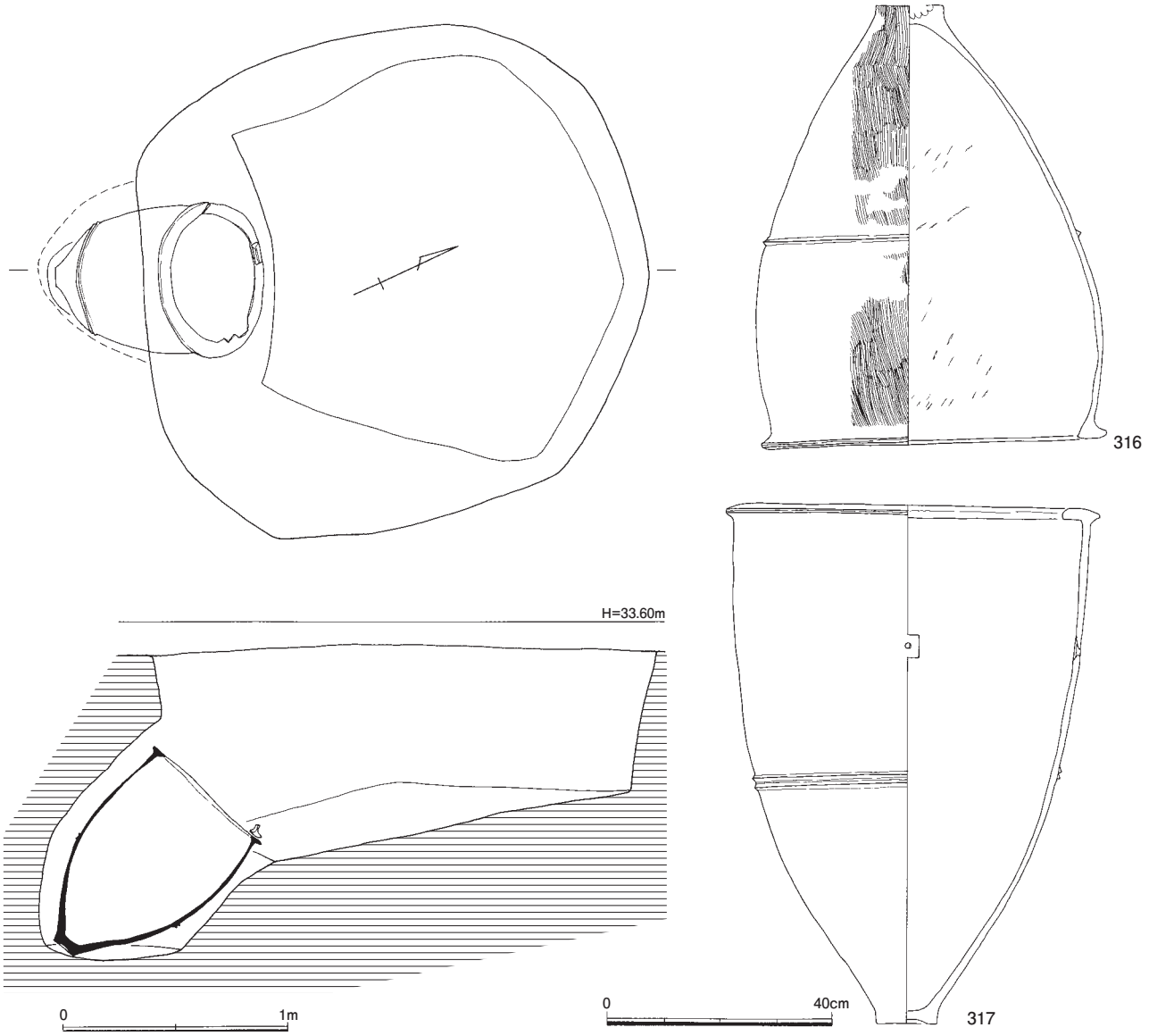
K0158（第110図、図版33）

W－28区で検出し、Ⅲ区北西側に位置する。北側をK0089に切られている。掘り方は一辺2.2mの隅丸方形を呈する。検出時には上甕の大半が下甕内に崩落しており、原位置をとどめていない。

出土遺物（第110図、図版60）　316は上甕である。口縁部はT字形を呈し、ほぼ水平となる。胴部は丸みを有し、小さな三角突帯を付す。胴部外面は縦刷毛、内面はナデにより、底部付近には爪のような圧痕が残る。317は下甕である。口縁部は内側に突出し、外傾気味となる。胴部は上位に向かって開き、中位に2条の小さな三角突帯を貼付する。内外面ナデにより、小口痕跡が残る。

K0159（第111図、図版33）

X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。0504古墳の掘り方によって撹乱を受ける。掘り方は南北軸1.9m、東西軸2.3mの隅丸長方形を呈する。東側から階段状に掘り下げ、更に南壁に斜坑を抉り



第110図　K0158甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

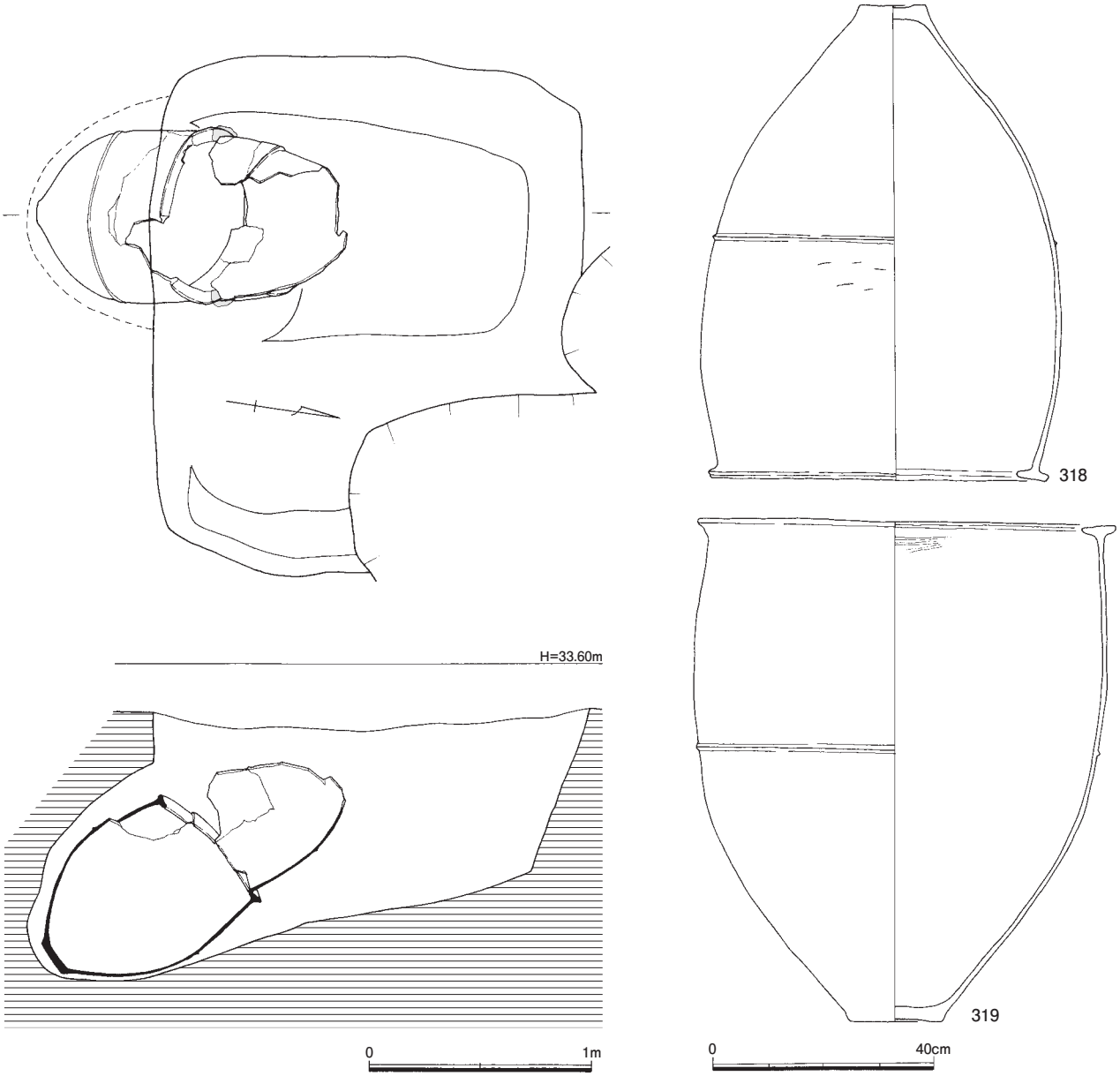
甕棺を埋置する。接口式で目張り粘土を施す。

出土遺物（第111図、図版61）　318は上甕である。内傾するＴ字形の口縁部を有し、丸みを帯びた胴部に三角突帯を貼付する。内外面ナデを行い、内面には黒色顔料が残る。319は下甕である。口縁部は内傾するＴ字形を呈する。内外面板状工具によるナデを行うが、口縁部内面はヘラ状工具によるナデとなる。内外面には黒色顔料が残る。

K0160（第112図、図版31）

Ｚ－25区で検出し、Ｉ区東側区画外に位置する。区画溝0200最上層の黒色土堆積直前に掘削が行われている。K0147同様0200埋没途中の埋葬であり、窪み状となっていた段階と考えられる。下甕に瓢形土器の上半部をかぶせ（中甕）、更にその瓢形土器の胴部下半破片で口縁部を塞いで蓋としている。

出土遺物（第112図320･321、図版61）　320は中甕と蓋として使用した瓢形土器である。底部はなく、胴部下半の１／２を失っている。口縁部内面から胴部上位はミガキ、突帯以下は刷毛目の後ナデ消しを行う。内面はナデである。口縁部内面から胴部上位には赤色顔料が塗布される。321は下甕である。



第111図　K0159甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）

口縁部はく字形に屈曲し、口縁下には三角突帯を付す。胴部上位に黒色顔料が残る。

K0161（第112図、図版33）

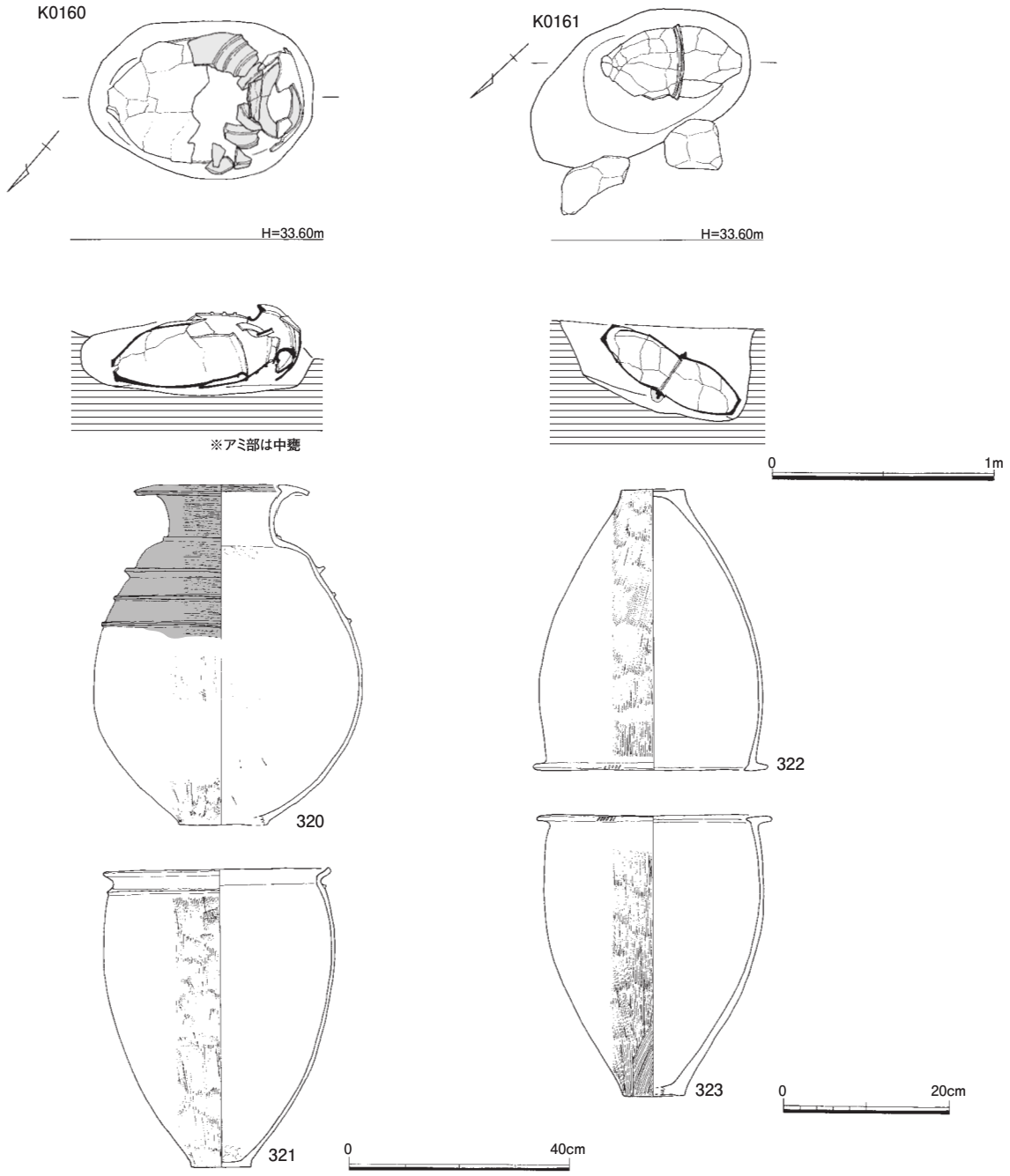
W－28・29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。上面を古墳周溝によって削平される。K0164墓坑内に掘り込んでおり、K0161→K0164となる。墓坑底周辺に目貼りの粘土が残る。

出土遺物（第112図、図版61）　322は上甕である。鋤状の口縁部は水平となり、部分的に5箇所の刻みを施す。胴部外面は縦刷毛を行う。323は下甕である。口縁部はわずかに内傾する。上甕同様口縁部外側に刻みが5箇所確認できる。

K0162（第113図、図版34）

W・X－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。掘り方は長軸2.4m、短軸1.6mを測り、隅丸長方形を呈する。甕棺の主軸は異なるがK0078・0082・0083と小群をなす配置である。

出土遺物（第113図324・325、図版61）　324は上甕の壺で、胴部上位より打ち欠いている。M字形



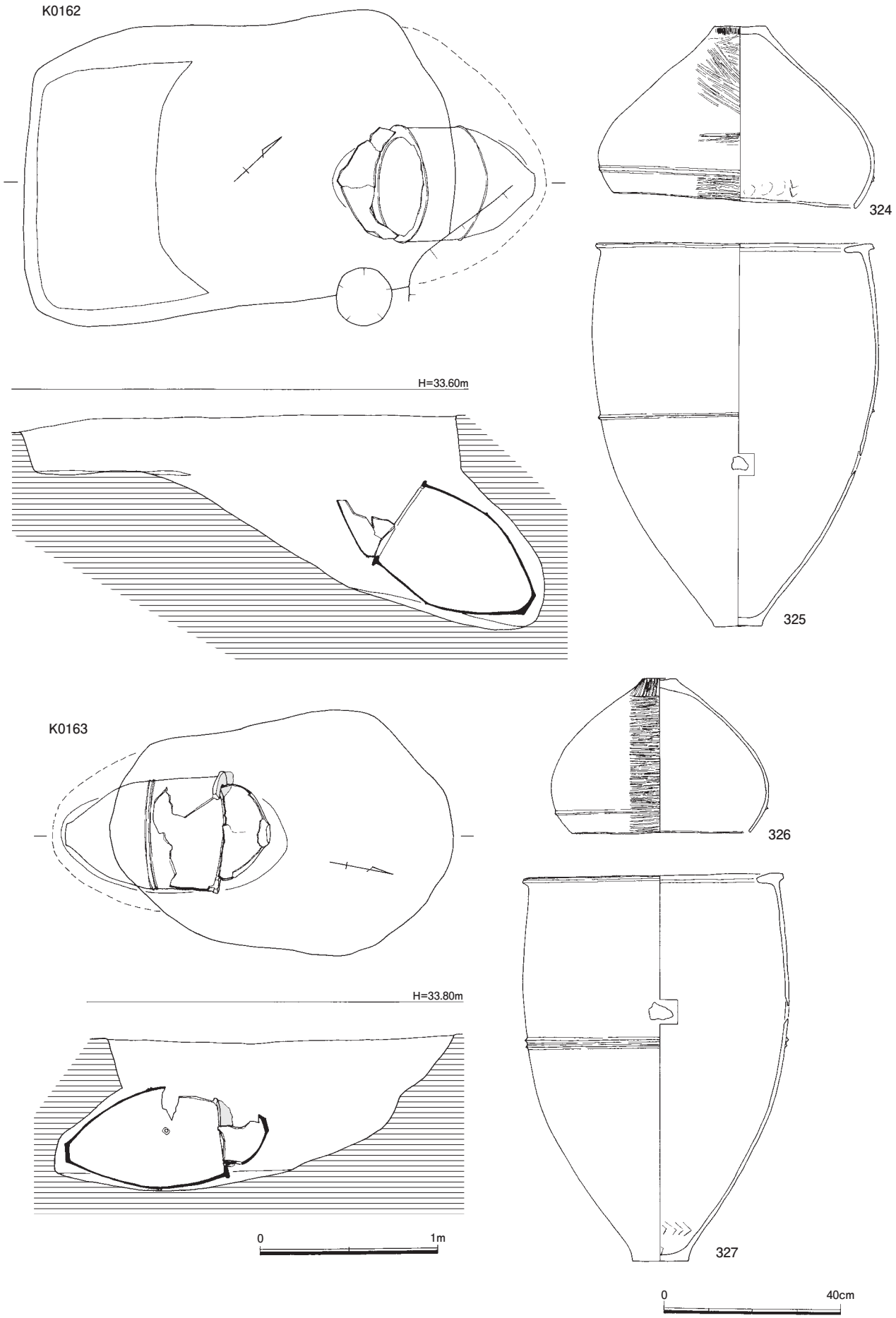
第112図　K0160・0161甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、322・323は1/8、320・321は1/12）

突帯を有し、胴部には横ミガキを行い、底部付近には刷毛目が残る。325は下甕である。口縁部は内側に張り出し、内傾する。胴部は丸味を帯び、中位の小さな三角突帯下に穿孔を行う。内外面に黒色顔料が認められる。

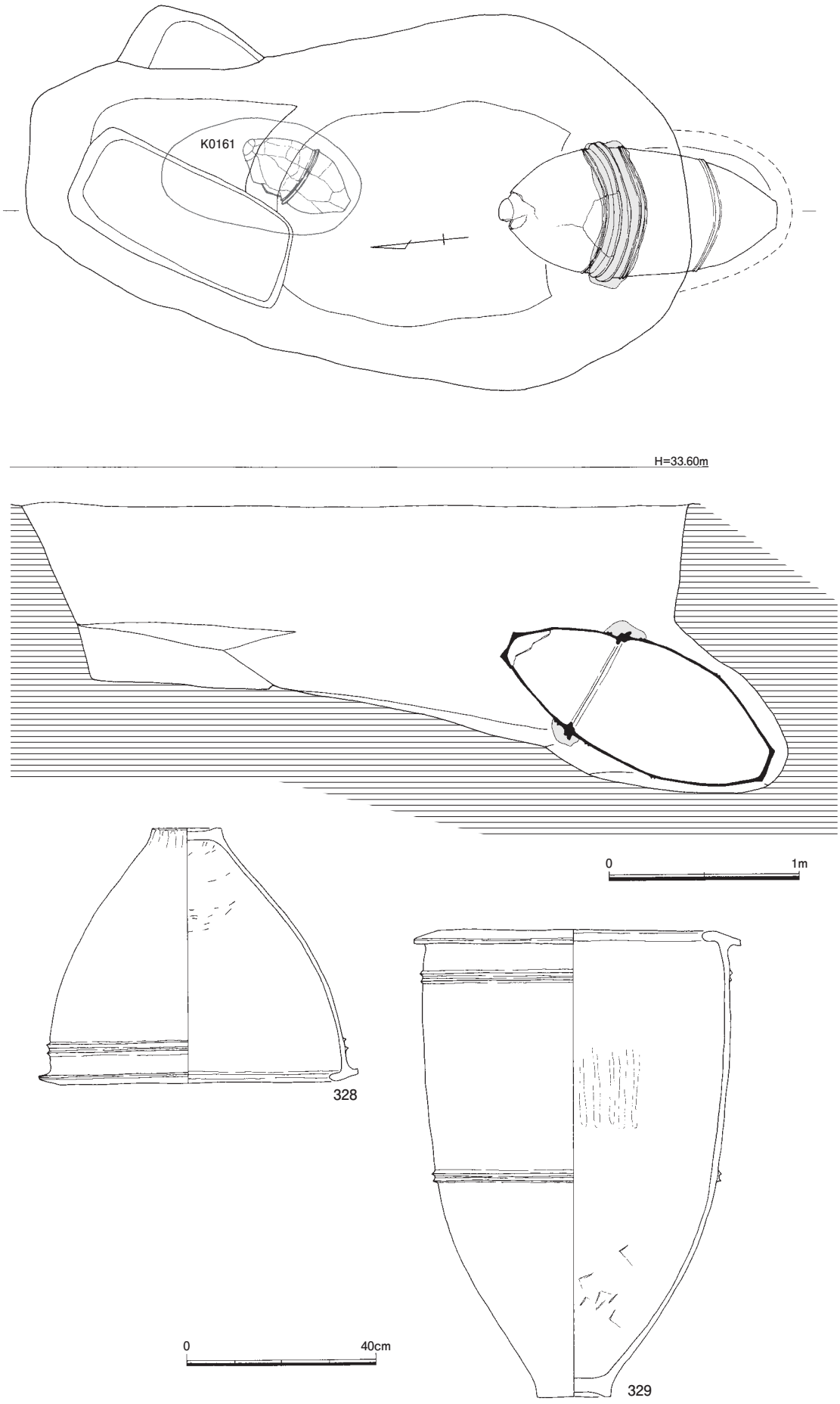
K0163（第113図、図版34）

Y－28区で検出し、Ⅲ区北側に位置する。Ⅱ区区画溝と切り合うが、先後関係は不明である。掘り方は長軸1.9m、短軸1.4mを測り、合わせ口は呑口式となる。

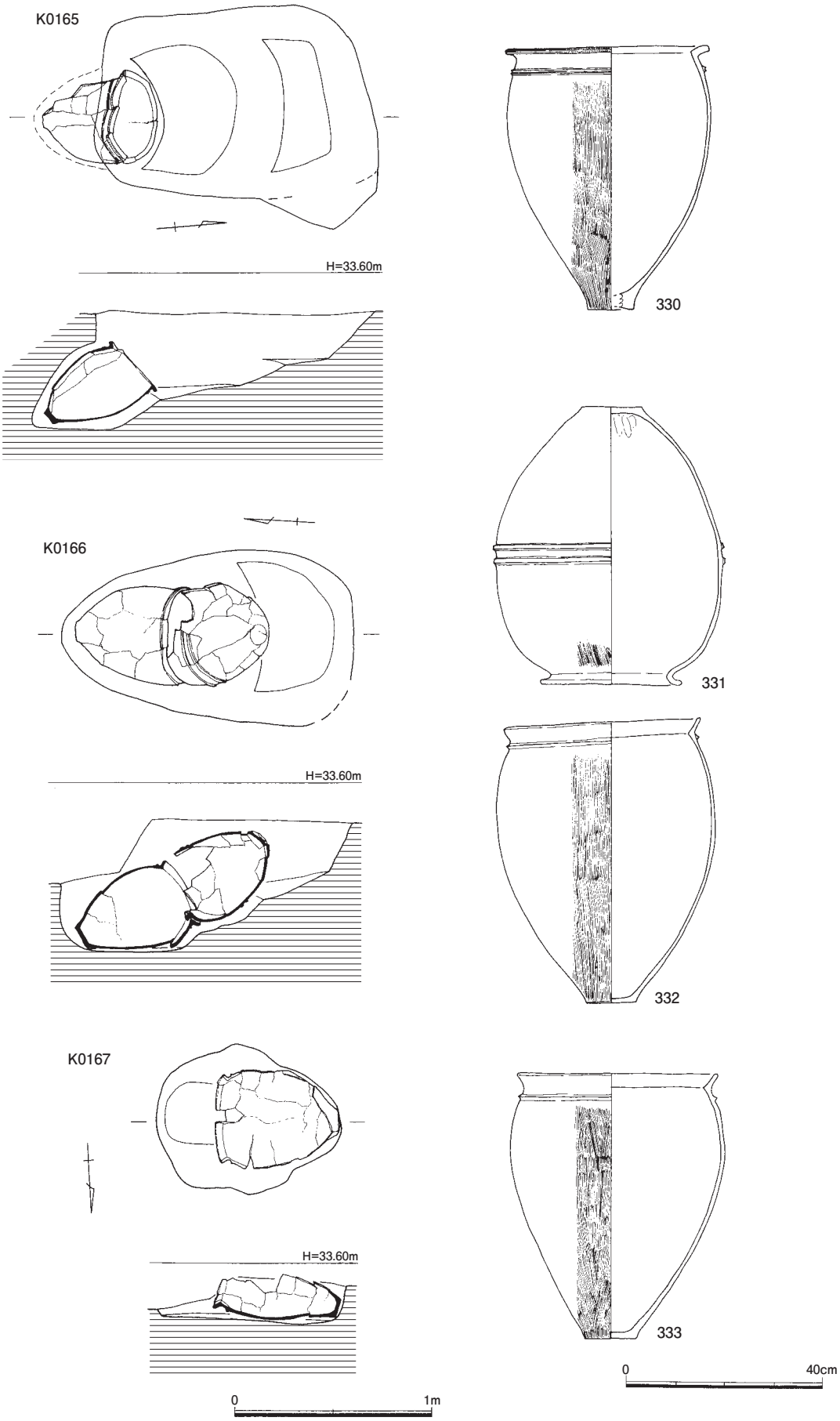
出土遺物（第113図326・327、図版62）　326は上甕の壺で、胴部上位より打ち欠く。胴部外面には三角突帯を付し、全体にヘラミガキを行う。327は下甕である。口縁部は内側に張り出し、内傾する。胴部は砲弾形に近く、中位にM字形突帯を貼付する。内外面に黒色顔料が認められる。



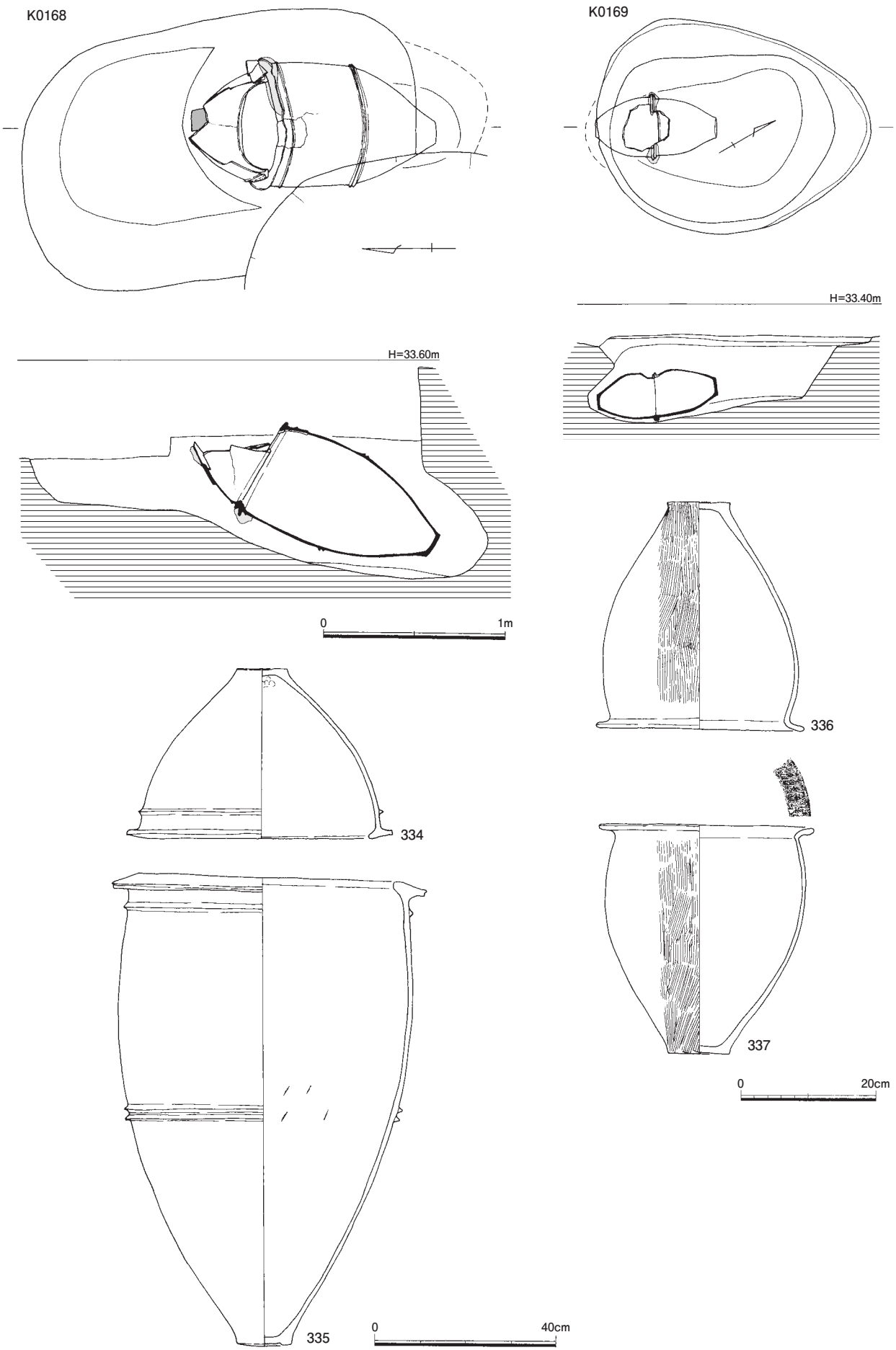
第113図　K0162・0163甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第114図　K0164甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第115図　K0165・0166・0167甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、1/12）



第116図　K0168・0169甕棺墓・甕棺実測図（縮尺1/30、336・337は1/8、334・335は1/12）

K0164（第114図、図版33）

W－29区で検出し、Ⅲ区中央西側に位置する。上面を古墳周溝によって削平され、K0161に墓坑を切られる。掘り方は長軸3.4m、短軸2mを測る。接口式で、目貼りの粘土を施す。

出土遺物（第114図328・329、図版62）　328は上甕の鉢である。T字形の口縁部は外傾し、口縁下に2条の三角突帯を付す。胴部内外面はナデによる。329は下甕である。T字形口縁部は外傾し、口縁下に2条の三角突帯、胴部中位にM字形突帯を付す。底部は上げ底で、胴部は砲弾形を呈する。胴部内外面ナデにより、内面上位には指ナデ痕跡が残る。胴部外面に黒色顔料が認められる。

K0165（第115図、図版34）

V－29区で検出し、Ⅲ区西側区画外に位置する。1基のみ単独の配置である。掘り方は長軸1.4m、短軸0.9mの隅丸長方形を呈する単棺である。

出土遺物（第115図330）　口縁部は内傾する逆L字形で、外面に刻みを施す。底部は上げ底で、胴部は上位が張り出し、外面縦刷毛を行う。また、外面には煤が付着する。

K0166（第115図、図版34）

Y－32区で検出し、Ⅳ区南側区画外に位置する。東側のK0026と対になる配置である。現状で掘り方は長軸1.45m、短軸0.9mを測る。

出土遺物（第115図331・332）　331は上甕である。口縁部は強く屈曲し、胴部は丸味を帯びた卵形を呈し、中位の台形突帯は下垂する。内外面ナデを行うが、頸部付近に刷毛目が残る。また、口縁部内面から胴部外面には黒色顔料が施される。332は下甕である。口縁部は内湾気味で、頸部に三角突帯を付す。平底で、胴部は卵形を呈し、外面には縦刷毛を行う。

K0167（第115図、図版34）

Z－31区で検出し、Ⅳ区東側に位置する。区画溝の一部を切って埋葬された単棺である。掘り方は径0.8m程度の略円形を呈し、区画中心に向かって甕棺を挿入する。

出土遺物（第115図333）　口縁部はく字形を呈し、内面は張り出し気味に稜を有する。口縁下には三角突帯を有し、胴部外面には刷毛目を行う。また、外面には煤が付着する。

K0168（第116図）

Y－29･30区で検出し、Ⅲ区中央に位置する。掘り方は長軸2.1m、短軸1.4mの隅丸長方形を呈する。接口式で、合わせ目に黄色粘土を貼付する。また、上甕底部付近が埋置後に破損したと考えられ、破損部位には別個体の破片（アミ部）をあてがい、灰白色粘土で固定している。また、上甕破損部分は墓坑内に投棄しているため、ほぼ完形に復元できる。

出土遺物（第116図334・335、図版62）　334は上甕の鉢である。口縁部は外傾するT字形を呈し、口縁下には三角突帯を貼付する。内外面にはナデを行い、共に黒色顔料が認められる。335は下甕である。口縁部は外傾するT字形を呈する。胴部は砲弾形を呈し、口縁下と胴部には三角突帯を付す。胴部内外面の調整は板状工具によるナデを行う。

K0169（第116図、図版34）

X－24区で検出し、Ⅳ区北側区画外に単独で位置する。現状で掘り方は長軸1.5m、短軸1.2mの長円形を呈する。接口式で目貼りの黄色粘土を貼付する。

出土遺物（第116図336・337、図版62）　336は上甕である。口縁部はく字形に屈曲し、内面の稜は緩やかである。胴部外面には縦刷毛を行う。337は下甕である。上甕同様、く字形の口縁部を有する。口縁部内面には並行する5条の条線を刻む。また、胴部は上位が張り、外面には刷毛目を施す。

４）祭祀遺構

墓地の構成の項でふれたように、一部を除いた弥生時代の墓は溝や土坑に囲まれ、おおまかにⅠ～Ⅳ区に分かれて分布する。この墓を囲む溝や土坑のなかからは丹塗りなどの祭祀土器が出土しており、墓地の祭祀と区画をかねた遺構とみられる。墓地の形成過程をみると中央のⅢ区がもっとも古く、その北のⅡ区に続き、その後南北のⅠ・Ⅳ区へと墓域が拡大する。

Ⅲ区は東側に連続する溝と３土坑、および西側の弓状溝に囲まれるが、明確な区画とは言い難い。南北両側はⅡ・Ⅳ区の溝で区切られる。木棺墓の大半がこの区域に分布する。

Ⅱ区は西側が開いたコの字状に溝が囲み、その西側外を木棺・土壙墓が南北に並列状態で分布する。しかしこの木棺・土壙墓列もⅡ区の北辺でとだえる。

Ⅰ区はⅡ区の北側に方形状に墓域が区画される。北辺から西辺、さらにⅡ区の北辺と兼ねた南辺へと連続した溝が続く。西側は短い弓状の溝だけで、北辺および南辺との間は途切れる。北側では竪穴住居との切り合いがみられ、それ以前の住居域まで墓域が拡大したことを示している。

Ⅳ区はⅠ区の南側に長方形状に墓域が区画される。西辺から南辺は連続した溝となるが、北辺と西辺の溝との間、また北辺と西辺との間は途切れる。

以上の墓域を囲む祭祀遺構は東側が顕著であり、西側の住居域との区画には明瞭さを欠くところがある。このほかに墓域からやや離れて祭祀土器などを出土する土坑が４基ある。うち２基はピットのなかに完形の土器が埋納されており、あるいは住居に伴う祭祀ともみられる。

以下、Ⅰ～Ⅳ区の祭祀遺構について区ごとに遺構・出土遺物についてみていき、その後ほかの祭祀遺構について述べる。なお現場では墓域を囲む祭祀遺構について、Ⅰ区からⅢ区の一部までをＭ0200として、またそれ以外の溝・土坑にはそれぞれ個別の遺構番号をつけた。このため煩雑さが生じるので、Ⅲ区を除きすでに記述してきたように北辺・南辺・東辺・西辺などに置き換えて説明したい。各区の遺構番号との関係は次のとおりであるが、必要に応じて遺構番号を用いることもある。

Ⅰ区　北辺溝（Ｍ0200の１・２・３区）、東辺溝（Ｍ0200の４・５区）、南辺溝（Ｍ0200の６・７・８区）、西辺溝（Ｍ0955）。

Ⅱ区　北辺溝（Ｍ0200の６・７・８区）、東辺溝（Ｍ0200の９・10区）、南辺溝（Ｍ0200の11・12区）、南辺溝はⅢ区の北辺溝を兼ねるものか。西辺の祭祀遺構はない。

Ⅲ区　東辺は北からＭ0200（14・15区）溝、Ｍ0203土坑、Ｍ0204土坑、Ｍ0205土坑、Ｍ0206土坑。西辺はＭ0480溝。

Ⅳ区　北辺溝（Ｍ0495・Ｍ0496）、東辺溝（Ｍ0700の１区）、南辺溝（Ｍ0700の２区）、西辺溝（Ｍ0207）。

なお、Ｍ0200の地区割りについては第６図に示した（13区はない）。

Ⅰ区祭祀遺構（北区画）（第117・118図、図版１・35）

Ｙ－25区を中心に北・東・南辺の連続する溝と西辺の短い溝で方形区画を造り出し、その中に甕棺墓26基と木棺墓１基が築かれている。各辺はほぼ東西南北にあたり、溝内側は南北14.2～15.8ｍ、東西13.5ｍの南北にやや長い長方形を呈する。溝外側では最大で南北23.9ｍ、東西22.6ｍの規模となる。東辺溝中には２基の甕棺墓が築かれる。

北辺溝からみていくと、外側の東側はＳＤ0492（奈良時代）に切られるが、西側に向かって幅が広がり、Ｂトレンチのすぐ西で4.9ｍをはかる。溝内側は直線的で、西に向かいやや南にふれていき、西端部分は南に向かってわずかに屈曲する。溝内は側壁や底面での凹凸が著しく、また北側底にはさらに

溝状の掘り込みがあるなど安定性がない。Bトレンチでの最深部は60㎝。覆土はほぼ水平な堆積であり、北西側最上層には外縁に沿うように黒色土が広がる。K 0120とK 0124の墓壙が溝の覆土を切って築かれている。

東辺溝は幅が1.5ｍと狭い北東隅からはじまり、南に向かい外縁が大きく東側に張る。最大幅は南北の中央にあり8.3ｍ、そこから南に向かいすぼまり、南東隅幅は3.1ｍとなる。東辺溝の内側は直線的に延び、ほぼ直角に折れて南辺溝の内側となる。さらに南に延ばすとⅡ区の東辺溝内側の線上につながる。溝内は北辺溝と同様に凹凸が著しく、底面中央部分が南北約10ｍにわたり一段深くなる。この部分を中心に祭祀土器などの遺物が出土した。Cトレンチでの最深部は75㎝。覆土はレンズ状の堆積となるが、東西にわたって同一層がつづく。ただ土器片を多数含んだ最上層の黒色土が厚さ30㎝となり、底面の一段深くなった部分と重なるように広がる。中央外縁下の底面近くでK 0147とK 0160を検出しており、Cトレンチの3層より下から墓壙が掘り込まれたとみられる。

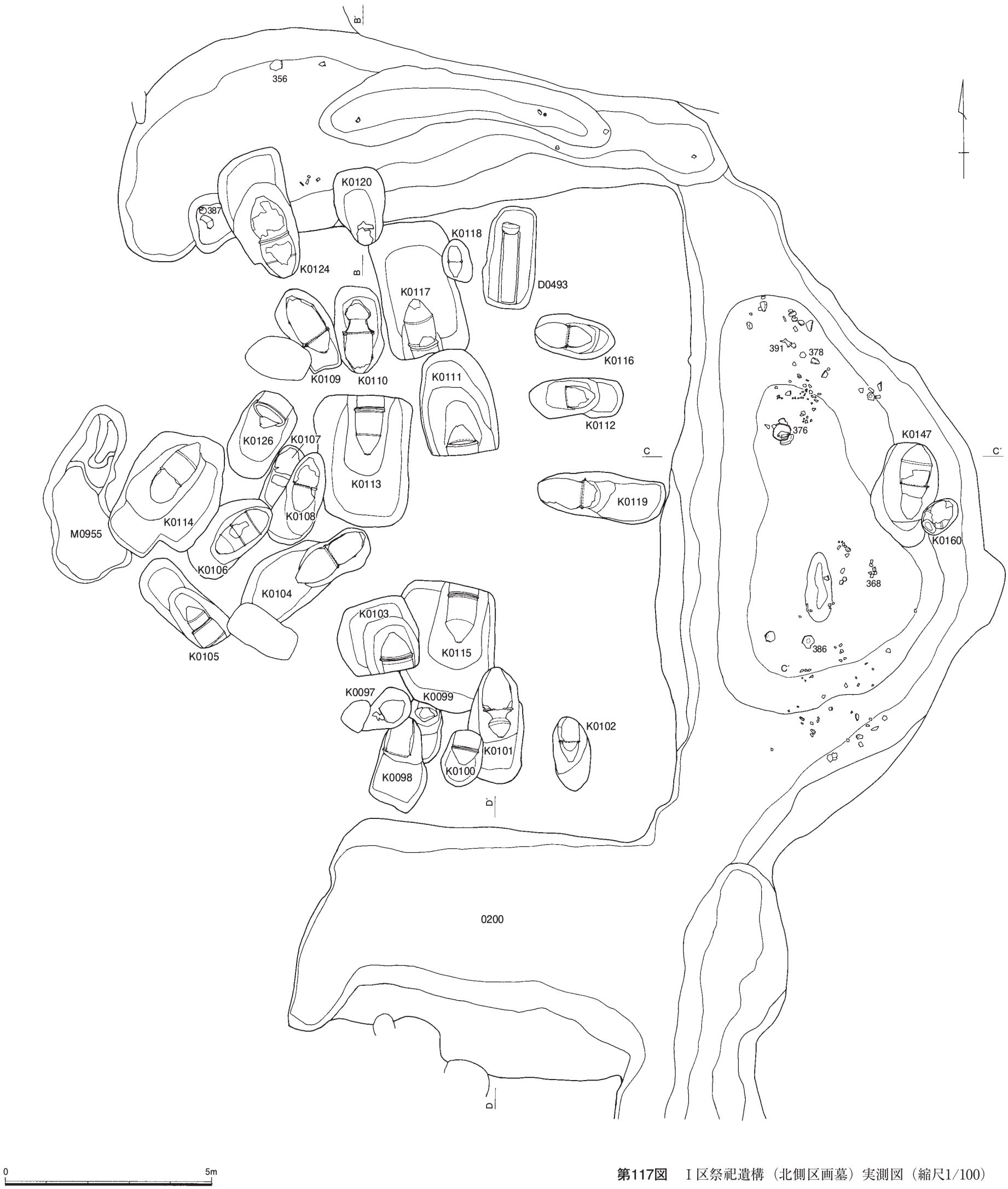
南辺溝は内側で南東隅から西に6.8ｍのところで立ち上がる。端部はやや西南側に曲がる。最大幅は東側にあり、6.0ｍ。溝内は南側に浅い段がつき、北側が深くなる。底面は全体に凹凸が著しい。Dトレンチでの最深部は47㎝。覆土は北側が先に埋まったような堆積を示す。北・東辺にみられた黒色土の堆積はない。全体をみると西側が南に鉤状にまがることから、当初はⅡ区に伴って区画された可能性もある。南辺溝のうち6区の出土遺物についてはⅡ区東辺溝と一連のものであり、Ⅱ区で述べる。

西辺溝は南北長4.3ｍ、東西幅1.75ｍの西側が張った弓状の溝で、北辺溝から3.7ｍ、南辺溝の西北角からは直線で8.5ｍ離れる。底面は南北に一段深い掘り込みがあり、最も深い北側で検出面から44㎝をはかる。K 0114の墓壙が切る。

出土遺物（第119～123図、図版63・64）

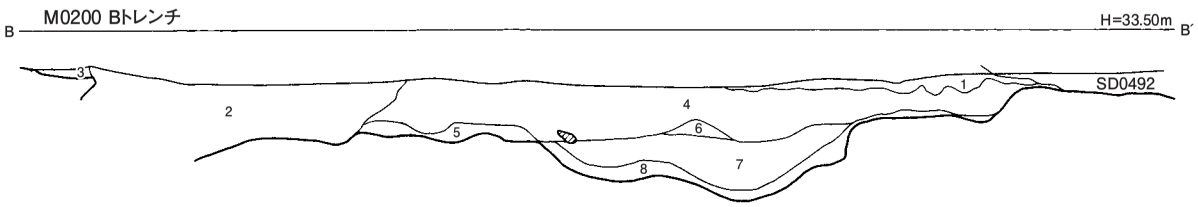
338～370は甕である。まず口縁～胴部片からみていくと、**338～351**は逆Ｌ字状口縁をもつ。338・339は口縁下に三角突帯をめぐらす。338は口縁上面が内傾し、339の口縁上面は平坦で内側への張り出しが大きい。340～346は口縁上面がほぼ平坦で、口縁部内面を強くナデて口縁が内側に張り出し気味になる。343・346の口縁外端はやや垂れ気味となり、また342の口縁上面には刷毛目状の調整がみられる。347～349は口縁内側の張り出しがほとんどなく、ほぼ直線的に胴部に続く。350・351は口縁上面が内傾するものである。**352・353**は口縁が「く」の字状に外反し、口縁内側はまるみをおびる。354～356の甕は全形をうかがうことができる。**354**は内側が丸みをおびて外反する逆Ｌ字状口縁をもち、胴部はほとんど張りがなく、底部は垂直に立ち上がり、わずかに上げ底となる。**355・356**は「く」の字状口縁と上位が張った胴部をもつ。口縁内側は丸みをもち、底部はこころもち上げ底となる。**357～364**は底部片。357は端部が外に張った厚手の上げ底、358～362はわずかに上げ底、363・364は平底となる。以上の甕は胴部外面が刷毛目、口縁から内面はナデ調整を行い、外面に煤が付着するものがほとんどである。ただ完形の355には煤などの付着がみられない。

365～370は丹塗りを施した甕である。**365**は内側がやや張り出した逆Ｌ字状口縁をもち、口唇部には刻目を入れる。口縁下と胴部中位にM字状突帯をめぐらす。外面はヘラ研磨で仕上げ、口縁下突帯間には縦の暗文を連続的に、また口縁上面にも3～8本を一組とした放射状の暗文を等間隔で施す。内面は板ナデ調整である。内外面ともに丹塗りを行う。**366～369**は内側が丸みをおびて外反する逆Ｌ字状口縁をもち、口縁上面は366・367がほぼ平坦、368・369がやや内傾し「く」の字状に近い。366・367は口縁下のM字状突帯までしかうかがえないが、368・369は口縁下に1条、胴部にやや間隔をとって2条のM字突帯をめぐらす。器面調整はほとんど365と変わるところはない。367が口縁下突帯間と口縁上面に、368が胴部の突帯間に、また369が口縁下突帯間と胴部突帯間にそれぞれ暗文を施



0 5m

第117図　Ⅰ区祭祀遺構（北側区画墓）実測図（縮尺1/100）

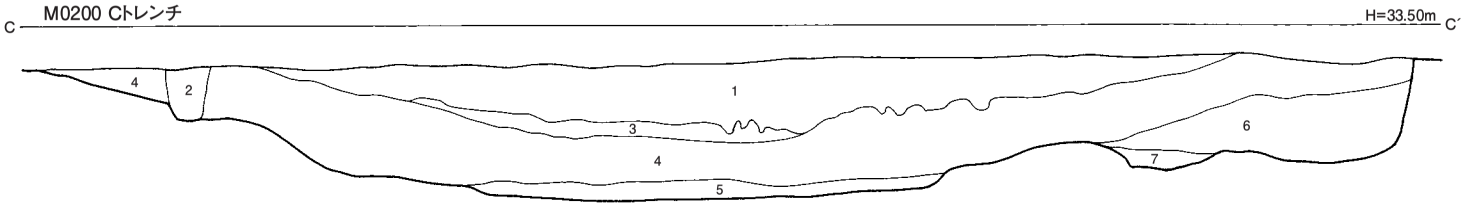


M0200Bトレンチ土層

1　黒色土
2　暗黄灰色砂まじり土（K0120墓壙）
3　黒色粘質土
4　褐色土（砂まじり）
5・6　4に黄色粘土がまじる
7　やや黄みをおびた褐色土
（砂が少なく粘質）
8　5と同じ

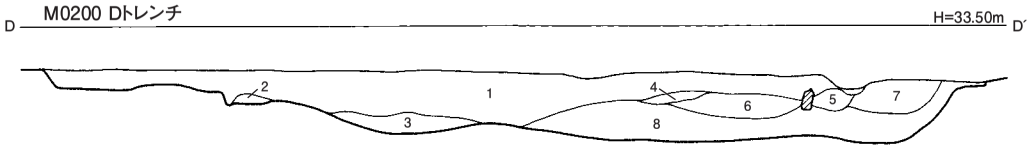
M0200Cトレンチ土層

1　黒色土
（土器片・礫多くまじる）
2　灰色砂質土（ピット）
3　明褐色粘質土
4　褐色土
5・6　淡褐色土
7　淡褐色粘質土



M0200Dトレンチ土層

1　暗褐色粘質土
2　黄褐色土
3・4　やや黄みをおびた暗褐色土
5　褐色粘質土
6・7　明黄褐色砂質土
8　暗褐色砂質土

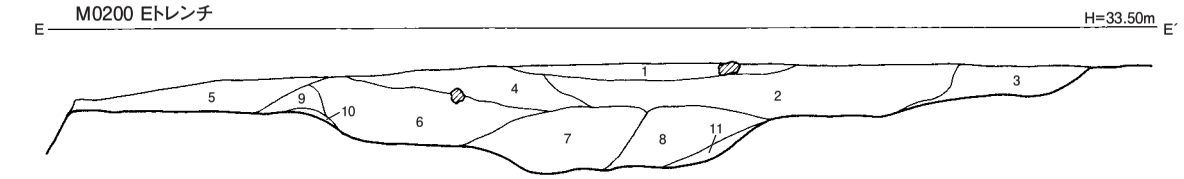


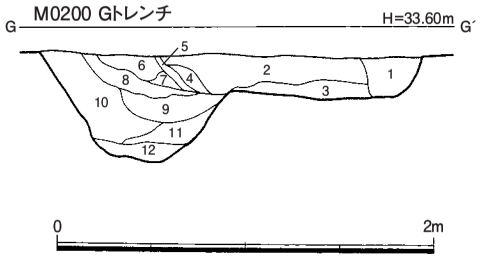
M0200Eトレンチ土層

1　黒褐色粘質土
2　やや暗い褐色粘質土
3　白みをおびた褐色砂質土
4　明褐色砂質土
5　暗褐色砂質土
6　褐色粘質土
7　やや暗い褐色粘質土
8・9　暗褐色粘質土
10　褐色砂質土
11　暗褐色砂質土

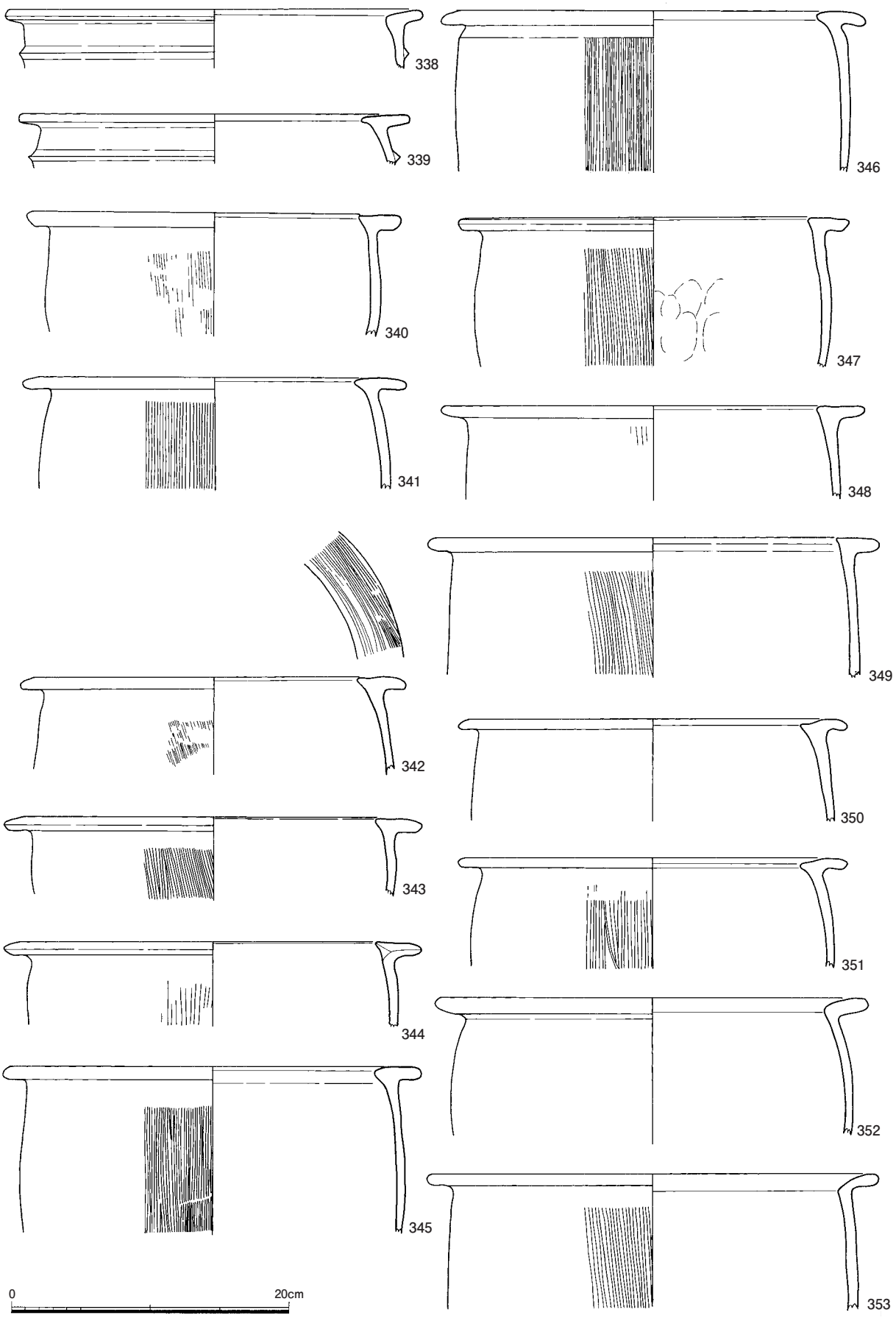
M0200Gトレンチ土層

1　黒褐色土（ピット）
2　褐色砂質土
3　やや明るい褐色土
4　褐色砂質土に黄色粘土ブロックまじる
5　灰褐色土
6　黄灰色砂質土
7　褐色砂質土
8　黒褐色砂質土
9　汚れた黄褐色砂質土
10　灰黒色砂質土
11　黒色土（やや粘質おびる）
12　灰褐色砂質土に黄褐色土がまじる

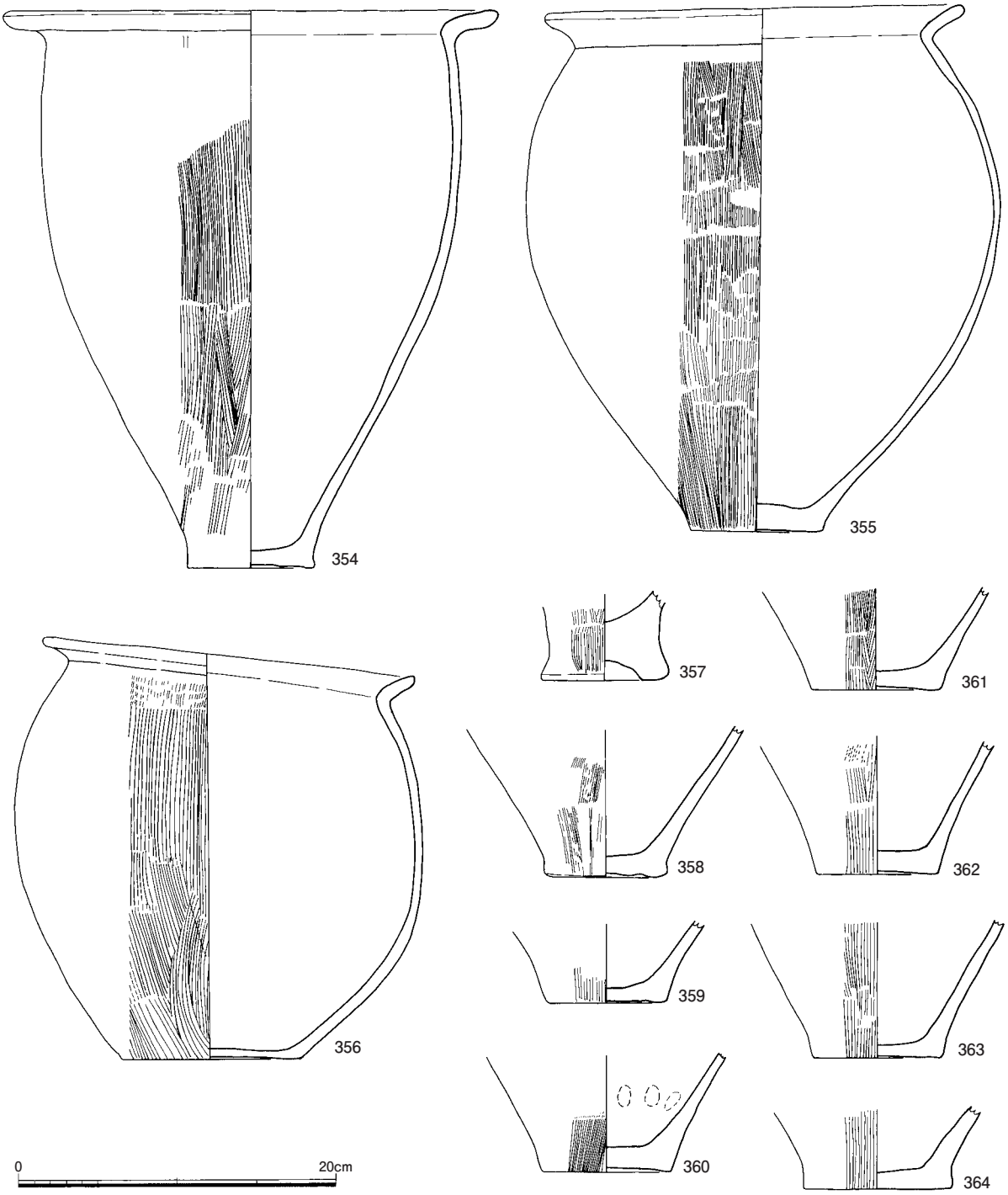




第118図　Ⅰ・Ⅱ区祭祀遺構土層実測図（縮尺1/40）



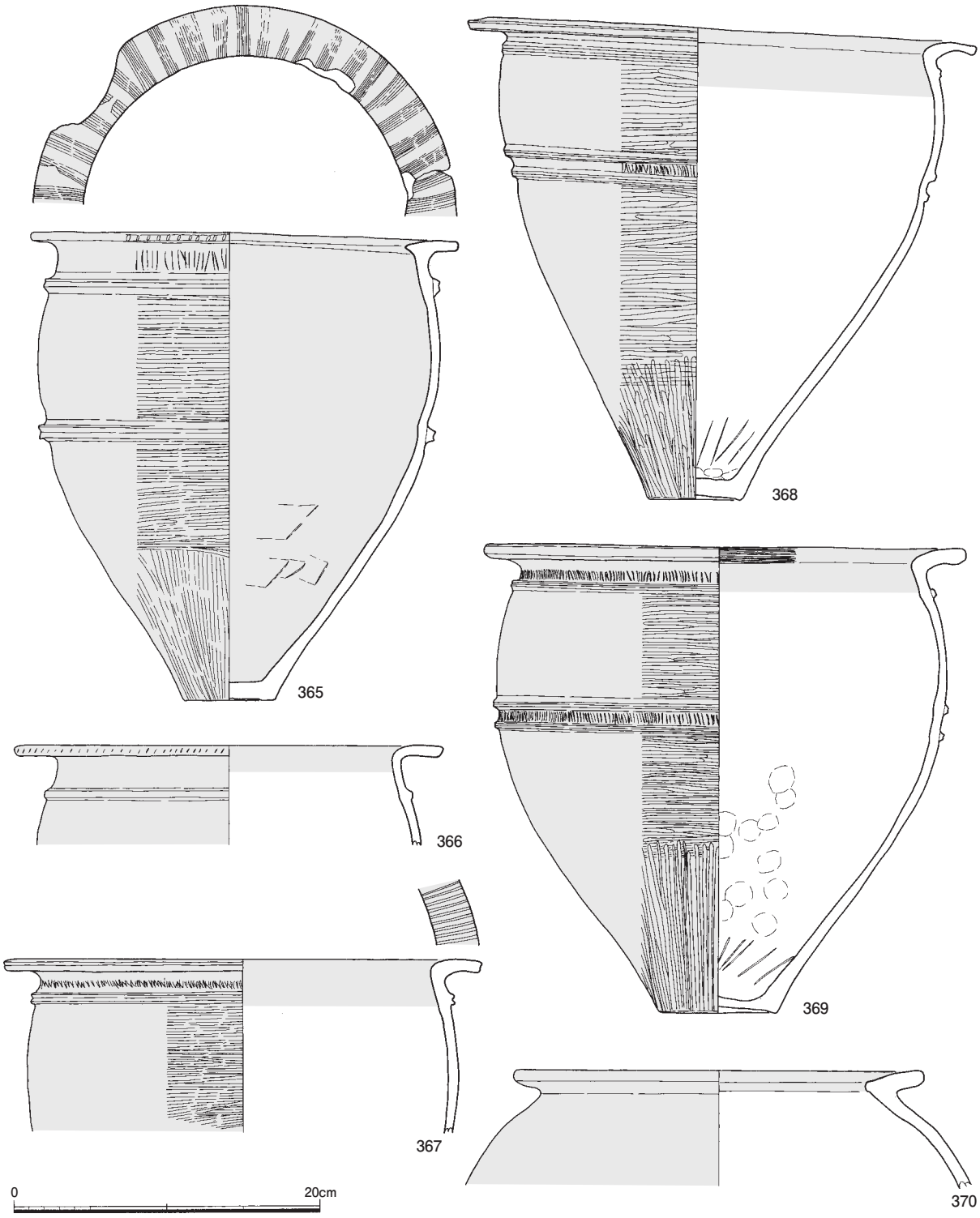
第119図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）



第120図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）

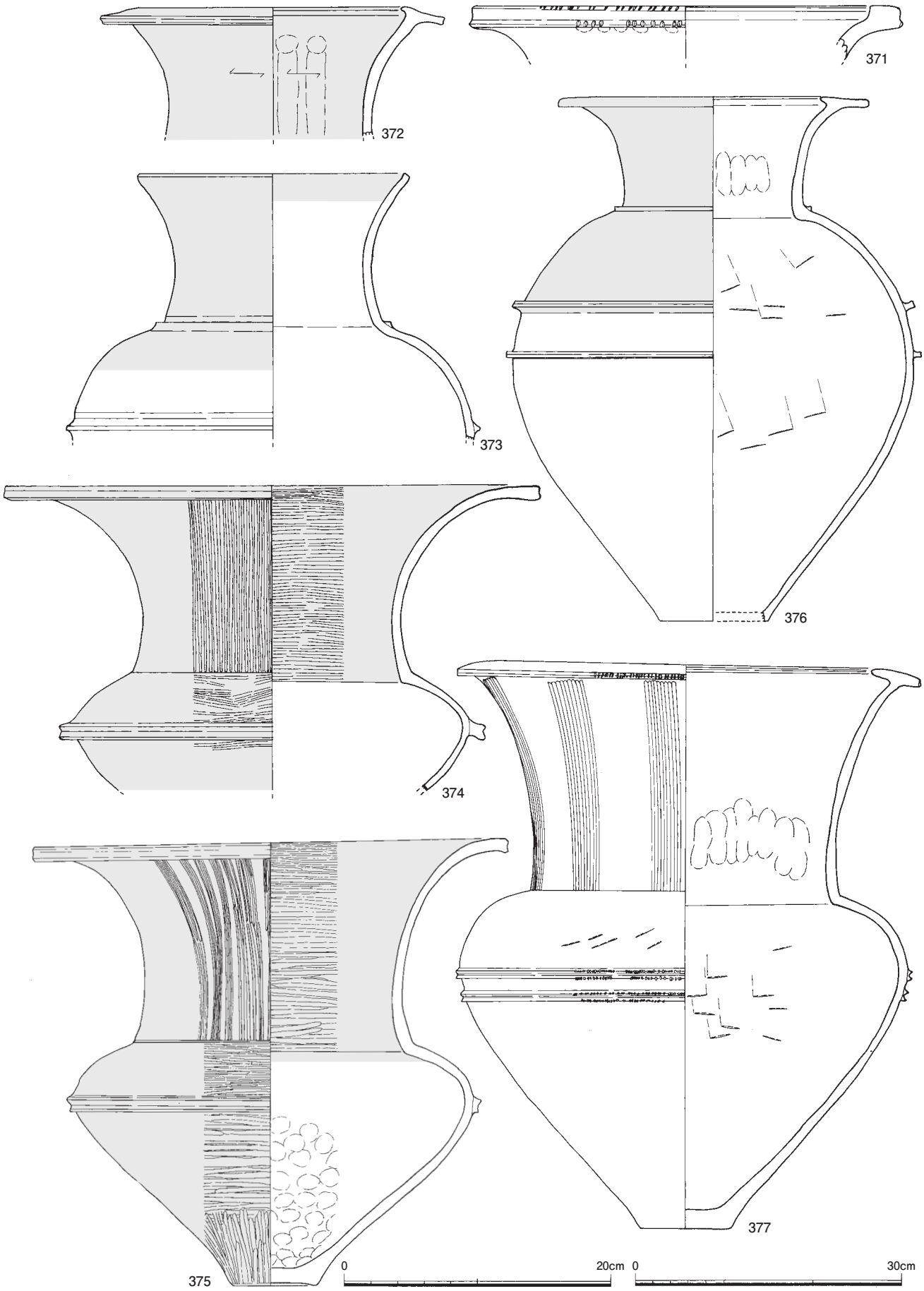
す。丹塗りはいずれも外面から内面口縁直下にまで行う。370は「く」の字状口縁をもち、胴部は大きく張る。残存部はナデ調整を行い、外面および口縁上面に丹塗りを施す。

371 ～ 386は壺および壺蓋である。371 ～ 377は広口壺で、鋤先状口縁をもつものと、朝顔状に開くだけの単口縁のものが主体である。**371**は端部を折り返したように肥厚させた口縁片で、口唇の上下端に貝殻復縁による刻目を施す。**372・376・377**は鋤先状口縁をもつ。372の口縁上面は外傾し、残存部は内外面とも丹塗りヘラ研磨を行う。376・377は器高が60㎝前後と大型になる。376は長めの胴部から口頸部が短めにひらき、口縁上面は平坦になる。しまった頸部付け根に三角形、胴部に間隔を

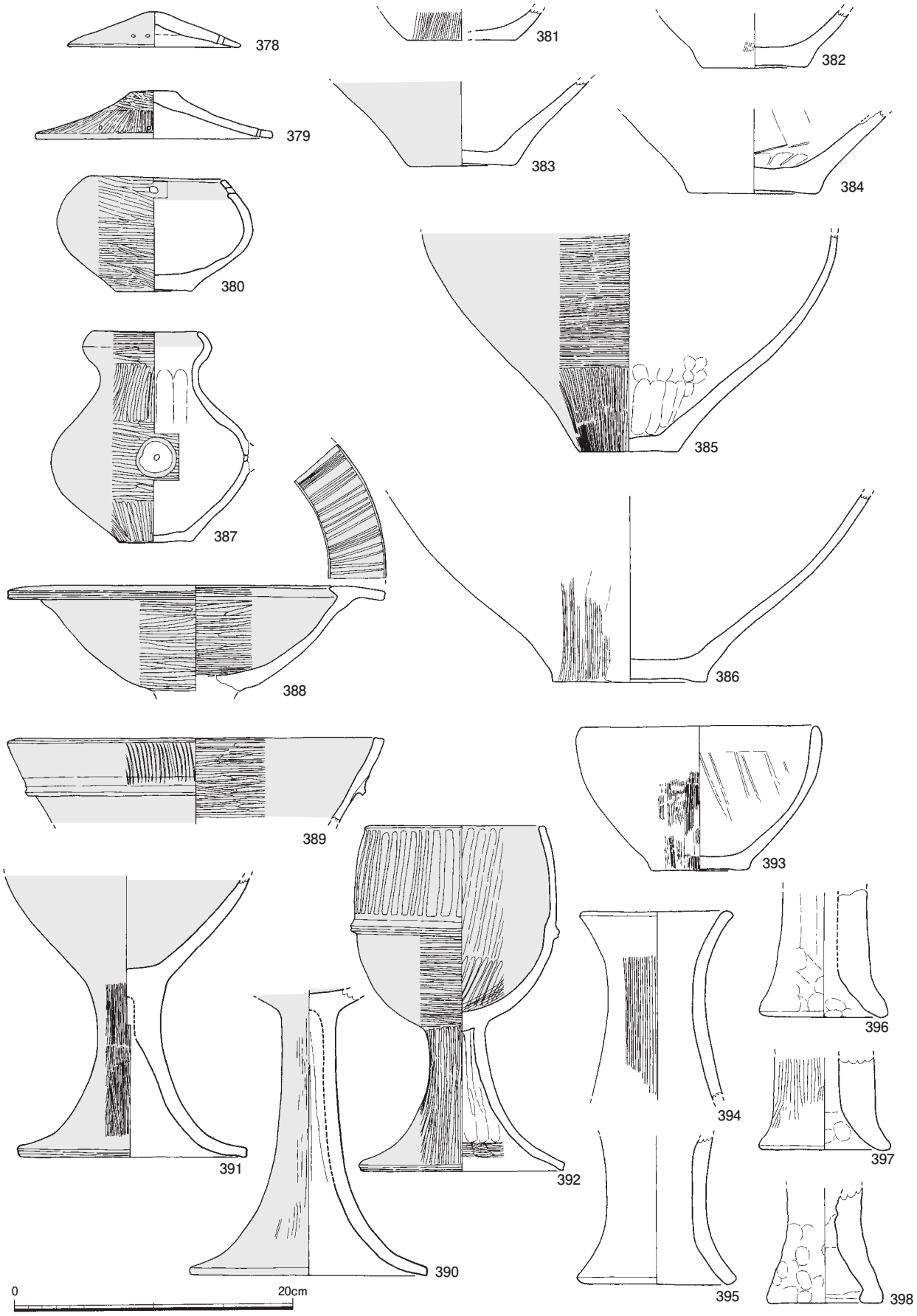


第121図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/4）

とって２条の高いM字状突帯をめぐらす。外面の口縁端から胴部の上の突帯までに丹塗りを施す。377は胴部上位が大きく張り、口頸部は長くひらき、口縁部が器の最大径となる。口縁は内側への張り出しが大きく、上面は外傾し、口唇には刻目を入れる。胴部には間隔をとって２条のM字状突帯をめぐらし、その突出部にはそれぞれ小さな刻目を入れる。頸部には９本一組の縦の暗文を等間隔で施す。**373～375**は単口縁をもつ。373は口頸部のひらきが小さいもので、頸部付け根に三角突帯、胴部に細い台



第122図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図４（縮尺1/4、1/6）



第123図　Ⅰ区祭祀遺構出土遺物実測図５（縮尺1/4）

形突帯をめぐらす。外面の口縁端から胴部上位と口縁内面に荒いタッチで丹塗りを施す。374・375は口縁を除いた器形は377とほぼ同じである。胴部には374が高く、375が低いM字状突帯をめぐらす。外面と口頸部内面は丹塗り研磨で仕上げる。この種の壺の口頸部内面は5～6分割してヘラ研磨を行うものが多い。頸部外面には374が縦の暗文を連続して、375が6本前後一組の暗文を等間隔に施す。**378・379**は無頸壺の蓋で口縁上に2個一組の紐掛け孔を対面の2ヶ所にもうける。378は天井部が尖り、379は平坦な天井部をもつ。378は摩滅が著しいが、ともに外面丹塗りヘラ研磨とみられる。**380**は無頸壺の口縁を欠いた器形をとる。扁球の胴部で底部は厚い。外面はヘラ研磨で、外面から内面上位まで丹塗りを施す。**381～386**は壺底部片。385は内湾気味に胴部が立ち上がる。382・383のような小型のものとそれ以外の中型のものがある。

387は注孔土器である。袋状口縁壺の胴部に注口を取り付けたもので、注口部は剥落して形態不明。外面は丹塗りヘラ研磨を行い、丹は口縁内面までおよぶ。**388～390**は高杯である。388は鋤先状口縁の浅い杯部をもち、口縁上面には放射状の暗文を不等間隔で施す。389の杯部は単口縁で、外面に三角突帯をめぐらす。ともに残存部は丹塗り研磨。390は脚部で細長い筒部から裾部がひらく。外面は刷毛目調整・丹塗りを行う。**391・392**はワイングラス状の器形をもつ。392は杯部中位にM字状突帯をめぐらせ、口縁はややすぼまる。脚部内側を除き丹塗りヘラ研磨で、口縁と突帯間に幅広の縦の暗文を連続的に施す。391は底部の丸みが小さく、脚部付け根も厚みがある。**393**は体部が半球形の鉢で、口縁は直立し端部は丸くおさめる。外面は刷毛目調整。**394～398**は器台片で、薄手のつくりと厚手のつくりがある。外面調整は刷毛目、ナデがあり、厚手には指押さえの痕が残る。

以上の土器は、338・344・356・357・381・387が北辺溝、373・384・389が西辺溝、375・377・380が南辺溝（6区除く）、ほかは東辺溝から出土したものである。

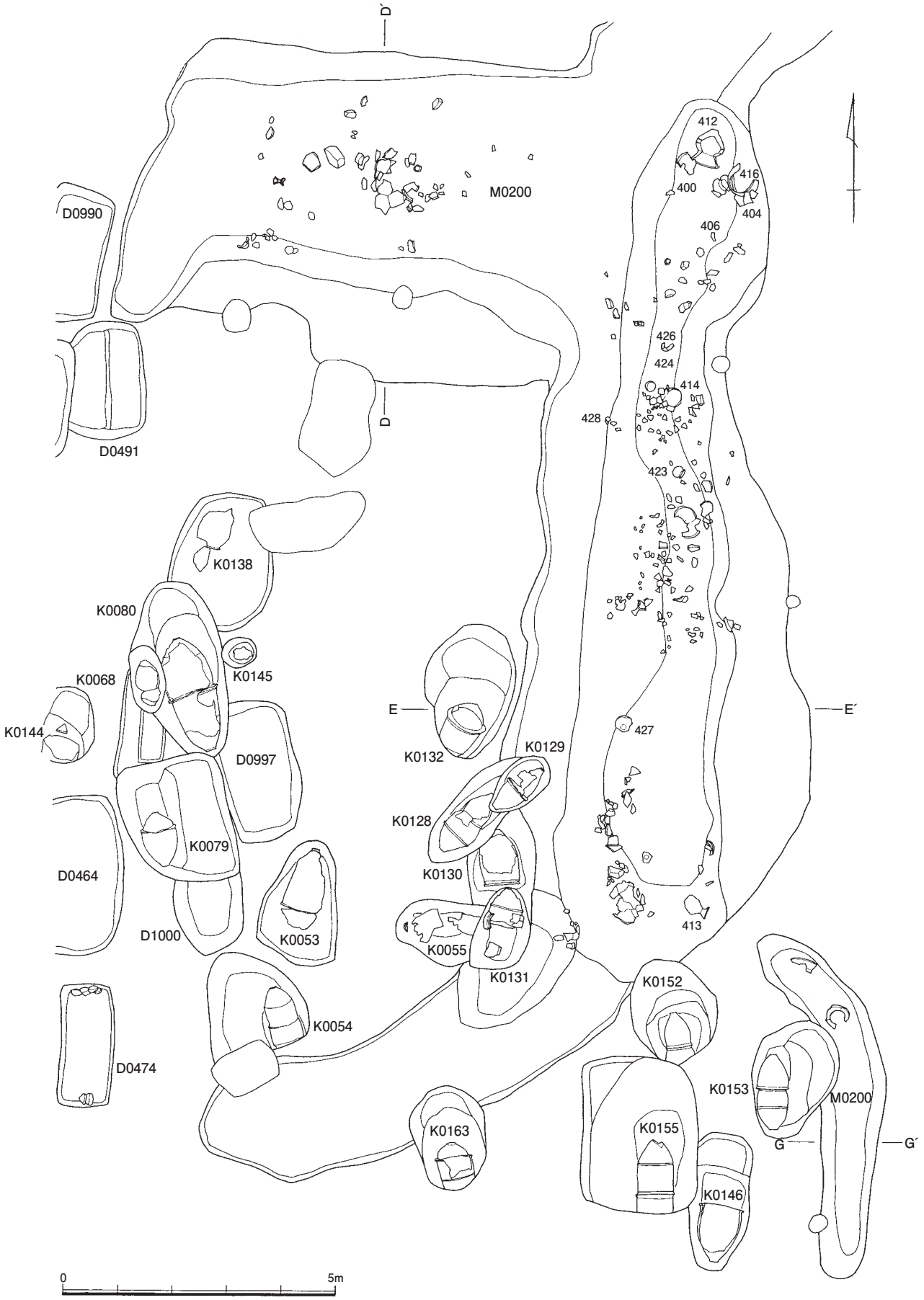
Ⅱ区祭祀遺構（第118・124図、図版2）

Y－27区を中心にコの字状に北・東・南辺の連続する溝で墓域を区画する。西側には区画を示す遺構はみられない。しかし北辺溝の西端部が鉤状に南に折れていることから、これを西の境とすれば、溝内側で南北13.5ｍ、東西7.9ｍの長方形状の区画が想定できる。この中には14基の甕棺墓と3基の木棺墓・土壙墓が築かれている。

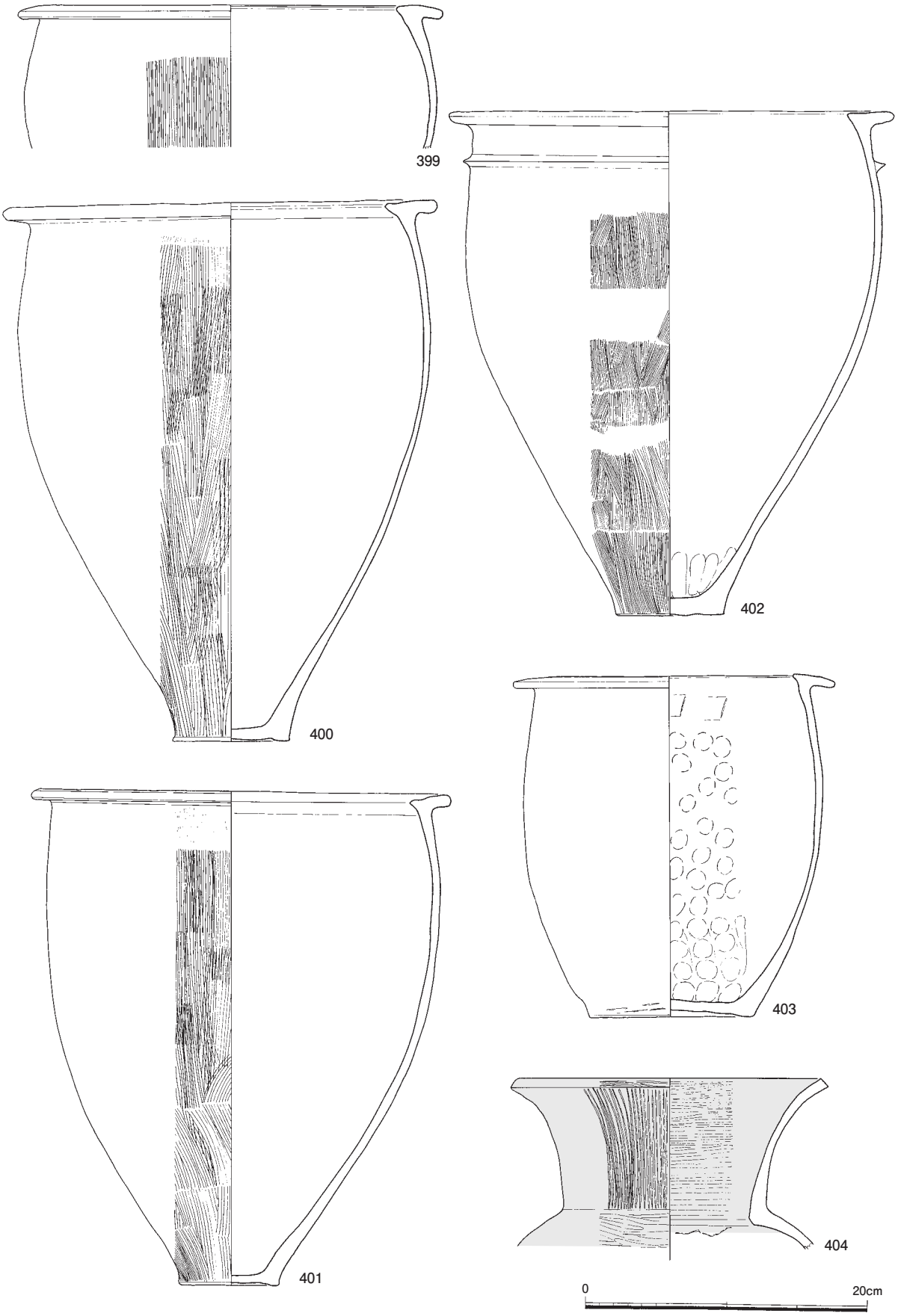
北辺溝はⅠ区ですでにふれたが、Ⅱ区内側でみると西に4.5ｍ延び、北側にやや広がり、西端部はやや西南側に曲がる。最大幅は東側にあり、6.0ｍ。東辺溝はⅠ区の東辺溝の延長線上にあり、東北隅部分で東西幅3.2ｍ、南に向かい幅が広がり、Ｅトレンチのすぐ南で5.7ｍをはかる。溝の内外縁とも多少の出入りがある。溝内底面には外縁に沿うようにⅠ区東南部（6区）から一段深い溝状掘り込みが続き、南端で立ち上がる。この一段深い溝の中で祭祀土器などの遺物が出土しており、6区の遺物はⅡ区に含めて述べる。Ｅトレンチでの最深部は65㎝。覆土は溝の東側から埋まっていく堆積状況を示している。南辺溝は東辺溝から南西方向に緩やかに開く。幅は2.2ｍ、深さは10㎝と浅い。南東隅の底面には長さ2.9ｍ深さ10㎝の楕円形状の掘り込みがある。この東南隅部分で、K 0055、K 0128、K 0129、K 0130、K 0131が溝を切って築かれている。また南辺溝をK 0163が切る。

出土遺物（第125～129図、図版64～66）

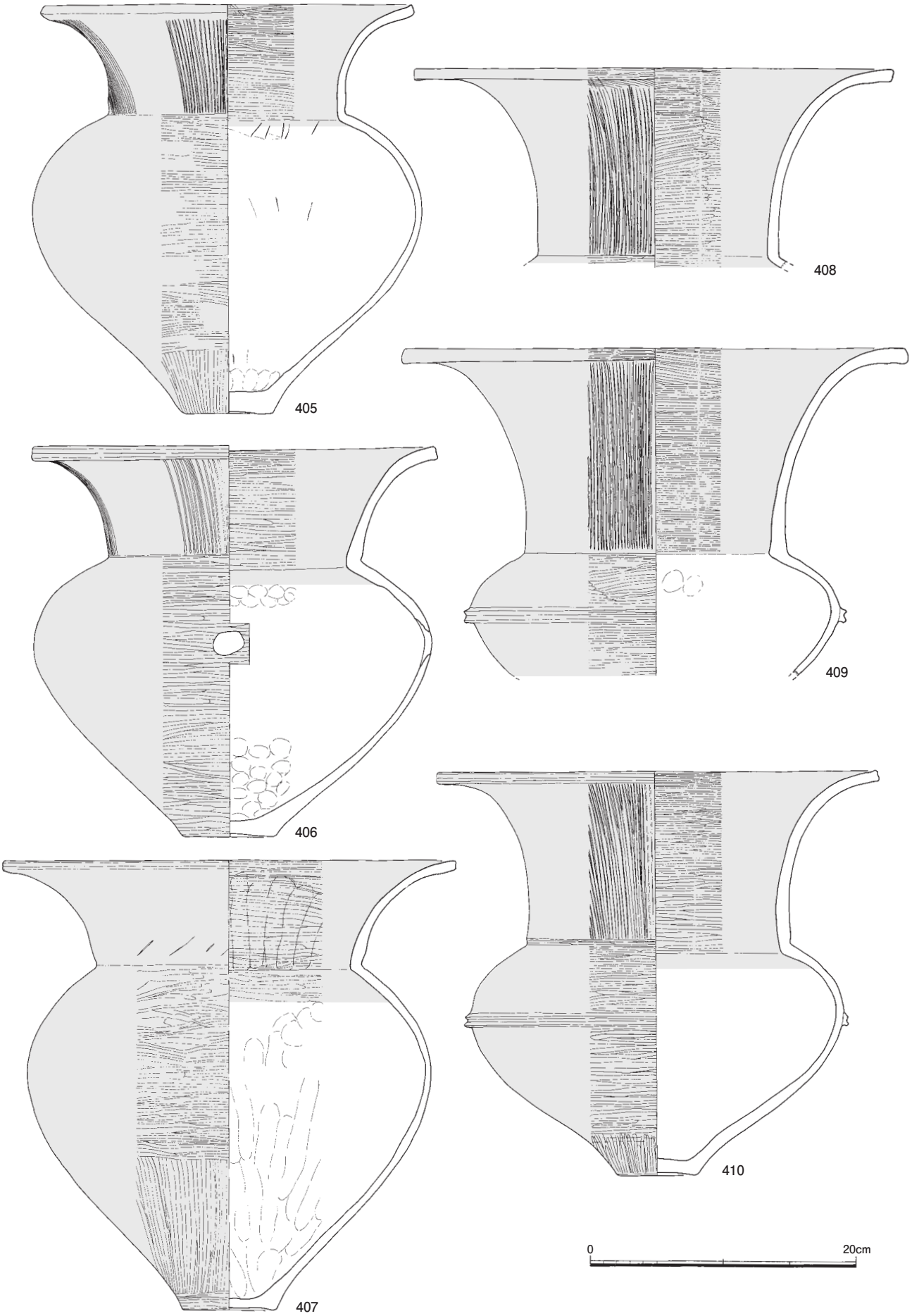
399～403は甕である。**399～402**は逆Ｌ字状口縁をもつもので、口縁上面は399が外傾気味、他は内傾気味で、400は内側への張り出しが大きい。402は口縁下に三角突帯をめぐらす。いずれも胴部は上位でわずかな張りをみせ、底部はほぼ平底となる。外面はおおむね刷毛目調整、内面はナデで仕上げる。いずれも外面に煤が付着する。**403**の口縁形態は399とほぼ変わらないが、胴部から底部へのし



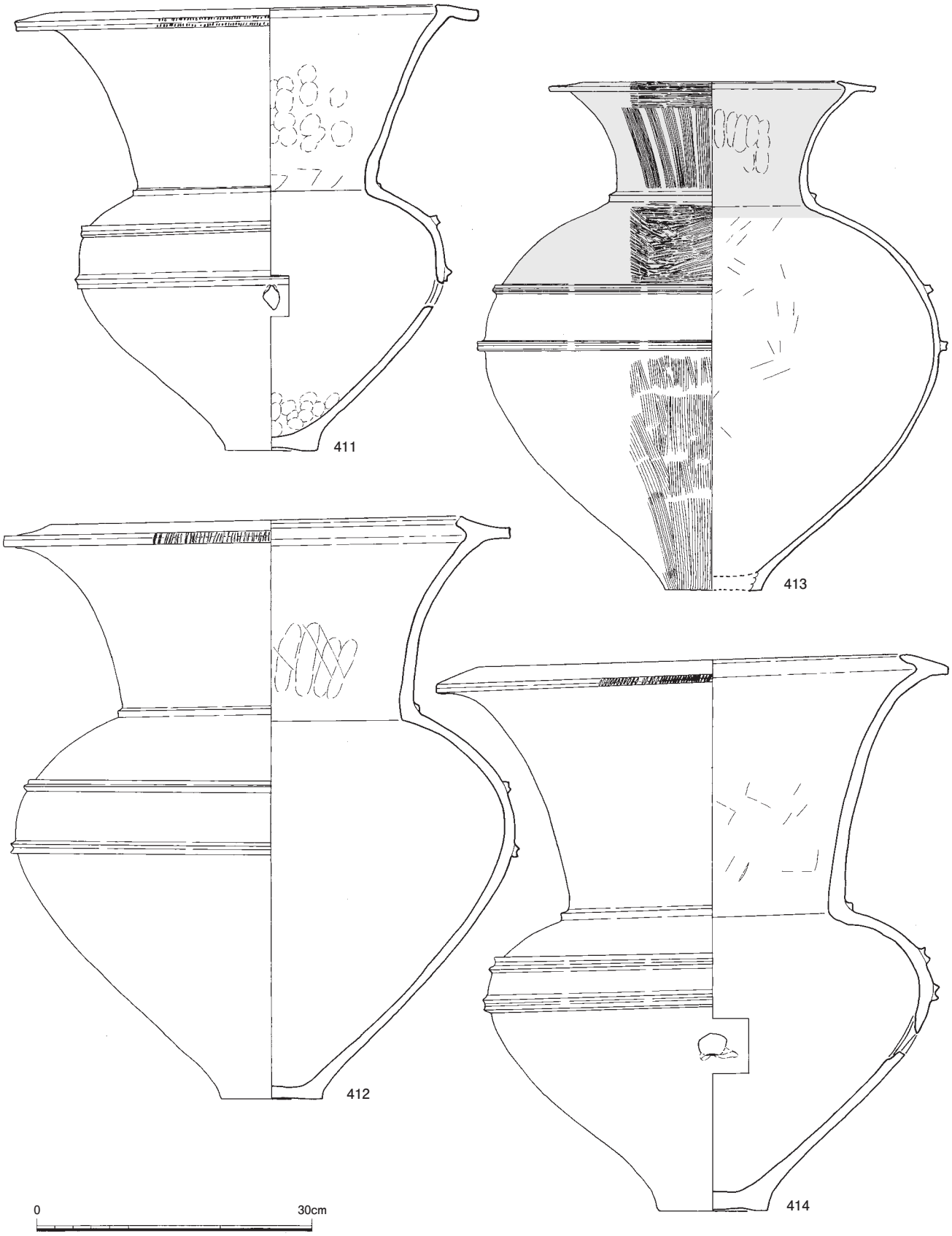
第124図　Ⅱ区祭祀遺構実測図（縮尺1/100）



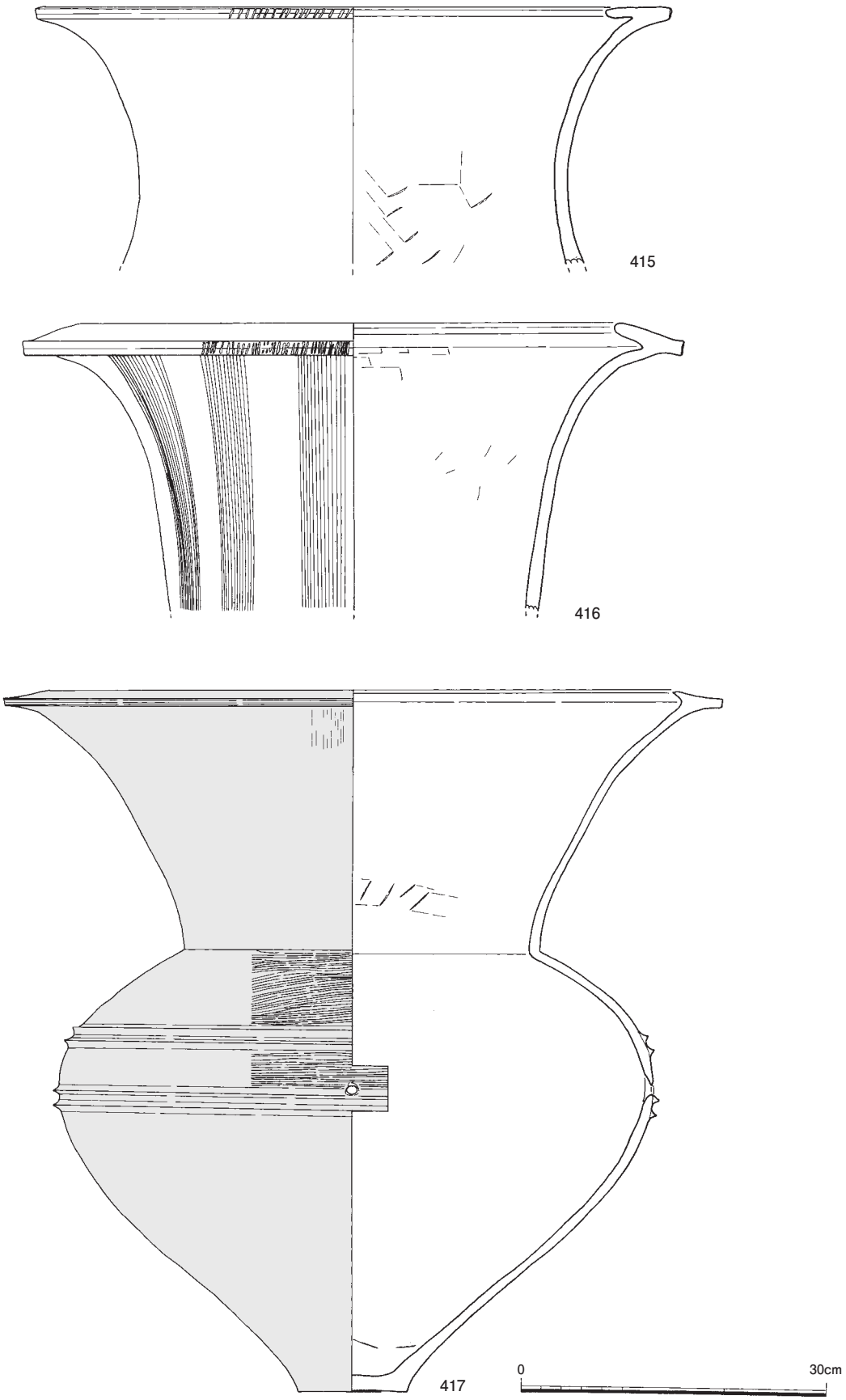
第125図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）



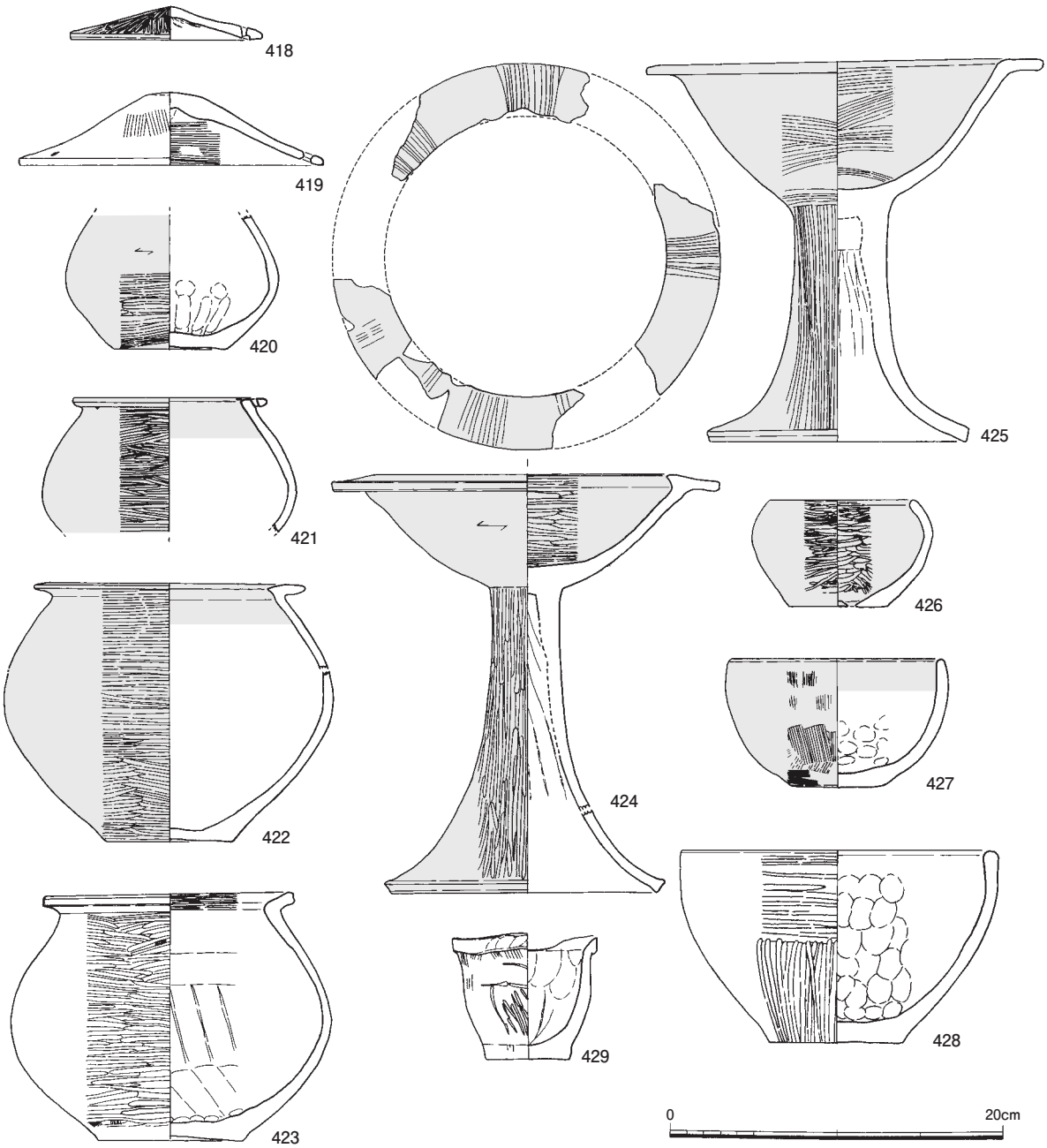
第126図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）



第127図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/6）



第128図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図４（縮尺1/6）



第129図　Ⅱ区祭祀遺構出土遺物実測図5（縮尺1/4）

まりがなく、樽状の形態となる。底部はわずかに上げ底。外面はナデ、内面は指押さえの痕が残る。淡赤褐色を呈し、煤などの付着はない。

404 ～ 423は壺および壺蓋である。404 ～ 414は広口壺で、このうち**404 ～ 410**は口頸部が朝顔状にひらき端部をそのままおさめる単口縁のものである。404は口頸部破片で、口縁のひらきは小さい。405 ～ 410は似たような器形であるが、405 ～ 407は胴部が上位で張り、口頸部は大きく開く。これに対し408 ～ 410は扁球形の胴部から口頸部がさらに長く、また大きくひらき、胴最大径部位にはM字状突帯をめぐらす（408は不明）。405を除くと器の最大径は口縁部にある。器面調整はいずれも胴部外面と口頸部内面はヘラ研磨を行い、407を除いた頸部外面には405が16本一組、406が12本前後を一組とした縦の暗文を等間隔に、ほかは縦の暗文を連続的に施す。丹塗りは外面および口頸部内面に行

われるが、胴部内面にも垂下している。407の頸部外面は板ナデで仕上げる。406の胴中位には穿孔をもうける。**411 ～ 417**は鋤先状口縁をもち、器高が50㎝を越える大型品である。413は球形の胴部から口頸部が短く開くもので、口縁上面は外傾する。しまった頸部付け根に三角形、胴部に間隔をとって2条のM字状突帯をめぐらす。外面の胴部上位にはヘラ研磨、下位には刷毛目調整を行い、頸部には7～17本一組の縦の暗文を等間隔に施す。外面の口縁端から胴部の上の突帯まで丹塗りを行う。全体に薄手のつくりで、胴の張りは異なるが形態・胎土・色調などⅠ区の376と似る。411・412・414 ～ 417は胴部上位が大きく張り、口頸部が長くひらく。口縁上面は415が平坦、ほかは外傾し、411をのぞき内側への張り出しが大きい。411は口唇部上下端に、412・414・415・416は口唇部全体に刻目を入れる。412・414の頸部付け根には三角突帯、415・416を除いた胴最大径部分とその上に間隔をとって2条のM字状突帯をめぐらす（417は2本一組の三角突帯を上下にめぐらす）。内外面ともナデ調整で仕上げるものが多いが、417の胴部はヘラ研磨を行い、416の頸部外面には16本前後を一組とした縦の暗文を等間隔に施す。417の外面は丹塗り、414は口頸部内外面と胴部上位に黒塗り、また411・415の外面にも黒塗りの痕跡がうかがわれる。411・414・417の胴部には穿孔をもうける。418 ～ 423は無頸壺とその蓋である。**418・419**は無頸壺の蓋で口縁上に2個一組の紐掛け孔を対面の2ヶ所にもうける。418は小振りで天井部が尖り、419は平坦気味である。418の外面は丹塗りヘラ研磨、419は内外面ともほぼ刷毛目で仕上げる。**420 ～ 423**の無頸壺は口縁部の上面が平坦になる421・422と、「く」の字状に屈曲する423がある。421は口縁上面に紐掛け孔をもうけるが、422・423にはない。いずれも外面はヘラ研磨、内面はナデで仕上げる。423を除き外面から口縁部内側まで丹塗りを施し、421・422は胴部内面まで丹が垂下する。423は淡赤褐色を呈する。

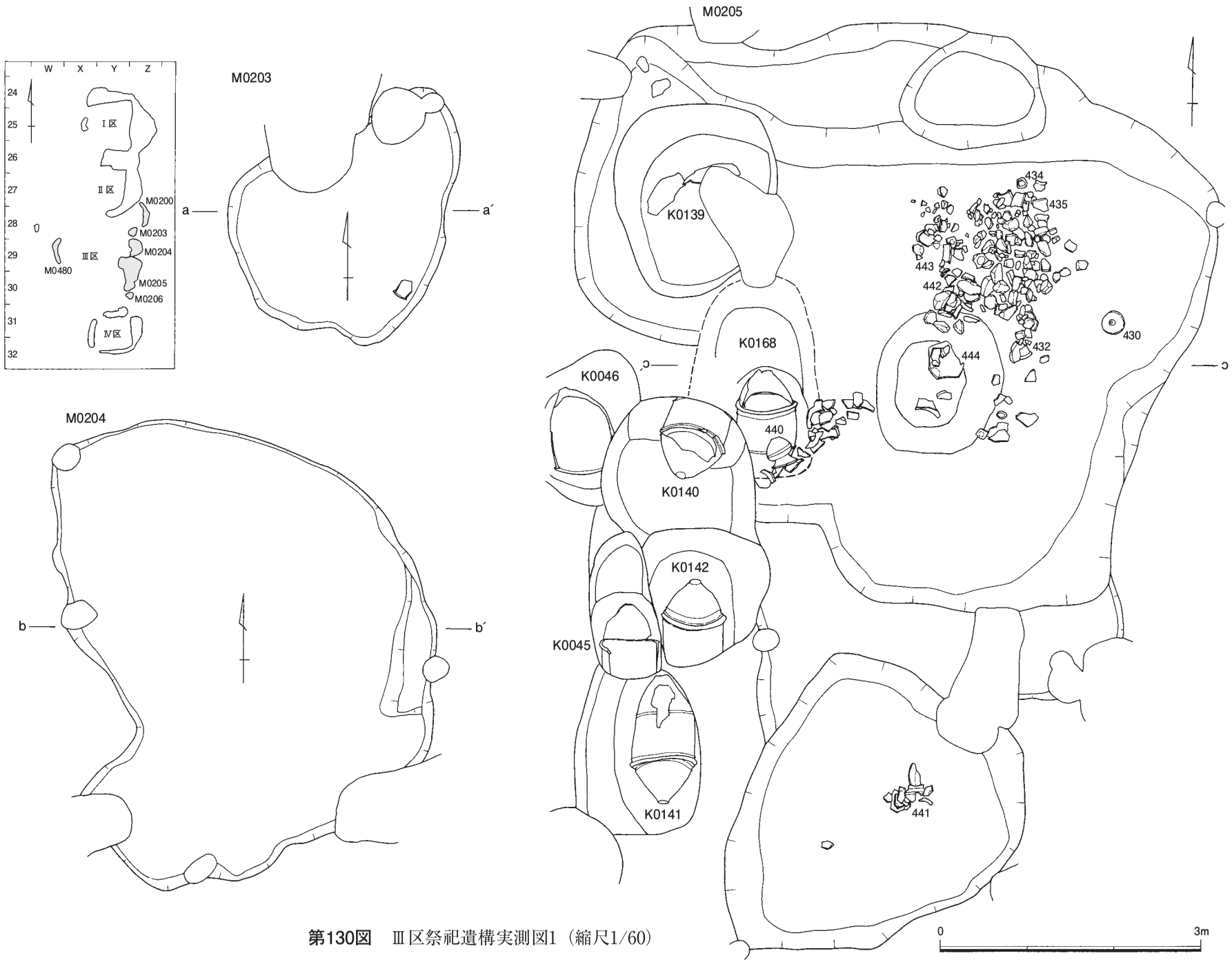
424・425は高杯である。424は杯部が浅く、鋤先状口縁となる。脚部は細身で高い。425は杯部がやや深く、口縁は外に引き出す。脚部はやや太めで424に較べ低い。ともに杯部と脚部外面はヘラ研磨で、脚部内面を除き丹塗り。424の口縁上面には10 ～ 14本一組の放射状線文を等間隔に施す。**426 ～ 429**は鉢。426は口縁が内湾して丸くおさめるもので、内外面とも丹塗りヘラ研磨を行う。427・428は体部が半球形状で、口縁は直立する。427の外面は刷毛目、428はヘラ研磨、内面はともに指押さえナデで仕上げる。429は口縁がわずかに外反し、外面が折り返されて平坦面をつくる。外面は刷毛目ののちヘラ研磨、内面は指押さえを行う。淡赤褐色から明黄褐色を呈する。

以上の土器は400・404 ～ 407・412・416・419・420・424・426・429が北辺溝の16区から、399・401 ～ 403・408・409・410・411・413・414・415・417・418・421・422・423・425・427・428が 東辺溝から出土した。南辺溝からの出土遺物で実測したものはない。

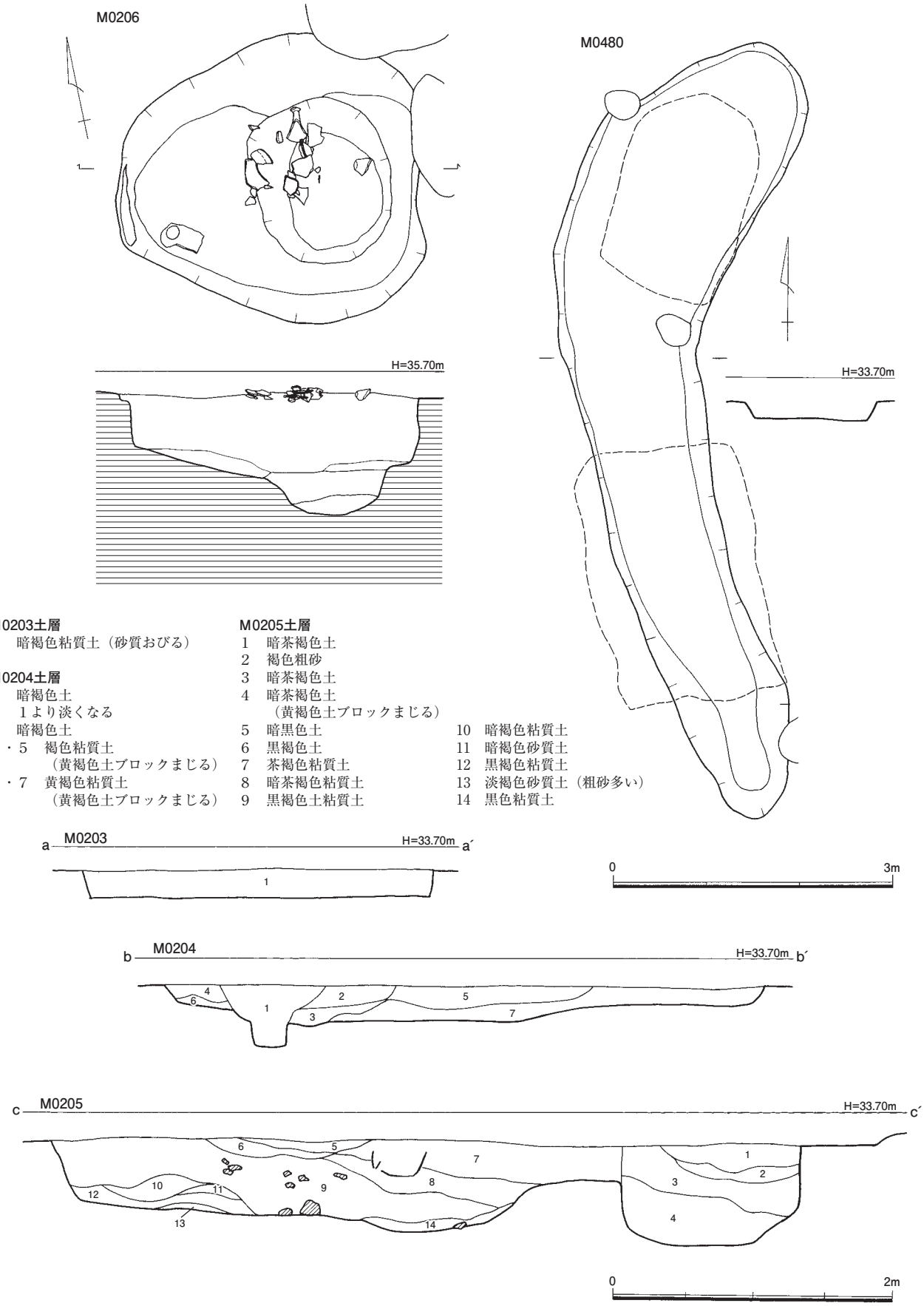
Ⅲ区祭祀遺構（第118・125・126・130・131図、図版3・35・36）

X－29区、D 0957のやや東あたりを中心に、南北約29ｍ、東西約25ｍの範囲の墓域を、東西両側で溝や土坑によって断続的に囲む。北側はⅡ区の南辺溝、北はⅣ区の北辺溝によって限られる。ほかの区と違い、造墓をはじめる段階で区画をもうけたのではなく、すでにあった墓域の境に溝や土坑を掘り、祭祀をおこなったものと考えられる。

東辺の遺構を北からみていくと、Ⅱ区の東南隅から0.6ｍ離れM 0200（14・15区）溝がある（第124図）。南北長6.5ｍ、幅1.1ｍ。北側はⅡ区の東南隅に向かい屈曲するが、南側はほぼ南北にはしる。第118図にGトレンチの土層を示したが、断面U字状を呈し、深さは56㎝をはかる。北側（14区）の上部から祭祀土器が出土した。K 0145の墓壙が切っている。この溝の西南2.7ｍにM 0203が位置する（第130図）。南北2.9ｍ、幅2.5ｍの丸みをおびた不整形の土坑で、深さは20㎝前後、底面は比較的平坦で



第130図　Ⅲ区祭祀遺構実測図1（縮尺1/60）



第131図　Ⅲ区祭祀遺構実測図２及び土層実測図（縮尺1/40、1/60）

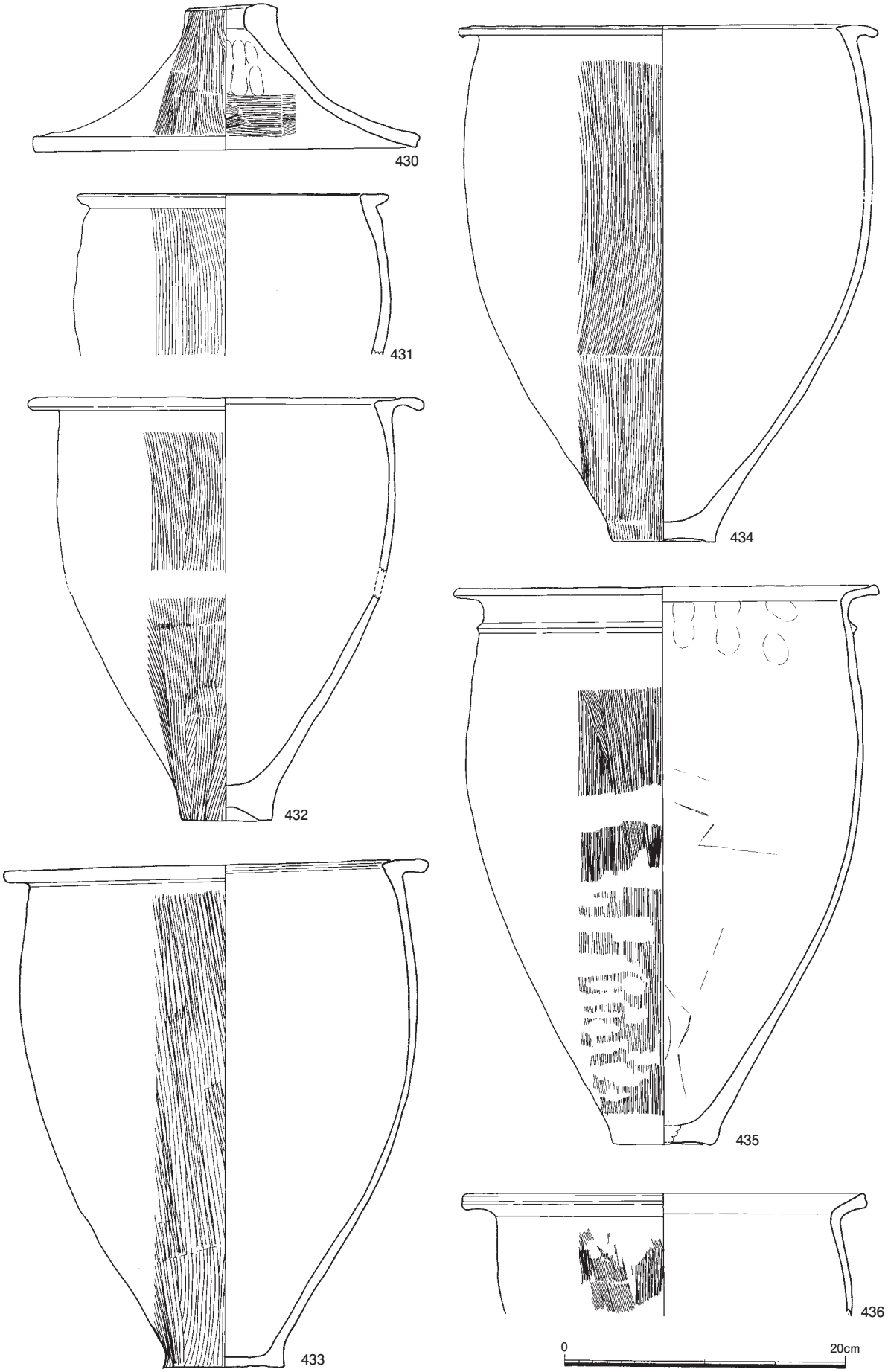
ある。覆土は1層である。北側をK 0154が切る。M 0203の0.8 m南側にM 0204がある（第130図）。西側が丸く張った勾玉状ともみえる土坑で、南北長5.4 m、南北幅4.4 mをはかる。深さは25㎝前後、底面は凹凸が著しい。覆土は分層したが、大きな違いはない（第131図）。M0205はM 0204の南に接して続く（第130図）。南北の不整形土坑とそれをつなぐ浅い土坑からなり、北側の土坑を南北に分け北から1・2区、接続部分を3区、南側土坑を4区として調査した。全体の南北長10.6 m、幅は1区で7.4 m、3区で4.7 m、4区で3.4 mをはかる。1区は西側が墓域内に突出する。この部分にK 0139があるが、この土坑で破壊され、ほとんど原形をとどめない。北側壁下の深さ25㎝前後に幅0.8 m前後の平坦面をつくり、さらに20㎝ほど下がって凹凸の著しい底面となる。1・2区境の底面には長さ1.7 m、幅1.5 mの楕円形の掘り込みがあり、やはり底面は凹凸が激しい。1区の土層は131図に示したが、覆土は土坑東側から堆積した状況がうかがわれる。遺物はおもに9層中から礫とまじって出土した。3区は深さ10 ～ 15㎝。4区は深さ15 ～ 30㎝、底面には凹凸がある。遺物は上面近くから出土した。K 0168は土層図からもわかるように明らかにこの土坑を切っているが、K 0140、K 0142との切り合いは明確にできなかった。M 0206はM 0205・3区の0.5 m南に位置する（第131図）。東西2.20 m、南北2.17 mの西側が狭くなった不整円形状を呈する。深さ50㎝前後で平坦面となり、その西側を長さ1.20 m、幅0.95 mの楕円形に掘り込む。検出面からの底面までの深さ87㎝。覆土は褐色～暗褐色粘質土を主とする。遺物は遺構上面付近から出土した。

西辺の遺構はⅢ区西側中央のW－29区に位置するM 0480 である（第131図）。西側が張った弓状の溝で、南北長は8.3 m、幅は最大で1.9 mをはかる。溝中央部分での深さは30㎝程度であるが、D 0487部分では60㎝ほど掘り下げている。このD 0487のほかK 0093・0094・0164を切る。甕・壺など中期前半とみられる遺物が出土した。

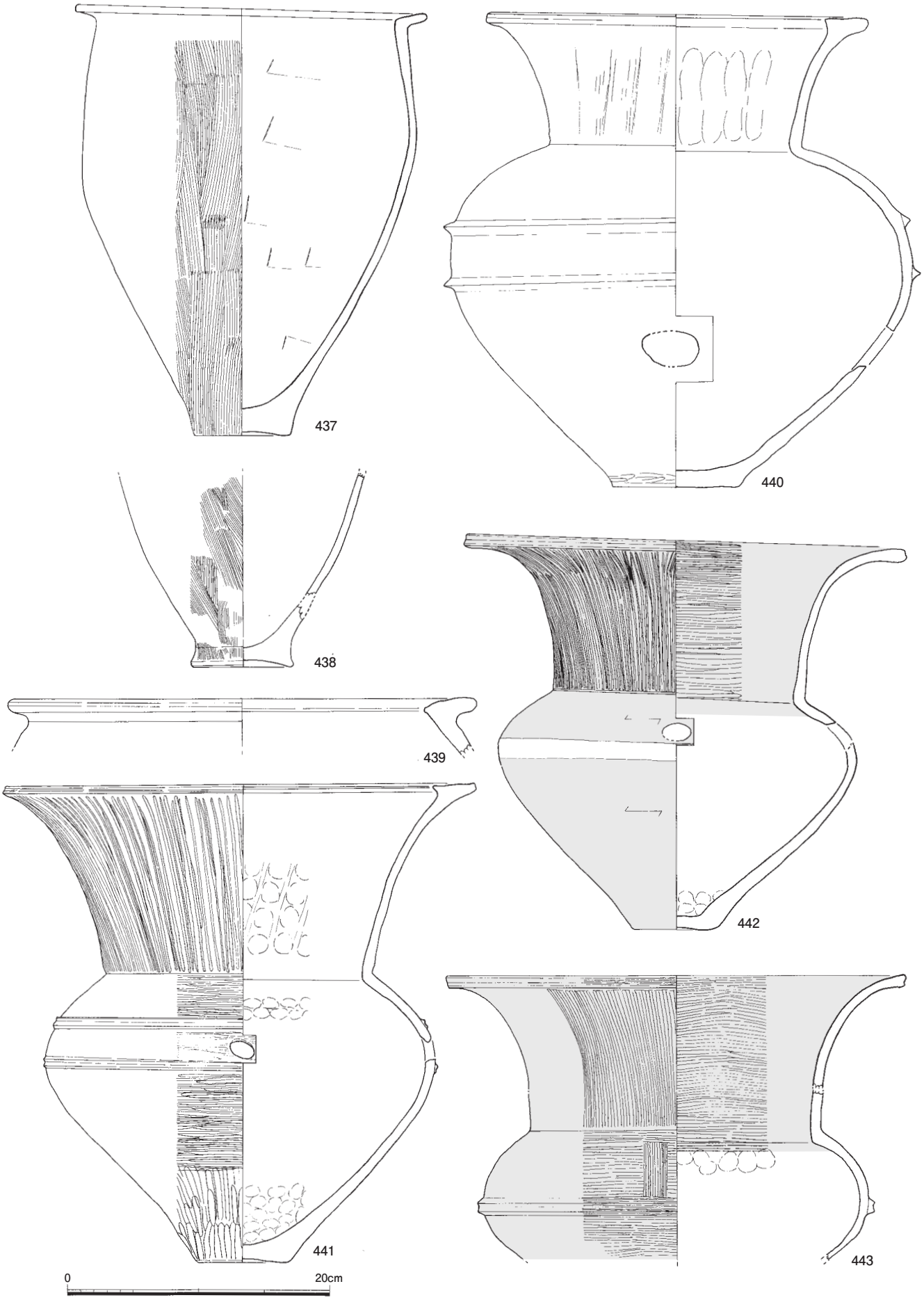
出土遺物（第132 ～ 134図、図版66 ～ 68）

430 ～ 439は甕および甕蓋である。**430**は厚みのある甕蓋で、平坦な天井部に孔をもうける。外面と内面下半には刷毛目調整を行う。内面には煤により甕との接合部分が円形状に残る。**431**は断面が三角形状の口縁をもち、胴部はやや張りをみせる。**432 ～ 435・437**は逆L字状口縁をもつ。口縁上面の傾きはそれぞれ異なり、また432は厚みのある上げ底となる。435は口縁内面が丸みをおびて外反し、口縁下には三角突帯をめぐらす。437は口縁をほぼ直角に外側に引き出す。底部は厚みをもちわずかに上げ底となる。**436・439**は「く」の字状口縁をもつ破片で、436の胴部はゆがみがあり、439は、胴部が丸みもつ甕になるとみられる。**438**は台形状に張り、上げ底となる底部片である。以上の甕はおおむね外面が刷毛目調整、内面が板ナデもしくは指ナデで仕上げ、外面には煤が付着する。

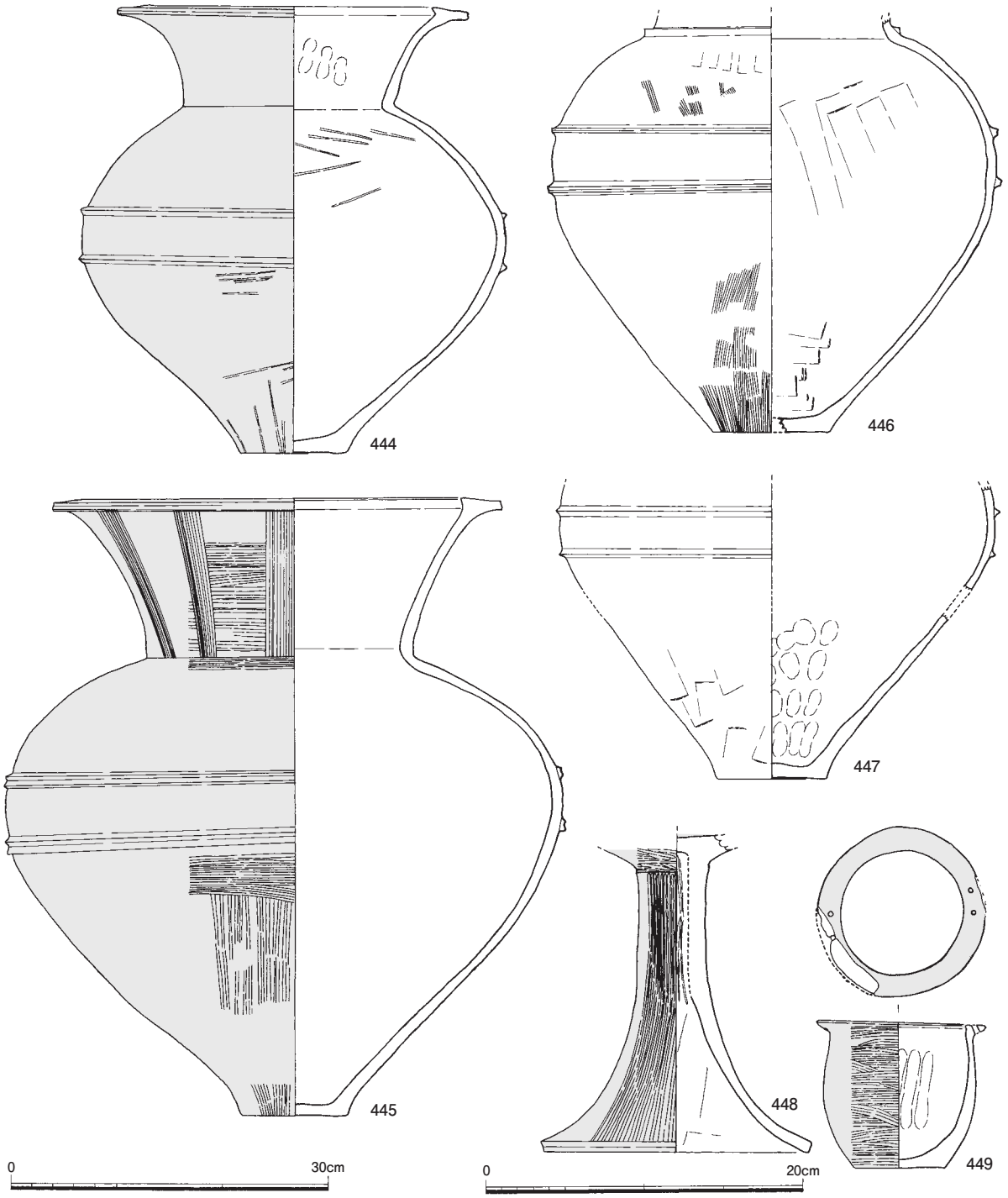
440 ～ 447は広口壺である。**440・441・444・445**は鋤先状口縁をもつ。うち440は大きく張る胴部をもち、口頸部は短めに開き、口縁上面はほぼ平坦となる。胴部中位に間隔をおいて三角突帯2条をめぐらす。頸部内面を指ナデ、ほかは板状工具によるナデで仕上げ、頸部内面から外面にかけて黒塗りを施す。底部下位には穿孔をもうける。441は上位に最大径をもつ胴部から頸部が長くひらき、口縁上面は内傾気味となる。胴部には間隔をおいてM字状突帯2条をめぐらす。底部はしまり、やや厚みをもった上げ底となる。胴部外面はヘラ研磨を行い、頸部には縦の暗文を連続して施す。内面は指押さえナデ。外面は黒塗りを施している。444・445は鋤先状口縁をもつ中・大型品で、形態的には440に近い。胴部はともに張り、444は最大径をほぼ中位、445が上位にとる。頸部は胴部からみて短くひらき、口縁上面は外傾する。胴部には444が三角突帯2条、445がM字状突帯2条をそれぞれ間隔をとってめぐらす。444の胴部外面はヘラ研磨とみられるが明瞭さを欠く。また外面全体に丹塗りで暗褐色を発する。445の外面は丹塗りヘラ研磨で、頸部には7 ～ 8本一組の縦の暗文を等間隔に施す。内面は



第132図　Ⅲ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）



第133図　Ⅲ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）



第134図　Ⅲ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/4、1/6）

ともにナデで仕上げる。**442・443**は単口縁の広口壺で、胴部は最大径を上位にもち、口頸部は長く、大きくひらく。ともに胴部に１条の突帯（443はM字状、442は剥落し形状不明）をめぐらす。胴部外面と頸部内面はヘラ研磨を行い、頸部外面には縦の暗文を連続して施す。くわえて443の胴部上位には、ヘラによる12本前後一組の縦の平行線文を等間隔に入れる。ともに外面から内面頸部下まで丹塗り。**446・447**は口頸部を欠くが大型の広口壺とみられる。446は胴部が球形状に大きく張り、頸部付け根に三角突帯、胴部に間隔をおいて台形状突帯を２条めぐらす。外面は刷毛目調整で、黒塗りを施す。447は胴部に間隔をおいて三角突帯を２条めぐらす。外面調整は板ナデ。

448は高杯である。杯部を欠くが細身で長い脚部をもつ。脚部外面と杯部外底にはヘラ研磨が行われる。外面および杯部内面には丹塗りを施す。**449**は樽形の鉢である。口縁は外に短く引き出し、上面に2個一組の孔を一対もうける。外面はヘラ研磨で、口縁上面まで丹塗りを施す。

以上の土器は431がM 0203、443・447・448がM 0206、ほかはM 0205からの出土である。

Ⅳ区祭祀遺構（南区画）（第135～136図、図版4・36）

Y－31区を中心に東・南辺の連続する溝と北辺および西辺の溝で方形区画を造り出し、その中に溝を切るものもあわせ甕棺墓14基と土坑墓2基が築かれている。各辺はほぼ東西南北にあたり、溝内側は南北10.0 m、東西11.5 mの東西に長い長方形を呈する。溝外側では最大で南北14 m、東西16 mの規模となる。

北辺は東側の土坑（M 0495）と西側の溝（M 0496）が接続したもので、当初は形態の違いから別遺構かとも考えたが、明確な切り合い関係は確認できなかった。東西長7.0 m、溝部分で幅1.75 m、土坑部分で南北幅3.1 mをはかる。溝部分は北から南側に平坦部や段がつき底面までの深さ20㎝前後、東に向かい下がり、土坑部分の深さは45㎝。土坑部分の中位から壺が出土した（第137図）。

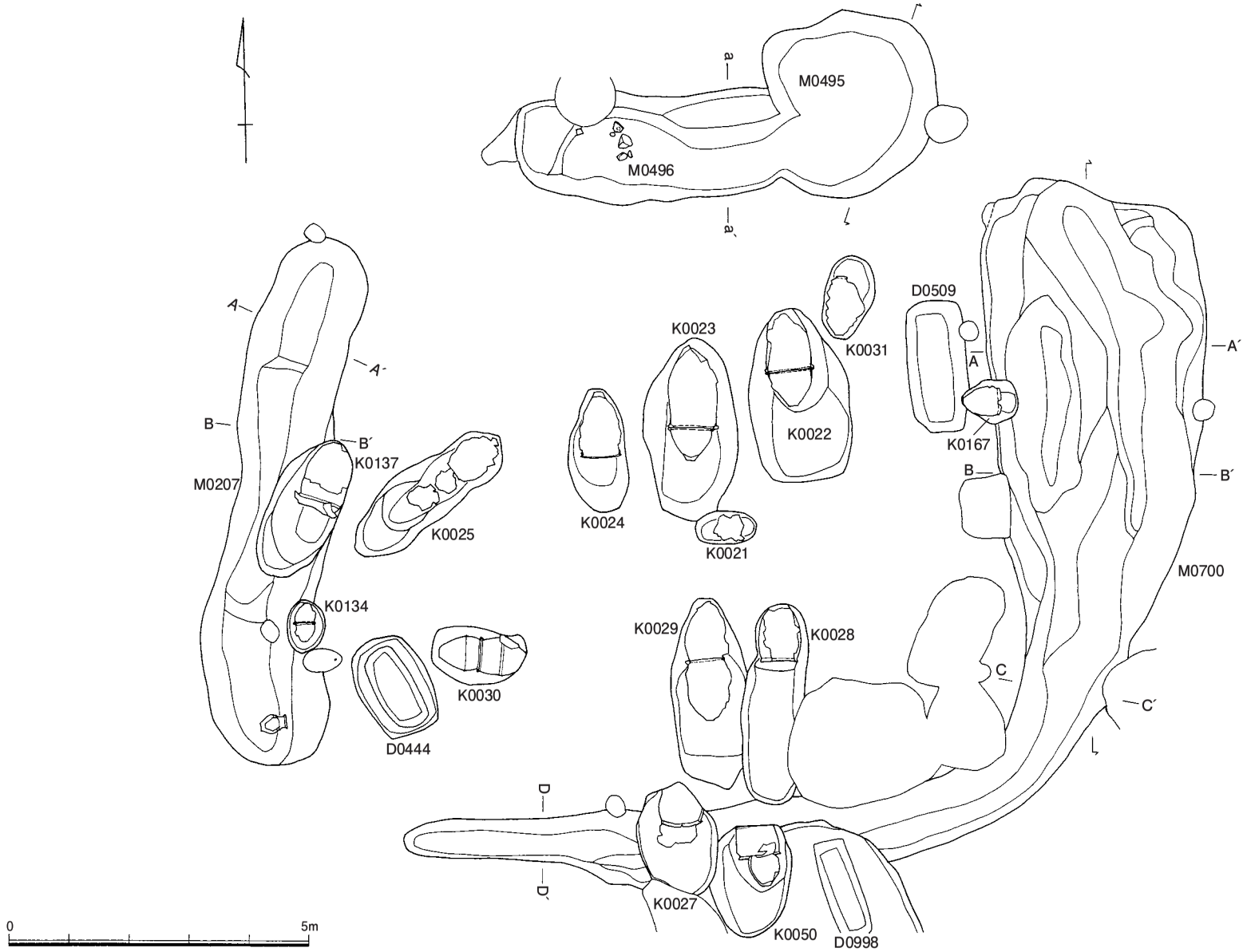
東辺から南辺に続く溝（M 0700）は屈曲部が丸みをもった逆L字状を呈する。東辺溝は北辺溝から1.5 m離れ、南北長9 m前後、北側での幅は3.5 mであるが南に向かい狭まり、東南隅では1 m前後となる。北側での溝底は最も深いところで80㎝前後であるが、不規則に掘り返されたような部分が多く、安定した面がない。また側壁にも段や平坦面が多い。東南隅は浅くなり、深さは50㎝前後となる。南辺溝は西に向かい細くなり、東南隅から10 mのところで立ち上がる。断面はU字形で、西端近くでの深さは40㎝前後となる。東辺溝の中央上部には黒色土が堆積し、その層の下から底面まで祭祀土器が比較的形を保って出土した（第136・137図）。日常土器の小・細片を除けば図示した14個体の土器がすべてである（図版70）。D 0998土壙墓、K 0027・0028・0050・0167甕棺墓がこの溝を切って築かれている。

西辺溝（M 0207）は北辺溝と3.0 m、南辺溝と2.0 m離れ、北からやや東にふれてはしる。南北長8.7 m、幅は北側で1.7 m、南側で2.0 mをはかる。溝底は中央部分が南北側より一段深くなり、検出面からの深さは75㎝、断面はU字形に近い（137図）。壺などの祭祀土器が出土した。

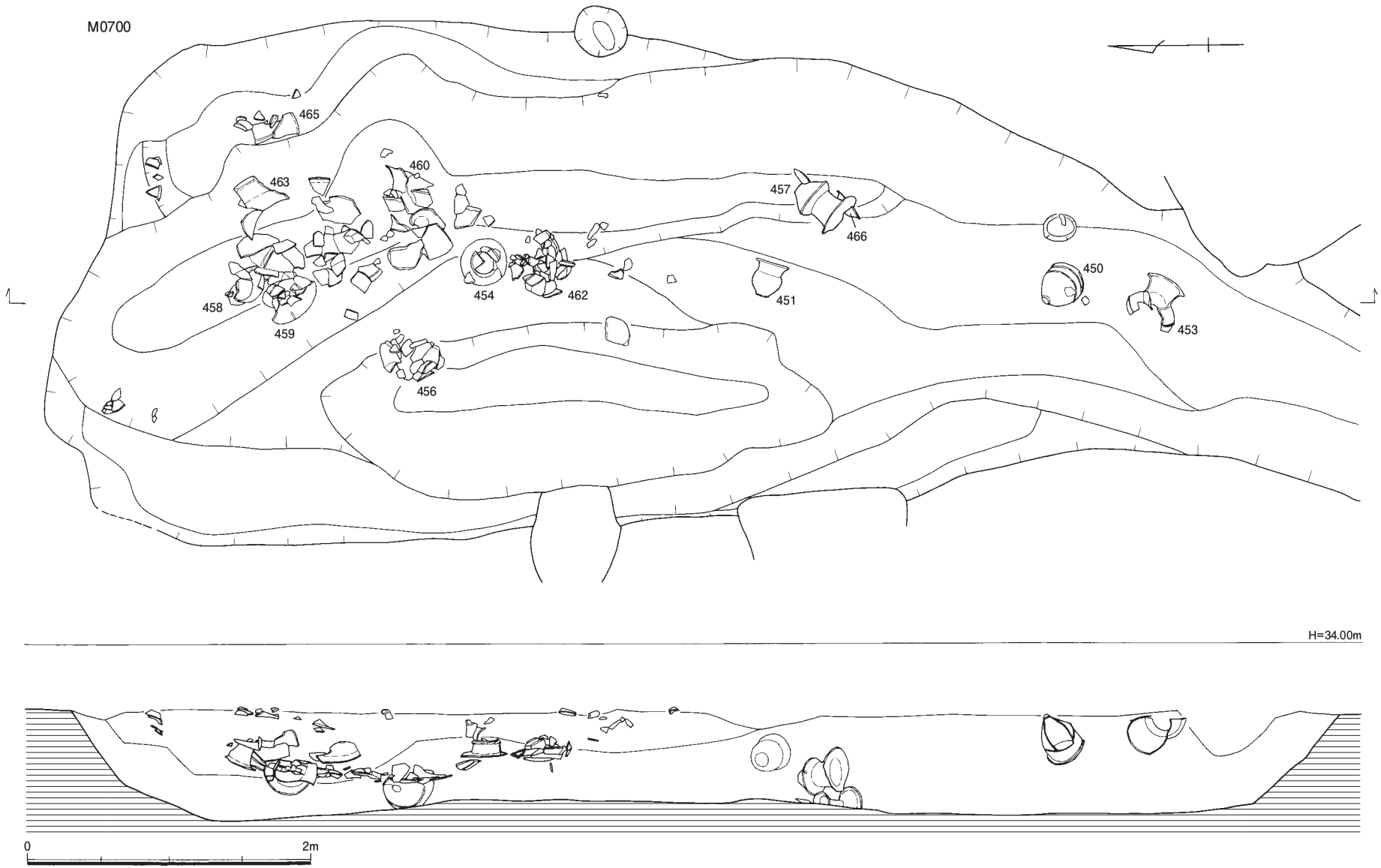
出土遺物（第138～141図、図版68～70）

450は甕である。逆L字状口縁をもち、口縁上面は外に垂れ気味となる。口唇にはヘラによる刻目を入れる。胴部は上位でわずかに張り、口縁下および中位に台形の突帯をめぐらす。外面はヘラ研磨で、口縁下突帯間には縦の暗文を等間隔に施す。外面から口縁上面まで荒いタッチで丹塗りを行う。

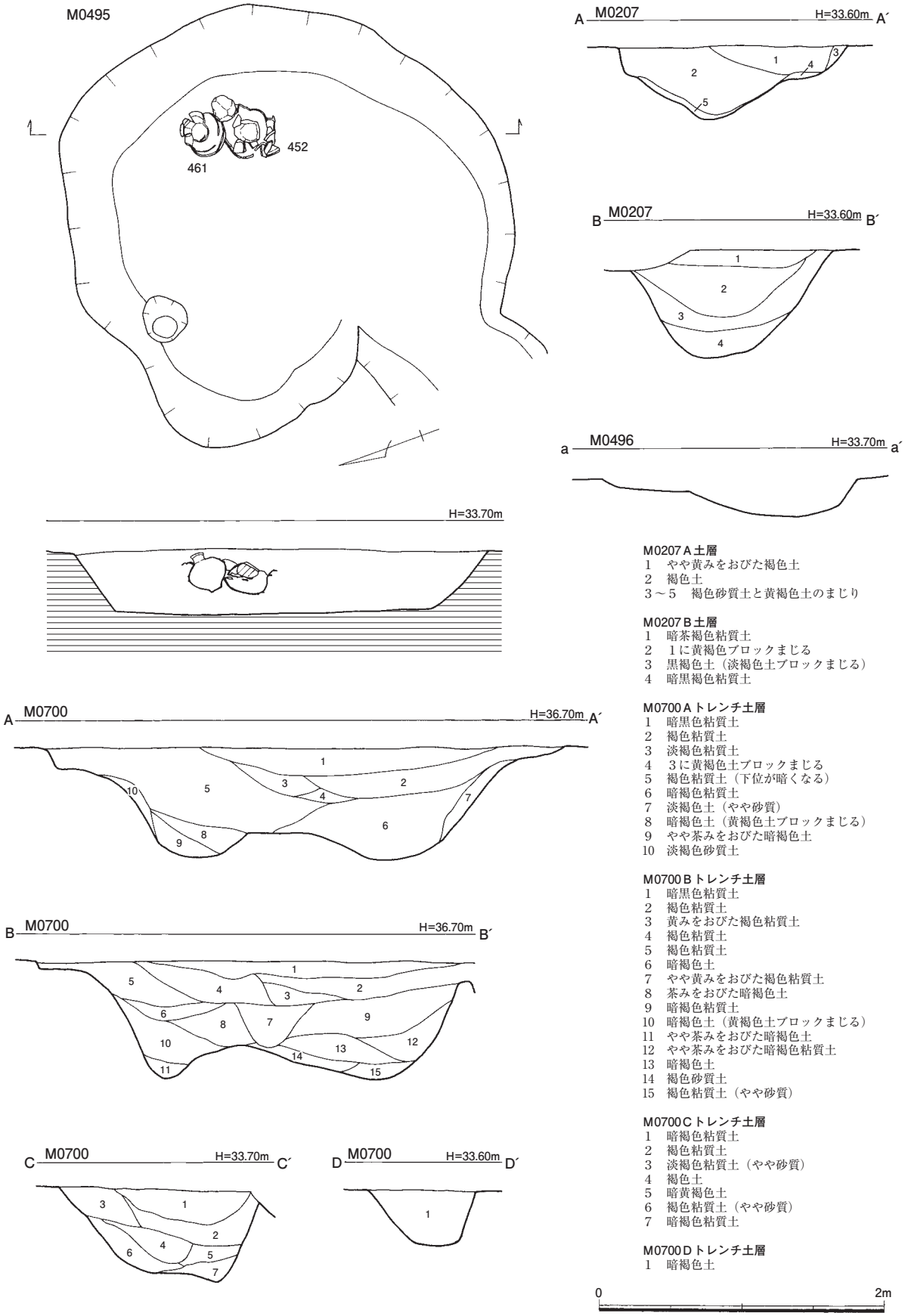
451～463は広口の壺である。**451～455**、**463**は鋤先状口縁をもつもので、形態にはバラエティーがある。451は扁球形の胴部から頸部が大きく開き、口縁上面はほぼ平坦となる。外面の頸部は刷毛目、胴部上位はヘラ研磨、下位は板ナデ、内面は指ナデで仕上げている。底部近くに穿孔をもうける。胴部には幅広い黒斑がみられる。452は上位で大きく張った高めの胴部から頸部が短く開くものである。口縁上面はほぼ平坦で、胴部最大径部位とその上に間隔をとって2条の三角突帯をめぐらす。胴外面下位はヘラ研磨、ほかはおおむね板状工具のナデで仕上げる。外面には黒塗りを施し、突帯間には穿孔をもうける。453・454は頸部の付け根に三角突帯をめぐらせ、口頸部が大きく開くもので、口縁上面は外傾する。453は胴部の台形突帯下を打ち欠く。調整はナデで、内面には指頭痕が著しい。455は上位で張りをもつ胴部から頸部付け根が不明瞭なまま口頸部が大きくひらくもので、胴部と頸部の境には2条のM字状突帯が間隔をおいてめぐる。口縁は外傾し、中くぼみとなった口唇にはヘラによ



第135図　Ⅳ区祭祀遺構（南側区画墓）実測図（縮尺1/100）



第136図　Ⅳ区祭祀遺構遺物出土状況実測図１（縮尺1/40）



M0207 A 土層
1　やや黄みをおびた褐色土
2　褐色土
3～5　褐色砂質土と黄褐色土のまじり

M0207 B 土層
1　暗茶褐色粘質土
2　1に黄褐色ブロックまじる
3　黒褐色土（淡褐色土ブロックまじる）
4　暗黒褐色粘質土

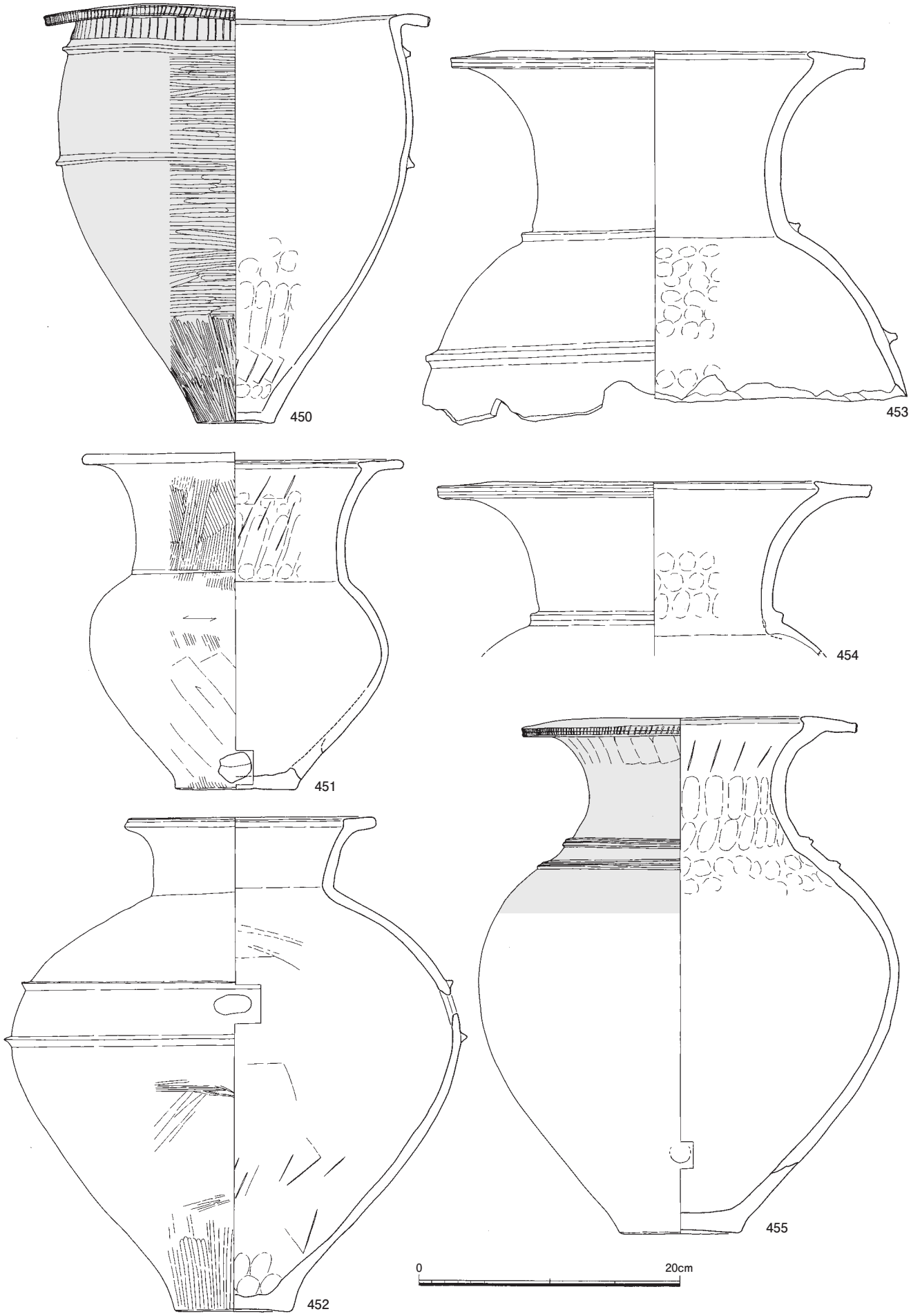
M0700 A トレンチ土層
1　暗黒色粘質土
2　褐色粘質土
3　淡褐色粘質土
4　3に黄褐色土ブロックまじる
5　褐色粘質土（下位が暗くなる）
6　暗褐色粘質土
7　淡褐色土（やや砂質）
8　暗褐色土（黄褐色土ブロックまじる）
9　やや茶みをおびた暗褐色土
10　淡褐色砂質土

M0700 B トレンチ土層
1　暗黒色粘質土
2　褐色粘質土
3　黄みをおびた褐色粘質土
4　褐色粘質土
5　褐色粘質土
6　暗褐色土
7　やや黄みをおびた褐色粘質土
8　茶みをおびた暗褐色土
9　暗褐色粘質土
10　暗褐色土（黄褐色土ブロックまじる）
11　やや茶みをおびた暗褐色土
12　やや茶みをおびた暗褐色粘質土
13　暗褐色土
14　褐色砂質土
15　褐色粘質土（やや砂質）

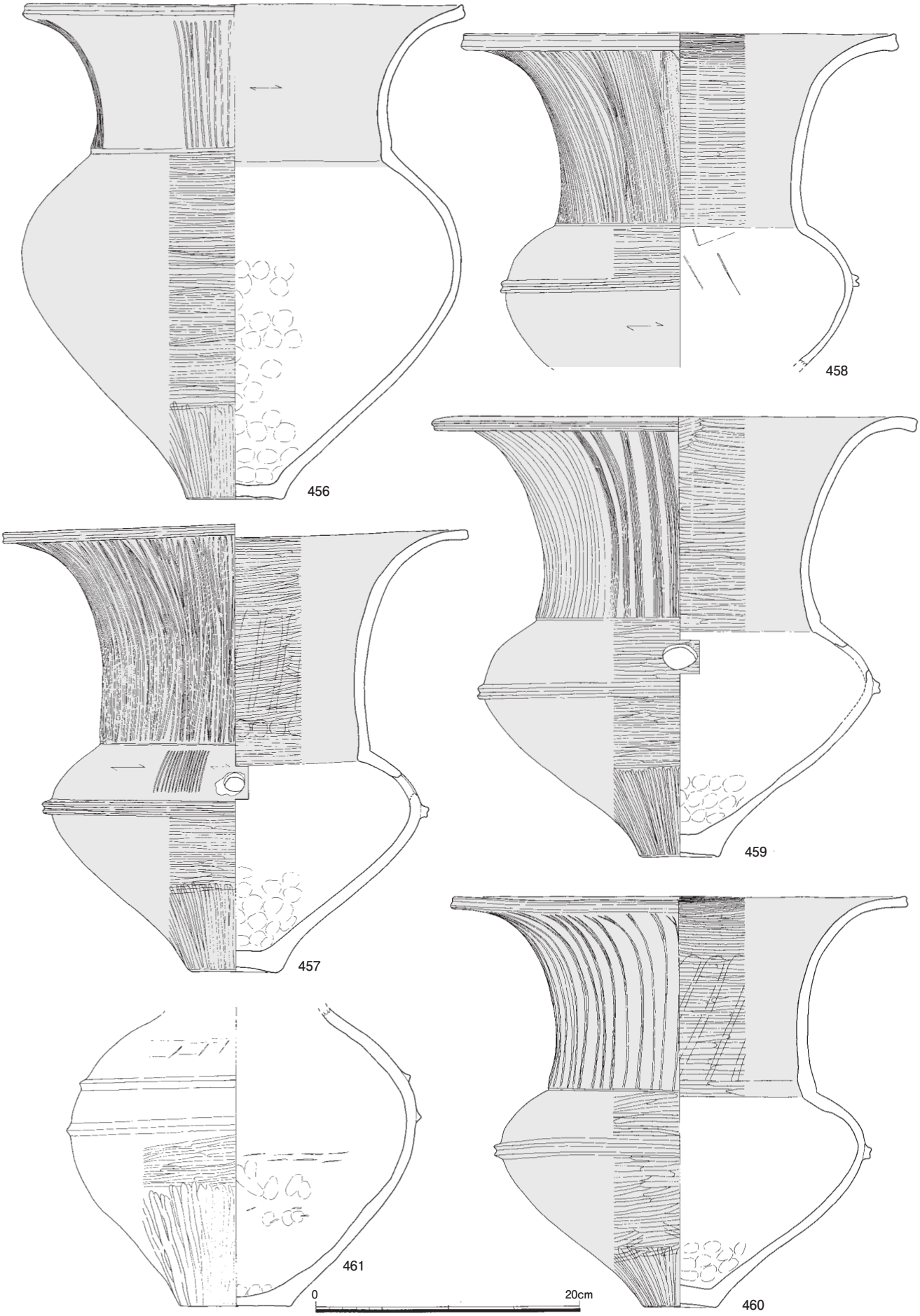
M0700 C トレンチ土層
1　暗褐色粘質土
2　褐色粘質土
3　淡褐色粘質土（やや砂質）
4　褐色土
5　暗黄褐色土
6　褐色粘質土（やや砂質）
7　暗褐色粘質土

M0700 D トレンチ土層
1　暗褐色土

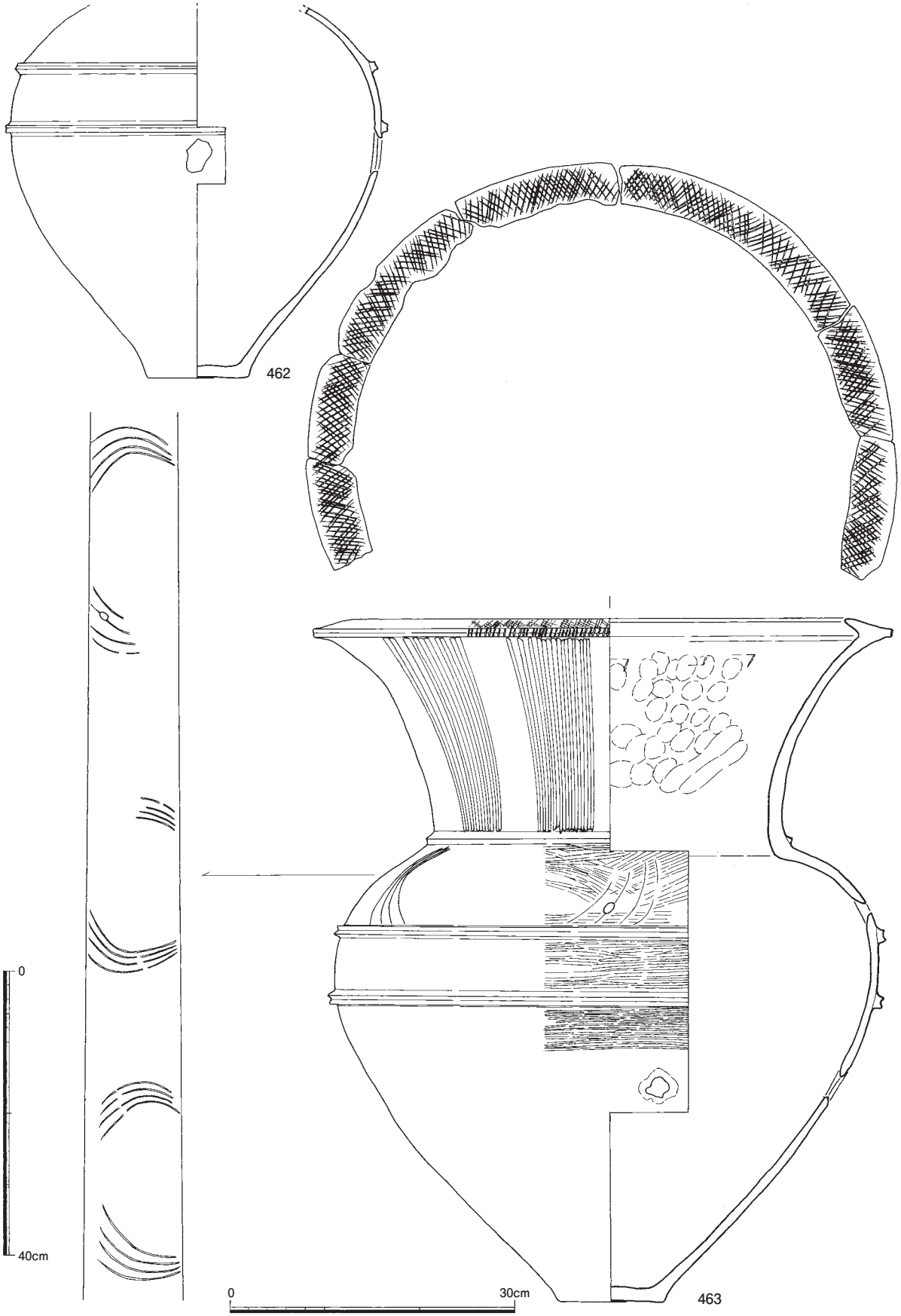
第137図　Ⅳ区祭祀遺構遺物出土状況実測図２及び土層図（縮尺1/40）



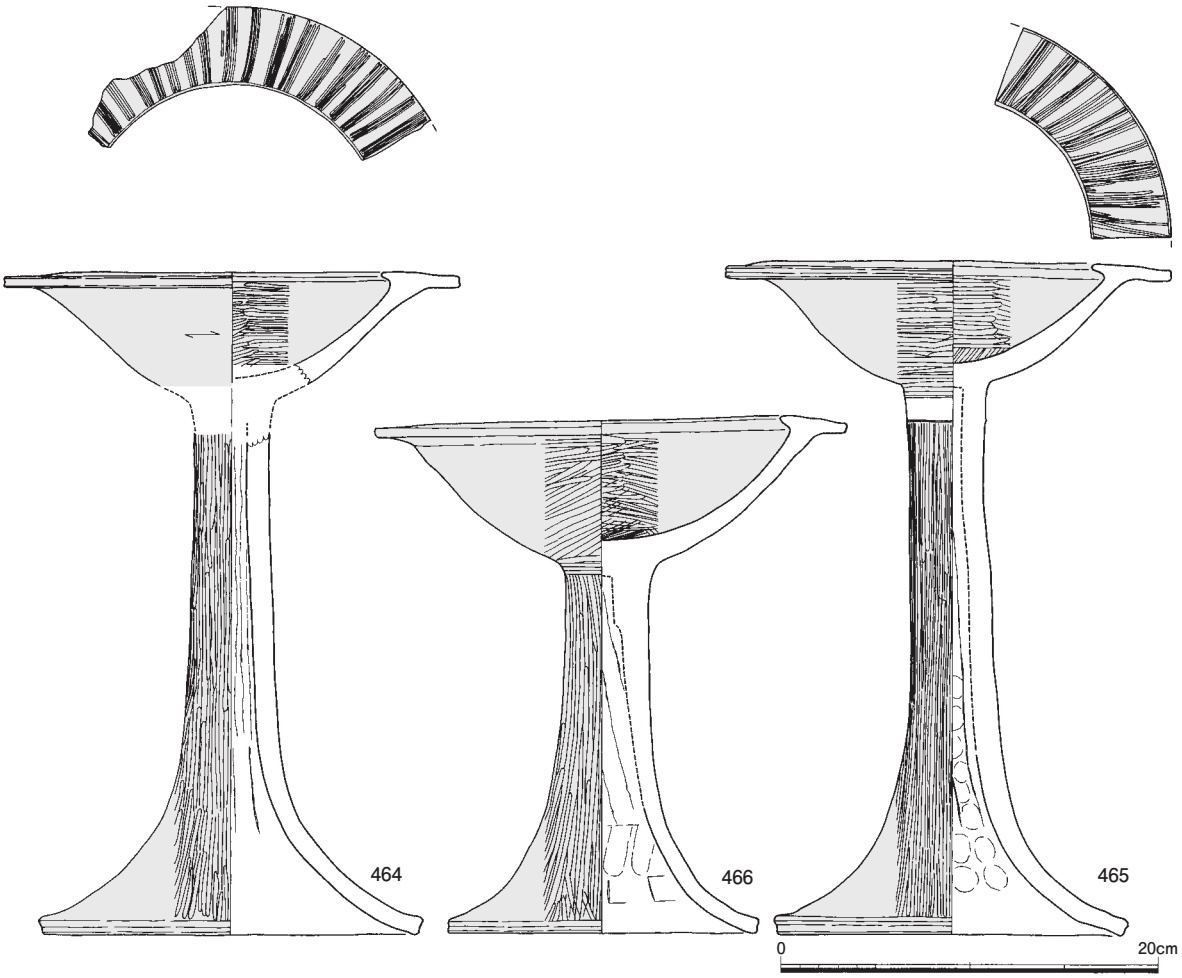
第138図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図１（縮尺1/4）



第139図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図２（縮尺1/4）



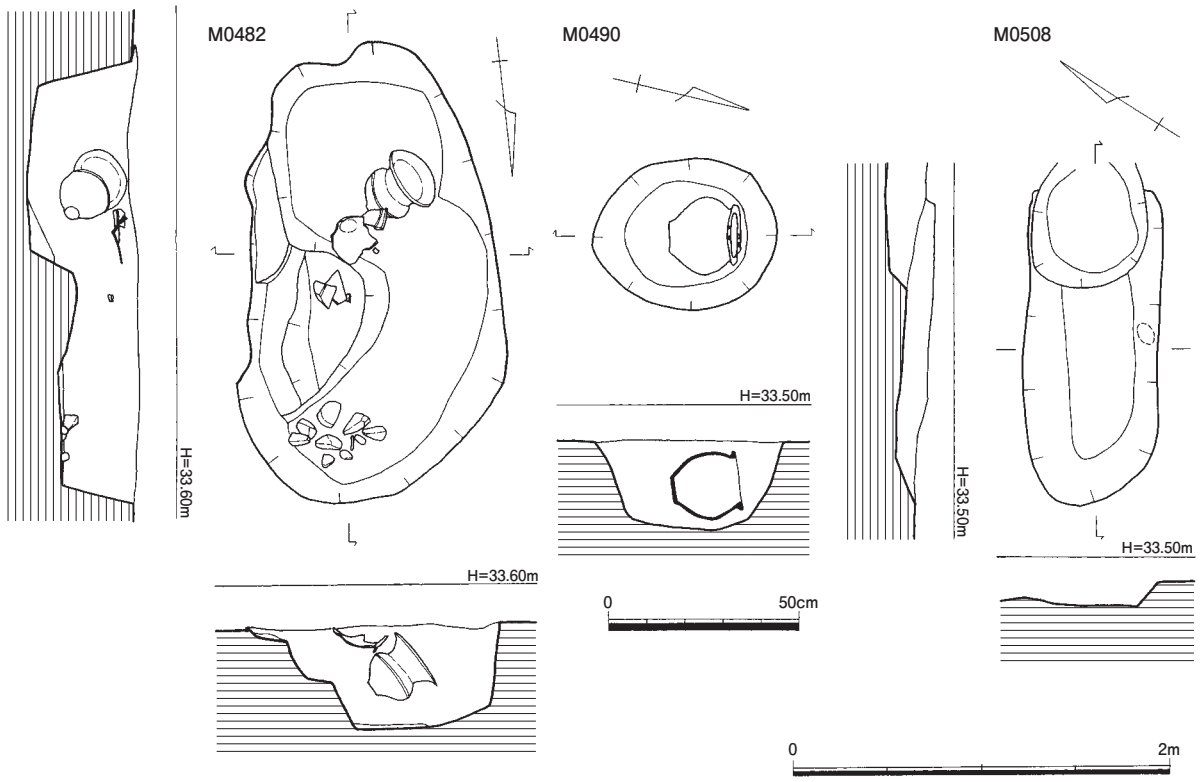
第140図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図３（縮尺1/6、1/8）



第141図　Ⅳ区祭祀遺構出土遺物実測図4（縮尺1/4）

る刻み目を入れる。全体にナデで仕上げ、内外面の口縁下には板状工具痕が残る。外面の胴部上位から上に幅0.8㎝前後の工具で荒く丹塗りを施し、また頸部内面上位にもひとまわり塗る。胴下位に穿孔をもうける。463は器高70㎝をこえる大型品である。上位で大きく張った胴部から口頸部が大きくひらく。外傾した口縁上面にはヘラによる格子文を施し、わずかに中くぼみの口唇部にはヘラによる刻目を入れる。頸部の付け根には三角突帯、胴部最大径部位には間隔をとって2条のM字状突帯をめぐらす。頸部突帯下の胴部にはヘラによる4本一組の弓状線を、張りの方向を違えて6ヶ所に入れる。外面の胴部上位はヘラ研磨、頸部には20本前後を一組とした縦の暗文を等間隔に施す。突帯を挟んだ胴部2ヶ所に穿孔をもうける。**456～460**は単口縁の広口壺である。456は上位で張った胴部から口頸部が開くのに対し、457～460は胴部が扁球形となり最大径部位にM字状突帯をめぐらすもので、口頸部も456に比べ長くなる。いずれも外面から口頸部内面までヘラ研磨を行い、頸部外面には459が5～6本一組、460が2～3本一組の縦の暗文を等間隔に、ほかは縦の暗文を連続的に施す。研磨、暗文部分は丹塗りを施す。 457の胴部上位にはヘラによる15本前後一組の平行線を等間隔に4ヶ所入れる。457・459は胴部上位に穿孔をもうける。461・462は口頸部を欠くが、広口壺とみられる。461は胴部が球形状にはり、最大径部位に間隔をおいて2条の三角突帯をめぐらす。外面下位はヘラ研磨、ほかはナデ調整で、外面は黒塗りを施す。462は胴部高で40㎝をこえる。胴部上位に間隔をとって2条のM字状突帯をめぐらす。全体をナデ調整で仕上げ、下部突帯下には穿孔をもうける。

464～466は高杯である。いずれも杯部は浅く、口縁は鋤先状で外傾する。ただ脚部が通有の466に比べ464･465はさらに長く、465で器高35.8㎝となる。465の脚部付け根には突帯がはずれた痕が残る。



第142図　その他の祭祀遺構実測図（縮尺1/20、1/40）

いずれも杯部内外面と脚部外面は丹塗り研磨で仕上げており、杯部内面は465が6分割、466が7分割して横方向のヘラ研磨を行う。464・465の口縁上面には5本前後を一組とした暗文をほぼ等間隔で全面に施す。

以上の土器は、452・461が北辺溝（M 0495部分）、455が西辺溝、ほかは東辺溝から出土した。

その他の祭祀遺構

M 0482（第142図）

W－28区で検出したほぼ南北に長軸をとる楕円形状の土坑で、長さ2.4 m、幅1.4 mをはかる。東側壁には浅い段がつき、底は西側が張った弓状を呈する。検出面から底面までの深さは55cm前後。坑内中位から上面で壺などの遺物が出土した。Ⅲ区からやや西に離れ住居域とも近接するが、墓域に対する祭祀土坑の可能性が高い。

出土遺物（143図467）　単口縁の広口壺である。胴部は扁球形に近く最大径部位にM字状突帯をめぐらす。外面と口頸部内面は丹塗りヘラ研磨で、頸部外面には縦の暗文を連続して施す。口頸部内面は6分割して横方向のヘラ研磨を行う。また胴上位には8～10本の細い平行線を全周5ヶ所に刻む。胴部突帯の上に穿孔をもうける。

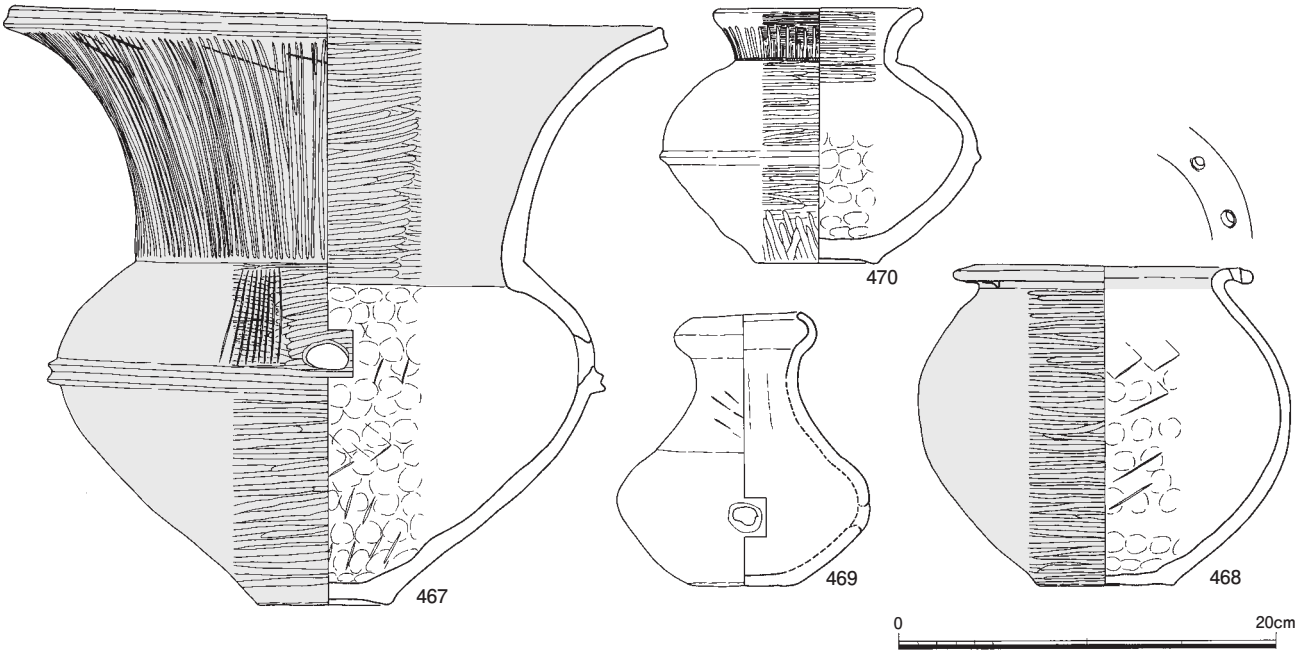
M 0490（第142図）

A・A－25区で検出した南北長0.5 m、東西幅0.4 m、深さ23cmの楕円形ピットである。このほぼ底面に、壺が口を北に向け横置されていた。北区画内側から東に13 m離れた住居域にある。

出土遺物（143図468）　無頸壺である。球形状の胴部から口縁部が丸みをおびて外へ反転する。口縁上面には2個一組の孔を一対もうける。胴部外面はヘラ研磨で外面から口縁内面までに丹塗りを施す。

M 0508（第142図）

Y－32区、Ⅳ区南側外で検出した土坑であるが、後世の遺構に破壊また削平され、本来のすがたを



第143図　その他の祭祀遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）

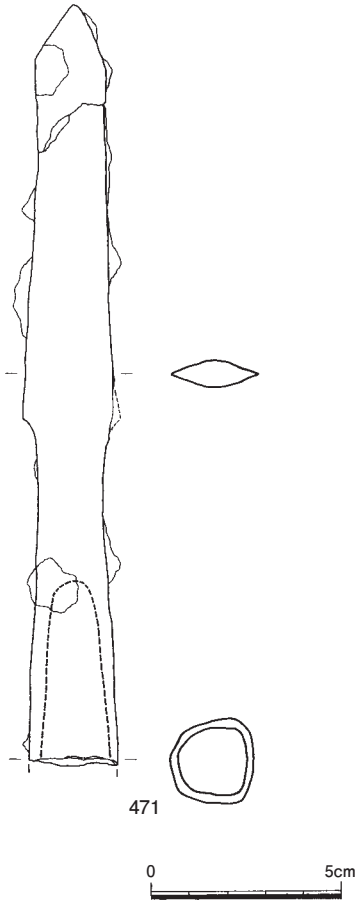
とどめない。長軸を北東にとる長方形状の土坑で、残存長1.7ｍ、幅0.7ｍ。底面は南西側に傾斜し、深さ20㎝前後。右側壁付近から壺が出土した。

出土遺物（143図469）　袋状口縁壺である。扁球状の胴部から頸部が緩やかに立ち上がって外反し、丸みのある袋状口縁をつくる。外面はヘラ研磨とみられるが、詳細は不明。底部から胴部中位にかけて黒斑がある。淡～暗褐色を呈する。胴部下位に穿孔をもうける。

M 0545

Ｚ－24区で検出した径0.40ｍ前後、深さ26㎝のピットである。ピット内から完形の壺が出土した。Ｉ区北東の住居域に位置する。

出土遺物（143図470）　壺である。扁球形の胴部から口頸部が短く外反し、端部は丸くおさめる。胴部最大径部位には三角突帯をめぐらせ、底部はわずかに上げ底となる。胴部外面と口頸部内面はヘラ研磨で、口頸部外面は横刷毛目の上に縦の短い暗文を等間隔で施す。



第144図　検出面出土鉄矛実測図（縮尺1/2）

５）検出面出土鉄矛（第144図）

471はⅣ区東辺溝の東側で遺構検出を行った際、検出面から出土したものである。袋部端が欠損する。残長20.3㎝、剣身長11.0㎝、関は片方が欠け2.3㎝（復元2.6㎝）。鋒は三角形状となる。身の厚さは0.8㎝で断面菱形となるが、鎬はない。袋部断面は円形に近い不整方形。

４．その他の遺物

１）石器

本調査は、弥生時代中期から中世の遺構群からなる集落・墓地の調査である。420点前後の石製品などが出土した。1弱/10㎡の石製品の出土量は、金属製利器使用が普及した以降の時期の遺跡であることを示唆するとともに、下部もしくは周辺に石製利器を制作使用した弥生時代中期以前の集落の存在を伺うことができる出土量であるといえる。人為的な石器・石製品は、自然石を除いた412点である。出土石器・石製品は、いずれも各時代・各時期の遺構・包含層から遊離した遺物であり、剥片鏃や石錐（ドリル）があること、交互剥離からなる剥片を素材とする石器が一定の量を持っていることなど縄文時代後期に製作使用された石製品と弥生時代に製作使用された大陸系磨製石器があることからこの二時期についてみていく。なお、縄文時代後期から弥生時代中期前半の石器・石製品は240点の未製品・素材を含み本調査出土量の65％を占め、弥生時代以降の石製品は砥石など17点がある。

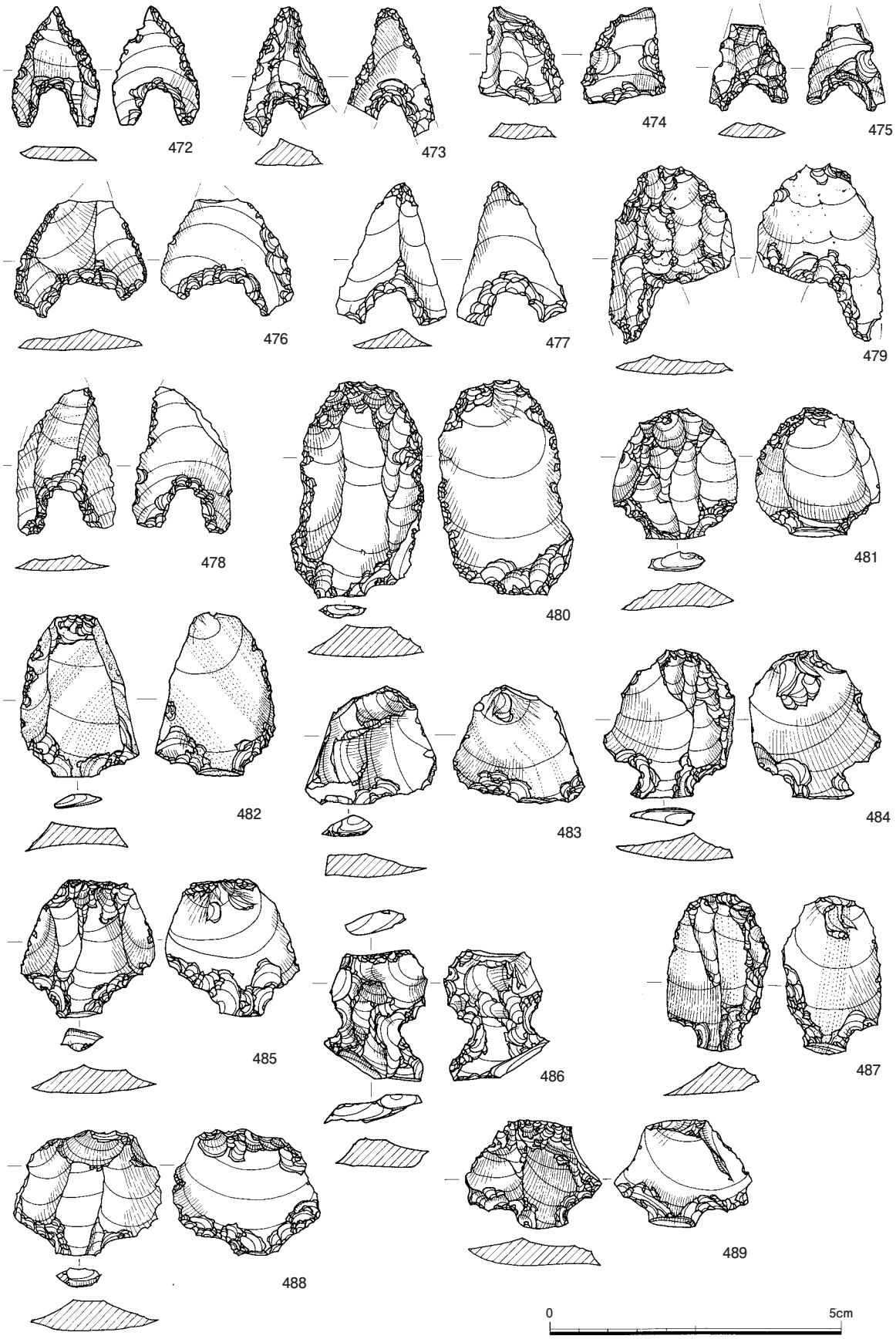
縄文時代後期の石器・石製品（第145 ～ 147図、図版72）

本時期の出土石器・石製品は本調査出土量の15％にあたる61点を認定した。そのうち71％の43点が石器で、狩猟具、漁労具（蛇紋岩製などの石錘2点）、掘削具、調理具（花崗岩製石皿1点）、加工具、伐採・加工具、その他（石製円盤1点）がある。狩猟具として剥片鏃8点（472 ～ 479）、打製石鏃6点（494 ～ 498）がある。剥片鏃はいずれも黒曜石製で、いずれも交互剥離の石核（504）から剥出された剥片（503）の先端を素材としている。474・479も交互剥離の剥片を素材としているが、479は打製石鏃の未製品の可能性もある。黒曜石製3点（494・497）・古銅輝石安山岩製（495・496・498）の打製石鏃は、いずれも表裏とも丁寧な押圧剥離が加えられ、横断面が凸レンズ状になり、基部は大きく抉りが入れられている。掘削具として蛇紋片岩製と安山岩製（517）の打製石斧が、伐採・加工具として蛇紋片岩製の蛤刃磨製石斧（514）がある。514は乳頭状をなし、丁寧な研磨が加えられ優美であるが刃は欠損している。加工具の出土量がもっとも多く51％を占め、オール2点（493）、ドリル2点（492）、削器6点（480・487・490）、刃器10点（482・485・491）、剥片石器2点がある。いずれも黒曜石製で交互剥離の石核から剥出された剥片を素材としている。480・485・487は剥片鏃を製作した残欠の剥片基部（つまみ形石器）を素材としている。石器素材および残欠として剥片鏃素材剥片1点（503）と剥片鏃素材残欠11点（480 ～ 489）、石核1点（504）がある。剥片鏃は、交互剥離の石核から剥出された剥片の中央両側に表裏から抉りを入れ、素材剥片表から圧をかけ切断し、素材先端を用いている。

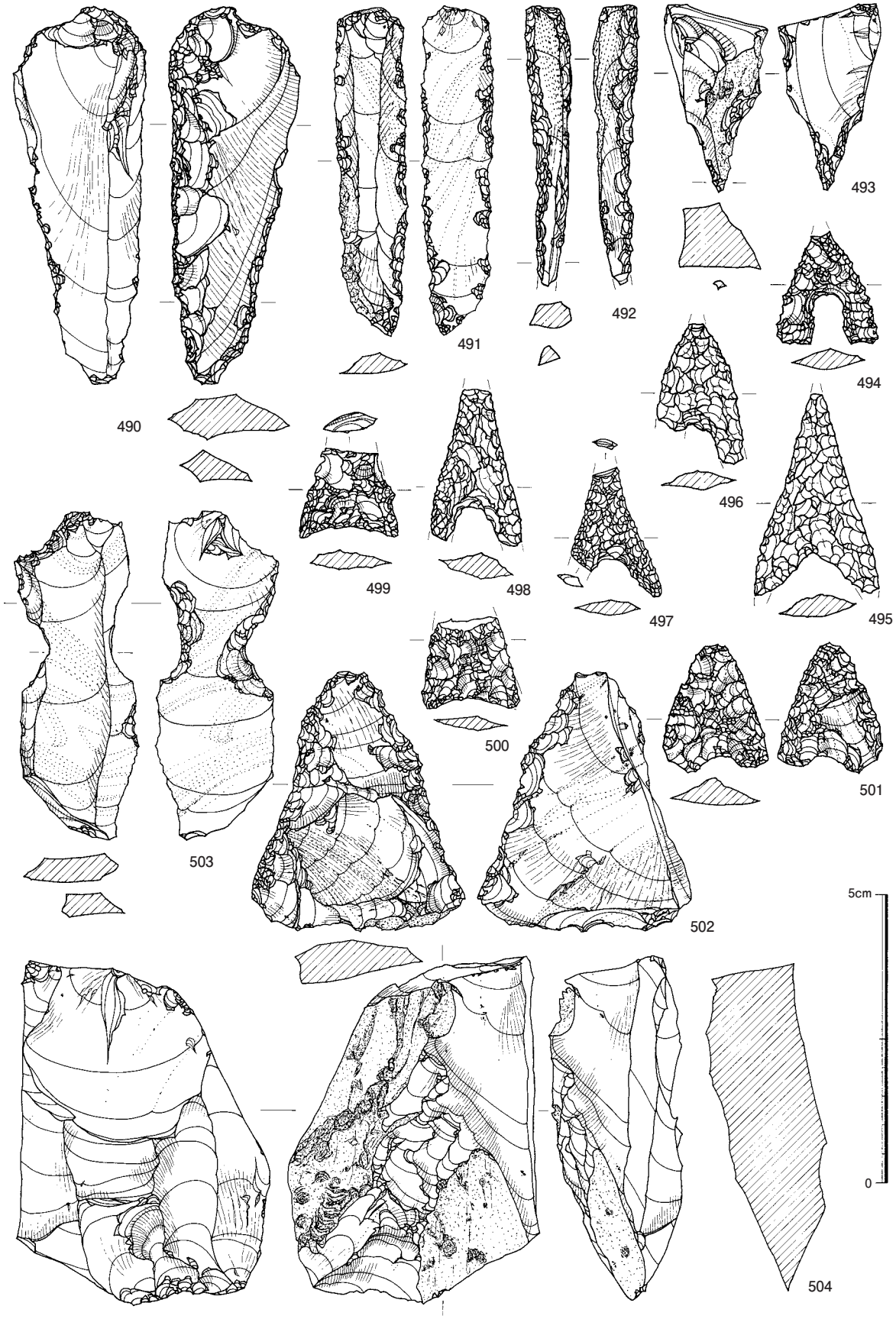
弥生時代の石器・石製品（第146・147図、図版72）

本時期の出土石器・石製品として本調査出土量の16％にあたる67点を認定した。そのうち石器が72％にあたる49点（※1点は転用のためダブルカウント）で、狩猟具・武器、収穫具、伐採・加工具、加工具（砂岩製砥石2点）がある。収穫具である石製穂摘み具が53％を占めており、1点が粘板岩製で、25点が安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製（505・510 ～ 512）である。伐採・加工具として今山産出玄武岩を素材とした太型蛤刃石斧7点（515・516）、頁岩製方柱状片刃石斧3点、頁岩製（513）・粘板岩製・凝灰岩製各1点の扁平片刃石斧、頁岩製片刃石斧1点がある。狩猟具・武器として、黒曜石製打製石鏃2点（499・500）、石製穂摘み具転用の磨製石鏃（505）1点、頁岩製2点（506・508）・凝灰岩製2点（507）の磨製石剣がある。502は黒曜石製の打製石鏃の未製品、509は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製磨製石鏃の未製品である。

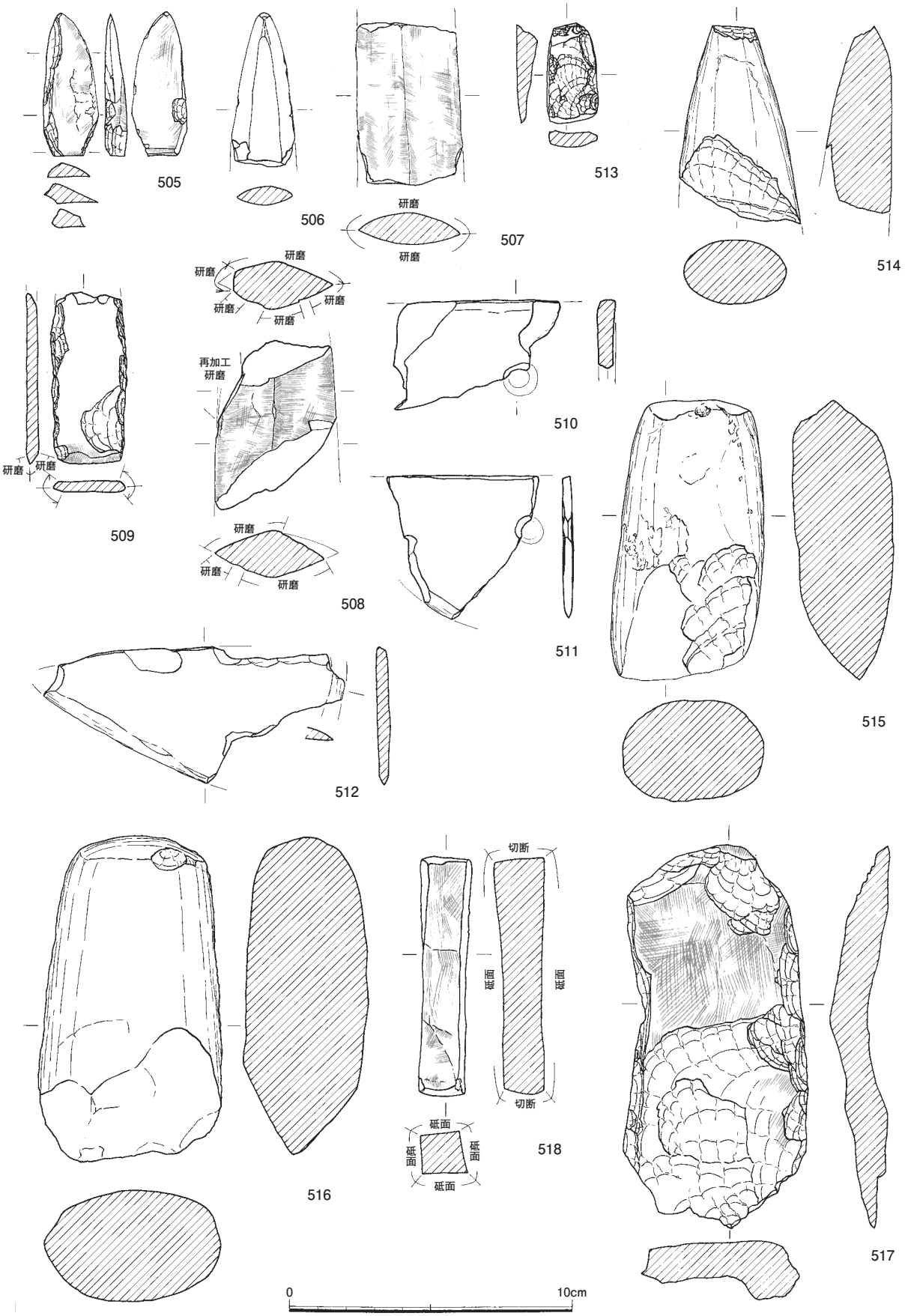
なお、501は黒曜石製打製石鏃で所属時期を特定できない。また、518は細粒砂岩製の手持砥石で4面を使用し、金属器用とみられるが、やはり時期を特定できない。



第145図　８区出土石器実測図１（縮尺1/1）



第146図　８区出土石器実測図２（縮尺1/1）



第147図　８区出土石器実測図３（縮尺1/2）

2）馬具

SX0418、SX0995からは馬具が計13点出土しており、未報告であったのでこれらについて報告する。なお遺構については『入部XI』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第685集）を参照いただきたい。

SX0418出土馬具（第148図）

SX0418では、轡と轡に関係すると思われる破片資料４点、飾金具４点、小鉄片１点が出土している。いずれも劣化が著しく、鉄製品の内部は鉄が溶け出しており、空洞化しているものが非常に多くクリーニングが非常に困難な資料も見られ、透過X線撮影画像を参考に鉄部分を明らかにしている。

轡　519は轡である。非常に硬い土錆に覆われており、本来の形状が不明な資料であったが、透過X線撮影によって、内部に銜、鏡板、引手が確認でき、素環式環状鏡板付轡であると判明した。鏡板は銜と引手を連結している環状部分に連結されていたようである。鏡板は約半分程度から欠損している。鏡板は径6mm程度の断面円形の鉄棒で作られている。銜は２本の部品から構成されているが、一方は途中で折損している。銜の長さは約10cmで、折損しているものも本来は同じ長さであったものと思われる。引手は、引手先部分が残存していない。残存長は11.5cmである。520、521は環状鏡板の破片である。520は断面円形の鏡板片で、全周のうち約７分の１を欠損している。鏡板の長径は7.8cm、短径は6.5cmである。鏡板には巻きつくように別の鉄棒が残存しており、銜、引手、立聞のいずれかの用途が考えられる。521も大きく屈曲した断面円形の鉄棒片で、環状鏡板の破片と思われる。全周の約３分の２を欠損している。522、523は引手もしくは銜の環状部分の破片である。

飾金具　524～527は飾金具である。これらの飾金具も轡同様に劣化が著しく、内部が空洞化している資料が含まれている。また、鋲部分が錆ぶくれており、本来の大きさが復元できない状況であった。524、525は幅約2.8cmの半円形の飾金具である。524は完形品で、長さは3.5cmをはかる。鋲を３箇所打つもので、鋲の脚部分は曲がっていない。525は半円形の部分を欠損しているが、おそらく524同様に、３箇所に鋲を打つものであると思われる。鋲頭は２箇所見られるが、脚部分は１本しか残存していない。脚は革紐に固定されていたためか屈曲している。526、527は４箇所に鋲を打つ菱形の飾金具である。寸法は長さ約4.8cm×幅約3.5cmである。526は鋲の脚部分が途中で折損している。527は硬い土錆が表面に厚く固着しており、そのため鋲頭の観察はできないが、裏面の脚部分はまっすぐ伸びる状態で残存していることが確認できる。これらの飾金具の表面には一部、緑色の錆と金色に光る部分が確認でき、鉄地金銅張製であった。

SX0995出土馬具（第149図）

SX0995では、轡１点と轡片１点、鞍２点が出土している。

轡　528は複環式環状鏡板付轡である。鏡板は、鏡板中央で鉄棒を３回交差させて３個の小環を作り出し、下部の小環に銜を連結し、上部の環には外周部分の大環を通して立聞としており、滝沢誠氏による分類のD類に相当する〔滝沢1992〕。大環部分の鉄棒は直径6mm前後と細い。鏡板部分を透過X線撮影をおこなうと、鏡板部分の鉄棒を表面を巡るように細かな影が見られる部分があり、鏡板の鉄棒は捻りを加えている可能性がある。鏡板は環状部分の長径約9cm、短径約7.5cm、立聞を含めた高さは約10cmをはかる。一方の鏡板は、中央の小環から立聞にかけてが欠損している。銜は、長さ約11.0cmの２本の部品からなる。棒状部の直径は6mmで、銜部分についても捻りが加えられている可能性がある。鏡板側の環は鉄棒の先端を二股に分割して鍛き延ばし、楕円形に接合したものと思われ、長径約4cm、短径約3cmをはかる。銜中央の連結部分の環も先端を分割した後、円形に接合したものと思われ、環の直径は2cmである。

引手については残存していない。中央の小環から立聞にかけて欠損した鏡板に鉄棒が固着してお

り、引手の可能性も考えられるが、詳細な接続形態などは不明である。類例として、熊本県塚坊主古墳（TK47 ～ MT15）や大分県小迫3区21号横穴墓（TK10）があり、5世紀末から6世紀中葉の時期が推定できる〔桃崎2008〕。529は2本の鉄棒が交差した鉄製品である。鉄棒の径は5mmと細い。細さと交差の状態から、528の同一個体で、銜中央から立聞部分を欠損した複環式鏡板の一部分に該当すると思われるが、528の折損部は錆がまわり接合はできなかった。

鞍　鞍は2点出土している。530は輪金最大幅約5.8cm、基部幅約2cm、長さ5.5cmをはかる。環状部の断面形は5.5mmの方形を呈する。基部には尻繋を留めるT字型の刺金と座金具を介して後輪に固定するための釘状金具が挟まれている。刺金は長さ4.4cm、幅5.5mmである。座金具は直径3.1cmの円形で、厚さは1mmである。釘状金具は、断面形長方形のもので、「し」の字状に曲げられている。座金具の裏面、針状金具の基部と先端部には木質が付着している。531は、530とほぼ同形の資料で、輪金最大幅6.8cm、基部幅約2cm、長さ5.1cmをはかる。刺金は長さ約4.4cm、幅6mmである。座金具は530と異なり、輪金に対して垂直の向きで固化している。座金具は直径3.2cmの円形で、厚さは1.5mmである。釘状金具は、530同様「し」の字状に曲げられているが、530よりも角度を持って曲げられている。輪金部分と針状金具の基部には木質が付着している。

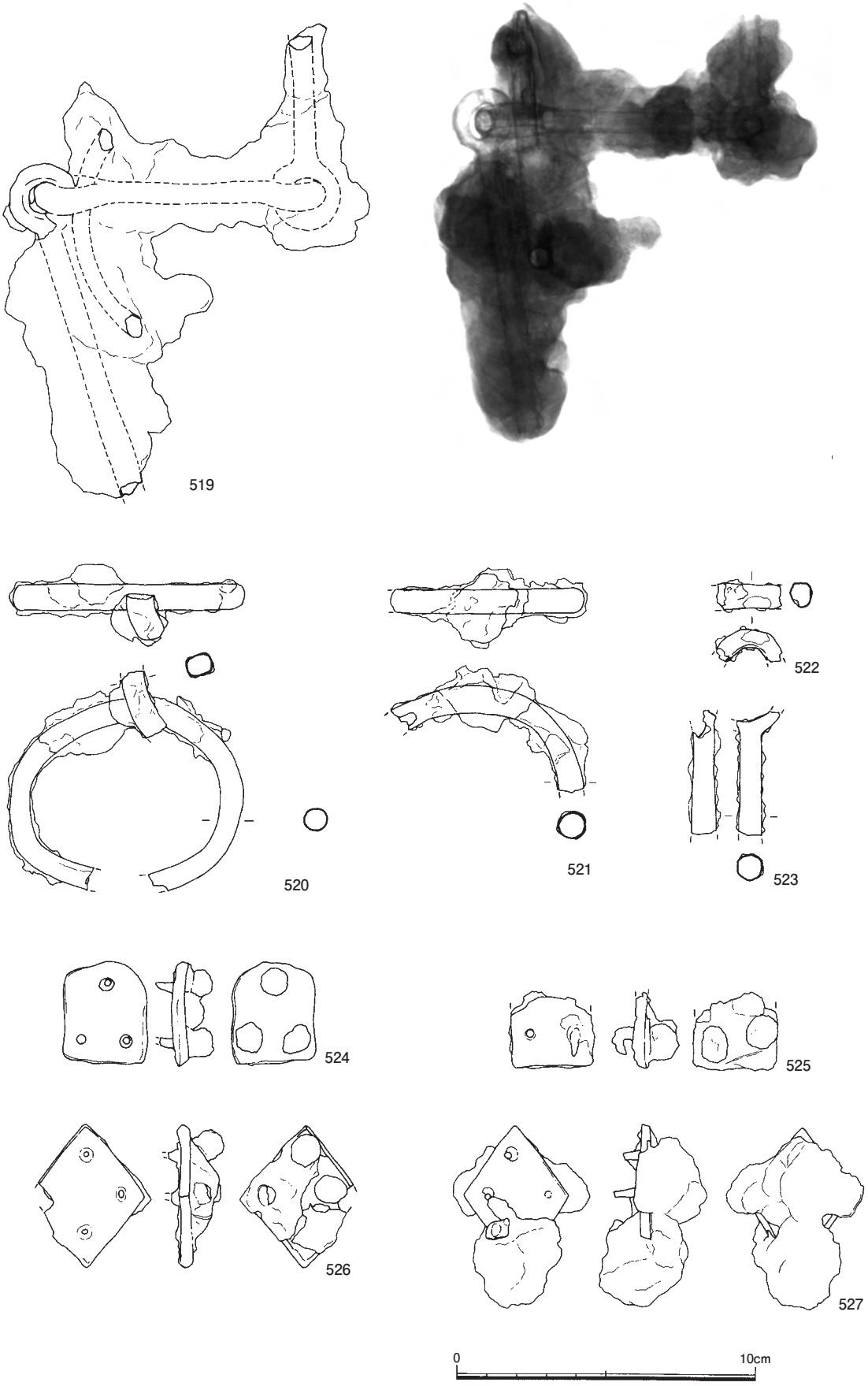
530、531以外に鞍金具は無く、磯金具等を持たない木装鞍と考えられる。また、530の木質から後輪の厚さはおよそ4cm程度あったことが推測できる。

【参考文献】

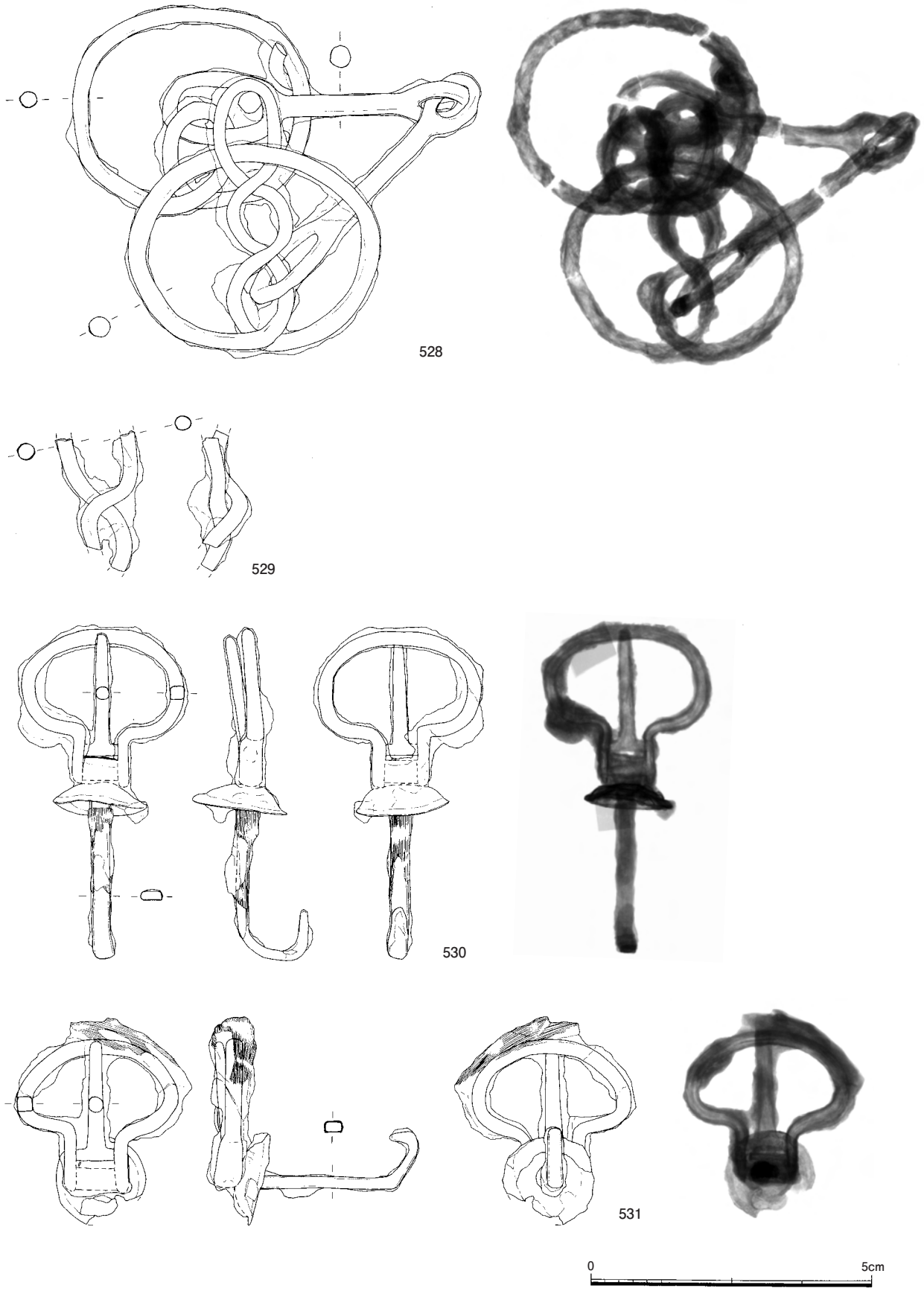
滝沢誠1992「複環式鏡板轡の検討」『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会

宮代栄一1995「飯氏二塚古墳出土の馬具」『飯氏二塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集　福岡市教育委員会

桃崎祐輔2008「九州の古墳時代後期馬具とその変遷」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会実行委員会



第148図　SX0418出土馬具実測図（縮尺1/2）



第149図　SX0995出土馬具実測図（縮尺1/2）

５．小結

２次調査８区で確認した弥生時代の埋葬関連遺構は木棺墓・土壙墓51基、甕棺墓149基の、合わせて200基とこれを画する区画溝である。また、木棺墓に細形銅剣1、甕棺墓には細形銅剣１、銅釧10、鉄剣1、鉄矛1、鉄刀1、素環頭鉄刀子１が副葬されており、検出時に出土した鉄矛（471）も本来は甕棺に副葬されたものと考えられる。今回の調査では周辺の発掘調査及び試掘調査等により、墓域全体をほぼ完掘したものと考えられ、墓域面積は1,800㎡程度で、造営期間は弥生時代前期末～後期初頭に及ぶものと考えられる。

１）出土甕棺の型式について

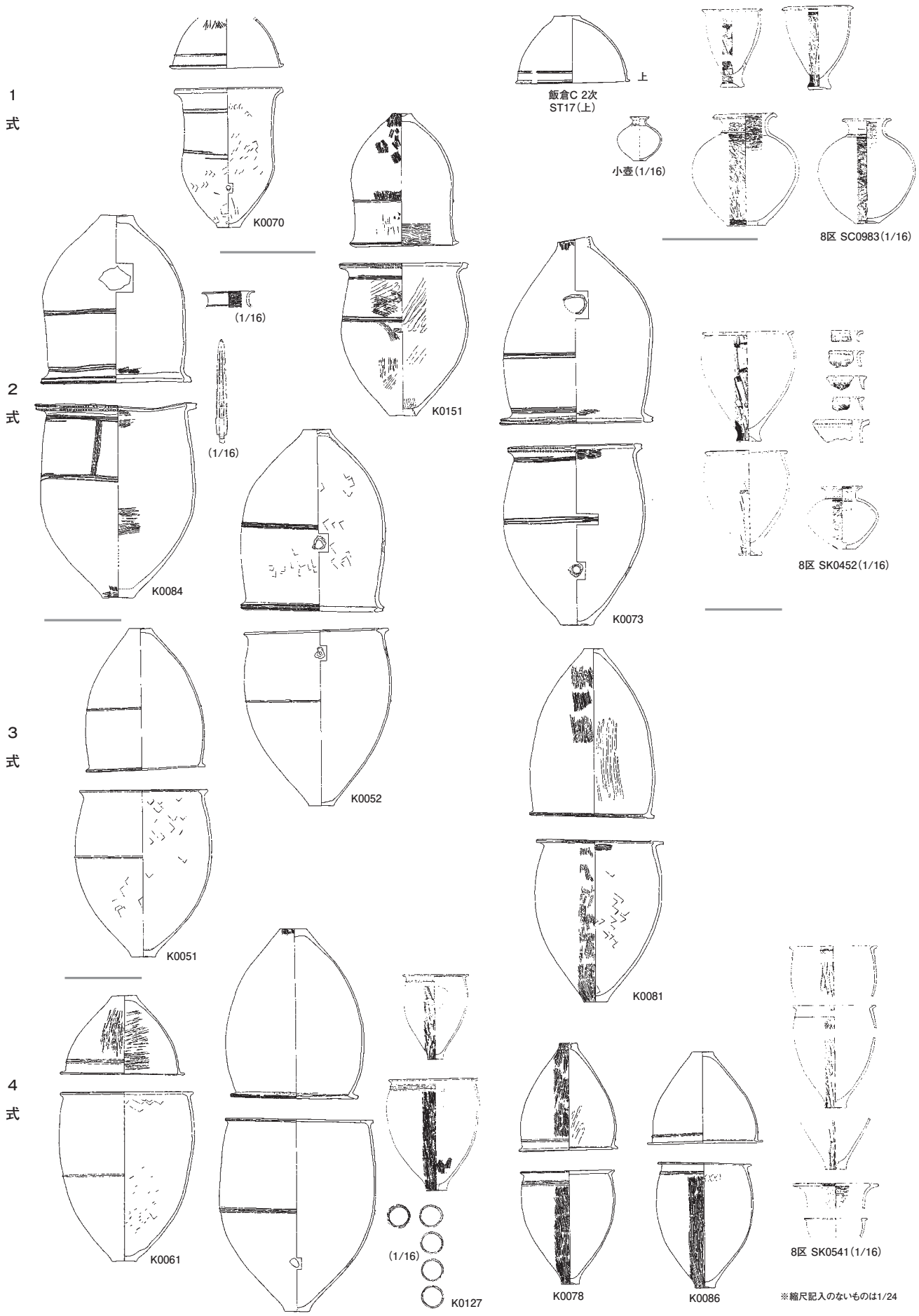
墓地の形成過程について説明を加える前提として出土甕棺の型式変遷について述べておきたい。今回甕棺の型式的位置付けについては橋口編年を使用（第５～７表）したが、ここでは従来の編年を基礎にして、本調査出土資料の特徴を加えて説明を行う。

1式：胴部は壺形土器様の膨らみを残すが、頸部に至るすぼまりが緩くなっている。頸部は直線的ではあるが内湾気味に立ち上がり、外反する口縁部の上面に断面山形の粘土帯を貼り付けている。胴部と頸部の付け根及び頸部上位に沈線を施している。調整は刷毛目、ミガキ、ナデを行う。K0070の上甕は鉢である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け、断面三角形に仕上げる。口縁下には三角突帯があり、口縁端部と共に刻みを施す。上甕の類例は同じ早良平野に位置する飯倉C2次ST17に見られ、副葬小壺は球形の胴部に、頸部は直立せずカーブを描き、口縁部の屈曲が比較的弱いものである。

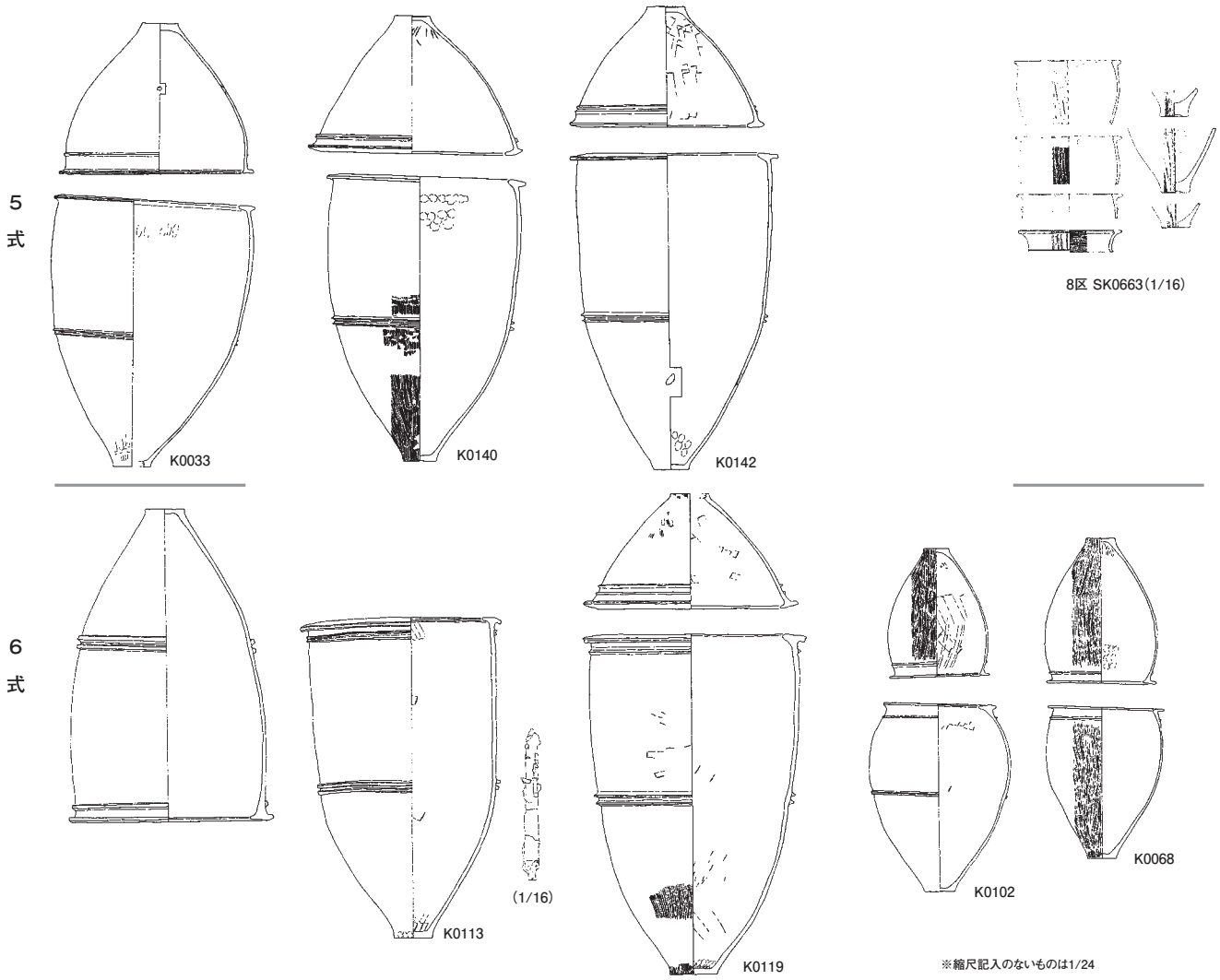
2式：壺形土器の特徴を残すが、1式で見られた胴部と頸部のすぼまりは消失する。変わって丸みを帯びた胴部下半から、内傾する胴部上半へとつながる。口縁部は強く外反し、上面に粘土帯を載せ、嘴状に仕上げる。口縁部外面には刻みを有する。また口縁下及び胴部上位に沈線を刻み、この間に縦沈線を施すものも多い。調整は刷毛、ミガキ、ナデを行う。器壁は厚く、焼成も比較的軟質である。胴部上半の内傾度、口縁部貼り付け部分の内側への突出度、底部の厚みなどに新古の特徴が現れる。組み合わせは大形甕棺を使用する場合は上甕にも甕を用いるが、単棺も存在する。細形銅剣の出土したK0084埋土から出土した小形壺は直立気味に頸部が立ち上がり、口縁部は強く屈曲外反している。同様の特徴を有する資料として、8区SK0452の資料を上げることができる。

3式：壺形の形態から脱却し甕形土器へと変換を遂げる。胴部はやや丸味を帯びた砲弾形となるが、口径に比して器高が低いため、丸味が強い印象を与える。口縁部は内外に小さく張り出しを有し、外側は四角く成形し、内側は丸味を帯びているため、断面嘴状を呈する。上面は水平もしくはわずかに内傾する。胴部は丸みを帯びるが、より古相を示すものは口縁下でわずかに反転内湾している。また、胴部中位より上に最大径を有し、その部分に小さな三角突帯を貼付するものもある。調整はミガキがなくなり、刷毛目・ナデによる。上甕は甕を使用するが、単棺・壺の打ち欠きを用いることもある。

4式：甕棺の基数が一気に増加する。口縁部の内側への張り出しが特徴的で、外側へはわずかなものが多い。口縁部上面は内傾もしくは水平なものが大半である。胴部は上半がすぼまり、丸みを帯びた砲弾形を呈する。前代に比して器高が高くなり、よりスマートな形態となる。胴部最大径は中位より上に有する。また胴部中位もしくはやや下に1条もしくは2条の小さな三角突帯を付すが、2：1の割合で1条が多い。調整は刷毛・ナデによるが、大半は最後にナデを行う。この時期墓壙に日常土器の甕を破砕して納めるものが数例ある。甕は内傾する逆L字形の口縁部に、胴部は上位が張り、口径とほぼ同じかやや小さいものが主体となる。底部はやや薄くなり、小さな上げ底を呈する。組み合わ



第150図　甕棺変遷図１（縮尺1/16、1/24）

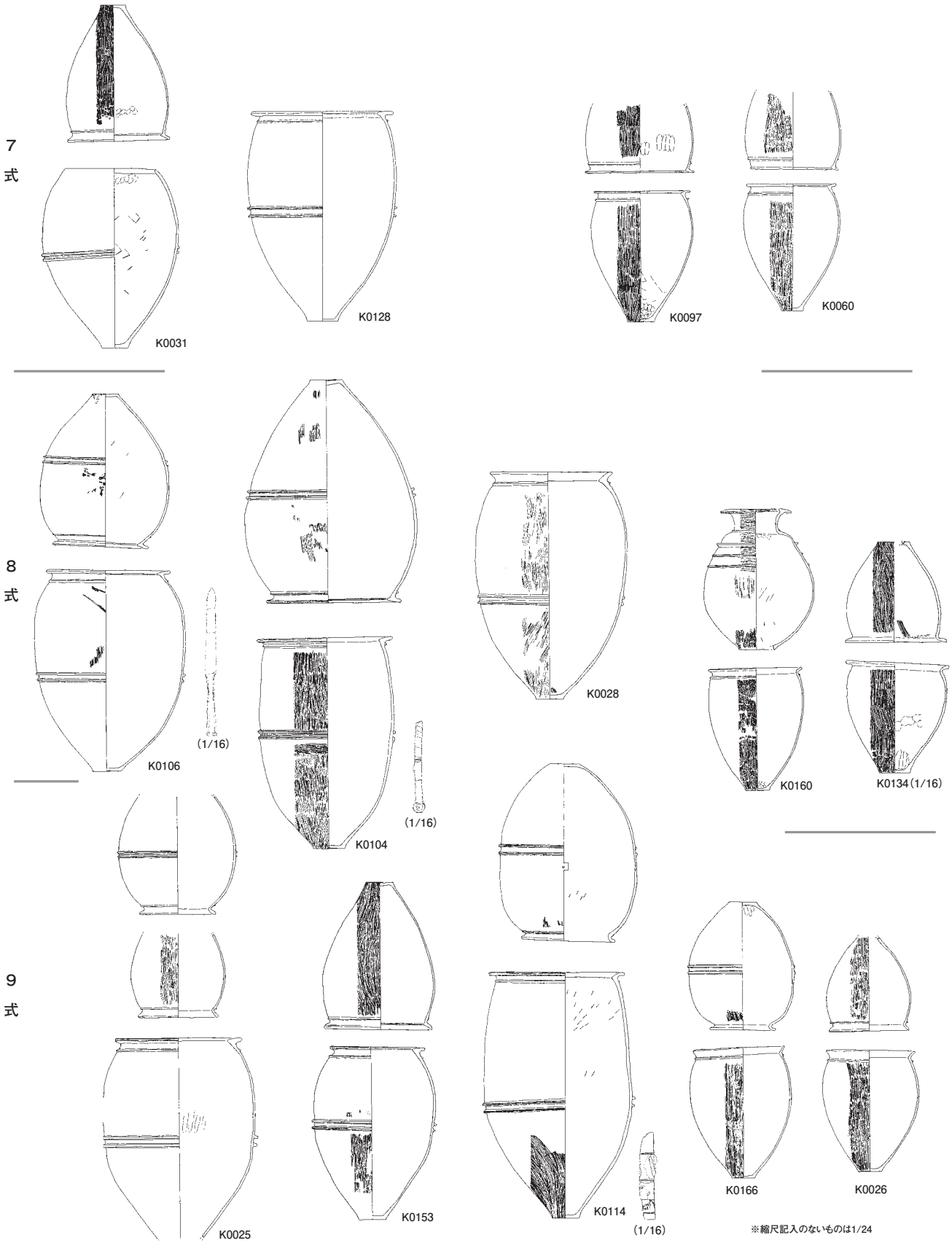


第151図　甕棺変遷図２（縮尺1/16、1/24）

せは甕と甕を基本とするが、鉢・打ち欠き壺の使用も認められる。

5式：甕棺は更に増加する。口縁部の内側への突出は続き、内面端部が丸く肥大するものもある。また4式に比べると外側にも張り出しが進むが、内側に比べるとまだ短く、上面は外傾する。胴部は砲弾形を呈し、上半が直立するものとすぼまるものがある。口縁下には突帯が無く、胴部中位に貼付する突帯はほとんどが2条の三角突帯もしくは見せかけＭ字形の突帯となっている。突帯は大きくシャープになる。調整は刷毛・ナデであり、多くは最後にナデ消しを行う。上甕には鉢を用いるものが6割強を占め、残りが甕と甕の組み合わせで、壺の打ち欠きは極少数に止まる。

6式：前型式からの最大の変化は口縁下突帯の出現である。また、4～6式が甕棺墓の最盛期となる。これ以前にも極少数口縁下突帯を付するものはあったが、本型式より普遍化する。口縁下突帯は1条の三角形が主体を占め、ついで1条の台形があるが、少数2条の三角・台形やＭ字形を呈するものも存在する。胴部には中位よりやや下がった位置に突帯を付し、2条の三角突帯と見せかけ1条のＭ字形を呈するものが主体である。2条の台形突帯は2割程度である。また、突帯が高く大きくなるのも特徴である。口縁部は内外両側に突出したＴ字形を呈し、上面は大半が外傾するが、水平化しているものもある。胴部は長大化が進み、均整の取れた砲弾形を呈する。上半は直立もしくはわずかに開き気味に伸び、胴部最大径は上位に有する。上甕は鉢を用いるものが6割強を占める。また、本調査においては、口縁部にしまりを有する丸味を帯びた甕棺が少数認められる。丸味を帯びた甕棺の上甕として使用される転用甕は、内傾気味の鋤状口縁を呈する。胴部の張りは小さくなり、砲弾形に近くなる。胴



第152図　甕棺変遷図３（縮尺1/16、1/24）

部最大径の位置はやや下がり目となり、底部は平底を指向する。

7式：口縁部は外側への張り出しが強くなり、内側の張り出しは短くなる。また、上面は内傾化するものが見られる。胴部長は前式を頂点として縮小を始め、丸味を帯びるようになる。口縁下の突帯は三角形と台形があり、胴部突帯は2条の台形である。単棺が顕われる。

8式：口縁部の内傾が強くなり、内側への張り出しが少なくなり、断面く字形を呈する。胴部の丸味も強くなり、最大径は中位～上位に有する。胴部突帯は中位に有し、断面は高い台形をなすものが多いが、低くだれて下垂するものもある。頸部の突帯はより屈曲部に近くなり、三角形と台形があるが、三角突帯が優勢である。前段階の7式以降上甕には鉢の使用が無くなり、甕を主体的に使用するようになる。また、上甕に日常土器の転用甕が使用されるようになるが、単棺も引き続き一定数認められる。調整は刷毛目・ナデによるが、最終的に刷毛目を残すものが増加する。

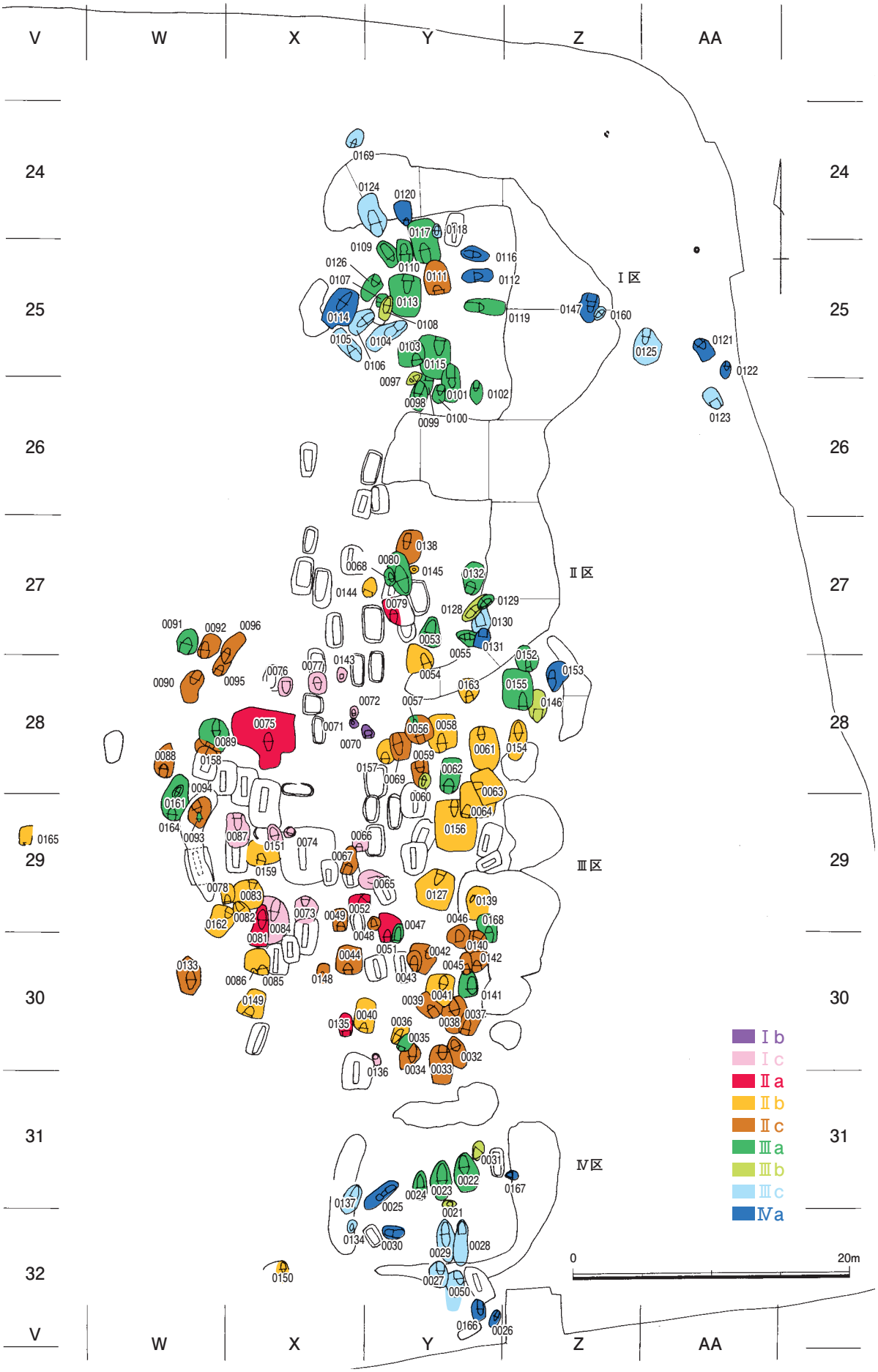
9式：本地点での甕棺の最終型式である。口縁部の立ち上がりは更に進んだ、く字形を呈する。胴部は偏球形に近くなり、肩部の張りが強くなる。突帯はいずれも縮小化し、だれた形態となる。口縁下の突帯は更に屈曲部に近くなり、三角形と台形のものがある。胴部は2条の台形突帯である。上甕には転用甕を使用するものが多数を占め、その多くは8式の大形甕棺と組み合っている。転用の甕は口縁部の立ち上がりが更に進んだく字形を呈し、外面端部が肥厚するものや、内面が内湾するものがある。胴部は最大径が口縁部より大きくなり、丸味がより強くなる。後期への過渡的な様相が強く見られる。

以上を橋口編年に合わせると、1式＝ＫⅠb：板付Ⅱc、2式＝ＫⅠc：城の越、3式＝ＫⅡa・4式＝ＫⅡb：須玖Ⅰ古、5式＝ＫⅡc：須玖Ⅰ新、6式＝ＫⅢa：須玖Ⅱ古、7式＝ＫⅢb・8式＝ＫⅢc：須玖Ⅱ新、9式＝ＫⅣaと捉えることとなる。上下異なる型式が組み合う場合も多く見られ、この場合は異型式間の同時性を示すものと考えられるが、甕棺墓としての型式認定には、より新出の型式を採用した。また、異型式の組み合わせの特徴としては、3・4式、8・9式の組み合わせが比較的多く見られ、特に8・9式の組み合わせは安定的に認められ、同時期性を強く示唆している。また、組み合わせはあまり認められないものの、5式と6式の形態的な差異はほぼ口縁下の突帯の有無にかぎられており、連続性が非常に高いと考えられる。同様に7・8式間の形態的差異も小さいようである。以上から1式→2式→3・4式→5・6式→7～9式のまとまりで変遷を捉えることができる。

2）8区における弥生時代墓地の形成過程

8区における生活遺構は前期末より営みを開始し、中期初頭にかけて掘立柱建物SB0211、SC0983・1500・1520等の円形住居及び、方形住居SC0640・1157・1800が広がり、土坑出土遺物などから見ても、出現当初より大規模な集落として展開していたようである。同時期より埋葬遺構も営まれている。埋葬遺構は生活遺構の東側に近接し、甕棺墓としては1式のK0070・0071が端緒となる。この南北には列状の木棺墓・土壙墓が区画Ⅱ・Ⅲ区にわたって営まれており、後代の埋葬遺構の撹乱等も受けていないことから、集落頭初期の墓域として記憶されていたのではないだろうか。中期初頭段階（2式）には前代に形成された南北列の西側（集落域の東隣接地）に広がる。この時期の墓域はほぼX－28～30に及び、木棺墓・土壙墓・甕棺墓で構成される。大形棺は2基1組にし、木棺墓・土壙墓はD0469・0992・0991やD0680・0679・0678・0477、D0481・0487などのように一連の系列的な埋葬を想像させる配置を取る。D0957及びK0084からそれぞれ細形銅剣1口が出土する。また、この時期に墓域と生活域は最も接近する。なお、D0957は墓坑規模や副葬品を有すること、また切り合い関係等から墓域形成初期の埋葬遺構として位置付けられる。

中期初頭～中期前半には区画Ⅳ北～東側の方形住居群が営まれるとともに、埋葬遺構に近接した生



第153図　８区検出甕棺時期別分布図（縮尺1/400）

活遺構が西側に展開するようになる。その結果墓域から20m程の距離をとって、取り囲むように北～西に生活遺構が展開する。3式甕棺墓も基本的には前代までに形成された墓域内に配される。その中でK0075のような大形の掘り方を呈し、その後の切り合いも認められない埋葬遺構の存在は注目される。4式期になると甕棺数は格段に増加をはじめ、墓域の拡大をみる。この時期には大きく2ヶ所のまとまりに分けることができる。ひとつは前代からの西側墓群の南側に南北の列状に配される一群である。もうひとつは1式に形成された列状墓群の更に東側に南北列状に埋葬された甕棺墓群である。この段階で東西25m、南北35mの範囲（区画Ⅱ・Ⅲ）に広がり、K0127には銅釧が副葬されている。この時期までには北側の方形住居群は廃棄され、生活遺構は集落の西側部分に限定され、集落を生活域と墓域で東西に二分する構造が確定する。

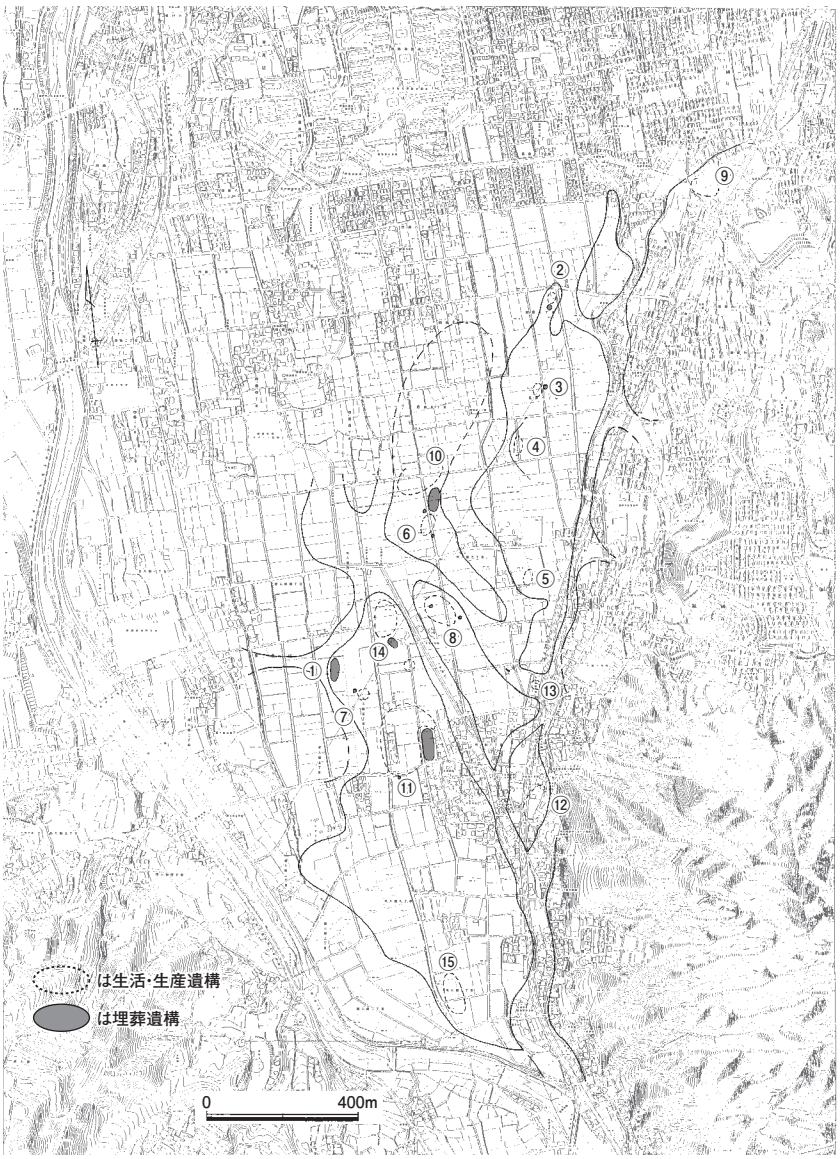
中期中頃の5式期もほぼ2群で埋葬が行われる。ひとつは西側墓群の北西端にのび、もう一群は東側墓群の空閑地を埋めるように配されている。またこの時期注目すべきは、最新期に北側区画Ⅰの造営契機と考えられるK0111の埋葬が行われたことである。この時期に区画溝の掘削が行われ、区画墓形成がはじまる。6式期には区画Ⅱ・Ⅲに埋葬されると共に、区画Ⅰ内への埋葬が進む。区画ⅠはK0111を契機として、これと対を成し鉄剣の副葬が行われているK0113の2基が埋葬の中心にあたるものと考えられる。この時期には区画内の北と南に2群のまとまりが認められる。また、南側の区画Ⅳにおいても中心埋葬と考えられるK0022・0023の一組の埋葬が始まる。なお、全体的に見れば、いずれの区画も住居域である西側よりも東側を意識して築かれている状況がうかがわれる。

中期後半～後期初頭が集落及び埋葬の終焉である。中頃～後半代には掘立柱建物と共にSC0952・1140・1155・1220・1221等の大形住居跡が存在し、本集落が更に盛行していることが想定できる。甕棺墓は7～9式段階では区画Ⅲへの埋葬は行われていない。区画Ⅰでは東・西に更に2群の埋葬が行われ、特に西側に位置する区画軸線に対して斜方に埋置された一群の3基からは鉄器の副葬が認められた。また、この時期には区画溝がほぼ埋没し緩やかな窪み状となっていたものと考えられ、区画規制を外れ区画溝と切り合うものや、区画外に埋葬された甕棺も少数認められる。また、区画Ⅳでも区画内への埋葬が行われ、一部は区画の規制をはずれたものも存在する。更に区画Ⅳ東側検出時に出土した鉄矛（471）は本来この区画内の甕棺に副葬されていたものが撹乱を受け、遊離したものと考えられる。なお、区画Ⅱについては区画を意識した明確な埋葬は認められなかった。これについては想像の域を出るものではないが、当初区画墓域確保の意識を持って溝を掘削したものの、西側に伸びる列状の木棺墓・土壙墓群の存在により規制を受け、造墓スペースが不足したため、結果として区画墓を造り損ねた可能性を考えてみたい。

3）早良平野奥部（室見川東岸地区）における弥生時代集落の動向

東入部遺跡が位置する室見川東岸の早良平野奥部では、荒平山から南北に伸びる丘陵の西側緩斜面と、ここから舌状に伸びる沖積微高地上に弥生時代の遺構が立地する。それぞれの微高地は丘陵を源とし、南北に流れる小河川によって区画されており、南側から東入部遺跡・岩本遺跡・四箇船石遺跡・重留遺跡・重留村下・熊本遺跡等の個別の遺跡名称を与えられているが（第2図）、巨視的には一連のまとまりを持った遺跡群として捉えることができる。この遺跡群においてはこれまでの圃場整備を中心とする調査によって、弥生時代各時期の遺構・遺物が確認されており、おおよその遺構分布が明らかとなっている。遺跡群を構成するのは丘陵に近接した微高地であり、これまでの調査ではこれらの遺跡群より西側では主に古代～中世の遺構は認められるものの、弥生時代の遺構は検出していない。

概観すると、前期には丘陵に近い遺跡群東側ではなく、より北～西側低地に近い微高地北半部分に



① **東入部2次6区**：夜臼Ⅰ～板付Ⅰ甕棺墓16基・土壙墓2基。
② **重留2次16地点**：前期の竪穴住居跡4棟・貯蔵穴6基、前期～中期初頭の甕棺墓38基。中期後半遺物が多量に出土。
③ **重留2次8－Ⅲ地点**：前期前半の竪穴住居跡9棟・貯蔵穴16基、前期前半～中期初頭の甕棺墓群。
④ **重留2次9－Ⅲ地点**：環濠が復元される。前期前半竪穴住居跡7棟。
⑤ **重留3次10地点**：前期の竪穴住居跡1棟、溝等。
⑥ **四箇船石遺跡1次12地点Ⅵ区**：前期竪穴住居跡4棟、甕棺墓・土壙墓12基。埋葬遺構は生活遺構を挟んで南北に隣接する。
⑦ **東入部2次10区**：前期前半～中頃竪穴住居跡1棟・土坑2基・甕棺墓１基。
⑧ **岩本1次13地点、2次**：前期中頃～中期の竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑群。中期後半甕棺墓2基
⑨ **重留村下1次**：中期後半遺物が多量に出土。
⑩ **四箇船石1次3地点Ⅶ区・15地点、4次**：中期前半～末の生活遺構、周辺の低地から中期後半代の遺物多量に出土。前期後半～後期前半甕棺墓98基、木棺墓1基、土壙墓11基。
⑪ **東入部2次8･13区、3次18・19区、11次**：前期末～後期初頭大規模集落。埋葬遺構200基。
⑫ **東入部4・5・8次**：中期後半竪穴住居まとまるが、墓地は未確認。
⑬ **岩本3次**：中期後半～後期初頭水田。
⑭ **東入部1次2・4区、2次11区**：中期初頭～前半生活遺構確認。前期末甕棺墓3基・石棺墓。
⑮ **東入部7次47・48区**：前期末～中期前半集落完掘。生活遺構のみ、墓地は伴わない。

＊詳細についてはP15文献を参照のこと

第154図　周辺遺跡弥生時代遺構分布図（縮尺1/20000）

点的に小集落を形成したものと考えられ、近接する低地部での小規模な水田経営が考えられる。また、集落内は居住域と埋葬域が近接しながらも混在することなく、明確に境界が意識されている。各集落はそれぞれ墓地を伴い、完結したまとまりを呈している（②・③・④・⑤・⑦）。前期後半～中期初頭にかけて、それまでの集落は解体・廃絶し、より大規模な集落として再構成される。この中で現在までのところ東入部2次8区（⑪）、四箇船石4次を中心とする地点（⑩）の2箇所が中期後半まで継続・拡大し、これらは集落に隣接して継続的に墓域を形成している。また、中期後半代には丘陵に近接した重留村下1次（⑨）、東入部4・5・8次地点（⑫）等にも大規模な集落が営まれており、集落の拡大・人口の増加に伴い新たな地点の開発・定着が進んだものであろう。これらの集落群は社会的なまとまりを有したものと考えられる。なかでも東入部2次8区においては、前期末～中期末にかけて埋葬遺構への継続的な金属器副葬が認められ、遺跡群内の中心集落としての位置付けが可能であろう。その後、遺跡群内においては前期の集落解体同様、中期後半～後期初頭において各集落が忽然と姿を消している。8区においても区画墓の造営を終えた後期初頭以降生活の痕跡が途絶えている。遺跡群内に再び生活遺構が認められるのは弥生時代終末期になってからで、その間の動向については不明といわざるを得ない。この時期の集落の廃絶・再開については不明な点も多く、今後の検討課題としたい。

図　　版

弥生時代墓地調査風景

圃場整備事業地現況（南から、2009年撮影）

1　墓地Ⅰ区
（上空から）

2　墓地Ⅰ区
（西から）

図版2

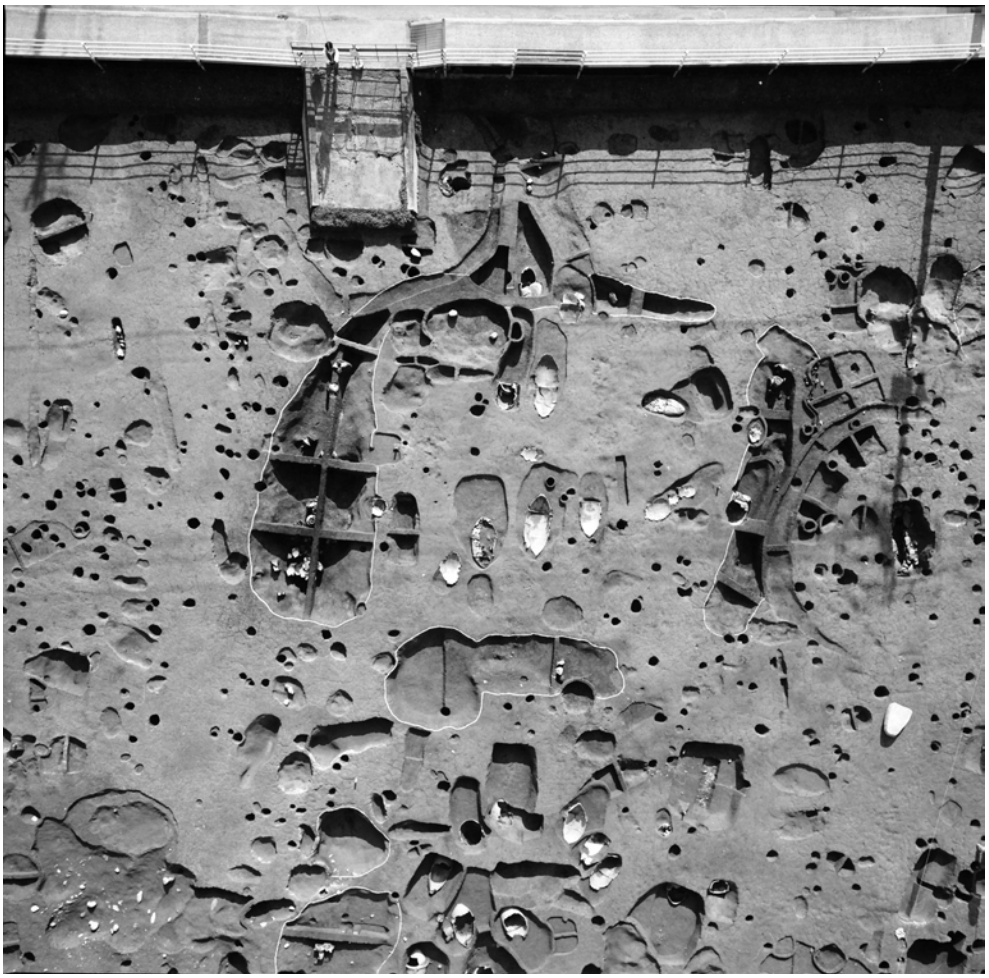
1　墓地Ⅱ区
（上空から）

2　墓地Ⅱ区
（東から）

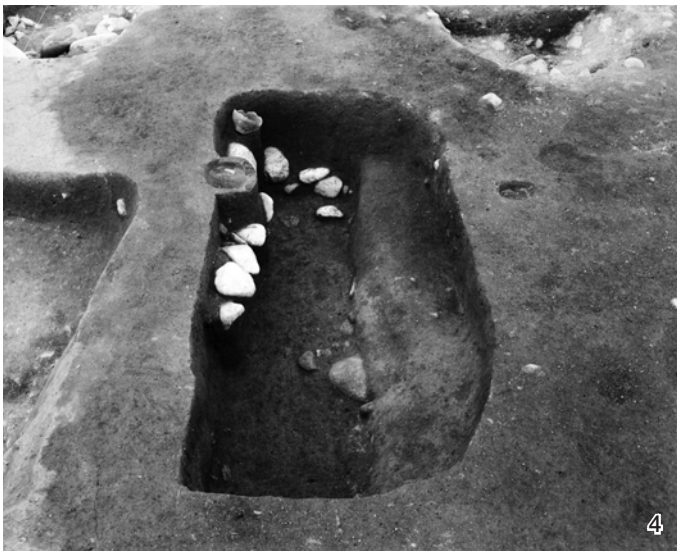
墓地Ⅲ区（上空から）

図版4

1　墓地Ⅳ区
（上空から）



2　墓地Ⅳ区
（北上空から）



1　D0444（南から）

2　D0448（南から）

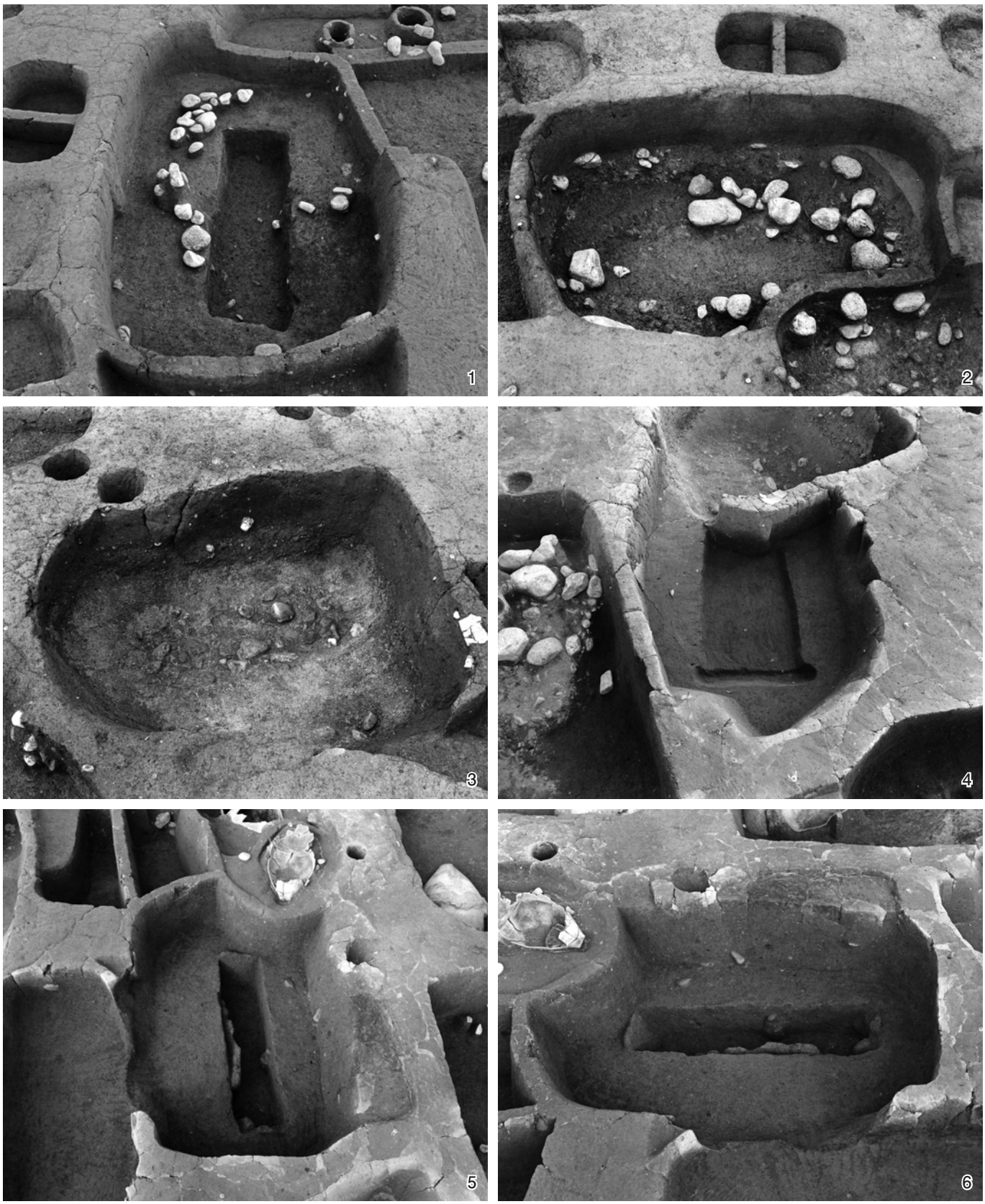
3　D0449（南から）

4　D0463（北から）

5　D0464（南から）

6　D0466（西から）

図版6



1　D0469（北から）

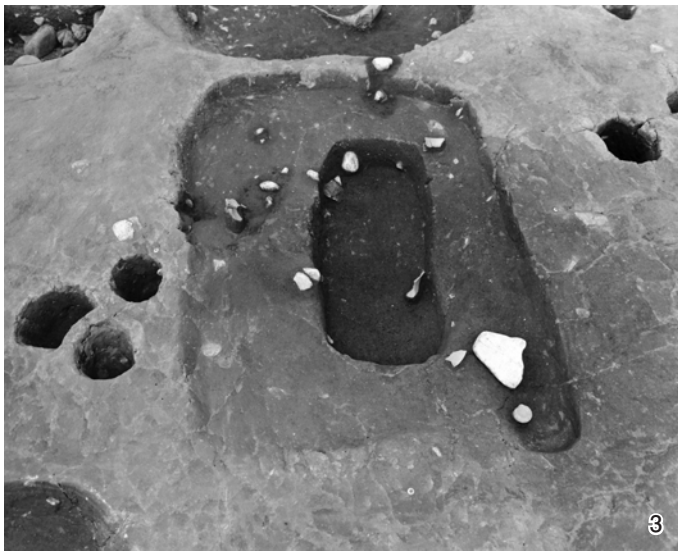
2　D0469（西から、完掘後）

3　D0470（東から）

4　D0471（北から）

5　D0472（南から）

6　D0472（西から）



1　D0473（北から）

2　D0474・0475（南から、右がD0474）

3　D0477（南から）

4　D0481（北から）

5　D0487（南から）

6　D0488（北から）

図版8

1　D0491（東から）

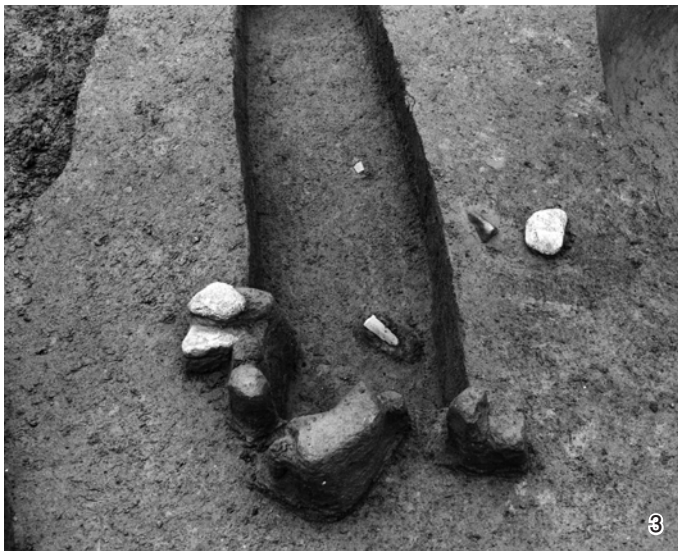
2　D0493（北から）

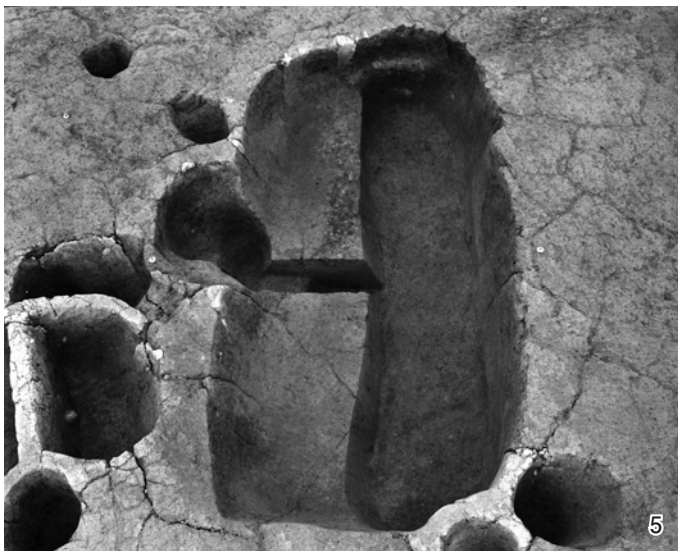
3　D0500（北から）

4　D0512（東から）

5　D0516（北から）

6　D0548（北から）





1　D0678（北から）

2　D0679（北から）

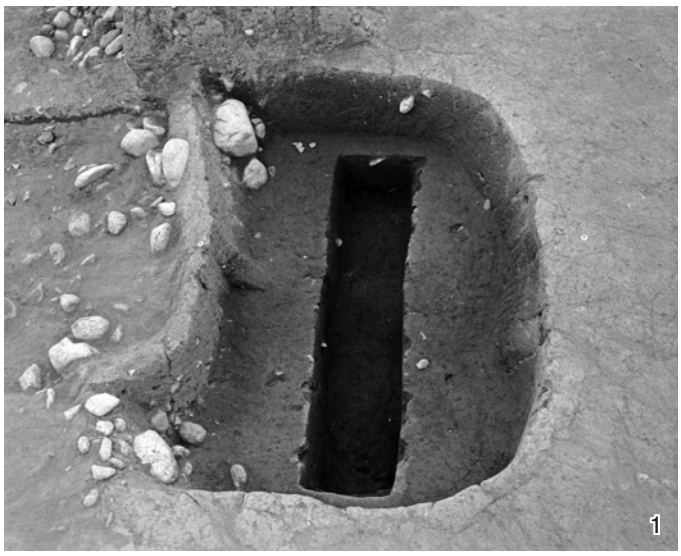
3　D0679遺物出土状況（北から）

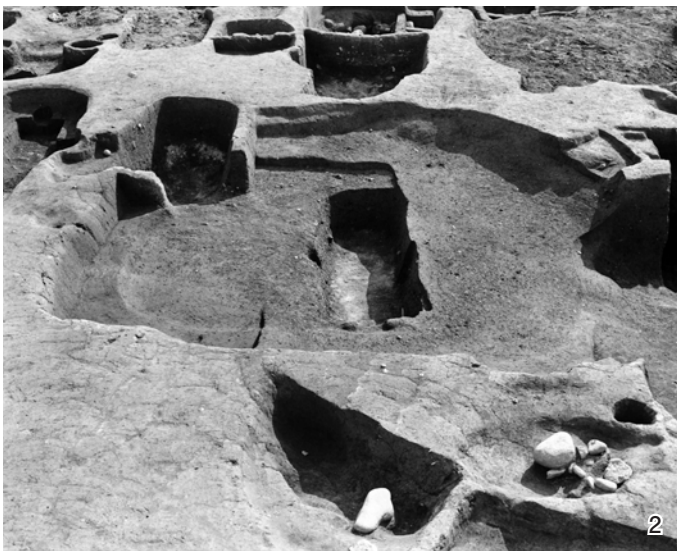
4　D0680（北から）

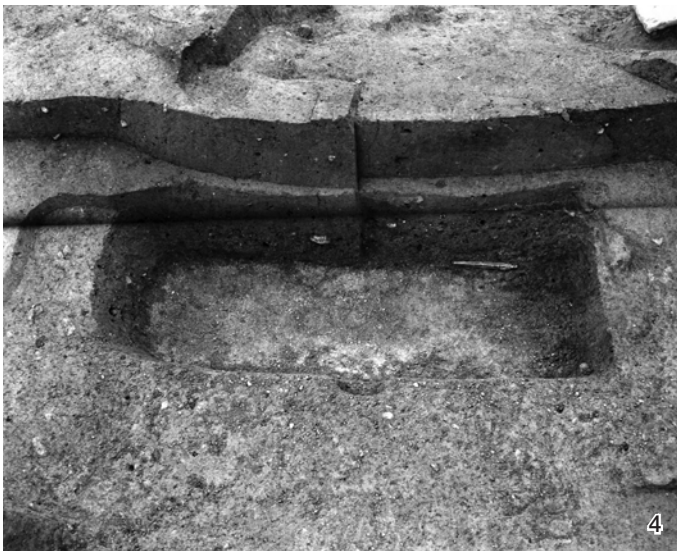
5　D0903（南から）

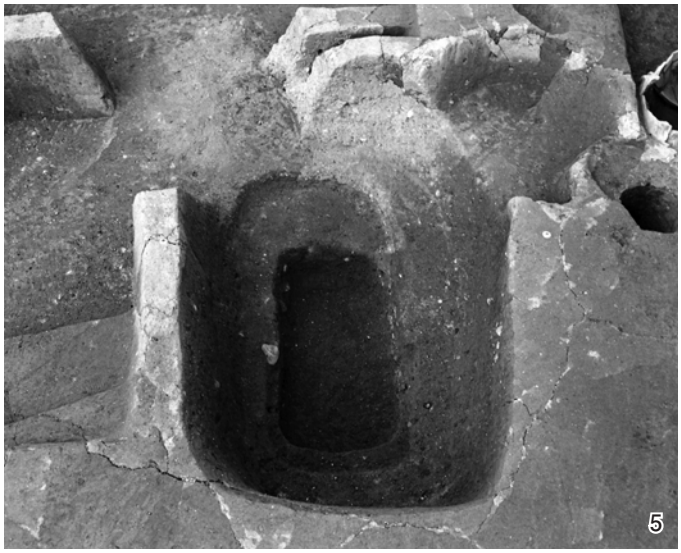
6　D0908（南から）

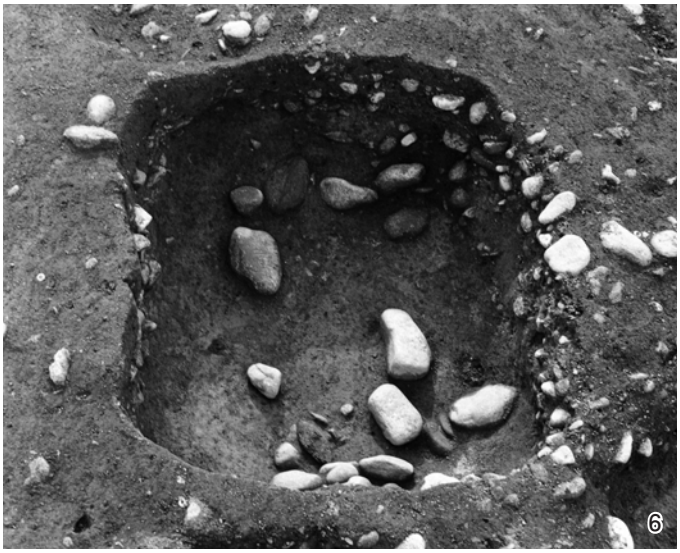
図版10











1　D0956（北から）

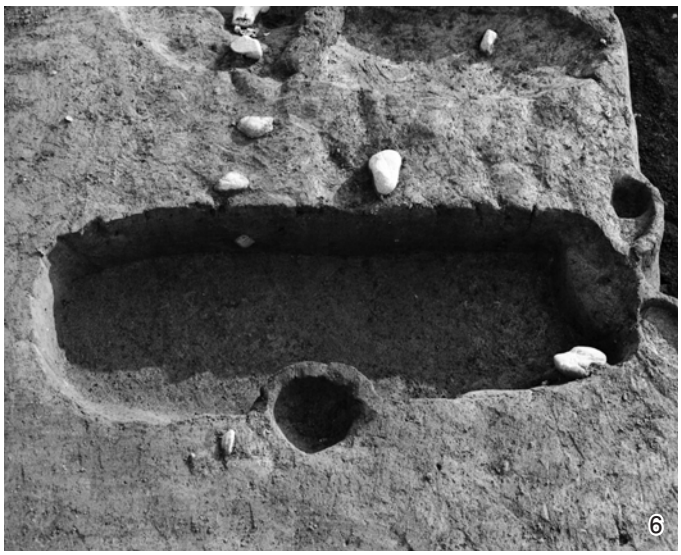
2　D0957（北から）

3　D0957（東から）

4　D0957遺物出土状況（東から）

5　D0958（南から）

6　D0984（北から）



1　D0987（北から）

2　D0988（南から）

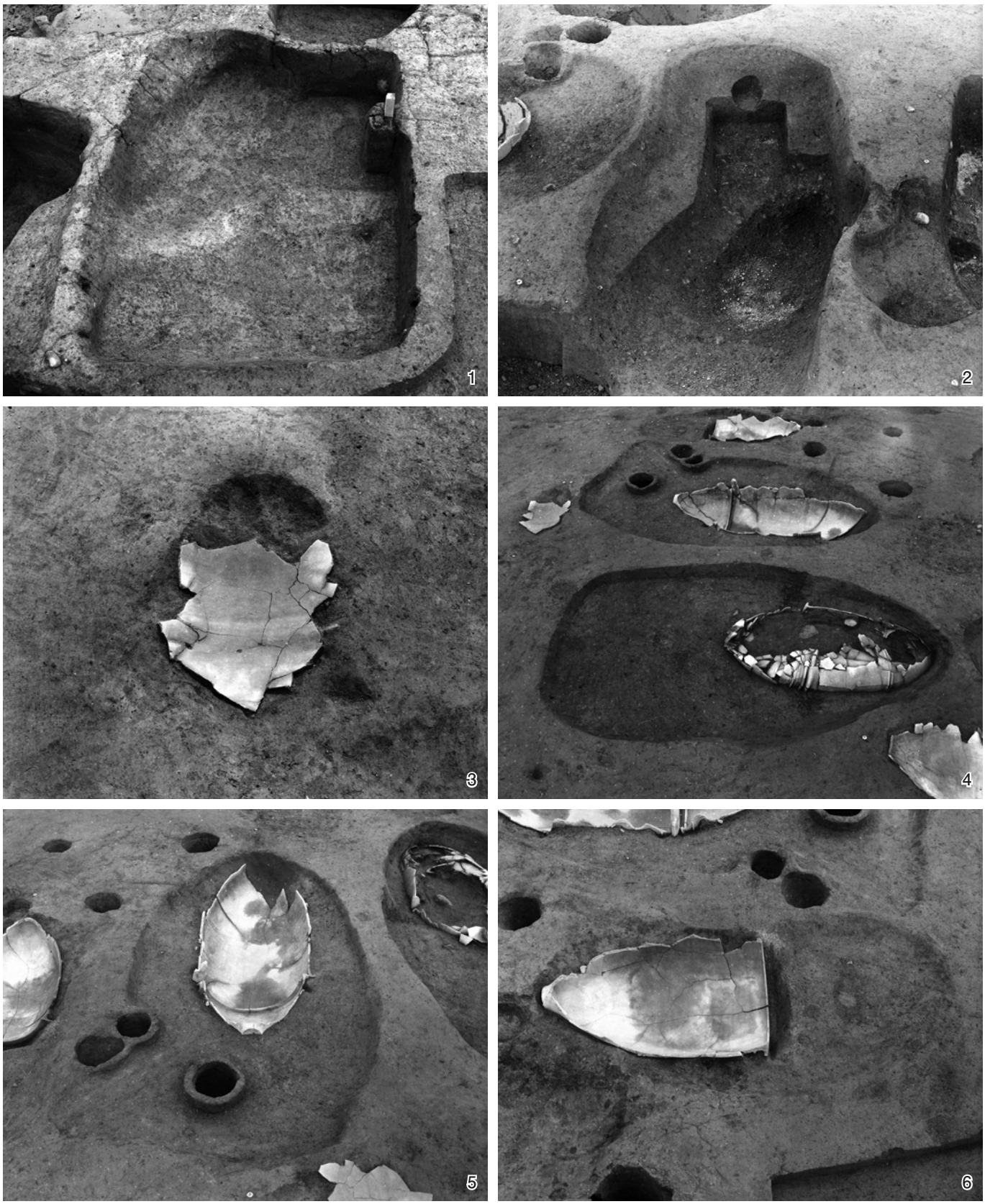
3　D0989（西から）

4　D0990（北から）

5　D0991・0992（北から、右がD0991）

6　D0993（北から）

図版12



1　D0994（西から）

2　D0996（北から）

3　K0021（西から）

4　K0022（東から）

5　K0023（南から）

6　K0024（西から）

1　K0025（北から）

2　K0026（西から）

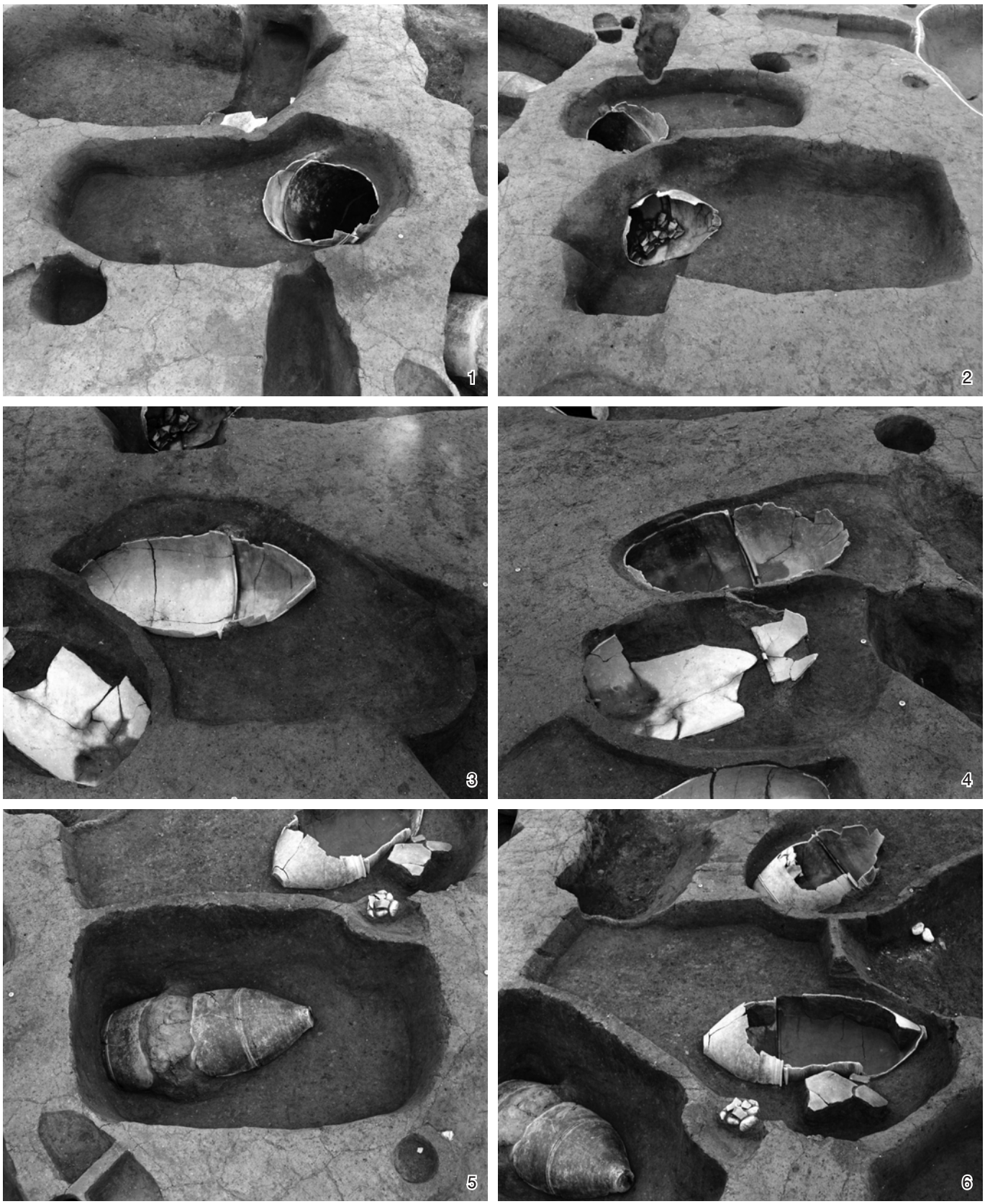
3　K0027（西から）

4　K0028・0029（西から、奥がK0028）

5　K0030（北から）

6　K0031（東から）

図版14



1　K0032（東から）

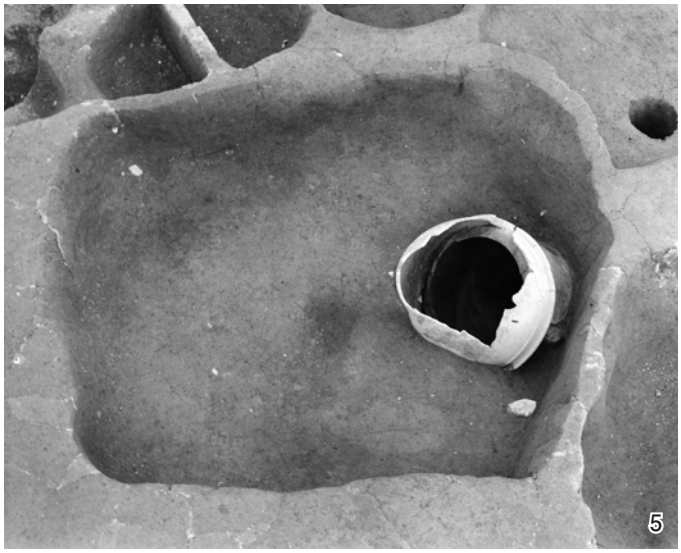
2　K0033（西から）

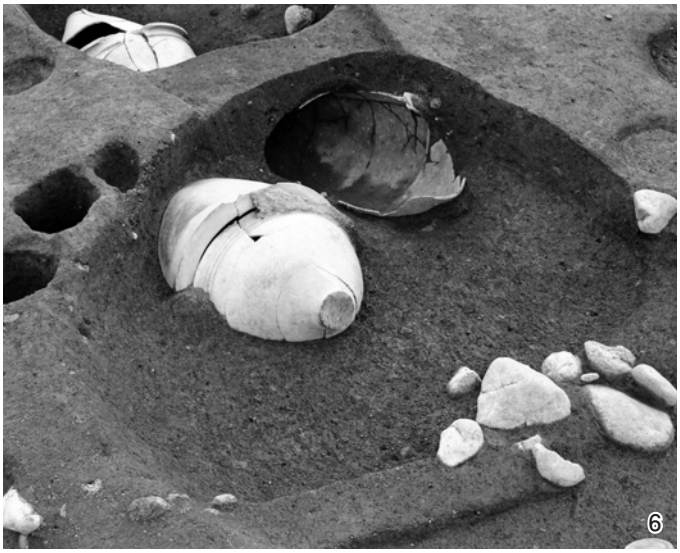
3　K0034（西から）

4　K0035・0036（東から、手前がK0035）

5　K0037（東から）

6　K0038（東から）





1　K0039（西から）

2　K0040（西から）

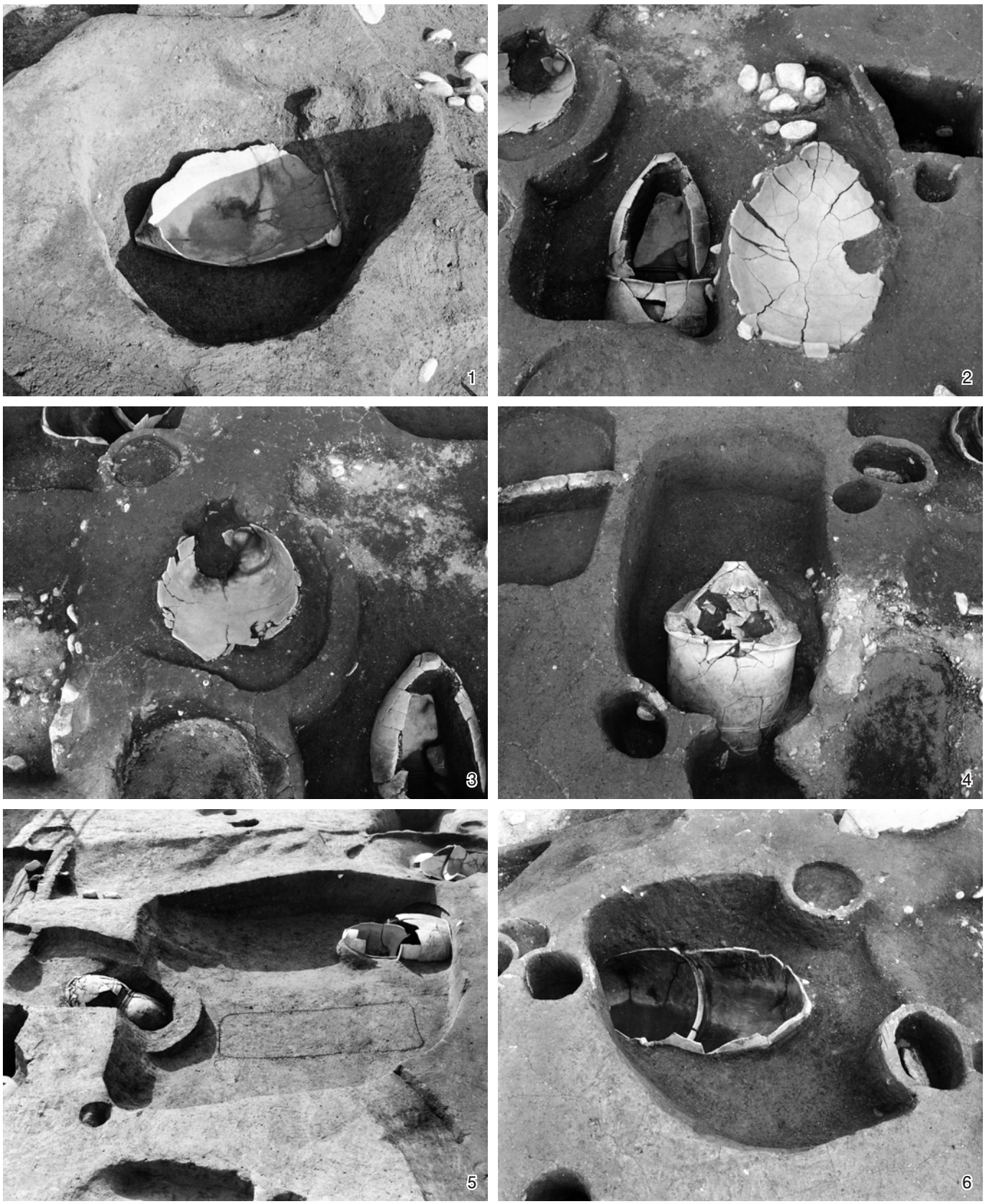
3　K0041（西から）

4　K0042・0043（東から、手前がK0042）

5　K0044（東から）

6　K0045・0142（北東から、手前がK0142）

図版16



1　K0046（西から）

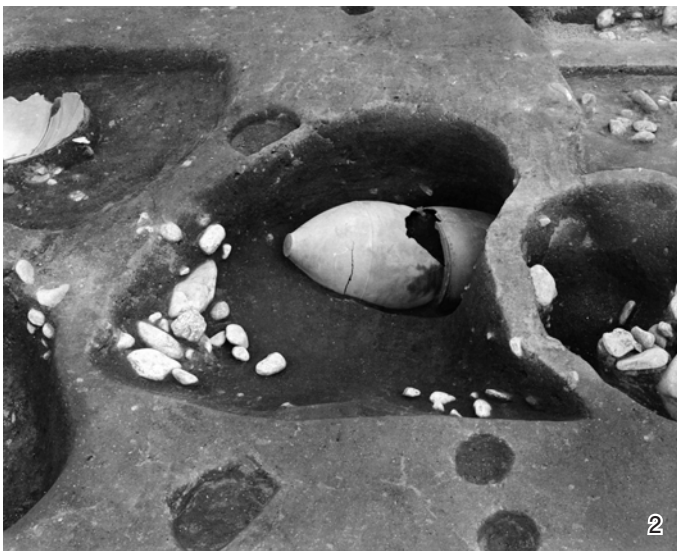
2　K0047・0051（南から、右がK0047）

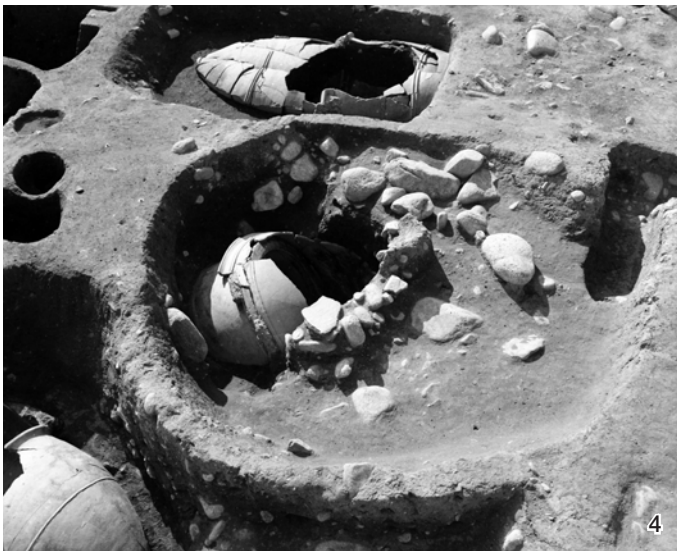
3　K0048（南から）

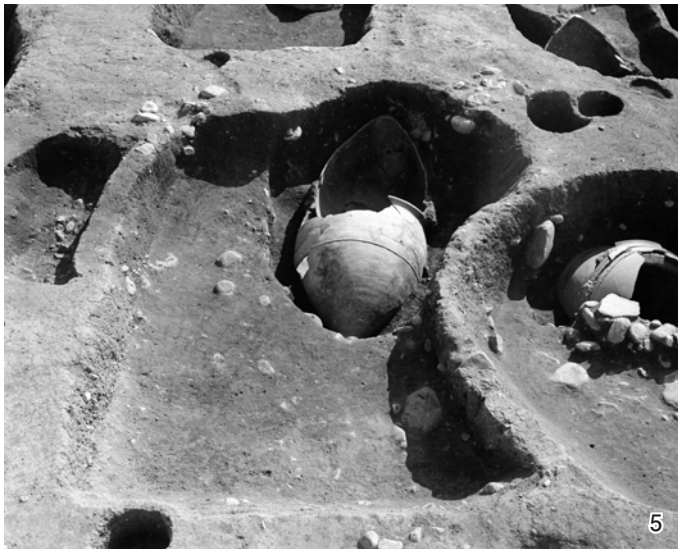
4　K0049（南から）

5　K0050（東から、左はK0166）

6　K0052（北西から）







1　K0053（北から）

2　K0054（西から）

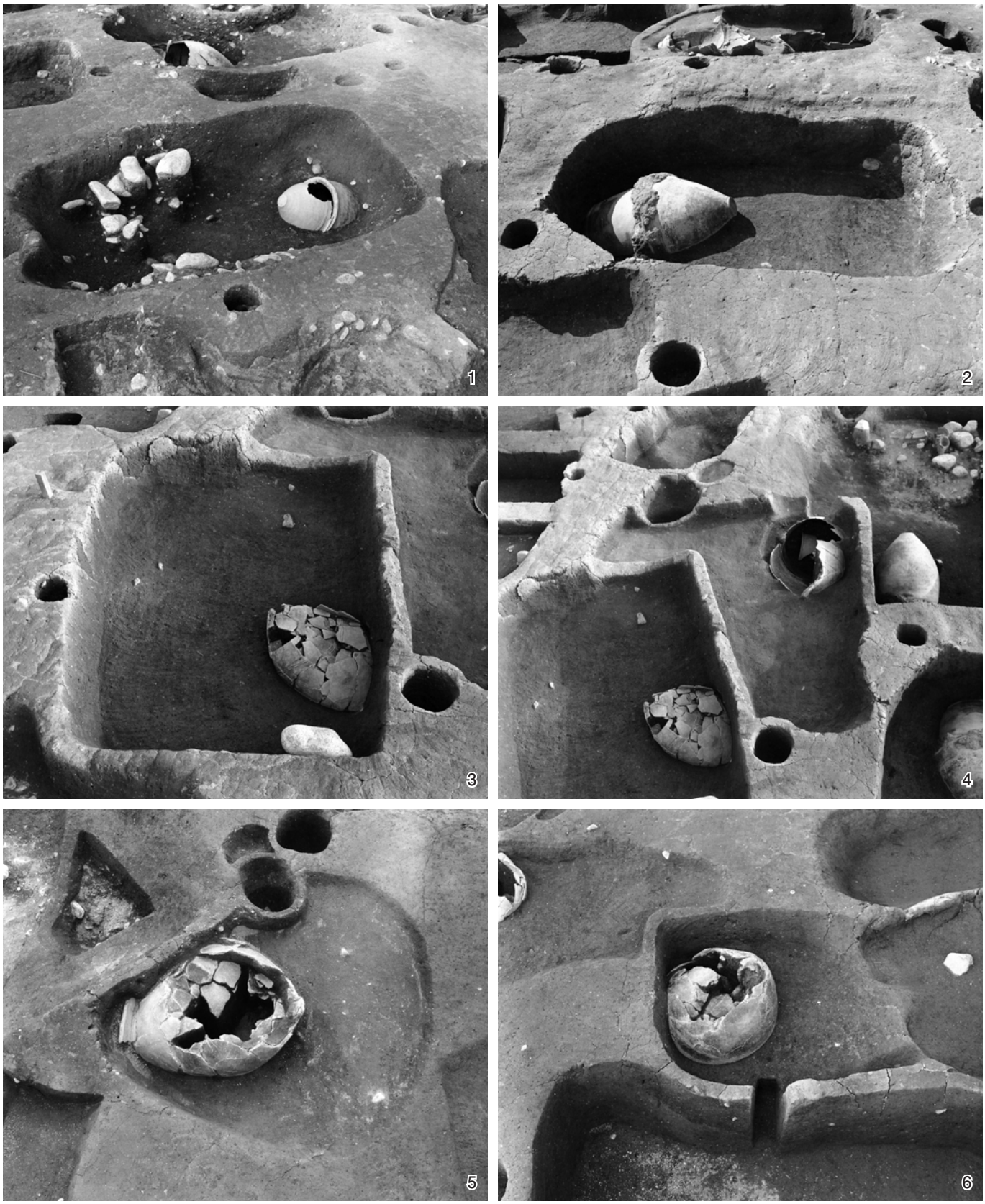
3　K0055（東から）

4　K0056（東から）

5　K0058（北から）

6　K0059・0060（南から、奥がK0059）

図版18



1　K0061（東から）

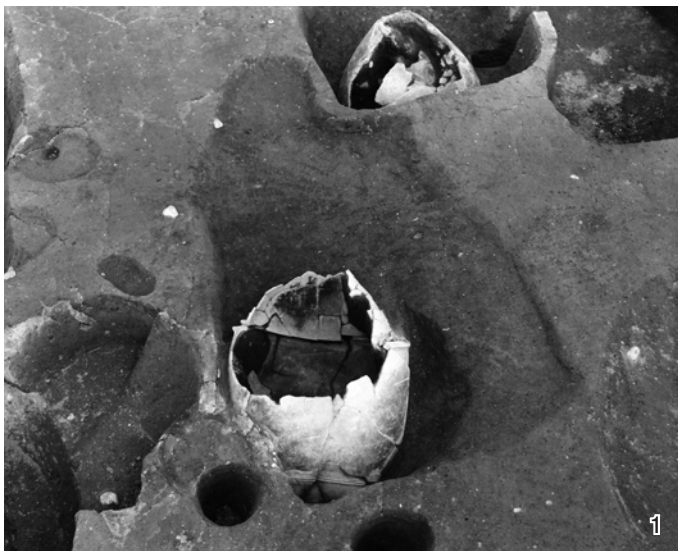
2　K0062（東から）

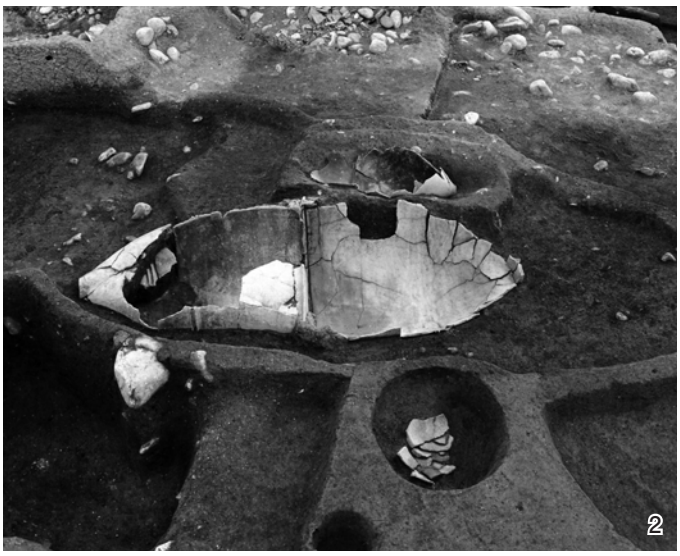
3　K0063（北から）

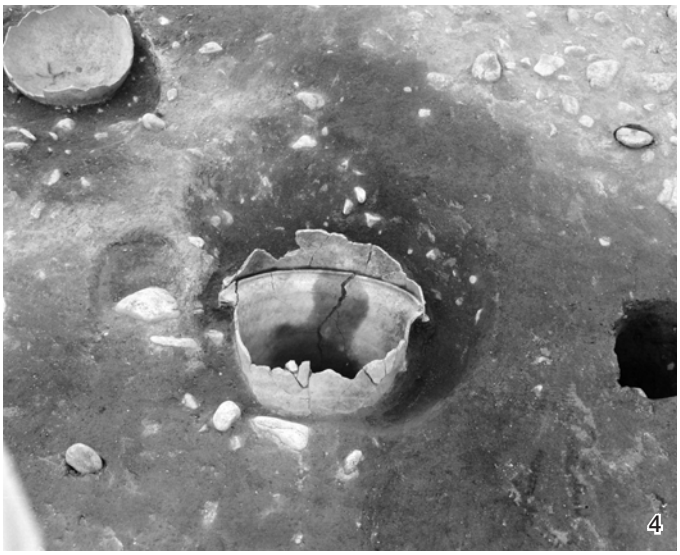
4　K0064（北から、中央がK0064）

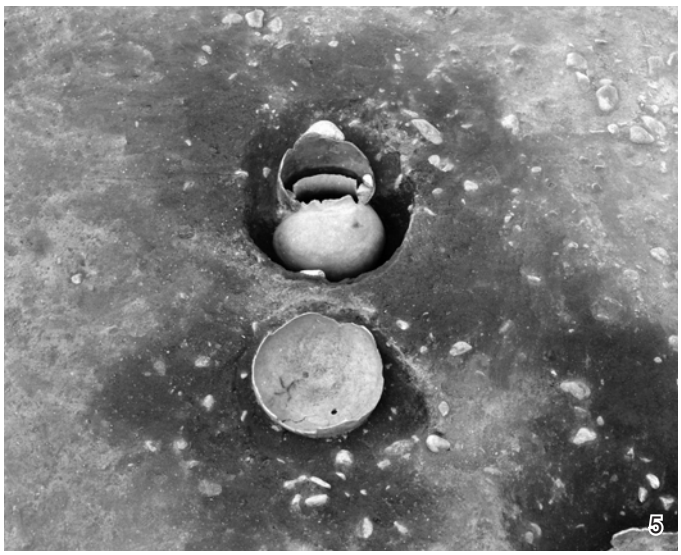
5　K0065（北から）

6　K0066（東から）









1　K0067（南から）

2　K0068・0080・0145
（東から、奥からK0068・0080・0145）

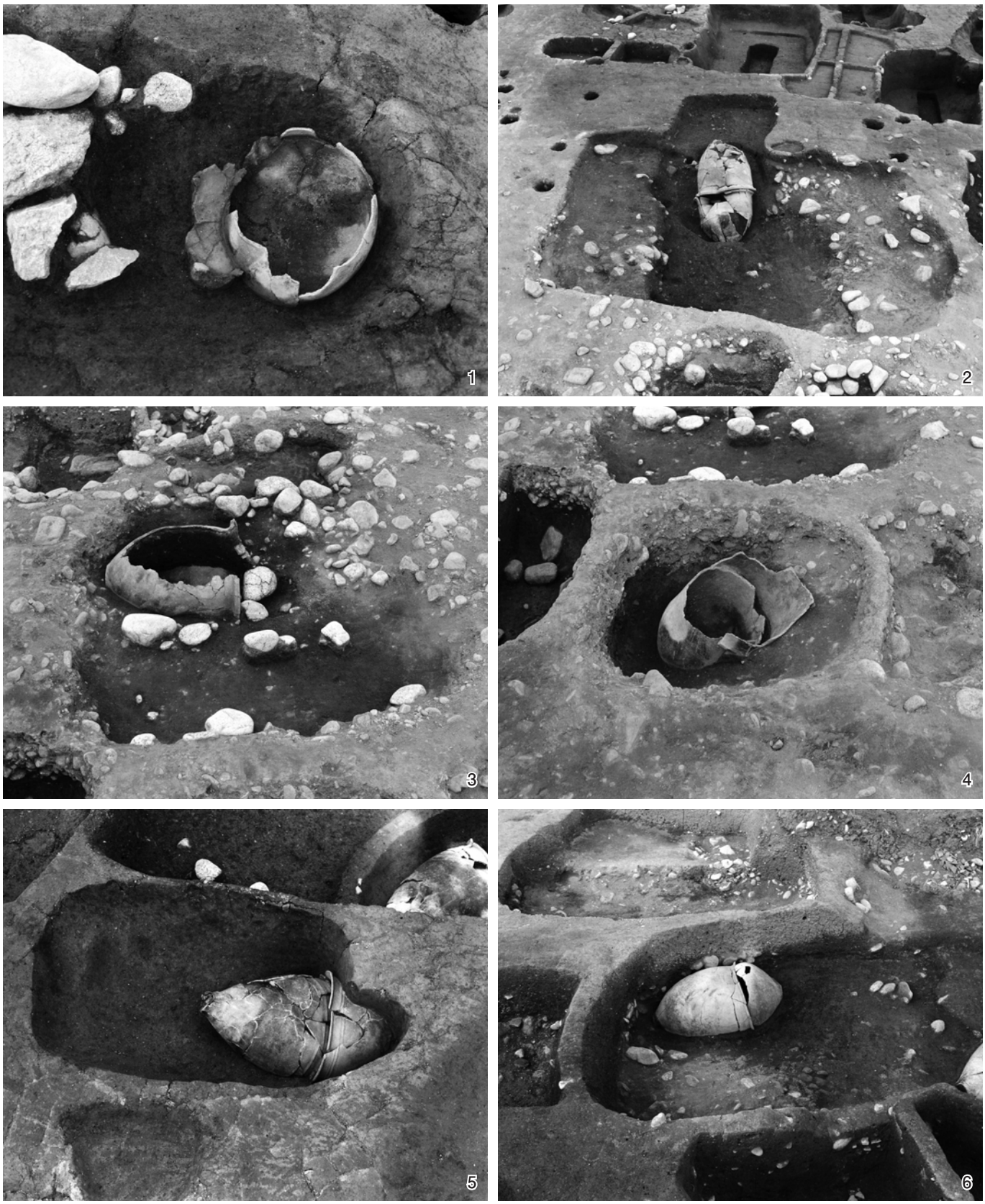
3　K0069・0157（西から、奥がK0069）

4　K0070（南から）

5　K0071・0072（南から、手前がK0071）

6　K0073（南から）

図版20



1　K0074（東から）

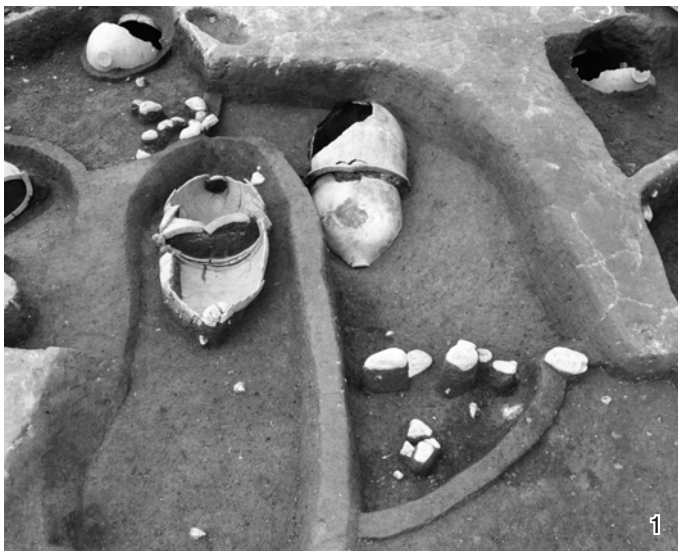
2　K0075（北から）

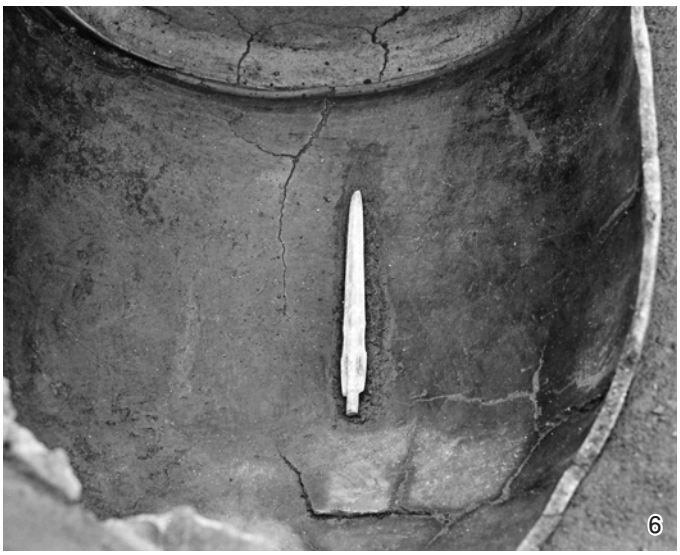
3　K0076（東から）

4　K0077（東から）

5　K0078（西から）

6　K0079（東から）





1　K0081・0084（南から、左がK0081）

2　K0081（北から）

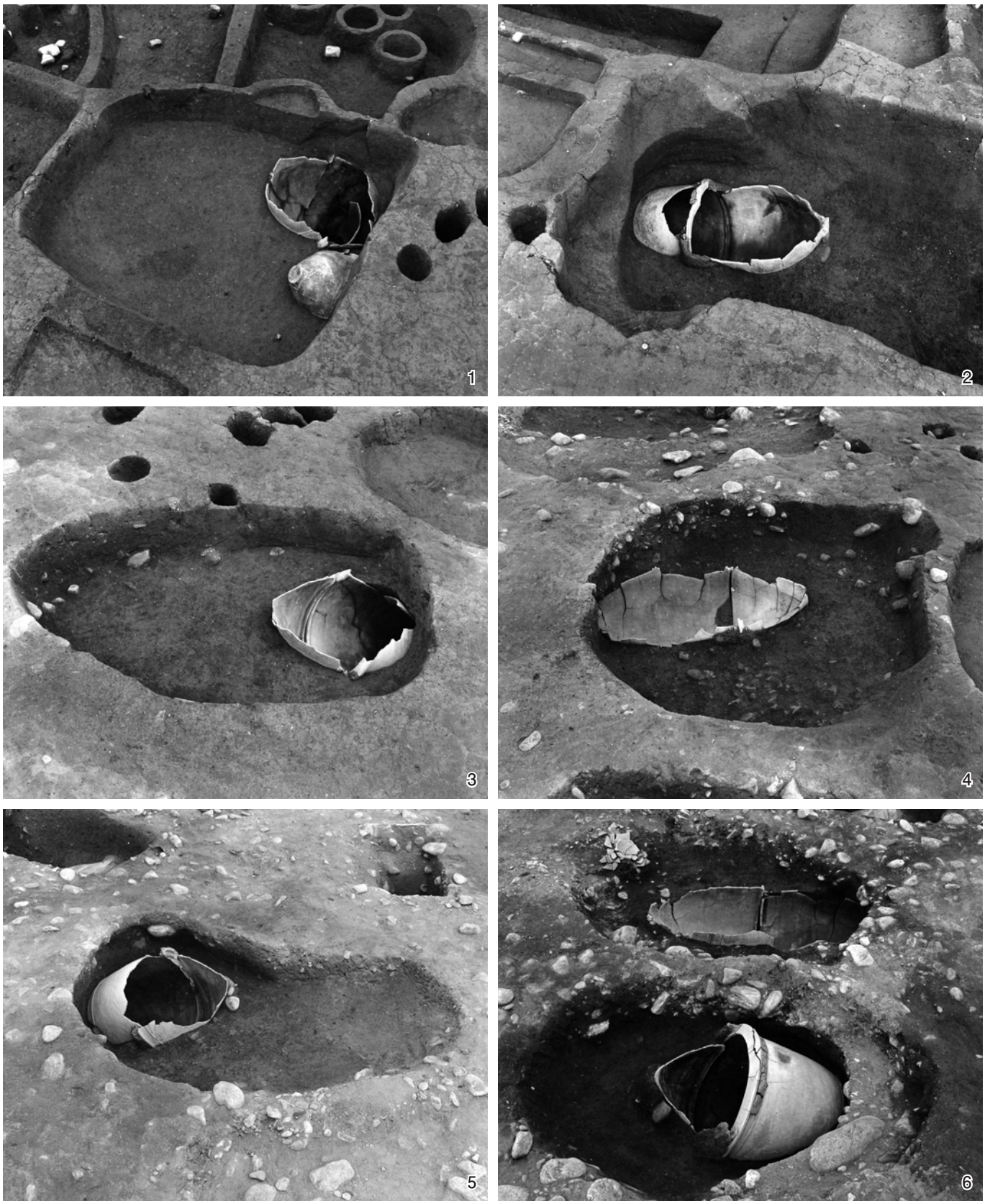
3　K0082（北東から）

4　K0083（南から）

5　K0084（東から）

6　K0084遺物出土状況（北から）

図版22



1　K0085・0086（西から、奥がK0085）

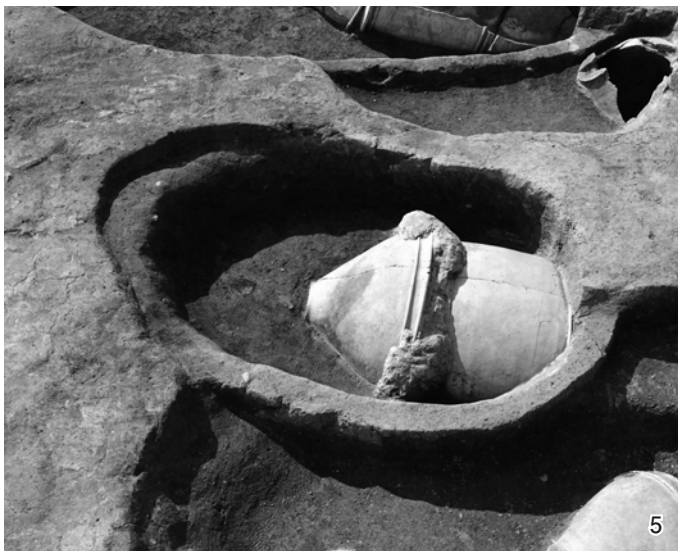
2　K0087（西から）

3　K0088（西から）

4　K0089（西から）

5　K0090（西から）

6　K0091（西から、手前がK0091）



1　K0092（北から）

2　K0093・0094（西から、右がK0093）

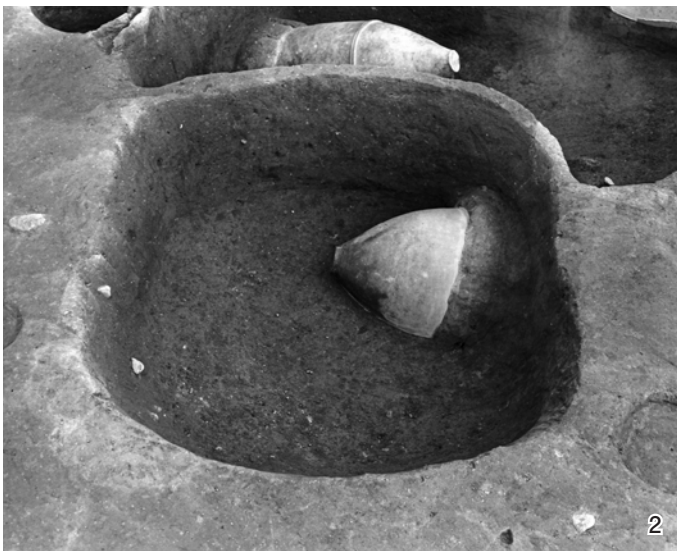
3　K0095・0096（北から、奥がK0095）

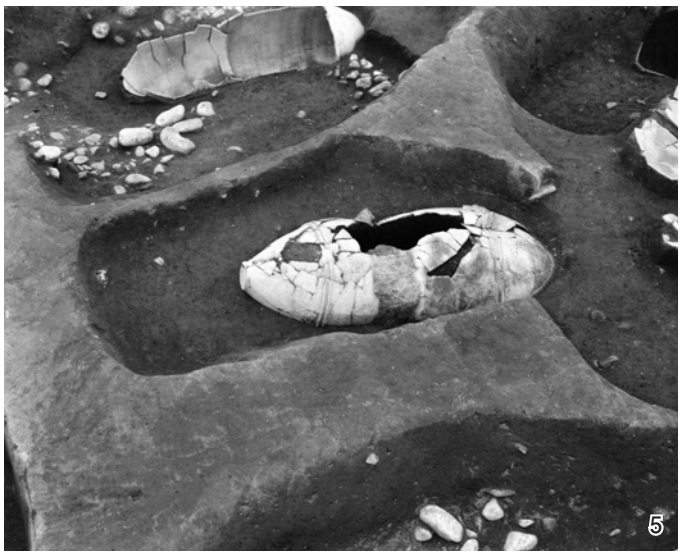
4　K0097・0098・0099
（西から、手前からK0097・0098・0099）

5　K0100（東から）

6　K0101（東から、手前がK0101）

図版24





1　K0102（東から）

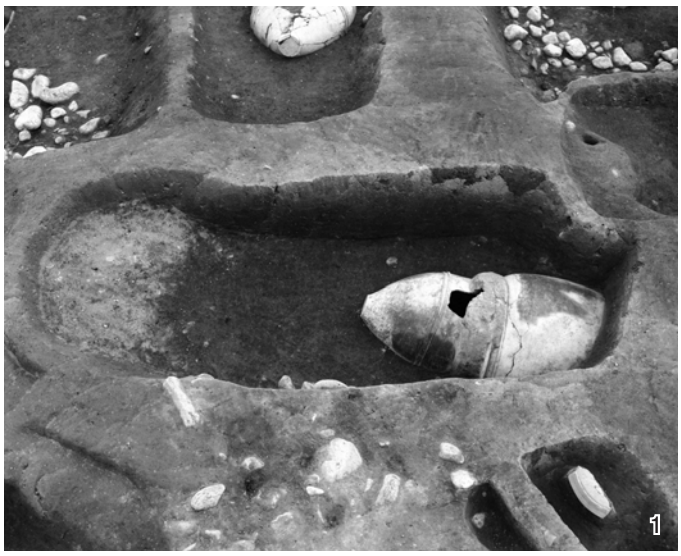
2　K0103（西から）

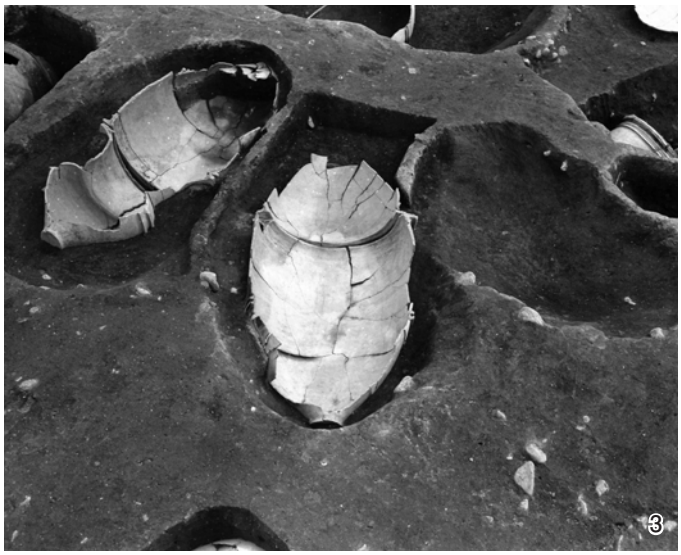
3　K0104（南東から）

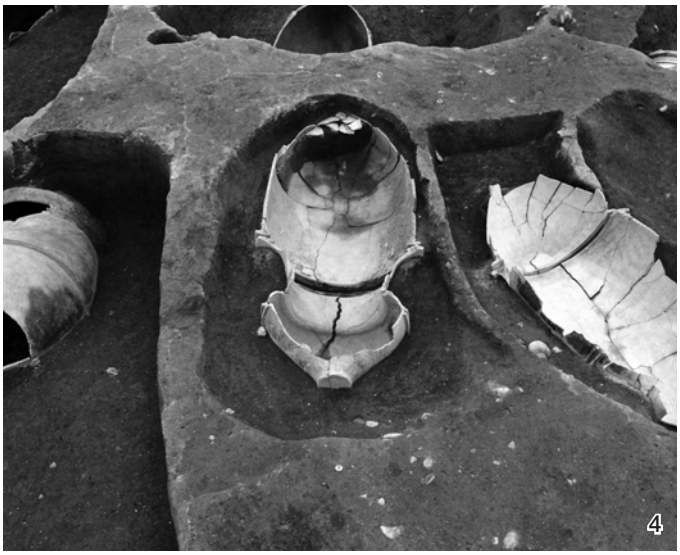
4　K0104遺物出土状況（南東から）

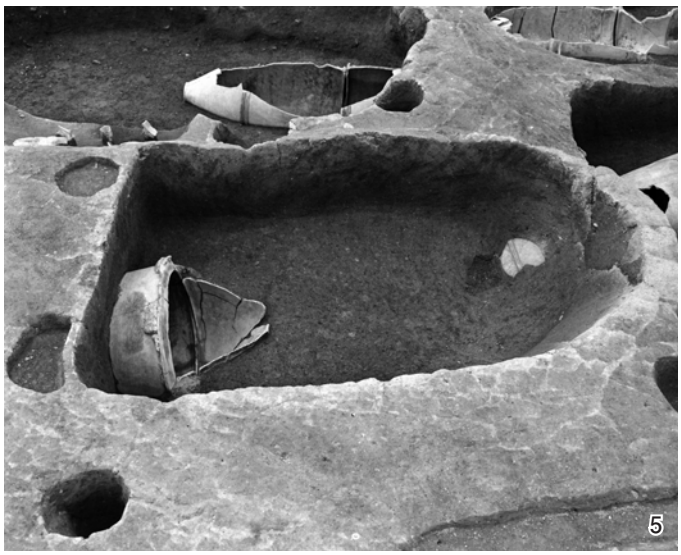
5　K0106（南東から）

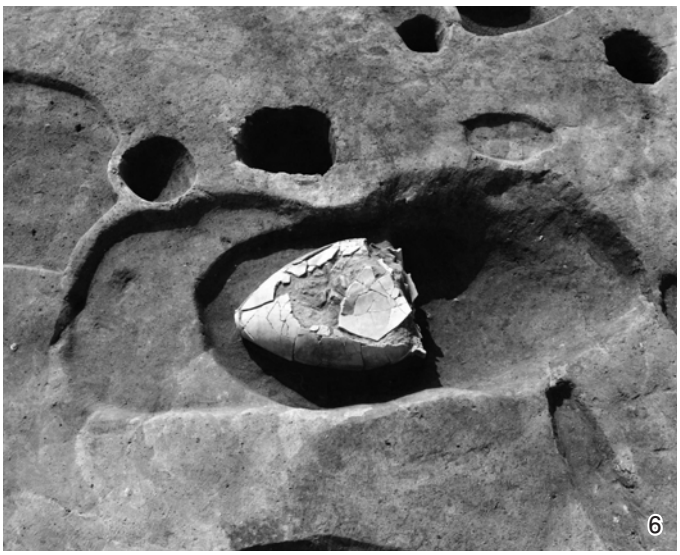
6　K0106遺物出土状況（北西から）











1　K0105（南西から）

2　K0107・0108
（南から、中央左がK107、右K0108）

3　K0109（北から）

4　K0110（北から）

5　K0111（東から）

6　K0112（北から）

図版26

1　K0113（東から）

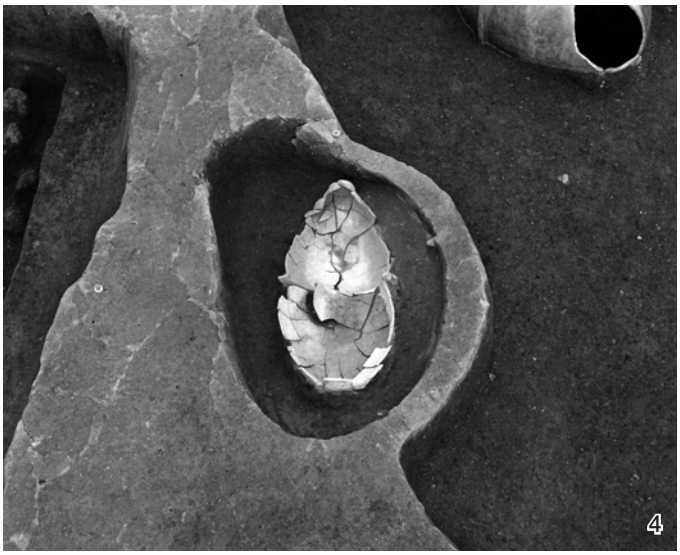
2　K0113（南から）

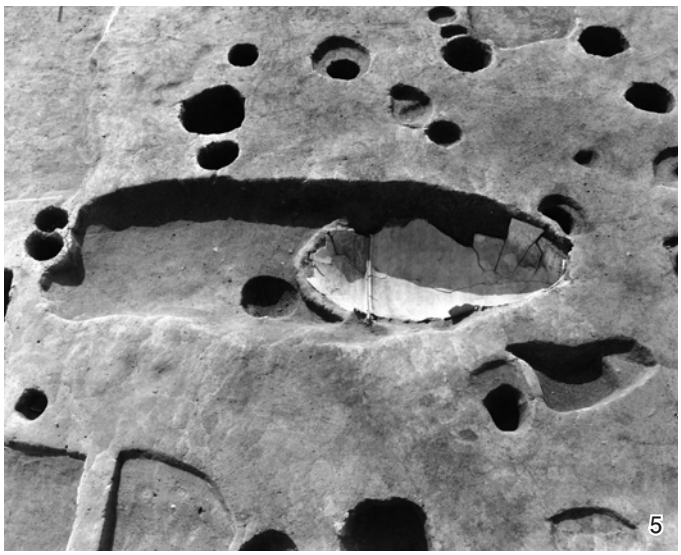
3　K0113遺物出土状況（南から）

4　K0114（東から）

5　K0114（南から）

6　K0114遺物出土状況（南から）





1　K0115（東から）

2　K0116（北から）

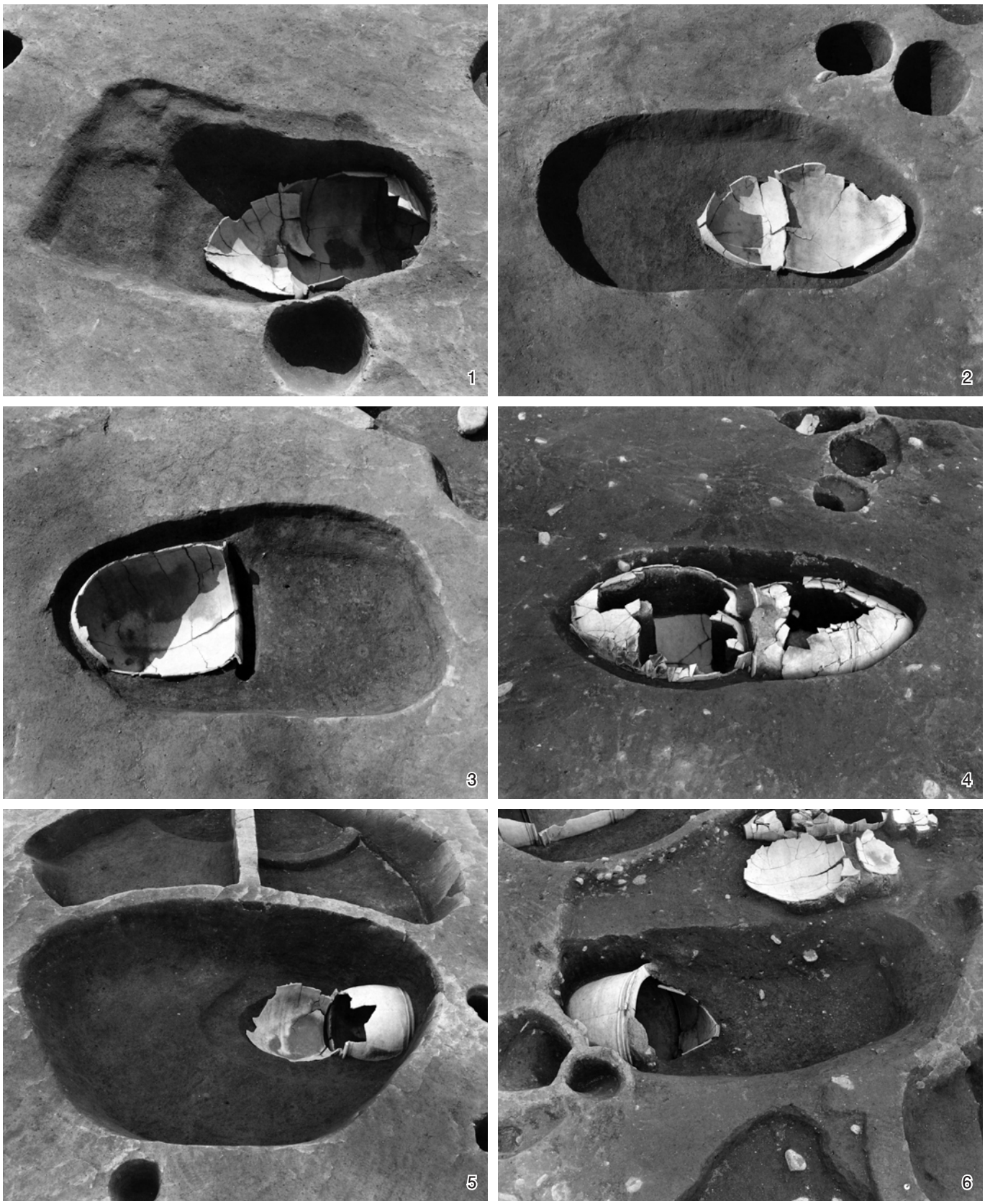
3　K0117（東から、手前がK0117）

4　K0118（北から）

5　K0119（北から）

6　K0120（東から）

図版28



1　K0121（東から）

2　K0122（東から）

3　K0123（東から）

4　K0124（西から）

5　K0125（東から）

6　K0126（北西から）

1　K0127（北西から）

2　K0127（南から）

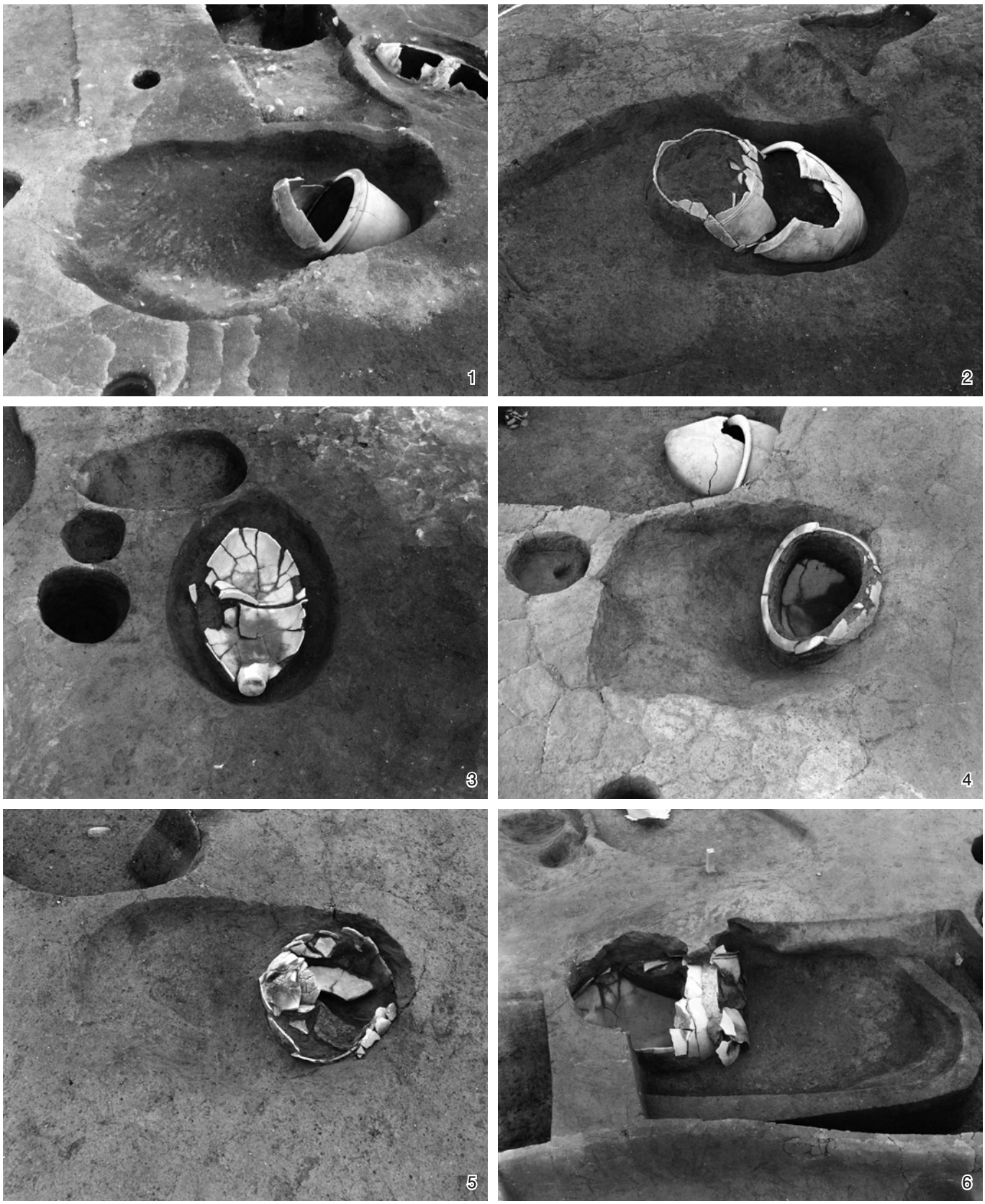
3　K0127下甕（南から）

4　K0127遺物出土状況（南から）

5　K0128・0129
（南東から、中央右がK0129・左がK0128）

6　K0130・0131（東から、右がK0130）

図版30



1　K0132（北西から）

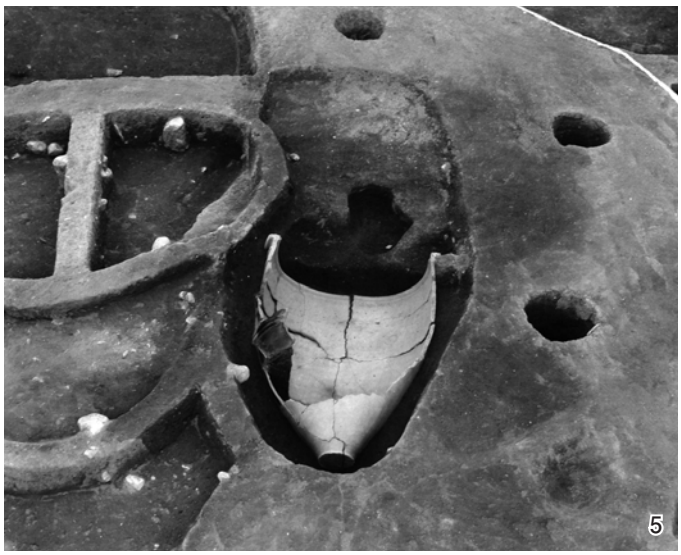
2　K0133（西から）

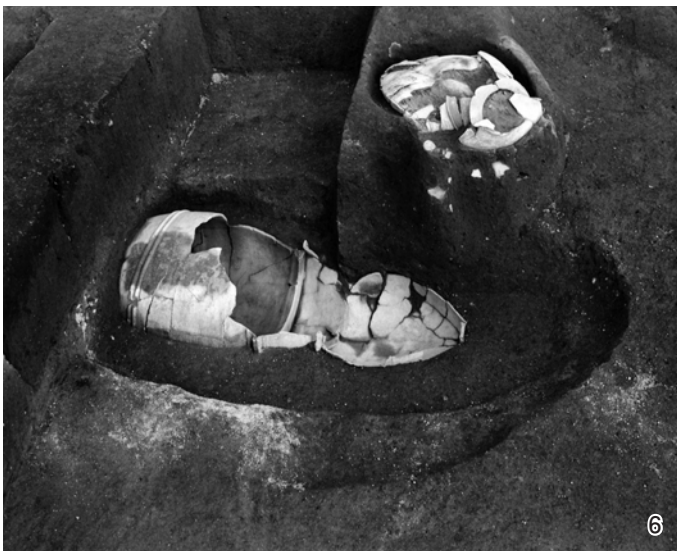
3　K0134（北から）

4　K0135（西から）

5　K0136（東から）

6　K0137（西から）





1　K0138（北から）

2　K0140（東から）

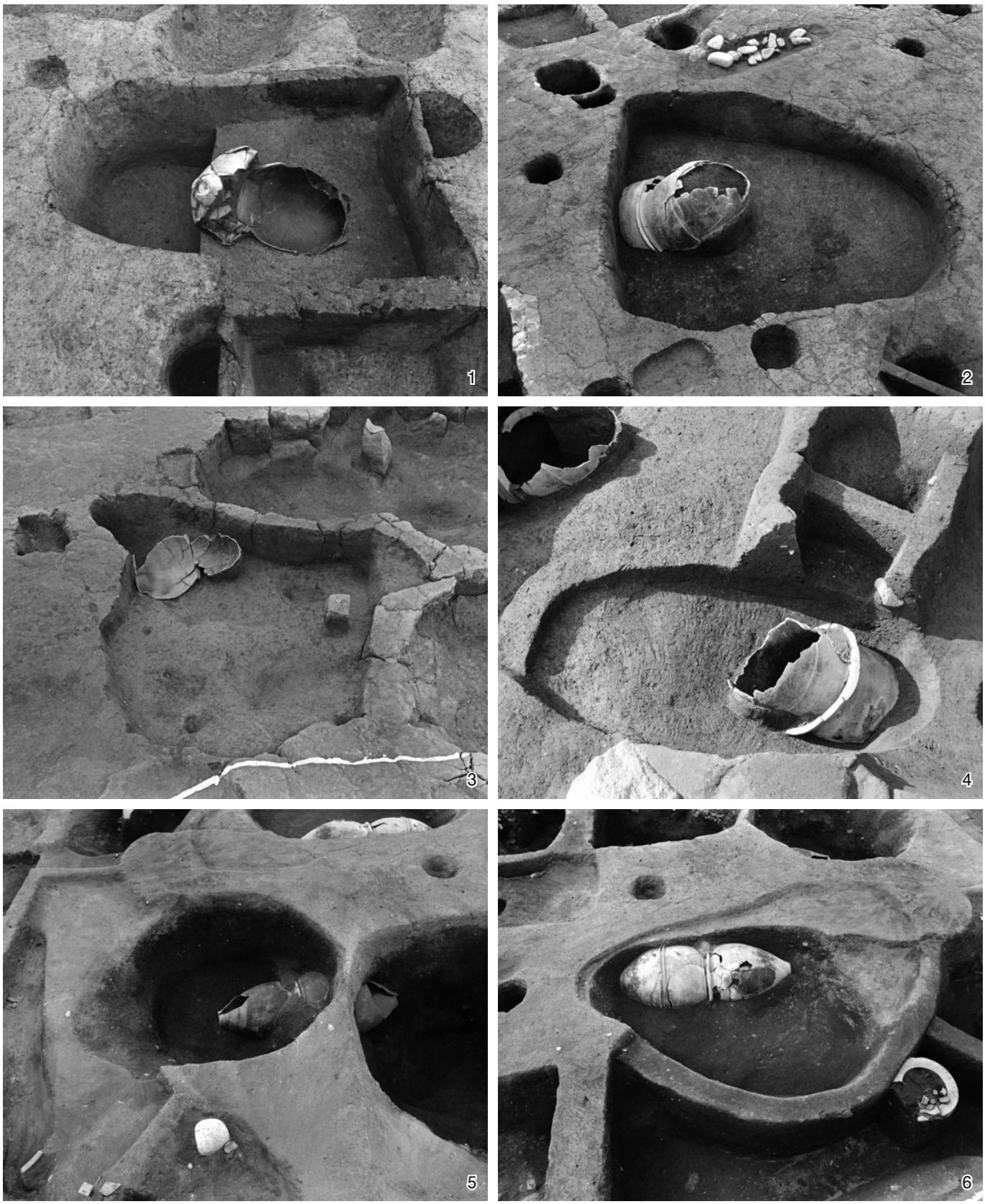
3　K0141（南から）

4　K0143（南から）

5　K0146（南から）

6　K0147・0160（西から、手前がK0147）

図版32



1　K0148（西から）

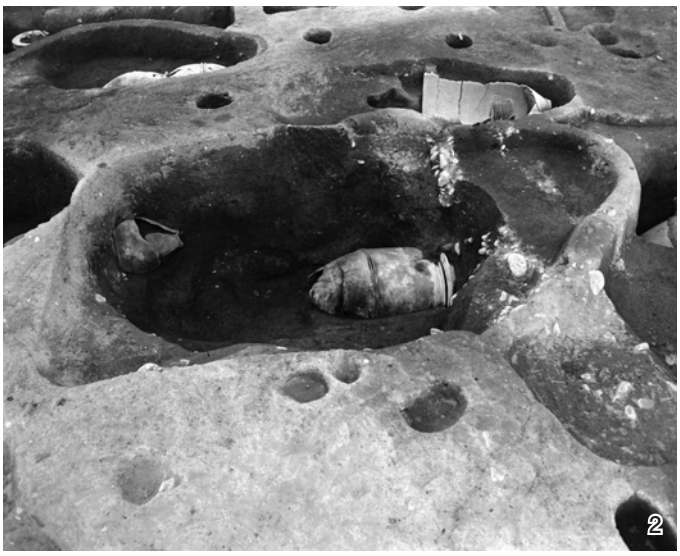
2　K0149（東から）

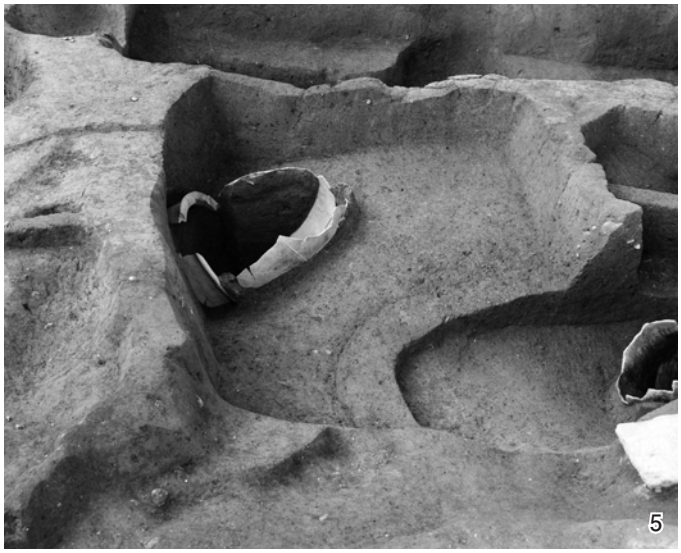
3　K0150（西から）

4　K0151（東から）

5　K0152（西から）

6　K0153（東から）





1　K0154（東から）

2　K0155（西から）

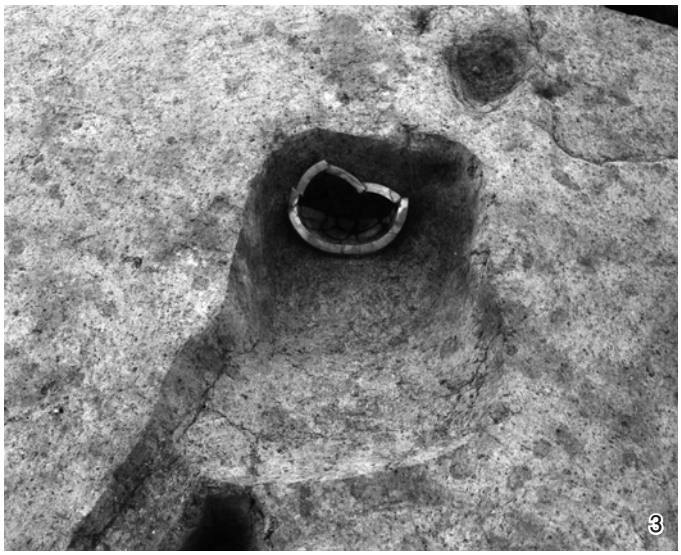
3　K0156（西から）

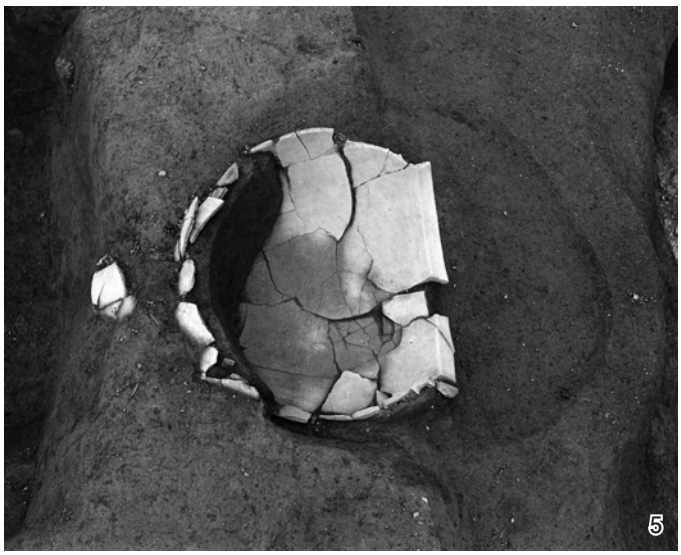
4　K0158（北から）

5　K0159（東から）

6　K0161・0164（西から、左がK0161）

図版34





1　K0162（北西から）

2　K0163（東から）

3　K0165（北から）

4　K0166（北東から）

5　K0167（南から）

6　K0169（南東から）

1　Ⅰ区・M0200西辺溝遺物出土状況（南から）

2　Ⅰ区・M0200西辺溝完掘土層（南から）

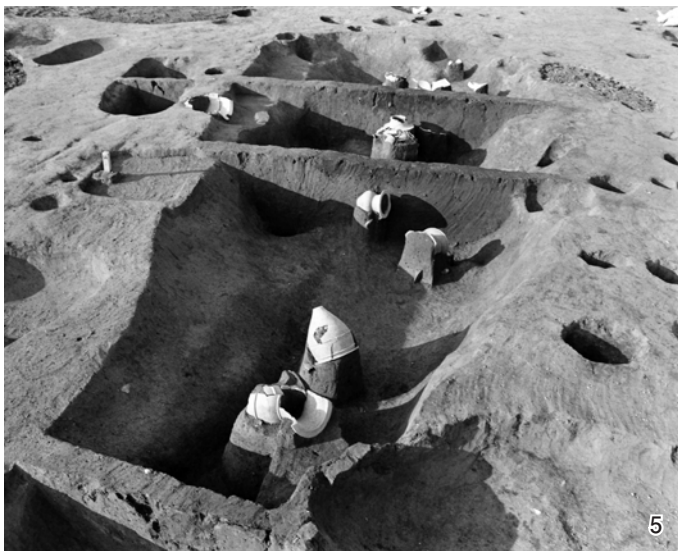
3　Ⅰ区・M0200南辺溝遺物出土状況(西から)

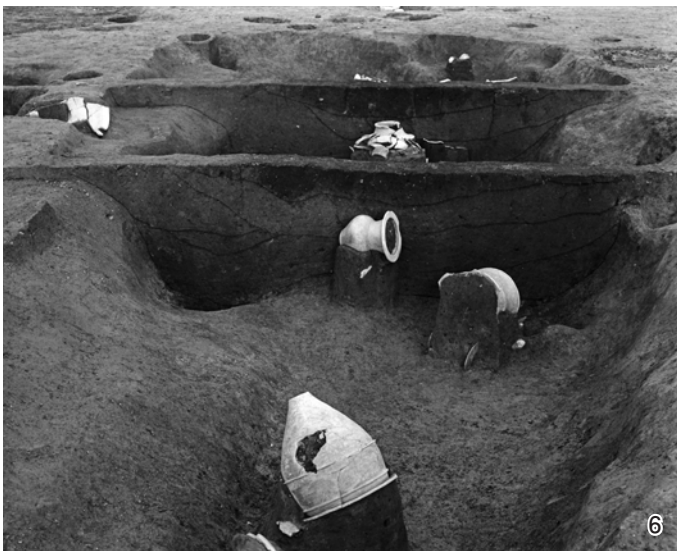
4　Ⅰ区・M0200南辺溝遺物出土状況（東から）

5　Ⅲ区・M0205遺物出土状況1（東から）

6　Ⅲ区・M0205遺物出土状況2（北西から）

図版36





1　Ⅲ区・M0200（15区）土層(南から）

2　Ⅲ区・M0206遺物出土状況(南から）

3　Ⅳ区・M0207土層(北から）

4　Ⅳ区・M0495遺物出土状況(東から）

5　Ⅳ区・M0700遺物出土状況（南から）

6　Ⅳ区・M0700遺物出土状況及び土層（南から）

34（K0022上）

35（K0022下）

36（K0023上）

37（K0023下）

38（K0024単）

46（K0028単）

44（K0027上）

45（K0027下）

出土遺物1（甕棺1）

49（K0030上）

50（K0030下）

53（K0032上）

54（K0032下）

57（K0034上）

62（K0036下）

63（K0037上）

64（K0037下）

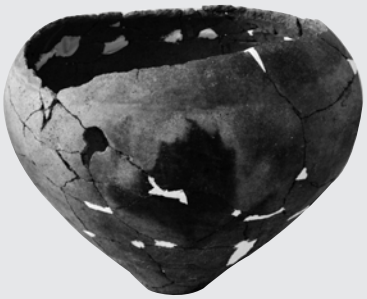
出土遺物2（甕棺2）

65（K0038上）

66（K0038下）

67（K0039上）

68（K0039下）



69（K0040上）

70（K0040下）

74（K0042上）

75（K0042下）

出土遺物3（甕棺3）

76（K0043上）

77（K0043下）

78（K0044上）

79（K0044下）

80（K0045上）

81（K0045下）

82（K0046上）

83（K0046下）

出土遺物4（甕棺4）

86（K0049上）

87（K0049下）

88（K0050上）

89（K0050下）

90（K0051上）

91（K0051下）

92（K0052上）

93（K0052下）

出土遺物5（甕棺5）

95（K0053下）

101（K0056下）

96（K0054上）

97（K0054下）

98（K0055上）

99（K0055下）

104（K0058上）

105（K0058下）

出土遺物6（甕棺6）

106（K0059上）

107（K0059下）

110（K0061上）

111（K0061下）

112（K0062上）

113（K0062下）

115（K0064上）

116（K0064下）

出土遺物7（甕棺7）

117（K0065上）

118（K0065下）

120（K0066下）

122（K0067下）

123（K0068上）

124（K0068下）

125（K0069上）

126（K0069下）

出土遺物8（甕棺8）

128（K0070下）

131（K0072下）

133（K0073下）

137（K0075下）

144（K0078上）

145（K0078下）

146（K0079上）

147（K0079下）

出土遺物9（甕棺9）

148（K0080上）

149（K0080下）

150（K0081上）

151（K0081下）

153（K0083上）

154（K0083下）

155（K0084上）

156（K0084下）

出土遺物10（甕棺10）

159（K0085上）

160（K0085下）

161（K0086上）

162（K0086下）

163（K0087上）

164（K0087下）

165（K0088上）

166（K0088下）

出土遺物11（甕棺11）

167（K0089上）

168（K0089下）

169（K0090上）

170（K0090下）

171（K0091上）

172（K0091下）

173（K0092上）

174（K0092下）

出土遺物12（甕棺12）

178（K0094上）

179（K0094下）

180（K0095上）

181（K0095下）

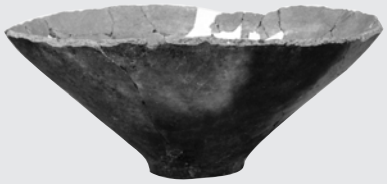
182（K0096上）

183（K0096下）

186（K0098上）

187（K0098下）

出土遺物13（甕棺13）



188（K0099上）

189（K0099下）

190（K0100上）

191（K0100下）

192（K0101上）

201（K0105上）

194（K0102上）

195（K0102下）

出土遺物14（甕棺14）

196（K0103上）

197（K0103下）

198（K0104上）

199（K0104下）

203（K0106上）

204（K0106下）

208（K0108上）

209（K0108下）

出土遺物15（甕棺15）

211（K0109下）

229（K0117下）

212（K0110上）

213（K0110下）

214（K0111上）

215（K0111下）

216（K0112上）

217（K0112下）

出土遺物16（甕棺16）

218（K0113上）

219（K0113下）

221（K0114上）

222（K0114下）

224（K0115上）

225（K0115下）

226（K0116上）

227（K0116下）

出土遺物17（甕棺17）

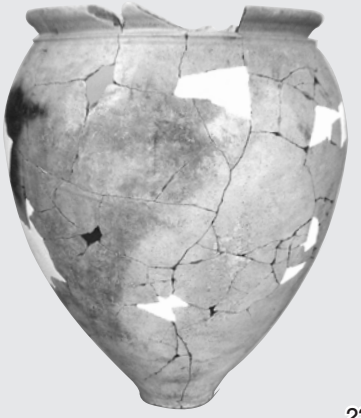
230（K0118上）

231（K0118下）

233（K0119下）

240（K0123単）

234（K0120上）



235（K0120下）

236（K0121上）

237（K0121下）

出土遺物18（甕棺18）

238（K0122上）

239（K0122下）

241（K0124上）

242（K0124下）

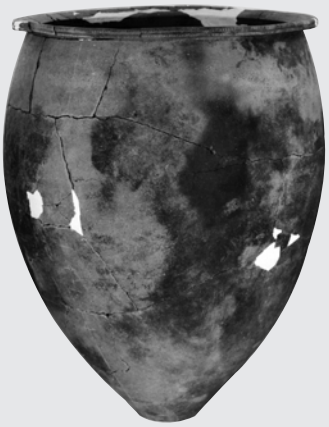
243（K0125上）

244（K0125下）

245（K0126上）

246（K0126下）

出土遺物19（甕棺19）



247（K0127上）

248（K0127下）

257（K0128上）

258（K0128下）

259（K0129上）

260（K0129下）

261（K0130単）

267（K0133下）

出土遺物20（甕棺20）

264（K0132上）

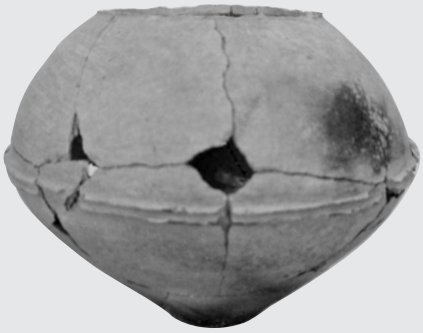
265（K0132下）

268（K0134上）

269（K0134下）

270（K0135単）

273（K0137下）



271（K0136上）

272（K0136下）

出土遺物21（甕棺21）

278（K0140上）

279（K0140下）

280（K0141上）

281（K0141下）

283（K0142上）

284（K0142下）

288（K0144下）

290（K0146単）

出土遺物22（甕棺22）

291（K0147上）

292（K0147中）

293（K0147下）

300（K0151上）

302（K0152上）

303（K0152下）

304（K0153上）

305（K0153下）

出土遺物23（甕棺23）

306（K0154上）

307（K0154下）

309（K0155上）

310（K0155下）

311（K0156上）

312（K0156下）

316（K0158上）

317（K0158下）

出土遺物24（甕棺24）

318（K0159上）

319（K0159下）

320（K0160上）

321（K0160下）

322（K0161上）

323（K0161下）

324（K0162上）

325（K0162下）

出土遺物25（甕棺25）

326（K0163上）

327（K0163下）

328（K0164上）

329（K0164下）

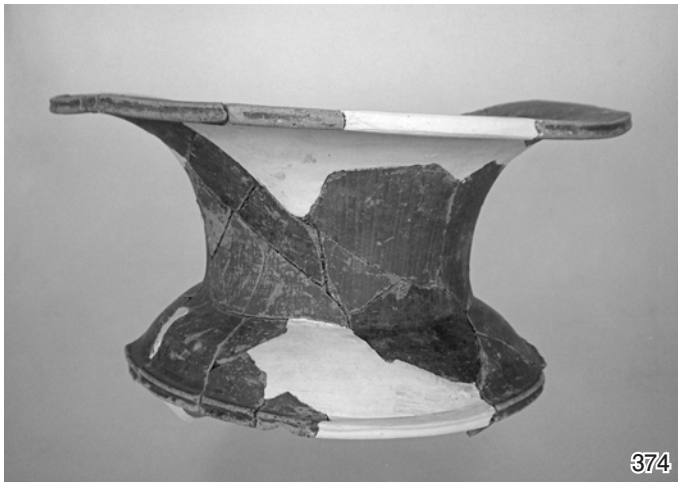
334（K0168上）

335（K0168下）

336（K0169上）

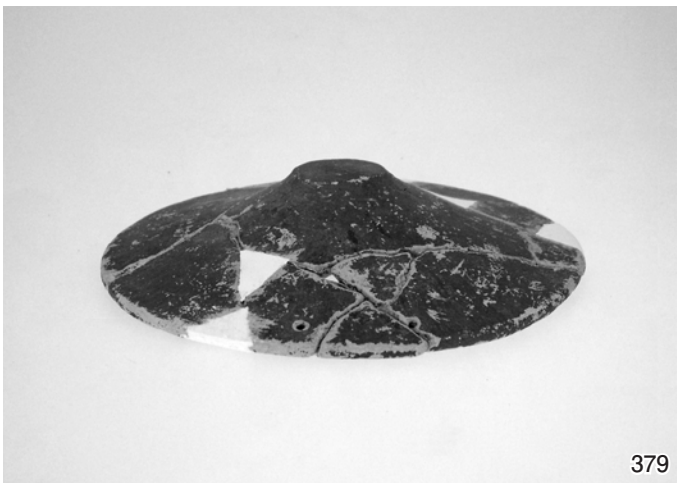
337（K0169下）

出土遺物26（甕棺26）



出土遺物27（木棺墓・祭祀遺構出土土器1）

377


379

380

381

392

400

401

402

出土遺物28（祭祀遺構出土土器2）

403

406

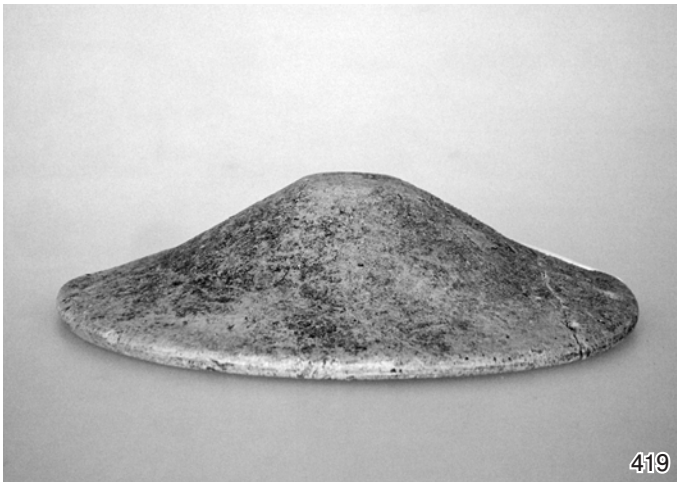
410

411

412

413

414


419

出土遺物29（祭祀遺構出土土器3）

出土遺物30（祭祀遺構出土土器4）

434

435

437

440

441

442

444

445

出土遺物31（祭祀遺構出土土器5）

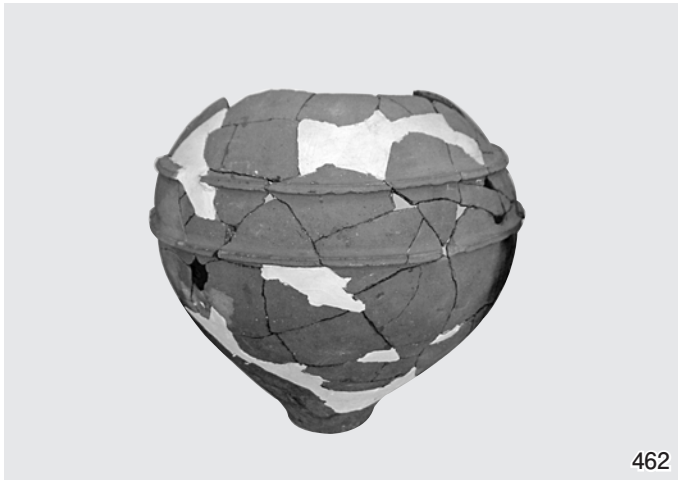
出土遺物32（祭祀遺構出土土器6）

458

459

460

461


462

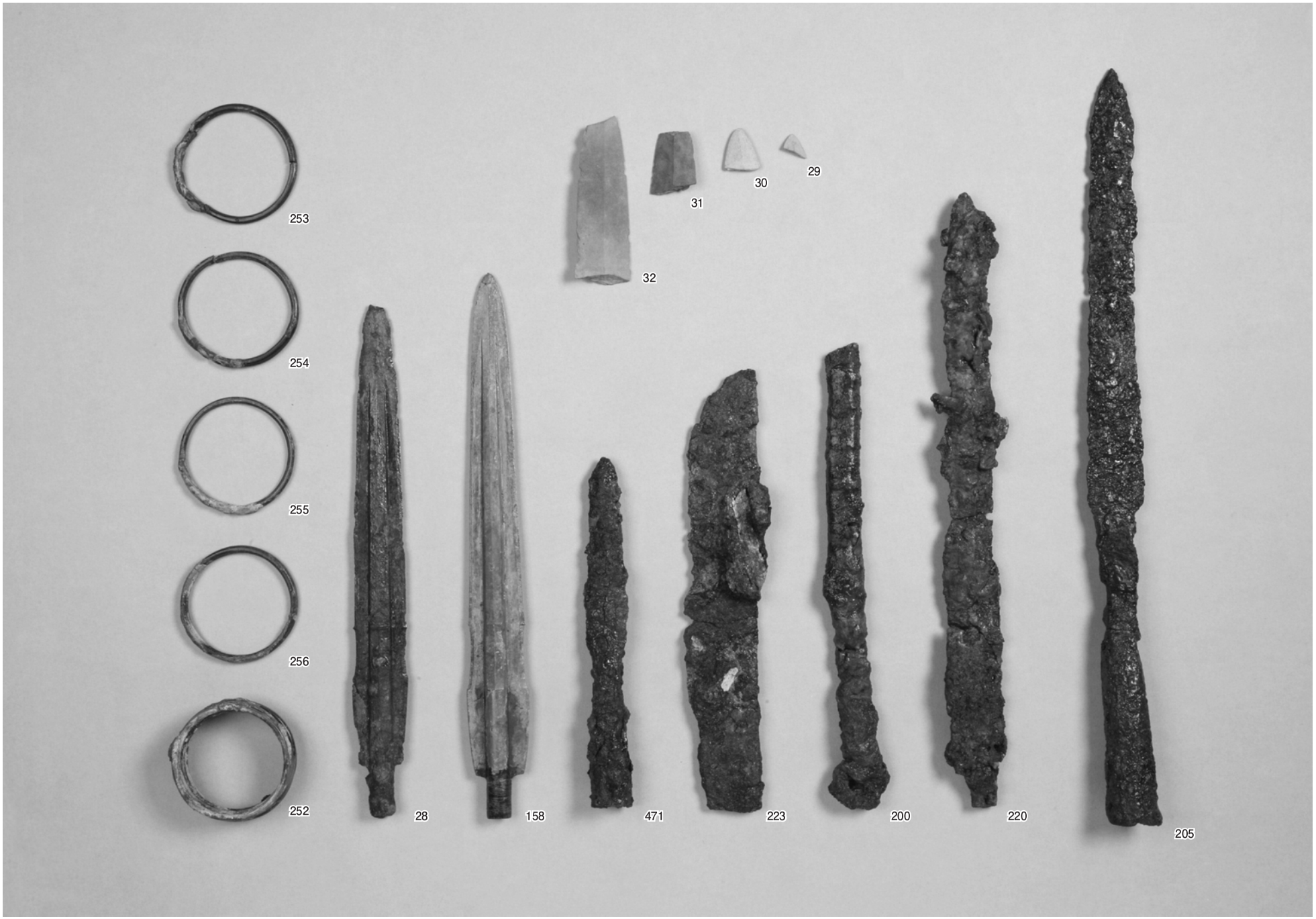
463

465

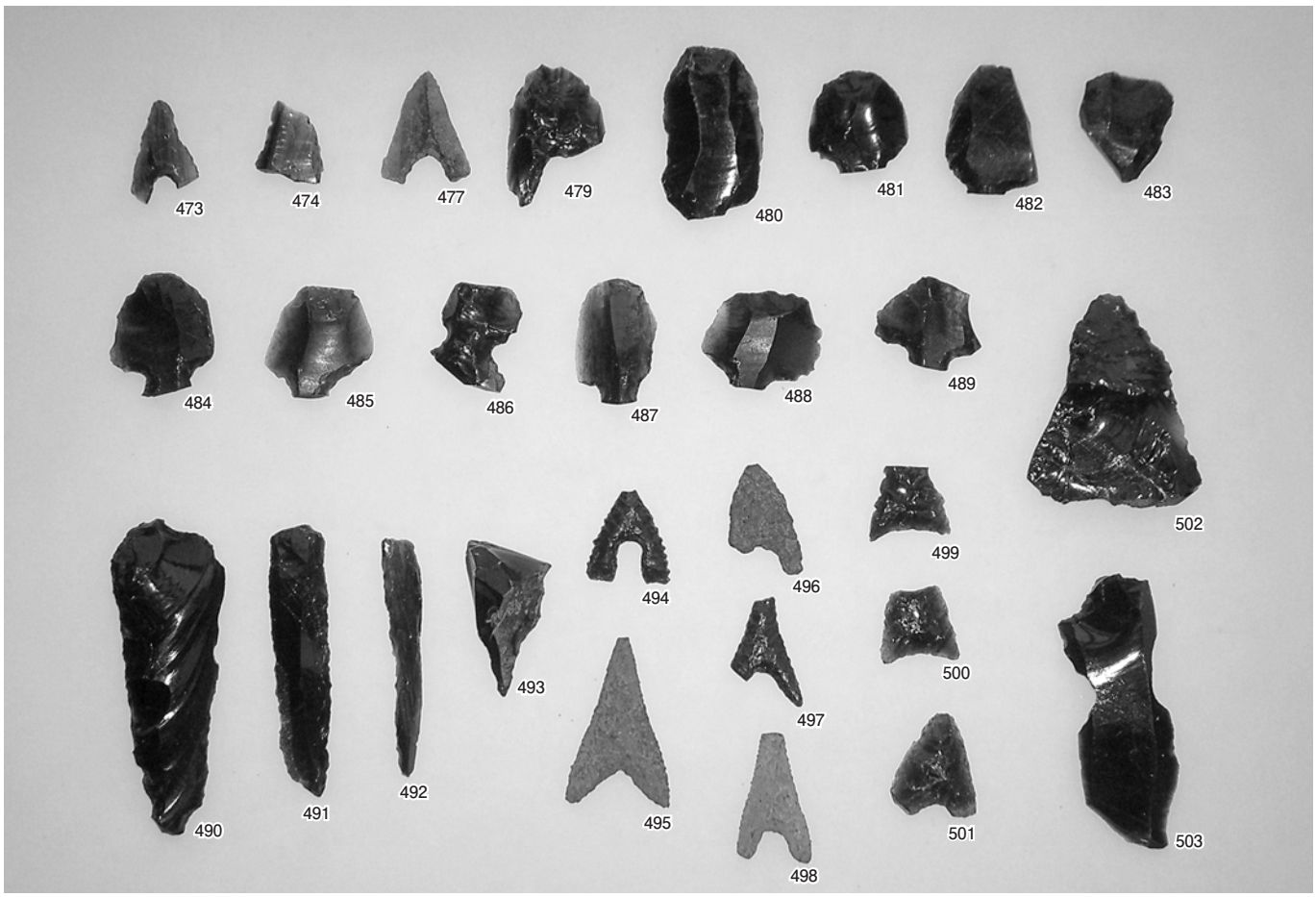
466

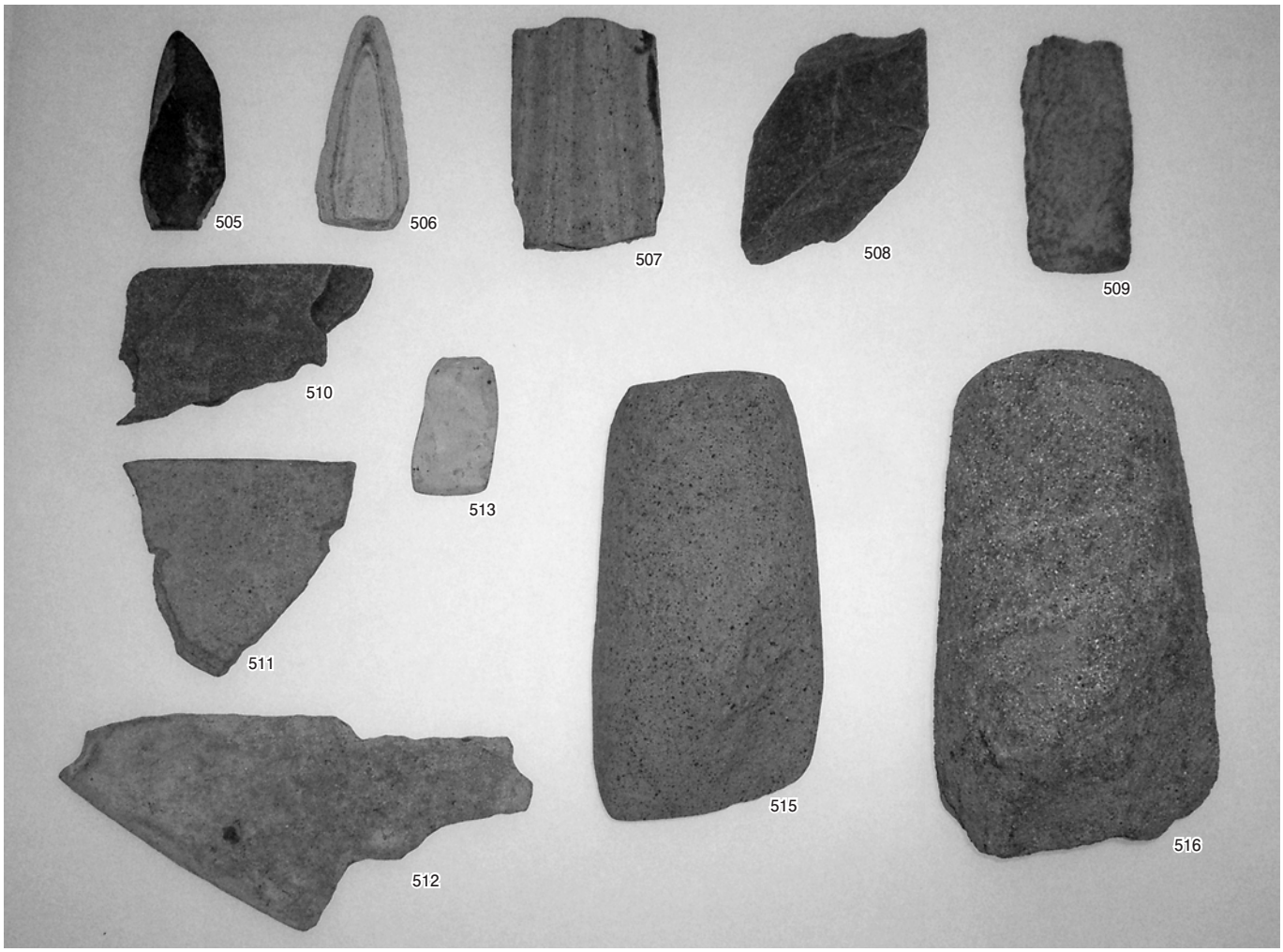
出土遺物33（祭祀遺構出土土器7）

出土遺物34（祭祀遺構出土土器8）



出土遺物35（木棺墓・甕棺墓出土遺物）


473
474
477
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
502
490
491
492
493
494
496
499
500
497
495
498
501
503


505
506
507
508
509
510
513
511
515
516
512

出土遺物36（石器）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いるべ
書名	入部　XⅣ
副書名	東入部遺跡第2次調査報告（5）
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1140集
編著者名	濱石哲也・長家伸
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1-8-1
発行年月日	20120316

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしいるべいせき 東入部遺跡 第2次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくひがしいるべ 早良区東入部 5・6丁目地内	40132	0343	33° 31′ 17″	130° 20′ 07″ （世界測地系）	19910513 ～ 19920305	16,271㎡ （8区：7,177.98㎡）	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東入部遺跡 2次8区	集落	弥生時代 ・ 古墳時代	竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・甕棺墓・土壙墓・木棺墓・祭祀遺構・古墳	弥生土器・甕棺・土師器・須恵器	今回は弥生時代埋葬遺構の報告

要約	今回は2次調査8区の弥生時代埋葬遺構の報告である。埋葬関連遺構としては土壙墓・木棺墓51基、甕棺墓149基の、合わせて200基とこれを画する区画溝・土坑である。また、木棺墓に細形銅剣1、6基の甕棺墓には細形銅剣１、銅釧10、鉄剣1、鉄矛1、鉄刀1、素環頭鉄刀子1がそれぞれ副葬されており、検出時に出土した鉄矛も本来は甕棺に副葬されたものと考えられる。今回の調査では、墓域全体をほぼ完掘したものと考えられ、墓域面積は1,800㎡程度で、造営期間は弥生時代前期末～後期初頭に及ぶものと考えられる。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1140集

入　部　XIV

2012年３月16日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8−1

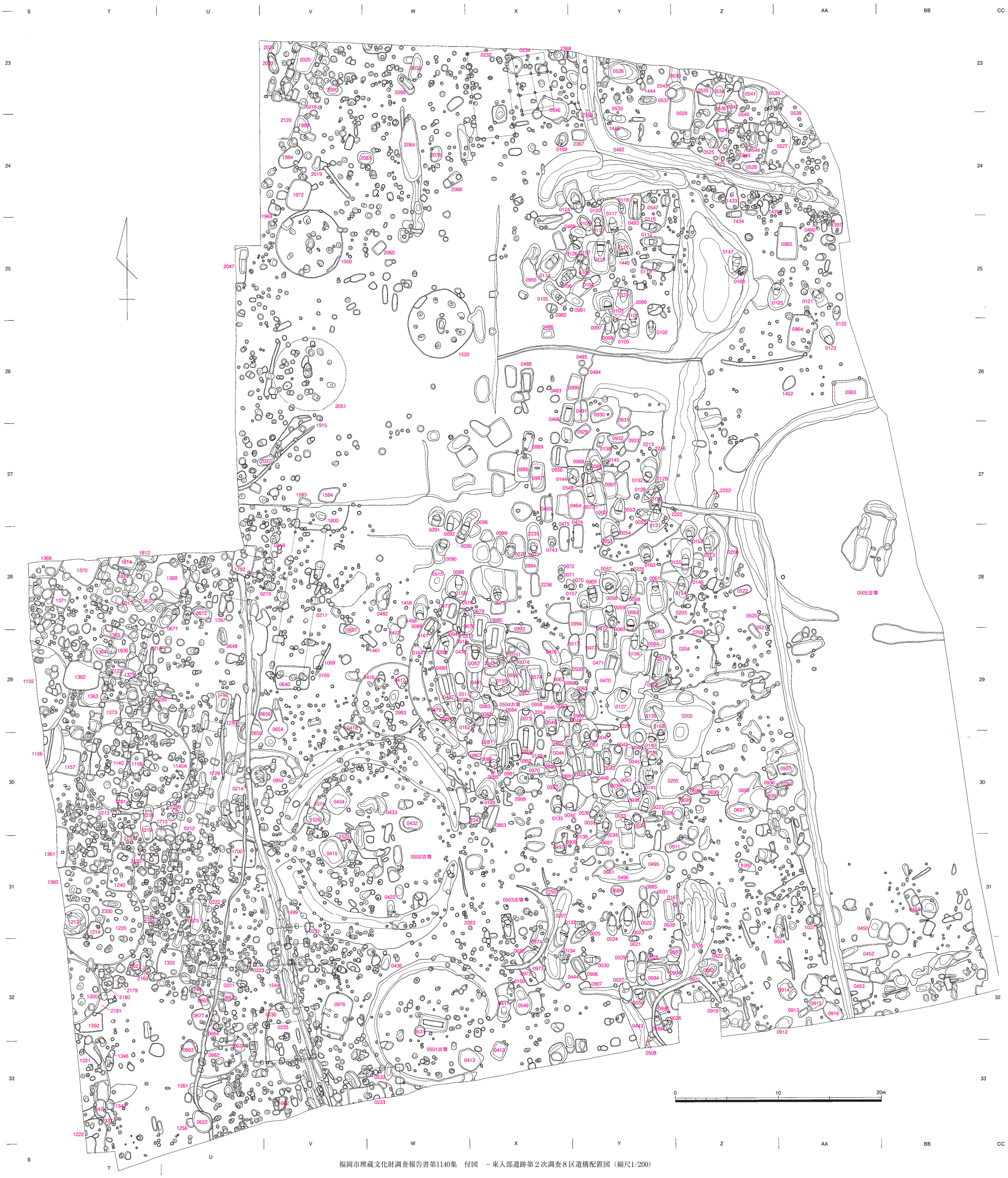
印　刷　株式会社 博多印刷
福岡市博多区須崎町8−5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1140 集

『入　部　XIV』

付　　図

東入部遺跡第 2 次調査 8 区遺構配置図（縮尺 1 ／ 200）



福岡市埋蔵文化財調査報告書第1140集　付図　－東入部遺跡第２次調査８区遺構配置図（縮尺1/200）